異世界を渡りし者

山田　隆行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界を渡りし者

【Ｎコード】
Ｎ５４５８Ｌ

【作者名】
山田　隆行

【あらすじ】
飛行機事故で驚異的な回復能力を得た主人公はある朝、突然に異世界へと旅立つ・・・。
果たして異世界で何を為すのか・・・主人公：峰藤　尊を待つ運命とはいかに！！

第1話　異世界への旅立ち（前書き）

今回で5作目となる投稿です。

昔に読んだ、とある漫画をヒントにして作成しました

第1話　異世界への旅立ち

俺の名は峰藤（みねふじ）　尊（みこと）、高校を卒業したばかりの社会人一年生の１９歳だ。
趣味といえばファンタジー小説を読むことである。
ちなみに、好きな物はと言うと時代劇の刀での殺陣（たて）だった。

今日も仕事が終了し帰宅する。

「ただいま！」

玄関を潜り家の中へと足を進めるが其処には相槌をしてくれる家族は誰も存在しない。
両親は俺が９歳のころに飛行機の墜落事故により、この世を去った。
俺も両親と同じ飛行機に乗っていたのに、他の乗客・乗員が全員亡くなったにも係わらず俺だけが無傷で生還した。
この飛行機事故から、俺に特殊な能力が備わる事になった。
９歳から今現在の１９歳まで運の悪い事に度々交通事故や、行く先々で火災に見舞われてきた。
それでも火傷はおろか怪我などは負ったことが無く、たとえ怪我をしてしまっても一瞬で治っていた。
その当時は怪我をしたときに、鋭い針で刺されたような痛みを感じていたが、成長するにつれ痛みもまるで感じなくなってしまっていた。
この事で親戚中に気持ち悪がられ、一人で両親の残してくれた家に住む事になった。
こういった出来事から学生時代は虐めにあい、一時期は自殺を考えたが手首を切っても切ったそばから傷は自動修復され、首を吊って

も建物の屋上から飛び降りても骨折しただけで死ぬ事は無かった。
骨折した足も数秒後には元に戻って、傷跡すら残ってはいなかった。
さて家に帰った俺は早速、電子レンジでコンビニ弁当をチンして晩飯を食べ始めた。
今日は俺の１９回目の誕生日であるが祝ってくれる者は誰も居なく親が死んでから１０年間、一人寂しく自分で自分を祝っていた。

「それにしても・・・俺の能力がなければ、この１０年間で１００回は余裕で死んでるな。」

瞬く間に晩飯を食べ終わりニュースを見ていたが次第に眠くなり夢の世界へと誘(いざな)われる。

（・・か、・・・を助・・・・・い。）

翌朝、夢の中で誰かから助けを求められるような幽かな声が聞こえたが、気にすることなく朝飯としてカップラーメンを食べながら髭を剃っていると突然、電池が切れたかの様に動かなくなってしまった。

「変だな?充電したばかりなのに・・・。壊れたのか?」

シェーバーを靴箱の上に置いて欠伸(あくび)を手で押さえ、目を擦りながら玄関脇の郵便受けに入っている新聞を取りに外へ出たのだが、足元に変な感触があった。

「ん?玄関からポストまではセメントで塗り固めた道だったはず・・・。こんなに草の生えている道ではなかった筈だが?」

未だに視点の定まらない目で周りを確かめると、其処で思いもよら

ない出来事に遭遇する事になった。

「ここは野原か？俺はまだ夢を見ているのか・・・。」

それもそのはず、俺の住む家は閑静な住宅地に佇んでおり、間違っても原っぱには建ってはいない。

頬を抓(つね)って夢ではない事を確かめると、現状を把握する事にした。

「これはなんの冗談だよ！！どこかにカメラでも仕掛けてあるのか！？」

景色に混乱し、３６０度見回してみると今出てきた筈の自分の家が何処にも存在してはいなかった。

「俺の家は何処に行ったーーーー！！？」

思いっきり叫んでみるが、誰からも何処からも返事は聞こえず、あたりに響き渡るだけだった。

少し冷静さを取り戻した俺は自分の今の格好を確かめる事にした。

寝起きなため、髪はボサボサで格好は上下とも灰色のスウェットを着込んでいる。足元はというと新聞を取りに外へ出ただけなので裸足にスリッパという、長時間歩くのには適さない格好だった。

髪と目は日本人なら当然の如く、両方とも黒だ。

学生時代にクラスメイトからも『髪を染めたり、脱色しないのか？』とよく言われていたが、ファッションには疎いため、そんなものには興味は無かった。

当然、ピアスやアクセサリーなどにも、まるで興味は無かった。

「何にしても、まずは此処が何処なのか誰かに聞かないとな・・・」

野原の中央に立ったままなので何時、野犬や熊などに襲われてもおかしくは無かった。
町のようなものは見えないかと思い周囲を見回すと遥か遠くに黒い煙のような物が立ち上っていた。

「おかしいな・・・こんなに視力が良いはずは無いのに。」

俺は身体は丈夫だが、目だけは眼鏡無しでは文字を読むことが出来ないほどの近眼だった。
だが、今は眼鏡を掛けていないにも拘らず、遥か遠くの煙を見つけることが出来たのだった。

「おっと、こうしてはいられないな・・・少し走るか。」

運動神経は一般人よりも優れている方だったが、予想だにできない事が起こった。
軽く走ったつもりだったが、走り始めてから数秒後、異変に気が付いた。
走り出してから2、3秒しか経過してないのだが進んだ距離は１００mをゆうに超えている。

「どういうことだ？いくらなんでも、これはおかしい・・・」

１００m以上の距離を2、3秒でなど、世界記録どころの比ではない。

「まてよ、もしかして・・・。」

足を揃え、その場で軽く飛び跳ねてみると一瞬で１０mの高さまでジャンプしていた。

地面に降りたときも足に痛みなどはなく、普通に着地する事が出来た。
更には足元に転がっている石を掴み思いっきり投げると、目にも留まらないスピードで遥か彼方へと飛んでいってしまった。

「やはりそうか、ここは重力が小さいんだな・・・という事は此処は地球ではないのか！？」

少し考えてみるが・・・

「そんな馬鹿な、ファンタジー小説じゃあるまいし、異世界に飛ばされるだなんて。」

考えていても埒が明かないことに気づき足早に煙が見えた町へと走っていく事にした。

「これだけ走っているのに、息切れも疲れもしないなんて。」

身体能力に驚きながらも、時速１００ｋｍ以上のスピードで野原を駆け抜けて町へと急ぐ事にした。

第1話　異世界への旅立ち（後書き）

試行錯誤の結果、やっと完成した5作目の小説になります。

分かりにくい、あらすじになってしまいましたが頑張って更新していきますのでよろしくお願いいたします。

前作の『最強の錬金術士』は2日に1度の更新でしたが、今回の作品は濃い内容にしたいので、ゆっくりと更新していきます。

第2話　圧倒的な力（前書き）

日々忙しかったのですが、なんとか2話目を完成する事ができました。

中身は少しグロイ表現が含まれますので、食事中に読むのは御遠慮願います。

第2話　圧倒的な力

走り始めてから数分後、思いもよらない速さで町に辿り着いたが其処には地獄絵図が待っていた。

「これはいったい・・・」

町へ着くと同時にそこら中から匂って来るなんともいえない悪臭、そして真っ黒な炭と化した木造と思わしき家屋や、地面には人型の黒い焦げ痕、さらには夥(おびただ)しい赤い液体が飛び散っていた。
目を背けたくなる現状だったが、近くで話し声が聞こえてきた為、勇気を振り絞って町の奥へと足を進めた。
奥へ奥へと足を進めるごとに話し声を聞き取れるようになってきた。

「頭(かしら)、うまくいきやしたね。」
「当然だ！この俺がこんな腑抜けた奴らに遅れを取る筈が無いだろうが！！」
「ちげえねえ、ひゃっはっはっは！」
「それにしても、こんな寂れた村にこれほどの宝があるとはな。驚きだぜ！」
「全くだ、これで暫くは遊んで暮らせるってもんだ」

其処には金や銀に光り輝く硬貨のような物を手にとって騒いでいる、斧を装備した5人の男がいた。
男達に目が行っていた俺は足元をよく見てはおらず、足を一歩踏み出した直後に蹴躓(けつまず)き声を出して倒れこんでしまった。

「うわっ！？」

その声を男達が聞き逃す筈は無く・・・。

「！！　誰だ！？」

斧を手に持って此方へと近づいてきた
俺はすぐに起き上がり、必死に逃げようとしたが回り込まれて逃げることはできなかった。

「おい、こんなところに生き残りの餓鬼がいるじゃねえか！？」
「見落としていたようで、すいやせん頭。」
「まあいい、此処で始末すれば良いことだ。」

そう言って男は俺に向かって斧を振りかぶったが、俺は咄嗟に隙をついて広い場所へと転がり攻撃をかわした。
転がったついでに、焼けた家の住人だったらしい焼死体の手から剣を手に取り、構えた。
剣など小説で見ただけで使った事はなかったが、重さを感じないくらい軽いものだった。

「何だコイツ？俺達5人に敵うとでも思っているのか？」
「少し遊んでやるとするか。」

5人のうちの2人は斧を構え、笑いながら俺に近づいてくる。

「お前達は何者だ！？」

凡(おおよ)そ答えは分かってはいたが、聞いてみることにした。

「見てわからねえのか？俺達は山賊だよ。
まぁ、此れから死んでいく奴には関係ないだろうがな！」

そう言いながら、左右から斧が迫ってきた
咄嗟に大好きだった時代劇の殺陣(たて)を真似して剣で2人の山賊の腹に向かって剣を振るった。
気分的には「安心しろ峰討ちだ・・・。」と言いたかったが、持っている剣は刀のような片刃ではなく両刃なため、2人を見ると普通に足で地面に立っているものの、腰から上は存在してはいなかった。
ドシャっという音と共に斧を持ったままの上半身が地面へと落ちていった。

「貴様、よくも2人を!!」

残っていた3人が一斉に襲い掛かってくるが一瞬で切り伏せる。
一人は先の2人のように上半身と下半身が切り離され、一人は首を刎ねられ、残った一人は腹に突き刺さった剣が背中まで貫通してあっという間に息絶えた。
事が終わり冷静に考えてみると命の危機であったが、この手で5人もの人間の命を奪ったことで震えが止まらなくなっていた。

「俺はこの手で人を殺めてしまった・・・。取り返しのつかないことをしてしまった。」

見につけていた灰色のスウェットは返り血で真っ赤に染まり、おぞましい姿になっていた。

「俺はなんて事を・・・。」

その瞬間、目の前のグロイ光景を目の当たりにして朝食として食べたラーメンを吐き戻してしまった。
更に持っていた剣を地面に落とし、壁を背に体育座りのような格好

で蹲(うずくま)ってしまう。
そのまま気を失い、眠っていたのだろうか・・・複数の地を蹴る馬の蹄(ひづめ)の音で目が醒めた。

「何だ?誰か来たのか?」

山賊の仲間かとも思ったが、気力が追いついては来なかった

「ようし、散開して生存者がいるか確かめろ!!」
「了解しました!」

目は開けているが気力の無い俺は、剣を手に佇(たたず)んでいた。
其処に綺麗な甲冑を見につけた赤い長髪の女性が走りよってくる。

「あ、あなた、大丈夫?」

女性は虚ろな目をしている俺の脈がある事を確かめると声を荒げて報告をした。

「隊長、生存者を発見しました!!凄い出血です!」
「分かった!衛生兵、直ぐに来てくれ!!」
「君!意識はある?」
「俺は、俺は・・・」
「衛生兵、まだなの!?」

数分後、馬に乗った甲冑を着込んでいない兵が走りよってくる。

「お待たせいたしました!直ぐに治療を開始いたします。」

それから更に数分後、あたりを見終えた兵士達が俺の周りへと集ま

ってきて隊長に報告している。

「隊長、町の中を見回りましたが生存者はその者、一人だけのようです。」

「・・・分かった。衛生兵、その男の怪我の具合はどうか?」

「いえ隊長、この男は怪我は一つも負ってはおりません。」

「それじゃあ、この夥(おびただ)しい血は!?」

「全て、返り血でしょう。」

その時、俺は壊れたレコーダーのように同じ言葉をしきりに呟いていた。

「俺は、俺は、」

「どうしたの?大丈夫?」

「俺はこの手で人を殺した。」

その瞬間、周りの兵士は一斉に腰の剣に手を携えた。

「まさか、町民を殺害したのはこの男なのか!?」

「黙って!!」

女性は手を振るい、騒ぎ立てた兵士を静かにさせる。

「君が町民を?」

「違う!」

「では誰を?」

「・・・山賊だと言っていた。」

「山賊!?」

その時、町の奥へと様子を見に行った兵士が報告のために隊長の下

へと帰って来た。

「ご報告いたします。町の広場らしき場所にて斧を手に持った賊と見られる5人の惨死体が見つかりました。」

死体という言葉で俺はビクッと反応してしまった。

「大丈夫よ、大丈夫・・・。」

「死体の状態はどうか？」

「調べた結果、何れ(いず)も一刀の元に切伏せられたらしく、見るも無残な格好に。」

「そうか・・・。」

隊長は顎に手を遣り俺を見ながら何かを考えていた。

「隊長、そろそろ。」

「分かった。その者を馬車に収容し、マルベリア城へと帰還するぞ！」

「「はっ！」」

左右から近寄ってきた兵士が未だに放心状態だった俺を担ぎ上げ、馬車の荷台へと乗せる。

更には何故か、先程まで話を聞いてくれていた女性も俺の横へと座ってきた。

「ようし、出発だ！」

馬車は俺が走るよりも遅いスピードで何処かへと向かい走りだしていった・・・。

第2話　圧倒的な力（後書き）

初めての戦いと初めての人殺しと言う事で、罪の意識に責められる主人公を表現してみました。

このあと、主人公はどうなるのか！？

次話に乞うご期待！

第3話　街に到着（前書き）

なんとか3話目を更新できました。

第3話　街に到着

俺を乗せた馬車は約4時間後、町へとたどり着いた。
町の中央には西洋を思わせるような立派な城が聳(そび)え立ち、馬車は城へと姿を消していった。

「到着だ！エミリア直ぐにその男を客室へと運び、綺麗にしてやれ！」

隊長が声を発すると同時に俺の横に座っていた女性が立ち上がって敬礼した。

「了解しました隊長！」

俺は馬車に乗せられるときと同じ様に数人がかりで、とある一室へと運ばれメイドらしき者達の手により隅々まで綺麗に洗われた。
俺は男だし女性に洗われるのは抵抗があったのだが、抵抗虚しくされるがままになっていた。
そんな中で驚かれたのは血で染まった為、赤だと思われていた髪の色が真っ黒であった事だった。

「ねえ、この方の髪・・・」
「信じられないわ！黒い髪だなんて」
「こんなの見たこと無い。」

洗い始めてから数十分後、高そうな服を見につけて椅子に座っている俺の姿があった。

「「「それでは失礼いたします。」」」

3人のメイドは一礼し、その場を後にした。
入れ替わるようにして村で指示を出していた隊長とエミリアと呼ばれた女性が部屋へと入ってきた。

「なるほど、黒髪に黒目か・・・あの村の者ではないようだな。」
「隊長、悪い人には見えないのですが・・・。」
「それはまだ分からんな。さて、まずはお前の名前を聞かせてもらおうか?」
「俺は峰藤(みねふじ)　尊(みこと)と言います。尊が名前です」
「ではミコト、何故お前はあの村に居た?」
「草原を歩いていた時に黒い煙が見えたので火事かと思い村へと急ぎました。
村に入ると燃えた家屋と焼け死んでいる人たちが目に入って・・・生存者が居ないかと思い、村の中を歩いていると話し声が聞こえたので声のするほうを見に行くと山賊5人と出くわしました。」
「その5人はお前に何をした?」
「『まだ生き残りが居たか!』と言われて追いかけられ、まずは2人に斧で襲い掛かられました。」
「それから?」
「俺は転がって攻撃を回避し、焼死体が握っていた剣を取り山賊に切りかかり2人を殺害しました。」

話しながら目をエミリアに遣ると真剣な眼差しで俺を集中して見ていた。

「山賊は全員で5人いたと聞いたが?」
「2人を斬った直後、残りの3人が一斉に襲いかかってきて、一気に切伏せました・・・。」

再び人を殺してしまった事を思い出してしまい、悲しげな気分になってしまった。

「で、一休みしているところに我々が現れたというところか」
「はい、俺は山賊とはいえ5人を殺めてしまいました。覚悟は出来ております」
「何の覚悟だ？」
「は！？」
「ミコトは自己防衛のために5人を殺したに過ぎん！殺さなければ自分自身が殺されていたであろう？」
「そうよ！それにあの山賊は見つけ次第、抹殺の指示が出てたからミコトは悪くないわ！！」

見つけ次第抹殺とは指名手配犯か何かだろうか？

「ミコトは此れからのアテがあるのか？」
「いえ、気の向くまま、足が向くままの気軽な旅をしてきたため、此処が何処かも分かりません。」

本当は異世界からなのだが、信じてもらえる筈は無いと判断し旅人とすることにした。

「この城はマルベリアという、町にはギルドもあるから其処で登録し生活すると良い。」
「此れが山賊退治の証明書よ、ギルドのランクで言えばA級の手配書だったから証明書をギルドに渡せば一気に上位ランクから開始できるわよ。」

そう言ってエミリアは俺に一枚の用紙を手渡してきた。
この世界の文字は見たことも無いミミズが、のたくった様な文字だ

ったが何故か読むことが出来た。

「ギルドは宿屋の向かいにある、行けば直ぐに分かるだろう。」
「あの、この服はどうしたら？」
「前の血に染まった服は此方で処分してしまったからな、代わりといっては何だが貰ってくれ。」

前に着用していたスウェットに比べたら素材も質も比べ物にならないほど良質な服だった。

「この町は広いからな、ミコトが迷って餓死したら大変だ。エミリア、ギルドに案内してやれ。」
「分かりました！」

俺が返事をする暇も無く、道案内としてエミリアがギルドまで一緒に来る事となった。

「それじゃあミコト、行きましょうか。」

何故か嬉しそうに退室するエミリアと引っ張っられるままに城の客室から出て行く俺の姿はかなり目立っていた・・・。そして俺を引っ張るエミリアの顔は髪の色と同じ様に真っ赤に染まっていた。
城の客室のある階から城の入口までは凡そ５０段はあろう、長い階段があった。
『これは転げ落ちたら大変だろうな』と思いながら降りていくと三分の一くらい降りたところで何かに躓き、１階までの残りの階段を頭から転げ落ちていった。
俺はそのまま落ちて行き、一階の床へ派手な音と共に叩きつけられた。
直ぐ横に立っていたエミリアは勿論、一階の廊下で警備をしていた

兵士も最悪な展開を予想していた。

「ミコト!!大丈夫?直ぐに衛生兵を呼んで、急いで!!」

エミリアが発言したと同時に一人の兵士が城の奥へと走っていった。

「どうしたんですか大騒ぎして?俺なら無事ですから心配しないで下さい」

オロオロとしている兵士を余所に、何事も無かったかのように歩き出す俺を見て周囲が固まった。

「ミコト・・・心配させないでよ、もぅ~~~」

「スイマセン。じゃあ、行きましょうか?」

俺とエミリアが去ってから、一騒動が起こりつつあった。

「なんで、あの高さで頭から落ちて無事なんだ!?」

「打ち所が悪ければ死んだとしても、おかしくは無い高さなのに・・・。」

「「あの男はいったい何者!?」」

兵士は空いた口が塞がらずに放心していると、杖を持った僧官が現れた。

「お待たせいたしましたハァハァ・・・。衛生兵が到着しましたが、患者は何処でしょうか?」

「・・・普通に歩いて行ってしまった。」

急いで走ってきたのか、息切れで動悸の激しい僧官が怒りをあらわ

にしていた。

「こっちも忙しいのですから悪戯はやめてくださいよ、本当にもう！」

衛生兵の僧官は怒りながら来た道を戻っていった。

「これは俺達が悪いのか？」

「なんとも言えないな。」

その騒ぎの元凶とも言うべき俺はというと、大騒ぎになっているとは露知らずエミリアとともに町を歩いていた。

第3話　街に到着（後書き）

ミコトの能力の一部が垣間見えた内容にしてみました。

第４話　ギルドと武器屋（前書き）

小説の内容に散々悩みましたが、少し遅れて更新することが出来ました。

第4話　ギルドと武器屋

エミリアと一緒に町へと繰り出した俺は数分後、ギルドへと辿り着いた。
とある小説のイメージでは屈強な傭兵達が屯(たむろ)している、薄汚い雰囲気の場所を予想していたのだが、予想に反して魔物の生態などの資料は綺麗に壁へと整えられており想像していたものとは全く違う、綺麗な場所だった。

「あ、エミリア、いらっしゃ～い！」
「こんにちわ、ローラ」
「ローラ？」
「このギルドの受付の女性よ。ローラ、こっちはミコトよギルドの登録をしに来たの。」
「へ～～、ミコトさんってエミリアの彼氏？」
「か、彼氏だなんて・・・私」
「俺はミコトと言います。よろしくローラさん」
「よろしく～～私の事はローラで良いわよ。登録に来たんだって？詳しい説明は必要？」
「お願いします。ところでエミリアはどうします？」
「暫くほっときましょ。いつもの事だから」

エミリアを見るとブツブツと虚ろな目で壁に向かって呟いていた。
傍からみれば近寄りたくは無い雰囲気を醸し出している。

「じゃ登録だけど、この用紙に名前を記入してくれる？」

そう言ってローラは羊皮紙と羽ペンを俺の前に差し出した。
俺は指定された場所に名前を書き込んでいくが、気になる事があっ

た。
どうして文字自体が、どう考えても日本語とは全然違うのに書けるんだろうか、話せるんだろうかと。

「書いてくれた？　ミコト・ミネフジか変わった名前ね」

その頃になってやっと我に返ったのかエミリアが戻ってきた。

「それでミコトの登録にね・・・」
「今、手続き中よ。」
「いつの間に。」
「これで手続き完了よ。

で、ギルドの説明なんだけどギルドに登録した時に傭兵の強さを示すランクが就けられるわ。
ランクなんだけど最低はＨランクから最高でＳＳＳランクまでの１１段階があって最初は皆、Ｈからの開始になるんだけど、ミコトさんみたいに城の騎士の紹介があった場合はＥからになるわ。」

「エミリアって騎士だったんだ。」
「ミコト、何気に失礼ね。」
「ギルドの依頼にも難易度によってランクがあって、いきなりＳランクを受けるのも、止めたりはしないけど命の保障までは責任もてないわよ。それとランクアップするには同ランクの依頼を１０個か自分より上のランクの依頼を５個完遂すれば次のランクに上がれるわよ。更に特例として今のランクよりも２ランク以上の依頼を成功させれば、その依頼の一個下のランクに昇格できます。」

聞いているとエミリアが服の端を引っ張って話しかけてきた。

「ミコト、隊長に貰った討伐の証明書をローラに見せるのよ。」
「そっか、忘れてたよ。」

服のポケットから四つ折にして仕舞っていた、山賊の討伐証明書をローラの目の前に差し出す。

「へぇ～～登録前に討伐しちゃってたんだ。えっと、どれどれ・・・・・ええーーー！？」

ローラは大声を上げて受付から飛び出すと依頼書が貼られている掲示板へと赴き、山賊５人衆と書かれた依頼書に『討伐されました』の判を押して戻ってきた。

「ミコトさん！凄いじゃない。いきなりあの５人を倒すなんて！」
「それは良いから・・・。ローラ、ミコトのランクは幾つになったの？」
「もぅ、凄い事なんだよ！　此れでミコトさんはランクＢに昇格しました。おめでとうございます、此方が報酬の銀貨５０枚です。」
「銀貨？」

傍にいたエミリアに小声で『銀貨って？』と聞くと

「お金の単位で銀貨一枚で銅貨１００枚と同等になるわ、同じく銀貨１００枚で金貨一枚と同等で、更に金貨１００枚で白金貨一枚になるわ・・・って知らなかったの！？」
「いや、お金の単位が此処とは違う遠い場所から来たものだからさ」
「そうなの？たいへんね、ちなみに一般的な家族４人の１日辺りの食費が銅貨１０枚と言ったところね。」

ということは銀貨５０枚だと５００日分の食費って事じゃないか！？

「なお、ギルドでは銀行としての役割もありますから２４時間何時でもお金の出し入れが可能です。勿論、手数料などは不要ですのでご安心して御利用ください。」

早速預けようかと考えていると

「ミコト、次は装備を整えに行くわよ。」

そうして俺はエミリアに引っ張られまま、ギルドを後にした。
ミコトが居なくなったあと、ギルドではローラが微笑んでいた。

「新人にして行き成りのＢランクか、面白い事になりそうだわ。」

半ばエミリアに無理矢理つれてこられた場所はギルドの斜め向かいに位置する武器防具屋だった。

「此処でミコトの武器と防具を選びましょ。」
「おう、誰かと思えばエミリアの嬢ちゃんじゃねえか。今日はどうした？」
「もう、ハイドさん。いい加減に『嬢ちゃん』はやめてくださいよ」
「そうかそうか、すまねえな嬢ちゃん。」
「ぶぅーーーーー！」

俺の直ぐ横でエミリアが顔を膨らませて怒っているのをみて気持ちが和んだ。

「ミコト、防具を選んでください。まぁ、碌な物は無いとは思いますが。」
「そりゃ酷えぜ・・・。」

何故か装備品の重さは最初の山賊戦から殆んど感じないが、動きやすさだけを重点において鉄の鎧の肩当てのないシンプルなデザインのものを買う事にした。
それを見ていた店主のハイドと呼ばれた男は大声で笑い始めた。

「ほぉ～“静”より“動”を選ぶか、気に入った。兄ちゃん、名はなんという？」
「ミコトと言います。よろしくお願いします、ハイドさん。」
「おう宜しくな、ミコト！」
「さて防具は決まったみたいだから次は武器のほうね。」

武器の置いてある棚を見ると剣や槍は勿論の事、大鉄鎚（おおかなづち）や投げナイフ、鉄鋲がついたグローブ、杖などが所狭しと並べられていた。
一抹の期待を憶えながら店内を隈なく探し回ったが、やはり刀は存在してはいなかった。
刀はあきらめて店内を探していると、一際異様な雰囲気を放っている一本の大剣に目が行った。
それは全長が２ｍくらいの物で叩き切ると言うより、叩き潰すが性にあってるような巨大な剣だった。

「お？その剣は重すぎて誰にも扱えねえんだ。無理をすると自分が参っちまうぜ！」

俺はその剣を手に取り片手で軽々と持ち上げて見せた。
が、これほどの大剣では野原なら問題ないものの、森の中では大振りしすぎて使えはしないだろう。

「だが、これほどの剣、手放すには惜しいな。」

暫く片手で持ったまま考えていると、先程までエミリアと喋っていたハイドが此方に目を遣って驚いていた。
エミリアはというと、いじけて地面に蹲(うずくま)っていたが此方を見てハイドさんと同じ様に目を見開いて固まっていた。

「あの大剣を軽々と振り回すなんて・・・ミコトはいったい何者なんだ」
「ミコト凄い！」

そうとも知らない俺は左手で巨大な剣を持ち、右手で普通のサイズの剣を持ってどちらにしようか一生懸命、悩んでいた。

第４話　ギルドと武器屋（後書き）

何処までも規格外な力の持ち主であるミコト・・・。

この後の展開に乞う御期待！！

第5話　エミリアの厄日（前書き）

話の展開に思うところがあり、メインタイトルを『異世界に渡りし者』から『異世界を渡りし者』に変更しました。

メインタイトルの意味がわかるのは、ず～っと後の事になる予定ですので気長にお待ち下さい。

第5話　エミリアの厄日

前回に引き続き、武器屋にて大剣と一般的な大きさの剣を両手に持って悩んでいる俺の姿があった。
その様子を声を出せずに見つめている武器防具屋店主のハイドやマルベリアの騎士エミリア、更にはミコトと同じ目的で武器を選んでいた傭兵たちも、一見してかなりの重量のある両手持ちの大剣を片手で軽々と振り回す様子を見ていて驚愕していた。

「ようし、悩んでいても仕方ない」

そう言って両手に剣を持ったままハイドさんの座る場所へと歩いていった。

「ハイドさん、この大剣と細剣と先程の鎧で値段は幾らになりますか？」
「こりゃたまげた、両方とも買うのか！？」
「はい、散々悩みましたが2本とも買う事に決めました。」
「それじゃあ、鎧が銀貨2枚と銅貨５０枚に細剣が銀貨3枚、大剣が銀貨５枚だな。占めて銀貨１０枚と銅貨５０枚だが、沢山買ってくれた御礼だ銀貨１０枚で売ってやろう！」
「ありがとうございます。」

腰の袋から銀貨１０枚をハイドさんに手渡したあと、購入した鎧を装備して細剣は腰へと装着し、大剣は腰に着けると引き摺ってしまうので背中に斜めにして背負う事になった。

「エミリア、次に行こうか。エミリア？エミリアってば！！」
「な、なにミコト！？どうかした？」

どうやら俺が声を掛けるまで目を見開いて固まっているようだった。

「装備は買い終わったから次は何処に行くのかなって。」

「じゃ次は道具屋に行きましょうか」

エミリアとともに武器防具屋を後にして、約５０ｍ離れた道具屋へと足を踏み入れた。

「此処は旅の必需品の薬草や毒消し、魔術師用の魔力回復薬なんかが売られてるけどミコトは剣士みたいだから、強いて言うなら薬草と毒消しくらいの物ね。」

「そ、そうだね」

う～わ～、一番俺に縁の無い物だな。かといって何も買わなかったら不審がられるだろうし・・・

「どうしたの？何か気になる事でもあった？」

「いや、何でもない。それじゃあ、薬草と毒消しを５個ずつ貰おうかな」

薬草・毒消し１個とは言っても、一個当たり紐で２つ結わえてあるから正確には１０個ずつ買ったような物だが・・・。

「まいどありぃ～、薬草は１個銅貨２枚、毒消し１個銅貨３枚なので合計で銅貨２５枚です。」

財布（腰の布袋）から銀貨１枚を手渡し、釣銭として銅貨７５枚を受け取った。

「では此れが品物です。またのご利用をお待ちしていますね」
品物を受け取った時、横で見ていたエミリアが話しかけてきた。
「ちょっと、ちょっとミコト！道具袋一つも持ってないじゃない！？なんで？」
道具袋？そんなのが必要なのか？『一つも』と言う事は最低でも２個は必要なのかな？
「汚れが目立ってきたから、途中で捨てちゃったんだ。」
俺がそう答えるとエミリアからは「なるほど」という相槌とともに店員が割り込んできた。
「道具袋は一つ銅貨１０枚ですが、どうなさいますか？」
「じゃあ２個ください」と言って店員に銅貨２０枚を手渡して道具屋をあとにした
「それじゃあ、最後に宿屋の案内ね。」
今まさに道具屋から出ようとした時、道具屋の店主がエミリアに話しかけてきた。
「ちょっと、エミリアちゃん。ハンクスさんが探してたわよ？」
「え！？何か言ってましたか？」
「ええ、『出てったっきり中々戻って来ない』って愚痴を言いながら歩いてたわよ。」
「ええーーー！？でも、此れが最後だから、もうちょっとだけ待っててもらうわ。」

「知らないよ、どうなっても」

横目でエミリアの顔を見ると、青い顔で冷や汗を流しながら引きつった笑いを浮かべていた。

「エミリア、俺なら構わないから城に戻ったほうが良いんじゃないか？」

「いいの、いいの！さあ、次は宿屋よ」

「いいのかなぁ～～」

エミリアは俺を引っ張って、早足でギルドの真向かいにある宿屋へと歩いていった。

宿屋に到着する頃には空が夕焼けに染まり始めていた。

「此処が案内最後の酒場兼宿屋よ、女将さんのレインさんと契約をすれば長期滞在も可能だから利用してね。」

「騒がしいと思ったらエミリアじゃないか。隊長さんが探してたよ」

奥から出てきたのは偉丈夫（婦？）というような体格の良い女性だった。

「おや、こっちは初めて見る顔だね。髪も眼の色も見たことの無い黒だし・・・」

「はじめまして、ミコトといいます。」

「あいよ、私の名はレインだ。よろしくなミコト！」

「よろしくお願いします。レインさん」

「あっはっは！呼び捨てでも構わないよ。うちの宿は一泊二食で銅貨5枚さ、お金が払えれば何日いても構わないからゆっくりして行きなよ。」

「じゃ私はこれで城に戻るから、困った事があったら何時でも会い

に来てね。」

エミリアはガチャガチャと鎧を揺らしながら城への道を全速力で走っていった。

俺はというと、レインから『7』の番号が刻まれている、部屋の鍵を受け取り宿の廊下を歩いていた。

「飯が出来たら呼ぶから、部屋で寛(くつろ)いでいるといいさーー！」

「分かりました。」

宿屋の2階を歩いていると1から順番に10枚の扉が並んでいた。

そのうちの扉に大きく『7』と書かれている部屋の扉を手渡された鍵で開けて中に入ると、畳10畳分くらいの部屋に木製のテーブルと2個の椅子、部屋の奥にはベッドが置かれていた。

「へぇ〜〜想像してたよりも、ずっと良い部屋だな。」

部屋についた俺は早速、腰に装着している剣と背中に背負っている大剣を取り外して壁へと立て掛け、着ていた鎧を剣の傍へと置いて、椅子に座りこれからの事を考えていた。

「どうにかして、元の世界へと帰る方法を探さなきゃな。」

まぁ俺には心配してくれる家族はいないし、万が一帰る方法が見つからなかったとしても此処で楽しく暮らせばそれで良いか・・・。

「お客さ〜ん、飯ができたよ。降りといで〜〜！」

色々な事を考えていると、下からレインの声が聞こえてきた。

「まずは、腹ごしらえだな！」

その後、見たことの無い奇妙な色の料理が目の前に並べられたが、見た目とは裏腹に美味しい食事を食べて、その日は眠りについた。余談ではあるが、城へと全速力で帰ったエミリアはハンクス隊長から2時間もの説教を喰らっていた。

「隊長～～、もう許してぇ～～」
「駄目だ！！まだまだ話は残っている！」
「そんなぁ～～！」

その後、城の一室は一晩中明かりが灯っていたという・・・。

第6話　禁句

翌朝、宿屋の自室で目覚めた俺は『全て夢であって欲しかった』と思いながら起き上がった。
そして朝食時に女将のレインに長期滞在の事を伝え、銀貨1枚を支払った。
レインの話では、ギルドの依頼などで宿に帰ってこなかった場合は宿代を請求しないとの事だった。
まだ町の外に出るつもりは無いので、大剣は部屋に残し一緒に購入した細剣のみを腰に装着して宿屋を出ようとするとレインに声を掛けられた。

「おや、今から仕事かい？」
「いえ、少し町を散歩しようかと思いまして。」

昨日、エミリアとギルド・武器防具屋・道具屋・宿屋と色々なところを歩いたが、そんなものは町全体の極一部で、周りにはまだまだ行っていないところが沢山あった。

「散歩は良いけど、城の陰になっている場所にはなるべく近づかないほうがいいよ！」

この町の中心部分には城が聳(そび)え立っており、宿屋や武器防具道具屋がある場所は日の当たる、町の表門から城へと繋がる城下町に面しているが、レインが言う場所は前後を城と山に囲まれており、昼夜関係なく常に薄暗い雰囲気を醸し出していた。

「向こうの町の住民はならず者ばかりさ。もし、仕方なく近づく時はスリに気をつけなよ。」

レインに軽く手を振り、宿屋を後にした。
宿屋を出て少し歩くと、焼き鳥のような串を売る屋台が見えてきたので、串を2本買って食べながら散策を開始した。

「この世界に牛とか豚とかって居るのかな？そもそも、この肉って魔物のじゃないだろうな。」

露天で売られている魔道具を見ながら歩いて行くと、レインから近づくなと言われていた場所の入口にに差し掛かった。
好奇心が芽生えてきて少しくらいなら問題ないだろうと考え、問題の場所へと足を進めた。
其処は一歩踏み出した途端に別世界に入ったんじゃないかと思うくらい荒れていた。
木で出来た掘立て小屋のような家は所々に穴が空いて中が丸見えになっているし、街道には寝ているのか死んでいるのか区別がつかない奴らが横になっていた。

「なるほど、近づくなと言われた意味が足を踏み入れた瞬間に分かるほど危険なところだ。」

更に進んでいくと、街道の奥からナイフを手にした髭面の男達が5人ほど近づいてきた。

「おい、命が惜しかったら金を出しな！命までは取らねえからよ。」
「そんな事を言って、金を出しても殺すつもりじゃないんですか？」

俺がそう言うと男達は盛大に笑ったかと思うと、左右に広がり間合いを詰めてきた。

「おっ？いい勘してるじゃねえか。その通りだよ！」
「見た感じお前は剣士みてえだが、この人数相手に勝てるとでも思っているのか？」
「今更、逃げ出そうとしても遅いぜ！」
「能書きはいいから、さっさとかかって来い！ただし俺を一撃で倒さないとお前らが死ぬ事になるかもしれんぞ？」
「舐めやがって！！おい一斉にかかれ！」
「「「「おう！！！」」」」

5人が一斉にナイフを握り締め、俺に襲い掛かってきた。
俺はまず、2人の間をすり抜けてカウンターとしてパンチを顔に叩き込むと2人は勢いで後方の家屋にめり込み微動だにしなかったため、殺してしまったかと思ったがピクピクと痙攣している様子を見て安心した。そのまま振り向きざまに別の2人を蹴り飛ばし、先程の2人と同じ様な目に合わせたところで、死角から別の男にナイフで腹を刺された。

「よし！手応えあった！！舐めた口を利きやがって。あとは死体から身包み剥いで・・・！？」
「誰が誰を殺ったって？」
「そんな！？確かに急所を刺した手応えがあったのに・・・」
「折角忠告したのに俺を一撃で殺せなかったな！覚悟はいいか？」
「てめえ化け物か！？」

化け物・・・バケモノだと！？男の発した一言を聞いてから俺の意識は途切れた。
あれから、どれだけの時間が流れたのだろう・・・。
俺が意識を取り戻すと両肘、両膝の関節が不可能な方向へと折れ曲がり、男は涙と鼻水でグシャグシャになった顔を何度も下げて俺に許しを扱いていた。地面には黄色い水溜りが広がっていて先に倒し

た4人は何時の間にか居なくなっていた。
その間、何があったのか分からない俺は話を聞くために倒れている男に近づこうとしたところで男は悲鳴とともに気を失ってしまった。見るからに重傷な男をそのままにはしておけず、城へと歩いて行き俺も世話になった（？）衛生兵にエミリアを間に挟んで治療を依頼した。
連れて行った直後、城の門の警備を行っていた兵士に『こ、この男は！？』と驚かれたが突然の来城にも拘らず快く治療を応じてくれた。
十数分後、治療し終えた男は帰されると思ったのだが、何故か城の牢屋へと収監された。しかも帰り際にはエミリアを始めとして、城の門を警護していた兵士にまで礼を言われ、銀貨5枚を貰った。
わけも分からずに宿屋へと戻るとレインさんからも『散歩じゃなかったのかい？どっちにしろお手柄だったね』と労い（ねぎら）の言葉を頂戴して、もう何がなにやら・・・。
後日聞いた話では、俺が城へと連れて行った男は裏町を牛耳る強盗団のボスでマルベリアの城下町全域に指名手配されていたことが明らかになった。それを俺が捕まえた事に対してのお礼だそうだ。
ちなみに男はCランク級の手配書だったため、ギルドのランクアップの経験値には満たなかった。

第6話　禁句（後書き）

一瞬、二重人格かと思われる行動を取ったミコトでした・・・

第7話　討伐依頼？　出発（前書き）

思ったよりも早く完成できたので更新する事にしました。

第7話　討伐依頼？　出発

今日こそは依頼をこなそうと、フル装備でギルドへと向かった。

「あっ！ミコトさん、昨日は大手柄だったらしいですね。」

ギルドへ足を踏み入れた瞬間、目が合ったローラに話しかけられた。

「今日は依頼を受けに来たんだけど。」

「そういえば、依頼書の見方を教えてませんでしたね。」

確かにギルドランクの事やランクアップについては教えてもらったが、依頼書については何一つとして教えてもらってはいなかった。

「では、この窓口の右側を見てもらえれば分かると思いますが、掲示板に依頼書が貼られています。」

ローラの言ったとおり、壁のボードにはギッシリと採取や討伐といった種類別に沢山、貼ってあった。

「それでは、依頼書についての説明なんですが依頼には大まかに分けて４種類あります。一つは雑用と言われるものです、表現は悪いのですが簡単に言うと城下町に住んでいる市民の方々の我侭を聞くような内容です。」

「我侭？」

「はい、例えば“溝（ドブ）掃除をしてくれ”だとか“敷地内の草むしりを頼む”だとかですね。」

「それはまた・・・」

「まぁこれ等の雑用依頼はＨ～Ｅランクの仕事ですのでＢランクで

あるミコトさんには、あまり関係はないです。」
「たしかに現在のランク以下の仕事は昇格の条件には当てはまらないからな。」
「その通りです。続けて2つ目は採取の依頼内容ですが、此れも各々《おのおの》の仕事内容は変わりますが基本的には“鉱山から鉱石を採取してきて欲しい”とか“薬の材料になる毒草や薬草の採取”などです。」
「薬草は分かるが、毒草は何に使うんだ?」
「其処まではギルドの追求範囲外です。」

毒草を使うものなんて思いつかないんだが・・・。

「3つ目は討伐依頼になります。ミコトさんも知っての通り、既にミコトさんによって討伐された“山賊5人衆”や昨日捕まえた強盗団の頭などが対象となります。」
「山賊は殺してしまったが、問題はないのか?」
「討伐対象として手配される者達は基本的に生死は関係ありません。さらに凶暴な魔物も討伐依頼になります。」
「ドラゴンとかか?」
「いえ、ドラゴンは希少生物として保護されているので余程の事が無い限りは対象にはなりません。」

ファンタジーで言えばドラゴンが絡むと思ったが、特別の存在のようだ。

「最後は町から町への商人などの護衛依頼です。」

此処以外の町は知らないから今度、試しに受けてみようかな。

「あとは極稀にですが、騎士団からの依頼として騎士に協力しての

特別任務が出る事があります。」
「騎士の依頼か。」
「ただし、依頼を受けれるのはＡランク以上とし、成功すればかなりの報酬がもらえます。」
俺はまだＢランクだから不可能か・・・・。
「次は依頼書の注意事項を説明します。
依頼書の上部には必ずランクが書かれているので受ける前に確認をお願いいたします。
更にこれは全ての依頼に共通する事ですが依頼書には何日以内に依頼を完遂させるかが記入されています。
もしも期限までに達成できなかったり、何らかの事情で遂行が不可能になった場合、報酬の一割を罰金として徴収いたします。」
すると報酬が銀貨１０枚の仕事は失敗すると銀貨１枚が罰金として取られるわけか・・・
「あまりにも失敗が多かったり態度が悪いようだと、ギルドランクの降格処分が下されます。」
「依頼について質問してもいいか？」
「構いませんよ、どのような事ですか？」
「それじゃあ、討伐依頼でだが例えば、とある魔物を退治しろと言う依頼だった場合、倒したという証拠はどうするんだ？」
「それでしたらミコトさんの後ろに本棚がありますよね？」
真後ろに顔を向けるとギッシリと本が詰まった棚が見えた。
「ああ、此れがなにか？」
「この本の中には魔物の生態についての情報が詰まっています。魔

物の形状から弱点、そして討伐証明部位などの情報。ただし此れはギルドからの持ち出しは禁止しているので、討伐に出かける前に目を通して暗記してください。」

一度に説明されて何がなにやら、混乱しているとローラから声を掛けられた。

「流石に一度で憶えきれないと思うので分からない事があれば何時でも遠慮なく聞きに来てください。」

「ああ、ありがとう。じゃ早速、依頼を探してみる事にしよう。」

ローラに手を振りながら掲示板の前へと歩いていき、依頼を虱潰(しらみ)しに見ていく・・・

「え～と・・・」

・G級雑用依頼：報酬は銅貨１０枚、期間は3日間で内容は敷地内の草むしりか・・・
自分でやれよ、それくらい。

「次は？」

・F級雑用依頼：報酬は銅貨３０枚、期間は1週間で内容は隣の婆を痛めつけてください！？
雑用どころか犯罪行為じゃねえか！

「気を取り直して・・・」

・B級討伐依頼：報酬は銀貨１０枚、期間は5日以内に畑を荒らす魔物、ワイルドウルフを5匹討伐か

これが良さそうだな。
俺は依頼書を掲示板から外し、依頼書を持ったまま壁にある魔物辞典を開いてワイルドウルフの頁を閲覧した。
其処には手書きで頭に1本の角が生えた狼のような姿が描かれていた。

「なになに、ワイルドウルフは雑食の魔物で爪の先から出る毒に注意。討伐証明部位は頭の角か。」

辞典を元通りに本棚へと片付けた俺はローラの居る窓口へと赴き、依頼を受ける事を申し出た。

「ワイルドウルフの討伐ですね、場所は元ディル村の近くになりますが宜しいですか？」
「ディル村とは？」
「ミコトさんが山賊5人衆を討伐した場所がディル村ですが、山賊に皆殺しにされて生き残りが居なかったため廃村となりました。」
「そうか、あの村か。」
「えっと証明部位を入れる袋は・・・お持ちですね、失礼しました。」

この前、道具屋で余分に買った道具袋をローラが見て、確認したようだった

「一つ注意なんですが、間違っても薬草の入っている道具袋に証明部位を入れたりしないようにしてくださいね。よく間違える方が居るのですがその場合、薬草が血生臭くなってしまい、使用できなくなってしまいますから。」

緑色の綺麗な薬草が魔物の一部から流れ出る血液により、真っ赤な

液体が滴る血みどろの赤い薬草に変わっていく様子を想像してみると・・・。

「ま、まぁ気を取り直して討伐しに行ってくるよ。その前に銀行で此れを預かってくれないかな。」

そう言って俺は歩くたびに腰でジャラジャラと音を立てている硬貨を手持ちの銀貨１枚を残し、所持金の銀貨４３枚を銀行へと預けた。

「確かにお受け取りいたしました。」

そう言って後ろ手でローラに手を振りながら町の外へと歩いていった。

第7話　討伐依頼？　出発（後書き）

7話にして、やっと街の外に出発です・・・。

第8話　討伐依頼？　出会い（前書き）

少し鬼畜な性格の同業者が登場します。

そういうものに対して嫌悪感を覚える方は見ないほうがいいかも・・・。

第8話　討伐依頼？　出会い

町を出て暫く普通の速度で歩いていた俺は一定距離を歩いて町の方を振り返り、自分の事を目視できない距離まで離れた事を確認すると目にも止まらぬ速さで走り始めた。
別に急ぐ必要は無いのだが、ずーっと町の中にいてストレスが溜まっていたのだ。
出発してから5分後、無事にディル村へと到着した。
ディル村であった場所は燃えた家が崩されて平地と化し、いたるところに墓が立てられていた。
俺は村の入口（墓地）に向かって軽く手を合わせて、その場を後にした。

「さて肝心のワイルドウルフは何処に・・・。」

しばらく草原を見回していると、遠くに犬のような生き物が見えた。

「お？あれがワイルドウルフかな？」

目標に逃げられないように忍び足で木々に隠れながら近寄っていくと・・・。
姿形はギルドで見たとおり狼の頭に角がはえたような形状だが、想像してた物とはかなり違っていた。

「狼には違いないが、これはまた・・・。」

それは普通の大きさではなく、2～3ｍくらいの生き物が森の中の草むらに横たわっていた。

「変だと思ったんだよな、たかが狼ごときでB級の討伐依頼だなんて。」

大剣を手に何時飛び掛るか考えていたが、俺の匂いがするのか其処に横たわっていた5頭全てが顔を此方へと向けていた。

「気づかれていたか、魔物と言っても狼や犬の嗅覚は人間の1万倍と言われているからな、気づかないほうがおかしいか・・・。」

そう思った瞬間、照らし合わせたかのように5頭のワイルドウルフは一斉に俺の方へと涎を垂らしながら飛び掛ってきた。
木々の合間では大剣は使えないと判断した俺は背中へと大剣を戻し、腰の剣を引き抜いて構えた。
剣を引き抜くときに余所見をしてしまったせいで5頭のうちの1頭が目前まで迫っている事に気づかなかった俺は咄嗟に剣を盾にして危険を回避しようと考えたが、剣の角度のせいか体当たりしてきたワイルドウルフはそのまま剣によって2等分されてしまった。

「結果オーライだけど・・・コイツはアホか?」

そのままの勢いで魔物の血を全身で浴びながら、次に襲い掛かってきた狼の頭に剣を突き刺して2頭目を撃破した。

「のこり3頭!!」

続けさまに2頭が俺に倒されたからか、この魔物は頭がいいのか木を背にして立っている俺を3方向から同時に飛び掛ってきた。
一瞬、応戦しようかとも考えたがジャンプして木の枝へと飛び移った。

「「ギャオン！？」」

下を見てみると3頭のうちの2頭が咄嗟の事で避けきれずに頭から木にぶつかって倒れてしまった。

此れをチャンスと思い、枝から飛び降りた俺は回避した魔物の背中に剣の刃を下にして、飛び降りて3頭目を撃破した。

残るは未だに目を回して倒れている2頭のみ・・・。

あっけない幕切れだったが2頭の首を一撃で刈り取って討伐を完遂した。

その後、俺はワイルドウルフの角を次々に切り取り、道具袋へと入れていった。

討伐依頼は完了したが、そのまま町へ戻るわけには行かなかった。

その理由とはディル村からマルベリアの町までは馬車で走っても最低で4時間はかかるのに、俺がマルベリアを出発してから僅か6時間しか経過していなかったからだ。

「仕方ない、見晴らしのいいところで少し休憩するか。」

身体にこびり付いたワイルドウルフの血を軽く拭き取った俺はその場を後にして、ディル村のそばにある平原に腰を落とした。

「此処なら見晴らしもいいし、不測の事態があっても大丈夫だろう。」

今回のワイルドウルフ戦は普通の冒険者の戦闘を経験してみようと、あえて傷を負わずに戦ったためかなり苦戦してしまった。

傷のことが心配しなくてもいい、今の俺なら簡単に討伐していただろう。

そんな事を含めて色々な事を考えていると空が夕焼けに染まり始めてきた。

「そろそろ町に戻るとするか・・・。ん!?」

立ち上がったところで、血の匂いに誘われたのか一頭の猪のような魔物が土煙を上げて突進してきた。

「面倒くせえな。」

俺は腰の剣を引き抜き、身体に垂直に構えた。

この事で魔物は逸早く気づいて前足でブレーキを掛けたが、間に合わず串刺しになって息絶えた。

「なんなんだ、一体。」

剣を振って血を飛ばしたあと剣を鞘に戻して暫く歩くと前方より2人の冒険者が声を掛けてきた。

「ハァハァ・・・あ、あんた冒険者だな?このあたりでポークベアを見なかったか?」

「ポークベアとは何だ?」

返事をしたと同時に男達の後ろを見ると、大量の道具袋を担いだ少女が息を切らせながら歩いていた。

「俺等がギルドで依頼を受けて、討伐しようとした時に逃げられてしまって。あ、体型は猪みたいな奴だ。」

「それなら少し前に俺が殺した奴かもしれんな。」

「倒したんか!?」

「少し戻れば死体があるはずだが。」

「すまん、案内頼めるか?」

「構わないが、今すぐか？」
「ああ直ぐだ。」

2人は直ぐに歩き出したが、荷物を運んでいた少女は荷物に埋もれながら地面に手を突いて息を切らせていた。

「セリア！何をしてるんだ、さっさと来いよ！！」
「ちょ、ちょっと待ってよ！この荷物重くて・・・ハァハァ」
「ホント、魔術師は体力がねえな。」
「ほら、さっさとしねえと日が暮れちまうだろうが！」
「リンド、イラウもう少しだけ休ませてよ・・・。」
「しょうがねえな、セリアは後から追いついて来いよ！スイマセン案内お願いします。」
「ちょっと待て！仲間を置き去りにするつもりか！？」

こんな場所で息が絶え絶えの魔術師なんて魔物の餌食間違い無しだろうに。こいつら本当に仲間か？

「いつものことですから。」

俺的には置いていく事に抵抗があったため、セリアという魔術師の少女の背中と膝の裏に手を遣って自分の胸元へと持ち上げた。一般的にお姫様抱っこと言う抱き方である。

「え！？えっと・・・な、なんでこんな！？」
「あまり暴れるなよ。落ちるぞ？」
「・・・はい。／／／／」

そのままで来た道を戻った俺は先程倒した魔物の元へと舞い戻った。

「確かにポークベアだな。イラウ、牙を。」

到着するや否や2人が猪の口の横にある牙を切り始めた。

「此れで俺達の討伐依頼は完遂だ！マルベリアに戻るぞ！！」

2人はセリアの存在も忘れ、意気揚々と町への道を歩いていったが俺は小声で抱きかかえているセリアに話をしていた。

「なぁ、あいつ等のやり方って認められるのか？」

「魔物の一部を持って帰れば、たとえ討伐して無くても判定で依頼を完遂したとギルドに容認されてしまうんです。」

「何か変な話だな。それにあいつ等はお前のことなんて、これっぽっちも考えてないみたいだぞ？」

「私もそろそろ見限ろうかと思っています。」

こうして恥ずかしがるセリアをお姫様抱っこしながらマルベリアへの道を歩いて帰った。

第8話　討伐依頼？　出会い（後書き）

セリアについての内情は後日、閑話として1話書くつもりです。

第9話　討伐依頼？　完了（前書き）

自分自身も鬼畜なキャラは嫌いなんですが物語の面白さを出すためにあえて登場させました。

自分で書いときながら、腹立たしい気分になったことは言うまでもありません・・・

第9話　討伐依頼？　完了

セリアの前で非人間的な身体能力を晒しだすわけにはいかず、人並みの歩行速度で町に帰った頃には既に空は真っ暗闇になり、ギルドの窓口は閉まっていた。
ちなみにお姫様抱っこしていたセリアは町に着く2時間ほど前に降りて自分の足で町の門を潜った。
町に到着後、先行していた筈のセリアの仲間であるリンドとイラウの姿が何処にも見当たらなかった。
ギルドは閉まっているため、此処にいるのではと酒場に入ると既に出来上がっている2人の姿が。

「お？セリア、やっと到着したのか。報酬で飲み食いしていたが、もう料理も金も残ってないぞ。」
「遅れてくる奴が悪いんだ。気にするな！」

セリアを仲間とも思わない奴等の行動に俺はキレかかっていたが、横にいるセリアを見るとプルプルと身体を震わせていた。
次の瞬間、酒場に居る他の客の鼓膜が破れそうな大声でセリアが叫んでいた。

「もう我慢できない！私、このパーティー辞めさせてもらうわ！！」

突然の訴えられた表明に2人はしばし呆然となったが、直ぐに切り替えしていた。

「おぅ、お前の代わりなんて幾らでも居るんだよ！不満があるなら辞めてしまえ！！」

それを聞いたセリアは両目に涙を浮かばせながら宿屋の奥へと走り去っていった。
冒険者3人による盛大な口喧嘩により、その場で食事をしていた他の冒険者たちもセリアが走っていった方向を声も発せずに見守っていた。

「くそ！あの屑のせいで酒が不味くなったぜ！！」
「飲みなおそうにも金がねえしな・・・くそッ！！」

周りの客から発せられる、見下した視線に気が付かないのか平然とした態度で悪態をついていた。
その平然とした様子に我慢できなくなった俺はとうとう口を出してしまっていた。

「おい！お前ら、仮にもセリアは仲間だろうが！もうちょっと優しく出来ねえのか！？」
「なんだ、さっきの冒険者か・・・此れは俺達の問題だ、関係ない奴が口出ししてんじゃねえよ！」
「なんだと！？この野郎！」

あやうく手を出してしまうところで、俺よりも先に宿屋の女将のレインが手に持っていたお玉で2人の頭を続けさまに殴り飛ばしていた。
しかも殴った音は『パコーン』という軽めの音ではなく何かお玉とは別のもので殴ったかのような『バキッ』という音だった。見るとお玉の先にある半円形の物が折れて床に転がっている。

「いーってえな！何しやがるこの野郎！！」

一人は殴られたところを手で押さえながらレインに文句を言い、も

う一人は頭を手で押さえながら床に蹲(うずくま)っていた。

「お前達みたいな仲間を仲間とも思わない奴らは虫唾がはしるんだよ!!金はいらないから、さっさと此処から出て行きな!!」

「客に向かって何だその態度は!?こっちは金を払っているんだ!!」

その瞬間、男は女将に掴みかかろうとするが、他の食事をしていた冒険者からの殺気を含んだ視線を感じ取ると早足で逃げて行き、先程まで頭を押さえて蹲(うずくま)っていた男も動物のような4本足で酒場の外へと逃げていった。

「へぇ～、レインって見かけによらず強いんですね。」

「私がやらないと、此処にいたミコトを含む冒険者の誰かが剣を抜いてただろ?私は此処を殺人現場にはしたくないだけだよ。」

「分かりました。そういう事にしておきますよ」

「違うって言ってんのに・・・。」

レインは照れ隠しのためか後ろ手で後頭部を掻きながら厨房へと消えていった。

そして夜が更け翌朝、朝食時にレインにセリアがどうなったのか聞いてみると・・・。

「あの娘なら朝一番に昨日の事の礼を言った後、ギルドに寄って依頼を受けに行くって威勢よく出かけて行ったよ。名前を聞いていなかったミコトに“ありがとう”って伝えてくれって言ってたね。」

「そうか、元気になって良かった。」

その後、朝食を終えた俺はギルドへワイルドウルフ討伐の報酬を貰いに窓口を訪れた。

「ローラ、ワイルドウルフ5頭討伐してきたぞ。これが証明部位だ」
そう言って道具袋の中から断面に血がこびり付いた角5本を窓口に差し出した。
俺が差し出すとローラは魔物辞典をぺらぺらと捲り出し、ワイルドウルフの頁と現物を見比べていた。

「え～と、確かにワイルドウルフの角5本確認しました。これが報酬の銀貨10枚です、お受け取り下さい。」
「確かに。それでセリアの事で詳しい事を知りたいんだが？」
「耳が早いですね。どうしてその事を？」
「昨日の酒場での盛大な口喧嘩の現場に俺も居たし、ポークベアだっけ？討伐したのは俺だしな。」
「セリアの言っていた親切な男性というのはミコトさんの事だったそうですね。」
「ああ、それでセリアは無事にパーティーから離脱できたのかと思ってな。」
「本当は言ってはならない事なんですが、当事者のミコトさんには言わないといけませんね。セリアは離脱したついでに今までの討伐偽装行為も暴露して行きましたよ。」
「偽装行為は証明部位さえあれば、ギルドは討伐したものと判断すると言っていたが？」
「それは大きな間違いです。今まで偽装が分からなかったのは証明できる者が居なかったからです。」

そうか、元パーティーの一員であったセリアが暴露したんだから十分証明が出来る事か。

「リンド・イラウの両名には罰則として、DランクからEランクへ

の降格がギルド支部長の決定により本日早朝に執行されました。なおセリアについては内部告発により恩赦が与えられ、現状維持としてDランクのままになっております。」

「その後、セリアはどうしたんだ？」

「体力の問題の事から討伐依頼ではなく、採取依頼を受けて町の外へと歩いて行きましたよ。」

そうか元気になったなら、それで良いか。何時かどこかでバッタリと出会う事もあるだろうな・・・。

第9話　討伐依頼？　完了（後書き）

次回はセリアの内情を書く予定でいます

閑話？　ミコトと出会う、少し前のセリア（前書き）

第８、９話をセリア視点で見た内容になっています。

第８話の前書きにも書きましたが、８話での鬼畜なキャラが更にＬｖＵＰして登場します。

そういうものに嫌悪感を抱く方は見ないほうが良いかも・・・。

書いてる本人の作者も嫌悪感を抱くため、苛立たしい気分になっていました。

閑話？　ミコトと出会う、少し前のセリア

私はギルドDランクの魔術師のセリアと言います。
数ヶ月前にリンドとイラウと言う2人の冒険者に誘われてチームに加入しました。最初は冒険者たちと組めた事が運が良かったと思っていましたが日にちが経過するにつれ、リンドが本性を現してきました。
彼らは私の事を旅の仲間ではなく、荷物持ちや給仕などで私を酷使し始めました。
ただでさえ魔術師は体力が乏しいため、重いものを持って歩けないのに随時荷物持ちとして働かされました。
ある日、ギルドにて依頼を掲示板で選んでいた時の事・・・

「おい、俺達はDランクだから上位ランクの討伐依頼を成功させれば一気にランクアップできるぞ！」

・・・とリンドは何を言っているのでしょうか、普通の採取依頼でさえ、碌にこなせない素人の冒険者が討伐依頼なんて死にに行くようなものです。

「ねぇ、止めたほうが良いんじゃない？危ないわよ。」
「お前の意見なんざ聞いてねえんだよ！！人様に意見するんじゃねえよクソが！」

パーティーに誘ってくれた時は紳士かと思うぐらい優しかったのに・・・。

「おいリンド、これなら良いんじゃないか？」

私がリンドに罵られていた時、イラウが掲示板からB級の討伐依頼を剥がして持ってきました。

「お?ポークベア1匹討伐しただけでCランクに昇格じゃねえか!!」

リンドたちは戦ってもいないうちから、夢見心地になっているようです。

「おい!何をボケッとして居やがる!?さっさと準備して町の外に行くぞ!!」

「セリア、俺達の荷物持ってさっさと追いついて来いよ!!」

何時の間にか受付を済ませた2人は、自分達の剣だけを腰に挿して悠々と町の外へ歩いて行きました。

ギルドに残っているのは、私と3人分の薬草や食物が入っている9個の道具袋だけ。

私個人の装備品も当然の事ながら装備しなくてはならないため、体力のない魔術師なのに荷物持ちにさせられています。

かといってノロノロと歩いていてはイラウに口で罵られ、リンドに足で蹴られます。

やっとの事で私が草原に辿りつくと、其処にはポークベアと対峙しているリンドの姿が・・・。

リンドが剣を上段に構えた直後、ポークベアがイラウを跳ね飛ばし前方へと逃げて行きました。

「おいセリア、お前は魔法で援護するとか考えなかったのかよ!この役立たずが!!」

リンドは私の居るほうに向くと私の襟首を掴んで今にも殴りかかり

そうな勢いでした。

「リンド！そんな屑に構っている暇は無いだろうが、さっさと奴を追うぞ！！」

「ちっ！分かったよ。セリア、次は無いと思え！！」

そう言うや否や、２人は全速力で逃げたポークベアを追って行きました。

既に疲労が限界に達していた私は回復魔法を自分自身に掛けながら必死にリンド達が走っていった方向に歩いていくと、リンドとイラウは大きな剣を背中に背負った見たことも無い黒髪の剣士に話しかけていました。

「・・・・・・・が殺した奴かもしれんな。」

「倒したんか！？」

「少し戻・・・体がある・・だが。」

「すまん、案内頼めるか？」

「構わないが、今すぐか？」

「ああ直ぐだ。」

疲労のせいか会話が途切れ途切れにしか聞こえてこない・・・。

私が地面に手を突いてへばっているとリンドとイラウが前方へと歩き出した。

そんな・・・少しくらい休ませてくれたって良いじゃない！！

「セリア！何をしてるんだ、さっさと来いよ！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！この荷物重くて・・・ハァハァ」

「ホント、魔術師は体力がねえな。」

「ほら、さっさとしねえと日が暮れちまうだろうが！」

あんたたち、そう思うなら少し荷物持ってくれてもいいじゃない！？

「リンド、イラウもう少しだけ休ませてよ・・・。」

「しょうがねえな、セリアは後から追いついて来いよ！スイマセン案内お願いします。」

「ちょっと待て！仲間を置き去りにするつもりか！？」

へぇ～この黒髪の人、いい人じゃない。こんな人と一緒に冒険したかったな～～。

「いつものことですから。」

リンドの所為じゃない！！

黒髪の人は私の前にしゃがみこむと、次の瞬間には私はその人の胸元へと恥ずかしい格好で持ち上げられていた。

「え！？えっと・・・な、なんでこんな！？」

恥ずかしさで言葉にならない私は腕の中で暴れてしまった。

「あまり暴れるなよ。落ちるぞ？」

久しぶりに感じた人の温かさに感無量になった私・・・。

「・・・はい。／／／／」

数分後、私を抱えているにも拘らず通常よりも早く現場に到着しました。

「確かにポークベアだな。イラウ、牙を。」

え!?ちょっと待ってよ貴方達、魔物を倒してもいないのに証明部位だけを持っていくつもりなの!?

「此れで俺達の討伐依頼は完遂だ!マルベリアに戻るぞ!!」

リンドは自分達の手柄にしてしまったようだ。リンドを見ていると私を抱きかかえている男性が小声で話しかけてきた。

「なぁ、あいつ等のやり方って認められるのか?」

こんな事を聞くって事は初心者の冒険者でしょうか?
聞かれたからには答えないと失礼に当たるよね。

「魔物の一部を持って帰れば、たとえ討伐して無くても判定で依頼を完遂したとギルドに容認されてしまうんです。」

「何か変な話だな。それにあいつ等はお前のことなんて、これっぽっちも考えてないみたいだぞ?」

「私もそろそろ見限ろうかと思っています。」

会話をした途端に疲れのためか安心感からか、黒髪の冒険者の腕の中で意識が途切れた私は気が付くと町の門の近くに居ました。

「え!?スイマセンスイマセン!寝てしまって・・・。」

その人は私を見て微笑むと、そっと地面に下ろしてくれました。
私はその方とともに町に入ると既に空は真っ暗になっており、先行していたリンドたちの姿は何処にもありませんでした。
ギルドは閉まっているのだから行き着く先は一つだろうと酒場に行って見ると案の定、2人は飲み食いしていました。

「お？セリア、やっと到着したのか。報酬で飲み食いしていたが、もう料理も金も残ってないぞ。」
「遅れてくる奴が悪いんだ。気にするな！」

そんな・・・私だって疲れているのに御飯さえ貰えないの？
次の瞬間、我慢が限界に来ていた私は大声で叫んでいた。

「もう我慢できない！私、このパーティー辞めさせてもらうわ！！」
「おぅ、お前の代わりなんて幾らでも転がって居るんだよ！不満があるなら辞めてしまえ！！」

その言葉を聴いた瞬間、目から涙が溢れ出し宿の部屋へと走って行き私は号泣してしまいました。
旅の疲れと泣き疲れからか、ベッドを涙で湿らせた状態で朝を迎えた私は宿の女将さんのレインさんに挨拶をしたあと、ギルドへと足を向けてパーティー離脱の事を受付のローラさんに話した後、リンド達の今までの悪事を暴露した。

「あいつら！そんな事をしていたのね！！」
「止めれなかった私も悪いのですから処分は如何様にも。」
「セリアは悪くないわよ！暴露してくれたセリアは寧ろ被害者だし罰則はなしよ。」

良かった～お金は持ってないから罰金なんて言われたらどうしようかと思ったわ。
そういえば黒髪の優しい方の事、ローラさんなら知っているかなぁ？

「あの昨日、私を助けてくれた黒髪の冒険者の方の事を何か知りませんか？」
「黒髪なら多分ミコトさんの事だと思うけど？」

ミコトさんか～～私もいつかミコトさんと肩を並べられるような強い冒険者にならなくっちゃ！
そのあと私はローラさんにミコトさんへの託を頼むと採取依頼を受けて町の外へと旅立ちました。
いつかまたミコトさんに出会えることを信じて・・・。

第１０話　初めてのＡ級依頼（前書き）

今のところは目的も無く依頼をこなしていく話なので面白くないと思いますが、この物語は途中の２０話くらいから方針を変えていこうと思いますので気長にお付き合いしてください。

第１０話　初めてのＡ級依頼

朝、セリアの動向をローラに聞いて安心した俺は気を取り直して依頼を探す事にした。
採取依頼はランク的に経験値にならないと判断した俺は、上位ランクである討伐や護衛依頼を徹底して受ける事にした。

「これは、またディル村近くの魔物のＢ級討伐依頼か。お？こっちもディル村近くの森での討伐だな」

今、目の前にあるのは２枚のＢ級討伐依頼でどちらにしようか迷っていた。
俺の性格は幼少の頃より優柔不断で今現在に至っても治ってはいない。
欲しいものが複数あった場合、金がある限り買えるだけ買っていた。
少し話は逸れたが、この討伐依頼も同様でどちらもディル村の近くと言う事で２枚の依頼書を持ってギルドの窓口へ行くと・・・？

「ミコトさん、申し訳ありませんが依頼は一度に一つしか受ける事が出来ません。」

どうやら片方一枚しか受けられないようだ。理由を聞いてみたところ

「一度に何枚もの依頼を受けられると複数人いる冒険者に仕事が回りませんし、依頼を失敗する確率が増大するため、国の一大事や魔物の大量発生などの余程の理由が無い限りは複数受諾はできません。」

仕方なく掲示板に依頼書を戻し、再び悩んでいると新しく一枚の依

頼書が職員の手によって掲示板に貼られた。
逸早く掲示板に目が行った俺は新規の依頼を手に取ると内容を読んでみた。
A級討伐依頼：マルベリア城後方に聳(そび)える山脈の洞窟に潜む魔物、ロックレイルの討伐。
報酬は銀貨４０枚、期間は7日間。追伸、洞窟内に魔物の卵があった場合は残らず殲滅すること。
この依頼ならA級だからランクアップの経験値に最適だし、報酬も魅力的だった。
早速、他の冒険者に先を越される前に依頼書を窓口に持っていった。

「あ、ミコトさん。決まりましたか？」
「貼られた直後の依頼で悪いが此れを受ける事にした。」

俺が依頼書をローラに手渡すと心なしか笑みがこぼれていた。

「ミコトさん、この依頼を受けてくださるんですね！ありがとうございます。」
「どういうことだ？この依頼は最新のものではないのか？」
「はい、この討伐依頼は元はB級討伐依頼だったのですが、山の斜面にあるといわれる洞窟の危険性から何人もの冒険者が失敗し続けているため報酬がその度に上乗せされ、遂には先程冒険者が討伐に失敗して大怪我を負ったとの報告を受けた事により、B級からA級へとランクアップした矢先でした。」
「そんなに危険な場所なのか？」
「ギルドの探索要員の話によりますと、切り立った崖の中腹に存在している洞窟に通じる足場などはなく、辿りつくには登山道から山の斜面を登るか山の頂上から紐で降りるかしかないそうです。」

なるほど・・・しかし、そんな場所の情報をどうやって知ったんだ

？ローラに聞こうとしたが・・・

「町の外壁にある物見塔から特殊な望遠筒でギルド職員が周囲を確認したところ、魔物が洞窟内になにやら白くて丸いもの運び込んでいるのを発見したとの報告が今朝、齎（もたら）されました。」

その白くて丸いものを魔物の卵かもしれないと推測したわけか。

「さらに大怪我をした冒険者に話を聞いたところ、山の斜面はとても脆く重装備ではとても登ることは出来ないという事です。さらに木などは生えていないため、魔物の襲撃には注意してください。」

では、物陰に隠れながら近づくという行為が取れないわけだな。

「分かった。この依頼、俺が受けよう。」

「ありがとうございます。今回の依頼は特別にギルドからロープを譲渡いたします、山に置いてきたとしても構わないので頑張ってください。」

ローラに手を振って答えた後、以前のように魔物辞典で確かめる事にした。

山の斜面に位置する歩いては入れない洞窟に生息する魔物で卵らしき物体が見受けられたことから鳥類の図鑑を調べていたのだが、どこにも載ってはいなかった。

「おかしいな、鳥類じゃないのか？」

延々３０分ほど図鑑を読んで４冊目に差し掛かった時、ようやくロックレイルが見つかった。

図鑑を見た感じでは容姿は緑色の蜥蜴のような魔物で討伐証明部位

は足の先に一本だけ存在する虹色の爪。注意事項として口から吐き出す火のブレスに要注意との事だった。

「そうか、蜥蜴も爬虫類だから卵だったな。」

辞典を見終えた俺は一旦宿屋へと戻り、客室においてある鎧と細剣を装備した。

未だに大剣の活躍はないが、足場の脆さなどの事情から持っていくのは危険と判断した。

それにロープを使わずにジャンプして洞窟に行くつもりだから、少しでも身を軽くしないとな。

ローラの情報により多少危険性は増すが、俺が例の裏通りで盗賊の頭を倒した場所から真っ直ぐ進んだところにある町の裏門を通るのが近道だ、と言われた俺は何時かの道順を思い出しながら盗賊の襲撃に注意しながら歩いていくが、俺の姿を見た途端に屯(たむろ)していたガラの悪い男達は一目散に悲鳴を上げながら逃げていった。

路地裏から姿を見せずに声だけが聞こえて来たため、耳を澄ますと・・・。

「頭をのした男だ。」

「殺るか?」

「やめとけって!頭の状態を見ただろ!?殺されるぞ」

「頭が何かを言った瞬間に性格が変わったかのように頭を叩きのめしていたしな。」

「奴には絶対に手出ししないように皆に伝えろ!場合によっては皆殺しにされるかも知れん・・・。」

俺はどんな怪物だよ。それにしても、あのときに何があったというんだ?

そうこう考えているうちに裏門へと辿りついた俺は、気をいっそう

引き締めて山へと入っていった。

第１０話　初めてのＡ級依頼（後書き）

前書きで書いた詳細については活動報告にて説明するつもりです

第１１話　驚異的な魔物の身体（前書き）

お待たせしました。
四苦八苦しながらも、なんとか更新する事が出来ました・・・。

第１１話　驚異的な魔物の身体

町の裏門から山へ出発して十数分後、周囲を注意しながら山道を進んでいた。
しかし、山の斜面を見れば見るほど樹木は一本たりとも見当たらず、あるのは岩石のみだった。
ギルドでの情報の通り、山の斜面を手で触れてみるが乾燥した砂のように触った先から崩れていった。

「これはまた・・・、ロープがあっても登れないんじゃないか？」

俺以外の冒険者なら足場を掘って登るか、頂上からロープを垂らして降りるかしないと駄目だな。
そう考えながら歩く事さらに十数分・・・頭上に洞窟らしきものが目に入った。

「この辺りだけ凄惨な風景だな。」

山道から洞窟の入口までは何本ものロープが垂れ下がり地面には折れた剣や槍が突き刺さっていた。

「どうやらこの洞窟で間違いないようだな。」

俺は周辺に人の気配がない事を確認すると、その場でジャンプして洞窟へと一瞬で飛び上がった。
洞窟は滑り台のような形状で奥に続いており、入口から約１０ｍほど歩いたところで行き止まりになっていた。
予想では洞窟内は暗闇だと思っていたが、運が良かったのか日の光が真っ直ぐに中へと入っていたおかげで、道具に頼らなくても目だ

けで洞窟内を見回す事が出来た。
其処には情報にあったとおり魔物の卵と思われる白い物体が数十個存在しており一部は既に羽化している様だった。さらに卵の周りには此処で力尽きた冒険者の亡骸だろうか一部が白骨化しており、腹部には齧られたような痕が見受けられる。

「この洞窟の主は今のところ留守のようだな。羽化した子供のために餌でも取りに行ったか？」

何の抵抗もできない者を殺すのは忍びないが、これも依頼のうちだ許せ！
俺は腰に装着している剣を引き抜き、片っ端から卵を叩き割り、まだ羽化したてで目も開いていない幼獣を皆殺しにした。
殲滅したあと、志半ばで散っていった冒険者の亡骸に手を合わせ、討伐対象のロックレイルを待ち構えるために洞窟の入口へと向かった。
暫く待っていると、遠くの山肌で図鑑に載っていた絵と同じ姿をした魔物が口に鹿のような獲物を咥えて此方へと走ってくる姿を目撃した。
迎え撃とうかとも考えたが、入口では地形的にも不利だし、万が一に逃げられる可能性もある。
俺は咄嗟に持っている剣で洞窟の壁を掘り横道を作った後、息を潜めて魔物が戻って来るのを待った。
数分後、戻ってきた魔物は形は絵の通りだが体格は３ｍ近くもあった。
魔物は一瞬俺の隠れている場所に目を遣ったが首を傾げた後、洞窟の奥へと進んでいった。
完全に奥へと姿を消した事を確認し剣を抜いて臨戦態勢を整えた時。
我が子を殺された怒りか悲哀の声か分からない絶叫が洞窟内に鳴り響いた。

暫く待ち、声が鳴り止むと同時にドスドスという音とともに魔物が突進してきた。
洞窟の入口に俺の姿を確認すると、口を開けて襲い掛かってきた。
俺は魔物の反応にカウンターで剣を突き出すが、まるで石に打ち付けたかのように１ｍｍたりとも魔物の肌には食い込みはしなかった。

「何だコイツの身体は！？剣が通らない！！」

このまま剣を突き出していては折れてしまうと判断した俺は剣の角度を緩めて後方に切り払った。
魔物は外へ逃げるかと予想したが、卵を叩き割ったのが俺だと確信したかのように体の向きをかえて再び俺の方へと襲い掛かってきた。

「身体の表面が石のように硬いとしても此処なら！！」

そう思った俺は出目金のように外側に迫り出している目玉に剣を突き立てようとするが、体表面と同じく剣は刺さることなく跳ね返り、無防備だった俺は洞窟の壁へと吹き飛ばされた。

「グハッ！！まさか、目玉ですら攻撃が通らないとは！？」

吹き飛ばされたて壁にめり込んだ瞬間、数本の肋骨が砕けたような感触があったが数秒後には、いつものように跡形も無いほど完璧に治癒した。

「この能力がなければ死んでいたのは俺だったな。」

魔物はまるで我が子の仇を討ち取ったかのように俺のほうへと顔を向けたが、苦も無く余裕の表情で立っている俺を見て顔を強張らせた。

もしも魔物が人の言葉を話せるとしたら、きっとこう言うだろう。

「あれだけの衝撃を受けて何故立っていられる!?」と・・・。

「それにしても、何処がコイツの弱点なんだ?」

身体の表面は最初の攻撃で通らなかった事は実証済み、かといって柔らかいと思った目玉も剣を弾かれた。あと狙っていない場所といえば・・・!!　試してみるか。

魔物は少しの間、呆けていたものの一気に勝負をつけようと思ったのか鰐のような巨大な口を開きブレスを吐こうとしていた。喉奥には火の塊のような物が渦巻いていた。

「これはチャンスだ。少々の火傷は負うかも知れんが、試してみる価値はある。」

剣を構えた俺は一瞬で魔物との距離を縮め、魔物の喉奥へと剣を突き刺した。

ブレスの影響で火傷を負ったが、剣はそのまま魔物の頭を串刺しにしたところで根元から砕け散った。

魔物は断末魔を上げながら倒れて行き、地面に突っ伏して動かなくなった。

「ようやく死んだか、俺は怪我を負う心配はないがコイツの相手は二度と御免だ。」

火のブレスで負った火傷は瞬く間に痕を残さずに治癒していた。

「さすがに剣は耐え切れなかったか・・・。まぁ後は証明部位を取る事だけだから構わないか。」

図鑑にあった虹色の爪は右前足の先にあったため、取り外そうと頑張ってみるが一向に外れなかった。
剣で斬ろうかとも考えたが既に粉々に粉砕しており役には立たなかった。

「何か武器は無いのか？　ん！？あれは・・・」

洞窟から山道に目を向けると冒険者の墓標とも言える剣や槍が地面に突き刺さっていた。

「それなら、コイツを背負って飛び降りるか！」

俺は魔物を背中に背負うと地面目掛けて飛び降りた。
地面に１０ｃｍほど足が、めり込みはしたが怪我も無く着地できた。

「さて、冒険者には悪いが使わせてもらうぞ！」

俺は居もしない冒険者に頭を下げ、武器を使って爪を剥がそうと頑張ってみるが剣を使っても槍を使っても斧を使っても剥がす事は出来なかった。

第１２話　討伐した後で・・・（前書き）

前回からの続きという事で、２日もかからずに完成させる事ができました。

第１１話を更新した翌日にアクセスＰＶが１０万に達しました！！
愛読してくれている読者様やお気に入り登録してくれているユーザーの方々に感謝致します。
ありがとうございました。
更に高みに上れるように精進して参りますので、応援宜しくお願いいたします。

第１２話　討伐した後で・・・

Ａ級討伐依頼の魔物ロックレイルを剣を折る激闘の末、打ち倒した俺は証明部位を剥がすために辺りに突き刺さっていた武器を使用するも一向に成果は無く苦労していた。

「どうやって爪を剥がしたら良いんだ！！　そもそも誰かコイツを討伐した事があるのか！？」

ぶつくさ文句を言いながら武器を振るっては折るという行為を十数分続けていたが、遂には振るう武器がなくなっていた。

「しまったな・・・武器が無くなってしまった。う～ん、こうなったら最後の手段だ！！」

俺は少し考えた結果、証明部位が切り離せないなら魔物の身体ごとギルドに運ぼうと考えた。

「さすがに、幾らなんでも魔物を背負って町の中を歩くわけには行かないな。遠回りになるが町の外壁に沿って表門に歩いて行くとするか。」

俺は魔物を横抱きに抱え、町へと向かって足を進めた。十数分後、マルベリア城下町の裏門にたどり着いたが魔物を抱えて街中を歩いては町の住民に迷惑が掛かると思った俺は外壁沿いに表門へと足を進めた。

途中、すれ違った冒険者から奇異な目で見られはしたが、気にしない事にして只管（ひたすら）歩いた。

流石に王都というだけあって延々と続く塀に沿いながら歩くとよう

やく表門が見えてきた。

「やっと着いたか。いくらなんでも広すぎるだろ、この街は。」

魔物を担ぎなおして街の門を潜ろうとした時、門を守護する2人の衛兵に止められた。

「そこの冒険者、ちょっと待て!!　そんな魔物(モノ)を持って何処に行く気だ!!」

「あ、すいません。ギルドの依頼で魔物を討伐したまでは良かったんですが、証明部位を切り離す事が出来なかったんで魔物ごと持って来ました。」

「切り離せなかっただと!?

そんな馬鹿な、俺が試してみよう。俺はこれでも剣の腕には自信があるんだ!!」

衛兵は剣を振りかぶって魔物に剣を突き刺そうとしたが、切っ先が割れただけで魔物には傷一つ付けられなかった。

「本当だ、びくともしない。」

「わかったでしょ?街に入る事を許可してもらえませんか?」

「ううむ、仕方ない。念のため俺がギルドまで同行するとしよう。」

「分かりました。」

衛兵を先頭にギルドに向かう途中も街の住人から奇異の目で見られ続けた。

「お〜いローラ!ロックレイル討伐してきたぞーーー!!」

魔物の身体の大きさからギルドには入れないことを確認した俺は外

から大声でローラを呼び寄せた。

「ミコトさん、恥ずかしいですから大声で呼ばないで下さいよ。いつもの様に窓口に来て・・・。」

「ん？ローラ、どうした？」

「・・・ミコトさん、コレなんですか？」

「何って、討伐依頼の対象のロックレイルだけど？」

「私が言ってるのは何故魔物ごと持ってきたかということですよ！！！」

「しょうがないだろ、証明部位を切り離す事が出来なかったんだから。」

「え！？こうズバッと切れなかったんですか？　そういえばミコトさんの剣は？」

「此処にあるけど、コイツを倒した時に根元から砕け散ってしまってな残っているのは柄だけだ。」

そう言いながら、何故か捨てられなかった剣を道具袋から取り出しローラに見せる。

「柄を残して、ここまで木っ端微塵に砕け散るものなんですか！？」

俺はロックレイルを倒した後、どんな武器を使っても証明部位が切り取る事が出来なかった事をローラに話してみたところ・・・。

「ロックレイルという魔物は本来、このような場所に生息する魔物ではないんです。」

「つまりはマルベリアで討伐対象になったのは此れが初めてというわけか？」

「はい。恥ずかしながら・・・。」

「それじゃあ、この魔物に対抗できる武器は存在しないのか？」

「余程の大剣か、もしくは高威力の魔法なら倒せると聞いた事があります。」
「じゃあ、俺が持っている大剣なら斬る事が出来るかもしれないな。ちょっと待っててくれるか？」
ギルド前でローラを待たせた俺は急いで宿の部屋へと足を運んだ。
「この剣なら難なく討伐できたかもしれないな。」
俺は壁に立てかけてあった大剣を背中に担ぐとギルド前へと戻った。
「それはレイドンさんの店に古くから置いてある剣ですね！？」
「そうだ、これなら！！」
言い終わる前に目の前の魔物の死体に向かって振りかぶると一気に振り下ろした。
広場に土煙が上がった後、魔物を見ると綺麗に両断されていた。
「やはり、この剣なら討伐できたが、狭い洞窟内では不利な武器だな。」
「昔、私が別の国に住んでいた頃の話によれば、今は希少生物として指定されているドラゴンの鱗を材料にした剣ならば、どんなに固い物であっても難なく切り伏せることができると聞いたことがあります。」
「ドラゴンの鱗か・・・。手に入れられれば最強の武器が手に入るな。」
「かといって、ドラゴンを狩ってはいけませんよ。まぁ、歩いていける場所にはいませんが・・・。」

ハイドさんに聞けば何か情報が手に入るかな。

「っと忘れてました。これが討伐報酬の銀貨４０枚です、お受け取りください。」

報酬を受け取った俺は直ぐにでもレイドンの店に行きたい気分だったが、ロックレイルの死体をそのまま街中に置いておく訳には行かず、町の衛兵に許可を貰って裏門から山へと入りロックレイルの死体を山へと捨ててきた。帰ってくると既に辺りは真っ暗になっていたため、宿屋へと戻った。

翌日、疲労のためか昼過ぎに目が醒めた俺は朝食（昼食?）も取らずに武器防具屋へ足を運んだ。

「おっ?この前、エミリア嬢ちゃんと一緒に来た兄ちゃんじゃねえか。今日はどうした?」

「この前、売ってもらった剣なんだが根元で砕けてしまってな。それの代わりの剣と特殊な武器の情報が欲しいんだ。」

“折れた”なら分かるが“砕けた”とは・・・。いったい何と戦ったんだ?」

「ロックレイルって言う魔物なんだけど。」

「よくアレを剣で倒せたな。普通は魔法で倒す魔物だぞ?」

「剣を魔物の口の中に突き刺して殺したと同時に剣も砕けたんだ。」

「無茶しやがる!」

それから俺はハイドさんと話をしながら、店にある武器を片っ端から手に取って見ていった。

第１３話　白銀の剣

只管に武器を選び始めて数十分が経過した頃、武器防具屋にエミリアが現れた。

「あっミコト～久しぶりね。元気だった？」
「おぅ嬢ちゃん、仕事サボって兄ちゃんに会いにきたのか？」
「人聞きの悪いこと言わないでよ！今日は私の休日よ。ギルドに寄ってローラと話してたら、ミコトが剣を折ったって聞いたから此処だろうと思って来て見たら案の定だったわ。」
「折れたじゃなくて砕けたんだけどね。」
「お？そういや兄ちゃん、何か聞きたいことがあるって言ってたな。何が聞きたいんだ？」
「その事の方が重要だった。なぁハイドさん、ドラゴンの鱗で作られた剣って手に入らないかな？」
「ドラゴンの鱗か。いくら何でも簡単には手に入らねえな。俺もここ数年は見たことが無えし。」
「ねぇハイドさん、商業都市のガルデアなら手に入るんじゃない？」
「いや、あの街も最近はキナ臭い噂で持ちきりだしな。極力、近づかない方が身のためだ。」

商業都市ガルデア？商業って名が付くくらいだから品物には期待できるかな？

「その商業都市ってどんな場所なんだ？」
「商業都市ガルデアはこの国の領土ギリギリに位置する街で内外から数多くの品物が集まる、言うならば巨大な市場のような場所ね。」

さすがに地図無しでは辿りつくのは不可能に近いな・・・ガルデア

行きの護衛依頼がギルドに張り出されるのを待つか。

「兄ちゃん、言うのを忘れていたが竜の鱗で作られた武器は滅多に手に入らない事から洒落にならない値段がついていることが多いんだ。ただ・・・ガルデアに行っても売っているかどうかは不明だがな。」

「一番安い剣で銀貨何枚か分かりますか？」

「銀貨？とんでもない、最低でも金貨１枚は必要になるぞ！」

金貨１枚といえば銀貨１００枚と同等だったな・・・俺の所持金は銀行に預けてある金と合わせても銀貨９０数枚がやっとだ。

「鱗で作られた装備品が強力だって事からドラゴンの保護が各国で始まったわけでもあるんだがな。」

手に入れたいのは山々だが、剣一本に最低でも金貨１枚というのは流石に勿体無いな・・・。

「探すのが難しいですし、手に入れるのは見送ります。」

「それがいい。兄ちゃんほどの腕なら、普通の剣でも十分すぎるほど強いだろうしな。」

「と言う事で強力な剣を一本見繕ってくれませんか？」

「う～ん・・・俺の店に今ある剣の中で一番強力な物か難しいな。」

レイドンと話しながら店内を隈なく見回していると一本だけやたらと目を引く銀色の剣に目が留まった

『この剣は一体・・・どうしてこんなに引き寄せられるんだろう？』

何故か他の剣には興味が持てず、無性にこの剣が欲しくなった。

「ハイドさん！　この剣幾らですか？」

「兄ちゃん相手だから安くしてやりてえんだが、俺の生活もあるからな。銀貨３０枚でどうだ？」
「銀貨３０！？　ちょっとハイドさん！ボッタクリじゃないの！？」
「嬢ちゃん、人聞きの悪いこと言わないでくれよ。」

ハイドさんとエミリアは何故か俺の事で言い争いをしているが俺は銀貨３０枚を手にして買おうか買うまいか只管（ひたすら）に悩み続けていた。
『ああーー！どうしようかな。ハイドさんが言ったとおり、この店一番である事には剣の雰囲気で間違いないんだろうけど・・・通常の剣の約１０倍の値段だもんな。』
極度の優柔不断である俺が考えること十数分、結果導き出された答えは他の冒険者に買われる位なら思い切って購入しようというものだった。

「決めましたハイドさん！その剣、買います！！」
「ちょっとちょっと良いの！？銀貨３０枚だよ！？」
「おい嬢ちゃん、商売の邪魔はしないでくれよ。兄ちゃん、再度確認するが本当に買うんだよな？」
「はい。」

そう言って俺はハイドさんに銀貨３０枚を手渡した。

「ようし商談成立だ！はいよ、剣を受け取りな。」

俺は剣を受け取るとすぐ腰に装備した。

「ちょっとハイドさん、あの剣何処から盗んできたのよ？」
「嬢ちゃん・・・嫌な事でもあったのか？さっきから酷え毒舌振りじゃねえか。まあいい、この剣は今から約5年前だったかな俺の店に来た貴族が『我が家に代々伝わる剣を買い取って欲しい』って言

って来てな『それほど大事な剣なら売らねえ方が良いんじゃないですか?』と一応断ったんだが、どうしても纏まった金が必要だとかで、他の剣や鎧など一式を持ち込んできたんだよ。」

「よく5年も売れ残ってたわね。」

「この剣が持ち主を選んでいるのか、今までに購入した冒険者が悉く怪我を負っているとかで怖くなって直ぐに手放してしまうんだよ。」

「その剣って呪われてるんじゃないの!?」

「俺もそう思って調べてもらったんだが異常は見当たらなかったんだ。それどころか、寧ろ神聖な響きのある剣だと鑑定されたんだ。」

持ち主が不幸になる剣か・・・俺は怪我をしても直ぐに回復するから関係はないけどな。

そう思いながら俺は買ったばかりの剣の柄を握り締めた時、不思議な声が何処からともなく聞こえてきた。

(やっと逢えたね。待ってたよ・・・)

「誰だ!!」

「どうしたのミコト?突然大声だして。」

「今、誰か俺に話しかけなかったか?」

「私はハイドさんに夢中になってたから気づかなかったな。ハイドさんは何か聞こえた?」

「俺も何にも聞こえなかったが、空耳じゃねえのか?此処には俺達以外、誰も居ねえぜ?」

そうだよなぁ~この店の中には俺とエミリアとハイドさんの3人以外誰も客は居ないし、街の通りには沢山の人が歩いているものの話し声は何一つ聞き取れはしなかった。

「ミコト疲れてるんじゃないの?今日は早めに宿で休んだら?」

「それがいい、冒険者にとって疲れは禁物だぞ！おとなしく休んでいろ！」

やっぱり疲れてるのかな・・・幻聴が聞こえる事自体が異状だもんな。

「それじゃあ宿屋に戻る事にするよ。この剣、あり難く使わせてもらうよ。」

まだ空は明るいが、俺はハイドさんとエミリアに手を振り宿屋への道をゆっくりと歩いていった。

第１４話　夢の中で・・・（前書き）

この話から、ほんの少しだけ流れが変わります。

第１４話　夢の中で・・・

武器防具屋から戻ってくると、宿屋と併設して建てられている酒場で客を捌いているレインに話しかけられた。

「おや？昼過ぎまで寝ていたと思ったら、御飯も食べずに何処に出かけていたんだい？」

「ちょっと討伐依頼で剣を折ってしまって武器屋に買いに行ってました。どれにしようか迷ってしまって今まで掛かってしまいましたが。」

「少し早いけど御飯食べていくかい？」

「お願いします。」

時刻は夕方にもなっていない頃だったが朝から何も食べてなかったため、少し早めの晩御飯になった。

その夜、宿屋の自室にて・・・。

「腹が減っていたとはいえ、流石に食べ過ぎたな。」

宿泊費に含まれる食事では飽き足らず、酒場で更に食べ続けた結果、満腹で動けなくなった。

「それにしても武器屋で聞こえた声は本当に空耳だったのかな？」

ベッドに横になりながら買ったばかりの剣を握って考えていると突然、強烈な睡魔に襲われた。

気を失うように眠り、夢の中に誘(いざな)われた俺は信じられないものを見ていた。

なんと宿屋のベッドで眠りに就いたはずが目を開けると異世界に来

る前に住んでいた自分の部屋のベッドに寝転んでいた。

「此処は・・・俺の部屋か。俺は現実世界に戻ってきたのか？」

当然、両親は既に他界して返事をしてくれる者は居ない筈なのだが・・・。

「ううん違うよ。ここはマスターの夢の中だよ。」

「誰だ！？」

俺が部屋の隅にある勉強机に目を向けると真っ白な服を見につけた少女が椅子に座っていた。

「へぇ～此処に住んでいたんですね。結構いい世界じゃないですか」

両親が生きていた頃は父さん、母さん、俺の３人暮らしで妹なんて居なかった筈だ。

そう考えると、この少女は何者だ？　真っ白な服に銀髪の少女。パッと見ではまるで幽霊・・・

「マスターって失礼ですね、私は幽霊なんかじゃありません！！」

「あれ？俺、声出してた？」

「最初に言いましたよ？此処はマスターの夢の中、言葉に出さなくても心の中で会話できるんです。」

「お前は誰だ？　マスターとは何だ？」

「一度に疑問を投げつけてこないでください！順番に答えますから。まずは私が誰かですが、私はマスターが購入した剣に宿りし精霊、名前はマスターが決めてくださいね。」

「精霊？それじゃあ武器屋で買った白銀の剣にお前が宿っていたと言うわけか？」

「そうですよ。　他の人とは波長が合わなくて傷つけちゃったけど、

マスターなら大丈夫みたい。」
「武器屋で聞こえた声って・・・。」
「あれ、聞こえたんだ!?　精霊の声って普通は聞こえないものなんだよ?」
「今、会話してるけど?」
「此処は私が力を使ってマスターを呼び寄せたからだよ。でも、ちょっと待って・・・夢の中以外で会話が出来るという事はマスターって剣士なのに魔力持ってるって事になるんだけど。」

俺は剣士ではなかったのか?　それとも、オールラウンダーって奴か?

「じゃあ今までの持ち主とも夢の中で会話してたって事?」
「ううん・・・さっきも言ったけど、波長が合わなければ夢の世界に呼ぶことも出来ないからマスターと顔を合わせて喋ったのは此れが初めてだよ。　ところでマスター、ちょっとゴメンね。」

そう言うと自称:剣の精霊は俺の手を握り締めると指先に口付けをした。

「やっぱり、マスターって魔力持ってるよ。ただ微量しか感じられないから魔法は使えないけどね。」

それじゃ、ファンタジーに出てくるような魔法剣士にはなれないか・・・。

「でも此れだけ波長が合う人も珍しいから、夢の中以外でも会話できるかもしれないね。」
「どうすればいいんだ?」
「目が醒めたら剣の柄を握って話しかけてみて。　言葉に出さなく

ても心の中で思うだけで会話できるから・・・剣を握って独り言を言ってたら、危ない人になっちゃうよ？」

剣を握って心で会話か・・・。

「剣を握ってる時しか会話できないけど、私は何時も聞こえているから聞きたいことがあったら遠慮なく聞いてね。　あともう一つ、今日みたいに剣の柄に手を置きながら寝ると、この場所に来られるように設定しておいたから是非、活用してね。」

なるほど、そういえば握ったままだったな。

「分かった。これからも宜しくな」

「はい、お願いしますね。マスターの夢を通してマスターのもと居た世界の情報を、取り込ませてもらいましたから、分からない事があったら何時でも私に聞いてくださいね。」

「分かった。頼りにしてるぞ精霊。」

今度、此処に来る時までに名前を決めておかないとな・・・

何時までも“精霊”じゃ可哀想だし。

そう考えていると、剣の精霊の顔が見る見るうちに赤く染まっていった。

「マスター、いい名前を期待してますね。そろそろお目覚めの時間です、さぁ起きてください。」

そうか、考えるだけで会話になってしまうんだったな・・・。

夢の中で起こされるという、訳の分からない出来事から数分後、目が醒めると俺の部屋ではなく元の宿屋のベッドの上に寝ていた。

手には鞘に納まった状態の剣の柄をしっかりと握り締めていた。

夢で言われたとおり、柄を握りなおして心の中で会話する。

（剣の精霊、聞こえるか？）

（おはようございますマスター、よく聞こえます。私の言葉も聞こえていますか？）

（ああ、問題ないようだな。）

（マスター、廊下から昨日のレインさんという方の気配を感じます。）

（そんな事まで分かるのか。）

会話をしていると不意にドアをノックされた。

「ミコト起きてるかい？朝ご飯出来てるから降りといで！」

精霊の言ったとおり、レインさんが呼びにきた。

御飯を食べながら聞いてみると宿代を前金で貰ってるので食事を食べないと勿体無いという事らしい。

第１４話　夢の中で・・・（後書き）

精霊との会話は（）で記載していきたいと思います。

第１５話　不正行為

一泊二食銅貨５枚に含まれる食事を抜いてしまうと勿体無いという理由からレインさんに叩き起こされた俺は朝食後、ギルドにて依頼探しをしていた。

「今日はどんな依頼があるのかなっと。」

採取依頼はランクが低く、経験値にならないため上級討伐依頼の掲示板を舐めるように眺めていると２人組の冒険者が討伐の証明部位であろう、鳥の嘴（くちばし）のようなものをローラに見せていた。

「どうだ？Ａ級討伐依頼のテラホークを討伐して来たぜ！！此れが証明部位の嘴だ。」

俺の周りには冒険者がいないため、剣の柄を握って精霊と会話する事にした。

（前から思ってたけど、良くあれだけの物でローラは判別する事が出来るよな。）

（それほどローラさんが優れていると言う事でしょうが・・・。マスター、あの嘴はテラホークの物ではありませんね、よく似ていますがアレはレインコールという大人しい魔物の嘴です。）

『精霊も詳しい事を知っているな』と感心していたが直ぐに教えなければと思った。

（それなら直ぐにローラに知らせないと・・・。）

（いえ、マスター。ローラさんはどうやら気が付いてるみたいです

よ？　それにマスターがそんな事を言えば、何処で誰に教えられたのか徹底的に追求されますよ？）

それは困る・・・。精霊から聞いたなんて言えるはず無いからな。精霊に言われ、考えながらローラの方に顔を向けると何故か小刻みに震えていた。

「ちょっとあんた達！！此れの何処がテラホークの嘴なのよ！！ふざけるのも大概にしてよね。」

「なんだと！？何処からどう見てもテラホークじゃねえか？」

ローラも負けじと冒険者相手に喧嘩腰で言い争いを始めた。

「素人目には分からないでしょうがね、テラホークの嘴は先端部が極一部分だけ赤いのよ！？この嘴をみなさいよ、端から端まで全部真っ黄色じゃない！」

「なんだと！？この野郎！！」

2人組の冒険者の一人はローラを睨みつけているが、もう片方はあきらめたのかガックリと項垂れていた。

（なぁ、ローラの言っている事の方が正しいのか？）

（そうです、流石ですねローラさんは。それに引き換え、あの男は往生際が悪いですね。）

再び男達の方に目を遣ると、喧嘩腰でローラに詰め寄っている男の片割れが必死に相棒を宥めていた。

「もうやめとけ！その姉ちゃんの言ってる事は正しいだろうが、俺達がズルをしたんだ・・・諦めろ！」

「ちくしょう！上手く行くと思ったんだがなぁ」
「テラホークの討伐期限は残り1日ありますが、たった1日では街から討伐場所までの往復は無理なので任務に失敗したとみなし、罰金として銀貨3枚を徴収いたします。」
男は渋々、腰の袋から銀貨3枚を取り出しローラへと手渡した。
「どうすんだよ！？宿に泊まる金も残って無えじゃねえか！！」
「それも此れも、お前が小細工をした所為だろうが反省しろ！！」
男達は口喧嘩しながら時には殴り合い、街の奥へと消えていった・・・。
俺は依頼探しを一時中断しローラに話しかけた。
「ローラ、見ていたぞ。よく判別できたな」
「え！？ミコトさん、見ていたんですか？恥ずかしいです。」
精霊に教えられ、何の嘴だったか知っているが敢えて聞いてみることにした。
「そういえば、さっきの嘴だけどテラホークの物じゃなければ何の嘴だったんだ？」
ローラは一呼吸置かずに直ぐに答えてくれた。まるで頭の中に全ての知識が詰まっているかのように。
「この嘴はレインコールという魔物の物です。魔物にしては大人しい性格で滅多な事では討伐対象にはならないんですよ。見た目も綺麗で観賞用のペットにする貴族も多いと聞きます。」
「そうなんだ・・・。」

精霊に聞いた事と殆んど同じ答えが帰って来たことに吃驚していた。

（マスターって、性格が少し悪くないですか？私の事を信用してくれなかったんですね。）

（そんなつもりはないよ。ローラが答えられるか試しただけだから）

（冗談ですよ。マスターの思考を読んで全て分かってましたから）

（お前の性格のほうが悪くないか？）

（ほんの少しだけですけどね。　あ、マスター無意識だとは思いますが、考え事をするなら剣を触らないほうがいいですよ、丸聞こえになっちゃいますから。）

言われて初めて気が付いた。無意識ながら剣の柄に肘を置いた腕組みの状態で壁に寄りかかっていた。

「ミコトさん？どうしたんですか急に黙り込んじゃって。」

「い、いや～～ローラの知識の凄さに吃驚してただけだから。」

「私はギルドで働き始めてから１０年近く経過してますから、今現在確認されている魔物のことは全て頭の中に入っているんですよ。」

「ローラは凄いんだね。尊敬してしまうよ」

そう言いながら俺はローラの頭を撫でると、途端に顔が真っ赤に染まり倒れるように机へと突っ伏してしまった。

ローラも仕事で疲れているんだな・・・。無理をしなければいいけど。

そう思いながら俺は掲示板の場所へと依頼を探しに戻った。

その頃、剣の中にいる精霊はと言うと・・・

（マスターって天然なのか鈍感なのか、ローラさんが可哀想に思えてきたわ。）

「えへへぇ～～～～～ミコトさ～ん。」

ギルドの窓口には他の冒険者から不気味がられる終始笑顔なローラが見受けられたという。

第１５話　不正行為（後書き）

ミコトの鈍感さ（？）が明らかに・・・

第１６話　山賊に襲われた村（前書き）

本当は昨日、更新する予定だったのですが色々と忙しく・・・。

第１６話　山賊に襲われた村

何故か窓口で赤面してしまったローラを置いといて、掲示板で依頼探しを再開していた。

「えっと、Ｂ級討伐依頼：ディル村跡地でのビッグバットの討伐。ビッグバットが何かは知らないが此れを受けてみようか。」

掲示板から依頼書を剥がそうと手を伸ばしたが、更にその上にはＡ級討伐依頼が貼り付けてあった。

「どうせ依頼を受けるなら、Ｂ級よりＡ級の依頼のほうが得だよな！」

俺は討伐の内容もよく見ずに、依頼書を壁から剥がしてしまった。改めて依頼書を見てみると聞き覚えの無い言葉が其処には記されていた。

継続Ａ級討伐依頼：リュナイト５体の討伐　期間は１０日間
リュナイト５体討伐で依頼書一枚分になります。
１０体討伐すればＡ級依頼を２回受けたのと同じ扱いとなります。
報酬は１体につき銀貨２枚。ディル村より南方に３０エルトほど、進んだ所にある森で目撃情報あり。
エルト？聞いたことの無い言葉だ・・・精霊に聞いて見るか。

（なぁエルトって何のことを示しているんだ？）
（エルトとはマスターの世界で言うｋｍの事です。ちなみにエトだとｍになります。）
（という事はディル村から南に３０ｋｍ進んだ場所にある、森で討

伐という事か。）

（そうです。ついでにリュナイトとは頭部が蜥蜴で首から下が人間という亜人のような魔物です。）

（それだと、まるでリザードマンだな。）

（マスター、よく知ってますね。リュナイトの上級ランクの魔物がリザードマンと呼ばれています。）

（分かった、ありがとうな。）

剣の柄から手を離し、精霊との会話を切って未だにローラが突っ伏している窓口へと依頼書を持っていった。

「ローラ？ローラ！！」

「は、はひ！ど、どうひたんでふかミコトしゃん？」

余程慌てていたのか、呂律が回らない口で返事をしてくれた。

さらにローラの後方では他のギルド職員が口を手で押さえ必死になって、笑うのを我慢していた。

「この依頼を受けたいんだけど・・・。どうした？」

「いえ、なんでもありません。リュナイトの討伐ですね、頑張ってください。」

俺はローラに一礼し精霊から魔物情報を聞いていたが魔物図鑑で確かめる事にした。

「えっと、確か人型の魔物だって言ってたな。おっ、あったあった。」

図鑑の頁によれば、精霊が言ったとおり頭部は蜥蜴で胴体部分は細かい鱗が体表面にびっしりと張り巡らせている魔物。いうなれば地

面を這い蹲って移動している蜥蜴を立たせた様な形状をしている。
注意点として手の指先にある鋭い爪に毒があるため毒消しが必要不可欠とのこと。
討伐証明部位は口の付け根に生えている黒くて鋭い牙か・・・。

「お、補足が書いてあるな。『討伐に失敗した冒険者から剣を奪って其れで攻撃する種も居る』！？」

剣を持って戦うほどの知識がある奴もいるのか・・・。厄介だな
今回も森の中での戦闘と言う事で大剣はまたしても出番は無く宿の部屋で留守番という事になった。

（さて行くぞ。お前の威力、当てにしてるからな。）
（マスターに期待される日がやっと・・・。うわ～～～ん！！）

剣に泣かれる（？）という不思議体験をしながら、俺はディル村への道を歩き始めた。
時間短縮のために全力で走りたかったのだが視界の端には同業者だろうか？剣や槍といった武器を装備している輩がやたらと目に付いていた。

「これじゃあ、走れないじゃないか。しょうがない、ゆっくりと歩いて行くか。」

マルベリアを出発してから凡そ4時間後、ディル村へとたどり着いた。
途中誰も周りに居ない事を確認して走ったり歩いたりを繰り返した結果、早めの到着となった。

（マスターって足が速いのですね～～。吃驚しました）

足が速いで済まされるスピードではないと思うが・・・。

（よく分からないんだが、この世界に来たと同時に身体能力が上昇したみたいだ。）

（それにしても変なんですよね？）

（何が変なんだ？）

（昨日の夢の中でマスターの魔力を計測した時には極微量しか感じられ無かったのですが、先程走っていた時には一瞬ながら膨大な魔力を感じ取ったんです。）

（俺に魔力が少ないといったのは精霊だろ？別の誰かの魔力を感じ取ったんじゃないのか？）

（そうなんでしょうか？とても身近で感じたような気がしたんですが・・・。）

そうこう話している間に、ディル村であった町の門へと辿りついた。

（マスター、ディル村に到着しましたね。ここは交易品として織物や装飾品が有名なんですよ。）

（そうか・・・。いや、そうだったのか。）

（なぜ過去形なんですか？いまでも発展している筈ですよ～～～）

精霊はまだ知らないのか、既にディル村が存在していない事に・・・。

俺がディル村に立ち寄ると、剣の精霊は息を呑むように静かになり悲しげな声を出していた。

地面を埋め尽くすほどの簡単な造りの墓が立ち並び、街の置くには寂れた小屋が一軒建っていた。

よく見てみると、その小屋には灯りが灯されており手書きで書かれたであろう『宿屋』という文字が壁に大きく描かれていた。

「まさか!?誰か居るのか?」

独り言を呟いたあと、確かめるかのように『宿屋』に飛び込むと・・・。

「あ、いらっしゃいませ!」

俺より少しだけ若い少年が宿屋のカウンターに佇んでいた。歳で言えば14、5といったところか。

「お一人様ですか?一泊二食で銅貨4枚になりますが構いませんか?」

「ちょっと待ってくれ!!」

「はい?」

「この村は山賊に襲われて壊滅し、生き残りはいないと聞いていたのだが?」

「はい・・・。たまたま村を離れていた僕は助かったのですが、帰ってきて村の有様を見て警護の騎士様に話を聞くと5人組の山賊に村を襲撃され住民は全員殺されたと聞きました。父も母も生まれたばかりの妹ですら惨殺されたと。」

俺がこの村に来た時には既に手遅れだった状態だったからな。俺がもう少し早く到着していれば・・・

「其処で唯一焼け残ったこの小屋で商売してディル村を元通りの活気溢れる村に再建しようと頑張っています。それにしても、お客さん珍しい髪と目の色をしてますね漆黒だなんて。そういえば、確か騎士様が話してくださった、山賊を退治してくれた方も黒い髪で黒い目をした方だと・・・・・!?」

気づいたかな?まあ、こんな目立つ髪をしておいて気づかない方がおかしいが。

「あ、貴方が騎士様が言っていた方なんですね!?」

「そうだ。すまない、俺がもう少し早くこの村に到着していれば助けれたかも知れないのに・・・。」

「謝らないで下さい。僕は嬉しいんです、家族の仇を取ってくれた方に出会えた事に。」

その後、宿屋の少年と話をしながら1日目は新ディル村での一泊となった。

第１７話　剣の精霊の名

その日は深夜に及ぶまで店主の少年と話しこみ、倒れたかのようにベッドで眠ると夢の中へ誘われた。

（ん？ここは俺の部屋・・・。ということは、精霊が呼んだんだな。）

（ご名答ですマスター。ディル村は大変な事になってますが、生き残った方が居てよかったです。）

（この村に来た事があるのか？）

（はい。といっても剣が梱包された箱の中から見てただけなんですけどね。）

（そうなんだ。ところで精霊の名前なんだがルゥなんてどうだ？）

（ルゥですか・・・。）

俺の前に立っていた精霊の目から涙が零れていた。

（き、気に入らないなら別の名前を考えるから泣かないでくれよ。）

（いえ、気に入らないわけじゃないんです。寧ろ、嬉しくて・・・。）

（嬉しいという事は気に入ってくれたのか？）

（はい。前のマスターと別れて１００年、新たなマスターに出会えて名前までつけて頂けるだなんて、とても嬉しいです。）

（１００年も待っていたんだね。今後とも宜しくな、ルゥ）

（はい。マスター、そろそろ朝ですよ。今日も１日頑張りましょう。）

ルゥに夢の中で起こされた俺は村の井戸から汲み上げた冷たい水で顔を洗い宿の食堂へと足を運んだ。

「ミコトさん、おはようございます。直ぐに食事の支度をしますので少しお待ち下さい。」

椅子に座り待ち時間でルゥと会話していると美味しそうな匂いが漂ってきた。

「お待たせしました。粗末な食事しか出せませんが、味には絶対の自信を持っているので・・・。」

少年が盆において持ってきた物は2個の胚芽パンと温かいスープに、何か分からない緑色の冷たい飲み物だった。飲み物は直感的に青汁を思わせるようなドロッとした緑色で草の匂いが漂っていた。

「う、美味そうだな。頂かせてもらうよ」

「スープはお替りもありますから好きなだけ召し上がってください。」

最初にスープを飲んだが少年が自慢したとおりマルベリアの食事よりも断然美味だった。胚芽パンは現代のパンのようなモチモチ感はなく、飲み込むのに苦労したがスープに浸しながら食べる事にした。さて問題はこの青汁(のようなもの)なんだが匂いはまさに草だったものの、飲んでみるとかなり美味しかった。スープに至っては2回ほどお替りをした。

「ご馳走様、美味しかったよ。　ところで、この緑色の飲み物は何だったんだ?」

「これですか?これは薬草とこの村特産である野菜を磨り潰して作った滋養効果のある薬湯です。」

食事後、部屋で休憩していた俺は依頼を果たそうと宿屋を出る事にした。
道具袋から銅貨４枚を取り出し少年の前に置いたのだが・・・。

「そんな、恩人であるミコトさんからお金を受け取れません！これはお返しします。」
「いや受け取ってくれ。それに、ディル村を再建したいのだろう？」
「いや、でも・・・・。」

俺は無理矢理にでも少年に銅貨４枚を握らせると、隙をついて宿屋の外へと足を進めた。

「ミコトさん！！あれ？いない・・・。」

外に出た直後、宿屋の屋根に飛び乗り少年の様子を見てみると。

「ミコトさん、本当にありがとうございます。」

そう言って少年は小屋の中へと姿を消した。
俺は少年をやり過ごしたあと、屋根から飛び降り町の外へと歩き出した。
宿の少年にうしろ姿を見送られながら・・・。

「さて、村の門から南に３０エルトだったな。」

当然、方位磁石などをミコトが持っているはずも無く、剣の柄に手を置いてルゥに聞いてみることにした。

（ルゥ、南ってどっちだ？）
（村の門を背にして、左に４５度ほど傾いてください。）

（こっちか？分かった。）
（目の前に見えている山脈の、麓の森が討伐対象の生息する場所です。）

その後、ルゥと色々な世間話をしながら山へと向かって歩き出した。
途中、いつかの討伐対象だったワイルドウルフ数匹に草原の真ん中で襲撃にあったが、逸早く魔物の気配に気づいたルゥに教えられた事によって返り討ちにしてきた。ルゥの宿った剣を振るっていて気が付いた事は切れ味が凄まじい事だった。
例えるならば、箸で豆腐を切るかのごとく何の抵抗も無くスパッと切り伏せる事が出来た。

（ルゥの切れ味は凄いな、面白いほどに良く斬れる。）
（それはそうですよ、私はマスターの探してた竜の鱗で作られた剣よりも威力が上なんですよ？）
（だが、値段はあの剣の方が上だろ？」
（マスター！剣の値段＝剣の強さじゃありませんから。あの剣は竜の鱗という希少価値のある物質を材料に使っているから、あんな値段が付いただけなんですよ！！）
（分かった、分かった・・・・・フゥ。）
（マスターちゃんと聞いてますか？私の言いたい事はですね、剣の見かけに騙されずに剣の本質で買わないといけないという事で・・・）

俺はルゥに気づかれないように、そ～っと柄から手を離し会話を中断した。

「ルゥにも困ったものだ、だがガルデリアに行って買ってたら損をする所だったな。其処はルゥに感謝だな。」

独り言を言いながら、早足であっという間に３０エルトを進み森へと辿りついた。
魔物の気配をルゥに察知してもらおうと剣の柄に手を触れたことが後悔の始まりだった。
剣の柄に触れた直後、ルゥから怒鳴られてしまった。

（マスター！私の話を一つも聞いていませんでしたね！？）

その後、俺とのリンクが何時の間にか切れていたことに気が付いたルゥから更なる説教を喰らったのは言うまでも無かった。

第17話　剣の精霊の名（後書き）

ご感想・ご意見・ご批評などをお待ちしています。

第１８話　身体の異変（前書き）

アクセスＰＶが２０万突破し、ユニークアクセスも４万を突破しました！！

読んでくれている読者の皆様方、ありがとうございます。

第１８話　身体の異変

森に到着して凡そ2時間が経過したが出会うのは低ランクの魔物ばかりでリュナイトには一向に遭遇しないどころか気配さえ感じ取る事は出来なかった。

「この森で間違いないと思うんだけど、どう思うルゥ？」
（・・・・・・）
（ルゥってば！）
（知りません！！）

森に入るまでの事を未だに根に持っているのか俺に対し冷たくあしらわれている。

（ルゥ、もう機嫌直してくれよ。悪かったってば）
（ずっと寂しかったんですよ～～　マスターのバカァーー！！）

ルゥを必死に宥め、ようやく仲直りする事ができた。

（でルゥ、魔物の気配は感じ取れるか？）
（ちょっと待ってください・・・。1、2、3いや、もっと居ますね。マスター此処から真っ直ぐに３００エト進んだ先にある湖に、少なくても１０体の魔物の気配を感知しました。）
（分かった。静かに近づくぞ・・・。）

周りの状況と足元を注意しながら歩く事、凡そ１０分。ようやくルゥの言っていた湖の畔に近づくと、推定で２０体以上のリュナイトの群れが騒いでいる事が確認できた。

「あいつ等、何をしてるんだ？」

もう少し近づいて様子を見ようと足を前に出したと同時にルゥからの念話が届いた。

（マ、マスター！？　足元に注意してください！！）

俺はその声に気づくのが遅れ、一歩踏み出した右足で勢いよく木の枝を踏みつけてしまった。

『パキンッ！』

俺は直ぐに『しまった！』と思うが時既に遅く、騒いでいた魔物の目が全て俺に向けられた。

魔物のうちの数体が俺に聞き取れない言語で喋り、群れの内の3体が森の奥へと素早く姿を消した。

残りの魔物が一斉に俺の方へと襲い掛かってきた。

俺は一呼吸置いた後、剣を構え魔物を切り刻んでいく・・・。

幾ら人型とはいえ、あくまで魔物であって人間ではないので躊躇なく魔物の身体に剣を突き立て、命を奪っていく。ある魔物は肩から腹にかけて袈裟切りに2等分され、またある魔物は頭の先から股まで両断され身体が左右別の方向に倒れていく。

戦い始めて2時間後には、その場に両足で立っているのは俺だけになり、後は地面に突っ伏しているリュナイトの惨殺死体が転がっているだけだった。

（お疲れ様ですマスター。此れだけの数の魔物を相手に無傷だなんて凄いです！）

（この程度の魔物ならどうということはない。）

本当は二の腕などを鋭利な爪で何度か切り裂かれていたが瞬時に回復し傷跡は残らなかった。

（マスター、また膨大な魔力を一瞬だけ感じたのですが。）
（何か強力な魔物が、この近くに居るというのか！？）
（いえ、邪悪な気配は感じませんでした。寧ろ、神聖な雰囲気が感じられましたが・・・。）
（それはそうと証明部位を狩らないとな。ルゥは魔物の気配がないか調べてくれ！）
（了解しましたマスター）

確かリュナイトの討伐証明部位は黒い牙だったな・・・。
倒したリュナイトの口を見てみると口の付け根に真っ黒な牙が左右に2本確認された。

「どっちの黒い牙かは知らないが両方、持って行く事にするか。」

俺は剣の刃先を利用して牙を一本一本丁寧に抜いていった。
俺も歯医者は苦手な分類に入るため、牙を抜く感触に身震いしながらも迅速に抜いていった。
さて残すところ1体という所で問題が発生した。

（マスター気をつけてください。その魔物はまだ生きてます）
（え！？）

俺は魔物の顎を右手で掴んでいたため反応に遅れ、魔物の死に際の一撃と言わんばかりに右手を噛まれた。魔物は最後の一撃の後、力尽きて息絶えた。

（マ、マスター！？　直ぐに治療を・・・！！）
（大丈夫だ！気にするな。）
（何が大丈夫なんですか！？マスターの手が傷だらけに・・・？）

ルゥの心配を余所に手の傷は瞬く間に消え失せ、あとには傷のない綺麗な手が残った。

（マスターの手、噛まれましたよね？　どうして傷がないんですか！？それに先程マスターから、膨大な魔力の流れが掌に集中しているのを感じ取りました。）

（俺の身体は特殊でな、どんな切り傷を負おうと痛みも感じないし、傷跡も一瞬で跡形もなく治ってしまうんだよ。）

（そんな・・・はっ！ちょっと待ってください、それなら先程の魔力も説明がつきますね。）

（どういうことだ？）

（マスターは普段、微力な魔力しか感じないものの手傷を負ったり、超人的な身体能力を発揮した時には魔力が膨れ上がる。という事はマスター、もと居た世界でも超人的な速度で走れたり飛び上がったりできましたか！？）

（いや回復能力はもと居た世界でもあったが今みたいに一瞬で治るような事はなかったし、身体能力も一般人よりは少しだけ良いぐらいだったな。）

大体が時速１００ｋｍで走れたり垂直飛びで１０ｍなんて飛んでたら、間違いなく実験動物（モルモット）として研究所送りになってしまう。

（やっぱり・・・。）

（だから、何を納得しているんだ！？）

（マスターは魔力のない世界から、魔力が存在するこの世界に渡った事で特殊能力が倍増したと考えられます。普段は魔力は感じないものの、能力を発揮する時だけ膨大するという体質を持っていると考えて間違いないでしょう。）

これで、もしも不老不死なんて付いてたら間違いなく俺は人間ではなくなるな・・・。

（いえ、マスターお言葉ですが此方に来てから今日で何日が経過しましたか？）

会話したつもりは無かったのに、ルゥには考えが筒抜けだったようだ。

（そうだなぁ～今日で大体一ヶ月ちょっと位だと思うけど？　どうしたんだ突然・・・。）

（今日までに髪を切ったり、髭を剃ったりした事は？）

（この世界に足を踏み入れる直前に髭を剃っただけだけど、それが何・・・はっ！？）

何故、一ヶ月も経ってるのに髪が伸びないんだ？

何故、髭が伸びないんだ。

こんな大事な事に今の今まで、ルゥに言われるまで気が付かないなんて・・・。

（どうやら気づかれたようですね。自分の存在に）

（俺は人間ではないのか・・・。）

俺は地面に項垂（うなだ）れていて気が付かなかった・・・森の奥から近づいてくる強大な何者かの存在を。

第１８話　身体の異変（後書き）

次話の更新は金曜日を予定しています。

第１９話　上級種の魔物（前書き）

人外の生物ということで片仮名文字を使用しました。

読みづらい箇所が多々あるとは思いますが、御了承ください。

第１９話　上級種の魔物

俺が地面で項垂れていた時、森の奥深くでは・・・。

「コッチデ間違イナイノカ？」
「＃＄＆@＊＋☆！」
「分カッタ、急グトシヨウ。」
「％＆＃＄@」
「仲間ガ心配カ？　取リ返シノツカナイ事ニ、ナッテナケレバイイガ・・・。」
「＃％’　@：＊！？」
「冗談ダ、気ニスルナ。ソレヨリモ急グゾ！」

そんな事を知らないミコトはと言うと・・・。

「俺は人では無くなったのか！？　俺は一体なんなんだ。」
（マスターがたとえ何であったとしても、私はマスターの剣です。）
「まぁ飛行機事故から生還した時点で普通の人間ではないと思ったが。」
（マスター・・！？　マスター今すぐに後ろに飛んでください！）

ルゥの言葉に疑問を抱く前に反射神経で咄嗟に後方へと身をかわした。
先程まで俺が居た場所には深々と黒光りする剣が突き刺さっていた。

「カワシタカ・・・。」
「何者だ！？」

辺りを見回すが声はすれども姿は見えず、殺気は四方八方から寄せ

られている。

「地面ニ倒レテイル、リュナイト達ヲ倒シタノハ貴様カ？」

謎の声の持ち主の正体は分からなかったが質問に答える事にした。

「そうだ。いきなり襲い掛かられたからな、不可抗力という奴だ。」

俺がそう答えた瞬間、左右と正面から剣を装備したリュナイトが襲い掛かってきた。

「待テ！早マッタ真似ヲスルナ！！」

「「「％＆＃％@＊！！！」」」

「何ダト！？　愚カ者ドモメ！！」

リュナイトが何を喋っているのかは知らないが、3方向から同時に襲えば勝てると過信した、こいつらの負けは確実だ。

俺は剣を構えたまま足を主軸にして独楽のように回転し一撃で3体のリュナイトを仕留めた。

左右から来た2体は喉元を切り裂かれ窒息死、前方から来たリュナイトも剣で串刺しになったあと湖の中央辺りへと弾き飛ばされて水面に緑色の血を流しながら浮いていた。

「ソノ者ノ闘気ヲ感ジ取レバ、勝テナイ事ナド火ヲ見ルヨリ明ラカダロウニ・・・。」

「お前は何者だ！姿を見せろ、この卑怯者！！」

「卑怯者ダト！？　ヨカロウ姿ヲ見セヨウ。」

（ルゥ何処から来るか分かるか？）

（声はするのですが気配がつかめず、何処に居るのかサッパリです。）

俺はキョロキョロと辺りを見回すがリュナイトの死体ばかりで動くものは何処にも存在してなかった。

「何処ヲ見テイル？　我ハ此処ダ。」

声がするのは、唯一探さなかった後方の湖のみ。
恐る恐る振り向くと姿形はリュナイトと変わりないが、明らかに風格が異なる魔物が水面に浮かんでいる死体の上に立っていた。

「此レホドノ数ヲ、呆気ナク倒シテシマウトハナ。」
「魔物が・・・」
「ン？ドウシタ人間？」
「魔物が人の言葉を喋っている!?」
「言葉ガ人間ダケノ物ダト誰ガ決メタ？」
（マスター、あれはリュナイトの上位種であるリザードマンです。リュナイトとは比べ物にならないほどの身体能力を持っているので注意してください。」
「お前がリザードマンだと!?」
「フム、我ノ事ヲ少シハ知ッテイルヨウダナ。」
「リュナイトより強いという事しか知らないさ。」
「ナルホド・・・ココハ一ツ、手合ワセ願オウカ！」

リザードマンはそう言いきると同時に一瞬で俺の横へと移動し、地面に深深と突き刺さっている黒い剣を引き抜き、俺の方へと襲い掛かってきた。

「何だ？仲間を俺に殺された恨みか？」
「恨ミ？マサカ。
アノ者達ガ、オヌシヨリ弱カッタダケノ事、我ハ純粋ニ戦イヲ楽シ

ミタイダケダ。」

俺はリザードマンが持つ剣に打ち込み、体勢を崩したところで勝負に出ようと考えていたが一向に隙は見せず、膠着状態が続いていた。

「多少荒削リダガ、良キ剣戟ヲ持ッテイルナ！」

リザードマンの剣ばかりに目が行っていると、不意をついて尻尾で攻撃してきた。

「守ッテバカリデハ埒ガアカナイゾ？
マァ、相打チ覚悟ナラ勝機ガアルカモシレンガ・・・。」

魔物は剣を上段で振りかぶり止めとばかりに襲い掛かってきた。
俺は敢えて、その攻撃に飛び込み右肩の負傷と引き換えに魔物の左腕を切り離した。

「マサカ、本当ニ相打チ覚悟デ来ルトハ。ダガ、手応エハアッタ此レデ貴様ハ、モウ剣ヲ持テマイ。」
「誰が誰を斬り付けたって？」

俺は上半身に付けていた鎧を外し、無傷の肩をリザードマンに見せる。

「ソンナ、確カニ剣デ切ッタハズ！？　ン！？ナゼ剣ニ血ガ付イテイナイ！！？」
「どうする？まだやるか？」

リザードマンは暫し考えた後、何時の間にか切り離された左腕を右腕で抱えていた。

「ココハ一時、退却スルトシヨウ。」

そう言った瞬間、リザードマンは存在していなかったかのように掻き消えた。

「一ツ忠告シテオコウ。コノ森ニ生息シテイタ『リュナイト』ハ我ガ撤退サセタ。イクラ待ッテモ、此レ以上ノ成果ハ挙ゲラレハシナイゾ！」

その言葉を最後に周囲からは何も聞こえなくなった。

（マスター、リザードマンの言うとおり他のリュナイトの気配が一向に感じ取れません。撤退したものと思われます。）

（そうか。）

俺が剣を鞘に戻そうとするとルゥが慌てて話しかけてきた。

（マスター！幾ら不死身とはいえ、あのような戦い方はお止め下さい。私はもう二度とマスターを失いたくはありません。）

（分かった。すまなかったなルゥ・・・。）

（私に手が合ったら、思いっきり殴っているところですよ！！）

後から現れたリュナイトの牙も採取し、討伐証明部位は全部で４０個集まった。

更に身体の所々がリュナイトの返り血で緑色に染まっていた俺は湖で軽く洗い流し、服が乾いたと同時に森の外へと歩き始めた。

あとには湖の周りに転がっているリュナイトの惨殺死体だけが残されていた。

第１９話　上級種の魔物（後書き）

なんとか予告どおり更新する事ができました。

次話は早くて日曜日、遅くても月曜日までには更新したいと思っています。

第２０話　Ａランクへ昇格（前書き）

お気に入り登録数が５００件を突破しました！！

ありがとうございます。

読者の方々の期待を裏切らないよう、精一杯頑張ります！！

第２０話　Ａランクへ昇格

湖を出発したものの辺りは既に夕暮れを通り越して暗闇に近づいていました。
ルゥと相談した結果、森を出る前に確実に真っ暗闇になるため近くに聳え立っている高い木の枝に飛び上がって木の上で一夜を過ごす事にしました。

（見張りは私に任せてマスターはゆっくりお休み下さい。）
（そうさせてもらうよ。オヤスミ、ルゥ。）

その後、魔物の襲撃はおろか魔物の気配すら森の中からしなかったとルゥに報告を受け、軽く周辺に実っている木の実を朝飯として食した俺は地上から８ｍほどもある木の枝から飛び降り、森を出てマルベリアへと向かった。
平原に出た後はルゥに他の冒険者がいないか気配を察知してもらいながら歩いたり走ったりを繰り返し約４時間後にはマルベリアへと帰還した。
俺はその脚でギルドへと向かい討伐依頼達成の報告をローラに話した。

「ミコトさん、お疲れ様です。早かったんですね。」
「此れが証明部位だ。　黒い牙が２本生えていて、どっちが証明部位か分からなかったから両方取ってきたんだが・・・。」

そう言って歪な形に膨らんだ道具袋をローラの前に広げた。

「こんな沢山のリュナイトを狩って来たんですか！？服もボロボロのようですし苦戦したんですね。」

「いや、これは別の魔物と殺り合ったときに破れたんだ。」

ローラは証明部位の鑑定をしながら声だけで俺と会話していたのだが、次に言った言葉の所為で驚愕の表情を俺に見せた。

「これだけのリュナイトを倒したミコトさんが苦戦した相手ってどんな魔物だったんですか?」

「言葉を話す、リザードマンだったな・・・。」

俺がリザードマンと口にした瞬間に窓口の奥からギルド職員の息を呑む音とローラが悲鳴を上げながら椅子ごと後方に倒れる音が聞こえてきた。

更には掲示板で仕事を選んでいた冒険者までもが俺を見て驚きの表情を見せていた。

「痛たたた・・・。」

「ローラ、大丈夫か?」

「それは此方の台詞ですよ!ミコトさんこそ無事だったんですか!?」

ローラは鑑定そっちのけで俺に問いかけてきた。

「俺は怪我なんてしてないよ。リザードマンの左腕を切り離したまでは良かったんだが、逃げられてしまってな、もう少しだったのに残念だったよ・・・。」

それを聞いたローラはわなわなと震えていた。

「ミコトさん!『残念だったな』じゃありませんよ。何故直ぐに逃げなかったんですか!?」

「出会った当初はそんな強そうには見えなかったからなぁ・・・。殺りあってから吃驚したよ。」
「強そうじゃなくて強いんですよ!!リザードマンはＳＳ級の魔物ですよ!?」
「そんな上級種だったのか、今度逢ったら叩きのめしてやろう!」
「馬鹿なことを言わないで下さい!!騎士が２０人がかりでも勝てなかったんですよ!?」
「そうなんだ。」
「『そうなんだ』って・・・もういいです!」
「それともう一つ報告なんだけど。」
「どうしました?」
「山賊に滅ぼされたディル村の事なんだが、生き残った少年が村の奥で宿屋を経営していたぞ。」
「そうなんですか、ディル村で宿屋を・・・。　って、えええーー!?」

ギルド内に2度目の絶叫が響き渡った。

「生き残った方がいらしたんですね。良かった～～」
「俺が話をしたんだが、宿屋で金を稼いでディル村を再建するのが夢らしいから宣伝してくれると助かるんだけど。　ディル村方面に行く時の中継地点にもなるからな。」
「分かりました。ギルドが全力を持って手助けしようと思います。」

ギルド内でのざわめきが、やっと収縮してきた。
連続で驚愕の事実が判明すれば当然といえば当然だが・・・。

「ミコトさん、集計結果が出ました。リュナイトの証明部位は2個で一体と計算しますからミコトさんは２０体討伐した事になります。此れが報酬の金貨１枚と銀貨６０枚です、お受け取り下さい。」

『は？　金貨一枚と銀貨６０枚！？　報酬は銀貨４０枚じゃなかったのか？』
疑問を持ちながらも受け取った金貨と銀貨を道具袋に入れると更にローラが話しかけてきた。

「ミコトさんはリュナイトを２０体討伐されたのでＡ級討伐依頼：リュナイト５体を４回達成した事になり、前の戦果と合計してＡランクへの昇格が決まりました。おめでとうございます」
（な、なんで？俺はまだ２回しかＡ級の依頼を達成していないぞ！？）
（マスター、依頼書の内容をよく読みませんでしたね？依頼書にはこう書いてありました。『継続Ａ級討伐依頼：リュナイト５体の討伐　リュナイト５体討伐で依頼書一枚分になります。　１０体討伐すればＡ級依頼を２枚受けたのと同じ扱いとなります。』と、マスターは２０体討伐したのですから依頼書４枚分と計算され、報酬も４倍になり一気にランクアップしたという事になります）
（なるほど、納得がいった。俺は報酬の欄しか見て居なかったというわけだな？）
（その通りです、マスター）

突然、剣の柄を握り締めたまま黙ってしまった俺を見てローラが心配そうに声を掛けてきた。

「ミコトさん？どうしたんですか急に黙っちゃって」
「いや、そんなつもりはなかったのにＡランク昇格が夢みたいだ・・・。」
「夢じゃありませんよ！おめでとうございますミコトさん！！」

此れで騎士団から発行される特別依頼を受ける事ができるという事

だ！

昇格は嬉しいが流石に討伐で疲れたため、まだ日は高いが宿屋に戻る事にした。

「おや？ミコト、もう戻ってきたのかい？」

「レインさん、部屋で眠らせてもらいます。食事の時間になったら起こしてください」

「疲れきった顔してるね～～いいよ、ゆっくり休みな！」

俺は部屋に戻り、剣を握り締めながらベッドに横になると同時に夢の中へと誘(いざな)われた。

第２１話　召喚せし者？（前書き）

続・鬼畜キャラの登場です。

第２１話　召喚せし者？

夢の中でルゥに出会った直後、思いっきり顔にビンタされた。
能力のおかげで痛みは無いが、行き成りの事で何が何だか分からなくなっているとルゥのほうから話しかけてきた。

「マスター、私森で言いましたよね？手が合ったら思いっきり殴っているところだと、今
ここに手があるので殴りましたが、なんでマスターはケロッとしているのに私の手のほうが痛いんですか！？」
「それは俺の能力の所為だろ？幼少時から慣れてきた所為か痛みは感じないんだよ。」
「そんな、不公平です！！」
「そうは言ってもな～～」

そんな時、俺は誰かの視線に気が付いてしまった。
此処には俺とルゥ以外は存在できる筈がない世界だというのに・・・。

「其処に居るのは誰ですか！？　誰であろうと、マスターに危害を加えようとするならば私が相手になりますよ？」
「ルゥ大丈夫だ。誰かは知らないが殺気は感じられない、しかし此処に誰かがいるのは確かだな。」

気配を頼りに辺りを見回すと、背格好がルゥよりも少しだけ大きい女性が神に祈るかのような姿勢で俺に対し祈りをささげていた。

「お前は誰だ！？　どうやってこの空間に入ってきた！」
「嗚呼、やっと繋がりました。どうか我が国、レグリスをお救い下

さい。」

どこかで聞き覚えのある言葉に、女性を見ながら少し考えてしまった。

「あんた、前にも俺を呼ばなかったか？」

「私は国の礼拝堂でこの一ヶ月、毎日のように祈りを捧げておりました。そして今日、遂に報われる日が訪れました。」

「レグリスか・・・。どんな国なんだ？」

俺は正体不明の女性にではなく、俺を守るかのように目の前に立っているルゥに聞いた。

「レグリスとはマルベリアの遙か北方に位置する、昔は穏やかな共和国であったと記憶しています。」

「今はどうなんだ？」

女性を無視してルゥと話していると明らかに女性の顔が強張り、眉間には深い皺が出来ていた。

「他の精霊に聞いた話では、レグリスの王妃の独裁で崩壊の危機にあると言われています。」

「それで『国の危機をお救い下さい』か？　自業自得じゃねえか！」

「数年前までは共和国であったものの、独裁政治によって他の国に見放されたと聞きました。」

ルゥの言った独裁政治という言葉が聞こえた直後、目の前の未だに跪（ひざまず）いている女性から『ブチッ！』という音が聞こえたような気がした。

その直後、立ち上がってルゥを足蹴にしながら罵りだしてきた。

「なんで?なんで精霊なんかに母様のことを馬鹿にされなければならないのよ!!
身の程を知りなさい下劣な一精霊が!!!」
「俺のルゥを下劣な精霊だと!?　貴様は何様のつもりだ?」
俺が殺気を込めた目で女性を睨むと途端に腰が抜けたように尻餅をつき、何か見えない力に押し潰されて床に這い蹲ったかと思えば、次の瞬間には姿が掻き消えた。
「逃げたか!」
「マスター・・・。」
「大丈夫かルゥ。怪我はないか!?」
「私は此処では存在していられますが、実際は肉体を持たない精霊に過ぎません。なので怪我を負う事は基本的にありえないことです。」
「そうか良かった。クソあの女め、望むならレグリアに出向いてやろう!ただし、救済ではなく滅亡させにな!」
「マスター、現実でレインさんが呼んでいます。目覚めてください」
「胸糞悪いが・・・。起きるとするかな」
ベッドの上で目を覚ますと、部屋の扉をしきりにノックするレインが居た。
「ちょっとミコト!御飯ができたよ。降りといで」
「分かりました。今行きます」
「ようやく起きたのかい?よっぽど、疲れてたんだね」
俺が返事をすると返答と共に廊下をパタパタと歩いていく音が聞こえた。

「討伐よりも夢の中での出来事のほうが疲れたのは何故だろう？」

その後、酒場へと向かい、瞬く間に飯を食べた俺は直ぐに部屋へと戻ってきた。

する事がないので、寝ようと思ったが昼間に寝過ぎた所為で少しも眠気は起きなかった。

自力で眠る事は諦め、ルゥに頼み強制的に夢の中へ誘(いざな)って貰い一晩中、ルゥとの会話を楽しんだ・・・。

一方その頃、レグリス国の城の中にある礼拝堂では・・・。

豪華な衣装を身に纏った、一人の少女が床に這い蹲った状態で息を切らせていた。

「ハァハァ、あの男と精霊めが我を侮辱するとは何様のつもりか！！」

「皇女殿下！？どうなさいましたか？」

「爺、奴隷を一匹連れてまいれ！！　こんな夜は奴隷で憂さ晴らしするに限る。」

「しかし殿下、前に痛めつけた奴隷で最後にございます。」

「なら、牢に入っている囚人はどうか！？」

「その囚人も王妃様が暇つぶしと称して先日、痛めつけて殺害なされました。」

「母様も利用してたのね・・・。」

部屋の入口で警備している騎士は『またか』と仲間と話していた。

「奴隷も囚人もいないのなら仕方がない。街から適当な罪状で一人、引っ張ってまいれ！！」

「殿下、もうお止め下さい。連日の事で民は震え上がっております」

「お前も我に意見するつもりか？なら、侍従を代わりに痛めつけて

やろうか!?」

「それは・・・・・、分かりました。衛兵に民を引っ張って越させますので御勘弁下さい。」

「始めからそういえば良いものを。楽しみじゃな、今日はどんな獲物を使おうかの?」

少女が壁にあるカーテンを開くと、其処には赤い血が滴る棘(イバラ)の鞭や刃を潰した剣が何本も飾られていた。

爺は礼拝堂に繋がる廊下で泣く泣く、衛兵に指示を与えると心の中であることを考えていた。

『この国はもう駄目だ・・・。二代に亘ってこんな恐怖政治では国は滅亡してしまう。』

少女は事あるごとに暴力でストレスを発散し今日もまた礼拝堂に絶叫が響きわたるであろうと・・・。

「爺、まだ来ぬのか!?もう待ちきれぬぞ!!」

「暫くお待ち下さい!もう、まもなくでございます」

数時間後、適当にでっち上げた罪で身柄を拘束された、露天商を営む一人の青年は少女の手によって撲殺され、翌朝には棺桶に入れられ城の横を流れる川に流されたという・・・。

第２１話　召喚せし者？（後書き）

少しハズしてみました。
召喚した者（？）が悪魔のような存在ということに・・・。

第２２話　セリア再び・・・（前書き）

前話のレグリスの説明と数話前に登場したセリアを登場させて見ました。

第２２話　セリア再び・・・

昨夜はルゥと夢で会話して疲れた俺は、夢の中で寝るという器用な真似をしてしまった。

（マスター、朝ですよ！起きてください。）
（・・・あと５分。）
（そんな事言って、絶対５分じゃ起きないじゃないですか！？）
（じゃ、あと１０分。）
（増えてるじゃないですか！！）

３０分後、目が醒めた俺は遅めの朝食を摂ることになった。
最後にはルゥにも見放されてしまっていた。

「さて、今日はどうしようか？」

宿屋から外に出て寛いでいると、私服姿のエミリアが目の前を通りかかった。

「あら？ミコトじゃない。今から仕事？」
「ああエミリアか、今日もサボリか？」
「ちょっと！『も』って何よ『も』って、今日もこの前と同じく休日よ。」

目の前にエミリアが居る事から昨日の夢の中での出来事を聞いてみることにした。

「なぁエミリア、聞きたいことがあるんだけど良いかな？」
「ん？なぁに、私の３サイズでも聞きたいわけ？」

「いや、そんな物はどうでもいいんだけど。」
「そんな物って・・・。まぁいいわ、どうしたの？」
「聞きたい事っていうのはレグリスの事なんだ。」

俺がレグリスという言葉を発した途端、エミリアの表情も凍り付いたかの様に固まった。

「ミコト、何処でレグリスのことを！？」
「討伐に行く時に、街の外で誰かが話してるのを聞いただけなんだけど。」
「レグリスに関しては、詳しいことは何一つ分かっていないの。国の様子を見に行かせた者は誰一人として帰って着てはいないのよ。その人は何か国のことを話してた？」

困った。誤魔化しきれなくなりそうだ。
こうなったら、あの女の言っていた事を嘘も交えて話すとするか・・・。

「俺も小耳に挟んだだけだから詳しい事は分からないけど、なんか国が滅亡の危機にあるって話してたような気がしたんだけど。」
「国の滅亡は遅かれ早かれ、確実だったはずよ。」
「どういうこと？」
「レグリス国の王が数ヶ月前に原因不明の病気で亡くなったと密偵の報告で知ったんだけど、後を追うかのように大臣や宰相などの穏健派が次々と原因不明の死を遂げていったの。民からも他国からも慕われていた優しい王だったから国中から悲痛な叫びが聞こえたとの報告を聞いたの。」
「そんな王が治めていたのなら、裕福な国ではないのか？」
「問題は此処からよ、王や大臣らが亡くなってから王妃が実権を握る事になったのだけど、これが滅亡の始まりだった・・・。まず、

税率が王が生きてた頃は2割弱だったのだけど、現在は7割強にまで跳ね上がっているとの報告を聞いているわ。」
「そんなの、民が暮らしていけないだろ!?」
「当然！　不服を申し立てた国民は王妃の決定により、全員処刑されたわ。」
「処刑だと!?　そんな、酷すぎる!!」
「王妃もたった一人の皇女も税で贅沢三昧の生活をして、行政を何一つしなかった所為で国は荒れ、街には犯罪者が我が物で蔓延(はびこ)っているとの報告の直後、密偵からの連絡が途絶えたわ。」
「でも、そんな重要なことを俺なんかに話してもいいのか!?」
「いいのよ。何処から話が漏れたのか、みんな知ってる事だし・・・。」

話を聞いた直後、とても仕事をする気にはなれなかったので宿へと引き返そうとした時、エミリアから声を掛けられた。

「暗い話はこれでおしまい。ねぇミコト、暇なら少し付き合ってくれない?」
「そうだな、俺が落ち込んでいても何も出来ないし。で、何処に行くんだ?」
「今、向こうの通りでお祭りやってるから見に行こうと思って。」
「じゃ行こうか。」
「うん。こうしてるとデートみたいね。」
「そうか?気のせいじゃないか?」
「もう!ミコトの意地悪!」

さっきまでの暗い雰囲気は何処に行ったのか、笑いながら路地を奥へ奥へと進んでいくと何やら人だかりが出来ていた。

「これは一体、何の騒ぎだ?」

「なになに？喧嘩？」

エミリアは野次馬根性丸出しでピョンピョンと飛び跳ね、人だかりの中心を見ようと頑張っていた。
俺はその場で見ている爺さんに話を聞いてみる事にした。

「なぁ何が起こっているんだ？」
「ああ、冒険者の方か。なんか知らんが嬢ちゃんが因縁付けられて困っているようだの。」
「なんで誰も助けてやらないんだ！？」
「あの因縁つけている男が問題じゃからじゃよ。あの男は裏通りを仕切っていた男の弟分らしいのじゃが兄貴が捕まえられたとかで毎日のように此処で暴れているんじゃよ。」
「騎士団は何をしてるんだか・・・ん？あれは、セリアじゃねえか！？」
「なんじゃお前さん、あの嬢ちゃんの知り合いか何かか？」

俺は爺さんに答えずに人込みを掻き分け、セリアの元へと向かった。

「だから、何処を怪我したというんですか！？　私が治しますから見せてください！」
「なんだ、お前魔術師か！？　まぁどうでもいい、肩が折れたから治療費を寄越せとさっきから言っているだろうが！！　怪我をしたくなければさっさと寄越しな！！」
「何処が折れてるんですか！　思いっきり振り回してるじゃないですか！？」
「セリアじゃないか。此処で何してるんだ？」
「あ、ミコトさん。助けてください、この人が私にぶつかって来て怪我をしたから治療費払えってしつこいんですよ・・・。」
「なんだテメエは！関係無え奴は引っ込んでろ！！」

「どっちの肩を骨折したんだ？左か右か？それとも両方か？」
「両方だよ！治療費として銀貨1枚支払いな！！」
男は折れているとはとても思えない肩をグルグルと振り回しながらセリアを脅している。
「それなら俺が払ってやろう。その前に肩を見せてくれるか？」
「なんでお前なんかに！」
男は俺を寄せ付けないように暴れるが、俺は瞬時に男の後ろに移動するとガッシリと肩を掴んだ。
「何しやがる！？放せよ！！」
「ふむ、確かに折れてるな。これは複雑骨折という奴かな？」
俺は言い切ると同時に両手に力を込めて男の肩を握りつぶした。
バキ、バキ、ベキ、ボキ！！という音ともに男の肩は砕けた。
「ギャアアア！！　俺の、俺の肩がーーー！！？」
「だから折れているんだろ？」
男は振り回していた腕をだらりと下げ、路地の奥へと悲鳴を上げながら逃げていった。
「お～い。治療費要らないのか～～～？」
その直後、後方の人だかりから盛大な拍手が鳴り響いた。
「ミコトさん、ありがとうございます。私、迷惑ばかりかけていますね・・・。」

「気にするな、ああいう奴にはいい薬になるだろう。」

俺は未だに鳴り止まない拍手の中、セリアを連れて宿への道を歩いていった。

「あれ？何か忘れているような・・・。まぁいいか。」

その頃、人込みの後ろにいるエミリアはというと。

「ああもう、何が起こってるのよ！？　ミコトーーー何処に行ったの？戻って来てよ～～。」

第２２話　セリア再び・・・（後書き）

ご感想・ご批評などをお待ちしております。

第２３話　ギルド長登場（前書き）

アクセスＰＶ３０万到達！　ユニークアクセスも６万人を達成しました。

御愛読してくれている、読者の皆様方ありがとうございます。

第２３話　ギルド長登場

宿に帰ってから俺は、酒場で晩飯を食いながらセリアと話をしていた。

「元気だったか？その後はどうだ。」
「あの時は申し訳ありませんでした。今は順調に依頼をこなし、先日Ｃランクへと昇格しました。」
「あの２人、リンドとイラウだったか？　再会した事は？」
「いえ、あの時此処で大喧嘩をしてからは逢ってないです。」
「それなら良かった。あいつらに嫌な事されたら俺に言えよ、叩きのめしてやるから。」
「分かりました。　あ、私明日は早いのでそろそろ眠りますね、おやすみなさいミコトさん。」
「ああ、おやすみセリア。」

セリアは部屋へと戻ってしまい一人で座っているとレインが話しかけてきた。

「この前の娘だね、元気になったみたいで良かったね。」
「レインさん・・・。」
「あの時の２人は散々痛めつけたからねぇ、寄ってこないんじゃないか？」
「そう願ってますが、一応考えといたほうが良いんじゃないかと。」
「心配性だね～～～」
「最悪な事態を常に想定して動いているだけですよ。」
「ミコトにそれだけ思われているんだ、あの子も幸せだね。」
「からかわないで下さいよ・・・。」
「ハァッハッハッハ！！」

「もぅ・・・。俺も明日は依頼を受けるつもりなので、そろそろ失礼しますね。」
「分かった、頑ばんなよ！」
「はい！オヤスミなさい」

レインに挨拶を済まし、俺は自分の部屋へと足早に戻ってさっさと眠りに付いた。
その頃、ミコトの居なくなった酒場で一人晩酌をしているレインはというと・・・。

「ミコトもかなりの朴念仁だね。あの子の想いが実るのは何時になるのかね～～」

翌朝、夢も見ないほどに爆睡した俺は疲れも吹き飛び、朝食後には意気揚々とギルドに向かった。
俺がギルドに到着するとローラを始めとする、数人のギルド職員が慌ただしく動き回っていた。

「ちょっとあなた！右側に少し傾いてるわよ、修整しなさい！！」
「こんなもので宜しいでしょうか？」
「うん、調度良いわ。ん・・・？　其処！天井から吊り下げている紐の結び目が解けかけてるわよ。」

ローラが注意すると直ぐにギルド職員２人がかりで巨大な掲示板を押さえに掛かるが、その内の一人が手を滑らせ縦幅３ｍ×横幅５ｍ×厚みが１０ｃｍ近くもある巨大な板がローラ目掛けて落下して行った。
このまま落ちれば運が良ければ打撲程度、運が悪ければ首の骨を折って死亡だってあり得る。

「え？なに！？　キャアァァァァーーーーー！！」

職員は最悪の事態を予測し一同に目を瞑っていたが、何時まで経ってもローラの断末魔はおろか、あれほどの巨大な物体が床に落ちた衝撃音すら聞こえては来なかった。

それもそのはず、逸早く落下に気づいた俺が一陣の風を身に纏って、目にも留まらずスピードでローラの目前に飛び込み、落下してくる掲示板を受け止めたのだった。

俺が此処の重力が低いと感じる所為か、受け止めた時に重量感はあまり感じなかったが足元を見ると数ｍｍだけだが地面に靴がめり込んでいた。

「ローラ、もう大丈夫だ。目を開けても良いぞ」

「え！？　その声はミコトさんですか？」

俺の声を聞いたローラと職員が一斉に目を開けると俺が立っており、両手で落ちてくる掲示板を余裕で受け止めている姿に驚愕していた。

「ミコトさん、ありがとうございます。・・・それよりも、重くないんですか！？」

「ん？ああ、これか。思ったよりも重くないみたいだ。」

そう言いながら慎重に地面へと掲示板を下ろすと、職員が再度２人がかりで顔を真っ赤にしながら壁へと取り付け始めた。

「俺ら２人でなんとか持ち上がるほどの代物を一人で難なく持ち上げて『思ったよりも重くない』だと！？　冗談じゃねえ、あの男は一体何者なんだ？」

「さすがは冒険者というところか・・・。」

職員が作業をしながら驚愕している時、俺はローラに話しかけていた。

「それにしても、この板はなんのためのものだ？」

「これは兼ねてより冒険者から要望があった、依頼書ではなく手配書の掲示板です。」

「手配書？賞金首とかか？」

「そうです。ランクは関係なく、犯罪者から魔物まで退治して証明部位さえ持ってくれれば賞金が払われます。」

「それだと、この前みたいに討伐していないのに証明部位を持ってきたりして不味い事にならないか？」

「それが一番の心配なんですが・・・。」

ここで気になる事が出来た俺は聞いてみることにした。

「なあ、依頼の序（ついで）で魔物を討伐して此処に証明部位を持ってきたら報酬を貰えるのか？」

「ええ、それは可能です。」

「それなら冒険者に魔物を倒したら、必ず証明部位を取るように徹底させればズルはなくなるんじゃないか？」

「そのアイデアは良いのですが、魔物の種類がかなり多いですよ。」

「討伐証明部位には統一性がないのか？」

「いえ牙や角、場合によっては羽根や翼などの目立つ場所が証明部位に指定されます。」

「じゃ適当に採取するか、行く先々の魔物に関する情報を記した紙をギルドが発行するとか？」

「その提案もらったーーー！！」

俺がローラと話していると何処からともなく、一人の男が話に乱入してきた。

「あんた誰だ？」
「ギルド長！？何故此方に？」
「ローラが何時まで経っても戻ってこないからだろう？」
「ローラ、コイツは？」
「コイツって・・・。
俺はマルベリアでギルド長をしているリュックと言う。此れからも宜しく。」
「ギルド長・・・。先程の『提案もらった』というのは？」
「だから、その男が言った事をそのまま実行だよ。ただし、要返却の規定付だがな。」

俺はコソッとギルド長に聞こえないようにローラに話を聞いてみた・・・。

「ギルド長って、いつもこんな感じか？」
「そうなんですよ・・・。決めたら直ぐに実行するんで私達も困っているんです。」
「頑張ってくれ。俺は依頼を探しに掲示板の方に行くからさ。」
「ミコトさ～ん！？見捨てないで下さいよ～～」

どうやらギルド長に聞こえないように話してたつもりだったが丸聞こえだったらしく、俺が立ち去ってからローラはギルド長にネチネチと色々な事を問い詰められているようだった。

第２３話　ギルド長登場（後書き）

あまり良いアイデアが出てこず・・・・・。

次こそは新しい展開を考えたいです。

第２４話　護衛依頼？　受諾（前書き）

如何にかして展開を変えようと考え、一風変わった内容になってしまいました・・・。

第２４話　護衛依頼？　受諾

俺が掲示板で依頼を探していると、やっとギルド長から解放されたのかローラがジト目で俺の方を睨みつけていた。
ローラの視線に耐えながらもＡ級以上の依頼を探していると珍しい依頼が見つかった。

「え～と・・・」

【Ｓ級護衛依頼：マルベリアから商業都市ガルデアまで往復５日間の道中の護衛】
報酬は銀貨８０枚　盗賊に襲われる可能性が大ですので用意を周到にお願いします。
危険度の問題から、最低でもＢランク以上の冒険者を指定させていただきます。

「ガルデアまでの護衛か・・・。竜の鱗は諦めたけど、あの街には興味あるし受けてみようかな。」

俺は依頼書を掲示板から剥ぎ取るとローラの面前に依頼書を差し出した。

「この護衛依頼を受けたいんだけど・・・。」
「・・・・・・・・は？」
「だから、依頼を受けたいんだってば！」
「この依頼を受けたいんですか・・・そ～ですか・・・」
「ローラ、いい加減機嫌直してくれよ！悪かったてば」
「私がどれだけ、あの嫌なギルド長からネチネチと説教を喰らったかミコトさんには分からないでしょうね。」

「分かった。今度なんでも言う事聞くからさ、機嫌直してくれよ～」
「其処まで言うなら分かりました。依頼主を呼んできますので少し待っててくださいね。」

ローラがギルドの外へ足を踏み出してから数分後、商人とは思えないような立派な体格の男がローラに連れられて俺の前に姿を現せた。
俺が想像していた弛んだ御腹に2段顎、脂ぎった顔という印象は悉く砕け散り、現れた商人は街を歩くだけで女性が寄ってきそうなほどのハンサムな男だった。

「シルバードさん、此方が依頼を受けてくださったミコトさんです。」
「君が私の依頼を受けてくれた凄腕の剣士かい？ローラさんから話は伺っているよ、期待してるからね。」

俺は商人の笑顔に引き寄せられ、同姓に惚れてしまいそうになった。
『俺は決して危ない趣味などは持ち合わせてはいない！俺はノーマルだ！！』
俺は剣を力一杯握り締めて、俺の気持ちを全否定するように頭を振って気持ちを整理した。

（マスター、気持ちは分かりますが落ち着いてください！！私を壊さないでーーー！！）
（あ、すまない。大丈夫かルゥ！？）
（私は多少の傷なら魔力で自己修復可能ですが、一旦砕けてしまうと修復までに、とても長い年月が必要になるんですから注意してくださいよ～～～）
「ミコトさん？どうしたんですか険しい表情で剣を見つめたりして？」
「あ？なんでもないよ、護衛をしながら5日間という長い道のりを

進まなくてはならないから気合を入れていただけだよ。」
「それならいいんですが、なにやら思いつめた表情をしてらしたので心配しました。」
「失礼しましたシルバードさん、俺が護衛でも構いませんか？」
「先程言ったでしょう？『期待している』と、頑張って私を守ってくださいね。　あと、私の事はシルバードと呼び捨てになさっても結構ですよ？」
「了解いたしました。それならば俺の事もミコトと呼び捨てにしてください。」
「外に私の仲間とともに馬車が用意してありますからミコトさん・・・いえ、ミコトの用意が出来次第出発しましょうか。」
「俺の用意は既に万端、整っています。直ぐにでも出発いたしましょう」
「聞いていた通りの御方ですね。では行きましょうか」
颯爽と歩き出すシルバードを手で押さえ、俺が剣の柄を手で押さえながら先頭を進みだす。

「ミコトさん？どうしたのですか？」
「依頼を受けてシルバードと会った時から護衛は始まっています。前は俺が歩きますからシルバードは俺の後ろについて着てください。」
「ミコト・・・気持ちは分かりますが、まだ町の中ですし、だいいちギルドの中ですよ？」
「いえ、他の冒険者や町人に姿を見せかけた盗賊が居るとも限りませんから。」
「其処まで言うのなら、分かりました。」
結局、懸念していた盗賊の襲撃は起きずに街の外に止めてある立派な馬車へとたどり着いた。

「護衛の冒険者とともに帰りましたよ。みんな降りて来てください」
「シルヴ・・・いや、シルバード様。お帰りなさいませ」

現れたのはシルバードと同じく、とても商人には見えない上半身傷だらけの屈強な男だった。
名前を呼び間違えたのが無性に気になるところではあるが・・・。

「ミコト紹介しましょう。私の旅の仲間であるドレイクです。」
「あんたが依頼を受けてくれた冒険者か、俺の名はドレイクだ宜しくな」
「此方こそ、よろしくお願いしますドレイクさん。俺はミコトと言います」
「『さん』付けなんてされると、むず痒くて我慢できねえぜ！俺の事はドレイクでいいぜ！！」
「さて、もう一人・・・ってエフィルさん？何処に居るんですか？」

シルバードは商人の物とは思えないほどの立派な造りの馬車の客席を見るが、誰も見当たらず馬車の周りをグルグルと探し回っている。

「ドレイクさん、エフィルさんは何処に居るのです？」

そう言った直後、屋根の上から誰かが飛び降りた事に逸早く気づいた俺は一瞬で間合いを詰め、不審者の喉下に剣を突きつけた。

「貴様、何者だ！？盗賊の一味か！！」

その者は暗殺者にしては髪が腰ほどもある長髪で、動きにくそうな衣服を身に纏っていた女だった。

「ミコトさん、ちょっと待ってください！！その者は私の仲間のエフィルです。」
「え！？」
（マスター、私もこの方からは殺気は感じられません。）
俺は剣を引くと、エフィルと呼ばれた女性はヘナヘナと地面に崩れ落ちてしまった。

「行き成り何をするのよ。ちょっと、シルちゃんに抱きつこうと思っただけなのにーーー！！」
「エフィルさん、此方は今回の依頼を受けてくださったミコトさんです。それにしても・・・不意打ちは止めてくださいと、あれほどお願いしたはずですが？」
「固い事は言いっこなしだよ、私とシルちゃんの仲じゃない。」
「ミコト凄えな、俺でさえ目で追えないほどの早さだったぜ！！」
「ミコトって言ったっけ？シルちゃんは私のだからね！絶対に取らないでよ？」
「聞き捨てなりませんね、私が誰の物なんですかエ・フィ・ル・さ・ん？」
「ははははっ・・・。目が笑ってないよシルちゃん？」

前途多難な始まり方をした今回の護衛依頼・・・果たしてどうなることやら。
それにしても呼び捨てで良いと言ったのに何時の間にやら“さん”付けに戻ってるな・・・。

第２４話　護衛依頼？　受諾（後書き）

御感想・御批評をお待ちしています。

第２５話　護衛依頼？　襲撃（前書き）

お待たせしました！！　第２５話、完成いたしました。

第２５話　護衛依頼？　襲撃

俺がシルバードに護衛として雇われて、マルベリアを出発してから数時間が経過した。
護衛と入ってもまるで襲撃はなく、馬車の座席で紅茶を進められている状態だった。
いつ魔物や盗賊が来ても良い様にと常に剣の柄を片手で触っていた。

「ミコトさん、もう少し落ち着いたらどうですか？お茶でも飲んで気を静めてください。」
「あ、ああ。ありがとう、頂くよ」
「ミコト、護衛としてじゃなく友人という形で座っててても良いんだぜ！」
「シルちゃ～ん、ミコトに変なことされてない？ミコト！私の見えない所に居るからってシルちゃんに手を出さないでよ！？」

エフィルはというと俺達みたいに馬車の中に居るのではなく、シルバードから罰として御者席で馬のたずなを引いていた。

「安心しろ、俺は同姓には興味はない！」
「同姓って・・・。あぁ、そうだったわね。なら安心か」
「エフィルは何のことを言っているんだ？
「あの女性は時々変なことになるので、あまり気にしないで下さい。」
「シルちゃん、酷～～い。」
「・・・罰として４時間追加！」
「ひえぇぇぇぇぇ・・・・・。ミコト！恨むわよ」
「ちょっと待て！此れは俺のせいなのか？」
「エフィル、頑張れよ！」

「人事だと思ってぇ！！」

この展開に付いて行けない俺は顔だけをシルバードの方に向けて、ルゥと会話する事にした。

（なぁルゥこいつ等、本当に商人だと思うか？）

（マスター、気持ちは分かりますが、危険な気配はしないので大丈夫ではないでしょうか？）

（まぁ今のところは商人に見えないだけで、それ以外に怪しいところは無いんだがな。）

（私的には商人という事よりもエフィルさんから流れている魔力の多さが気になりますが・・・。）

（それはエフィルが魔術師だということか？）

（見た感じでは杖を持っている様子はないので大丈夫だとは思うのですが・・・。）

（それはそうと俺が居る理由は護衛だからな。魔物や盗賊の気配を頼むぞ！）

（はい！お任せ下さい。・・・それはそうとマスター、呼ばれていますよ？）

（ん？）

俺は剣から意識を離し目の前に集中するとシルバードがしきりに声を掛けていた。

「ミコトさん、どうしたんですか？急に黙ってしまって、何かありましたか！？」

「ミコト、心配事があるなら相談に乗ってやるぜ？」

「大した事ではありません。俺の仕事は護衛ですからね、魔物の気配が無いか感覚を鋭くしていたんですよ。」

「大丈夫ですよ、いざという時にはドレイクさんもエフィルさんも居ますから。」

「えっと、この2人は商人ではないのですか？」
「あっ・・・！　えっと、2人は商人ですが腕には自信があると思いますよ。」
「凄いんですね。普通の商人とは気配が違うのは、そのためですか。」

俺がシルバードと会話していると剣の柄を通じてルゥが話しかけて来た。
（マスター、前方４００ｍのところに魔物の気配が３つほどあります。注意してください）
（分かった。馬車を止めてもらおう）

俺は何かに気づいたように御者席へと向かった。

「エフィル、注意しろ！近くに魔物の気配がする。」
「本当でしょうね！？何にも見えないわよ？」
（マスター、残り３００ｍです。グランオークが３体確認できました。）
「ああ、間違いない。約３００エト先で魔物の気配がする。」
「３００エトって直ぐじゃない！？　突破するわよ！何かに捕まってよ！！」
（ルゥ、グランオークってどんな魔物だ？）
（マスターの世界でいうなら牛みたいな亜人という所ですね。！！マスター、グランオークが此方に向かって突進しだしました！衝撃に備えてください）
「エフィル、注意しろ！！魔物が此方に向かって動き出した。体当たりする気かもしれん！！」
「私も気づいたわ！大きいのが３体ほど走ってくる！？」
「エフィルさん、避けてください！！」
「もう、間に合いましぇ～～ん！」

次の瞬間、馬車の横っ腹に3体の魔物が体当たりをしてきた。

「エフィル！馬車を止めてくれ、俺が始末する！！」

「言われるまでも無く、魔物に無理矢理停止させられたわよ！」

「シルバード様のことは俺に任せろ！ミコト、魔物の始末を任せたぞ！！」

俺は馬車が完全に停止した事を確認すると荷台から剣を構えて飛び出した。

（マスター、グランオークは力が異常なほど強い魔物です。体当たりに注意してください！）

ルゥの助言を聞きながら飛び出した勢いのまま魔物に切りかかり1体目を一刀両断にして撃破した。

「まずは1体目撃破！！」

魔物は仲間が俺に殺られた事から、怒りを露(あらわ)にして狙いを馬車から俺に移して襲い掛かってきた。

「改めてみると某ゲームに登場するミノタウロスみたいだな。」

（マスター2体目が左後方より向かって来ています。）

俺はルゥの助言後、振り向き様に剣を横薙ぎにして2体目の首を刎ねた。

「さて、残る魔物は1匹！何処に行った？」

左を見たり右を見たりしても3体目の魔物が見当たらなかった。俺の後ろには馬車があるため後方からの襲撃は不可能と思われたが・・・。

（マスター、真後ろに居ます！避けてください）

俺は無防備のまま魔物の体当たりを喰らってしまい、前方へと吹き飛ばされた。
吹き飛ぶ直前に剣が馬車の幌の部分を切り裂いてしまい、シルバード達に戦いを見られてしまった。

「ミコトさん！？　大丈夫なんですか？」
「ミコト！」

シルバードの声がした直後、片膝立ちで地面に着地して問いかけに答えた。

「俺は大丈夫だから馬車から外には出るなよ！！」
（マスター、2回目が来ます！態勢を整えてください。）

俺が攻撃に備えて立ち上がろうとした時、魔物の頭に生えた角が俺の脇腹を串刺しにした。

「ミコトさーーーーん！！！」
「ミコトーーーーー！！！」
「あの馬鹿、死んじゃったら誰が私達を守るのよ！」

魔物は俺が事切れるのを確認せずに脇腹から角を抜き取ると馬車の方へとゆっくり歩いていった。
まるで殺しを楽しんでいるような余裕の表情で・・・。

「こうなったら俺がミコトの仇を・・・。」

ドレイクが馬車を飛び出そうとした瞬間、魔物の首の付け根から1本の剣が突き出していた。

「俺の死を確認しないまま背を向けるとは随分と余裕だな!!既に聞こえてはいないだろうがな。」

俺が剣を魔物の首から抜き去った瞬間、大量の血飛沫とともに前のめりに倒れて動かなくなった。

（マスター、心配させないで下さいよ～～～。）
（俺の体質は知ってるだろ?）
（知ってますが串刺しにされては生きた心地がしませんよ。）
（この魔物の証明部位は角でいいのか?）
（はい。左右の角を2本とも切り取ってください。）

俺が持っていた剣で角を切り取って馬車へと戻ると、3人が3人とも1点を見つめたまま微動だにしていなかった。ドレイクに至っては飛び出そうとした瞬間のアンバランスな態勢で固まっているようだ。

「何やってるんだ?魔物は始末したから出発しようぜ」

俺の一言で我に返った2人は俺へと詰め寄り、ドレイクはそのまま地面に落下して気を失った。

「ミコトさん!?　お腹刺されたのに平気なんですか?」
「腹を刺された?見間違いじゃないのか、何処にも傷なんて無いぞ

？」

俺は鎧を脱いで脇腹に穴の空いたシャツを捲(めく)るが何処にも傷はなかった。

「何処にも傷なんてありませんね・・・。やっぱり見間違いでしょうか？」

「でも3人とも見間違えるなんてこと有り得るのかしら・・・。」

数分後、我に返ったドレイクからも詰め寄られ、言いくるめるのに苦労したのは言うまでも無い。

第２５話　護衛依頼？　襲撃（後書き）

御感想・御批評をお待ちしております。

第２６話　護衛依頼？　疑惑（前書き）

前回の続きを悩みながら、なんとか形に出来ました。

かなり無理矢理な展開になってしまいましたが・・・・・・・・・。

第２６話　護衛依頼？　疑惑

ドレイクたちに傷が無い事を証拠に見間違いだと納得させるのに２時間ほどかかり、終わった頃には日が暮れ始めていた。

「こんな遅くに馬車を走らせるのは自殺行為だから今日は此処で一泊する事にするわ。」

「じゃあ俺は燃やせるような小枝を集めてくるとするか。ミコトはシルバード様とエフィルを守ってくれ。」

「分かった。此処はまかせろ！ドレイクも気を付けろよ。」

「俺は大丈夫だよ。」

そう言ってドレイクが暗い森の中へとランプを持って入っていった。この時点で馬車の中に残っているのは、あれだけの説明をしたにも拘らず未だに納得していないのか俺のほうを睨みつけるシルバードと腕をシルバードに絡ませながら俺に視線をぶつけているエフィルが此処に居る。

『ドレイクの奴、小枝を集めに行くと言ってこの場から逃げたんじゃないだろうな。』

その頃、森に入っていったドレイクはというと・・・。

「あんなギスギスした雰囲気の中に座ってられるかよ！ミコトにも興味はあるが俺の心が持たないな」

ドレイクは愚痴を言いながらも、しっかりと薪を集めている姿は尊敬に値した。

此処で馬車の中に居る３人に話は戻る・・・。

「さて、私は確かにミコトさんの脇腹に刺さった魔物の角を見ました。それなのにどうしてミコトさんには傷跡すら残ってはいないんですか？説明してください！！」
「だから、それはさっきから何回も説明している通り、シルバードの見間違いだと・・・。」
「3人が3人とも幻覚を見ていたと仰るのですか？」
「それともミコトってば、実は人間じゃなく魔物が化けている姿だとか？」
「そうなのですか！？」
「そんなわけ無いだろ！！」
「じゃあ、どういうことなんですか！！」

『どうやって説明すればいいんだ・・・。不死身だなんて言えるわけがないだろうし』

（マスター、言ってしまいません？）
（うぁ！吃驚した、何時の間にか剣を掴んでたのか・・・。言える訳が無いだろ、不死身の人間なんて存在する筈が無いからな）
（いえ、そうではなく。魔力で自動的に回復するという事ですよ）
（あれはルゥのように魔力を感知できないと不可能だろ？）
（いえ、魔術師なら誰にでも感知する事は可能です。）
（魔術師なんて此処には居ないぞ！ルゥの存在も信じてくれないだろうし）
（あのエフィルって人なんですが上手く隠せては居ますが、あの方から魔力を感じます。おそらくは魔術師ではないかと・・・。）
（エフィルが魔術師？そうは言っても杖なんて見当たらないぞ。）
（エフィルさんの正体については分かりかねますが、上位魔術師なら杖無しでも魔法を使う事が可能です）
（とは言っても証明できるか？）

（思い切って賭けに出ましょうか？『こちらも話すから其方も秘密を話せ』と・・・。）
（魔術師であるという理由はどうする気だ？）
（適当にでっち上げでも良いですから『エフィルから魔力を感じる』とでも言えば良いじゃないですか）

俺がルゥと話している間は馬車の中は沈黙だったのだが、遂に耐え切れなくなったのかエフィルが声を大にして話しかけて来た。

「いいから！あんた、さっさと喋っちゃいなよ！！」
「エフィルさん、強要してはなりません！　此処はミコトが話してくれるまで待ちましょう。」
「でも～～～。」
「おっ？　話は済んだのか？」

と、其処へ小枝を山ほど抱えたドレイクが馬車へと戻ってきた。

「まだよ！！全然喋ってくれないのよーーー！」

エフィルが返事するや否や、ドレイクは『しくじった！』というような表情を見せていた。

「ミコトさん、誰にも言いませんから話してくれませんか？お願いします」

こうなったら一か八かだ！ルゥの提案を試してみるか。

「分かったよ、話すよ話せばいいんだろ！？」
「最初から、そう言えばいいのよ！！」
「エフィルさん、静かにしてください。落ち着いてミコトさんの話

を聞きましょう？」
「は～い」
「俺から話す前にエフィルに聞きたいことがあるんだが良いか？」
「私に聞きたいこと？構わないけど・・・。今の話と関係あるの？」
「ああ、これがハッキリすれば俺の秘密が証明できるからな！」
「分かったわ。どんな事を聞きたいの？」
「エフィルの正体が知りたい。」
「「「！！？」」」

あからさまに自称商人の3人の表情が一転した。
その中でも特にエフィルは蛇に睨まれた蛙のように、額に汗を浮かべていた。

「な、なんの事よ！？私はただのシルちゃんに仕える商人よ！他に何があるっていうの？」
「いやエフィルが商人だというなら、その膨大な魔力の秘密を聞かせてくれ！」

あの一言で形勢逆転したようだ。見るからにドレイクとシルバードに落ち着きが無くなったようだ。

「なんで魔力のことなんて分かるのよ！？ミコトはただの剣士でしょ？魔力なんて関係ないじゃない」
「その事が俺の秘密の一つなんだよ。俺は剣士だが微量な魔力も持ってるんだ、だから魔術師の魔力が見て取れるってわけだ。」
「私の魔力が漏れ出してミコトに伝わったって事？そんな馬鹿な話はないわよね」
「エフィルがそう言っても、シルバードとドレイクの様子を見たら一目瞭然なんだが？」
「え！？ちょっとシルちゃん、どうしたのよ震えちゃって・・・。」

「そうか、3人ともに秘密があったんだな？　それなのに俺を尋問するとは、諦めて全てを話せ！！」
「そ、そんな事無いわよ・・・。ほ、ほらドレイクってば！」
「エフィルさん、もういいです。隠していても何時かは、ばれる事ですから・・・。」
「でも秘密だって。」
「構いません！責任は私が取ります。」
「エフィル諦めな！　でもま、ミコトに魔力があったなんてな予想外だぜ！」
「今から話したいのですが、日が完全に落ちてしまいました。今日は此処までにして続きは明日ゆっくりと話しましょうか。ではエフィル？」
「はい。」

エフィルは返事をすると馬車の荷台をカーテンのような物で仕切り2分割にした。

「こっちは女性の寝床だからね！あんた達は入ってこないでよ！！」

そう言ってエフィルとシルバードは姿を消した。

「ってちょっと待て！シルバードは良いのか？」
「ミコト、シルバード様は良いんだ・・・。」

俺は何か分からないまま、その日は眠りについた。

第２６話　護衛依頼？　疑惑（後書き）

御感想・御批評など、お待ちしています。

第２７話　護衛依頼？　秘密（前書き）

秘密を如何いう風に暴露するか散々悩みましたが手っ取り早い方法を選択しました。

第27話　護衛依頼？　秘密

その日の夜、剣を握ったまま馬車に横になっている俺の姿に怯えてドレイクから呻き声のような声が聞こえたが気にしないでおこう。
どんな夢を見ているのか予想はできるが・・・。

（マスター、思い切って賭けに出たんですね？）
（まさか、あそこまで分かりやすい反応を見せてくれるとは思わなかったけどな。）
（それにしても、魔力を指摘された時のエフィルさんの表情は忘れようにも忘れられませんね。）
（ルゥも人が悪いな。）
（私は人ではなく精霊ですから。）
（屁理屈だなぁ～～～）
（マスターはシルバードさん達の正体について予測できますか？）
（分からないけど、ドレイクの気配は最初から不自然だったのは分かってたよ。）
（確かに商人としては身体の鍛え方に無理がありましたからね。）
（明日が楽しみだな！）
（マスター、そろそろ朝です。起きてください）

ルゥに夢の中で起こされた俺は皆がまだ寝入っているうちに森の中へと入り、ルゥに教えてもらいながら森に自生している食べる事ができる木の実を大量に採取してきた。

「此れだけあれば足りるかな？さて、馬車に戻るとするか！」

俺が馬車へと戻ると既に起きていたエフィルとドレイクが俺を探していた。

「あっミコト!?何処に行ってたのよ、逃げ出したかと思ったじゃない!!」
「何処にって朝飯にしようかと思って木の実を採取してきたんだけど?」
「飯なら荷台に山ほどの肉が積んであったのに」
「朝から肉を食う気か!?」
「何か問題でもあるのか?」

俺がドレイクと朝飯の事で言い争いをしているとシルバードが起床してきた。
しかも格好はといえば、いつもの格好ではなく気が緩んでいるのか寝ぼけているのか、胸元に2つの膨らみがハッキリと分かるような薄着だった。

「シ、シルバード様!?目を覚ましてください!!」
「え?えええぇぇ!!?見ないで下さい!!」

ドレイクの呼びかけで覚醒したシルバードは絶叫とともに目にも留まらぬ速さで馬車に飛び込んだ。

「シルバードって女だったんだな・・・。それで昨日の事に納得がいった。」
「すまんな。性別を偽ったほうが、旅をし易くて良いとシルバード様が仰られていたから・・・。」

待つこと数分後、顔を真っ赤に染めたシルバードが馬車の荷台から姿を現した。
男装は既に辞めており、柔らかな身体のラインを露(あらわ)にしてゆっくり

と歩いてきた。

「私が寝ぼけていたばっかりに、こんな秘密までばれてしまって・・・。」

「まぁいいさ、朝飯を食って出発しようか。」

「変ですね。私は寝る時に男装を解いたつもりは無いのですが・・・。」

シルバードがエフィルに視線を当てると、そそくさと逃げるようにエフィルが離れていった。

「そうだったのですね!?エフィルが犯人でしたか!!」

「シルちゃん許してーーー!!」

「許しません!罰として朝食抜きです!!」

「そんな〜〜〜」

十数分後エフィル以外が朝食を食べ終わり、ガルデリアに向けて出発した。

朝食抜きのエフィルにたずなを持たせるわけにはいかないと、今日はドレイクが御者席に座っている。

「お腹空いたよ〜〜〜」

「若干一名、五月蠅いのが居ますが私達の秘密を明かすことにしましょう。」

「お腹〜〜〜」

余りにも五月蠅いので朝食の残りとして置いといた林檎に似た果物を2個エフィルに手渡してやった。

「朝食ゥーーーー!!」

「ゴホン！さて話の続きですが、私達はマルベリア近衛騎士隊の者です。商人の護衛としてミコトさんを騙したのは謝ります。申し訳ありませんでした。」
「なんでギルドにそんな依頼を？」
「商人と冒険者の護衛という風にして街に入れば怪しまれる事は無いだろうと上層部が判断し私達が任に就くことになりました。」
「だが、雰囲気を見る限りではエフィルは良いとしても、ドレイクはとても商人には見えないぞ？」
「それは私も同感でしたが、上層部の決定は絶対で・・・。」
「その上層部が一番の問題じゃないのか？」
「その通りだと私も思います。それはそうと私達の秘密を明かしますね、私はマルベリア第三近衛騎士隊副隊長のシルヴィアと申します。偽名を使っていてすみませんでした。」
「ミコト！果物アリガトね。私はシルヴィア様の部下の魔法騎士フィルだよ、宜しくね。」
「で俺がフィルと同じく、シルヴィア様の部下のグレイだ。改めて宜しくなミコト！」
「この事はギルドのローラは知っていたのか？」
「勿論知っているわよ！知らないのは冒険者のミコトだけって言う事になってたのに・・・。」
「まさかミコトさんに魔力があるなんて思っても見ませんでした。」
「昨日も言ったけど、俺の魔力の事も含めて他の皆には内緒にしといてくれよ？」
「それは此方も同様です。ガルデリアに着いても、本名は出さずに偽名で呼んでくださいね。」
「ところでミコトの秘密って何なの？魔力が感知できれば分かるって言ってたけど？」
「ああ、俺がこれから『ある事』をするからフィルは俺の魔力を感知してくれ！」
「分かったわ。いつでも良いわよ！」

フィルは掌を俺に向けて俺の方を凝視し始めた。

「じゃあ行くぞ？」

「ええ、何時でも！」

俺は荷台に置いてある小型のナイフを手に取ると自分の腕へと突き刺した。

「ミ、ミコトさん！？　何を！！」

「此処からだフィル、見てろよ！」

俺が自分の腕からナイフを引き抜くと一瞬にして傷口が塞がり、フィルは驚愕の表情を見せた。

「フィルには分かったみたいだな。これが俺の秘密だ！」

「フィル？どういうことなんですか！？説明してください！！」

「ミコトに言われて魔力を測っていたんですが、ナイフを突き刺すところまでは極微量な魔力しか感知できなかったのにミコトがナイフを腕から引き抜いた瞬間に見たことも聞いたことも無い膨大な魔力がミコトの身体から発せられ、傷が癒されると同時に魔力も元の微弱なものに戻りました。」

「つまり、ミコトさんは魔力で傷を回復する事が出来るという事ですか！？」

「その通りだ。怪我に慣れてきた所為か痛みすら感じないんだがな。」

「これがミコトさんの秘密・・・。言えなかった訳がやっと分かりました。」

「くれぐれも他の人には秘密にしてくれよ？約束だからな！」

「分かっています！！貴方達も約束できますね？」

「勿論ですよ！それに話したとしても信じては貰えませんよ。実際にこの目で見ないとね」
「俺もわかりました！俺は魔力を感じる事は出来ませんがミコトは信用できる男ですから！！」
「俺もシルヴィア達のことは外部には絶対に洩らしません。拷問されても無意味ですしね！」

こうして俺達４人は秘密を明かしあい、ガルデリアへの道を只管(ひたすら)進んだ。

第２７話　護衛依頼？　秘密（後書き）

御感想・御批評お待ちしています。

第２８話　護衛依頼？　到着（前書き）

やっと商業都市ガルデアに到着です。

第２８話　護衛依頼？　到着

マルベリアを出発して3日目、秘密を明かしあった俺達は色々な事を話し合っていた。
この頃にはフィルの刺々しさもなくなり和気藹々と会話を楽しんでいた。

「シルヴィア様、商業都市ガルデアが幽かに見えてまいりました。」
「やっと着きましたか、それでは私は着替えます・・・。覗かないで下さいね」
「大丈夫ですよ。私が見張っておくからシルヴィア様は安心して着替えてね。」

街道で馬車を停めてしまっては周囲に不振がられる為、俺とグレイは御者席に移動しシルヴィアとフィルは荷台で着替えを始めた。
数分後には商業都市ガルデアに到着し、馬車は街の門を潜り停留所に停止させた。
到着したと同時に荷台の幕が開かれ男装姿のシルヴィアが姿を見せた。

「シルバード様、街に到着したので此れからガルデアの中を見て周ろうと思います。」
「はい、どんなものを扱っているのか武器屋や防具屋を覗いて見ましょうか。」
「俺はどうするんだ？一応護衛として着いて来ているわけだが・・・。」
「ミコトさんは自由に街を探索なさって下さい。そうですねぇ～約６時間後に此処で待ち合わせする事にしましょうか。」
「分かりました、ちょっと見てみたいものがありますので失礼しま

す。」
「ミコトさん、あまり騒ぎ起こさないで下さいね。」
「いえシルバード様、寧ろ騒ぎを起こしてもらった方が情報を収集しやすくなります。」
「分かりました。しかし、俺はどういう風に見られているんだ？決して喧嘩っ早い性格ではないぞ。」

俺はブツブツと言いながらその場から立ち去り路地の奥へと姿を消した。

「では私達も参りましょうか。」
「「はい。」」

～ＳＩＤＥ　ミコト～

シルヴィア達と別れた俺はハイドさんに事前に教えてもらっていた武器屋を梯子していた。
「やっぱり竜の鱗なんて見当たらない物なんだな～」
（マスター・・・まだ諦めてなかったんですか！？）
（いや剣はルゥだけで十分だよ。気になるのは、一体幾らで売られているのかって事だけだよ。）
（鱗の希少価値の高さから言っても最低でも金貨５枚は見ておいたほうが良いと思いますよ。）
（金貨５枚！？幾らなんでも高すぎないか？）
（店によっては客をみて値段を吊り上げる業者もいますからね・・・。それよりもマスター、後方から頻(しき)りに後をついてくる男が物陰から此方を伺っています。）
（やっぱり食いついてきたか・・・。）

俺はシルヴィアに言われた騒ぎを起こすためにワザと色々な店で銀貨を道具袋から零(こぼ)してみたり、地面の凸凹(でこぼこ)で蹴躓(けつまず)いて財布の中身を散乱させたりと人込みの多い場所で数回にわたって繰り返し行ってきた。

その都度、周囲から楠見笑いが聞こえてきたりもしたが、ほんの数人だけは耳打ちして此方の様子を伺っている男達が常に数人見受けられていた。

「おぅ兄ちゃん、羽振りが良さそうじゃねえか。少し貸しちゃあくれねえか？」

「お前らは何者だ？何の用で俺を付け狙う。」

「そんな事はどうでもいいんだよ。　テメエはさっさと有り金を全て差し出せばそれで良いんだ。今なら命までは取らねえで置いてやるよ。」

「断るといったら？」

「馬鹿な奴だ。おい、お前ら出て来い！」

男の掛け声を合図にして路地の細道からゾロゾロと柄の悪そうな男達が手に各々の武器を持って集まってきた。その数、凡そ１００人。

「此れだけの人数を前にまだ軽口を叩けるか！？」

「頭(かしら)、それは無理でしょ？ほらコイツ怖くて震えてますぜ。」

「全くだ、身の程知らずが。俺達の縄張りに入った時からテメエを狙ってたんだよ、覚悟しな！！」

「此れだけか？」

「ああ！？なんだって？もう一度言ってみな？」

「たった此れだけの人数で俺に勝てるとでも本気で思ってるのかと聞いたんだ。」

「舐めやがって・・・。野郎ども完膚なきまでに痛めつけてやりな！！」

「さて、やるか。うまく殺さないように手加減しないとな・・・。」
（マスターの力で言えば百分の一ぐらいならギリギリ殺さないで済みます）
（わかった、うまく惹きつけてシルヴィアの仕事をやり易くするぞ）
「何をブツブツ言ってやがんだ!?命乞いならもう手遅れだぜ。」
四方八方から手にナイフを持ったゴロツキが俺に向かって襲い掛かってきた。
一方その頃のシルヴィア達はというと・・・。

～ＳＩＤＥ　シルヴィア～

「ご主人、もう少しまけて貰えませんか?」
「そうは言うがね、此方もギリギリな価格なんだよ?あんたは俺に首を吊れというのかい?」
「分かりました。他の店でもっと安く仕入れしたいと思います。」
「何処の店も似たような物だと思うよ。何せ、あいつ等に脅されている店が多いからな・・・。」
「『あいつ等』とは何の事なんですか?」
「それは言えねえ。言ったら何をされるか考えただけでも恐ろしい・・・。」
「シルバード様、そろそろ行きましょうか。エフィルも痺れを切らせております。」
「分かりました。ではご主人、失礼しますね。」
私達は十数件もの武器屋や防具屋・道具屋を回ったが何(いず)れの店の店主も最後には『あいつ等』という単語を残して絶句してしまうほどだった。

「一体『あいつ等』とは何なのでしょうか？何に怯えているのでしょう？」
「シルバード様、お疲れ様です。お飲み物をどうぞ」
「ありがとうございます、ドレイクさん。」

ドレイクが持ってきた紫色の一見、飲み難そうな飲物は見た目とは裏腹にとても美味しく疲れが吹き飛ぶような感覚さえ憶えた。

「ミコトさんは如何しているのでしょうか？怪我などしてなければ良いのですが・・・。」
「シルバードさま～～その心配は要らないと思うよ？だってミコトの能力がアレだから。」
「そういえばそうでしたね。問題なのは寧ろ襲い掛かっている人たちの方でしたね。」
「まあ、そのうち何らかの騒ぎが起こると思いますので気長に待っているとしましょう。」

私達が寛いでいる正にその時、裏路地で騒ぎが起きているとは思いもよりませんでした・・・。

第２８話　護衛依頼？　到着（後書き）

いつのまにやら総合評価ポイントが２０００を突破していました。

読者の皆様方の御愛読、まことに嬉しく思います。

これからも「異世界を渡りし者」をよろしくお願いいたします。

第２９話　護衛依頼？　暴走

表側の通りにシルヴィア達が居る事など思いもよらない俺は必死にゴロツキどもの相手をしていた。
ゴロツキの仲間に居ないとは思うが、もしも魔術師が居た場合は不味い事になるので必死にナイフを避けながら一人一人を確実に戦闘不能に追い込んでいった。
戦闘不能とは言っても殺しているのではなく、力任せに腕や足の骨を圧し折り戦闘意欲を削げているだけなのだが何処からともなく人数は増え、言うなればゴロツキ相手に無双している状態だった。

「テメエ等！これだけの人数で掛かって、たった一人仕留める事ができねえのか！？」
「しかし頭（かしら）・・・。」
「言い訳なんざ聞きたくねえんだよ。　人数不足なら街で暴れてる奴らに召集を掛けろ！！」

頭（かしら）の一声で五体満足なゴロツキ達は街の四方八方へと散っていった。

（これだけ騒げば、シルヴィア達も気づくよな。）
（不思議なんですが、どうして此れだけの騒ぎなのに街の警備隊が遣って来ないんでしょうか？）
（そうなんだよなぁ～　もしかして警備隊もこいつらとグルだったりして？）
（まさか。それは幾らなんでもありえないでしょう。）

一方その頃、休憩中のシルヴィア達はというと・・・。

「さて休憩しましたし情報収集の続きと行きますか。」

そう思いながら立ち上がろうとした瞬間、町が震えるほどの騒動が起き始めた。

「おい！裏路地で『あいつ等』と喧嘩している奴が居るんだってよ。見に行こうぜ」

「確かかそりゃ？『あいつ等』に敵う奴がこの街に居るのかよ？」

「聞いた話じゃ黒髪の奴らしいぜ。」

「黒髪か、この街の奴じゃねえな。冒険者か？」

「そんな事はどうでもいいだろ？　早く行かないと終わっちまうぜ。」

「いや、それなら逆に近づかないほうがいいだろうな。下手すれば巻き込まれるぞ？」

一般市民と思われる男達はそれ以上、裏通りには近づいて行こうとはせずに広場の中央で押し問答を繰り返していた。

「黒髪の冒険者とはミコトさんの事でしょうね。早くも始めてしまいましたか・・・。」

「でも、これで街の情報収集が遣りやすくなることでしょう。」

さて情報収集に行こうと腰を上げようとした時、隣に座っていた年配の男性が独り言のように呟いた。

「また『あいつ等』が騒いでおるのぉ～困ったもんじゃ・・・。」

「スイマセン御爺さん、『あいつ等』とは何なのですか？」

「あんたら『あいつ等』を知らないという事はこの街の住民ではないのじゃな？」

「はい、遠くマルベリアから商品の仕入れに参りました商人でございます。」

「『あいつ等』とは街の裏通りを我が者顔で牛耳るゴロツキどもの事じゃよ。金を持ってそうなカモを見つけると集団で襲い掛かり金品を強奪するのじゃ。この街の商店も上納金を払わなければ遣っていけない有様じゃ。」

「それで、どの店からも『あいつ等』という言葉が聞こえてきたのか・・・。」

「この街の警備兵は何をしているのですか!?そんな者達を野放しの状態にしているとは?」

「警備兵も『あいつ等』と左程変わりはしないのじゃよ、噂では『あいつ等』と警備兵には繋がりがあるとまで噂されているからのぉ～～」

御爺さんは自分の身など、どうでも良いかのように秘密を暴露してくれた。

「此れがこの街の現状なのですね。此れほどまでに腐っているとは!?

これでは商業都市ではなく犯罪都市ではありませんか。」

「シルバード様・・・。」

一方その頃、裏路地で暴れているミコトはというと・・・。

約２００もの人数を瞬く間に叩きのめし、ゴロツキ筆頭の頭(かしら)に詰め寄っていた。

「残るはお前だけだな!?　どうする?命乞いでもしてみるか?」

(マスター言葉が悪人になって来てますよ?)

此処で頭(かしら)が決して言ってはならない一言をとうとう口にしてしまった・・・。

「２２０もの部下をたった一人で叩きのめし本人は無傷だと!?テメエはバケモノか?」
「バケモノだと?」
（マスターから異常なほどの魔力を感じます!落ち着いてください!!）

その瞬間、俺の意識は途切れルゥの言葉ですら俺の耳には届かなかった。
一体あれからどれだけの時間が経過したのだろう・・・意識を取り戻すと空は赤くなり始め、倒した筈のゴロツキの姿は既になく、目の前には両腕両足の関節が異常な方向に折れ曲がり地面に突っ伏して達磨状態になり頻(しき)りに俺に対して命乞いをしている頭(かしら)と俺を力づくで取り押さえているグレイの姿があった。

「ドレイク?こんな所で何をしているんだ?」
「ミコト!?ようやく正気に戻ったのか!」
「俺は何をしていたんだ?その男に詰め寄ったまでは憶えているんだが・・・。」
「ミコトさん、憶えていないのですか!?
私達が此処に来た時には、その男に剣で止(とど)めを刺そうとしている直前だったため、3人がかりで取り押さえに行ったのですが健闘むなしく、引き剥がされてしまいました。もう駄目だと思ったときにミコトさんが正気に戻られたのですが・・・。」
「もぅミコト酷いよ。私を引き剥がしたと思ったら木に向かって投げつけるんだもん。」
「すまない、全く憶えてないんだ。怪我は無かったかエフィル?」
「それは大丈夫。訓練してるからね」
「シルバード様、この男は如何しますか?マルベリアに連れて帰る事を提案いたしますが・・・。」
「そうですね。エフィルさん、ドレイクさん、この男を縛り上げて

馬車に戻りましょう。」
「分かりました。しかし、この状態を見る限りでは縛り上げなくても大丈夫だと思いますが？」
「念のためです。馬車に到着後、エフィルさんに治療してもらおうと考えてますから。」
「そういうことですか、分かりました。男を束縛後、馬車に収容いたします」
「ミコトさんは大丈夫ですか！？エフィルに回復してもらいましょうか？」
「いや大丈夫だ。少しも疲れてはいない」
「そうですか？なら、馬車へと急ぎましょう。現場を見られると厄介でしょうから」

シルヴィアに言われて周囲を確かめると俺達5人の他には誰一人として存在していなかった。

「みんな、ミコトの覇気に恐れて近寄れないんだよ。私達は多少は平気だったけどね。」
「ミコトが正気を取り戻した瞬間に凄まじい覇気は掻き消えたからな、次第に人が集まってくるぞ」
「それならば急ぐとするか。エフィル重いだろ？俺が持つよ。」

俺がエフィルに代わって男を運ぼうとするが、俺を見た瞬間に男は声にならない叫び声を挙げて白目を向いて尿を垂れ流しながら失神してしまった。

「あらら・・・よっぽど怖かったのね、ミコトを見た瞬間に気絶するだなんて。」

結局、小便臭いのが嫌だと駄々を捏ねたエフィルに代わり俺が馬車

まで運ぶ事となった。
男が目を覚ましたのは翌朝になってからだったが・・・。

第３０話　護衛依頼？　説明（前書き）

物語の内容とともにサブタイトルにも悩みました。

第３０話　護衛依頼？　説明

翌朝、馬車の中で目を覚ました賊の頭（かしら）は俺の顔を見るなり、再度眠りに堕ちた。

「ミコトさん・・・・・・」

「此れは俺が悪いのか？」

「確実にミコトのせいよ！ほんの数時間前に自分を半殺し以上の目に合わせた男が目の前に居たら、誰であっても一目散に逃げるか気を失うかしかないでしょうが！！」

フィル達はいつ目覚めても良い様にと、光を全く通さない黒い布で男に目隠しをしていた。

男は思わず手を合わせたくなるほどに起きる気配がなく、馬車はマルベリアに向けて走り始めた。

「さっき脈と心音を確認しましたから、暫くすれば目が醒めるでしょう。それまでの間にミコトさんに聞いておきたい事があるのですが宜しいでしょうか？」

「答えられる事なら別に構わないが・・・。」

「では１つめの質問です。私達が裏道に行く前にミコトさんが倒した賊は何人くらいでしたか？」

「最初は１０人くらいだったんだが、その男の合図で続々と集まり始め最終的には約２００人になったんじゃないかな。」

「それでは２つめの質問ですが、その２００人の賊のうち殺害したのは何人ですか？」

「いや、一人も殺しては居ない。腕や脚の骨を砕いて戦闘意欲を削いだだけだったからな。」

「３つめの質問です。私達がミコトを止めに入った瞬間、周囲には

その男以外に誰も居ませんでしたがミコトさんが打ち倒した２００人は何処に行ったのですか？」
「すまないが其れは俺も知らない気が付いたら目の前にはその男しか居なかったんだ。」
「それでは最後の質問なんですが、ミコトさんはこの男に何をしたんですか？」

この質問を聞いて今まで興味を示さずに御者席でグレイと話していたフィルが突然、荷台へと戻ってきた。

「その話は私も興味ある。納得の行く説明を求めるわ！普段、温厚なミコトがあそこまで完膚なきまで相手を痛めつけたんだから、それなりの理由があるわよね？」
「俺も興味があるな。」

グレイは馬のたずなを引きながら顔だけを此方に向けて、会話に参加してきた。

「話したいのは山々なんだけど、男が発した言葉を聞いた途端に意識がなくなって気が付いたときにはグレイに取り押さえられていたんだ。」
「あの男はミコトさんに何を言ったのですか？」
「確か・・・『２２０もの部下をたった一人で叩きのめし本人は無傷だと！？　テメエはバケモノか！！』という台詞の後に意識がなくなったから『バケモノ』が禁句だったんじゃないかな？」
「『バケモノ』ですか？」
「シルヴィア様！？今言ったらまたミコトが！！」
「なんだグレイ？俺がどうしたっていうんだ？」
「何にも起こりませんね・・・。」

シルヴィアに禁句を言われたにも拘らず、俺は意識を失ってはいないと言う事は何か別の条件が必要になるのだろうか？

「そういえば、あの時も同じ様な事が起きたな。」
「その話、聞かせてもらえませんか？」
「ん？ああ、俺がマルベリアに到着してから散歩がてら街中を散歩していて裏通りに差し掛かったときに裏通りを牛耳る盗賊の頭（かしら）って男と４人の部下って奴と言い争いになってな、最終的には殴り合いの喧嘩になって４人を叩きのめし、頭に手を出そうとしたところで『バケモノ』呼ばわりされて意識を失い、暫くして意識を取り戻すと両腕両足の骨が砕けた頭が尿を垂れ流しながら必死に俺に許しを請うている姿が目の前にあって俺が倒した筈の４人の姿は何処にもなかったな・・・。」
「なるほど、あの時の事件はミコトが拘ってたんだね。」
「此れで質問は終わりに致します。込み入った話を聞いて申し訳ありませんでした。」
「ミコト、其処までするなんて容赦ないんだね！」
「全くだ。俺もミコトとは喧嘩したくはないな。」
「貴方達！不謹慎ですよ。　ミコトさん、フィルさんとグレイさんには後でキツイ仕置きをしておきますので、この場は私の顔に免じて許してください。」
「いや、別に構わないから・・・。」
「ミコト～コイツが目覚めるまで時間掛かりそうだから身体休めてね。」
「でも俺は護衛として雇われたはずだが？」
「魔物は私とグレイで討伐するから大丈夫だよ。」
「分かった。じゃあ休ませて貰うよ」

俺は意識がない間の事が気になったのでルゥに聞いてみる事にした。
裏通りの時とは違い今回はルゥが見ていてくれたはずだと思ったか

らだ。

（ルゥ、俺が暴れていた時の事を教えてもらいたいんだが？）
（マスター・・・あの時のマスターはまるで別人のように怖かったです。）
（何が起こっていたんだ？）
（あの時、男から『バケモノ』と呼ばれた直後からマスターの魔力の質が変わり人間とは思えないほど膨大な魔力を感じ取りました。）
（膨大な魔力か・・・。俺が回復する時にも魔力が膨大になるだろ？違いはあるのか）
（マスターが回復する時や超人的な身体能力を発揮する時も魔力は膨大するのですが、今回のは少なく見積もっても１０倍以上の魔力が感知されました。）
（１０倍以上か。）
（あの時のマスターには幾ら話しかけても私の声はマスターには届かず、私は見ているだけになってしまいました。）
（じゃあ、ルゥでも俺を止めることはできないのか。）
（私は身体を持たない、一精霊でしかないのでマスターの補助くらいしか出来ません。）
（いいんだ。ルゥは俺の大切な相棒だ！気にすることはない。）
（マスター・・・。ん？マスター、シルヴィアさんが呼んでいますよ？）

俺は剣の柄から手を離しルゥとの会話を中断した。

「ミコトさん、そろそろ男が目覚め始めています。目が醒めた直後から尋問を始めますのでミコトさんは声を発せずに見守っていてください。」
「分かった。俺は傍観者として此処に居させてもらう。」
「ミコトの声で怯えて気を失っちゃったら元も子もないしね～～」

「全くだ。ワハハハハハ」
「あ・な・た・た・ちーーー！！」

この会話から１０分後、男は覚醒しシルヴィア達による尋問が開始された。

第３０話　護衛依頼？　説明（後書き）

かなり無理矢理な展開になってしまいました・・・・・・。

第３１話　護衛依頼？　尋問、そして帰還へ（前書き）

アクセスＰＶが５０万を突破し、ユニークアクセスも９万に到達いたしました。

読者の皆様方、ありがとうございます。

第３１話　護衛依頼？　尋問、そして帰還へ

賊の頭は目覚めた直後、目が見えないことに対して混乱していたがフィルが事情を話すと半ば諦めたかのように大人しくなってしまった。

「それで、此処は何処だ？」
「此処は馬車の中です。貴方はこれからマルベリアへと身柄を拘束させてもらいます。」
「俺が何したって言うんだよ！？　俺は寧ろ、あの凶暴な男に襲われた被害者だぞ？」
「その男を最初に襲ったのは、あなた方ですよね？」
「はぁ？何の証拠があって俺が犯人扱いされなきゃならないんだ？」
「調べはついているんですよ？貴方がガルデアの裏路地を牛耳るゴロツキの頭で町の住民からも『あいつ等』と呼ばれていることも」
「『あいつ等』だ？何を訳のわからねぇ事をほざいてやがるんだ。」
「シラをきっても無駄ですよ？　街の住人からも噂話として聞きましたよ？裏路地は『あいつ等』の縄張りであり、先程の貴方の言う男に襲いかかった時に貴方は“此処は俺達の縄張りだ”と言い、他のゴロツキ達から頭と慕われていましたね？」
「さっきから何のことを言っているのかサッパリだな。」
「はぁ～～埒があきませんね。」

シルヴィアは俺が座っているほうを見ると手招きして俺を呼び寄せた。

「ミコトさん、協力してもらえませんか？声は出さずに、頷いて返答してください。」

シルヴィアは俺にしか聞こえないように小声で俺に話しかけて来た。
俺は黙ったまま首を縦に一回振ってシルヴィアの提案に応じた。

「私がこれからミコトさんに男に対して色々な事をするように言いますが、殴るようなフリだけで良いので私に合わせてもらえますか？」

俺はもう一度、頷いてシルヴィアの提案に応じた。

「此処まで応じてもらえないとすると力づくでの尋問になりますよ？」
「俺が其の男に襲いかかったなんて証拠は何処にもないんだ、尋問しても無駄だよ。」
「仕方ないですね・・・。」

シルヴィアは男の目隠しに使っている黒い布を剥ぎ取ると、男の顔が俺の正面になるように顔の向きを修整した。

「どうした？目隠しを外して、俺を解放する気になった・・・のか・・・！？」

男は俺の顔を直視した瞬間、蛇に睨まれた蛙の様に微動だにしなくなった。

「ではミコトさん、見せしめに男の腕を一本？ぎ取ってもらえますか？」
「了解した・・・。」

俺が指の関節をポキポキと鳴らしながら近づくと、男は必死に後退りして逃げようとするが男の座っている位置は既に荷台の端っこで、

ロープで雁字搦めに縛り上げてあるために逃げる事はできなかった。

「わ、分かった！何でも話すから、そいつを俺に近づけないでくれ！！」

「最初からそう言えば良いのに・・・。ミコトさん、その場で止まってください。」

「やっぱり、お前らの仲間じゃねえか。」

「いえ仲間ではなく、私達の護衛です。」

シルヴィア・・・それはズルいんじゃないのか？

「さて質問を再開するとしましょうか、先程の問いの答えですが貴方が『あいつ等』の頭（かしら）で間違いありませんね？」

「ああ、そうだ。」

「それにしても変ですね・・・。

どうして街の警備兵は貴方がたを野放しにしているのでしょうか？」

「警備兵だぁ！？　そんなもの、あの街には存在してねえよ。」

「そんなはずはありません。常時２０人の警備兵が街に滞在している筈です」

「ああ、言い間違えた。警備兵の制服を着ている奴は居る事は居るが、中身は俺達と然程代わらないぜ。」

「それはどういう事ですか？」

「俺達が利益の一部を警備兵に支払う事で犯罪を見逃して貰ってるんだよ。それどころか町の住人から街を守ってやってるからと金銭を要求している奴らもいるからな。」

「なによそれ～！？　ガルデアの警備兵になってるのはマルベリアの衛士達なんだよ？」

荷台の隅で尋問に参加せずに傍観者を決め込んでいたフィルが男の

一言に初めて反応を示した。

「エフィル、落ち着いてください。
それでは住民達は貴方達にも警備兵達にも苦難を強いられているということですか？」
「そういうことだ。」
「下劣な男が！」
「ミコトさん！？　落ち着いてください！」

俺はシルヴィアの制止を無視して男の襟首に手を触れると、男は叫び声とともに白目を剥いて失神した。

「ミコトさん・・・。　だから言ったのに。」

シルヴィアは顔に手を当てて俯いてしまった。

「シルバード様、急いで上に報告しないと！　ドレイク、あとどれくらいで到着するの？」

フィルは声を大にして御者席で手綱を握るグレイに話しかけていた。

「これ以上飛ばすと馬が潰れちまう。　今の速度で行けば到着はあと5時間ってとこだな」
「ドレイクさん、無茶をさせないようになるべく急いでください！」

シルヴィア、其れってかなり言葉が矛盾してないか？

「一応やって見ますが、休憩を挟まずに走り続けているので到着と同時に馬が動かなくなると思いますが宜しいですか？」
「住民の気苦労に比べれば馬一頭なんて安いものよ！」

未だに俯いている状態のシルヴィアに成り代わりフィルが返事をしていた。
その後、４時間ほどでマルベリアに到着したが馬は４本足で立っているのも辛いらしく、ペタンと町の門で息を切らせて座り込んでしまった。

「直ぐにこの男を収監してください。私達は大急ぎで城へと向かいますよ！！」

シルヴィア達は全速力で城へと走っていったが、何故か途中で引き返してきた。

「ミコトさん、護衛ありがとうございました。また何れ、依頼をすると思いますのでその時は宜しくお願いしますね。」
「ミコト、楽しかったよ。またね」
「ミコト、今度飯でも行こうや！じゃあな。」

軽い挨拶を済ますと、今度こそ振り返らずに城への道を走っていってしまった。
俺はそのままギルドへと向かい、護衛依頼完遂の報告をして銀貨８０枚を報酬としてもらい更にミノタウロスの討伐分として銀貨９枚を追加で貰った。

その後、宿屋で少し早い夕食を摂った俺は疲れのためか、ルゥに呼ばれたかは分からないが逸早く夢の世界へと誘(いざな)われた。

第３１話　護衛依頼？　尋問、そして帰還へ（後書き）

なんとか、この回で護衛関係の物語を終了させ、次回からは魔法関係の物語を作る事を頑張るつもりです。

第３２話　ルゥの提案

宿屋の自室のベッドに横になった俺はあっという間に夢の中に誘われた。

（ここは・・・夢の中か？）
（正解ですマスター。少し気になる事があり、話したかったので此方に呼ばせていただきました。）
（ルゥ、俺は旅で疲れているんだけど？）
（心配しなくてもマスターの身体はグッスリと熟睡していますから疲れは取れますよ？）
（精神体だけって・・・。疲れないだろうな）
（大丈夫ですってば！　早速ですが、マスターはどのようにして今のような身体になったか憶えてますか？）
（それが気になる事か？前に言ったかも知れないが、家族旅行の際に乗っていた飛行機が爆発炎上して俺だけが無傷で生き残って・・・。その当時から俺には驚異的な能力が備わったと思ってるが？）
（で、其れから１０年後に夢の世界で誰かに呼ばれて、この世界に遣って来たという訳ですね？）
（その誰かもレグリスの糞女だと判明しただろう？）
（それがおかしいんですよね・・・。）

俺にはルゥの言っている“おかしい”という意味が理解できなかった。

（それを今から説明するんですってば！！）
（心を読むなよ。）
（聞こえちゃうんですよ。）
（だから何がおかしいんだ？）

（レグリスの姫が夢に交信を出来る程の強い魔力を持っている事自体が驚異的でもありますが、恐らくマスターの世界で呼びかけていた方はレグリスの姫ではないと思います。）
（だが、あの時の糞女は一ヶ月前からと言っていたし、時期は合ってたぞ？）
（それも偶々《たまたま》だと思います。どれほど強力な魔力を持った人であったとしても、異世界まで届くような交信は人の身では絶対にありえません。）
（じゃあ、あの時の声は？）
（考えられる事は神様であるか、または私と同じ精霊であるかしかないと思います。）
（神か精霊・・・。精霊ってルゥ以外にも居るのか？）
（居る事は居ますが、膨大な魔力を持っている方か同じ精霊でないと姿を見ることはできませんし、声を聞くことも出来ません。私の場合は剣に宿っている精霊ですので、波長があえば今のように会話できますが・・・。）
（じゃあ、俺には無理なのか。）
（此処でマスターに提案なんですが、魔力の修行をして見ませんか？）
（修行？魔力を増やせるのか！？）
（普通の人なら何十年かの修行が必要ですが、マスターなら上手く行けば数日で魔力を増やせるかもしれません。）
（魔力が上がれば魔法を使う事が出来るとか？）
（勿論可能ですし、マスターの回復時の魔力量から言えば無詠唱で魔法を使う事も出来ると思います）
（じゃ早速、修行開始といくか。）
（待ってください。夢の中では精神体だけのため修行は出来ません。目が醒めてから誰も居ないところで修行しましょう。）
（分かった。とっとと目覚めるとするか）

俺が自身で目を覚ますと夢の中であれだけ会話していたにも拘らず、疲労感は全く無かった。

「身体の疲れも全然感じないし、朝飯でも喰ってこようかな。」

俺は剣も鎧も身に付けずに酒場へと降りると、レインから呆れた様な声で話しかけられた。

「ミコト、やっと起きてきたのかい？よっぽど疲れてたんだね～。もう昼過ぎだよ？」

「ええーー！？俺、そんなに寝てたんですか？」

「アタシも朝食時に起こそうとして戸を何度か叩いたんだけどね、全く起きる気配は無かったよ。」

「それじゃ朝食は？」

「朝食は無理だけど、昼食なら今から作れるよ？」

レインの発言に他の客達からも苦笑の声が上がっていた。

「依頼で稼いできたので４人前くらいの量でお願いします。」

「金さえ払ってくれれば構わないけど、残したりしたら許さないよ！」

「大丈夫ですよ。」

数分後には４人が座れるテーブルに大量の料理が並べられた。

「４人分だと此れだけの料理になるよ？本当に食べ切れるんだろうね！？」

「さてと、取り掛かりますか。」

それから３０分後・・・。

「ごちそうさまでした！！」
「まさか、こんな僅かな時間で全て食べてしまうとは・・・。」
テーブルの上にはピサの斜塔のように倒れそうで倒れないアンバランスな皿の山が積み上げられていた。
「美味しかったですし、量も十分でした。代金はお幾らですか？」
「あ、ああ。銅貨２０枚だよ。」
俺は道具袋に手を突っ込んで銅貨を取り出しレインさんへと手渡した。
「じゃあ、部屋に戻りますね。」
俺は部屋へと戻ると直ぐに剣の柄を握ると、俺が喋る前にルゥから話しかけられた。
（マスターすいません。会話に夢中になっていて起こすのを忘れてました）
（いや、いいよ。のんびり出来たしね）
（それでは、軽い討伐依頼を受けて修行を開始しましょうか。）
（場所は何処のほうがいいんだ？）
（マスターの場合は特別な方法を用いますので人目につかないよう、森の中の方がいいでしょう。）
（通常はどんな修行なんだ？）
（普通の魔術師なら毎日毎日、魔力がなくなるまで魔法を使い続け１日１日で魔力を少しずつ増やしていくような修行が一般的です）
（俺は魔法なんて使えないからな・・・。）
（それでマスターの能力を生かした修行方法を試してみようと思い

ますが、用意していただきたいものが一つあります。）

俺の能力といったら超人的な身体能力と回復能力しか思い浮かばないよな・・・。

（簡単に手に入るものか？）

（はい。武器屋か道具屋にて使いやすそうな小型の錆びにくいナイフを購入してください。）

（錆びにくいナイフか、今から買いに行くぞ。）

（はい。）

数分後には宿屋を出てハイドさんが営む武器屋へと到着した。

「おぅ兄ちゃん、今日はどうしたんだ？」

「ちょっと小型のナイフが必要になりまして・・・。」

「兄ちゃんの武器は剣だろ？何に使うんだ？」

「ちょっと修行と言うか、雑用をするための道具ですね。」

「雑用か・・・。それなら軽くて使いやすい方がいいよな。今此処にあるナイフといえば、鋼のナイフか銀のナイフだな。」

「錆びにくいナイフはどちらですか？」

「それなら銀のナイフだ。買うか？銀貨2枚でいいぜ！」

「買います。」

そう言って銀貨を取り出しハイドさんへと手渡した。

「兄ちゃん、仕事頑張れよ～～」

俺はハイドさんに手を振りながら武器屋を後にしてギルドへと向かって歩いていった。

「あ、ミコトさん。今から仕事なんですか？」
「ああ、何か森に行くような討伐依頼が無いかと思ってね。」
「ミコトさん、ひょっとしてリザードマンを倒しに行こうとかって考えてません？駄目ですよ！！」
「違うよ、ちょっと修行がしたくてね。なるべく人目につかないところに行きたいんだ。」
「修行って・・・ミコトさんは十分すぎるほど強いのに。」
「とりあえず掲示板を見させてもらうね。」

ギルドの入口でローラと別れ、掲示板へと歩いていくが、どれも平原にてB級の討伐依頼ばかりでランクアップの経験値になるA級依頼や森に行くような依頼は何処にも無かった。

「条件があうような依頼が存在しないな・・・。」
「少し前にミコトさんが森でリザードマンを見たと仰られてから森に行くのは危険ということで、森方面の討伐依頼や採取依頼は当分の間、受理しない方向になっているんです。」
「そうなのか・・・。」

ギルドから外に出ると空は既に夕焼けから夜の暗闇に変わろうとしていた為、その日は外に出る事を諦めて宿屋に戻る事にした。

第３２話　ルゥの提案（後書き）

レグリスの皇女が召喚した事を否定する内容にしてみました。

この後の展開で物語の内容に変化が訪れます。

此処でネタをバラしてしまっては面白みがなくなるので、次の更新を楽しみにお待ち下さい。

第３３話　朝霧の中で・・・・・・・（前書き）

ユニークアクセス１０万人突破！　アクセスＰＶも６０万に到達しました。

第３３話　朝霧の中で・・・・・・

ギルドから何の収穫もなく宿屋へと帰って来た俺は早めの夕食を酒場で食べていた。

「あれだけの量を昼に食べて、よくそんな量を食べれるねぇ～～」
「育ち盛りですから、大量に食べて体力つけないと・・・。」

俺は食べながらも冗談半分にレインさんと話していた。

「レインさん、もうそろそろ銀貨１枚分の宿泊費がなくなる頃じゃないですか？追加として銀貨１枚を支払いますよ。」
「ああ、あれか。１ヶ月分の滞在費として受け取ったけど、まだ半分以上残ってるよ。」
「え！？でもあれから１ヶ月以上は経過してますよね？」
「確かにそうだけど、依頼とかで半月以上は宿に帰ってきてないんだから期限は早くても１０日以上先だよ。」
「でも１部屋借り続けてるわけだし・・・。」
「宿の部屋が満室になったことなんて今まで一度だってないしね。気にしないでいいよ！」
「分かりました、ありがとうございます。」

夕食をレインさんとの会話とともに終了した俺は部屋に戻り、ルゥと会話する事にした。

（森行きの討伐依頼はなさそうだな・・・。この部屋で修行するのは不味いのか？）
（町の中だと何処に魔術師が居るか分かりませんよね？　下手したら隣の部屋に居る可能性だってあるんですから、此処で修行するの

は不味いですよ。）
（魔術師が居ると不味いって言うのはどういうことだ？）
（忘れたんですか！？マスターの覚醒時の魔力は大きすぎるのですよ。）
（普通の魔術師で言うと何人分くらいだ？）
（普通の魔術師だと曖昧なので分かりかねますが、ガルデアに行った時のフィルさんっていう魔術師の方が居ましたよね。）
（ああ、ルゥが上級魔術師だと言っていた、あのフィルか？）
（そうです。マスターの覚醒時の魔力はフィルさんの１０００人分以上です。）
（１０００人以上！？流石に規格外だな・・・。）
（そんな魔力の持ち主が街中に居ると、大騒ぎになる事は目に見えて明らかですよ？）
（そういえばフィル達にはバレたけど、騒ぎになって無いところを見ると秘密にしてくれているようだな。）
（ちゃんと約束を守ってくれているようですね。まぁ、目の前で見せられない限り誰も信用してくれないとは思いますがね。）
（それにしても修行場所か・・・。依頼を受けずに森に篭って修行しようか？）
（そのほうが無難ですね。朝早くに宿を出発して森に行く事をお勧めします）
（じゃレインさんに朝食の断りを言ってくるわ。）
（あと森の果物以外の食物なら、今のうちに食料品店にて揃えといたほうがいいですよ～）
（分かった。それも買ってくるよ）

俺は剣を腰に挿すと宿屋の１階で後片付けをしているレインさんに明朝出かけるので朝食は要らないと言い、その足で食料品店へと足を運び、銀貨１枚で買えるだけの干し肉などの携帯食料を買い占めた。

『大体此れだけで４日分と言うところだな・・・。足りなければ果物で我慢するか。』

漫画的な泥棒が持つ袋のように、食料を抱えた俺は宿屋へと戻り翌朝のために早めの就寝となった。

（マスター、起きてください。そろそろ出発するとしましょう）

寝起きに自信の無かった俺は剣を握って眠りにつき、ルゥに起こしてもらった。
ちなみにハイドさんの店で買った銀のナイフは忘れないように反対側の腰に装備してある。

（おはようルゥ。じゃあ行くか！）
（はい。）

宿屋の入口から外へと出た俺は時間が勿体無いため、ルゥに周囲の気配を確かめて貰いながら森へと全速力で走っていった。

（マスター、目にも留まらぬ速さとは、まさにこのことですね。）
（このスピードなら森まで１０分も掛からずに到着できるぞ。）
（そうですね。あ、マスター！１ｋｍ先に人の気配がします。ゆっくり歩いてください）

この世界での距離の単位はエトがｍ、エルトがｋｍであるが、分かりにくいためルゥには現代の単位で表現してもらうようにお願いしている。

（分かった。）

俺は前方に吹き飛ばされそうな遠心力で急停止をかけた。
朝霧のために見通しが聞かない平原を、ルゥという名の剣の形をした気配発信機を使って注意深く進んでいった。

（マスター、前方３００ｍに人の気配がします。殺気は感じられないので敵ではないと思われます。）
（分かった。一応は警戒しておくさ）

暫く歩いて行くと、前方から人型の黒い影が近づいてきた。
霧のためか輪郭くらいしか見えないが、黒い影のほうへと近寄っていくと身長が２ｍ近くもあるガッシリとした体格の巨漢な男が巨大な斧を手に持って近づいてきた。

「ん、オヌシは冒険者か？　この深い霧の中では見通しが利かんからな注意せえよ！」

目の前に現れた男は額から左目の上を通って顎までの印象的な傷がある大男だった。

「あの、あなたは？」
「人に名を尋ねるときは、自分が先に名乗るのが礼儀というものだぞ？　まあいい、俺の名はガイアスだ宜しくな！」
「あ、失礼しました！俺の名はミコトと言います。よろしくお願いします、ガイアスさん」
「ミコトか、変わった名だな。おっと失礼した、人の名前に対して変わった名だとは失礼にも程がある行為だな。」
「いえ、構いませんよ。」
「そう言ってもらえると助かる。　此の先の森で凶暴な魔物が目撃されたとの情報が寄せられたからな、注意して進めよ？じゃあな！」

巨漢の男は顔に似合わず丁寧な物言いで俺に注意を促したあと、マルベリアの方向に歩いていった。

（マスター、先程の方ですが此方に対して一瞬たりとも隙を見せませんでした・・・。）

（でも、そんな悪い人には見えなかったな。丁寧で礼儀正しいし）

（それにしても、あの方はこのような場所で何をしていたのでしょう？）

（まあ、いいさ。森に急ぐとしようか）

ガイアスと名乗った男を気にしながらも森へと向かって歩いていった。

その頃、挨拶とともにすれ違ったガイアスはというと・・・。

「良い目をした青年だったな、いつか手合わせをしてみたいものだ。おっと、こうしては居られんな早く帰らねば、またシルヴィアに小言を言われてしまうではないか！」

ガイアスは図体に似合わない理由で急いでマルベリアへと帰っていった。

第３３話　朝霧の中で・・・・・・・（後書き）

此処に来て、謎の男出現です。

第３４話　想像すると痛～い修行

色々な事がありながらもリザードマンと対峙した森に到着した俺は早速修行を開始しようと意気込んでいたのだが。

（マスター、修行の集中力の妨げになってしまいますので周辺に居る魔物を討伐してしまいましょう）

（分かった。とりあえず俺の周囲２００ｍ以内に居る魔物の気配を読んでくれ。）

（暫くお待ち下さい・・・。マスターの前方１００ｍの辺りにリュナイト３体と右に７０ｍの辺りにワイルドウルフが４体居るだけです。どちらも此方の様子を木の陰から伺っています。）

（じゃあワイルドウルフを倒して、そのままの勢いでリュナイトを倒すぞ。）

（了解しました）

そして約１時間後、行き成り増えてしまったリュナイトとあわせて計１０体の魔物を討伐した。

（マスター、お疲れ様です。御休憩なさってから修行を始めますか？）

（いや、たいして疲れても居ないし直ぐに実行しようか。）

（分かりました。とりあえず、湖の近くまで移動しましょうか？此処では血の匂いが強すぎます。）

それから５分後・・・。

（湖に着いたな。周囲に魔物や人の気配はあるか？）

（先程確認してみましたがマスターの周囲５００ｍ以内には魔物・

人間・動物の気配は皆無です。）
（なら修行を開始するとするか？俺の能力を利用すると言ってたが、如何するんだ？）
（その前に武器屋で購入した銀のナイフを刃を下にして手に持ってください。）

俺は腰に装備している銀のナイフをルゥに言われたとおり剣を持っている逆の方の手で握り締めた。

（用意できたようですね。　では、これから修行の内容を説明いたします。マスターの身体は超人的な身体能力を発揮する時や怪我をした際の治癒時に膨大な魔力を発生します。）

確かに言われるとおり、そんな時のみ魔力が発生し通常時は全く魔力が無い状態だ・・・。

（そこで一時は平原で走り回ってもらおうと考えましたが、それではマスターの体力の限界が直ぐに来ますし、誰かに見られて大騒ぎになる可能性が予測されます。）
（確かにな・・・。そんな速度で走れる人間なんて存在しないわな。）
（だからと言って、森で全力疾走しようものなら確実に木が邪魔になります。）
（まぁ、俺だって木をなぎ倒しながら走りたくはないしな。）
（其処で思いついたのがマスターの治癒能力です。マスターは刺されても骨折しても痛みを感じる事はありませんよね？）
（ああ、最初は針で突かれたような鋭い痛みがあったが、成長とともに慣れてきた所為か痛みは全く感じない身体になってしまったな・・・。）
（それでマスターの身体にナイフを突き刺して治癒時の魔力の流れ

をマスターに掴んでもらおうという修行をしようと思いますが宜しいですか？）

（ああ構わない。自分で自分の身体を傷つけるのは少し怖い気もするが、痛くは無いから多分大丈夫だ。）

（ではマスター、湖の畔に座って精神を集中させてください。）

俺は黙って頷くと何も考えずに座っていたが、腹の減りが気になり始め・・・。

（マスター、集中してください。肉料理のことなんて考えないで）

俺は再び集中し始めた。何も考えず、精神を集中し始める。

（マスターの準備が整ったようですので修行を開始しましょう。ではナイフを自分の刺しやすい場所に突き刺してください。）

（刺しやすい場所ってな・・・。足で良いか。）

俺は意を決してナイフを自分の右太腿へと垂直に突き刺した。

だが、血も出なければ痛みすら微塵ほども感じる事はなかった。

（ではマスター、精神集中した状態のままナイフを引き抜いて魔力の流れを感じ取ってください。）

俺は目を瞑り、精神集中しながら足に刺したナイフを引き抜いた。

いつもの様に身体の奥底から何かが湧き上がってくるような感覚があるものの何にも感じはしなかった

（マスター、治療が完了しましたが何か感じましたか？）

（いや、いつものような何かが身体の中から湧き上がってくる感覚はあるものの、それ以外は何も感じないな。）

（身体の中から何かが湧き上がるって・・・それが魔力なんです。その魔力を常に維持できるようにしてください。）
（維持できるようにか、難しいな。）
（最初から上手く出来れば修行になりません。何回も何十回も繰り返し刺しましょう！）
（刺しましょうってお前な～～。まぁいいか、さて何回目で成功するかな？）

修行開始から４時間が経過・・・。突き刺した回数は８０回

（マスター、身体の中で火をイメージしてください。そして治癒時には火炎になるイメージを）
（何とか・・・。）

修行開始から９時間が経過。突き刺した回数は延べ１５０回以上

（マスター、今のは少し惜しかったですよ。今の感覚を忘れないようにして次行ってみましょう～～）
（次って、お前はドリフのリーダーか？）

修行開始から１２時間が経過。突き刺した回数は２００回以上

（マスター、振り出しに戻りましたね。どうしたんですか！？）

ルゥはそう言うものの、腹が減って如何しようもなかった。

（婆さんや、飯はまだかいの？）
（御爺さん、さっき食べたばかりでしょ。・・・って何を言わすんですか！？誰が婆さんですか誰が！真面目に修行してください！！）

そして開始から15時間が経過して1日目が終了した。
地面で寝ていた時に魔物に襲われるのは嫌なので10mくらいの高さにある木の枝まで飛びあがった。

（マスター先程のは惜しかったですね。）
（そうだな、220回が過ぎた辺りから種火のような感覚が身体の中心にあるような感覚だもんな。）
（辺りも暗闇になりましたし、修行1日目は終了ですね。）
（しかし、俺が常人だったら最初の10回目くらいで発狂して死んでただろうな。）
（そもそも、普通の人間相手にこんな修行方法は出来ませんからね。）
（それにしても、会話してる時でも精神集中を怠(おこた)るなとは無茶じゃないか？）
（ちゃんと出来てるじゃないですか、その感覚のまま今日は就寝しましょうか。）
（鬼ーーー！！）
（私は精霊ですってば！！それではオヤスミなさい）

俺は木の枝の上でルゥによって強制的に夢の中に誘(いざな)われ軽い成果で眠りについた。

第３４話　想像すると痛～い修行（後書き）

色々な面白げな修行を四苦八苦して考えながら、何とか更新する事ができました。

第３５話　修行の成果

修行１日目に微妙な成果を上げた俺は晴れやかな気分で２日目、３日目の修行に臨んだ。

（さて、今日も修行と行きますか。それ！ブスっとな）
（マスター・・・。真面目にやってくださいよ）

それから更に日数が経過して５日目、起床して７時間が経過し刺した回数も、ゆうに１０００回を越した頃に初日に種火状態だった魔力がキャンプファイヤー並みに感じる事が出来た。

（マスターやりましたね！！成功です）
（そうだな、俺の脚を蜂の巣状態にしたかいがあったよ。）

と言っても直ぐに自動治癒されてしまうので傷跡すら残ってはいないが・・・。
最初の頃は痛みは感じないとは言っても、自分の身体にブスブスとナイフを突き立てるのは恐怖感があったが、回数が１００回を越える頃には何も感じなくなっていた。
そして時刻は昼頃になり、やっと魔力の安定化を習得し始めた。

（マスター、思ったよりも断然早く魔力を掴めましたね？）
（魔力は良いが、身体の中から今にも漏れ出すような感覚に慣れないな・・・。）
（マスターの魔力が規格外すぎるのが問題なんです！）
（それで？このまま放出し続けるのか？幾ら俺でも、すぐに底がつくぞ）
（いえ、魔力が放出され始めてから測定をし続けていますが、１ｍ

mたりとも減っていません。）

宛ら、スーパーサイヤ人のような光のオーラを纏った感じで俺は立っていた。

（ではマスター、次の修行を始めたいと思います。）

（次？魔力を放出させる修行ではなかったのか？）

（随時、そんな量の魔力を放出させた状態では街に居られませんよ！？）

（まあ、魔術師が普通に街中を歩いている時に魔力を感知して騒がれるのは目に見えて明らかだしな）

（それにしても・・・。まさか此れほどの量の魔力だとは思いも依りませんでした。）

（そうなのか？一般の魔術師と俺の魔力とでは何対何くらいだ？）

（えっとですね、例えて言うなら一般魔術師の魔力を１００とするならマスターの魔力はゆうに１０００万は超えています・・・。）

（１０００万！？最低でも１０万倍か。）

この魔力の所為か放出前まで『あの人間は何をしているのか？』というような顔で遠巻きに眺めていた野生動物は、放出した瞬間に影も形も気配すらも感じられないほど遠くへ逃げてしまっていた。

（ま、まぁ気を取り直して修行を続けたいと思います。次は魔力を全て身体の中に戻してください。）

（魔力の放出の修行に続いて次は魔力の収納か・・・。）

（マスターの世界で言うならば、宝くじで当たったお金を銀行に預けるようなものです。）

（よく“宝くじ”なんて言葉を知ってるな。）

（マスターの思考を読ませて頂きましたから、因みに的中率は・・・０％ですね。）

（人の痛々しい傷口をグサグサと突き刺しやがって。）
（どうせ治療されるんですから、良いじゃないですか。）
（そういう問題じゃない！　まぁいいか、修行を開始するぞ。）
（はい。頑張ってください）

今度は肌を傷つけることなく、自分の身体に収納するだけだがルゥの言うように簡単に出来る筈はなく、あと1歩というところで暴発してしまうと言う結果が数時間に及んでいた。

（くそ！上手く行かないな。）
（マスター、魔力を収納しない状態で魔法を使ってしまうと一瞬で半径１００ｋｍは焦土と化しますので、絶対に成功させないといけません。）
（分かってはいるんだが、あと少しが収まりきらないんだ。）
（マスターの身体から出たんですから、確実に収納できる筈です。頑張って制御しましょう）
（どれだけの時間と日数が掛かるか分からないが、絶対に成功させてみせる！）
（その意気です。頑張りましょう）

言うなれば、ある一定の方向でしか箱の中に収める事のできない物体を無理矢理にでも箱に詰め込むような修行をしているわけで、余程上手に入れないと絶対に収納できないような魔力を必死に嵌め込もうという修行をしているわけである。

（くそ、また失敗だ！）
（マスター、精神集中が乱れていますよ?少し休憩して、気を落ち着かせてから再挑戦しましょう。）
（そうだな、腹も減ったし少し休憩するとしようか。）

その頃、マルベリアの城では・・・。

「なんだと!?森で莫大な量の魔力を検知しただと?」
「はい。近くで街道警邏をしていた魔法騎士によりますと、寒気がする程の強大な魔力を感じたとの事です」
「あの森でか。ギルドからの報告にあった、リザードマン以上の魔物が生息している可能性が大だな。」
「どうします?騎士隊を調査に向かわせますか?」
「調査に行ったところで騎士隊数人で対処できると思うか?」
「無理だと思います。行ったとしても返り討ちに遭うのが関の山でしょう。」
「我々の判断では手に余るな、陛下に相談し対処方法を求めよう!」
「その方が無難でしょう。場合によっては近衛隊を派遣するよう頼めるかもしれませんし。」

そんな事とは露ほども知らないミコトはと言うと、膨れたお腹を擦りながら精神集中を始めていた。

(マスター、いい調子ですよ。もう少し・・・もう少し。)
(雀の涙の分だけが残って・・・。クソー!!)
(あっマスター!?)

思いっきり叫んだところで入りきれなかった魔力が上手い具合に収納され、全ての魔力が体内に入った

(あれ?成功・・・したのか!?)
(おめでとうございます、マスター!　残る修行は一つだけです。)
(やっと成功か。気が緩んだら眠くなってきたよ、少し寝るから明日の朝に起こしてくれ。)
(わかりました。ご苦労様でしたマスター)

結局、魔力の収納に丸一日を費やし、気づいた頃には空は夕焼けに差し掛かろうとしていた。

第３５話　修行の成果（後書き）

どんな展開にしようかと必死に考え、なんとか形にする事ができました。

かなり無理矢理な気がしますが・・・。

第３６話　魔法の実践

魔力制御の朝、俺は朝食を摂りながらルゥに気になる事を聞いてみる事にした。
モシャモシャモシャ・・・バリバリ・・・
（マスター、右手に実っている赤い実も美味しいですよ？）
「これか？　どれどれ・・・。」
俺はルゥに指摘された果物を手に取ると一息に齧りついた。
「うん、少し変わった味だが甘酸っぱくて瑞々しい果物だな。」
最後に湧き水で喉を潤して食事を終了させる。
ゴクゴクゴクゴクッ、プハァー！！
（そういえば魔力が上がれば精霊と会話できるって言ってたが、ルゥ以外の声は聞こえないんだが？）
（この森は魔物出現率が多いため精霊は安心して棲めないので、此処には精霊は居ません。　居るとすれば、上位精霊である水の精霊は清らかな澄み切った湖に、火の精霊は炎が猛々しく燃え上がる火山といった様に其々の性質が強い場所に生息しています。下級精霊の木の精霊や花の精霊も居る事は居ますが、魔物の影響が強すぎて此処にはいません。）
（それじゃあ此処に居るのはルゥと俺と魔物だけという訳か・・・。）
（ところでマスター、気づいていますか？）
（ルゥ？如何したんだ改まって。）
（その様子だと気が付いてませんね。昨日からマスターと普通に会

話できている事を）

（普通に会話？いつもルゥと話してるだろ？どうしたんだ。）

（修行１日目は魔力に目覚めてなかったため剣の柄を握った状態で会話してましたが、昨日から剣の柄に触ってもいないのに会話できてますよね？）

無意識とは恐ろしいものでルゥが宿る剣は鞘に入れたまま腰にぶら提げ、一瞬たりとも剣に触っても居ないのに、普通に会話していた事をルゥに指摘されるまで気づかなかった。

（本当だ・・・。剣の柄に触れてもいないのに、ルゥと会話できている。）

（私が前に言った『魔力があれば精霊と会話できる』と言った事を身を持って体感しましたね。）

（そうなると今からず～っと、ルゥには隠し事は出来ないという事か！？）

（本当なら隠し事なんてして欲しくないのですが・・・。もし、考えを読まれたくないのであれば剣から１００ｍ以上離れてくだされば私とは会話は出来なくなります。）

（それなら会話出来ないだろうが、ルゥがいないなんて考えられないな。）

（ありがとうございます。）

ルゥとの会話で朝食後の休憩が終わった俺は早速、修行を開始する事にした。

それにしても剣の柄を持たなくてもルゥと話せるとは結構、楽だよな。

（それじゃあ、腹も膨れて食休憩も終わったから最後の修行を始めようか！）

（そうですね。最後は魔法の使い方についてです）
（おお、やっと夢だった魔法が使えるのか！？）
（それでは此れから説明いたしますが、私が良いと言うまで絶対に魔法は使わないで下さいね？）
（意味が分からないが、とりあえず分かった。）
（曖昧な返事ですね・・・。とりあえずは魔法の説明からです。）
（ふむふむ。）
（一般的な魔法には火・水・氷・雷・風・土・光・闇・回復・移動・空間の１１種類があります。　色々な属性が存在し魔法の呪文も大量にあると考えがちですが火・水・氷・雷・風・土の６属性の場合は各種１個づつの呪文しか存在しません。）
（でも魔法には初級・中級・上級の呪文が付き物じゃないのか？）
（この世界の魔法は呪文を唱える時に込める魔力の量で威力が異なります。例えば火の魔法であるファイアーなどは魔力を極小にすれば焚火のときの種火になりますし、マスターの場合、最大限に魔力を込めますと、この森ぐらいなら一瞬で焼き尽くすくらいの威力になります。）

冗談じゃないな、下手にキレてしまおうものなら街一つは確実に吹っ飛ぶな・・・。

（じゃあ、俺が今からする修行は魔力の調節か？）
（その通りです。ではまずはマスターの身体の中にある栓を少しだけ緩めて魔力を出してみましょう）
（どうやって緩めればいいんだ？）
（マスターが心の中で、魔力の蛇口を少しだけ開のほうに回せば魔力は放出します。）

俺はルゥに言われたとおり心の中で少し蛇口を緩めて、小出しで水が流れ出るようなイメージをした。

（マスター上手ですね。そのくらいが下級魔法の魔力です。では、その魔力の量を維持したまま湖の方に手を向けて『アイシング』と唱えてください。）

（わかった。）

俺はやっと魔法を使えると思い、気が緩んだまま魔法を唱えようとしたが・・・。

「アイシ（マスター止まって下さい！！）・・・！？」

あと2言を言おうとして何故かルゥに詠唱を止められてしまった。

（はぁ～間に合った～）

（どうしたルゥ？なんで止めたんだ！？）

（マスター、気を緩めたと同時に魔力の栓も緩めましたね！？今の魔力の量で魔法を唱えたら、この森は氷漬けの状態になってしまいますよ？）

ルゥに言われ魔力の流れを感じ取ると、栓が壊れたような状態で大量の魔力が流れ出ていた。

（マスター幾ら、やっと魔法が使えるからって気と一緒に魔力の栓まで緩めては駄目です！！）

俺は水道の蛇口のイメージから数え切れないくらいの目盛りが刻んであるダイヤル式の物を想像した。

ついでに心の中でダイヤルを言語認識に設定して俺が例えば『1』とか『2』とかと心の中で思わない限り、ダイヤルが動かないように設定した。

（マスター・・・変わったものを想像しましたね。）
（これなら緩まなくていいだろ？）
（それでは先程の量と同じくらいの魔力を放出してください。）
（クラス１！）
（だいぶ少ないですね・・・。もう少しだけ多く出してください）
（それじゃあ、クラス５！）
（それぐらいが妥当ですね。では先程と同じ魔法を唱えてみましょうか）

俺は右手を垂直に湖の方向に向けて呪文を唱えた。

「アイシング！」

呪文を唱えた直後、右手から数ｃｍ離れた場所に氷柱（つらら）の様な物質が出来上がり、湖の向こう岸に着水。湖の一角に氷の層が出来上がったが直ぐに消えてなくなってしまった。

（マスター、成功しましたね。　此れが最下級の『アイシング』です。）
（今・・・一瞬、手から氷柱が飛び出して。）
（それが魔法なんです。とりあえず、もう少し練習したら修行完了として街に戻るとしましょう。）
（分かった。）

俺は其れから数時間ほど色々な魔法を使って森に色々な変化を齎（もたら）して最後の森での眠りについた。

第37話　伝説の魔法？

翌朝目が醒めた俺は朝飯代わりにルゥに教えられた様々な種類の森の果実を食べていた。
街で購入した食物は昨日の夕飯として全て食べきってしまっていた。

（なあルゥ、属性魔法は教えてもらったけど残りの移動・回復・空間の魔法は教えてくれないのか？）
（そうでしたね。それでは最初は移動魔法なんですが、これはマスターには効果はありません。）
（何故だ？）
（移動魔法の本質は足や腕に魔力で力を与えて素早く動作するための魔法です。マスターの場合は魔法を使用しても居ないのに、馬以上の速度で走れたり、鳥が飛ぶ高さまで跳んだりと魔法なしでも超人的な能力を持っていますよね？）
（そう言われれば確かに・・・。）
（次に回復魔法なんですがマスターは怪我をしても直ぐに回復しますし、毒も効きませんから必要ないですね。）
（ちょっと待て!?怪我の回復は分かるが毒なんて負った憶えはないぞ？）
（いえ、昨日の食事の時に教えた赤い実や先程の食事の森の果物などがありましたよね？）
（ああ、少し変わった色の果物だったが甘酸っぱくて美味しかったアレか？）
（そうです。それらは全て即効性の猛毒を含んだ森に寄生している果物です。普通の人間ならば一口齧っただけで確実にあの世行きです。）

俺は朝食の残りの果物を齧りながら聞いていたが、持っている物が

毒物だと分かると急に食欲が失せてしまった。

（ブッ！？　なんつう物を食わせるんだ！俺を殺す気か！？）

（マスターは不死身でしょうが！それに初日にリュナイトの爪での攻撃を受けて何とも無かったですよね？）

確かにルゥに言われたとおり初日の修行を始める前に魔物を一掃していたのだが、ちょっとした油断からリュナイトの爪で皮膚を引っかかられたという事が起こった。傷を受けても痛みは感じないし、傷も直ぐに修復されるので考えなかったが・・・。それがどうしたんだろうか？

（マスター、リュナイトの爪には果物とは比べ物にならないほどの遅効性の猛毒が含まれて居ます。　一般の冒険者なら最初は傷口が紫色に変色後、化膿し時間を掛けてゆっくりと皮膚が腐り最終的には腕が千切れて地面に落ちます。　治療する時は皮膚が紫色になった時点で毒治療用魔法の『ポイゾル』を唱えるか、毒消しを患部に当てて時間を掛けて治すかの二つに一つの治療法しかありませんが、マスターには症状が見当たりませんでした。）

（それで最終確認のために猛毒の果物を俺に勧めてきたと・・・。）

（その通りです。申し訳ありませんでしたマスター。）

（いや構わないよ。どっちにしろ不老不死なんだから、毒如きで死んでたら洒落にならないしな。）

それにしても・・・毒の果実とは、道理で街の食物屋で見たことも無い果実ばっかりだと思ったよ。

まぁ、猛毒果実を売るような店屋は不味いだろうしな。いろんな意味で・・・。

（それでは最後に空間魔法なんですが、膨大な魔力のマスターなら

使いこなせるかもしれませんね。）
（どういう意味だ？使いこなせた奴が居ないような口ぶりだけど？）
（その通りです。空間魔法とは此処とは別次元に特殊な空間を作り出し倉庫として活用できる魔法なんですが、一般魔術師はおろか王宮魔導師であっても魔力の不足で維持する事が難しいとされています。）
（どうやって造るんだ？）
（何も無い場所に向けて広さを想像しながら呪文を唱えれば異空間に精製されますが、作ったと同時に凄まじい量の魔力が空間に吸収され凡そ2時間後には固定されます。あとは精製する魔法とは別の魔法を使って、いつ何時でも行き来や出し入れが可能になります。）
（呪文は分かってるのに、誰も成功させた奴は居ないのか？）
（空間を作り出すだけなら魔力値の高い魔術師でも可能ですが、固定されるまでの2時間に渡って大量の魔力を注ぎ込む事が必要ですから、どれだけ魔力が高い魔術師であっても10分すら経たずに倒れます。）
たった10分間で全ての魔力を失って倒れこむ空間か・・・。俺の魔力なら可能か？
もし成功すれば道具袋が要らなくなるし、森に来た時のように巨大な袋を持ち歩かなくて済むな。

（マスター、しかも異空間内は時間の流れが止まりますから、食物などは腐る事はありません。）
（分かった、実行してみよう。ルゥ、呪文を教えてくれ。）
（それは構いませんが拡げすぎないようにしてくださいね？中で迷って出られなくなったりしたら洒落になりませんから！）
（この空間は一つしか精製できないのか？）
（成功させた人間はいらっしゃらないので詳しい事は分かりませんが、事実上は可能だと思います。）

待てよ・・・何か気になる事を言っていたな。成功させた人間!?
人間以外で造れたのか？

（なぁルゥ、人間以外の別種族で作れた奴が居るのか!?）
（は、はい。今から数百年前に別の精霊から聞いた話なんですが、今も存在しているかどうかは分かりませんが、エルフと呼ばれる種族が空間維持を成功させたとの噂を耳にしたことがあります。）

エルフか・・・。それにしても、ルゥは何年生きているんだ？

（それでは、本当に空間を作成なさるのですね？）
（そうだ、呪文を教えてくれ。）
（それでは最初に魔力を中級くらいまで放出してください。）
（分かった中級か・・・。　クラス５０！）
（少し多いかも知れませんが、試してみましょうか。呪文は『ドゥーア』です。）

ルゥから呪文を聞いたあと、巨大倉庫のような物を頭の中で想像し唱えた。

「ドゥーア！」

俺が呪文を発した直後、俺の手から目の前の空間へと光の線が伸びていき、空間に魔方陣のような模様が浮かび上がった。
魔方陣が空中に浮かび上がった直後からブラックホールかのように俺の魔力が空間に吸われてゆく。

（マ、マスター!?　一体どれぐらいの大きさの空間を想像したのですか!?異常なほどの魔力が吸われてますよ?）

（それほど大きくも無いと思うぞ？だいたい宿屋1軒分くらいの大きさだからさ。）
（！！　そんなに大きいのを造ったんですか！？　エルフが作ったのでさえ1m四方の空間だと聞いてますよ？）
（1mの空間か・・・俺のは其れの何倍になるんだろうな。）
（はぁ～～～。ところでマスター、随分と余裕そうですね。苦しくなったりとかしてませんか？）
（勢いよく、吸われている感じはするが至って普通だぞ？）
（変ですねぇ～マスター、ちょっと失礼しますね。）

夢の中ではないのでルゥが何をしているのか分からないが、俺の魔力の中に何かが混ざったような感覚がある。

（マスターの魔力を感じ取りましたが、此れだけの魔力を吸われてるのに1mmたりとも
減っていないのは如何いう訳なんですか！？　まさか・・・魔力すら無限なんじゃ。）
（そうだな・・・。全然疲れないからな。そうなんじゃないか知らないけど。）
（マスターは何処まで規格外なんですかーーーー！！）

第３７話　伝説の魔法？（後書き）

異世界物ではお馴染みとも言える、異空間倉庫というものを登場させました。

第３８話　規格外（前書き）

お気に入り登録数が１０００件に達しました！！

読者の皆様方ありがとうございます。

これからも『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします。

第３８話　規格外

ルゥと会話している間に２時間が経過したようで、魔力の流れも空中の魔方陣も消え失せていた。

「おっ？どうやら空間が出来上がったみたいだな。では早速・・・。」

（マスター、その前にそろそろ強大な魔力の放出を停めてください！　序（ついで）に出来上がった空間を開く呪文は『ルーム』です。扉を開くだけなら、微小な魔力だけで大丈夫ですから。）

（お、そうだったな・・・。クラス１！）

そのまま空間を開く呪文を口にした。

「ルーム！」

呪文を言った瞬間に空間に扉が出現し、扉に手が触れると自動的に開いていった。

しかもこの扉・・・裏に回って見てみると其処には扉など存在してはいなく、木々が生い茂った空間が遙か彼方にまで続いていた。元通りの位置に戻ってくると開いた扉が其処にあった。

（一方向からしか見えないんだな・・・。）

（私も実際に見るのは此れが初めてです。中はどうなっているんでしょう？楽しみです。）

空間を作った俺よりも精霊のほうが落ち着かない様子だった。

（マスター、何してるんですか？早く入りましょうよ！）

（分かった分かった、そう急かすな。）

急かされながら空間に足を踏み入れると、想像してたよりも広く感じる何も無い空間が広がっていた。

（これは、ちょっと広くし過ぎたかも知れんな・・・。）

（広すぎますよ!?　レインさんの宿屋が1軒、丸々納まるような広さじゃないですか。　この広さを造るのに一体どれほどの魔力を使ったのか大変、興味が注がれますね。）

出来あがった空間を見回してみると、倉庫なんていう広さよりも数倍は広かった。

なにせ、奥の壁までが少なく見積もっても３００ｍはゆうにある位だったから。

俺達は空間をあとにし、元の森へと戻ってきた。

空間の入口である扉を閉めると何も無かったかのように扉は其処には存在しては居なかった。

（マスター、呪文を唱えれば何処からでも空間に入る事が出来ます。）

（それなら、もう此処に居る必要は無いな。街に戻るとするか）

ルゥと会話しながら森の入口へと颯爽と歩き出して、森の入口まで残り１００ｍといった所でルゥから何者かの気配が感じられると告げられた。

（ルゥ、魔物の気配がするのか？）

（いえ、この感じは人間のものです。）

（山賊とか盗賊の類か!?）

俺が剣を鞘から引き抜いて構えようとすると・・・。

（マスター待ってください！！　その人間の中から会った事のある気配が４つほど、感じられます。）

（４つか・・・。誰だろうな）

（殺意は感じられないので敵ではないと思います。剣を収めてください）

俺は剣を鞘に収め、いつでも抜剣出来る体勢のまま森の出口へ恐る恐る近づいていった。

森を出た瞬間に出口で待ち構えていた青く輝く鎧を身に着けた男達数人に声を掛けられた。

「君は冒険者か!?今、森から出てきたよな。何か強大な魔物なんかを見なかったかい?」

「修行のために森に入っていましたが、リュナイト数体を見かけただけでそのような強大な魔物は見てません。」

「そうか。一応規則だから隊長たちに引き合わせるが問題ないかい?」

「ええ構いませんよ。」

「じゃあ此方だ、着いて来てくれ。」

俺は男数人に連れられて森の入口から２００ｍほど先にある、何処かで見たような紋章が描かれているテントへとたどり着いた。

男はテントの入口で敬礼しながら、テントの中に居るであろう人物と何やら話をしていた。

「それじゃあ、この中へ入ってもらえるか?　怖がらなくていいよ、取って食うわけじゃないから。」

俺は敬礼をしていた男とともにテントに入ると、其処で見知った顔に遭遇した。
テントの入口付近に立っているエミリアと何時かの取調べで会った隊長さんに、一番奥で机に肘を突いてあきれたような顔のシルヴィアと、何故か筋トレをしている修行初日に街道ですれ違ったガイアスという男・・・。皆一様に金縛りにあったかの如く停止していた。

「あの隊長殿？いかがなされましたか？」
「い、いや何でもないわ。あなたは下がってなさい。」
「はっ！　了解しました。」

男は直立不動でシルヴィアに敬礼したあと、足早にテントの外へと走っていった。

「さてと・・・。「如何してミコト（さん）が此処に居るの（居るんですか）！？」」

シルヴィアとエミリアの言葉が丁度いいところで重なり合ってしまった。

「シルヴィア様、ミコトと面識があったのですか？」
「エミリアさんこそ、知り合いだったとは・・・。」

序（ついで）に何時か見た隊長は手を頭に当てて何かを考えたまま、固まっていた。
すると、更に混乱が起きるかの如く筋トレをしていたガイアスが俺に話しかけて来た。

「おお、この前街道で出会った冒険者ではないか！元気にしておったか？」

「ガイアス隊長!?ミコトさんを知っているんですか?」
「隊長!?」
俺は裏返った声でシルヴィアに問いかけていた。
「そういえば自己紹介しておらんかったの。俺はガイアス、第3近衛隊隊長ガイアスじゃ宜しくな!」
俺がガイアスを見て驚いていた時、シルヴィアから質問が寄せられた。
「それにしてもミコトさんはあの森で何をしていたのですか?騎士の報告では修行をしていたと聞いていますが。あの森で高魔力が感知されてから、出入り禁止になっているはず・・・。はっ!?」
シルヴィアは少し考え込むと俺を手招きして机の場所へと越させ、小声で話しかけて来た。
「私達は魔力の異常発生を調べるために此処に来たのですがミコトさんは此処で何をしていたんですか? ある程度、予想は出来ていますがミコトさんの口から説明してくださいますか?」
「ご想像のとおりです。森の奥にある湖で魔力制御の修行をしていました。 一時的に全魔力を放出したので、その時に観測されたのだと思われます。」
「やっぱり・・・。ミコトさん、もう少し考えて行動してください!」
「いや、俺も街中でやるわけには行かなかったから森で修行してたんだけど、まさか城まで届くとは思っても見なくて。」
「シルヴィア様?ミコト?コソコソして何を話しているんですか?」

気が付くと、エミリアが何時の間にか直ぐ近くまで接近して聞き耳を立てていた。

「い、いえ何でもないですよ？世間話をしていただけですから。それではミコトさんは戻っても結構です。お疲れ様でした。」

「それじゃあ、また今度な！」

「ええ、また今度。」

シルヴィアの気になる笑い顔に後ろ髪を引かれながら俺はテントを後にしてマルベリアに戻った。

閑話？　ミコトが修行していた頃のシルヴィア（前書き）

アクセスＰＶ８０万到達し、ユニークアクセスも１３万に到達しました！！

序に文字数もギリギリですが１０万文字に到達する事が出来ました。

閑話？　ミコトが修行していた頃のシルヴィア

私の名はシルヴィア、マルベリア第3近衛隊副隊長を勤めています。
今日も他の騎士隊との合同訓練が終了し自室で紅茶を飲んでいた時の事・・・。

「はぁ～～訓練のあとのお茶は格別ですね～～。」
「シルヴィア、そのような事を言っておると直ぐに年老いてしまうぞ？」
「余計なお世話です。隊長も身体を鍛えてばかりいないで、此方で飲みませんか？」
「いや、俺はまだまだ強くならなくてはならん！少し前に霧の中で出会った冒険者と握手した時に己の実力の無さを思い知らされたわ！」
「また、その話ですか？　その冒険者の名前は聞かれたのですか？」
「確か、ミコトと言っていたの～～～」

ブッ！！
私は口につけていた紅茶を思わず吐き出してしまっていた。

『ミコトさんの事だったんですね・・・。あの強さなら隊長がムキになるのも分かりますね。』
「どうした？落ち着いて飲まんと身体に悪いぞ！」

私がお茶を拭いて片付けていた時、伝令の兵が控え室に飛び込んできた。

「失礼します！！　陛下より至急の用件と言う事で御2人に玉座の間までお越し下さいとの事です！」

「分かりました。直ぐに参りますとお伝え下さい！」
「ハッ！分かりました。それでは失礼致します！！」

伝令が部屋を出て行ってから、隊長に声を掛けて玉座の間に行こうとしていたのだが、隊長はついさっきまで上半身裸で訓練していたにも拘らず、何時の間にか身だしなみを整え鎧まで着込んでいた。

「シルヴィア、何をしておる行くぞ。　ふっふっふ、久しぶりの任務じゃ腕が鳴るわい！！」

いつの間に着替えたんでしょう？おっと、こうしては居られませんね急ぐとしましょうか。

「お待たせしました。行きましょうガイアス隊長」

数分後、玉座の間に辿り着いた私達は陛下から、森で膨大な魔力が感知された事の調査を命じられた。
我が部下の近衛隊を連れて行こうとも考えたが、城の守りとして配置されている近衛騎士を動かす事は出来ないと陛下に言うと・・・。

「それならば、ハンクス隊長率いる騎士隊を隊長・副隊長を含め２０人ほど連れて行くことを許す！」
「分かりました。お借りいたします」

私は興奮しているガイアス隊長に代わり、伝令の兵にハンクス隊長への指示を依頼した。

「それでは３０分後に城の正門に集合と言う事で宜しいですか？」
「ああ、それで頼む。」
「ハッ！了解しました！！」

伝令は足早に廊下の奥の訓練場目指して走り去っていった。

「では隊長、私達も正門へと急ぐとしましょうか。」
「そうだな。どんな相手なのかの～～楽しみじゃわい！！」
「隊長・・・。まだ敵と決まったわけではありませんので落ち着いてください。」
「そうは言うが、この頃訓練ばかりで身体が鈍っておるからのぉ～」

そして私達がそろそろだと思い、正門へ向かうとまだ１０分もの時間があるにも拘らず２０人の騎士たちが整列して直立不動のまま待機していた。　私と隊長が騎士達に近づいていくと・・・。

「ガイアス隊長とシルヴィア副隊長に敬礼！」

一糸乱れぬ対応で整列していた騎士隊が一斉に敬礼してきた。

「ご苦労。此れから魔力が異常検出された森へと調査に向かう！全員、馬に騎乗しろ」

ガイアス隊長が騎士達に命令を飛ばし森へと急ぐ事にした。
何ともいえない予感がするが、黙っておく事にしよう・・・。
マルベリアを出発してから約６時間後、森の２００エト手前に陣を置き騎士達を調査に向かわせた。
ガイアス隊長も騎士達とともに真っ先に飛び出して行こうとしたが『指揮者が居なくては困る』と言い、ハンクス隊長とエミリア副隊長、私とガイアス隊長がテントの中で騎士達に指令を出していた。
何か『高魔力』と言う言葉が頭の隅に引っかかっていたが、何も考えずに待っていると一人の騎士がテントに飛び込んできた。

「ご報告いたします！先程、冒険者と思われる人物が問題の森から姿を現したため事情を聞くために呼んでおりますが構わないでしょうか？」

問題の森に入っていた冒険者ですか・・・。　何か気になりますね。

「わかりました。私が直接、訳を聞く事にしましょう。丁重にお連れしなさい！」

そのあと、騎士に連れられてやってきた冒険者に目玉が飛び出るほどに驚きました。

「あの隊長殿？いかがなされましたか？」

「い、いや何でもないわ。　あなたは下がってなさい。」

「はっ！了解しました。」

ミコトさんとお話したい私は案内してきた騎士を下がらせました。本当はガイアス隊長やハンクスさんとエミリアさんも下がらせたかったのですが、残念ながらそういうわけにも行きませんでした。

「さてと・・・。「如何してミコト（さん）が此処に居るの（居るんですか）！？」」

ミコトさんに声を掛けた瞬間、エミリアさんと声が被ってしまいました。

「シルヴィア様、ミコトと面識があったのですか？」

「エミリアさんこそ、お知り合いだったとは。」

『まさか、こんな場所で会おうとは・・・』とハンクスさんも頭に

手を当てて小声で項垂れていました。
ハンクスさんもエミリアさんもミコトさんとお知り合いだったのですね・・・。

「おお、この前街道で出会った冒険者ではないか！元気にしておったか？」
「ガイアス様もミコトを知っているんですか？」
「隊長！？」

ミコトさんはガイアスさんの事を隊長とは思って居なかったらしく、裏声のような甲高い声で驚いていました。

「そういえば自己紹介しておらんかったの。俺はガイアス、第3近衛隊隊長ガイアスじゃ宜しくな！」

此処でいつまでも驚いているわけには行かず、ミコトさんに此処に居るわけを聞いてみる事にしました。

「それにしてもミコトさんはあの森で何をしていたのですか？騎士の報告では修行をしていたと聞いていますが。　あの森で高魔力が感知されてから、出入り禁止になっているはず・・・。はっ！？」

自分の口から『高魔力』という言葉を発した直後、出発前の悪い予感が確定いたしました。
その事実をミコトさんに確認するために私は他の人に聞こえないように小声で話しかけることにしました。

「私達は魔力の異常発生を調べるために此処に来たのですがミコトさんは此処で何をしていたんですか？　ある程度、予想は出来ていますがミコトさんの口から説明してくださいますか？」

「ご想像のとおりです。森の奥にある湖で魔力制御の修行をしていました。　一時的に全魔力を放出したので、その時に観測されたのだと思われます。」

完全に予想が確定しました。　ミコトさん一人のために私達は派遣されたのですね。

「やっぱり・・・。ミコトさん、もう少し考えて行動してください！」

「いや、俺も街中でやるわけには行かなかったから森で修行してたんだけど、まさか城まで届くとは思っても見なくて。」

それはそうでしょう。街中で膨大な魔力を発生させたら、どれほどの騒ぎになるか予想できません。

「シルヴィア様？ミコト？コソコソして何を話しているんですか？」

私とミコトさんの話の内容が気になったんでしょうか？エミリアさんが聞き耳を立てていました。

「い、いえ何でもないですよ？世間話をしていただけですから。
それではミコトさんは戻っても結構です。お疲れ様でした！」
「それじゃあ、また今度な」
「ええ、また今度。」

任務が終わったら直ぐにミコトさんが居る宿屋に押しかけて、今回の事の内訳を聞かせてもらわなくてはなりませんね。
高魔力の原因が分かったとはいえ、探索隊に説明するわけにはいかず、ミコトさんと別れてから3日が経過してからマルベリアに戻る事にしました。

私達に探索任務を命じた上層部には成果は上げられなかったと報告し、宿に居るミコトさんを訪ねることにしました。

閑話？　ミコトが修行していた頃のシルヴィア（後書き）

続きを期待されていた方々申し訳ありません。

少し思うところがあり、物語の構成を組みなおしておりますので、本編はもう暫くお待ち下さい。

第３９話　試験的な魔法（前書き）

お待たせいたしました。

少し魔法の威力設定を変更しました。

第３９話　試験的な魔法

修行を行っていた森からマルベリアに戻った俺は一目散に宿屋へと向かった。
理由はシルヴィアが訪ねてくるまで部屋でゆっくり休むためと美味い食事、さらには誰も入ってこない自分だけの空間での魔法の訓練をしたいからだ。
森からマルベリアに戻る途中でルゥに聞いた話では空間呪文で作り上げた部屋なら膨大な魔力を発生させたとしても扉が閉まっている限り、魔力は外には漏れず異空間の扉も作った本人にしか認識されないという利点を聞いた為だった。
宿屋に到着した俺は真っ先に酒場へと向かい、御飯を要求した。

「ミコト！急に帰って来たと思ったら挨拶も抜きにして行き成り『御飯下さい！』かい？」
「この５日間、干からびた肉と果物しか喰ってなかったから、暖かくて美味しい料理が食べれるのを心待ちにしていたんですよ。」
「『美味しい料理』か。お世辞でも嬉しいよ。待ってな、大至急作ってやるよ！」
「できれば５人前くらいの量でお願いします。」
「分かってるよ。ミコトは大食漢だったからね、大人しく座って待ってな。」

十数分後、とても一人で食べる量とは思えないくらいの料理が、テーブル２基を繋げた台に所狭しと並べられた。

「この前も言ったけど、食べ物を粗末にする行為だけは何があっても許さないからね。」
「分かってますよ～～～それじゃ、頂きまーーす！」

俺が料理を味わいながら食べていた時、その料理の山を見ていた酒場の常連達はというと・・・。

「レインの姐(あね)さん、幾らなんでも兄ちゃん一人にこの量は無理じゃねえのか？」

「そうだ、俺たち４人がかりでも食べきれるかどうかの料理じゃねえか！？」

「ミコトにとっちゃ、あのくらいの量で普通なのさ。ほら、見てみなよ・・・既に殆んどがミコトの胃の中さ。」

まだ食べ始めてから３０分も経過していないが、某海賊アニメの主人公かのごとく瞬く間にテーブルの上の料理が俺の口の中へと吸い込まれていく。

『変だな、俺は大食いでも何でもないはずなのに、この前の食事でも腹痛はおろか満腹感さえなかったような・・・。』

食事を始めて４０分が経過した頃、全ての料理を食べ終わりレインさんに食事代として銅貨３０枚を手渡した俺は宿の自室へとゆっくり歩いていった。

あとに残るは俺の食いっぷりに笑顔のレインさんと手に各々の酒の入ったグラスを持って固まっている常連客の姿と今にも倒れそうな料理皿によるテーブルの上の建築物だけだった。

（あいかわらずマスターは凄い大食いですね。　本来マスターは不老不死なため、食べなくても餓死するなんて事はありえない筈なんですが・・・。）

（餓死するしないの問題じゃなく、純粋に食べる楽しみを味わいたいだけなんだが？）

（それでも少しは手加減しないと、周囲の方達から奇異の目で見られてましたよ？）
（それはもう良いから、食後の運動として訓練しないとな。それじゃクラスごじゅ・・・）

癖になってしまったのか、異空間を作ったときと同じ魔力を放出させて扉を開こうと思ったが、ルゥに止められてしまった。
（待ってください！　森でも言いましたが一度異空間を作ってしまえば、最弱の魔力でも空間の入口を開く事が可能ですので、マスターで言えばクラス１でも十分です！！クラス５０なんて使ったら大騒ぎになります。）
（そういやそうだったな・・。それじゃあ、クラス１！）

俺は心の中でダイヤルが１目盛り動くのを体感で確認し、手を開いて空間の扉を開く呪文を口にした。

「ルーム！！」

呪文を口にした瞬間、森で見たのと同じ扉が空中に出現し、触れてもいないのに扉が開いていった。
扉が開ききったあと、俺が空間内へ入ると音もなく扉が閉まった。

（これで外部からこの空間を認識できなくなり、この中で魔力を放出させても感知される事はありません。さらにこの空間自体もマスターの膨大な魔力で作られているため、壊れる事はありません。）

俺はルゥに説明を聞くと、森では試す事が出来なかった火と雷属性の魔法を試し打ちしてみる事にした。

（まずは・・・。クラス１！）

「ファイア！」

俺が呪文を唱えると最下級の火属性魔法でありながら、直径３ｃｍぐらいのピンポン玉のような大きさの火球が壁に向かって飛んでいった。　壁に魔法が直撃したがルゥの言ったとおり、壁には傷はおろか焼跡すら付いてはいなかった。

「続けて、サンダー！」

唱えた直後、雷球が掌に出来上がり其れを壁に向かって投げつけたところ、半径１ｍに亘って電撃の渦が出来上がった。

（これで全種類の攻撃魔法を試し打ちしたわけだが、もう少し教えて欲しい魔法がある。）

（もう少しですか？しかし属性魔法はこれで全部の筈ですが？）

（教えて欲しいのは回復魔法と移動魔法だ。）

（森でも説明したとは思いますがマスターには必要ないものだと思われますが・・・。）

（いや、俺は必要ないが目の前で苦しんでいる人を助けたり、何時かの護衛依頼の時のように疑惑を持たれては敵わないからな。言うなれば言い訳用に憶えておきたいと言うことだな。）

（そういうことなら分かりました。）

その後ルゥの教えの元、怪我を治療する魔法である『ヒール』、毒を除去する『ポイゾル』、移動補助魔法『スレイプ』の３つの魔法を新たに使えることとなった。

俺が怪我を負わないことや、移動補助魔法を使わなくとも異常なほどの身体能力があることから、実行する事ができないため、効果を目で見る事は出来なかったが。

（魔法の練習は良いとして少し気になることがあるんだが・・・。）
（気になる事？なんでしょうかマスター？）
（魔法なんだが、一度に複数の属性魔法は使う事が出来ないのか？）
（それは実例がありませんので何ともいえません・・・。だいいち属性魔法は一般魔術師一人に付き2種類、多くても3種類しか扱う事ができませんので全種類使用できるマスターは正真正銘な規格外と言わざるをえません。）
（こんなところにまで規格外かよ・・・。実例がないなら試してみようか！）

俺は両手を前方へと突き出し、右手で火、左手で雷の魔法を唱えたが。
実際にはファイアが最初に打ち出され、間髪おかずにサンダーが放たれるといった結果に終わった。

（やっぱり無理なのかな？うまくいけば、新しい属性魔法が出来るかもと思ったんだが）
（新しい属性ですか？）
（ああ、火属性と雷属性を組み合わせて爆発系呪文が出来ないかな～っと。）
（それは新しい試(こころ)みですね。そのような呪文は聞いた事がありませんが・・・。）
（そうか。ん？そろそろ良い時間だな、部屋に戻って寝る事にしようか。）
（ではマスター、魔力を使って部屋の扉を開閉してください。）

俺が魔力を放出させたまま扉の取っ手に手を触れると音もなく扉が開き、元の宿屋の自室へと戻ってきた。部屋を作った序(ついで)にと一回も使わずに壁に立て掛けてある大剣を空間に収納した。

（それじゃあ寝るか。オヤスミ、ルゥ。）
（おやすみなさいマスター。）

こうして俺は夢の中へと旅立ったが、夢の中でとある存在と出会う事など知る由もなかった・・・。

第３９話　試験的な魔法（後書き）

次話から内容に変化が訪れます。
調子がよければ２８日に更新する事が出来ると思います。

第４０話　真実（前書き）

やっと物語の核心です。

ものすごく前置きが長くなりましたが御了承下さい。

第４０話　真実

その日の夜、ルゥに呼ばれてもいないのに俺は夢の世界にルゥとともに佇んでいた。

「如何したルゥ？何か話し忘れた事柄でもあったのか？」
「いえ？マスター、私は呼び寄せてはいませんよ」
「じゃあ誰が・・・。」
「主様、ようやく出会う事が出来ました。この日をどれだけ待ちわびた事か。」

虚空から光り輝く衣装を見に纏った、ルゥとは異なる印象をもつ一人の女性が話しかけて来た。
ルゥを見ると、金魚のように口をパクパクさせて声にならない言葉を発していた。

「君は誰だ!?　如何して俺のことを『主様』と呼ぶ？」
「主様は主様にございます。魔力に目覚めてはいなかったとはいえ、お待たせしてしまった事を心より謝罪いたします。」

「マ、マスター！　此方の方は私達、精霊の長であらせられる光の精霊様でございます。」
「其方にいる剣の精霊・・・いや『ルゥ』という名を貰ったのでしたわね。　ルゥ殿の紹介にあったとおり、私は闇の精霊とともに全ての精霊の長である光の精霊でございます。」
「光の精霊様、私なんかに殿とは恐れ多い次第でございます。」

ルゥは更に平伏し、光の精霊に頭を下げている・・・。

「それで、その光の精霊が俺に何の用があったんだ？」
「はい。一時はレグリスの皇女と間違われるといった不手際もありましたが、主様を此方の世界に呼び寄せたのは私でございます。」
俺は無意識に精霊に掴みかかろうとしてしまったが姿は目の前にあるものの手を触れることは出来なかった。
「お前が俺を呼び寄せたのか！？どうして俺なんだ？どうして・・・。」
「それは若かりし日の主様に先代の神が後継者として、白羽の矢を立てたからでございます。」
「俺が神の後継者だと！？ふざけるのも大概にしろ！！」
「ふざけてなどおりません。出生時より神に選ばれていた貴方様が不慮の事故で亡くなられそうになったとき、神は最後の力を振り絞り主様に特殊能力を授け亡くなられました。
享年、５無量大数飛んで３９６４億９２３８万１９６２歳でした。」
そうか・・・神といえども不老不死ではないんだな。
「これから主様には神の試練として複数の世界に渡っていただき、全ての上級精霊と会って頂きます」
「全ての精霊に出会う旅だと！？」
俺は衝撃の事実に混乱しルゥの方を見るが、ルゥも此方を向いて「マスターが神様？」と呟いていた。
「この世界を管理するは私（わたくし）、光の精霊でございます。そのため、一番最初に主様に来ていただきました。」
「俺は世界を渡る方法なんて知らないし、この世界は如何するつもりだ？」

「其れについては最初にお渡しするものが御座いますので左手をお出し下さい。」

俺は少し考えてから左腕を目の前の精霊へと突き出した。

「一瞬で済みますので動かさないで下さいね。」

差し出した左手首が目も開けられないほど眩い光に包まれた瞬間、光る腕輪が嵌っていた。

腕輪には１０個もの何かが嵌るような穴が刻まれており、外そうとしても外れなかった。

「な、なんだこの腕輪は！？　クッ！外れない。」

「その腕輪は我ら精霊と対話するための物です。まず手始めに私と対話したという証拠として、私の精霊の証である光の精霊玉を装着させていただきます。」

光の精霊の手が、そっと腕輪に触れると腕輪の台座の一つに光の玉が収まった。

「この腕輪に意識を集中し『光』と念じてくだされば私が答えます。同様に他の精霊と出会い精霊の玉を授かる事により『闇』や『火』と念じる事によって、各々の精霊と会話する事ができます。」

先程まで俯いていたルゥが行き成り顔を上げ、潤んだ目で俺を見つめてきた。

「マスターは神様だったのですね。そのような方にお仕えできたとは夢のようです。」

「最後にこの世界は如何するのかという問いですが、この世界の管

轄は私、光の精霊ですので何時旅立っても構いませんが・・・。一度別世界に旅立たれると、とある御方に会われるまで以前の世界には戻る事はできません。人間という立場なら世界に干渉しても問題ありませんが、神になられると特殊な事情が無い限り、関与できなくなりますので今のうちに精一杯楽しんでください。ちなみに一つの世界における最大滞在期間は5年とさせていただきます。それ以下でも構いませんが、1日でも過ぎた場合は強制的に次の世界へと旅立ってもらいます。」

まてよ、俺が異世界に行った後エミリアやシルヴィアの頭の中から俺の存在は消え失せるのか？

「ちょっと待て！その場合、俺が此処にいたという記録はどうなるんだ？」

「残念ですが、主様が拘った出来事は全ての方達の記憶から消去されてしまいます。

といっても私達、精霊に関しては関係ありませんからご心配なさらないでください。」

「誰かを連れて行くことは？」

「それは出来ません！世界の調和が崩れてしまいます。ただし道具や魔法などに関しては制限は掛かりませんから新しい世界に行くために硬貨を使い切って武器や道具・装飾品を買い込んでおき、新しい世界で売却してお金に変換する事をお勧めします。　それでは、私はそろそろ失礼します。」

そう言いながら、目の前に存在していた光の精霊は元から存在していなかったかのように光を発しながら掻き消えた・・・と思ったら再び目の前に出現した。

「すいません、一つだけ言い忘れたことがありました。腕輪なので

すが主様の魔力によって可視状態にありますので魔力の放出を止めると見えなくなります。注意してください。それでは・・・。」

光の精霊は言うだけ言うと姿を消して今度こそ戻ってくる事はなかった。

「マスターは神様だったのですね・・・。」

「俺はこれから如何したらいいんだ?」

誰からも答えが聞けないまま時間だけが過ぎて行き、朝を迎えてしまった。

第４０話　真実（後書き）

物語に登場した無量大数という単位ですが、一・十・百・千・万・億・兆・京・垓・譲・講・澗・正・載・極・恒河沙・阿僧祇・那由他・不可思議・無量大数とあります。
（垓と譲の間にもう一つ単位がありますが漢字が表示されませんでした。）

ちなみに無量大数という単位を使ったのには深い意味はありません

第４１話　超難関討伐依頼

昨夜、夢の中で光の精霊から問題発言を聞かされた俺は最後にこの世界で何をするか考えていた。

（レグリスの糞皇女の事は気になるが、国同士の諍(いさか)いには干渉したくないしな・・・。）

（次の世界のためにお金を稼ぎましょうか？）

（そうだな、どうせ不老不死なんだし最難関な討伐依頼を受けようか。）

（森で会ったリザードマンなどを討伐して荒稼ぎしましょうか！　Ｓ級以上の魔物なら、たった１度の討伐で最低でも金貨３枚はもらえると思いますよ。）

（じゃ、早速ギルドに行って依頼を受けて討伐しようか。　どうせ、此処で暴れても記憶に残らないんだから能力や魔法を使用しても構わないよな？）

（ですが、報酬を貰ってから武器や道具・食料などを買い占めるので街中では魔力の放出をしない方がいいかと。）

（それじゃあギルドに行って依頼を見てみようか。）

俺は心の中でルゥと会話しながらギルドへと向かって歩いていった。

「あれ？ミコトさん、久しぶりですね。」

「やあローラ、高額報酬の討伐依頼を探しているんだけど良いのあるかな？」

「討伐依頼で報酬が良い物・・・。Ａ級討伐依頼なら今のところ、銀貨５０枚の依頼がありますが？」

「Ａ級か。Ｓ級以上の討伐依頼ってないかな？どうしても金が必要なんだけど」

「S級ですかー!?　ある事はありますが、幾らミコトさんでも危険すぎますよ!」
「俺は大丈夫だから討伐依頼書を見せてくれないか?」
「でも～～～」

ローラが出し渋っていると奥の部屋からギルド長であるリュックが姿を現した。

「こらっローラ。お前の仕事は何だ!?言ってみろ!!」
「は、はい!冒険者に対して仕事を斡旋したり、仕事内容を説明する事です。」
「なら至急、目の前に居る冒険者の言うとおりの仕事を斡旋して差し上げろ!!」
「はい。ただいま」

ローラはギルドの窓口から飛び出すと、依頼書などが備え付けてある掲示板から他の通常の依頼書とは違う赤色の手配書を数枚剥がして持ってきた。

「今、ギルドにあるS級以上の討伐依頼書はこの5枚です。S級依頼書は期限が定められてはいないため、自分自身の身の安全を第一に考え討伐に当たってください。更に期限が定められていないという事で依頼失敗時の罰金は掛からない事になっています。」

俺は差し出された依頼書を見てみると、S級は最低でも金貨5枚でSS級に至っては金貨30枚という依頼まで存在した。

「もし別の魔物を倒してしまった場合は証明部位さえ持ってくれれば換金できるのか?」
「其れは大丈夫ですが、SSS級の依頼を受けて戻ってきた冒険者

は今のところ居ない為・・・。」

ローラはそれだけ言うと黙り込んでしまった。

（ルゥ、全ての依頼書の内容を記憶してくれるか？徹底的に討伐するつもりだから。」

（了解しましたマスター！）

「それじゃあ、１度戦った事があるしＳＳ級のリザードマンの討伐にするよ。」

「それでは場所はミコトさんが以前、リュナイトを討伐した森を抜けて更に５０エルトほど進んだ場所にある岩場に高ランクの魔物が集まっていたとの報告が寄せられています。」

「分かった。行ってくるよ」

俺が剣を装備しなおしてギルドから出て街の門へと歩いていくと、まるで別れを覚悟したような目でローラがギルドの壁に背を預け、佇んでいた。

「ミコトさん、どうか御無事で・・・。」

街の門を出た俺は周りに商人がいてもお構い無しに全速力で森へと向かって走っていった。

「なぁ・・・今、何か通らなかったか？」

「気のせいだろ？突風が吹いただけじゃないか。」

「そうか？人が走っていったかのように見えたんだが。」

「魔力で身体強化した魔術師でも目にも留まらない速さで走るなんてありえないだろうが。」

「そうだよなぁ～～やっぱり気のせいか。」

街の門を出発した俺は、力の制御を解放して全速力で走っていた。
もう隠す必要がないので持てる力全てを使って走っていたのだが、速度にしてマッハに近い速度で走っているにも拘らず、足も痛くならないし息苦しさも無かったが履いていた靴がボロボロになってしまっていた。

（身体は無事でも衣服まではもたなかったか・・・。）
（マスター、目的地の森まで残り5エルトです。）
（じゃあ、そろそろ減速しようか。）

時速２００ｋｍにまで速度を落として、その速度のまま森へと突っ込んでいった。
森に生い茂る木の枝は俺の身体に触れた瞬間に根元から砕け散り、さながら馬鹿でかい図体の魔物が木々を薙ぎ倒しながら森の奥へと入って行ったかのような跡が出来上がっていた。

（マスター、森の中では方向感覚が狂いますから高いところから見回して進みませんか？）
（そうだな・・・。そうするか！）

俺は地面を摩擦熱で焦がしながら急停止を掛けると、まるで空母から打ち出されるミサイルかの如くルゥの指示する方向へとジャンプして森を飛び越えた。
一方、その頃ミコトの泊まっていた宿に一人の女性が姿を現していた。

「ミコトさんの此処からでも感知できた膨大な魔力・・・。説明してもらわないと！」

いざ意を決して宿屋に足を踏み入れようとしたところで、後から声

を掛けられた。

「あれ？シルヴィア様、どうしたんですか？このような場所で。」

「あら、誰かと思えばローラさんじゃないですか！その節はお世話になりました。おかげでガルデリアの現状を知る事が出来ました。」

「は、はぁ？　それで今日はどうしたんですか？」

「ちょっとミコトさんにお話がありまして・・・。」

「え！？　でも、ミコトさんは朝早くに討伐依頼を受けて森へと出発してしまいましたよ？」

「そうなんですかぁ！？　それで、依頼書の期限は何日になっているのです？」

「いえ、S級討伐依頼ですので期限は設けてはいません。いつ戻ってくるかは不明です・・・。　何の用かは分かりませんが戻ってこられたらシルヴィア様が呼んでいたと託しましょうか？」

シルヴィアは暫し考えるがミコトの魔力の事を話すわけにはいかず、ローラに手を振りながら城への道を歩いて行く。

「ミコトさんの馬鹿！後で話があるって言っておいたのにーーー！！　戻ってきたら許さないから！」

シルヴィアは近寄りがたい雰囲気を醸し出しながら、ズンズンと来た道を戻っていった。

第４１話　超難関討伐依頼（後書き）

いよいよ節目を迎えようとしています。

第４２話　上級魔族（前書き）

ついに・・・ついにアクセスＰＶが１００万に到達いたしましたー
ーー！！

第４２話　上級魔族

ミコトが森を突破し、もう少しで岩場へと到着するまさにその頃、岩場で動きがあった。

「リザード。暇そうだな、街にでも人間を襲いに行かねえか？」
「人間ナド弱スギテ面白クナイ・・・。」
「そんな事言わずによう、斬られた腕も再生したんだろ？」
「ソノコトハ言ウナ！！　アノ人間トハ思エナイホドノ強サ・・・驚嘆ニ値スル」
「あの時は本当に吃驚したぜ。　何せ、お前ほどの奴が手傷を負わされたなんてな」
「再戦ヲ楽シミニシタイガ、今ハ此処カラ離レラレナイカラナ。」
「そうだったよなぁ～～ボラス様たち早く帰って来てくれないかな。」
「アノ御方ノ事ヲ略称で呼ブトハ・・・。命ガ要ラナイ物ト見エル。」
「おいおい、内緒にしといてくれよ？　俺とお前の仲だろ？」
「フッフッフ・・・。」
「本当に頼むぜ！？」
「ムッ？ナニヤラ、人間ノ気配ガ森ノ方向カラ漂ッテクル。」
「確かか？此れで暇を潰せるってもんだ！あの御方には迎撃に出たと言っておいてくれよ？」
「分カッタ。人間相手トハイエ、クレグレモ油断スルナヨ？」
「俺様を誰だと思っていやがる！アークデーモン様だぜ？」

一方その頃、岩場まで残り１エルトという所まで近づいていたミコトはというと・・・。

（マスター、目的地の岩場から少なくても2体の魔物の気配があります。）
（情報に間違いは無かったみたいだな一気に突っ込むぞ。）
（ちょっと待ってください！？　その内の1体が此方へと向かってきています。注意してください）

ルゥに言われた直後、周りに木々すら生えていない山道で立ち止まり迎撃姿勢を取ると其れを待っていたかのように巨大な影が空から舞い降りてきた。

「人間なんぞが何故此処にいる？此処から先は我ら上級魔族の住処だ、早々に立ち去れ！」
「この魔物も言葉を話すんだな・・・。」
「魔物だと！？　俺をあのような屑共と一緒にするな！」

自らを上級魔族と名乗る魔物は肩をプルプルと震わせ怒りを露(あらわ)にしていた。

（マスター、あれは依頼書にあったアークデーモンです。討伐報奨金は金貨２０枚のＳＳ級です。）
（証明部位は何処だ？）
（今は丁度陰になって見えませんが腰から伸びる尻尾が其れです。）
（分かった。）

ルゥとの会話が終了し魔物を見ると不意に襲い掛かってきた。

「警告だけにしてやろうかと思ったが止(や)めだ。此処で殺してやる」

魔物は手に持っていた巨大な棍棒を振り回しながら、俺との距離が開くと炎のブレスを吐いて来た。

「どうだ、近寄れまい！　諦めて俺様に殺されな。」
「そうは行くか！」
俺は剣を中段で構えながら魔物の首を目掛けて斬りに行った。
「馬鹿め。　炎のブレスで灰と化すがいい。」
魔物は勢いよく俺に向かってブレスを吐くが、俺はそのチャンスを狙って飛び込んだのだった。
不死身である俺の身体を炎が焦がしながら俺は剣でアークデーモンの首を一閃した。
「ば、バカな・・・。お、俺が人間なんかに負けるなんて」
断末魔のように声を発した後、魔物の首が地面へと落下して勝負は終わった。
（マスター、お見事です！　これで金貨２０枚獲得ですね。）
俺は逸早く尻尾を切り取り道具袋に詰めようとしたが、あまりにも其れは大きく、異次元空間を開いて其処に収納する事にした。
（マスター、もう1体の魔物が此処から４００ｍのところに座っています。）
（よおし、一気に行くぞ。）
俺は魔物の死体をそのままに更に奥へと足を進めた。
「お、お前はあの時の！？」

「誰カト思エバ森デ対峙シタ剣士カ・・・。ソノ様子ダト、アークハ殺サレタヨウダナ。」
「アーク？　さっきの奴か、中々手ごわかったが俺の敵ではなかったな。」
「貴様ニ斬ラレタ腕モ元通リニ治ッタ事ダシ、アノ時ノ続キト行コウカ。」

リザードマンはあの時の剣を両腕に1本づつ持って防御せずに襲い掛かってきた。

「貴様等人間ノ訓練トヤラヲ真似テ更ニ強クナッタ我ヲ倒シテミヨ！」
「上等だ。どんな結果になっても文句言うなよ？」
「望ムトコロダ！」

キンッ！　キンッ！　ガキン！
打ち合う事およそ２０分、リザードマンの剣が根元で圧し折れ、俺の剣が喉元を貫いて勝負は決した。
リザードマンは何かを発しようと口を必死に動かすが、喉に穴が開いているため空気が漏れる音しか聞こえては来なかった。　倒れ際の一撃で俺の腕に爪で傷を付けた直後、地面に倒れ息絶えた。
ちなみに傷つけられた腕は瞬時に治療され傷跡すら残ってはいなかった。

「敵にしては良い太刀筋だったぜ。」
（マスター、リザードマンはリュナイトと同じく口の際にある黒い牙が証明部位です。）

俺はリザードマンの牙を丁寧に刈り取ると、死体に向かって手を合わせた。

「お前が魔物でなければ良い好敵手になってたかもしれないな・・・。」

俺は周りを見回して他に魔物がいない事を確かめると、森へ向かって歩き出そうとしていた矢先にルゥから強大な魔物の気配がすると話しかけられた。

（マスター気をつけてください。　先程のアークデーモンやリザードマンとは比べ物にならないほど強大な魔物の気配が岩場の更に奥より近づいてきています。）
（数は何体だ!?）
（リザードマンよりも少しだけ強い気配が２つと、更に数倍の強さを持つ気配が一つです。）
（計３体か・・・。）

俺はその場で深呼吸して息を整えると振り返って身構えた。
身構えてから１０分が経過した頃、見てしまった。
５ｍを超す巨大な魔物と、其れに付き従う３つ首の魔物がノシノシと山肌から降りてきた姿を・・・。

第４３話　魔族を統べし者　＜前編＞

魔力が備わった事で更に強くなった俺は、前回の森での戦いとは比較にならないほどのスピードでリザードマンを倒した。
リザードマンの討伐証明部位である、口元の黒い牙を採取した俺は街に戻ろうとその場を後にしようと思っていたが、前方の山道から今まで感じたことの無い、重圧（プレッシャー）な気配が感じられた。

（この気配は何だ！？　気配を読むことが苦手な俺でも違和感を感じるぞ！？）
（マスター、気をつけてください。　この気配は並大抵な実力の魔物じゃありません！）

その重く圧し掛かるような気配は、幾ら不死身の俺であろうと緊張せざるを得なかった。

（マスター！　既に何時の間にか３００ｍ先にまで近づかれています。ご注意を）

３００ｍだと！？　それくらいなら俺の目で確認できる筈・・・。
目の前にあるのは木が１本も生えていない浅黒い山肌に、遙か遠くに見える海のような景色のみ。
だが、見えていないとはいえ強大な気配がヒシヒシと感じるのは事実！

（一体、何処から来るんだ！？）
（マスター左の山肌からとてつもない気配です！　・・・来ます！！）

ルゥから忠告を受けた直後、ソレは山肌を跨ぐ様にして現れた。

「な、なんというデカさだ・・・。」

現れた魔物は聳え立つ塔のような大きさで片手に棍棒のような木を丸ごと一本引き抜いたようなものをしっかりと握りしめていた。
更に魔物に付き従うように3つ首の魔物と翼竜のような魔物が空を飛んでいた。

「ぬう・・・。なんだお主は？　部下の気配が途切れたから急いで帰ってきてみれば！
　其処にいたのはリザードマンでもアークデーモンでもなく、ただの一人の人間だと！？」
「御屋形様、アチラをご覧下さい！リザードが首から血を流し息絶えております。」

3つ首の魔物が逸早くリザードマンの死体を確認し、翼竜までもがアークデーモンの死体を見つけた。

「御屋形様、森の手前にてアークデーモンの死体を確認しました。此方は胴体部分に深い傷が見られましたので腹を切り裂かれ、絶命したものと思われます。」
「そうか・・・。　其処の人間！オヌシがあの2人を殺したのか！？」

部下の報告を黙って聞いていた巨大な魔物は顔を強張らせると殺気の篭った声で問いかけてきた。

「そうだ！　行き成り襲われたんでな、自己防衛として斬らせてもらった。」

「あ奴等も人間が相手で油断していたのもあるであろうが、お主の強さも気に入った
　よって、我自らが部下の弔いとしてオヌシの相手を勤めさせてもらおう！！」

巨大な魔物から発せられる殺気の篭った目に襲われながら、俺は剣を構えた臨戦態勢を整えたが。

「御屋形様、たかが人間一人などの相手に貴方様が動く事はありません！」
「そうです、この場は私達にお任せ下さい！　軽くしとめて見せます。」
「む～～、其処まで言うなら相手を任せる。　が、あの人間は無傷でリザードとアークを倒したほどの兵（つわもの）だ。　心して掛かれ、決して油断はするな！！」
「「はっ！！」」

2体の空を飛ぶ魔物は会話を終えると俺の目の高さまで降りてきた。

「人間よ、冥土の土産に教えておいてやろう！　我はキメイラ、3つの属性を同時に扱う事が出来る魔獣キメイラだ！」

3つ首は其々、ライオンのような首と鹿のような首、鷲の様な首が別々に一言ずつ喋っていた。

「更に、我はワイバーン。　この翼で空中を駆け回り、相手に一切の隙を与えずに仕留める邪竜ワイバーンだ！」

此方は一瞬、竜と見間違えたが御伽噺に出てくるような姿ではなく、どちらかというと蜥蜴に黒い翼が生えたような形状で口元には犬歯

のような鋭い牙が何本も見て取れた。
ちなみに本人（？）は邪竜だと言っているが、鱗のような物は何処にも見当たらなかった。

「「我々をリザードやアークのような魔族（小物）と一緒にしない事だ。では行くぞ！！」」

2体の魔物は言うや否や、上空から俺に向かって真っ直ぐに飛び掛ってきた。

（マスター、キメイラの口から複数の魔力属性を感知しました。）

ルゥが口にした直後にキメイラから火と氷のブレスが同時に俺へと襲い掛かり、体勢を崩しかけたところにワイバーンが低空飛行で俺の脚を、手の鋭い爪で切り裂きに掛かってきた。

「ハハハッ防戦一方ではないか！？　我らの攻撃に太刀打ちできまい！！」
「ワイバーンよ、もう一度だ。次でとトドメと行こうか！」
「承知！」

更に追い討ちを掛けようと、2体の魔物が上空へと移動した。
次の瞬間、又もやキメイラがブレスを吐きながら低空飛行で突っ込んできたが、俺はあえてかわさずに剣を垂直に前方へと構えた。キメイラも逸早く異常に気づいたが、加速中で避ける事が出来ずに自ら剣先へと飛び込んで、あえなく左右に両断され息絶えた。
未だに俺の周りにはキメイラの吐いたブレスの影響で土埃が舞っていた。
ワイバーンもキメイラが既に倒された事など知る由も無く、奇声とともに上空より飛来した。

俺はキメイラの時と同じ様に剣を構えて待っていたのだが・・・。
野性の勘だろうか、ワイバーンが軌道変更した事により胴体の両断には至らず、片方の翼のみを切り裂いて魔物は何も出来ないまま、山肌へと突進していった。

「な、なんだ!?　あの人間は何処に消えた?キメイラは?」

俺はワイバーンの死角から静かに近づき、一瞬で魔物の首を胴体と切り離した。

（マスター、お見事です。）

ようやく土埃が静まった頃には左右に両断されたキメイラと、首を刎ねられたワイバーンの姿が巨大な魔物の眼前へと晒しだされた。

「おおおぉぉーーー!?　キメイラ、ワイバーン!あれほど油断するなと申したであろうに・・・。」
「残るは貴様だけだ!」

俺はこの世界での締めくくりである、最後の戦いを始めようとしていた。

第４３話　魔族を統べし者　＜前編＞（後書き）

もう少しで１部目が終了する予定です。

第４４話　魔族を統べし者　＜後編＞

巨大な魔物の従者として現れたキメイラとワイバーンを苦も無く倒した俺はこの世界、最後の戦いの締めくくりとしてこの場に立っていた。

（まぁ俺が不死身でなけりゃ苦戦したんだろうがな・・・。）
（マスターは無謀すぎます！！）

魔物の方を見ると先程まで部下の死を嘆いていたかと思えば武器である棍棒を構え、戦いの準備を行っていた。

「我が直接、手を下すに相応しい相手と見做してオヌシの名を聞いておこうか・・・。」
「俺はミコト。ミネフジ＝ミコトだ！」
「我の名はグラシャラボラス、破壊神グラシャラボラスだ！　いざ尋常に勝負」
「お互い悔いの残さない戦いにしようか。」

俺は魔物の持つ棍棒（というか樹木？）と打ち合おうかとも考えたが、嫌な予感がし一歩退いた・・・。
すると俺の立っていた場所はクレパスのような巨大な溝が長さ５ｍに亘って出来ていた。

「かわしたか。打ち合ってさえいれば、剣もろとも砕けたというのに。」
「なんて奴だ。ルゥの剣では太刀打ちできないな・・・。」

俺は宿の部屋にて異次元空間にしまった大剣の事を思い出し、咄嗟

に扉を開き大剣を取り出した。

「ぬっ？　貴様、何処から剣を取り出した？」
「何処だっていいだろ？　さぁ勝負の再開といこうか！」
「小癪な奴め！」

俺は魔物と打ち合うこと数時間、辺りが夕焼けの色に染まりかけてきた頃ようやく進展が見えてきた。

「ぬぅ、我の武器が砕かれるとは・・・。」
「お前もな・・・俺の剣も、たった一度の戦闘で破壊寸前だ！」
「此処まで良く持ちこたえたが、武器がそれではオヌシに勝ち目などあるまいて。」
「それはどうかな？　俺には奥の手があるからな。」
「それは面白い！　我も武器に頼らずに我が拳で相手、仕ろう（つかまつ）！！」

俺の切り札・・・奥の手といっても魔力しかないんだが。コイツに効くかどうか。

（試してみなけりゃ、しょうがねえよな。　クラス５０！）

俺は戦闘で魔力を使った事がないため、どれほどの魔力を放出すれば良いか分からずに空間魔術を使ったときの魔力量を一気に引き出した。

「これは桁外れな魔力！？　貴様、魔法も使えるのか！！」
「ああ、お前とは剣で決着付けたかったが、そうも言ってられない状況だからな。」

今の今まで余裕の表情を見せていたが、俺が魔力を解放した途端に

魔物の表情が一転した。
これはもしや・・・。コイツの弱点は魔法か？
魔物の顔色を伺おうと表情を見るが、冷や汗とも取れる水滴が顔一面に見て取れた。

（試してみるか・・・。）

俺は掌を魔物の胴体に向けて火の魔術である『ファイア』を唱えた。
クラス１のファイアは掌から直径３ｃｍくらいの火球が出ただけだったが、単純計算で５０倍の魔力を乗せた火の魔術を唱えたらどうなるか。
答えは炎の竜巻ともいえる高威力な火炎が魔物を飲み込み、魔物の身体は火に包まれた。

「ギイエェエェエーーーー！！」
炎に耐え切れなかったのかゴロゴロと地面を転がるが、そんな事では火が消える事はなかった。
１時間ほどが経過した頃には魔物の強靭な肉体は影も形もなく、黒い消し炭状態になっていた。
直立不動状態で立っていた黒い炭の塊はバランスを崩して地面に倒れこむと粉々に砕け散り、突風によって地面に骨格を残したまま、炭は風に乗って空高くに舞い上がっていった。

「勝った・・・。あの死闘はなんだったかのように。」

その後、持っていた大剣は地面に落とすと同時に粉々に砕け散ってしまった。

（あれほどの大剣であっても、マスターの力には耐えられなかったんですね。）

（ルゥ・・・。）

もし、この戦いでルゥを使っていたら如何なっていただろうか。

（それじゃあマルベリアに帰るか！）

（マスター、証明部位を取り忘れていますよ？）

（おっと、そうだったな。ルゥ、キメイラとワイバーンの証明部位はどれだ？）

（キメイラは翼の一部、ワイバーンは口元に生えている鋭利な犬歯です。）

（分かった。）

俺はそういうと剣を引き抜いてキメイラの翼を切り取り、ワイバーンの犬歯を力任せに圧し折った。

（ルゥ、グラシャラボラスの部位は？）

（指先に嵌めている指輪なんですが、先程の炎で溶けてないか心配です。）

俺は骨だけになってしまった魔物の指先部分の骨格を念入りに調べると、表面が溶け掛かった指輪を発見する事が出来た。

（少し溶けてしまっているが、ローラに見せれば判別できるだろうな。）

（それは良いんですが、言い訳を考えていますか？）

（言い訳？　何のことだ？）

（指輪が如何してそんな状態になったかという説明です。きっと大騒ぎになりますよ？）

（それはそうだが、最後だし構わないだろ？　光の精霊の話では記憶は残らないって話しだし・・・。）

（でもギルドで報酬を貰った後、食料品や次の世界で高く売れるような道具を買うために数日間は街に滞在する事になるのですよ！？）
（それは瞑目だった・・・。どうしようか？）
（頑張ってください、マスター！）
（そんな～～～）
（次からは後先を考えて魔法を使いましょうね。氷や雷属性なら少しはマシだったかもしれませんね）

俺は必死に言い訳を考えながら岩山を後にし、マルベリアへと続く街道を時間をかけてゆっくりと歩いていった。
ちなみに色々な証明部位は全て異次元空間の倉庫へと収納し、手には何も持ってはいなかった。

第４４話　魔族を統べし者　＜後編＞（後書き）

予定では残り２話で次の世界へと移動するつもりです。

第４５話　忘れていた事・・・

その後、ゆっくりと時間を掛けてマルベリアへと戻ってきたが良い答えは考え付かなかった。
辺りが暗闇に閉ざされていても、関係無しに歩いてきた結果、町に着いたのは昼近くの事だった。

（何の考えも浮かばないまま街に戻ってきてしまったな・・・。）
（マスターいっその事、全てを晒しだしませんか？）
（でも大騒ぎになるって言ってたのはルゥだろ？）
（ですから、騒ぎが大きくなる前に全ての準備を整えて次の世界に旅立てば良いのですよ。）

俺がそれでも決めきれずに悩んでいると・・・。

（それに異次元空間に入れた討伐証明部位を取り出さなくてはいけませんから、どっちみち証明する事になってしまいますよ？）
（そうだったな、あんな複数の大きい物を持って歩くのは無理だろうからな。）

散々考えた結果、ルゥのアイデアを起用してギルドへと向かって歩いていった。
俺が足を踏み入れると、何時もは沢山の冒険者が溢れかえっているギルド内は何故か一人も居なく静まり返っていた。

「なんで誰も居ないんだ！？　何かあったのか？」

俺が独り言のようにつぶやくと、ギルドの窓口横にある職員専用出入り口から疲れた表情のローラが溜息とともに姿を現した。　ロー

ラは俺の姿を見つけるなり、飛び掛ってきた。

「ミコトさん！待ってましたよ。」

「ど、どうしたんだ？　少し落ち着け！」

「ミコトさんが依頼で出かけてから、連日のようにシルヴィア様が押しかけて来て『ミコトさんは帰って来た？』って、私も『如何したんですか？』って聞いたんですが大事な話があるとかで・・・。」

そうか、シルヴィアが。ん？シルヴィア？

「ああーーーーーーーー！！？」

行き成り大声で絶叫した俺を見て、散々に疲れ果てていたローラが倒れそうになっていた。

「どうしたんですかミコトさん、行き成り大声で絶叫したりして。」

「すっかり忘れてた・・・。そういえば説明してって頼まれてたんだったっけ。」

「説明ですか？　あ！もうそろそろ、シルヴィア様がいらっしゃる頃ですよ？」

「な、何！？　直ぐに逃げなきゃ！！」

俺が逸早くギルドの外に出ようと扉を開けると、待ち構えていたかのようにシルヴィアが立っていた。

「ミ・コ・ト・さ・ん？　何処に行こうというのですか？」

「遅かったか・・・。」

「魔力の修行の事を説明してくれるって言ったから私、待ってたんですよ？」

「な！？此処で魔力の話なんてしたら」

シルヴィアは咄嗟に自分の口を手で押さえるが、時既に遅く・・・。
幸いにも冒険者が一人も居なかった事で混乱には陥らなかったが、
ローラは目が点になっていた。

「ミコトさん、魔力ってなんですか？ミコトさんは剣士ですよね？」
「い、いや少し前に分かった事なんだけど、俺にも魔術師の才能があったみたいで・・・。」
「それじゃあ、ミコトさんは魔法剣士なんですね！？」
「そういう事になるのかな。」

シルヴィアは『しまった！』という顔で暫く固まっていたが、立ち直って説明を求めてきた。

「それで、魔力の修行の結果はどうだったのですか？」
「とりあえず色々と試してみた結果、全属性魔法を使う事ができたよ。」
（マ、マスター、2個か3個の属性しか使えなかったという事にしてって言ったのに！）
（構わないさ、直ぐにこの世界を発つんだからさ。）
「全属性ですか！？　私の近衛隊のフィルでさえも3属性しか使えないのですよ。」

俺は心底驚いているシルヴィアを置いといて、ローラに討伐証明部位の換金をお願いする事にした。

「ローラ、討伐してきたから報奨金をもらえるか？」
「それは構いませんが証明部位は何処にあるんですか？　何も持ってないように見えますが・・・。」
「今取り出すから少し待っててくれる？」

「は、はい。取り出す？」

俺はクラス１の魔力を発生させた後、ギルド窓口横の空間に手を広げ『ルーム』と唱えた。
異次元空間の扉は作成した本人か、半径２ｍ以内に近づいた者しか見えない事になっているのだが、ローラは自分の目と鼻の先に立っているし、シルヴィアは自分の真後ろで固まっているため扉がはっきりと見えていた。

「ミコトさん・・・この扉はなんですか？　パッと現れたようにみえましたが。」
「これは空間魔法だよ。この中に討伐証明部位を入れてあるんだ、少し待ってて。」

俺はローラとシルヴィアを待たせると扉の中へと入って行った。
直後、ローラとシルヴィアは雁首並べて異次元空間の中を覗き込んでいる。
先程も説明したが、半径２ｍ以内に近づかなければ、扉自体は目に見えないので傍から見れば『あの２人は何をしているんだろう？』と変な目で見られる事は間違いない。
その頃、空間内へ部位を取りに来た俺はというと・・・。

「アレとコレとソレとコレにあとコイツもか、此れで全部だな。」

俺が振り向いて出口に向かおうとすると空間内を覗き込んでいた２人と目があった。

「ミコトさん、この場所は一体・・・。」
「これも属性魔法の一つで空間属性って奴だよ。伝説上の魔法らしいけどね」

そして外へ出ると同時に扉は音も無く閉まり、直後には扉自体も掻き消えた。

「これが証明部位ね。換金宜しく」

「そ、それでは拝見いたしますね。　え～っと黒い牙はリザードマンの物ですね、本当に討伐してきたんですね!?　次は、こ、この尻尾はアークデーモンの!!?」

「リザードマンにアークデーモンって、どちらもＳＳ級の魔物じゃないですか!?」

「ちょっと待ってください！　次のキメイラの歯とワイバーンの翼って此れもＳＳ級の魔物ですよね!?」

「え、ＳＳ級をたった一人で４体も討伐するなんて・・・。ミコトさんて何者なんですか?」

ちなみに上から俺⇒ローラ⇒シルヴィア⇒ローラ⇒シルヴィアの発言だ。

たかがＳＳ級魔物で大騒ぎするものだから、最後の一つが出しにくい状態になってしまった。

「あれ?ミコトさん、まだ何か持ってますね?　その背中に隠したものを出してください。」

「えっと、これは討伐時に損傷してしまって・・・。換金できるかどうか怪しいんだよ」

「原型さえ残っていれば、鑑定して換金する事が出来ますから見せてください。」

なんとか出し渋って幾つかの言い訳をしてみるが、悉く(ことごと)言いくるめられ結局提出する事になってしまった。

「ほら、これだよ・・・。」
「それでは拝見しますね。魔物のブレスの影響でしょうか?少し表面が溶けていますね。
えっと、表面の装飾や大きさ、形から推測するに此れはグラシャラボラスの指環!?」

俺は大騒ぎになる事は目に見えて分かってたので咄嗟に両耳を手で塞いだ。

「グラシャラボラスって、ＳＳＳ級の特別指定魔族じゃないですかーーーーーーーー!!」

これから数時間、俺はローラとシルヴィアから質問攻めにさせられた・・・。

第４６話　新たな異世界へ（前書き）

この話で第１部が終了します。

第４６話　新たな異世界へ

討伐から戻ってきてローラとシルヴィアの前で魔法を披露した俺だったが、驚かれたのは魔法の事ではなくグラシャラボラスを討伐してきた事実だった。
散々質問攻めにされた数時間後、ようやく騒ぎが収まってきた。

「そ、それでは報酬をお渡ししますね。　過去最大の金額になりますね・・・。」
「そりゃあＳＳＳを４体にＳＳＳを１体だもんねぇ。」
「ゴホン！では発表しますね・・・。まず、リザードマンが金貨２５枚にアークデーモンが金貨２０枚、キメイラが同じく金貨２０枚とワイバーンが金貨１７枚とグラシャラボラスが白金貨２枚です。」
「合計で白金貨２枚と金貨８２枚か・・・。」
「更にミコトさんはＳＳランクに昇格になりました。おめでとうございます」

ギルドから報酬が払われた直後、次の世界の準備をするため預けてあったお金を全ておろし、ポケットに仕舞った。

此れで俺の全財産は白金貨２枚と金貨７３枚と銀貨９枚に銅貨１枚か・・・。
あとはこの金を使って、向こうの世界で高く買い取りしてくれそうな物を買って旅立つだけだな。

「じゃローラにシルヴィア、さっきも言ったけど此処での事は他言無用で頼むぞ？」
「分かりました。」
「近衛騎士の名に掛けて誰にも喋らないと誓うわ！」

俺はそれだけを言うと、街中にある高価な魔道具の店や宝石店を回ることにした。

（ルゥ、俺の目だけじゃ贋物や安物を買わされる恐れがあるからな、協力してもらうぞ？）

（お任せ下さい！魔道具や宝石の類には高価なものほど、魔力が内蔵されてますから魔力を検知する事により贋物とか安物とかが分かりますから。）

俺はルゥに協力を求めると、少し怪しげな感じのする宝石店に足を踏み入れた。

「いらっしゃいませ！　恋人の方への贈り物でしょうか？」

「そうだ、この店にある一番高価な物を見せてくれ。」

「畏まりました。暫くお待ち下さい」

店員が店の奥へと消えてから数分後、手には数多くの宝石が施された腕輪や首飾りなどが載っていた。

「此方はいかがでしょうか？　かの有名な宝石商が作り上げたと言われる一品物で御座います。」

（ルゥ、どうだ？　コイツの言っている事は正しいか？）

（これはまた見事な・・・。）

（見事な？）

（贋物です。他の装飾品に至っても、少したりとも魔力が感じられません。）

やっぱりか、店員の作り笑いな顔だけでも怪しいと思って居たんだよな。

（この店の中に本物はあるか？）
（えっと、少し待ってくださいね・・・。）

俺が怪しまれないようにと品定めを行っていた頃、ルゥが意識を集中しだしてから数分が経過した。

（マスター、お待たせしました！この店の中にあるのは全て贋物です。どれも価値は全くと言っていいほどありません）
（そうか・・・。別の店に行くぞ。）
「お客様、お決まりでしょうか？」
「いや此処に俺の求める品物は無い！店主、邪魔したな。」
「またのご利用をお待ちしております。」

俺が店を出て道路に出ようとした時、後から店主の舌打ちが聞こえてきた。

「次はどの店にしようかな・・・。」

と見回してみると大通りに煌(きら)びやかな外見の庶民には近寄りがたい雰囲気の店が建っていた。

「少し入りにくいが、行くだけ行ってみようか。」

周りから視線を感じながらも店内に入ると光り輝く宝石や指輪・腕輪などが壁一面に並べられていた。

「へいらっしゃい！　此処は魔道具の店だよ。兄さんみたいな剣士には合わないんじゃないかな？」

店に入ると煌びやかな外観には似合わない、まるで寿司屋に入ったかのような錯覚さえ覚えた。

（ルゥ今度はどうだ、魔力を感じるか？）
（はい！そこら中から高魔力を感じることが出来ます。この店は当たりですね）
「兄さん如何した？」
「いや、かなり強い魔力を感じたからな・・・。少し困惑したんだよ」
「お？あんた魔術師か、見かけによらねえな！じっくり見てってくれよな。」

数十分後、ルゥと相談しながら壁に掛けられていた腕輪や指輪など十数点を白金貨２枚と金貨７０枚で購入して店を後にした。

「これで残るは食料品だけだな。残りは金貨３枚に銀貨９枚と銅貨１枚か。」

食料品店で思い出したのは修行に向かう前に立ち寄った食料品店で、森での食事が美味かったため其処に決める事にした。

「いらっしゃいませぇ～～～。」
「これだけの金で買えるだけの肉と果物が欲しいんだけど？」

俺は金貨３枚と銀貨９枚を店員に見せると、返って来た言葉は驚くべき言葉だった。

「お客さん。　金貨３枚なら、この店の品物を全部買ってもお釣りが来ますよ！？」
「それじゃあ全部くれ。」

「わ、分かりました！　少し待っててくだしゃい。」

店員はこのような事は一度も無かったのか、驚いて噛みながら食料品を袋に詰めていた。

「お釣りの銀貨２０枚です。　ありがとうございましたーー！またのご利用をお待ちしています。」

俺が大きな袋を持って店の外へ出ると、商品がなくなった為かイソイソと店じまいを始めていた。

道具を買って、大通りへと出たときに通行人の話を聞いていると、数週間前にレグリスの王や騎士達が皆殺しにされたという話を耳にした。

話しの内容が気になり聞き耳を立てていると、地面に人型の焦げ跡が幾つもあっただけで目に見える死体は確認できなかったという話だった。

レグリスが気になりながらも、あの国の事だから内乱でも起こって滅びたんだと思い、俺は一旦宿屋の自分の部屋へと向かい、何とか部屋の扉から中に食料品の詰まった袋を部屋の中に入れると直ぐに異次元空間を開いて食料品と魔道具を一緒に収納した。

（あとは銀貨２９枚か・・・。ハイドさんの店に行ってみようかな）

（そうですねぇ～～、マスターは怪我をしませんが鎧を買われたらいかがですか？）

（そうだな、最初に買った軽鎧も色々とボロボロになっているしな。うん、そうしよう。）

別段急ぐ事も無いのだが、レインに出かけると言いハイドさんの店へと向かった。

「おぅミコトじゃねえか、今日はどうしたんだ？」
「討伐依頼に出ようかと思って鎧を探しているんですが、銀貨２９枚で買えるような鎧はありますか？」
「う～ん、壁に掛かってる黒い鎧なら銀貨２５枚なんだが・・・少し重いがいいか？」
鎧に近づいて持ってみるが能力のためか全然重さが感じることは無く簡単に持ち上げる事が出来た。
「お！流石だな、買うかい？」
俺は鎧の近くに置いてある銀貨４枚の投げナイフ２本と一緒に購入し金を使いきった。
「ミコト、何処に行くか知らねえが気をつけていけよ！！」
「はい、ありがとうございました。」
「それはコッチの台詞だ！」
ハイドさんと笑いあいながら武器屋をあとにして宿屋へと向かい、この世界最後の食事を終えて部屋へと戻っていった。
俺は部屋で身支度を整えると、魔力を解放し光の精霊に貰った腕輪を浮かび上がらせる。
更に頭の中で光の精霊に呼びかけながら、意識を腕輪に集中していく・・・。
（主様？　如何か為されましたか？）
（次の世界に旅立つ準備が出来たんだけど、直ぐに送れるか？）
（それは可能ですが、もう戻っては来られませんよ？　やり残した事は御座いませんか？）
（少しレグリスの事が気になるが・・・俺は大丈夫だ。ルゥはどう

だ？）

（私はマスターに仕える精霊です。思い残す事は御座いません）

（死にに行くんじゃないんだから。準備は完了だ、何時でもいいぞ）

（では、気を楽にしてお待ち下さい。）

暫くすると俺の体が光り輝き、次の瞬間には俺の姿は掻き消えていた。

俺がその世界に存在し、冒険していたという事実とともに・・・。

俺の存在はエミリアやシルヴィア、ローラ、レイン、ハイドさんの頭の中から何も無かったかのように消え失せ、光は俺の身体を新たな世界へと誘(いざな)い始めた。

第４６話　新たな異世界へ（後書き）

前書きにも書いたとおり、１部目はこれで終了と致します。

レグリスの事が気になる読者の方々も数多く、いらっしゃると思いますが物語の終盤に於いて再登場する予定でいますので首を長くしてお待ち下さい。

ちなみに物語と致しましては、やっと序盤の最初の方が終了した位ですので『異世界を渡りし者』を此れからも長いお付き合いを宜しくお願いいたします。

序に・・・予定外の事が起こらない限り、次の更新は３日後を予定しております。

第４７話　到着早々、命の危険？（前書き）

お待たせいたしました。

２番目の異世界の始まりです

第４７話　到着早々、命の危険？

宿屋の部屋にて光の精霊に次の世界への道案内を頼んでから数秒後、俺は四方八方から風を受けていた。
少し前までは宿屋の自室に居たんだから身体全体に風を受けるのも可笑しいし、足元が覚束ないのも可笑しかった。

（主様、到着いたしました。）
（光の精霊よ・・・、到着したのはいいが何でこんな場所なんだ？）

俺が立っている（？）場所はというと遙か下に薄っすらと木々が見えるほど、遙か上空だった。
今現在の状況はといえば、時速３００ｋｍほどの速度で地上に自由落下している最中だ。

（申し訳ありません。送信先の座標の設定に失敗してしまいました）
（俺はこの世界で何をすればいいんだ？）
（主様、この世界には火の精霊が居ますので探して精霊玉をお受け取り下さい。）
（分かった。）

俺は光の精霊との会話を終わらせると地面に落下する恐怖を覚悟した。
地面激突まで凡そ残り１０ｍ・・・残り５ｍ・・・３・・・２・・・１・・・！
次の瞬間には地面に巨大なすり鉢状のクレーターを作りながらも、怪我も無く無事に地面へと両方の足で立っていた。

（ふぅ～死ぬかと思った・・・。）

（マスターお言葉ですが普通の人間なら、あの高さから落ちれば間違いなく即死ですよ？）
（絶叫度が高いジェットコースターのような感覚かな）
（死亡率１００％は確定ですがね。）

精霊達と色々と会話していたが最寄の街に逸早く着きたいがため、あても無く歩き始めた。
とりあえず、原っぱの真ん中に立っているわけにも行かず少し歩いてみると野原の畦道に馬車の車輪が通ったであろう溝が残されていた。

「これは馬車が通った時に出来た轍で間違いないよな。　問題はどっちの方向に街があるかなんだけど。」

確率的には５０％の賭けだったが、ヤマカンで道を選んで歩き始めた。
歩き始めてから十数分後、前方に幽かにだが塔のような影が見えてきた。

「どうやら、この方向で間違いなかったようだな。前の世界のレグリスみたいな国でないことを祈ろう」

そう考えながら２０分ほど歩いていると、目の前に馬車が停まっていた。
更には誰かが争っているような剣戟の音や、何者かの叫び声が聞こえてきた。

「・・・ら、・・・しく金を・・な！！」
「見て・・・・の？　お金な・・・・・よ！」
「・・・の斧が・・ないのか！？」

「無・・・は無・・よ！」

一瞬『なんだろう？』と思ったが、斧という言葉が聞き取れた時に賊に襲われていると確信した。
俺は逸早く腰から剣を引き抜き、念のために魔力を解放して馬車の停まっている場所へと駆けつけた。

「そこまでだ！」
「なんだテメエは！？　正義の味方気取りか？たった一人で何が出来る！！」

俺が到着した頃には馬車の周りに護衛らしき武装した兵が数人倒されていて、賊の頭であると思われる髭面の男と馬車の荷台で震えながら受け答えしている中学生ぐらいの女の子が此方をみていた。

「テメエみたいな奴一人で此れだけの人数相手に勝てるとでも思っているのか？とんだ笑い種だぜ！！」
「何処かで聞いたような台詞だが、遺言はそれだけか？」
「舐めやがって！てめえら殺っちまえ！」

男の合図とともに馬車の周りに群がれていた大勢の男達が俺の方へと襲い掛かってきた。

（俺はよっぽど賊に縁があるのかねぇ～）
（今のマスターなら数百人で襲われても難なく撃退できるでしょうね。）
（そうだな。）

俺はルゥと会話をしながらでも賊を一人、また一人と打ち倒して行き、数分後には賊の山が出来上がっていた。

「残るはお前だけだが、命乞いでもするか？」

襲い掛かってきた賊を数分で全滅させた俺は賊の頭の首に剣を突きつけ、どっちが悪者か分からないような顔で問いかけをしていた。

「た、助けてくれ！　どうか命だけは・・・。」

「無様だな。何処へなりとも行くがいい。　その代わり、２度と俺の前に姿を見せるな！！」

剣を鞘へとしまい馬車で震えている少女に声を掛けようと歩き始めた時、背中に違和感を感じた。

見ると俺の背中から腹に掛けてナイフが貫通していた。

「とんだ甘ちゃんだな。あんな芝居に引っかかりやがって！！」

「あぁーーー！？　なんて卑怯な真似を。　命を助けてくれた相手に襲い掛かるなんて・・・。」

「ウルセエ！どんな状況でも最後には勝てばいいんだよ！！　そんな事より自分の心配をしたほうが良いんじゃねえか？助けに来た男はこの通・・・！？」

俺は何事も無かったかのように立ち上がり、背中からナイフを引き抜いて逆に男の背中に刺して直ぐに引き抜いた。

「お前のナイフだろ？返すぜ」

「てめえ、何で生きていやがる！？　確かに急所を刺した筈だ・・・。」

男はそれだけを言うと背中から大量の血を噴出し、うつ伏せに地面へと倒れ動かなくなってしまった。

土色だった地面は男の流す血の色によって、どす黒い赤へと染まり代わりに男の顔が土気色へと変化していった。

「嬢ちゃん、怪我は無かったか？」

「私は隠れてたので大丈夫ですが、貴方こそ背中を刺されたのに平気なんですか！？」

「ん？ああ、瞬時に回復魔法を掛けたからな。」

そう言いながら少女に傷口を見せるが、そこには痕すらなく破れた服があるだけだった。

本来は異常な回復力のおかげなのだが、説明するわけには行かず魔法とすることにしたのだが・・・。

「魔法が使えるということは、あの学園の卒業生の方なんですか！？」

「学園？」

「違うんですか？遠くに見えるあの塔が学園のシンボルである魔力塔です。　私は入学のために学園を目指していたんですが、賊に襲われてしまい一緒に入学する筈だった幼馴染は逸早く逃げ出してしまい、護衛に雇った方々も賊にやられて全滅してしまいました。」

街だと思って目指していたものは学校だったのか・・・。まあいい、学校まで行って道を聞くか。

「あの、ご迷惑でなければ学園まで御一緒していただけませんか？　報酬もお支払いいたしますから。」

「他に用事は無いからな、学園の入口までなら付き合おう。　方向は一緒だし序(ついで)だからな、報酬は必要ない」

「そんな！？　仮にも命を助けてくださった方に、御礼をしないというのはあまりにも・・・。」

う～ん、どうしようか？　こんな性格の子は言っても聞かなそうだしな。そうだ！！

「なら金銭の報酬ではなく此処らへんの案内を頼めるか？　つい先程、到着したばかりで右も左も分からない状況なんだ。案内してくれると助かる」

「それなら学園の道すがら御説明いたします。　長々と話しこんでしまっては入園式に間に合いませんし」

「じゃあ出発しようか。此処から学園までは遠いのか？」

「馬車でなら1時間もあれば余裕で到着できますよ。　そういえば自己紹介がまだでしたね、私の名前はマリアと言います。　貴方の名前を聞かせていただきますか？」

「ああ、俺の名はミコトだ。宜しくなマリア」

「はい！よろしくお願いしますミコトさん。」

こうして賊や護衛の死体が並ぶ広野を馬車は動き出し、一路学園へ向けて出発した。

第４８話　なんで俺が・・・

俺は学園に到着するまでの１時間の間にマリアから色々な事を聞き出せた。
これから行く場所はアメリトス魔法学園といい、イスラントールという国の唯一の学園らしい・・・。
しかも入園式の時間までに間に合わなければ、どんな事情があろうと入園する事は出来ないらしい。
この大陸は北西に位置するイスラントールと北東に位置するスコルピオン国、南に位置するサウスラーズ国が睨みあいをしており、３竦(すく)み状態で中央にある火山の山脈を国境にして膠着(こうちゃく)状態が続いているという事。

（火山か・・・。光の精霊が言う火の精霊は其処に居るのかな？）

そうこう話している間に賊や魔物に襲われることなく、馬車は学園の入口へと辿りついた。

「到着しましたね。ありがとうございました、ミコトさん」
「護衛の必要は無かったみたいだな」
「そんな事ありませんよ。　命を救われたのは確かですし・・・」

散々会話したあと、マリアは御礼を言いながら馬車ごと学園内へと入っていった。

「さて、火山の場所が何処にあるのか聞かないとな」

俺は学園の部外者でありながら園内へと入り、話しの聞けそうな人を探していた。

周囲を見回すと、手に何かの文字がビッシリと書き込まれた用紙を持って歩き回っているメガネをかけた女性が目に見えた。

「何か声が掛け辛い状況だが他には誰も見当たらないし、しょうがないか・・・」

俺は自分自身を納得させると、意を決して話しかけることにした。

「すいませ～ん！ちょっと聞きたい事があるんですが？」

「あ、貴方！？　まだこんな所に居たの？　もう直ぐ式が始まるわよ！急いで！！」

「ちょ、ちょっと待・・・」

「話してる時間なんて無いわ！　いいから着いて来なさい！！」

「いや、だから俺の話を・・・」

俺の事を誰かと勘違いしている女性は此方の言い分など聞く耳もたずに俺を建物内へと押し込んだ。

「此処で静かに待ってなさい！　１時間ほどで式は終了しますから案内人に従って進むように」

「だから俺は！」

「口答えしない」

「はい・・・」

完全に学園の生徒扱いされた俺は、大人しく式の内容を聞いていた。

内容はというと、式とは入園式のことで１年間の学園生活が今日から始まるとのことだった。

学園長と思われる、やたらと髭の長い爺さんの話によると一度入園してしまうと許可が下りない限り園外への外出は禁止されており、生活費などの費用は構内にあるギルドで仕事をして稼ぐらしい・・・

。

（マスター、しっかりとマリアさんの巻き添えで入園してしまいましたね。）

（そうだな・・・。この女性は俺が何を言っても、取り合ってくれないしな。）

（でも、魔法学園ということはマスターの力として利用できますね。）

（それもそうだな。急ぐ旅でもないし、２度目の学生生活を味わうのも悪くないか。）

ルゥと話している間に入園式が終了し、パッと見でも２００人以上はいる生徒が一斉に移動していく。

「ほら、入園式が終了して次はクラス分けの為の身体測定よ！　列に並んで待っていなさい」

「身体検査って？」

「ここは魔法学園よ？　魔力検査と適性検査に決まってるじゃないの！？」

俺を此処まで無理矢理に引っ張ってきた女性と会話しながら列に並んで着いて行くと凄く広い空間に２個で対になった水晶玉が置かれていた。

俺が水晶を見ていると水晶玉から声が聞こえてきた・・・。

「・・・魔力値１２００　属性、火・水　Ｇクラスへ」

水晶玉の声が聞こえなくなった後、台からカードのような物が飛び出し、測定を終えた生徒がカードを持って嘆いていたり喜んでいたり・・・・・。

「残るは数人だけね。さっ貴方も測定してきなさい」
俺は隣の女性に促されるまま、2個の水晶玉を前にして手を触れるか触れないかの所で考えていた。

（マスター、大騒ぎになる事は目に見えて確実ですから覚悟してくださいね）
（魔力を放出しなければ大丈夫だろ？）
（いえ、潜在魔力を調べるための水晶のようなので・・・）

俺がルゥと心の中で会話していると。

「何をしてるの！？残りは貴方だけよ。　水晶に手を置いて精神を集中させなさい」

見回してみると先程まで騒いでいた生徒は一人も居なくなり、残っているのは俺と隣の女性と水晶の前で腕組みをして睨みつけている数人の教師だけだった。

「すいません。使用方法が分からなかったもので・・・」
「それならそうと早く言いなさい。まず右手を右の水晶に左手を左の水晶に置いて精神を落ち着かせて」

俺は言われるままに水晶に手を置いて深呼吸しながら気分を落ち着かせた。
その直後、左の水晶玉から『ヴーン』という音がなったと思った次の瞬間には粉々に破裂してしまった。

「どうやら水晶が不良品だったみたいね。此方の最新型の水晶で再測定してみましょう」

女性に連れられて向かった場所には他の水晶よりも一回り大きな水晶が威圧感を曝け出して置かれていた

「先程の要領で両手を水晶に置いて気を落ち着かせて・・・」
直後に先程の水晶と同じ様な『ヴーン』という音が鳴り始めたが、今度は破裂する事は無かったが代わりに別の意味で大騒ぎする事になってしまった。

「魔力値測定不能　属性、火・水・氷・風・土・雷・光・闇・空間・移動・回復。　Ｓクラスへ在籍」
「「「なっ！！？」」」

女性もその場に残っていた教師達も思いも寄らない測定結果に唖然としていた。
俺はというと、ある程度はルゥとの会話で予測していたため半ば諦めモードになっていた。
数秒の間を於いて水晶の台座から１枚のカードが飛び出してきた。
カードの表面には何時の間に撮られたのか俺の顔写真が貼り付けられ裏を反すと『Ｓクラス』の文字と属性欄には火・水・氷・風・土・雷・光・闇・空間・移動・回復の文字があり、その下に名前を書き込む欄と意味不明な『Ｓ１０８０１』という番号と何が書き込まれるのか分からない空白の場所が空けられていた。

「あの～～俺は此れから、何処に行けば良いんでしょうか？」

俺は未だに固まっている、女性や教師に声を掛けるが誰からも返答は無く、時間だけが過ぎていった。

第４８話　なんで俺が・・・（後書き）

５／４　属性欄に雷が抜けていたので修正しました

第４９話　クラスメイトの中に

俺の魔力測定が大混乱のもと終了してから数十秒が経過した頃、一人の年配者の声によって女性と教師達は我に返った。

「貴女達は生徒をほったらかしにして何をしているのです！？　測定が終了したのなら、直ちに生徒達を各クラスの教室に誘導しなさい！」

「はっ！？　申し訳ありません理事長先生。直ぐに行ってまいります」

「分かったなら駆け足駆け足！　あら？貴方は？」

「少し前に測定が終わったんですが、何処に行けばいいか分からずに・・・。」

「教師の方々にも困ったものですね。学生証を見せて御覧なさい、私(わたくし)が案内いたしますわ。」

学生証？そんなもの貰ったっけ？

「水晶の台座からカードを取り出したのでしょう？」

「これが学生証なんですか？」

「そうです。学生証の裏にあるクラスは何と書かれていますか？」

「えっと・・・。Ｓクラスです。」

「優秀なのですね。　御案内いたしますわ、着いて来てくださいね。」

俺は前を颯爽と歩き出した年配の女性に着いて行き、東側の最奥にあるＳと書かれた扉の前に行き着いた。

「此処が魔力測定で最優秀の実力と認められた生徒が勉学を学ぶ教

室です。」
「あ、ありがとうございます！」

俺は行儀よく目の前の女性に頭を下げると、相手も同じ様に頭を下げてきた。

「私はこの教室の担当教師であるミレイルといいます。此処で会話していても始まりませんし、中に入りましょうか。」

ミレイル先生が教室の扉を開いて中に入り、俺も後を追って教室内に入ると入園式に見たような人数ではなく、１０人しか教室内には居なかった。
それでもキョロキョロと見ていると良く見知った顔の少女が此方を凝視しながら指差して固まっていた。

「其処の貴女！　行儀悪いですよ。人を指差すんじゃありません！」

俺よりも先に教室に足を踏み入れたミレイル先生が人差し指を伸ばして固まっているマリアを一喝していた。
その直後に教室中から笑い声が聞こえだしていた。

「マリアさん、そろそろ指を戻した方が良いんじゃありません？」
「え！？　申し訳ありませんでした！」

少女（マリア）は赤面し俯いてしまった。

「それでは貴方は空いている席にお座りなさい。これから朝会を始めたいと思いますから」
「はい。分かりました」

俺は教室内を見回しながら歩いていくと、ちょうどマリアの隣の席が空いていた。

「どうやら席に着いたようですわね。それでは最初に自己紹介を致します、私の名はミレイルと申します。知っている方もいらっしゃると思いますが、アメリトス魔法学園の理事をさせて頂いております。」

俺は机に肘をついて理事長の話を聞いていると、先程まで俯いていた隣の席のマリアが肘で小突きながら小さく折りたたんだ紙を俺に手渡してきた。　俺は渡された紙を静かに開封し、中身を見ると・・・。

『なぜミコトさんがこの学園に居るのですか？　休憩時間に教室の前で待っていてください』

と書かれていた・・・。

俺がマリアと机の下でやり取りをしている間もミレイル理事長先生の話は続いていた。

「朝会はこのぐらいにして次はこの学園の事を説明いたしますね。皆さんは入園式を終えてから直ぐに検査水晶による魔力の潜在値の調査をされたと思いますが、その結果によって授業を受けるクラスに分かれます。」

それで水晶での身体検査を一番最初に執り行ったわけか・・・。

「魔力量によって上はＳクラスから下はＡ～Ｉクラスまでの１０クラスに分かれております。皆さんのいる、このＳクラスは最低でも５万魔力値はないと入室する事ができません。」

俺の場合は５万どころか、魔力量測定不能で既に水晶を１個粉砕し

てるしな。

「それでは、次に皆さんに名前と趣味や特技を発表してもらいましょう。では其方の方から順番にどうぞ。」

この教室は授業を受けやすくするためか教師の立ち位置を中心とした半円形な机の並べ方になっていた
そのため机に向かって座っていても、前の生徒の背中など遮る物は一つも無く全員が教師と目を合わせて座っていた。
教室の一番左端に座っていた大人しそうな顔つきをしている男子生徒が立ち上がり、会釈したあと自己紹介を始めだした。

「えっと・・・。僕の名はアレン＝Gといいます、特技はなく趣味は本を読む事です。」

ん？　“G”ってなんだ!?

「私はモニカ＝Aです。特技は特に無く、趣味はお裁縫です。」

まただ。今度は“A”だったな・・・。　それに出身とかは言わなくてもいいのかな？
俺が頭に？の文字が何個も浮かんできそうな顔で考えていると隣にいたマリアが気づいたのかノートを1枚ちぎって何かを書き込んでいた。
そうしながらも、どんどんと自己紹介が進んで行き、残り5人になろうとしていた。
それまでに聞いたアルファベットはGとかAとかSとかD・・・。
バラバラだった。
そんな折、マリアが鉛筆を置いたと思ったら俺の身体を肘で小突き、四つ折にした用紙を手渡してきた。

俺が極力、音を立てずに用紙を広げると其処に書き記してあったものは!?

『名前の横にあるのは家名の頭文字で貴族や他国が入園する事もあるから、混乱をきたさない様に家名を隠して出身地が分からないようにする対策が施されたの。』

「其方の貴方達は何をコソコソとしていらっしゃるのですか？」

「い、いえ何でもありません！」

「それなら宜しいのですが次の次は貴女の番ですよ。」

俺は用紙に気を取られていた所為か、俺とマリアとその隣の少女以外の自己紹介は既に終了していた。

3個隣の席の男子が自己紹介を終えて椅子に座るとすれ違い様にマリアの隣の少女が立ち上がった。

「私、ルシア＝W。　特技はなし、趣味はお菓子作り。」

少女は必要最低限の事柄のみを口にして、即座に椅子へと腰掛けて此方に笑いかけていた。

「自己紹介も残り2人になりましたね。時間も残り僅かになりましたので速やかに行きましょう。」

マリアは緊張しているのか自分の胸に手を当てて気分を落ち着かせていた。

「わ、私はマリア＝Rと言います。特技はありません、趣味は読書です。」

マリアは言い切ると額に汗を浮かばせながら静かに腰を下ろしたが、

立ち上がる時に勢い良く立ったため椅子は後にガタンと倒れこみ、それに気づかないマリアは教室の床に勢い良く倒れこんだ。

「キャウ！！？」

俺も咄嗟に手を差し出したが間に合わず、マリアは尻餅をつき周囲から笑い声が聞こえだしていた。

「マリアさん？　大丈夫ですか！？」

「大丈夫れす～～～」

「では気を取り直して最後の方の自己紹介をお願いいたします。」

俺は未だに倒れているマリアの方を気にしながらも、そっと立ち上がった。

「俺の名はミコト＝Mといいます。　特技は剣技で、趣味は身体を鍛錬する事です。」

俺は言うだけ言うとマリアに手を差し伸べながら着席した。

「魔術師の弱点は身体の脆さですから鍛錬する事はとても良い事ですね。」

キーン、コーン、カーン、コーン・・・・

ミレイル先生が話し終えた直後に学校のチャイムのような音が響き渡った。

「今日は此処までのようですね。それでは各自、寮に戻って明日の本授業に備えるように。」

先生が教室から退出して行った瞬間に緊張の糸が途切れたかのように教室内は騒然となった。
マリアはというと赤面した状態で顔を机に突っ伏し「恥かいた恥かいた」と繰り返し戯言のように言っていた。
初日から大変な1日だったな・・・。まさか学園生活になろうとは。

閑話？　マリアの事情（前書き）

色々なシーンを書き足していった結果、通常の１．５倍にまで文字数が増えてしまいました

閑話？　マリアの事情

私の名前はマリア＝ライオットと言います。
イスラントールの端の端にある小さな村の出身です。
この度は村に居る両親が駄目元でアメリトス魔法学院への入学申請を行なってくれました。
幼馴染の男の子の親も私の両親の考えに賛同し一緒に入学申請を行なった模様です。

“駄目元”と言ったのには訳があります。
イスラントール領内にある魔法学園は国の内外を問わず生徒を募集しています。
そのため学園に入学申請する生徒は何千、何万と存在します。
その中の定員３００名ですから確率的には何百分の１になってしまいます。

魔法学園を卒業したとあってはクラスによって名前にも家名にも箔がつきますし、就職先にも困る事は無くなります。
先程言ったクラスというのは、幅広く配られている学園案内によると一番上はＳ、あとはＡ～Ｉクラスの全１０クラスが存在するそうです。
クラス分けの基準は入園式後の身体検査で調べる潜在魔力の多さで決められるそうです。

私も今まで魔法なんて使った事はありませんでしたから、多分最低クラスのＩクラスに入るのではないでしょうか？
そして入学申請を学園に送った日から１ヶ月が経過し『やっぱり無理だったか』と皆が諦めかけていた時、２通の重要書類と書かれた封筒が送られてきました。

恐る恐る震える手で封筒を切ると私の分と幼馴染の分の2枚の入学許可証が入っていました。

此れには普段冷静な私の両親も近所迷惑なほどの大声で奇声を上げながら喜んでいました。

しかし、入学許可証には注意書きとして『1ヶ月後（今日から）の入園式に間に合わなかった場合は無効とする』と書かれていました。

此れには先程まで大騒ぎしていた両親も幼馴染の親も顔が真っ青になってしまってました。

それもその筈、私達の村はイスラントール領内の最果てにある小さな村、領内の中央に位置する魔法学園までは馬車で休み無く走れば10日ほどで辿りつきますが、そんな馬車を買えるお金はありませんし、かといって歩くと最低でも1ヶ月以上はゆうに掛かります。喜びから一気に落とされた両親は『何か手はないか』と方々に動き回っていました。

そんな時でも着々と時間だけが過ぎて行き、入学式まで残り15日となってしまっていました。

『もう駄目か』と魔法学園への入学を諦めかけていたその時、天の助けか偶然にも馬車を連れた冒険者の方が村へ休憩のために立ち寄りました。

両親も『この期を逃すまい』と馬車に駆け寄り交渉を始めました。

それを見ていた幼馴染の親御さんも交渉に参加し始めました。

冒険者の方々もまさか休憩に立ち寄っただけの小さな村で『魔法学園まで連れてってくれ』という言葉に大いに驚き、交渉は難航していました。

それから2時間後、漸く交渉がうまく行き、村の家々から頼み込んで集めた500リルのお金と食料とを引き換えに魔法学園まで乗せ

て行ってもらえる事になりました。
そして出発の日、村を上げての大騒ぎに見送られながら私と幼馴染の2人は学園に向けて出発しました。

その後、厳つい顔のわりには優しかった冒険者の方たちと世間話を繰り返しながら学園の眼と鼻の先という場所まで辿りつくことが出来ました。
しかし途中色々な事（幼馴染が馬車に酔うなど）があり入園式の日になってしまってました。
『なんとか間に合ったかな?』と思っていたとき、手綱を操っていた冒険者の方が1本の矢に頭部を貫かれて絶命してしまいました。

何事かと思えば馬車の進行方向に数人の斧や弓矢を番えた盗賊らしい人達が・・・。
冒険者の方々も負けじと応戦しますが、圧倒的に人数で不利だったのか瞬く間に私を残して全滅してしまいました。
私と一緒に馬車に乗り込んでいた幼馴染はというと、冒険者と盗賊が争い始めて直ぐに馬車を飛び降りて来た道を走って逃げていきました。
どうせなら私を連れて魔法学園のほうに逃げればいいのに・・・。

「あとは嬢ちゃんだけだぜ?　殺されたくなかったら大人しく金をだしな!」
「見て分からないの?　私はお金なんか持ってないわよ。」
「なんだと!?　この斧が眼に入らないのか?」
「無いものは無いのよ。」
「しょうがねえな、こうなったら嬢ちゃんを売って・・・」

周りの盗賊たちもゲヘヘヘヘと私を見て厭らしい笑みを浮かべていました。

『もう駄目か』と思っていたとき、二度目の天の救いが現れたのだった。

「そこまでだ！」

盗賊が私を捕まえようと手を伸ばしてきたその時、１人の剣を持った方が現れました。

「なんだテメエは！？　正義の味方気取りか？たった一人で何が出来る！！」

盗賊は私から突如現れた御方に向き直り、厭らしい笑みを浮かべていた盗賊も武器を持ち直して臨戦態勢を整えていました。
素人目にも分かる剣を持った御方は１人、されど盗賊は３０人明らかに分が悪すぎます。

「テメエみたいな奴一人で此れだけの人数相手に勝てるとでも思っているのか？とんだ笑い種だぜ！」
「何処かで聞いたような台詞だが、遺言はそれだけか？」
「舐めやがって。　てめえら殺っちまえ！」

定番とも言うべき会話がなされた直後、一斉に盗賊たちは襲い掛かっていきました。
私は『あの方も冒険者の方々と同じ様に・・・』と考えていましたが、予想に反し盗賊たちは次々と地面に倒れ伏していきました。
そして残るは私を脅してきた盗賊の親分ただ１人。

「残るはお前だけだが、命乞いでもするか？」
「た、助けてくれ！　どうか命だけは・・・。」
「無様だな。何処へなりとも行くがいい。　その代わり、２度と俺

の前に姿を見せるな!!」

襲った相手に命乞いなんて確かに無様ですね。　でも其れを助ける方も優しすぎます。
どうやら地面に倒れている盗賊の方々も亡くなってはいないらしく、苦しげな声が聞えています。
そして盗賊の相手をしていた方が私に話しかけようと身体の向きを変えた瞬間、御腹からナイフが突き出していました。

「とんだ甘ちゃんだな。あんな芝居に引っかかりやがって!」
「あぁーーー!?　なんて卑怯な真似を。　命を助けてくれた相手に襲い掛かるなんて・・・。」
「ウルセエ!どんな状況でも最後には勝てばいいんだよ!　そんな事より自分の心配をしたほうが良いんじゃねえか?　助けに来た男はこの通・・・!?」

助けに来てくれた方は何事も無かったかのように胸からナイフを引き抜き盗賊の背中に刺していました。
普通は身体を貫通するほど刺さっていれば抜いた途端に出血多量で死ぬと思うのですが・・・。

「お前のナイフだろ?返すぜ」
「てめえ、何で生きていやがる!?　確かに急所を刺した筈だ・・・。」

盗賊は其れだけを言うと刺された場所から夥(おびただ)しい血を噴出して地面に倒れてしまいました。

「お嬢ちゃん、怪我は無かったか?」
「私は隠れてたので大丈夫ですが、貴方こそ背中を刺されたのに平

気なんですか！？」

「ん？　ああ、瞬時に回復魔法を掛けたからな。」

回復魔法ということは魔法学園を卒業したての方でしょうか？
その後色々な話しをして学園まで護衛してもらう事にしました。
先程盗賊にはお金を持ってないと言ったのですが、両親がなけなしに持たせてくれたお金を報酬に渡そうとしましたが、『道すがらだから』といって受け取って貰えませんでした。
私も『其れだと申し訳ない』と言ったところ、この辺りの地理と火山が国境になっている事を説明いたしました。
話しに寄れば魔法学園のことも知らないみたいで説明に困ってしまいました。
それからも世間話や周辺に関する会話をしながら約1時間後に魔法学園に到着いたしました。

「到着しましたね。ありがとうございました、ミコトさん」

「護衛の必要は無かったみたいだな。」

「そんな事ありませんよ。　命を救われたのは確かですし・・・。」

私は大袈裟すぎるほどに会話の途中で“ミコト”と名乗った方に頭を下げ魔法学園に入りました。
学園内の人に聞いた話では入園式まで残り5分を切っていたとの話しでかなり危なかったです。
私は受付の人に『入学許可証』が2枚入った封筒を差し出して入園式が行なわれるという講堂に全速力で走っていきました。

「変ねえ・・・あの娘1人なのに入学許可証が2枚あるわ。　何処かで道に迷ってるのかしら　ん？誰か来たみたいね。
さては彼女と一緒に構内に入ったはいいけど何処にいけば良いか分からなくなった子ね」

「すいませ～ん！ちょっと聞きたい事があるんですが？」

その後、学園長と紹介された髭の長い御爺さんの話が１時間近く続き漸くクラス決めの魔力検査が行われる事になりました。
私も出口近くに佇んでいた所為か真っ先に魔力検査を受ける事が出来ました。
『どうせ魔力なんて無いだろうからＩクラスだろうな』と思っていると、なんと魔力値５万１千でＳクラスになってしまいました。
信じられないくらい吃驚しました。

その後、学園内で道に迷いながらＳクラスの教室に辿りつくと其処には８人静かに座ってました。
『やっぱり最高クラスのＳだから人数が少ないんだな』と思っていると教師と思われる１人の女性が教室に入ってきました。　クラスの話し声を聞いていると理事長先生との事でした。

そんな事よりも私が吃驚したのは何故か理事長先生と一緒に教室に入ってきた私を此処まで護衛してくださったミコトさんの姿・・・。
私は咄嗟にミコトさんの人差し指で指差し心の中でこう言ってしまいました。
『なんでミコトさんが此処にいるのですかーーーー！？』

閑話？　マリアの事情（後書き）

前書きにも書きましたが色々と書きたいことが多くなり、これでも大分省いた方ですが４０００文字近くに膨れ上がってしまいました。

マリアが盗賊に襲われた経緯とミコトが何故魔法学園に入学する事になってしまったのかという事を閑話で御紹介いたしました。

第５０話　言い訳（前書き）

この話しで『最強の錬金術士』の話数（部数）を突破し、文字数も超える事ができました。

第５０話　言い訳

自己紹介が終わり、此れからの事を色々と考えて気が付いて見るとＳクラスの教室に残っているのは俺と未だに机に突っ伏しているマリアと、その隣に静かに座っているルシアと名乗った少女だけだった。
次の瞬間、マリアを挟んで不意にルシアが俺に話しかけて来た。

「貴方からは神秘的な何かが感じられるわ・・・。」
「そ、そうかな？　そんな特別な事はないと思うけど。」
「ウフフ。此れからも宜しくね」

ルシアという少女は微笑するとゆっくりと教室の外へと歩いていき、振り返ることなく立ち去っていった。
なんだか分からないが、俺も寮の場所を探すために教室を後にした。
俺はマリアを気に掛けながらも魔力測定を行った場所の近くまで足を進めると後方から声を掛けられた。

「ミコトさん！！廊下で待ってるって言ったじゃないですか！？」

声のするほうに振り返ると腰に両手を当てて怒っているマリアの姿が其処にはあった。

「そうだったな・・・。腰は大丈夫か？　凄い音がしたようだが。」
「その事には触れないで下さい！　思い出したくありませんから」
「そうか、ところで俺に何の用だったんだ？」
「ミコトさんが此処にいる理由を知りたいんですよ！　ミコトさんは学生じゃ・・・」

俺は周囲に人の気配をかんじたため咄嗟にマリアの口を手で塞ぎ、人目につかないところに移動した。
その直後、廊下の奥から歩いてきたのはミレイル先生で手には沢山の書類を抱えていた。

「行ったか・・・。ん?」

俺の腕の中では何故かグッタリとしたマリアの姿があった。

「ミコトさん、行き成り何をするんですか!?　私にも心の準備というものが・・・ゴニョゴニョ。」
「マリアの考えているような事は何も無いから心配するな。」
「そ、そんな事より此処にいる理由を教えてくださいませんか!?」

俺の目の前に居るマリアは何を緊張しているのか、額一杯に冷や汗をかいていた。

「此処では誰が聞いているか分からないからな、邪魔が入らない場所に移動したいんだが・・・。」
「それなら学生寮に行きましょう。同じSクラスですから寮も同じ塔だと思いますし。」
「塔?どういうことなんだ」
「学生寮は学園の敷地内に聳え立つ、一つ辺り地上30階もある塔のような建物です。
クラスによって待遇が違うんですが、魔力値の高いエリートが集まるSクラスの寮は他の寮の敷地と比べて2倍以上の面積の部屋が与えられます。」

「学生寮の鍵は何処で貰えばいいんだ?学園の事務所か?」
「ミコトさん、魔力検査の時に水晶から出た学生カードを持ってい

ますか？」

マリアにそう言われ、懐から学生証を取り出した。

「それです！　カードの裏にクラスと数字が書かれているはずです。それが寮の部屋番号になります。因みに私の番号はＳ１０８０２なのでＳ１寮８階の２号室という意味になります。」

「えっと、俺の番号はＳ１０８０１だからマリアと同じ、８階の１号室って事か。」

「お隣さんですね、宜しくお願いしますね。そして学生カードを扉に差し込む事で鍵が開きますから失くさないようにしてくださいね。」

「失くしたらどうなるんだ？」

「私達のクラスの担任でもある理事長先生から有難いお説教と罰金として５０リルが徴収されます。」

あの検査場で他の教師を怒鳴りつけた理事長先生のお説教か・・・。

「じゃそろそろ行きましょう。用も無いのに、校舎内にいるのも校則違反になってしまいますから。」

「そうだな、寮までの道案内を頼むよ。」

その後、俺はマリアとともに寮へと向かって歩き出した。

余談ではあるが、俺たちが去った５分後に機嫌の悪い理事長先生が通りかかり、その場で会話していたＢクラスの女子２人がお説教の餌食になったという・・・。

マリアに連れられ２０分ほど歩いて、やっと壁にＳ１と書かれた学生寮にたどり着いた。

「無駄に広いな、この学園は・・・。外に出てから２０分も掛かる

なんて」
「それはそうですよ。私達の学年から先輩方の学生数と各々の教師を入れて１０００人以上がこの学園内で暮らしているんですよ？Ｉクラスの寮なんて、此処から更に１０分以上はゆうに掛かりますよ？」

学園内なのに通園時間が片道３０分以上の距離って一体・・・。

「それでは中に入りますよ。」
「あ、ああ分かった。」

マリアに連れられて建物内に入るが、学生寮はドーナツ状の建物で何処にも階段やエレベータが存在してはいなかった。

「どうやって上の階に移動すればいいんだ？」
「其処の吹き抜けのところに光る床がありますよね。」

確かにマリアが言うとおり、常に光を帯びている床と隣には全く光っていない床とがあった。

「光っていない床は、降り専門です。上がるためには光る床の中央で魔力を出しながら、自分の部屋の階数を頭に思い浮かべれば自動的に床が上昇して行き着くことができます。」

魔力式のエレベーターってことか。

「今回のように複数人いる場合は、片方の人が思い浮かべれば一緒に浮かび上がります。
ミコトさんは初めての体験みたいですし、試しにやってみましょう。」

俺はマリアと一緒に光る床の中央に足を進めると、心の中で魔力解放クラス1と8の字を思い浮かべた。
その直後、床からヴーンという音が聞こえ出し静かに床が上昇して行った。
数秒後、光る床は壁に大きく8と書かれた階で停まり俺たちが降りると床は跡形も無く消え去った。

「初めてにしては上出来ですね。降りる時は部屋の中にある転送ポッドで1階に降りる事ができます。」
「便利だが、慣れるまでが大変だな。」

マリアと会話しながら周囲を見回すと、吹き抜け部分を中心に“８０１”“８０２”“８０３”の3部屋の扉が円を描くように並んでいた。　更に扉の中央には何かを差し込む細長い穴が開けられている。

「それでは聞きたい話もあるので、ミコトさんの部屋にお邪魔する事にしましょうか。」
「俺の部屋でか？　マリアの部屋で良いんじゃないか？」
「ミコトさん！　うら若き乙女の部屋に同世代の男性が入ると色々と問題になりますよ！？」

それをいうなら男の部屋に女性が入るのも、問題になるような気もするが・・・。

「それじゃあ、学生証を扉の穴に入れてミコトさんの部屋に入りましょう～～～」

俺はマリアのノリの良さに根負けして部屋の扉を開いてマリアを部

屋に招き入れた。
その様子を見られているとは思いもよらずに・・・。

第５０話　言い訳（後書き）

アクセスＰＶ１５０万　ユニークアクセス２０万人を到達しました。

第５１話　寮での暮らしと・・・

俺が部屋に入って最初に思ったのは学生の部屋にしては考えられないほどの広さのある空間だった。

「これはまた・・・。元の世界の俺の部屋が最低でも５個は入る広さだな。」

部屋の中に置いてあるテーブルや椅子も見た感じで高価なものと分かるし、部屋の隅には浴室まで完備されていた。　現代で言うならばマンションではなく、億ションとでもいうような部屋だった。

「ミコトさん？部屋を見て感激しているところ悪いのですが、そろそろ聞かせてください。　なぜ学生ではないミコトさんが、この魔法学園に入学してきたかを・・・。」

「それは・・・少し長い話になるが構わないか？」

「はい。」

俺は道を聞こうと女性に問いかけた話や無理矢理に引っ張られて入園してしまった事を話すと・・・。

「なんですかそれ！　ミコトさん、格好悪すぎですよ～～～。」

話し終わった途端に目の前に座って、真面目に話を聞いていたマリアが手を叩きながら盛大に笑い出した。

「笑う事無いだろ？　女性とは思えないほど強かったんだよ」

「ひーひー・・・。」

「まったく。」

「で、でも変ですね。　この学園は1期の生徒数が３００人と決められているはずなんですが。」
「３００人に決められている？」
「はい。事前に出身の村や町で学園入園許可証を受け取った方しか入園できないんです」
「その数が３００か・・・。ん？そういえば一緒に入園する予定だった賊に襲われた幼馴染の分の許可証はどうしたんだ？」
「あ、アイツの分なら失くさないように私の許可証と一緒の入れ物に入れて学園に提出しま・・・。」

マリアも自分の行動が何を意味するのかに気づいたらしく口に手を当てていた。

「どうやら、それが原因だな。許可証が３００枚あるのに人数が２９９人なら残りの一人は学園内で道に迷って入園式の会場に辿りついていないことになる。　偶々、残り一人を探している教師が俺を見つけて無理矢理引っ張っていったと考えるのが妥当だが、そう考えると悪いのは・・・。」

俺はギロッとマリアに目をやると、マリアも気づいたのか引きつった笑いを浮かべていた。

「え、え～と。ごめんなさい」
「まぁいいさ、此処の魔法にも興味あったからな・・・。楽しい学園生活をするさ。」
「スイマセンでした。　あ！そろそろ晩御飯の時間ですよ。１階にある食堂に移動しましょうか」

マリアに言われて外を見ると夕焼けから暗闇に差し掛かろうとしていた。

まてよ？　食事は良いが、俺はこの世界の金を手に入れてはいないぞ

「如何したんですか、ミコトさん？早く行きましょうよ」

「行きたいのは山々なんだが、金が無くてな・・・。」

「お金ですか？　それなら大丈夫ですよ。寮内の食堂に限り、学生証を見せれば無料になりますから」

「無料！？　そういえば、学費ですら払ってないんだけど良いのか？」

「それも大丈夫ですよ。先程も言いましたが１期が３００人と決められているのは国が３００人分の学費を代わりに払ってくれるからですから。」

なるほど。国が学園で魔術師を育てて卒業後は国のために働いてもらおうという事か。

「ほら、早く行かないと御飯なくなっちゃいますよ。　私は自分の部屋の転送ポートで食堂に行きますから、ミコトさんも直ぐに来てくださいね」

マリアはそれだけを言うと懐から学生証を取り出しながら、慌ただしく出て行った。

（マスター、なにやら面白い事になってきましたね。）

（面白い事ってな・・・。巻き添えとはいえ、無料で勉強できたり飯が食えるのは有難い事だな。）

（世界の滞在期間の５年のうちの１年を魔法学園で過ごすのですね？　楽しみです）

（火の精霊の居場所も分かっているんだし、気長に学園生活を楽しむさ。）

俺はルゥとの念話を終わらせるとマリアの言ったとおりに転送用ポートに乗って1階へと移動した。
1階に到着すると先に降りてきていたマリアと合流して食堂へと向かって歩いていく。
先の朝会で顔を合わせたクラスメイトが各々、食事を楽しんでいた。
行儀良くフォークとナイフで肉のような物を切り分けて口に運ぶ者や、周囲を気にせずに手づかみで果物に齧り付いている者、そして優雅にワインを飲む者・・・ってちょっと待て!!

「おいおい、学生が酒を飲んでも良いのか?」
「何言ってるんですかミコトさん? お酒なんて皆さん子供の頃から飲んでますよ?可笑しいですか。」
「子供の頃からって・・・俺の居たところでは、２０歳未満の飲酒は法律で禁じられてて」
「変わってますね。此処では歳に関係なく飲酒は可能ですよ?」

どっちが変わっているんだか。ああ、飲んでもいないのに頭が痛くなってきた。

「ほら呆けてないで料理を貰いに行きましょうよ!」
「あ、ああ、そうだな。」

マリアは何も考えずに食堂の奥のカウンターに勢い良く駆け込み料理を頼んでいた。

「オバちゃん。私、このヒルゲンの丸焼きとマルゴワインね」
「あいよ! 直ぐに作ってやるから少し待ってな」
「じゃ、俺も同じものを2人前で宜しく~」
「はいよ!ってそんなに食べきれるのかい? 残したりしたら許さないからね」

「ミコトさん、ヒルゲンって結構、量が多いですよ？」
「大丈夫だよ。この時間まで一つも口にしてなかったから腹が減ったんだよ。」
「だからって・・・。」
「お～し、ヒルゲン丸焼き3人前とマルゴワイン3本上がったよ！！」

マリアとカウンターで会話していると料理が出来上がったようで取りに行ってみると、其処には鶏よりも一回り大きな形の鳥がジュウジュウと美味そうな音を立てて皿に盛られていた。

「要望にあったとおりに作っちまったけど、大丈夫かね～～～」

俺は意気揚々と料理の皿を受け取ると、周囲の驚いた目を気にすることなく齧り付いた。

「うめえ！　何ともいえない絶妙な焼き加減と食べた事の無い味付けで・・・。」
「そりゃそうさ～～私の一番の得意料理だからね！」

俺はその後、４０分ほど掛けて料理を食べつくし、ワインをビンから直接一気飲みして食事を終えた。

「やっぱり健康のために腹八分目で止めとかないとな。じゃご馳走様！」

鳥骨が山積みにされた食器をカウンターへと返し、俺は部屋に戻るべく食堂をあとにした。

「あれだけの量が何処に消えたんだろうね。それに、あの量で八分

目とはどんな食欲をしてるんだい。」

俺が食堂から立ち去ったあとでも、混乱は続いていた。

ちなみに小柄なマリアが完食した事でも周囲は驚きに包まれていた。

第５２話　来客と疑惑

久しぶりに美味しい食事をして満足な気分になった俺はベッドで横になり精霊と会話していた。

（なぁ光の精霊、火の精霊ってどんな奴なんだ？）

（上級精霊の中でも変わり者で有名な精霊です。　主様は気にいられると思いますよ・・・。）

（大丈夫か？その精霊。　何か心配になってきた）

（申し訳ありません。火を司る精霊ですので火山にいると思われます、お気をつけて逢って下さい。）

（マスター、お客様のようです。扉に近づいてくる魔力の波動を感じます）

（マリアじゃないのか？）

（昼間のマリアさんの魔力とは違う感じがします。）

俺は精霊との念話を止めて剣を手に扉へと近づいていった。

扉に近づいたまさにその時、扉をノックする音が聞こえてきた。

（ルゥどうだ？扉の向こうから殺気は感じられるか？）

まだこの世界に到着したばかりなので敵はいないとは思うが一応聞いてみた。

（殺気かどうかは分かりませんが不穏な気配が漂ってきています。）

（そうか、注意しないとな。）

俺は右手で腰の剣を引き抜き、左手で扉を開けると一人の小柄な少女が立っていた。

「君は？俺になんの用だ？」
「クラスメイトで席も近いから挨拶をしに来たんだけど・・・その剣はなに？」
「此れか？悪いな少し鍛錬を行なっていたんだよ。」
「部屋の中で？」
「外でなんかしたら不審者扱いされてしまうからな。」
「そろそろ中に入れてくれない？少し話がしたいの。」
「ああゴメン。どうぞ」

俺が入室を促すと、少女は周囲をしきりに気にしながら部屋へと入ってきて椅子に静かに腰を下ろした。

「それで話ってなんだい？　え～と・・・。」
「朝会で自己紹介したでしょ？　２つ隣の席のルシアよ、覚えておいてね。」
「それで何の用だい？ルシアさん。」
「ルシアでいいわ。ミコトに聞きたい事が２つ・・・いえ３つあるんだけどいいかしら？」
「答えられる事なら、何を質問してくれても構わないよ。」
「じゃお言葉に甘えて、最初の質問なんだけど貴方は何者？」
「何者とは可笑しな事を聞くね。　俺はルシアと同じＳクラスの生徒だよ？」
「じゃ、その膨大な魔力の説明を教えて欲しいのだけれど・・・。」
「これか？俺は子供の頃から魔力が異常なほど高くてね、周囲から苛められてたんだよ。」
「・・・ごめんなさい。いやな事を思い出させてしまったみたいね」
「いや構わないさ。もう気にしてはいないから」

真っ赤な嘘だしね。

「その話が嘘か本当かは別にして、次の質問に移らせてもらってもいいかしら？」
「あ、ああ。いいよ」
コイツ絶対気づいているな・・・。
「ミコトの持っている剣からも高魔力を感じるのはどういう訳？」
「この剣か？これは魔剣さ。」
（マスター、酷いです！私は聖剣なのに。）
ルゥがしきりに頭の中で苦情を訴え続けているが、この際無視する事にしよう・・・。
「魔剣？興味あるわね。少し持たせて貰っても良いかしら？」
「それは止めといたほうがいい。波長があう者が触らないと怪我をするぞ？」
「私は回復魔法が使えるから試してみてもいい？」
「知らないぞ、どうなっても。」
俺はルシアに剣を渡しながら念話でルゥに話しかけた。
（ルゥ、今から手渡すが手加減してやれよ？）
（そうは行きません！私の恐ろしさを身をもって体感させてあげます）
（お、おい！？）
今まさに手渡そうとしているところで言われたものだから落としそうになってしまった。

（なんて無理なんですけどね。私の意志では、操作する事なんてできませんから）

（吃驚させるなよ。）

もう少しで床に穴が開くところで剣を受け止めた俺は逸早く剣を鞘に収めルシアの眼前に差し出した。

「持てるかどうかは分からないが、持つだけ持ってみたらどうだ？」

「それは私に対する挑戦？良いわ、やってみる！」

ルシアはそう言いながら俺の手から剣を受け取った瞬間、剣を持つ右手から肘にかけて蚯蚓腫れのような傷が何本も浮かび上がってきた。

「グウゥゥ！？此れ、返すわ。」

そう言って俺の方へ剣を放り投げて寄越してきた。

「大丈夫か！？　だから言っただろ。波長が合わないと怪我をするって」

そうは言いながらも実際に剣のせいで他人が傷つくところは初めて見たので少し心配になってきた。

俺には驚異的な回復能力があるから、傷を負わないだけなんじゃないかと・・・。

（マスター、そんな事はありません。マスターが私の持ち主で間違いありません！）

（そうだな。すまない、少し弱気になっていたようだ。）

ルゥと会話しながら、ルシアがどうなったのか目を向けると蚯蚓腫れになった右腕が白く輝いていた。

「これは!?何の光だ?」

「私の属性の一つである回復の魔法よ。傷は治るけど、痛みまでは取れないわ」

白い光が消え失せたのでルシアの腕の様子を見たが蚯蚓腫れは何処にも存在してはいなかった。

傷跡は無かったが、ルシアの表情から痛みは残っているようだった。

(なぁルゥ、俺でも回復魔法は使えたよな?)

(可能です。宿で訓練した時のように傷に手を添えて『ヒール』と唱えてください。練習した時は対象がマスターだったので見た目で効果は分かりませんでしたが、発動はしましたから大丈夫な筈です。)

俺は心の中で魔力を放出しながら蚯蚓腫れのあった場所に手を翳して『ヒール』を唱えた。

「何のまね?回復魔法は掛けたわよ!?」

驚いているルシアを余所に右腕から先程とは比べ物にならないほどの強い光が輝いていた。

「こ、これは!?　痛みまでは取れないはずなのに全然感じない・・・。」

「これで良いかな。だから言っただろう?無理をするなって」

「私は昔から負けず嫌いだから、他の人から無理だと言われたら意地でも挑戦したくなるのよ

それにしても、さっきの回復魔法の威力は凄いわね。やっぱり魔力の大きさが違う所為かしら・・・。」

俺は剣を元通りに俺の腰へと挿し直してルシアに向き直った。

「色々な事があったけど、最後の質問をしてもいいかしら?」

「良いぞ。　時間も押し迫ってきたからな」

俺は会話をしながら食事の時に用意されたワインを部屋で喇叭(ラッパ)飲みしていた。

「じゃあ聞くけど、マリアさんとは何処までヤったの?」

ブゥーーーーー!!?

俺はルシアの口からとんでもない事を聞かされた瞬間に口に入ったワインを噴出した。

「汚いわね。」

「ゲホゴホ・・・。な、何の事を言ってるんだ?」

「さっき部屋に入る時に見ちゃったのよ。この部屋に隣の席のマリアが入室して1時間後に焦った顔で部屋から飛び出していく姿を。」

「それは誤解だ。　この部屋の説明を詳しく聞いてただけだよ!」

「そういう事にしといてあげるわ。　また今度、詳しい話を聞かせてね。」

「だから何にもしてないんだってば!!」

「別に異性の不純行為は禁止されてないから思う存分、ヤってもいいのよ?」

「何度も言うが誤解だーーーー!」

「そうそう、それともう一つ。学園内は剣やナイフなどの武器は持

ち込み禁止だから注意してね」
「分かった。」
「じゃ、オヤスミ～～～。今度は私も誘ってね？」
ルシアは口元を緩ませながら、自分の部屋へと戻っていった。
「あいつ・・・。絶対にからかっていただろう！」
俺は変な噂話が発生しない事を心の中で祈りながら、破天荒な学園生活1日目を終了した。

第５２話　来客と疑惑（後書き）

一風変わったキャラを登場させてみました。

第５３話　初めての魔法授業

散々騒がしかった１日目は無事（？）に終了し２日目の朝を迎えた。

（マスター、おはようございます。）

（おはようルゥ。）

俺は身支度を整えると、そのまま学園に向かおうとしたが昨日ルシアから学園内への武器の持ち込みは禁止だと聞いていたので部屋に剣を置いていこうとも考えたが、不測の事態を予想していつでも取り出せるようにと異次元空間へと剣をしまった。

「おっと、そうだ！　換金するために此れも持って行くか」

そう言って空間の中から取り出したのはマルベリアの町で買い求めていた魔力増強の指輪だった。

「前の世界の金貨１０枚分の指輪が此処で幾らの値がつくか分からないからな、念のために２個持って行くか。」

この事が混乱の始まりになるとは、この時は思いも寄らない事だった。

俺は部屋で着替え寮を出発する直前に食堂で軽めの朝食を済まし、学園へと歩き出した。

途中で追いついてきたマリアと一緒に教室に入り、２日目の授業を迎えた。

「今日は最初の授業という事で、火属性の魔法について勉強しましょう。　皆さんは魔法というと派手な威力の魔法を連想しがちです

が、今回はあえて威力の小さな魔法を使おうと思います。」

なるほど高威力ではなく、魔力の制御を憶える授業か・・・。面白そうだ。

「それでは試しに誰かに実践してもらいましょう。この中で魔力検査時に火の属性だった方はいますか？　居ましたら、手を上げてください。」

俺は全属性を持っているため、躊躇なく手を上げると俺を含めた3人が手を上げていた。

「えっと、それではモニカさんとミコト君に前に出てきて実践して貰いましょう。」

モニカは緊張した足取りで何とか先生の横に立ち、俺も同じ様に反対側へと立った。

「それではモニカさんから試してみましょうか。　緊張しないで気持ちを静かにして人差し指を立てましょう、そして指の先に火を灯すようなイメージで・・・。」

先生がそう言いながらモニカにやらせてみると『ポッ！』という音とともに直径が５ｃｍくらいの小さな炎が指の先に出現した。

「せ、先生！　出来ましたーーー」

「どうやら成功したみたいですね。今の感覚を忘れないようにしてくださいね。　それでは次はミコト君に試してもらいましょうか。」

俺はさっき、モニカがやっていたように微量の魔力を放出すると、

指を立ててファイアを唱えた。
すると指輪の宝石が一瞬光ったかと思うと、先程とは全然違う直径３０ｃｍもの火炎球が出来上がっていた。

「ミ、ミコト君。　大きすぎです。もう少し魔力を抑えてください！」
「これでも最低な量の魔力しか放出していないんですが・・・。」
「ミコト君は魔力値が高すぎるのでしょうか。　ん？その指につけている指輪はなんですか？」
「これは実家から学園に出発する時に手渡された、何の変哲もないアクセサリーですが？」
「私の取り越し苦労なら良いのですが、試しに指輪を外して見ましょうか？」

そう言って先生が俺の手から指輪を外すと３０ｃｍあった火炎球が１５ｃｍ程度にまで縮小した。

「やっぱり、魔力増幅の効果をもった魔道具でしたか・・・。しかしまだ魔法が大きいですね、何か他に持ってませんか？」
「洋服の胸ポケットにもう一つ指輪が入っています。」
「それも取り出して見ましょう。」

先生が服のポケットに入っていた指輪を取り出すと、更に火炎球は縮小し４ｃｍほどの火の玉になっていた。

「どうやら此れがミコト君の最低魔力の本当の姿みたいですね。まさか魔道具を持っているなんて思いも寄りませんでした・・・。ミコト君、この指輪は誰にでも使えるのでしょうか？」

どんどんドツボに嵌っていきそうで怖かったが嘘を嘘で塗り固める

事でその場を脱した。

「それは分かりません。家族の中では俺しか魔法は使えませんでしたから」

「ふ～む、そうですか。ならモニカさん、試しに指輪をつけてもう一度魔法を唱えてみてください。」

「分かりました。ミコトさん、指輪をお借りしますね」

モニカは俺に向かって軽く頭を下げると、ぶかぶかな指輪を装着して魔法を唱えた。

その瞬間、先程唱えた時には５ｃｍくらいの火の玉だったが、今は１０ｃｍ以上の火炎球になっていた。

「どうやら誰にでも効果があるようですね。それでは此れはお返しします」

俺は先生とモニカから指輪を1個づつ手渡された後、無造作にポケットへと突っ込んだ。

「それでは一旦、１０分程度の休憩を挟みたいと思います。」

先生はそう言うと教壇に備え付けてある椅子へと腰掛けたので、話をする事にした。

「先生、この近くで道具を買い取ってくれる店を知りませんか？」

「それなら学園内にある購買部で可能ですが、まさか魔道具を売るつもりでは！？」

「はい、家族からもお金に困ったら売っても良いと言われているので買い取ってもらおうかと・・・。」

「しかし、これほど貴重な魔道具は学園の購買部では値がつかない

と思いますよ?」
「なら、何処に行けば?」
「王都にある魔道具の専門店に行けば買い取ってもらえるとは思いますが、学生は許可がないと学園内から外出できませんから、もし行くなら卒業後になるでしょうね。」
「そうですか・・・。分かりました」
「お金が必要なら、学園内のギルドで御小遣いを稼ぐという方法もありますよ?」
「ギルド?」
「ええ、学園の中庭にある噴水の反対側に学園ギルドがあります。本当の冒険者が利用するギルドとは内容が異なり、危険な討伐などの依頼はありませんが・・・。」
「分かりました、後ほど行って見ます。」
先生は俺の言葉に軽く会釈すると、不意に立ち上がり教室中に届くように声を張り上げた。
「それでは休憩はこのぐらいにして次の授業に移りたいと思います。皆さん自分の席に戻ってください。」
俺も自分の席に戻ると何かを言いたげなマリアとルシアとに目が合ってしまった。
「ミコトさん、ギルドに行くのなら私も御一緒します。」
「私も一緒に行くわ、何だか面白そうだから・・・。」
その後、何故か意気投合してしまったマリアとルシアに話しかけられながら、その日の授業は終了した。

第５４話　学園ギルド（前書き）

異世界定番ともいえるギルドの登場です。

第５４話　学園ギルド

授業を終えた俺はマリアとルシアを連れて、先生に教えてもらったギルドへと向かった。

「楽しみですね。前々からギルドには興味があったんですよ」
「私には、そんなにはしゃぐほどの物じゃないと思うけど？」
「まぁまぁ何事も経験が必要だし、物の試しとして行ってみようじゃないか。」

俺は両脇で口喧嘩を始めそうな勢いの２人を宥めながら、教室を出て５分後にはギルドに辿りついた。

「よぉ少年！両手に美女を侍らして何の用だい？」
「ちょっとギルドで小遣い稼ぎをしてみようかと思いまして。」
「見た事のない顔だが新入生か？ギルドの説明を聞いていくかい？」
「はい。お願いします」
「なら、一度しか言わないから良く聞いとけよ？
この学園のギルドは他の街にある一般的なギルドとは違い、討伐依頼はない。
此処のギルドランクはＡ～Ｅまでの５段階で構成されていて、依頼をこなす度に報酬とポイントを手渡すから、そのポイントが一定量溜まったら次のランクにランクアップするという訳だ。」
「ポイント制なのね・・・。面倒くさそう。」
「おいおい嬢ちゃん、此れは一般的なギルドのルールと違ってランクアップしやすいと思うぜ！？」
「それで、登録したらどのランクの仕事でも請けれるんですか？」
「それは今から説明するさ。初めて登録した者はみんなＥランクから始める事になるんだが、ＥからＤに上がるには１０ポイント必要

だし更にCに上がるには２０ポイントが必要というように、最終的にBからAに上がるには４０ポイントが必要という事になるんだが、ギルドには決まりがあってEランクの者は同じくEランクの仕事しか請けることはできない事になっている。DランクになればDもEも受ける事は出来るがな。」

「つまり最終的にAランクになれば、全ての依頼を請ける事が出来るという訳ですね。」

「その通りだ。詳しい事はこの紙に全て書かれてあるから、よく読んでおいてくれ！」

俺たち3人はギルドの担当者から用紙を受け取った後、四つ折にしてポケットへ捻じ込んだ。

「それで如何するんだい？　登録していくのか？」

「はい。その為に此処に来たんですし、俺は登録します。マリアとルシアは如何する？」

「私も登録するわ、今まで家が貧乏で御小遣いなんて貰った事なかったし、いい勉強にもなるしね。」

「私も・・・。仕事をするかは別にして登録する事にする。」

「決まりだな、オジさん俺たち3人とも登録するよ。」

俺が担当者に3人の代表として声を掛けると、オジさんは何故かプルプルと震えだした。

「如何したんですかオジさん？何処か具合でも悪いんですか？」

「オジさんオジさんと連呼するんじゃねぇ！！　俺はまだ２２歳だーーーー！」

「・・・オジさん御免。」

ルシアもノリが良いのか、止(とど)めの一言を担当者に浴びせかけた。

「だ・か・ら、俺はお兄さんだ！！　そういえば自己紹介が遅れた

な、俺の名はタリスだ。気軽に『タリスさん』とでも呼んでくれ」
「・・・宜しくタリスおじさん。」
「ンガーーーー！！」
「まぁまぁルシア、悪ノリしすぎだよ。」
「まあ良いさ、おい！登録するなら学生証を手渡しな、ギルド登録の証を刻んでやるから」

俺たちは3人とも洋服のポケットに手を突っ込むと、学生証を取り出しタリスさんへと手渡した。

「少し待ってろ。　直ぐに済むからな。」

手渡してから10分が経過し、タリスさんから各々に学生証が返却された。
何も変わってない様に見えたが、裏面の何に使うか分からなかった空白部分に文字が書き込まれていた。

「これで登録は完了だ！　次からは依頼を受けて成功するたびにポイント数を此処に書き込んでいく。
もしも途中で学生証を紛失した場合は、登録しなおす事になるから注意しろよ？」
「その場合はランクやポイント数はどうなるんですか？」
「当然、Eランクの0ポイントで再スタートという事になる。」

そうなった場合は面倒くさい事になるな・・・。
しかも学生証の再発行時には罰金と理事長先生の小言付だからもっと訳が悪い。

「それで如何する？　早速依頼に挑戦してみるか？」
「私は今日はやめておきます。　時間も遅いですし、お腹も空きま

したし・・・」
「私も。さっさと帰ってお風呂に入って寝たい」
「俺は如何しようかな？」
「ミコトさん、寮で一緒に御飯を食べませんか？」
「そうだな、そうしようか。　すいません、俺も今日は止めときます」
「分かった。何時でも気が向いたときに依頼をこなしてくれよな。待ってるぞ～～～」

俺とルシアとマリアはギルド担当者のタリスさんに一礼すると、踵をかえして寮への道を歩き出した。
学園を出てから２０分後に寮に辿りついた頃には周囲は暗くなっており、寮の食堂で昨日と変わらない量の食事を平らげた俺とマリアはその場で解散し部屋に戻った。
食事を終えた俺は部屋で寝るまでの暇つぶしと称してギルドで貰った紙を読む事にした。

「えっと何々・・・。ギルドの説明書き!?そのままだな。」

その説明書きによると

1．ギルドのランクにはA～Eまでの5段階があり、Aに近づけば近づくほど難易度は上昇する。
2．ランクアップするには依頼書に書かれているポイント数がある程度溜まる事により可能になる。
3．ランクアップの必要ポイント数は以下の通りである。
　E⇒D　１０ポイント　D⇒C　２０ポイント　C⇒B　３０ポイント　B⇒A　４０ポイント
4．学園ギルドの依頼内容は主に学園敷地内の草むしりや先生方の手伝い、建物の清掃になる。

「なるほど、マリアやルシアには危険な依頼を受けないように言っておかないとな。」

俺は説明書も元通り四つ折にすると机の上において眠りについた。

第５５話　平穏を乱す者（前書き）

元々この物語には組み込む予定は無かったのですが、友人からの提案を盛り込んで増話することにしました。

第５５話　平穏を乱す者

今日もいつも通り授業が終了し、学園ギルドで小遣い稼ぎをしようと廊下を歩いていると何処からとも無く悲鳴が聞えてきた。
声のするほうへと歩いていくと沢山の人が遠巻きに何かを見ている。
俺も野次馬的な根性で人込みを掻き分け、先頭に踊り出ると其処には高価そうな衣服を身に纏った生徒が１人の生徒を蹴る殴るの暴行を加えていた。

ドカッ！　バキッ！　ゴスッ！

「も、もうお許し下さい・・・」
「君は、何故、僕が、怒っているのか、分かって、いない様だね！」

暴行を加えている生徒の方も一言一言を言う毎に拳打や蹴りを許しを請うている生徒に浴びせていた。
何故誰も止めようとしないのか周りを取り囲んでいる人垣に眼を遣ると、関わり合いになりたくないのか教師までもが眼を逸らしていた。
俺もあまりの非道さに黙っておれず、喧嘩（というより一方的な仕打ち？）を止めようと暴行を加えている生徒に近づこうとするが、１歩足を踏み出した瞬間に誰かに肩を掴まれた。

「誰だ、放せ！」

俺の肩を掴んだのは誰か確かめようとして振り向くと其処にはルシアが立っていた。

「行っては駄目。」

「如何して!?　あのままじゃ死んでしまうぞ?」

俺が声を大にしてルシアに言うと、ルシアは表情を曇らせながら理由を話しだした。

「あの暴行を加えている方はサウスラーズ大貴族の息子のライシャスよ。」

「知っているのか?」

「ええ、何でも自分の地位を最大限利用して、やりたい放題している馬鹿よ。」

ルシアも流石に聞えたら不味いのか『馬鹿』の部分だけ声を小さくして男に聞えないように話していた。

「でも教師は言わば学園の法律みたいな存在だろ?　それなのに・・・」

「仕方が無いのよ。　魔法学園とはいえどもイスラントール国内、サウスラーズの大貴族と事を構えればタダでは済まない事ぐらい分かっている筈よ。」

「其れをいうなら相手にとっても同じじゃないのか?」

「同じじゃないわ。　サウスラーズ国は学園のあるイスラントールと隣国スコルピオン、同時に戦争を加えたとしても、まだ戦力に余裕のある軍事国家なの・・・。　ちょっとした諍(いさか)いで戦争になるといっても過言ではないわ」

ルシアと会話しながら、止めようにも止められない悔しさで下唇を噛んでいると、漸く疲れたのか倒れている生徒に唾を吐きかけて大貴族の馬鹿息子は去っていった。

「次にこんな事があったら絶対に許さないからな!　・・・なんだ

い君達は？見世物じゃないんだよ！」

一方的に暴行を加えていた男が一瞥すると思い思いの方向へと散らばっていく者と、取り巻きなのか一緒に着いて行く生徒とに別れていた。

問題の男が去って見えなくなってから漸く、暴行されてボロボロになっている生徒に回復魔法を掛けようと教師が近寄ってきた。

「ううう・・・。」

「今すぐ治療するから動かないで！　安静にしていて」

教師が回復魔法を掛けているものの暴行された傷が思ったよりも深いのか全然、回復してはいなかった。

「駄目だわ。　あの教師の魔力量では、たとえ限界まで魔法を酷使したとしてもあの生徒は治療できないわ。　でもミコトなら・・・。」

ルシアは何かを言いたげな眼で俺の方に視線を這わしていた。

周りにいる生徒も心配そうな目で生徒を見ているものの、魔力に自信がないのか治療に加わろうとはしていなかった。

「ゴホゴホッ！ゲホッ」

そんなとき、治療を受けている生徒が咳き込んだと同時に口から血を吐き出していた。

その様子をみた俺は一刻の猶予もないことを感じ、魔力を解放しながら生徒に駆け寄った。

「君は？」

「Sクラスのミコトです。　俺も回復魔法は得意なので、治療を手伝わせてください」
「Sクラスの生徒か・・・分かった。　じゃあ君は上半身から下半身に向けて治療してくれ、僕は下半身から上半身にかけて治療するから」

俺は言葉に出さずに頷く事で了承すると掌を生徒に向けて『ヒール』と唱えた。
すると教師の回復魔法で数分掛けて掠り傷が治療されるのに対し、俺の魔力量が規格外なのか瞬時にまるで巻き戻しをしているかのように全ての傷が塞がっていった。

「・・・凄いな。　瞬く間に傷が無くなっていくよ」

下半身から治療していた教師もあまりの出来事に言葉を失っていた。
そして俺が治療を開始してから十数秒後、瀕死の状態だった生徒が何事も無かったかのように立ち上がり蹴られたり殴られたりした場所を手で触っては痛みが無い事を確認したいた。

「ありがとうございます。御蔭で助かりました」
「痛いところは無いかい？」
「はい、大丈夫です。　少しフラフラしますが・・・」

生徒は立ち上がったものの足元が覚束ない様子で治療に当たっていた教師に支えられていた。

「流石に回復魔法では血が足りなくなったのは治せないから、たくさん食べて血を増やさないとね。」
「そうですね。」
「しかし、此処までされるとは・・・暴行の発端（ほったん）は何だったんだい

？」

「僕にも良く分からないんですが、廊下を歩いていると突然『その目が気に入らない』と言われ、気がついたときには床に倒れていたんです。」

「『目が気に入らない』なんて下らないな理由でこんな酷い事を？」

幾らなんでも無茶苦茶な理由に拳を握り締めて怒りを露(あらわ)にしていると、生徒を支えている教師が不意に話しかけて来た。

「確か・・・・ミコト君でしたね。」

「あ、はい。そうですが何か？」

「君にも、そして此処にいる新入生の皆さんも気持ちは分かりますが、何があっても何をされてもあの方には決して手を出さない事を約束してもらえませんか？」

「しかし！それでは・・・」

「ああ、僕の事なら気にしなくてもいいですよ。　それにこの事で国際問題にでも発展したら立つ瀬がありませんから」

「くっ、分かり・・・ました」

俺は爪が掌に食い込むほどに拳を握り締め歯を食いしばり、無理矢理納得する事にした。

教師も生徒を支えながら何処かへと歩いていった。

「ミコト・・・」

この事から学園ギルドで小遣い稼ぎする気にはなれず、寮に戻る途中でルシアに声を掛けられたが無言で校舎を後にした。

第５６話　思いも寄らぬ出来事（前書き）

前回に引き続き、書く予定のなかった話です。

第５６話　思いも寄らぬ出来事

翌日、あの生徒を見つけて殴り飛ばしたい気持ちを抑えながら授業を受けていると・・・。

「それでは此れにて本日の授業を終了いたします。ああそうそう、ミコトさんはこのあと理事長室までお願いします」

「起立、礼。ありがとうございました」

「ミコトさん、御機嫌が悪いように見えますが何かあったんですか？」

「いや何でもないよ。じゃあ理事長先生に呼ばれてるから・・・」

心配そうに此方を見つめているマリアと、何かを言いたそうな眼で見ているルシアを振り切って理事長室に向かう事にした。

俺が理事長室へ向けて歩いている頃、教室では・・・。

「ねぇねぇルシアちゃん、ミコトさん何かあったのかな？」

「・・・分からないけど、何か起こっているのは確かね。　それよりも、ちゃん（・・・）付けは止めてと言わなかったかしら？」

「ええ～～～駄目？」

「だ、駄目じゃ無いけど、少し恥ずかしいわ」

「良いじゃない。可愛いよ、ルシアちゃん」

「・・・／／／／／」

普段鉄仮面のような表情のルシアが赤面するシーンを見逃したのは痛かったが、俺は何の問題にも遭遇せずに理事長室へ辿りつく事ができた。

「失礼致します。」

俺はそう言いながら理事長室の扉をノックして室内へと足を進めた。
部屋の中に入って気がついたことは、昨日俺と一緒に生徒の治療に当たっていた教師が理事長先生の前に座っていた事だった。

「よく来てくださいました。貴方が此処に呼ばれた理由は凡そ見当がついていることと思いますが」
「昨日の生徒同士の暴行問題のことですよね。」
「そうです。貴方も噂程度には聞いたことがあるとは思いますが、暴行していた方の生徒はサウスラーズの政治に関係する役職に就いている大貴族の御子息です」

虎の威を借る狐・・・この場合は虎が親になるのか。

「此処は一応は中立な立場にある魔法学園ですが、イスラントール国から援助を受けて学園を経営しているので言うなればイスラントール国家直属の学校といっても過言ではありません。」
「そこで私が昨日君に忠告した、決して手を出さない事というのが暗黙の了解になるんだ。」

ずっと黙って理事長先生の前に座っていた教師が不意に話しかけて来た。

「片やサウスラーズという大国の政治を担う大貴族の御子息と片やイスラントール国家に属する魔法学園では何かことがあっては戦争に発展する・・・いや発展させようとしている節があります。」
「でも如何してそれほどの危険を冒してまで入学を許可したのですか？」
「いえ、此方で調査した限りではあの方へ入学許可証を送ってはいません。　恐らくは大金を積んで許可証を買い取ったのでしょう」

「そこで君にお願いしたい事があるのですが・・・。」
「お願いですか？」
「これから卒業までの間に恐らく、昨日の様なことは何回も起こるでしょう。　そこで先程言ったお願いなのですが、ミコト君に怪我人の治療を頼めないでしょうか？」
「治療を？俺がですか？」
「はい。本来は回復魔法で治療とはいっても数回、十数回にわけて完治まで持っていくのですが、昨日のミコト君は一瞬で怪我の痕跡を残さずに治療してしまいました。　恥ずかしながら其処まで魔力の高い魔術師は私達教師も含めこの学園・・・いやこの国には存在しません。　親御さんから預かっている御子息を死体にするわけにはいきませんから、少額ですが報酬も御用意いたしますので頼まれてくれませんか？」

決して“報酬”という言葉に吊られたわけではないという事だけ明記しておこう。

「・・・分かりました。俺の力で1人でも多く救えるのなら協力します」

俺がそう応えた直後、昨日の教師が俺の手を握り締めてきた。

「ありがとうございます。　それでは私は宿直がありますので、そろそろ失礼しますね」

散々俺と握手を交わした教師は納得が行ったかのように理事長室から退室して行った。
俺も事が済んだと思い退室しようとするが・・・。

「ああ、ミコト君にはまだ用事がありますので残ってもらえますか

？」

「？　分かりました。」

部屋を出て行こうとする俺を呼び止めた理事長先生は一呼吸置いてから話しかけて来た。

「ミコト君は先程『どうして許可証を発行したのか？』と聞いてきましたが、調査の結果ミコト君にも許可証を発行した記録は無いのですが如何いうことですか？」

「え、え～と、それには少し手違いがありまして・・・」

「確か、あの許可証は同じクラスのマリアさんと同じ村に住む男性に送った筈なのですが？」

此処まで調べられては言い逃れが出来ないと思った俺は包み隠さず本当のことを言う事にした。

「実はこの近くの街道で盗賊に襲われていたマリアを助けたのですが、その時にマリアと一緒に乗っていたマリアの幼馴染・・・その許可証の本当の持ち主が盗賊から逃げてしまったんです。　そして俺が護衛として魔法学園まで一緒に来たんですがマリアが入学する際、幼馴染の分も一緒に提出してしまったんだそうです」

俺は話しながら理事長先生の方を見ると何となく結果が分かったのか薄ら笑いを浮かべていた。

「そこで目的地の場所を聞くために学園構内を歩いていた女性に道を聞こうと近寄ったのですが、有無を言わさぬほどに強制的に入学式を執り行っている講堂に引っ張り込まれまして・・・」

「ワザとでは無い事は分かりました。」

「あの～俺は退学になるんでしょうか？」

「如何してそう思うのですか？」
「だって不正行為で入学したわけですから・・・」
「しかし故意で入学したわけではないのでしょう？　それに今ミコト君が居なくなっては生徒の治療に支障がきたしますし、私が黙ってさえ居れば分かりませんしね。」
「それでは良いのですか？」
「はい。安心して勉学に励み、時には私達に力を貸してくださるようお願いいたします」

理事長は其れだけを言い、学園ＴＯＰが一生徒に頭を下げるという他の誰にも見せられない行為を堂々と俺の前に曝け出した。
理事長室を退室時『此処であった事は誰にも話さない』という事をお互いに約束し帰路についた。

第５７話　俺が被害者に？

俺が理事長先生から治療の依頼を受けてから既に半年が経過していた。
治療回数もゆうに２００回を超えている。
大貴族の馬鹿息子のライシャスは日に日に暴力が度を過ぎて行き、クラスで行なわれる魔法授業の実習でもワザとクラスメイトに魔法を当てたりと、とても悪戯では済まされない部類に入ってきていた。その度に治療に駆り出され、多い時には１日４人もの生徒を治療していた事もあった。
此処まで見ていると自分のクラスより上のクラス・・・Ｓクラスの魔力が高い生徒には手を出していないようだったが、その予想に反してとうとう俺自身に被害が回ってきた。

とある日、何時もの様に生徒を治療して寮に戻る時にライシャスの取り巻きと思われるガラの悪い生徒に学園の廊下で呼び止められた。

「おい！そこのテメエだよ。　無視してんじゃねえよ！」
「あ、俺のことか・・・何か用か？」
「『あ、俺のことか』って此処にはお前しか居ねえじゃねえか！俺たちを舐めているのか？」
「そんな汚らしい奴等を舐めて腹を壊したら如何してくれるんだ？」

仕事を増やすためだけ（・・）に存在しているような奴等をからかう様な発言を繰り返していると

「戯言も大概にしないと穏便な僕でも怒るよ？」

全生徒の半分以上も怪我させて何処が穏便なんだか・・・。

「それで？　俺に何か用でも？」
「用がないと態々呼び止めたりはしないさ。　君は色々と活躍してるみたいだしね・・・君の存在が僕にとって邪魔にしかならないんだよ！」

ライシャスがそう言うや否や手合図をし、取巻きのガラの悪い生徒達が俺に殴りかかってきた。

ドガッ！　バキッ！　ゴスッ！　ガシッ！　バゴッ！

まるで子供達が寒い日に執り行っている押し競饅頭（おしくらまんじゅう）の中央に俺が立って周囲が全員ライシャスの取巻きというような状況になっている。音からすれば痛そうに聞えるが、暴行を受けている当の本人である俺は蹲ってもいなければ、殴られたところを手で押さえてもいない。

「なんで・・・此れだけ痛めつけているのに・・・こいつは・・・ピンピンしてるんだ？」
「分からん・・・俺、手が痛くなってきた。」

自分的にはコイツ等みたいな取り巻き連中は雑魚でしかないので幾ら殴られようと痛くも痒くもないが、ただ殴られているだけでは面白くないので、パッと見には分からないように最弱の力で小突いておく。
時折、取り巻きの奴から酸っぱい匂いや『グエッ！？』やら『ウゲェ！？』などの不可解な声が聞えてくるが気にしないことにした。

そんなやりとりが数分続き、俺が倒れる前にライシャスの取巻き達の体力が尽きていた。

「もう駄目だ・・・。」
「コイツは化け物か？」
「ライシャス様、申し訳ありません。」
まるで開花するかのごとく、俺を中心に取巻き達が倒れたり蹲(うずくま)ったりしていく・・・。
俺を取り囲んでいた奴等が全員倒れ、指示をだしたライシャスの方に眼を向けると苦虫を噛み潰したような表情で此方を睨みつけていた。
「なんとも情けない連中だね。　もういい！後は僕がやるよ」
倒れていたり蹲っていた取巻き達もライシャスから発せられる途轍もない魔力に表情を曇らせていた。
ある者は匍匐(ほふく)前進でもしているかのように逃げ出し、体力が尽きて動けなくなった生徒も他の取巻きに引っ張られながら移動していた。
「凄い連携の良さだな・・・あっという間に誰もいなくなった」
「皆、僕の凄さが分かっているのさ。　君も覚悟する事だね」
（マスター注意してください。一般の魔術師に比べて魔力が桁違いです）
ルゥの心配事を形にしたかのように、周囲の気温が2～3度下がったように感じられる。
「僕を怒らせた君が悪いんだ。僕だって人殺しにはなりたくないから急所は狙わないであげるよ」
そう言ってライシャスが組んでいた腕を俺に向けた瞬間、幾本もの

鋭利な氷柱が凄まじい速度で俺に向かって飛来してきた。
氷柱は寸分の狂いも無く俺の両手両足を貫き、壁に縫い付ける。
急所を狙わないと言っていたのに、その内の何本かは鳩尾や左胸に突き刺さっていた。

（全く・・・俺じゃなかったら間違いなく、人を殺しているところだったぞ？）

「此れに懲りて二度と僕に歯向かわない事だね。」

無数の氷柱に全身を貫かれた俺の姿に満足したのか笑いながら寮のある方向へ歩いていった。

（マスター？　大丈夫ですか？）
（ルゥ、アイツは？）
（もう居ませんよ。　何処かに歩いていってしまいました）
（じゃあ、そろそろ動いても大丈夫だな）
（あ、ちょっと待ってください。　誰かが此方へ走ってきます）
（こんな時間にか？　一体誰だ！）

其れもそのはず、授業が終了し生徒の治療が済んだ時点で空は暗くなりつつあったのだ。

「ミコトさーーーーん！！」
「ミコトーーーーーー！」

（マスター、どうやらマリアさんとルシアさんのようですね。）
（あの２人か、また面倒な事に。）

此れから起こる事を懸念していると俺に足早に駆け寄り、項垂れた

表情で俺を見つめていた。

「ミコトさん、帰りが遅いから心配して来て見れば変わり果てた姿に。」

「ライシャスが満足そうに笑いながら歩いてたから、もしやと思ったけど・・・」

2人は氷柱に貫かれたままの俺を見て完全に勘違いをしているようだった。

薄目を開けて2人を見てみればマリアは口に手を当て涙を流しているし、ルシアに至っては俺に背を向け悲しんでいるのか両肩を震わせていた。

「2人とも、気持ちは分かるけど勝手に俺を殺さないでくれないか？」

「「キャアアァァァーーー！！」」

どう贔屓目で見ても無事に見えない俺が2人に話しかけると声が掛けられた事を予想だにしていなかったのか、絹を裂くような悲鳴が夜の学園に響き渡った。

それから数分後・・・。

「ミコト。　心臓に悪いから、あまり驚かさないでよ！」

「2人が勝手に俺が死んでいると勘違いしたんだろ」

「あんな状態になっていれば誰だって勘違いしますよ！」

回復能力があるので、たとえ心臓に氷柱を刺されても俺は死なないがマリアとルシアに言うわけにはいかず、自分自身に回復魔法を掛けながら一本一本氷柱を身体から引き抜いていく・・・。

身体の傷は魔法で跡形も無く治療されるが服はそういう訳にも行かないため、見た目にはかなりボロボロな状態だ。
その後は2人に協力してもらい、人の目を気にしながら寮へと戻る事が出来た。

第５７話　俺が被害者に？（後書き）

此れでとりあえず、ライシャス編は終了です。

次話からは少し話が飛びます

第５８話　卒業試験！？（前書き）

読者の皆様方の御蔭でアクセスＰＶが２００万に到達しました！

ありがとうございます。

これからも『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします。

第５８話　卒業試験！？

瞬く間に月日が過ぎて行き、とうとう明日が卒業試験になった。

ライシャスとの喧嘩（？）の翌日、身体の何処にも傷は無く平然としている俺に流石に吃驚したのか取り巻き立ちやライシャス本人ですら二度と俺に攻撃してくる事はなかった。

ただ、この事でストレスが溜まり捲くっていたのか、被害生徒の数は１．５倍に膨れ上がっていたのだが

（マスター、最初の頃は愚痴を溢し放題でしたが、とうとう魔法学園を卒業ですね。）

（そうだな。色々とあったよな・・・。）

（マリアさんの話では明日は卒業試験らしいですが、内容は何なのですか？）

（それが・・・ルシアやマリアに聞いても『何も知らない』って言われて）

（そうなんですか。ん？マスター、マリアさんがこの部屋の扉に近づいてきてますよ？）

（そうなのか？どれ、少し驚かせてやるとするかな？）

（マスターも意地悪ですねえ）

俺はそろそろかと思うと扉の前に立ち、マリアがノックする前に部屋の扉を開いた。

扉を開くと、今まさに扉を叩こうとした体勢のまま、マリアが固まっていた。

「マリア？　どうかした？」

「い、いえ。　ミコトさんは今から何処かにお出掛けになる予定だったのでしょうか？」
「いや、扉の外にマリアの魔力を感じたから脅かしてやろうと思っただけだよ？」
「なんだ、そうだったんですか・・・。って酷いですよ！」
「それは横に置いといて、何か俺に用があったんじゃないのか？」
「置いとかれても困りますが。私、明日の卒業試験のことが心配で部屋にいても落ち着かないんです」
「まぁ立ち話もなんだから部屋に入れよ、お茶ぐらいなら出せるからさ」
「では、御言葉に甘えて失礼致します」

俺はマリアを部屋の中に通すと、初日みたいにルシアに見られていない事を確認してから扉を閉めようとするが一足遅かったようで。

「なに？ミコトの部屋で相談会？　私も行く・・・。」

目を下に向けると閉まりそうになっていた扉を手で押さえ無理矢理部屋に入ってきた。

「誰も入っても良いとは言ってないだろうが」
「今言った。じゃ、御邪魔します」

ルシアには日常から口で勝てた事がないので半ば諦めて部屋へと通した。
いや・・・。『部屋へと押し通られた』が正解だな。

「マリア、何故泣いてるの？　ミコトに酷い事されたんだね？」
「ちょっと待て！　何でそうなるんだ！？」
「あれ？ルシアちゃんも来たんだね。涙って？」

「だってマリア、目に水滴が溜まってる・・・。」
「ああこれ？　テーブルの上にあった果物の皮を剥いてたら汁が目に飛んじゃって」
そうなのだ・・・。マリアもルシアも事あるごとに俺の部屋へと足を運んでいるので『勝手知ったる他人の家』とはよく言ったもので、果物や飲み物などを勝手に飲み食いしているのだ。
「お前らな～～～。幾らなんでも寛ぎすぎじゃないのか？」
「でもミコトはそれを見通して、私達の好きな果物や飲物を目に付くところに置いていてくれている」
「ミコトさん、果物美味しいです。いつもありがとうございます」
「ま、まぁ喜んでくれて何よりだ」
ルシアの言う事も尤(もっと)もで、購買部でマリアとルシアが好きな果物や飲み物を買い占めては異空間倉庫に仕舞って置いてあるので、何時でも新鮮な状態を保つ事が出来ている。
「そういえばマリアは明日の卒業試験のことが心配で俺の部屋に来たんだったよな？」
「は、はい、そうです。どんな事をすれば合格になるのか心配で・・・。」
「ルシアは何か知ってるか？」
「そうねぇ学園を中退した兄様が寝言で水晶がどうとかという、うわ言を聞いたことがあるわ」
「ルシアの兄さんって、この学園に通っていたのか！？」
「ねぇルシアちゃん、中退ってどういうこと？　卒業試験不合格だとどうなるの！？」
マリアはルシアの両肩をガシッと掴むと前後左右に揺さぶり始めた。

「ま、マリア！　落ち着いて。　今、説明しゅるかりゃ」

ルシアは散々揺す振られ続け、最後には舌を噛み呂律が回っていない状態だった。

「じゃあ説明してルシアちゃん！」

「ちょ、ちょっと待って。まずは息を整えさせて・・・。」

ルシアは先程淹れていたお茶を勢い良く喉奥へと流し込むと、深呼吸して息を整え始めた。

「兄様に聞いた話では卒業試験で不合格になったあと、勉強して1週間後に再試験して落ちて、一週間後に再試験をと3回繰り返した後、腹を立てて学校を飛び出したそうよ。　その事で父様が怒って兄様を一族の恥と罵(ののし)って親子の縁を切って勘当したらしいわ。　序(ついで)に言うと、兄様はCクラスだったから参考にならないかもしれないけどね・・・。」

「つまり卒業試験で落第したとしても、1週間後の再試験で合格すれば卒業できると？」

「兄様が嘘を言ってなければ・・・だけどね」

「ルシアちゃん、水晶がどうとかって話は何なの？」

「その事だけは幾ら問い質しても答えてくれなかったわ」

「そうなの・・・。」

「大丈夫だよ！俺もマリアもルシアも、Sクラスではトップの成績じゃないか。自信を持て！」

「うん。そうだね！　ミコトさんとルシアちゃんに話を聞いてもらったら落ち着いてきた。　夜更かしもこの位にして明日の卒業試験に備えて早く寝なきゃね。それじゃあ果物、ご馳走様でした」

マリアは勢い良く椅子から立ち上がると、飛ぶような勢いで部屋の外へと走り去っていった。

「ミコトも言う時は言うじゃない！」
「煽(おだ)てても何もでないぞ」
「そんなつもりはないわ。でも、これで落ちたりしたらミコトの責任は間違いないわよね」
「おいおい、それと此れとは話が別だろ！？」
「卒業試験後にマリアから感謝されるか恨まれるかはミコト次第ね。私も寝るわ、おやすみなさい」
「お、おい！？」

ルシアも魔術師ではなく忍者のような足取りで音もなく扉の外へと走り去っていった。
2人が去った後に残されていたのは、食い散らかされた果物の種と皮に、雫1滴まで綺麗に飲みつくされたお茶のカップとポットがテーブルの上に置かれているだけだった。

「全く、あの2人は・・・。誰が後始末をすると思っているんだ！？」
（まさにマスターが前に話してくれた、台風のようなお2人でしたね）
「そう思っているなら後片付けを手伝ってくれないか？」
（それは無理ですよ、私は実体を持たない剣の精霊ですよ！？）
「そうだったな、今度は俺がノイローゼになりそうだよ・・・。」

そんな事を考えていると扉を挟んで廊下から声が聞こえてきた。

「・・・ミコト。　試験前で緊張してるのは分かるけど、一人で喋ってると変に思われるよ？」

「分かってるよ！　いいから早く寝ろ」

卒業試験を明日に控え、最後までふざけ合ったまま卒業式前日は過ぎていった。

第５９話　最後の授業（前書き）

何時もは2～3日で最新話更新していますが、一身上の都合でこれからは3～5日のペースでの更新になると思います。
話の構成は数話先の方まで出来上がっているのですが、其れを文章にするのに手間取っております。
読者の皆様方にはご迷惑をお掛けいたしますが何卒御了承をお願いいたします。

第５９話　最後の授業

翌朝、心配な顔をしながら俺達３人は一緒にＳクラスの教室へと向かっていた。
そんな時、ルシアの顔を見てみると目の下に隈のような物が出来ていた。

「ルシア如何した？　試験が心配で眠れなかったのか？」
「ん・・・そういう訳でもないんだけど。　昼寝し過ぎた所為か中々寝つけなくて、眠れるまで本を読もうとしていたら中身に嵌っちゃって。」
「本の内容が気になって眠れなくなったと？」
「その通り・・・。グゥ」
「こらこらこら！　歩きながら寝るな」
「ルシアちゃん器用なんだね、歩きながら寝るなんて」
「そういうマリアは元気そうだな」
「昨夜ベッドに入る直前まで今日の事が心配だったんだけど、横になった瞬間に睡魔に襲われて・・・」
「理由はどうであれ、体調管理は万全にしておかないとな」

俺はフラフラと歩いて何時転ぶか分からないルシアをオンブすると、マリアと喋りながら教室へと歩いていった。
俺がそうする事を事前に見抜いていたのか、校舎に辿りつく直前にルシアが目覚め顔を真っ赤にしながら走り去って行ってしまった。

「なんだルシアの奴、元気じゃないか」
「ミコトさん、乙女心に気づかないほど鈍感なんですか？」
「ルシアに乙女心なんてものがあるのか？」
「そう言われれば確かに、見た事がないかも・・・。」

思い返して見ればこの1年、ルシアは露出狂とも取れるような挑発的な格好で寮の中を歩き回ったり、水着で俺の部屋に尋ねてきたり、と羞恥心の欠片も見当たらなかった。

「ミコトさん、考えてると遅刻しますよ!?　此処まで無遅刻無欠席で過ごして来たのに、最後に遅刻なんてしたら大後悔してしまいますよ」

「ヤバイな急ぐか」

「ま、待ってくださいよ～～」

俺は走ろうと思えば目にも留まらないスピードで走る事が出来るが、人の目があるので一般人より少し早めの速度を維持して教室へと向かった。

俺とマリアが教室へ着いたのは始業5分前の事であり、隣のルシアを見ると眠っているのか顔を机に埋めて微動だにせずにいた。

そして、始業開始時間になると同時に学園の理事長でもあるミレイル先生が教室に入ってきた。

「皆さん、おはようございます。　今日この日を1人の脱落者も出さずに迎えられた事をSクラス担任として、学園理事長の立場からしても大変嬉しく思います。」

そして、いよいよ最大の難関とされる卒業試験の内容が明らかになる。

「それでは卒業試験を始めます。　これから各々に水晶を手渡しますので魔力を放出して此れを砕いてください。　因みに時間内に砕けなかった場合は1週間後に再試験が可能ですが、明日以降の食費は自己負担となりますので、そのつもりでお願いします」

ルシアが昨日、部屋で話していた水晶が透明なケースに入れられ理事長先生の座る教壇に置かれていた。
水晶の色や大きさもまちまちで、どれ一つとして同じ色・形の水晶は存在してはなかった。

「今からお配りする水晶は、皆さんが入園時に測定した魔力に応じて固さが異なります。　名前を呼ばれた順から前に出てきてください。　では・・・アレン＝G前へ」

次々と理事長先生に名前を呼ばれ、水晶を手に自分の席へと戻っていく同級生たち・・・
何れも表情はプレッシャーの影響か、強張っているようだった。

「次にルシア＝W、前へ」
「はい」
「貴女は此れですね。　今はまだ箱から出さないで机の上に置いておいてください」
「分かりました。」

ルシアは透明なアクリルケースのようなボックスに入っている赤い水晶を手に自分の席についた。

「さて・・・次はマリア＝R前へ」
「ひゃい！」

マリアは未だに緊張が抜け切れていないのか右手右足、左手左足を同時に動かしてギクシャクとした足取りで教壇に向かっていった。

「マリアさん、もう少し落ち着いてください。　貴女はこの水晶で

す」
「は、はい」

マリアは戻ってくる時も緊張した足取りで歩いてきたが今度は段差も何もない通路で大袈裟に転んでいた
その際に受け取った水晶の入った箱を地面に思いっきり叩きつけていたが、罅はおろか傷一つ付いてはいなかった。

「マリアさん!?　大丈夫ですか?」
「大丈夫れす～～～」

両手で水晶の入った箱を持っていたため受身が取れず、顔面を強打したマリアは身体を引き摺りながらも自分の席に戻った。
マリアは痛みなのか、恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして机に突っ伏していた。

「それでは最後にミコト＝M、前へ」
「はい」

俺も返事をして理事長先生の前へ出ると、何故か先生の表情が曇っていた。

「貴方の場合はこの水晶です」
「これは・・・!?」

俺が受け取った水晶は皆とは違う漆黒の水晶だった。
他の同級生のはどこか宝石のような輝きを持つ綺麗な水晶だったが、俺のは呪われているのではないかと思えるほど、漆黒の輝きを放っていた。
水晶の異質さに表情を曇らせていると理事長先生が他に聞えないよ

うな小声で話しかけて来た。

「ミコト君は入園式後の魔力測定で『測定不能』と表示されてたみたいですから此方で考え得る最高の水晶になりました。　難易度も最高ですが、頑張ってください」

俺は理事長先生の言葉に軽く頷き、黒い水晶を持って自分の席へと戻った。

「此れで全員水晶が行き渡りましたね。　ではこれより卒業試験の説明をいたします。　まずは水晶の入っている箱を机の中央に置き、蓋を外してください。あ、まだ水晶自体には手を触れないように」

理事長先生に言われた通り、箱を机の中ほどに置き蓋を開けるとケースが其々の方向に倒れ、水晶が外気に晒された。

「全員、用意が整ったようですね」

先生が全員の机を見渡し、水晶が出ているのを見て頷いていた。

「それでは手を触れずに水晶を挟み込むようにして左右の掌を置いて下さい。　出来ましたね？それではこれから3時間の制限時間で手から放出する魔力のみで水晶を砕いてください。　では・・・始め！」

こうして魔法学園最後の授業となる、卒業試験が開始されたのだった。

第６０話　魔法学園卒業（前書き）

お待たせ致しました。

第６０話　魔法学園卒業

水晶を魔力のみで砕くという卒業試験がいよいよ開始された。
目の前に置かれているのは俺の髪や眼よりも深い漆黒の水晶・・・
様子見でクラス１０の魔力をぶつけてみたがビクともしなかった。

（これは厄介だな。クラス３０ではどうだ？）
（マスターあまり強くしすぎますと面倒なことに・・・）
（ああ分かってる。必要最小限の魔力で砕いて見せるさ）

魔力を先程よりも多く放出し、掌を同じ様に水晶に翳すと１０秒も経過しないうちに縦一列に罅が入り左右に分かれると、水晶が其処に存在していなかったかのように水晶の破片が綺麗に消え失せた。
水晶の置いてあった場所を見ると、何かの紋章が描かれているメダルのような物が光っていた。

「卒業試験開始から１０分も経過せずに１人目の合格者が出ましたね。　ミコト君、そのメダルは卒業の証です。　水晶が割れる事で中に入っている卒業メダルを取り出すことができます」
「これが卒業の証・・・」
「卒業おめでとうございます」
「ありがとうございました！」

試験が終了した生徒は教室に残っても、寮に帰っても良いそうだがルシアとマリアが心配なため此処に残る事にした。
理事長先生の話しによれば、落第者が毎年少なくても５０人以上は出るとの事で卒業式は数年前から執り行われないそうだ。
色々と考えていると試験が開始されてから１時間が経過し次々と水晶が割れ、メダルを手にし歓喜する声が続々と聞こえだしていた。

ルシアもその1人で、いつもは感情を外に出さない彼女も今回ばかりは嬉し涙を流しているようだった。
これで残るはマリアを含めた、4人だけとなっていた。
更に1時間半が経過した頃には教室には既に合格している俺とルシア、そして教壇には心配そうに見つめている理事長先生・・・3人の6つの眼が見ている先には未だに水晶と睨みあっているマリアの姿が。
そして制限時間の3時間経過まで秒読みになったところで漸く水晶が砕け、マリアもメダルを手にした。

「やった！卒業のメダルだーーーーー！」
「おめでとうございます。これでSクラス全員が卒業ですね」

理事長先生が言い切ると同時に教室内に卒業試験終了の合図となる大音量のチャイムが鳴り響いた。

「ホントにギリギリだったね。マリア、顔真っ赤だよ」
「ありがとうルシアちゃん、ミコトさん。　揃って卒業できましたね♪」
「ああ」
「そうね。帰ったら兄様にメダルを見せて自慢しなきゃ」
「ウフフッ、ルシアちゃんったら！」
「3人とも、改めて卒業おめでとう！あとは身支度を整え故郷にお帰りなさい」
「「「理事長先生、ありがとうございました！」」」

3人が3人ともメダルを手にぶら提げ、教室を出ると残りのクラスメイト7人から拍手で迎えられた。

「マリアも無事に卒業できたんだね」
「心配してたんだよ？」
「みんな・・・本当にありがとう」

元クラスメイトと会話を弾ませながら寮へと戻っていく途中、卒業できた事で俺達と同じ様に喜んでいる者、水晶が割れなかったのか廊下に蹲り悔し涙を流している者と喜怒哀楽で染まっていた。
数分後、揃って寮に辿りついた俺達は学園寮の管理者に全員揃ってお礼を言い、其々の部屋に散らばって行った。

「折角ですから一緒に学園を出ませんか？」
「いいわね。じゃあ荷物を整理したら食堂に集合という事で良い？」
「ああ分かった。」

因みに風の噂で聞いた内容によれば、ライシャスも普通に卒業試験を合格したようだが取り巻きの連中は勉強する暇が無かったのか一人残らず落第したという事だった。

「身支度って言っても空間に放り込むだけなんだけどな。」

俺は部屋に散らばっているお菓子類や果物を異次元空間にしまうと代わりに剣と鎧をとりだした。

「鎧やルゥを装備するのも久し振りだな」
（そうですよ～1人で空間にいるのは寂しかったんですよ？）
（毎日のように心の中や、夢の中で会話していただろう？）
（それでもですよ）

頭の中でルゥに散々怒鳴られながら寮の廊下に出ると、其処には大きな鞄を持った2人が待っていた。

「ミコトさんの鎧姿を見るのは久し振りですねぇ～～～」
「へぇ、格好いいじゃない。」
「ミコトさんは荷物は無いんですか？」
「果物や飲み物も昨夜マリアたちが食べたのが最後だったし、食器類も次に部屋に来る生徒のために残しておく事にしたからな。」
「そうなんですか・・・。それでは名残り惜しいのですが行きましょうか」
「そうだな。散々な一年間だったが、ありがとうな」
「此方こそ！」
「ん・・・。」

俺達は3人で学園の門につくと此れからの事を聞いてみた。

「私は一先ず家に帰って家族に報告してから、次の事を考えます。」
「私も途中までマリアの馬車に乗せて貰って家に帰る。兄様に自慢しなきゃ」
「そうか。」
「ミコトさんは此れから如何するのですか？」
「俺か？俺は気儘に旅をしながら考えるさ。」
別の世界への旅だけどな。

「そうですか、また何処かで逢えることを楽しみにしていますね。」
「じゃサヨナラ・・・。」

俺は手を振りながら見送ると護衛とルシア、マリアを乗せた馬車が荒野を走っていった。
そしてふと眼を向けると明らかに一般の生徒が乗る馬車とは違う、人間が十字架に貼り付けにされているような薄気味悪い紋章が幌に描かれている、豪華な作りの馬車にライシャスが同じ紋章をつけた

鎧を着込んでいる護衛とともに乗り込み出発するところだった。

（学園に在籍中は手を出せなかったけど今なら・・・。）
（マスター？何を考えていらっしゃるのですか？）
（ん？　なぁに色々と仕返しが出来ないかと思ってな）
（お気持ちは分かりますが此処はまだイスラントール国の領内です。
たとえ相手が悪逆
非道な大悪党とはいえど、国際問題に発展してしまいますよ？）
（それが問題なんだよな・・・なら天災という事にすれば良いか）

幸い（？）にも俺の使う風魔法と此方の世界での風魔法とは形状が異なるみたいで、突風や風を刃状にして相手にぶつけるという風の魔法はあるが、竜巻を発生させるような魔法は無い様だった。

「自然災害なら誰も悪くないだろ？」

今ならライシャスの向かった方向に走る馬車はいないし絶好の機会だった。
俺は卒業試験の時と同じ様に魔力を放出し、風の中級魔法を４個ほどライシャスの乗る馬車に向けて打ち出す。

「ウワアアアアーーーーー！？」
「な、なんだ！？何があったーーーー！？」
「何だ、この風はーーー！？」

其れにより、トルネード状の風が一直線に連続して襲い掛かり、馬車を３～４ｍほど浮かび上がらせると何事も無かったかのように場を通り過ぎ消滅した。
後には突然のことで何がなんだか分からない顔をした数人の護衛と壊れた馬車に寄り掛かる様にして座る放心顔のライシャスが居た。

「じゃあ、気が晴れたし火の精霊に会いに火山を目指すとするか。」
（少し道草になってしまいましたが、気を取り直して行きましょう）
魔法学園の門を警備している兵士に火山までの道順を聞き、俺はゆっくりと旅の続きを歩み始めた。

第６１話　国境に行く前に・・・（前書き）

ユニークアクセスが３０万人に到達しました！
御愛読ありがとうございます。

ユニークアクセス、ＰＶアクセス数の伸びを励みにこれからも頑張っていきます。

第６１話　国境に行く前に・・・

さて火山に向かおうと警備の兵に道を聞いたのだが・・・。

「火山ですか？　此処からだと馬で休みなく飛ばしたとしても、５日はゆうに掛かりますよ？」

「５日・・・か」

「もし良ろしければ、馬をお貸ししましょうか？」

「いや、いいさ。　急ぎの用があるわけでもないし、ゆっくりと歩いて行くさ」

「歩きだと１０日以上は掛かりますよ？」

「構わないから、どの方向に進めば良いかだけ教えてくれるか？」

「そうですか？　それなら学園の門を背中にして左手の方向へ只管（ひたすら）歩き続ければ着きます」

「分かった。ありがとう」

「気休めかもしれませんが、お気をつけて」

俺は手を振って兵士に礼をいうと教えてもらった方角に足を進めた。その頃、道を教えてくれた兵はというと・・・。

「ああは言ったけど、如何考えても長距離を歩くには服装が軽微過ぎるだろ。　命知らずなのか余程の馬鹿なのか。　どちらにしても荒野にいる魔物の餌食になることは間違いないな」

警備の兵にそんな事を言われている事など露ほども知らない俺は魔法学園の門から肉眼でギリギリ見えるかどうかの位置まで足を進めていた。

「兵士の心配も分かる気がするが、俺の走る速度は馬以上だし疲労感すら感じることもない。　馬なんて邪魔になるだけだ」

（マスターの身体能力が異常すぎるだけなんですよ！　一般の人から見たら命知らずも良いとこですよ？）
（でもなぁ・・・。火山に行って精霊とあって、別の世界に飛ぶ前に馬を返しに来なければならないだろ？面倒じゃないか）
（それは確かにそうなんですが今頃はさっきの兵士の方、荒野に死体が1体増えたと思ってるかもしれませんよ？）
（大丈夫だよ、俺は不死身なんだから。　おっ？そろそろ走っても良いんじゃないか？）
（そうですね。　人間の視力では見えないほどの距離まで歩きましたし、周囲に人の気配も感じられませんから、大丈夫だと思います）
（じゃあ行くか！　目標は5時間だ）
（さすがにそれは無理だと思いますが・・・。）

ルゥとの会話を打ち切ると、俺は火山に向かって全速力で走り続けた。
途中で何かを轢いた様な気もしたが、ルゥからは人の気配はしなかったという事で気にしない事にした。
馬が走る速度の十数倍のような速度で荒野を走っていたのだが、不意にルゥから『巨大な魔物の気配がする』と言われ荒野の真ん中で立ち止まった。

（マスター、何やら強力な魔物の気配がマスターの事を狙っているかのように近づいてきています）
（本当なら無視して走っても良いんだが腹が減ってきたからな、飯にするとしよう）
（もしかして・・・、食材は魔物ですか！？）
（此処最近は少量の果物や肉ばかりだったからな、久しぶりに大量の肉が食える）
（はぁ、凶暴な魔物とはいえマスターに掛かればただの食材ですか・・・）

俺は口元の涎を腕で拭いながら剣を構えて魔物を待ち構えると遙か前方から土煙と一緒に巨大な何かが突進してきた。

「おっ？ようやく到着したみたいだな、俺の昼飯」

改めて見てみると土煙を上げながら突進してきた魔物は牛のような角に獅子のような身体、６本の足を持つ全長５メートル近くもある魔獣だった。

「う～ん、あんまり美味そうにはみえないな・・・。」

魔物はそう思われている事など露知らず、前足（？）で俺を横薙ぎにしようとしてきた。

『ズバッ！！』

俺は前足をあえてギリギリで交わしながら剣を振るい、前足を斬り飛ばした。

「まずは１本！！」

魔物も咄嗟の事で訳が分からないような顔をしていたが、攻撃を繰り出した前足が胴体の付け根からなくなっていることに気づくと暴れ始めた。

「ギャオオオォゥゥ！！？」

「遅せえよ！」

俺は襲うつもりが逆に襲われて、混乱して暴れまわる魔獣に剣を構

えて飛び掛った。
一瞬のうちに剣で切り刻み、残りの5本の足を全て足の付け根から切り離した。
当然6本の足、全てを切り離された魔物は達磨状態となって胴体から地面に落下する。

「このまま放っておいても出血多量で死んでしまうとは思うが、情けだ楽にしてやろう。」

剣を構えながら魔物の頭に近づき、脳天に剣を突き刺すと先程まで咆哮を上げていた魔物が物言わずに静かに地面に横たわっていた。

「さ～て、運動して腹が減ったからな。　昼飯にするとしようか」

俺は先程斬り飛ばした俺の身体の少なくても5倍はありそうな足に近づき、火の魔法で焼き始めた。

「血も滴るステーキとは良く言うが、実際に見ると気分が悪くなるな・・・。　此処はやっぱり、生焼けにはせずに確り(しっか)と中まで火が通ったウェルダン風にしよう」

火加減（？）に注意しながら焼き続ける事、凡そ３０分。外は真っ黒焦げだが、剣を包丁代わりにして肉を切り開くと、中から程よく蒸し焼きにされた肉汁たっぷりな桃色の肉が姿を現せた。

「おっ？我ながら良い焼き具合だな。それじゃ頂きま～す！」
（・・・マスター、味はどうですか？）
（香辛料は何一つ使っていないはずなんだが、口に残るピリッとした酸味と焼きすぎによる香ばしさが、何ともいえないハーモニーを呼び起こしているな。）

（憶測ですが、マスターの言うピリッとした酸味というのは魔物の血液に流れる毒だと思います。　マスターは不死身なので大丈夫ですが、普通の人が食べた場合は一口目で確実にあの世行きです）
（まぁ、毒だろうが何だろうが美味いものには変わりないからな。次の足に行ってみよう）
（まだ食べるんですか！？）
（当然だ。俺の胃はまだ八分目にも達していないぞ？）
（本当にマスターの身体の何処に、あれほどの質量が消えていくのか・・・一度解剖してお腹の中を見てみたいです）
（それは無理だな。　切ったそばから再生してしまうしな）
（マスター、例え話に相槌を打たないで下さい）

ルゥと冗談話に華を咲かせながら瞬く間に４本の足を食べつくし、食休みをしたあと火山へと足を進めた。
余談だが、食べ残した２本の足や魔物の胴体を別の魔物が啄ばみ、魔物の大量死が確認されたのは別の話だ。

第６２話　登山道にて（前書き）

久しぶりに３９度８分という高熱の酷い風邪を引いてしまいました・・・

朝になって漸く３７度５分まで下がったので更新をしようと思います。

第６２話　登山道にて

荒野で魔物を食べてから更に数時間走り、火山の麓の登山道へと到着したのだが道に赤い鎧を着た２人の男達が立ち塞がっていた。

「ん？君は冒険者かい？すまないが隣国と小康状態になっていてね、通行は制限されているんだ」

「何時ぐらいに規制は解除されるんですか？」

「それは皆目検討がつかないね。おっと、無理に立ち入る事はできないよ？　我々、イスラントール騎士団と火山の頂上付近で睨みあいを続けている、サウスラーズの騎士達が至る所に居るからね」

「それじゃあ、如何しようかな・・・。」

「それなら、此処から西の方向に３日ほど歩いた場所に王都があるから、其処で規制が解除されるまで居るといい。かなり目立つから道に迷う事はないと思うよ」

「規制が解除されたと知るには、如何したら良いのですか？」

「街のギルドに騎士隊から情報が行く事になっているから、規制が解除されればギルドの掲示板に貼りだされると思うよ」

「分かりました。では、そうします」

「最近、巨大な魔物がこの周辺で目撃されているから出会ったらなるべく逃げたほうが良いよ」

すいません。その魔物なら既に俺の腹の中です。

さて騎士のいう王都に向かおうと思ったのだが、西がどっちなのか分からずに再度、聞いてみることにした。

「すいません」

「ん、何だ君か？今度はどうしたんだい？」

「西というのは、どっちでしょうか？」

「君は方位石を持っていないのかい！？良く此処まで来れたね」

方位石？そんなもの、聞いたことも見たことも無いぞ！
持っていないというのは怪しがられるからな芝居をするとしようか。

「いえ、持っていたんですが運悪く、魔物から逃げる時に落としたみたいで・・・。」

「そうか、それは災難だったね。僕の方位石を貸してあげるよ」

「ありがとうございます！あの、お名前をお聞きしても宜しいですか？」

「ああ、僕の名前はロスランだ。君の名前は？」

「俺はミコトと言います。ところで、この方位石はどれが西なんですか？俺の持っていたのとは形状が違うんですが」

形状が違うというより現代の方位磁石とは全然違い、東西南北のかわりに赤、青、黄、緑の４色が石の表面に備え付けられているクリスタルに表示されていた。
さらには自分が騎士から受け取った瞬間に何故か青色が一際激しく輝き始めた。

「ゴメン、言うのを忘れていた。　これは一般的に市場に出回っている方位石とは違い、軍から支給される騎士専用の物なんだ」

「どうりで見たことがない物だと思っていました」

俺は一度、持っていた方位石を目の前の騎士に手渡すと、騎士の手の中で今度は赤色が輝き始めた。

「知っているとは思うけど、これは魔道具の一種で自分の向いている方向を光で指し示してくれるんだ。今、僕は北を向いているから赤色が一際輝いているよね。この調子で赤は北、青は南、黄は東、

緑は西という風に見るんだ。だから西に行く時は、緑色が光る方向に足を向けて歩いていけばいいんだよ」

「分かりました。何から何までありがとうございます」

「いいよいいよ、さっきも言ったけど魔物に気をつけてね。僕が道案内をした冒険者が、魔物に襲われて死んだりしたら目覚めが悪いからね」

「はい。では失礼します」

俺は騎士に頭を下げて一礼すると、方位石を見ながら身体の角度を変えていった。

数秒後、緑色が輝いたので再度騎士に頭を下げて方位石が示す方向に歩いていった。

「ロス、いいのか？軍の支給品を隊長に黙って、冒険者に貸し出したりして」

「構わないさ、それにあの方位石は僕のじゃないからね」

「それじゃ誰のだ？」

「分からないけど、今朝テントの傍に落ちていたのを拾っただけだから」

「悪い奴だな。拾った物を貸し出したのか？」

「落とした騎士が悪いんだから、僕が怒られる事はないよ」

「持ち主は可哀想だよな。3日に1回の所持検査の時に持っていないことがバレれば、隊長の容赦ない叱責が延々1時間にも亘って聞かされるんだからな」

「持ち物検査は今日じゃなかったっけ？」

「確か、そうだったと思うが・・・。」

「本番の前に僕達だけで所持品検査をしてみないか？」

「それはいいな、もし忘れてたら今のうちならテントに取りに行けるしな」

「じゃあ決まりだ。行くよ？まずは剣！」

「おう、腰に挿してるぜ」
「次に盾とナイフ！」
「それも・・・ある。しかし、いつも思うが盾の裏に隠し武器とはな」
「愚痴は言わない！次は魔法リング」
「おぅ嵌めてるぜ」
「最後は方位石！」
「それなら此処に・・・。ってポケットに穴が開いて中身がなくなってやがる！」
「どうしたんだい？方位石は持ってないのかい？」
「確かに此処に入れていたんだが、落としてしまったようだ」
「じゃあ、もしかしたら彼に渡した方位石は君のだったかもしれないね」
「じょ、冗談じゃねえぞ！？前回もナイフをなくして、隊長に怒られたばかりなんだぞ？」
「失くした物は仕方ないよ、覚悟を決めるべきだね」
「ロスがアイツに渡してなければ、こんな事には・・・。」

これから数分後、騎士隊長のもと実際に所持品検査が行なわれ、火山の山頂に怒鳴り声と騎士の絶叫が響き渡ったという。
そんな事になっていることなど露ほども知らない俺はというと、問題の方位石を片手に王都までの道を只管に歩いていた。

「それにしても、こんな魔法具があったんだな・・・。」
（世界は広いですね。私も見たのは初めてです）

ルゥと会話をしながら、ゆっくりと歩く事2日、ようやく騎士の言う王都へと辿りついた。

「かなり目立つって、真っ白な西洋の城って何処となく違和感があ

るよな・・・。」

その街の大きさと違和感のある城に驚きながらも俺は街へと入って行った。

第６３話　武道大会参加（前書き）

お気に入り登録数が２０００件を突破しました。
ユーザーの皆様、ありがとうございます。

肉串と宿代が間違えていたので訂正いたしました。

第６３話　武道大会参加

街の大きさに圧倒されながらも街に足を踏み入れると、王都というだけあって活気に溢れていた。

「お～い、其処に居る兄ちゃん肉串喰わねえか、肉串！　今なら５本で２０リルだよーーー！！」

「おっ美味そうだね。　貰うよ」

「へへっ、まいど。　安いが味には自信があるからな、ゆっくり味わって喰ってくれ！」

俺は上半身裸という屋台の親仁から串に刺さったサイコロ状の肉に齧りつくと、その美味さに絶叫した。

「これは美味いな！　親仁、あと１０本追加だ！」

「まいどあり！」

俺は延々と食べながら、屋台の親仁と会話していた。

「兄ちゃん旅人には見えねえが、何処からきたんだい？」

「俺は・・・モグモグ、魔法学園からきたんだ。」

「ほう、魔法学園からかい。それなら兄ちゃんは魔術師かい？」

「いや違うな。俺は剣も使えるから言うなれば魔法剣士だな」

「魔法剣士ねぇ～。やっぱり此処に来た理由は国への仕官が目的かい？」

屋台の親仁はよっぽど世間話が好きなのか、肉串を手際よく焼きながら口だけで俺と会話している。

「おっと悪いな、込み入った事まで聞いちまって・・・。」
「構わないよ。俺は仕官をする気は全く無いさ、少し足止めを食ってしまって立ち往生してるだけさ。」
「立ち往生ねぇ～～ほら、次焼けたよ。」
「おっ？美味そうだな頂くよ」

結局、親仁と話をしている間に合計５０本もの串を喰ってしまい、日が暮れようとしていた。
串を食べている最中、何故か城のある方向へと何人もの剣士や魔術師が歩いていき、数分後には来た道を戻ってくるという意味深な行動が目に入っていた。

「もうこんな時間か・・・。親仁さん、この街で美味い食事を出す宿屋に心当たりはないか？」

売り物の串ほぼ全てを俺１人によって食い尽くされ、いそいそと店じまいを始めている屋台の親仁に話しかけた。

「この辺りにある美味い食事を出す宿か、それなら城の入口近くに宿屋を構えるミディルの酒場兼宿屋が良いんじゃないか？」
「ミディル？」
「誰にでも愛想が良く、元気で可愛い看板娘が居るっていう、街で評判の宿屋さ。」
「とりあえず行ってみるよ。親仁さん、串美味しかったよ！ご馳走様。」
「また来ておくれよ！！」

俺は親仁さんと別れると城の方面へと向かって歩き出した。

「おっ？あれが屋台の親仁が言っていた宿屋だな？」

見てみると宿屋の横に立っている酒場からは美味そうな匂いと入りきれない大勢の人が溢れていた。

「あれだけ繁盛しているのは看板娘の存在と料理の美味さが物語っているからだろうな・・・。」

（マスター、宿も良いのですが騎士から借りた方位石を返しに行かなくても良いのですか？）

（あ！そうだった・・・。串に夢中になってすっかり忘れてたよ。）

思い出したかのように服のポケットに入れたままになっていた方位石を取り出すと、宿屋を通り過ぎて城へと向かって歩いていった。

城へ着くと、山道で見たのと全く同じ色と形の鎧を着た騎士が門を警備していた。

「其処の者！！何者だ！？」

「すいません、実は荒野で道に迷った時に此方の騎士の方に助けてもらいまして、その時に方位石なる物をお借りして返しに来たのですが・・・。」

「そうだったのか。方位石は俺が責任を持って預かろう」

「はい、これです。」

そう言いながら俺は手に握っていた方位石を目の前の騎士へと手渡した。

「ふむ、間違いなく騎士隊専用の方位石だな。」

「それでは俺はこれにて失礼します。」

俺は踵をかえし、今度こそ宿屋に行き美味い食事に有り付けると思いながら歩き出そうとすると、先程の門を警備する騎士に話しかけ

られた。

「君は見た感じ剣士のようだが、武道大会に興味はないかね？」

「武道・・・大会ですか？」

「大会参加の申し込み期日は今日の日没までなんだが、参加する気はないかと思ってね。」

俺は少し考えた後、火山道が通行できるようになるまでは暇だから参加する事にした。

「大会の規約はありますか？」

「えっと確か、武器は自由だけど対戦相手を殺したりしたら即失格で、相手の武器を壊すか戦意喪失させるか場外に突き落とすかをすると此方の勝利となる。」

なるほど剣でも魔法でも使って、場外に落としさえすれば此方の勝ちという訳か・・・。

「分かりました。参加要請をお願いいたします。」

「あ、そうそう参加費用として前金で５００リル貰うけど構わないかな？代わりに優勝すれば５万リル、準優勝でも３万リルが贈られるから頑張って」

「分かりました。それでは５００リル手渡しますのでお受け取り下さい。」

俺は腰に装着している道具袋から５００リル取り出し、目の前にいる騎士へと手渡した。

「それじゃあ最後に参加者である君の名前を聞かせてくれるかな。おっと、色々と面倒になるから家名は言わなくてもいいよ。」

「俺はミコトです。」
「えっと、・・・ミコトと。はい、これが参加証だよ。　言うのを忘れてたけど、大会参加者には特別に開催中は参加証を宿屋の受付に見せれば、宿代は無料という事になっているから」
「そうなんですか!?」
「それじゃあ武道大会は2日後の朝9時からだ。　遅れないようにね。」
「分かりました。では失礼します」

俺は思いがけずに宿代が無料になる証を手に入れ、スキップでもしそうな足取りで宿屋へと向かった。

「いらっしゃいませ～～ミディルの酒場へようこそ～お一人様ですか?　其方のテーブル席へどうぞ」

俺が宿屋へと辿りつくと屋台の親仁が言っていた看板娘だろうか・・・。
酔っ払いが数多く居る、酒場の雰囲気に合わないような少女が客引きをしていた。

「悪いけど酒場の客じゃないんだ。宿は空いてるかな?」
「あ、宿泊のお客様でしたか・・・。失礼しました!
宿代は1泊、朝晩2食の食事つきで１０００リルになりますが宜しいでしょうか?」
「またしてもゴメン。　武道大会の参加証で宿代が無料になるって聞いたんだけど・・・」
「大会参加の方でしたか、大歓迎ですよ!　お部屋に御案内致しますから此方にどうぞ」
「ありがとう。でも、なんで大歓迎なんだ?儲けにならないのに」

宿の奥へと歩いていく、看板娘のあとを歩きながら聞いてみると？

「参加者の方を泊める事によって国からお金が払われますし副業の酒場も賑わいますから、お客さんが大会を勝ち進める事で此方の儲けも増えるという事なんです」

「なるほどな・・・。」

「それでは此方がお部屋になります。申し遅れました、私はレイシアといいます。

武道大会終了までお世話をさせていただきますので、よろしくお願いしますね」

「ああ、ありがとう。」

「はい。　此れから忙しくなるぞーーー！」

レイシアは気合を入れながら宿屋のカウンターへと戻っていった。

「噂に違(たが)わぬ、元気な看板娘だな・・・。」

その日、色々な事があったせいか酷く疲れたせいで夕食を食べて直ぐに眠ってしまった。

第６４話　精霊の名

大会を翌日に控え昼近くに起き、朝食（昼食？）を食べた俺は部屋へと戻り精霊と会話することにした。
光の宝玉が埋め込まれている腕輪に意識を集中させて、ルゥと交えての会話をする。

（なぁ光の精霊、武道大会とか通行止めなどの色々な理由で火の精霊に会いに行くのが遅れるが構わないだろうか？）
（・・・・・・・・）
（光の精霊？）
（光の精霊様？　どうかなさったんですか？）
（・・・ズルイです。）

何故か光の精霊は機嫌が悪くなっているようだった。

（どうしたんだ？）
（だって・・・ルゥ殿とは頻繁に話しをされてるのに私には、こういう時にしかお呼びが掛からないのですから）

そういえば、そうだったな・・・。
光の精霊に話すのは約１年ぶりだし、界渡りの時しか話しかけてないからな。

（それにルゥ殿だけ名前がもらえて、何で私だけ貰えないのですか！？）
（（えっ？？））

この光の精霊の発言には俺もルゥも目が点になるようだった。

（名前が欲しいのか？）

（はい！　主様に私にあった名を付けて頂きたいのです。）

（光の精霊は精霊の中でも最上級の階級を持っているんだろ？　俺が名付けて失礼に当たらないのか？）

（失礼なんてとんでもない！　主様は私など手も届かないほど上の立場の御人ですよ！？）

そういえばマルベリアにいた時に光の精霊は俺の事を“神の後継者”って言ってたっけ・・・。

（そういう事なら考えとくから、今は俺の質問に答えてくれるか？）

（絶対ですよ！？　・・・えっと、質問は火の精霊に会いに行くのが遅れるということでしたね。　簡潔に言いますと、問題ありません。　私達精霊は人間とは違い、半永久的な寿命がありますから会いに行くのが例え１００年後だったとしても、精霊からしてみれば些細な時間にすぎませんから）

（そ、そうか・・・。）

（それにしても、主様が大会に出るのは反則的な気がしますね。）

（あ、私もそう思います。マスターは不死身な上に体力も無限な反則な方ですものね。）

（２人して一体、何なんだ？）

（だって、そうですよね大会ルールは場外に落ちるか戦意喪失で勝ちが決まりますよね？）

（主様は場外に落ちる事だけを注意してくだされば、どれだけ切り付けられようと関係ないのですから）

（そうは言うが斬りつけられて傷が残らないのは不自然だから、避けるつもりではいるが・・・。）

（（当然です！！））

それはさて置き、あっさりと話し合いは終わってしまったな。
光の精霊に名前も考えてやらないといけないし。
精霊との会話を中断し目を開くと、然程時間が経っていないと思われたが外は夕焼けに包まれていた。

「もうこんな時間か・・・。体感時間では数十分だと思ったんだがなぁ～～」
（マスターが起きたのは昼過ぎでしたから、時間にして此れぐらいですよ？）
（そうか。それにしても光の精霊があんな事を言うとは、思いもよらなかったな）
（私も驚きです。　光の精霊様は私達、下級精霊や火や風の精霊様方、上級精霊を束ねる御方ですからね）
（名前か・・・。どんなのがいいかな）

必死に良い名前を考えていると、腹の虫が泣き始めていた。

（とりあえず腹も減ったし、晩飯を食いながら考えるか）
（朝食を食べてから４時間ぐらいしか経過していませんよ？　どんな胃をしているのですか？本当に解剖してみましょうか）

ルゥと適当に相槌をかまし、食事をするために酒場へと向かうとレイシアと目が合った。

「ミコトさん、やっと降りてこられたんですね」
「ちょ、ちょっと明日の大会本番のために精神を集中していてね・・・。」
「そうなんですか！　明日は頑張ってくださいね。宿屋関係者一同、ミコトさんを応援していますから」

「ははははは・・・。　頑張るよ」
「明日に備えて特別に御馳走を用意いたしましたから、思う存分食べてください」
「兄ちゃん頑張れよ！　俺らも兄ちゃんに賭けるからよ！！」
「賭け？」
「はい、毎年武道大会では選手が８人に絞られた瞬間から賭けの対象になるんです。
　各選手の今までの経歴から倍率が決められ、無名な選手ほど倍率が高く設定されます。」
「それじゃあ最終的に残る８人は、強力な相手ばっかりって事になるのか？」

精霊が言ったとおり、場外負けだけを頭に入れておけばいいかな。

「毎回、８人のうちの４人は騎士関係者になっていますね。」
「そういや、前回の覇者は元近衛騎士団長で名誉顧問のレイモンド様だったよな。」
「そうそう、誰も一撃すら与えられずに敗れていったしな・・・。」
「怖い事言わないで下さいよ～～～」
「まぁ気にすんな！　勝負は時の運だし、レイモンド様も結構な歳だから出場しないかも知れないしな。」
「余計気になりますよ。」
「違げえねえ！！」

その後、優勝の前祝いのような豪勢な食事を楽しみ、数十分後に部屋へと戻ってきた。
ちなみに光の精霊の名前を適当に思いついた“ミラ”という名前を名付けてやったのだが、その後が大騒ぎになってしまった。

（ミラですか！？　主様、ありがとうございます！！）

光の精霊ミラから歓喜の声が上がった直後、幾ら呼びかけようと応答が無い位に大騒ぎになってしまった

「たかが名前なんかで大袈裟な・・・。」

（『たかが』ではありませんよ？マスターは神様に最も近い存在なんですよ、その神様から名前を頂けるという行為がどれほどの物か。私も身体があったら飛び回っているところですよ！）

（まだ神様なんて実感、無いんだけどな。）

この名付け行為が後日、精霊の会話で混乱の元になることなど、この時の俺は思いも寄らない事だった。

第６５話　武道大会予選

昨日は主に光の精霊・・・いやミラの御蔭で騒がしい夜になったが無事（？）に武道大会の朝を迎えられた。　ちなみに大騒ぎになったミラはというと、未だに応答が途絶えたままだった。

「あ、ミコトさん！おはようございます。
今日から武道大会ですね。宿の仕事があって応援には行けませんが、頑張ってください。」
「ああ、ありがとう。１日目は何をするか、分からないんだけどね」

宿屋の看板娘であるレイシアと会話していると、酒場の厨房辺りから野太い声が響き渡ってきた。

「お～いレイシア、料理上がったぞーーー！！」
「は～い、今行きま～す！！それじゃあミコトさん、お気をつけて！」

俺は適当に酒場で朝飯を食べている客達に挨拶を済ませ、少し早いが大会受付の城の入口へと向かった。
２日前に大会出場受付をした場所は開始まで１時間近くはあるというのに既に沢山の剣士や魔術師で溢れかえっていた。
不測の事態に備えてか青い鎧を着込んだ複数の騎士と思われる者達が人込みに目を光らせていた。

「お主も大会参加者か？　皆、ピリピリしておるからのぉ・・・。
下手に話しかけないほうが身のためじゃぞ？」

俺が最後尾と思われる場所に並ぶと俺の前に居た初老の男性が話し

かけて来た。
背の高さは俺と変わらないが、身体の大きさ、剣の大きさも俺の1.5倍はありそうな巨漢だった。

「あの、貴方は？」
「我か？我は少し寝坊した、ただの爺じゃよ。」

如何考えても、ただならぬ気配を持った歴戦の兵（つわもの）といった感じなのだが・・・。
そう考えていると、予定よりも早いが大混乱になると予想したのか大会の受付が始まろうとしていた。

「只今より、大会の受付を致します。　参加する剣士、魔術師の方々は参加証を持って此方にお並びください。　順々に予選分けのクジを引いていってもらいます。」
「予定した時間より３０分も早いのう。　市民の安全を考えての事だと思うのじゃが、混乱を招かねば良いのだが」
「混乱ですか？」
「うむ、例えば一番先頭に居る者と次に入る者とで、諍いがないとも言い切れぬしな・・・。」
「確かに考えられる事ですね、騎士の方々も配備されてるでしょうし考えすぎなら良いのですが。」
「お主も、我と同じ考えの様だの？」
「そうみたいですね。」

前にいる御爺さんと話をしながら順番を待っていると、受付開始から3時間が経過してやっと俺の順番まで残り3人という事になっていた。

「はい、参加証をお返しいたします。　それでは箱の中からクジを

1枚引いてください」
「此れでいいのか？」
「『C』ですね。　城内へと入り、第2控え室と書いてある場所にお入り下さい。では、次の方どうぞ。」

受付を担当する騎士に呼ばれ、俺の前に居る爺さんが前に出ると途端に騎士の表情に変化が現れた。
「え、えっと受付をしますので・・・。いや、しますから参加証をお見せ下さい」
「固くならなくとも良い、我は武道大会の一参加者じゃ。　普段どおりの仕事をせい！！」

この爺さんは城の関係者か何かだろうか・・・。騎士の表情から見ると、絶対に一般人ではなさそうだな。

「失礼しました！参加証はお返しいたします。　クジをお引き下さい」
「うむ。　『H』か、第4控え室でよいのかのぅ？」
「はい、其方にお願いします。では次の方どうぞ・・・。」

やっと俺の番が来た。

「それでは、参加証を見せてください。」
「はい。」
「えっと、確認しました。では此方の箱の中に手を入れてクジをお引き下さい。」

俺は受付の横に置いてある木製の箱の中へ手を突っ込むと最初に手に当たったクジを手に取り、そのまま引き抜いた。

「『A』ですね、第1控え室に入ってください。全参加者の受付後、開会式終了後の第1試合になりますので用意をしてお待ち下さい。」
「分かりました。このクジは如何したら良いんですか？」
「控え室にて入室時に必要になりますので、失くさないようにしてください。　では次の方どうぞ」

受付を後にして城の中へ入っていくと、所々に騎士が並び厳戒態勢を整えていた。
騎士から目を離し奥のほうへと歩いていくと第1、第2、第3、第4控え室と書かれた板が置いてある4つの各部屋の前に、受付と書かれた看板を手に持っている騎士が疲れたような表情で立っていた。

「えっと、第1控え室だから此処だな。」

控え室に入ろうとすると、受付の看板を持つ騎士に止められた。

「控え室に入る前に入口受付で引いたクジを見せてください。」
「はい、これです。」

洋服のポケットに仕舞ってあったクジを騎士に手渡すと・・・。

「確認しました。　このまま進み、分岐点では左に進んでください。」
「わかりました。」

俺は騎士に一礼すると、前へと進んで歩いていった。
途中の分岐点には左の矢印にAの文字と右の矢印にBの文字が描かれていた。

「Aだからコッチだな。」

分岐点を左に曲がって進んでいくと、広い部屋へと辿りついた。

「此処がＡの控え室で間違いないようだな。」

見ると、壁には大きく“Ａ”の文字が描かれていた。

部屋に入った瞬間に背中に大きな斧を背負った大男に話し掛けられた。

「お前もＡのクジを引いた剣士か、此れなら俺の予選突破は確実だな。」

「勝負は身体の大きさで決まるものではない！　生半可な考えは捨てる事だな。」

「なんだと!?　この野郎!もういっぺん言ってみろ!!」

「聞こえなかったのか？　図体ばかり大きくて中身は空っぽの様だな。」

「て、てめえ!?　試合が始まったら真っ先に殺してやる!!」

「大会の規則も憶えていないほど馬鹿なのか？　俺を殺せばお前も失格になるぞ？」

「グヌヌヌゥゥゥ・・・！　武道大会終了後に何処に居ようとお前を見つけ出して、必ず殺してやる!」

「楽しみにしてるぞ、まぁ無理だと思うがな。」

頭から湯気が出そうなほど怒り捲くっている大男を尻目に奥へと歩いていくと、次にレイピアを手にしている男に話し掛けられた。

「先程のやり取りを見ていましたよ？　冷静さを欠いた所であの大男の負けは決まったような物ですね。」

「まだ分かりませんよ？　死に物狂いで向かってくるかもしれませんし」

あの短気な馬鹿男ならありえるな・・・。

「殺してしまったら負けですが、それ以外なら何をしても良いのですから注意しないといけませんね。」

「自分的にはあっさりと場外負けになってくれることを願っていますが。」

「そうですね。　おっ、開会式がいよいよ始まりますよ」

外に耳を向けると盛大な喇叭（ラッパ）の音が鳴り始めていた。

これが終わればいよいよ、武道大会の幕が開く・・・。

第６６話　予選開始

控え室にて下らない大男との言い争いから数分後に開会式が執り行われた。
部屋の中から出られなく声だけで顔は見えないが、司会の声から国王が迎賓席にいる事だけは分かった。

「それでは開会式を終了し、予選第１試合を始めたいと思います。」

司会者が言い切ると同時に観客席から盛大な歓声と、ざわめきが聞こえ始めてきた。

「第１試合の選手の入場です。」

“入場”という言葉とともに控え室から闘技場へと続く重い扉が開き、舞台への道が開かれた。
俺は開いた扉から外に出て周囲を確かめると、開いているのは自分達の控え室の扉のみで他の７つの扉は閉まったままになっていた。
其れを気にしながらも２０ｍ四方はあろうかという舞台に俺を始め、次々と選手が乗っていく。
先程言い争いをした大男もまるで俺を探しているかのように、キョロキョロと目を走らせていた。

「全員が舞台に乗った事を確認したところで改めて規則の説明をいたします。
対戦中に相手を死に至らしめた場合は、その時点で失格になり騎士の方へと身柄を受け渡します。
更に相手の武器を破壊したり戦意喪失させるか場外へと落とす事により勝利となります。　剣は勿論の事、魔法などを使っても構いま

せん。　対戦中に大怪我をなさっても、回復魔法担当の魔術師が控えておりますので安心して試合に取り組んでください」

この司会の言葉を聞いて震えている者や既に場外に飛び降りようとしている者、あの大馬鹿男のように闘気（殺気？）を滾らせている者と十人十色になっている。

「それではお待たせいたしました。　予選第１試合始めてください！！」

司会が言い切ると同時に大きな銅鑼が打たれ、試合（死合い？）開始となった。

開始直後から予想していた通り、震えていた１０人ほどが自ら場外へと飛び降りていった。

俺は『そんな事をするなら、最初から参加しなければいいのに』と考えながら舞台の端スレスレに居る参加者を次々と場外へと押し出していく・・・。

あの大男の方に目を遣ると自慢の斧を振るい、次々と弱いもの虐めをするかのように殴り倒して行った。

控え室で大男の次に話しかけて来た男はというと、自慢のレイピアが折られ場外に座り込んでいた。

（！マスター、直ぐに右へ避けてください！！）

状況判断しているとルゥから念話が届き、咄嗟に右に飛ぶと元居た位置に巨大な斧が突き刺さっていた。

「ちっ外したか、確実に不意打ちをしたと思ったんだがなぁ！」

「お前は！？」

見ると舞台に残っているのは、俺と俺の前にいる先程の巨大な斧を振り回している大馬鹿男だけだった。

「やっと見つけたぜ！！」
「分かっているのか？　俺を殺せばお前は失格になるんだぞ？」
「安心しろ！　『いっそ殺してくれ』と思うほどに痛めつけてやるからよ！！」
「最低だな。」
「なんとでも言え　お前を破って俺は予選突破１番乗りだーーー！！」

大男は斧を振り上げ、俺の方へと襲い掛かってきた。

「愚かな・・・。」

身体が一回り大きい事を有利に考えていた大馬鹿男だったが、実際は逆で身体が大きければ大きいほど両足に掛かる負担は大きくなり、少し強めに蹴るだけで自分の体重が負担となって簡単に圧し折れる。その事を踏まえて俺は咄嗟に斧をかわし、すれ違い様に左足の膝を力一杯蹴飛ばし骨折させた。

「ギャアアアアア！？」
「まずは１箇所。」
「て、てめえ！いい気になるなよ！！」

足を手で押さえて油断しているところに、もう片方の膝も砕きに掛かった。

「続けて２箇所目。」
「き、貴様！！　こんな事をして、ただで済むと思うなよ！？」

「油断していていいのか？　次は此処だ！」

両足が使い物にならなくなり、その場でしゃがみ込んでいる大男の斧を持っている腕の肘関節を力一杯蹴り飛ばし、普段絶対に曲がらない方向へと腕を折り曲がらせた。

「3箇所目・・・。」

腕が折れたことにより持っていられなくなった斧はそのまま地面に落下し、折れた足の部分をもう片方の手で押さえていた指を根元から断ち切ってしまっていた。

「お、俺の指がーーーー！」

「そこまで！！　試合続行不可能とみなし、予選第一試合を終了いたします。」

「俺の指は何処だーーーーーー！？」

「ああ、五月蠅い！　骨を折るだけのつもりだったんだが、不可抗力といったところだな」

「安心してください、指は繋がるかどうか分かりませんが回復魔法で治療させていただきますから」

大男が顔に似合わず大泣きしている所に数人の魔術師が駆け寄ってきて回復魔法を掛けていた。

「それでは舞台の準備が整い次第、予選第2試合を執り行いたいと思います。　勝ち残った選手の方は控え室にお戻り下さい」

場外に座っている者や怪我をしている者は魔術師に付き添われ別の出口から出て行った。

俺は未だに泣き喚いている大男を尻目に控え室へと戻っていく。

控え室に入ると同時に舞台へと繋がる扉は閉められ、外に出られなくなった。
本戦の対戦相手がどんな人物なのか気になったが舞台へと続く扉は重厚な扉で覗けるような窓すらなかった。
これからの事などと色々な事を考えていると控え室に居た魔術師に声を掛けられた。

「大会本戦出場おめでとうございます。怪我はありませんか？」
「特に怪我らしき物はしてないな。」
「そうですか、予選とも思えぬ激戦で怪我を負ってないなんて凄いですね。」
「君は他の参加者の治療に当たらなくてもいいのか？　最後は指を失くした者などもいるが・・・。」

その指を失くす原因を作ったのは俺なので、何とも言えない気持ちになってしまっていた。

「指を失くすぐらいなら、この大会では日常茶飯事ですので気にする事はありませんよ？　酷い時には腕1本とか脚1本切断される選手の方も居るぐらいですから」
「そうなのか。それで俺は此れから如何すればいいんだ？」
「本来は治療するのですが、その必要はないようですし宿に帰ってもらうことになっています。」
「今日はもう試合はないのか？」
「はい。　大会本戦は2日後の朝9時を予定しておりますので、ゆっくりとお休み下さい」
「分かった。」
「あっ！忘れてました。名前を聞かせて頂いても宜しいですか？」
「ん？ああ、俺はミコトだ。」
「ミコト様ですね。お疲れ様でした」

こうして控え室を出た俺は騎士に一礼しながら城を出て宿屋へと続く道を歩いていった。

「ミコトさん、大会は如何でしたか？」
「予選は突破したよ、次は2日後の本戦だ。」
「おめでとうございます。早速、料理の準備をしますので部屋で寛いでください。」

対戦相手がどうなるのか、俺の前に居た爺さんが何者なのか考えながら大会1日目を終了した。

第６６話　予選開始（後書き）

自分自身苦手とする戦闘描写に悩みましたが、なんとか完成しました。

第６７話　想定内の展開？（前書き）

何とか最新話が完成し、更新いたしました。

一気に大会本戦まで話を飛ばしても良かったのですが少しだけ話を挟むことにしました。

第６７話　想定内の展開？

武道大会の予選が無事に終了し、宿屋へと戻った俺は酒場にて他の客から噂の的にされながら夕食を食べていた。

「兄ちゃん、あんたに賭けてるからな！　負けないでくれよ？」
「それは分かりませんよ？　勝負は時の運ですから・・・」
「でもなぁ、兄ちゃんが負けたら俺は破産だ。　母ちゃんに殺されちまうよ」
「お前は殺され慣れているだろうが！　酒で殺され、浮気で殺され、今更殺されても構わないだろう？」
「ちげえねえ！」
「「ハーハッハッハ！！」」
「皆、人事だと思いやがって・・・。」

俺に全額賭けたと言う男が他の客からも馬鹿にされ続け自棄酒を飲んでいるようだ。

「実際のところ、結局幾ら賭けたんだ？」
「・・・・・１００００リル。」

男は酒を飲みながら言いづらそうに呟いて金額を口にした。

「１００００！？　給料の半分近くを注ぎ込むなんて、幾らなんでも賭けすぎだろう！？　こりゃ決勝の日がコイツの命日になるな」
「そう言うお前らは、幾ら賭けたんだ？」
「俺は小遣い稼ぎ程度の５００リルだな。　お前は？」
「俺も７００リルってとこだな。　此れぐらいなら財布も傷まないしな」

「畜生！　レイシアちゃん、酒！！」
「飲みすぎですよ～～～。御身体、壊しちゃいますよ？」
俺はそんなやり取りを見ながら食事を終了し部屋に戻る事にした。

「ご馳走様、美味しかったよ」
「ありがとうございました！　本戦も頑張ってくださいね」
「兄ちゃん！　絶対、絶対に勝ってくれよ！！？」

レイシアと酔っ払いに手を振って部屋に戻りベッドに横になろうとすると、ルゥから念話が届いた。

（マスター御手数ですが、夢の世界へと来てもらえませんか？）
（如何したんだ？）
（光の精霊様・・・。いえ、ミラ様から大事なお話があるとかで）
（ミラから！？　連絡がついたのか？）
（はい。非常に焦っているような口調でした）
（分かった。直ぐに行く！）
（お待ちしております。）

俺はベッドに寝そべったまま、剣の柄を握り締め眠りについた。
最初の頃とは違い、今では意識を自分でコントロールする事により何時でも夢の中の世界へと行く事が出来るようになった。
急いで夢の中へと足を踏み入れると、其処には土下座のような格好で頭を下げているミラの姿があった。

「ミラ！？　如何した、何があった！」
「主様からの再三の呼び出しに応じられなかった事を此処に謝罪いたします。」
「ミラ、そんなことは気にしなくても良い。　精霊にだって事情が

あるだろうしな」
「そう言って頂けると、心が休まります。」
「それで？　ルゥの話では大事な用があるという事だったが？」
「其れなのですが・・・まことに申し訳ありませんでした」
俺は大事な用とやらを聞くと、ミラは先程よりも深く頭を下げ始めた。
ルゥも最上級の精霊が深々《ふかぶか》と頭を下げている様子に困惑していた。
「だから、謝らなくてもいいって。　何を聞かされても怒らないからさ」
「分かりました。　それではご説明させていただきます。　主様から御名前を頂いた日に嬉しさのあまり、他の火の精霊や水の精霊といった他の上級精霊に自慢してしまいました」
「それぐらいなら別に構わないが？」
精霊だって意思がある存在だし、一々何とかの精霊なんて言うのは邪魔臭いしな。
「此処からが本題でございます。　自慢した後、他の精霊達から私だけが主様から名前を貰うのはズルイという事で、皆から責められたのでございます」
「なんとなく答えが見えてきたような・・・。」
「恐らくは主様の考えている通りでございます。　他の精霊から『自分達にも名前を付けて頂きたい』との申し出が多数寄せられました」
「なるほど・・・。」
「それで主様さえ御迷惑でなければ、御手数ですが他の精霊達にも名前を付けて頂きたいと」

「分かった。次の精霊に逢うまでに考えておくから『楽しみに待っていてくれ』と伝えてくれ」
「ありがとうございます。早速、行って参ります」

ミラはスッと立ち上がると音もなく、その場から消え去った。

「恐らくですがミラ様は自分が不用意に自慢した事により、他の上級精霊様からの頼み事でマスターに怒られると思っていたんでしょうね」
「そんな事ぐらいで俺が怒るわけがないだろうに・・・。そりゃ少しは面倒くさいとは思ってしまったが、精霊に名前を付けるぐらいで土下座はないと思うが？」
「マスターは何れ神様になられる御方ですからね。一番偉い方に頼み事をするなんて、畏れ多い事なんですよ」
「神なんて自覚、ないんだけどな・・・。」
「この旅自体が神様への道ですから、遅かれ早かれ神様になることは確定ですよ？」
「面倒臭いが仕方ないか」
「マスターって結構、面倒臭がりやなんですね」

俺は夢の世界から出て改めて眠りに着くと、明日は何をしようかと考えていた。

「明日は如何しようかな。街の中をブラっと散歩でもしようかな」

考えながらも予選での疲れの所為か、瞬く間に眠りについてしまった。

第６８話　大男のその後（前書き）

アクセスＰＶが３００万に到達！！ありがとうございます。

覚えている方は少ないとは思いますが、予選でミコトに叩きのめされた斧使いの大男のその後の様子を描いてみました。

第６８話　大男のその後

翌朝、目が覚めた俺は朝食のあと翌日の武道大会本戦を前に気分転換がてら、街の中を散歩する事にした。

「それじゃあ、少し歩いてくるよ」

「ミコトさん、気をつけてくださいね？　毎年、武道大会の予選と本戦の合間には出場選手の闇討ち問題がありますから」

「分かった。気をつけるよ」

毎年だなんて・・・。この街の警備は笊(ざる)状態なのか？

まぁ武道大会に出場する猛者を兵士が止めるのも無理っぽいが。

俺はそう思いながらも宿屋を後にして街中食べ歩きの旅に向かっていった。

宿を出発してから2時間後、レイシアの予想通り俺を待ち構えていた人物が姿を現した。

（マスター、前方１００ｍほど先にある民家の軒下で此方に対して殺気を漂わせている人物が５人います）

（相手は俺を狙っているのか？）

（間違いないでしょう・・・。５人のうちの１人には昨日会っている様な気配もします）

（大会本戦に駒を進めた事による嫌がらせか？）

（間違いないと思いますよ？）

襲撃者が待ち構えている場所まで残り５０ｍのところで立ち止まっている俺に対して痺れを切らしたのか、街中にも拘らず巨大な斧を構えた大男を先頭に５人の男が姿を現した。

「探したぜ！　貴様には予選の時の借りを返さねえといけないからな」
「何の事を言っているんだ？　誰かに貸しを作った憶えはないんだが？」
「ふざけるのも大概にしやがれ！　俺の顔を見忘れたとは言わせねえぜ！」
「そんな事を言われてもな・・・。」
（マスター、本気で忘れてるみたいですね。　予選で最後まで戦っていた大男ですよ）
「ああっ！お前あの時の斧使いか？　指は無事に繋がったのか！？」
「ようやく思い出しやがったのか！　貴様の所為で予想外の治療代を請求されるハメになったんだ！　覚悟しやがれ」
「俺の所為って・・・。お前の指を切断したのはお前の斧だろうが！　しかも、不可抗力で」

俺がその事を口にすると、まるで茹蛸のように真っ赤な顔をした大男が斧を振りかぶりながら襲って来た。　其れを合図にしたのか残りの４人も剣や槍で俺へと向かってきた。
この大馬鹿男は分かるが後の４人は本当に見たことも無いな。

「貴様が武道大会自体に出場しなければ俺はこんな出費をしなくて済んだんだーー！」

振り上げられた斧をかわしながら、次々と襲い掛かってくる剣や槍を軽やかなステップで回避していく。
気づいたときには周りを塀で囲まれた袋小路のような場所に追い詰められていた。

「それは明らかに八つ当たりというものだろうが！」
「八つ当たりだろうが何だろうが構わねえ。　鬱憤さえ晴らせれば

それでいいんだよ！！　見たところ、貴様は剣を持ってないみたいだしな」

そうなのだ・・・本当にただの散歩と食べ歩きが目的で宿屋を出てきたので、手元には剣も鎧もない。

「逃げ場はないぜ？　観念して斧の餌食になりな！」

男がトドメの一撃を繰り出そうとして斧を振りかぶった瞬間に俺は男の膝を力一杯手加減抜きで蹴り飛ばした。

『バキィ！！』という嫌な音とともに膝は逆方向へと折れ曲がり、体勢を崩した男は斧と体格の重さにより壁を突き破って屋敷内へと倒れこんだ。

俺はというと、一瞬の隙を突いて壁を蹴り民家の屋根に飛び上がって難を凌いだ。

「ウワァァァ！？　強盗だーーーー！　誰か警備隊を呼んでくれーーー！！」

「む？不味い！　退散だ」

大男の仲間として俺を襲って来た４人は騒動を回避するように四方へと逃げて行った。

「待て！　貴様等、雇い主の俺を置いて逃げる気か！？戻って来い！」

男の片膝は俺が蹴り飛ばした事により砕けてしまっているので壁を突き破った体勢のまま動けずに居た。

「誰も居ないのか！？　畜生！」

「騎士様、此方です」
「強盗に入られたという事で来てみたが・・・民家の壁を破って侵入とは大胆不敵な奴だな」
「お、俺は強盗なんかじゃねえ！！」
「言いたい事は多々あるとは思うが、街中で武器を振るったという事実は覆す事は出来ないからな？」
「畜生！！あの野郎、覚えておけよ」
「『あの野郎』が何処の誰かは知らないが、街中で武器を使った件と民家の壁を破って押し入った件を調べなきゃならないからな、城までご同行願おうか。　おい！この男を拘束し城へ連行しろ」

大男の四肢を持った４人の騎士が引き摺る様にして城への道を戻って行った。

「あ～あ、下らない事で時間を潰してしまったな。　空も夕焼けになりかけてるし宿屋に戻るとするか」

俺は屋根伝いに宿屋の近くまで行くと、人目のない場所で地面へと飛び降りて帰る事にした。
「ミコトさん、お帰りなさい。大丈夫でしたか？」
「ああ特に此れといって、異常はなかったよ」

本当は襲われたのだが、本当のことを言ってしまうと心配されてしまうので内緒という事にした。

「良かった。　実は少し前なんですが、近くの御邸が強盗に入られたとかで大騒ぎになっていたんですよ。　ミコトさんの歩いて行った方向だったので遭遇してないかと心配していました」
「そ、そうなんだ。　とりあえず歩き疲れたから夕飯の準備をしてもらってもいいかな？」

「あ、はい。　分かりました、出来上がったらお呼びしますので部屋でお寛いでいて下さい」
「ん、分かった。　そうさせてもらうよ」
俺はレイシアに手を振って食事の準備を促すと自分の部屋へと戻っていった。
数分後、運動（？）をした御蔭で何時もよりも食が進み、翌日の武道大会の準備は整えられた。

その後、城へと連れて行かれた大男はというと襲撃の目撃者の話により一般人（俺のことかな？）を襲っていた事と街中で武器を使用した事、壁を壊して押し入った強盗罪と・・・合計で重い禁固刑が言い渡され、追加として骨折した膝の治療費と武道大会予選での骨折や指の接続に対する治療費の支払いから逃げたとして1万リルの請求を言い渡される事となった。

「俺は悪くねえ！　全部アイツの所為だーーー！！」
「五月蠅えぞ、新入り！　少しは静かにしろ！！」

『パンッ！　バキッ！　ゴキッ！！』

「ギャアァァァァーーー！」
「おっと、すまねえ。　膝が治りかけだったんだな、許せ！」

牢の中で張り飛ばされた事で体勢を崩し、繋がりかけていた骨が再度粉砕する事になってしまった、結局最後まで運の悪い事になった名もなき大男である。

第６８話　大男のその後（後書き）

いよいよ次話から大会本線に突入します。

『どんな個性的なキャラを出そうか』と『名前』と苦手な『戦闘描写』を考えるのが毎回苦悩します・・・

第６９話　本戦に進む８人の猛者（前書き）

ユニークアクセスが４０万人に到達しました！！

この物語を読んでくれているユーザーの皆様方、ありがとうございます。

今後も頑張りますのでよろしくお願いいたします

第６９話　本戦に進む８人の猛者

昨日の強盗騒ぎが街で話題となっているが、そんな事など関係なしに武道大会の本戦の開催となった。
宿屋にて起床後、朝食を済ませた俺は装備を整えると城の入口へと足を運び受付の兵士に話しかけようとすると其処には今まさに鬼気迫る表情をしている剣士や魔術師が其処で受付をしていた。

「おっ？お主も予選を通過したのか。人は見かけによらないものじゃの」
俺も列に並んで順番を待っていると、予選の時にも話しかけて来た爺さんから話し掛けられた。

「貴方も無事に予選を抜けられたみたいですね。」
「運が良かったのじゃよ。そうでなければ、こんな年寄りが本戦に進めるわけがなかろう？」
「またまた、ご謙遜を・・・。」

目の前の爺さんと話をしながら受付のほうを見てみると、予選の時と同じ様に参加証を騎士に見せて箱の中から数字の書かれたカードを引いているようだった。
丁度見ていると、全身真っ黒な鎧を着込んだ人物が『３』と書かれたカードを騎士に見せていた。

「それでは、次の方どうぞ～～～」
「おおっ！我の番じゃな。えっと・・・参加証は何処に仕舞ったっけの？」

爺さんは慌てたように服のポケットから靴の中からと、至るところ

を探し回っている。

（おいおい、いくらなんでも靴の中にはないだろう・・・。）

「おおっ、あったあったこれじゃ！！」

「はい。確認しました、それでは箱の中からカードをお引き下さい。といっても1番か7番しか残されていませんが」

「ほう、どれどれ・・・。」

目の前に居る爺さんが箱の中から手を引き抜くと、其処には『1』という数字が書かれていた。

「レイモンド様、1番ですね。　第1試合ですので準備をお願いいたします。」

はて？レイモンド？何処かで聞いたような気がするが、何処だったっけ？

「それでは、次の方どうぞ！」

「あっ、はい」

「参加証を見せてください。」

「はい。これです」

俺は大切に仕舞っておいた参加証を受付の騎士に手渡した。

「確認しました。ミコト様は最後ですので自動的に7番になります。第4試合ですのでお待ち下さい」

「分かりました。」

俺は7番のカードを持ちながら城の中へと入っていくと廊下の一番奥に『本戦控え室』と書かれた扉が目に入った。

「ここが控え室か・・・。」

そっと扉を開けて中に入ると先程の爺さんや壁に寄りかかって両腕を前で組んでいる黒騎士、胡坐をかいて瞑想している魔術師の姿があった。　控え室に入ると同時に爺さんが話し掛けてきた。

「お主は残り物じゃったから7番だったな。　対戦を楽しみにしておるぞ！」

「貴方との対戦って決勝戦のことじゃないですか！」

「何故か勝ち進んでくるような気がしての。」

「大胆な発言ですね。」

ふと見ると壁際で腕を組んでいた黒騎士が真っ直ぐに爺さんの方を向いていた。

黒騎士は剣も鎧も真っ黒でフルアーマーな上にフルフェイスな防具を付けているので、男か女かも当然の如く分からないし、視線も何処を見ているのか分からなかったが何故か視線を感じた。

「其処の黒騎士、何処を見ている？　貴様の相手はこの俺だぜ？」

黒騎士はチラッと話しかけて来た男を見たが、興味がなさそうに元通り、壁を背に佇んでいた。

「ちっ、不気味な野郎だな・・・。なんとか言ったらどうなんだ！？」

今にも襲い掛からんとする中で闘技舞台のほうから声が聞こえてきた。

「それでは只今より武道大会本戦第1試合を始めたいと思います！！」

「「「「「「「ワァァァァァァァァ！！！！！！」」」」」」」

開始を宣言する声とともに観客席から盛大な拍手と歓声が聞こえてきた。

「それでは予選を勝ち残った8人の強者達の入場です。　皆様、盛大な拍手でお迎え下さい！！」

司会の声と同時に控え室から舞台へと続く扉が解放され次々と外へ出て行った。

「まずは前回・前々回の優勝者でもある、皆様ご存知の近衛隊名誉顧問レイモンド様！！　齢70を超える御高齢でありながら予選で剣を抜く事もなく秒殺で突破いたしました」

あの爺さんが盛大な拍手と歓声を浴びながら舞台中央へと足を進めていく・・・。

そうか、爺さんが酒場で噂になっていた前回の覇者であるレイモンドだったのか。

「続きまして、騎士隊見習いのバルック殿の登場です！！此方は危なげな場面が予選開始から多々ありましたが、運も味方してか無傷で決勝に勝ち進む事が出来ました」

身体にサイズがあっていない鎧を着込んだ少年が歓声を浴びながら舞台に歩いていくが・・・

『ズベシャッ！！』

舞台に続く階段で蹴躓(けつまず)いて石の舞台に顔面を強打し、拍手とともに湧き上がる盛大な歓声が瞬時に笑い声と心配する声へと変化した。

「思わぬハプニングがありましたが、続きまして謎の黒騎士の登場です。その全身を覆う鎧とは裏腹に俊敏な動きで相手を翻弄し、対戦相手ほぼ全ての武器を砕いての勝利となりました」

黒騎士は不気味な佇まいからガシャガシャと足音を立てながら舞台へと登っていった。

そのあまりの不気味さに観客は歓声を上げることなく静まり返っている。

「え、えー、続いて数少ないギルドランクS級であるガルザード殿の入場です。　ガルザード殿の二つ名は『破壊神』であり、その名の通り一切の手加減をせずに予選の対戦相手を叩きのめす試合でした」

先程、黒騎士に喧嘩腰になっていた男が大鉄鎚を頭上に抱え『ウオォォォオオオーーー！！』と意味不明な言葉を叫びながら舞台に上がって行った

「続いて予選を秒殺・・・いえ瞬殺で突破したギルドランクA級魔術師のログナート殿の入場です！　予選では開始早々周りにいる全ての選手を強力な風で場外に吹き飛ばし勝利を収めました」

ログナートは風の魔法で自分の身体を浮き上がらせると音もなく静かに舞台へと飛んで行った。

（へぇ～風の魔法にあんな使い道があるんだな）

（マスターも後で試して見ましょうか？）

（そうだな、少しは旅が楽になるかもな）

「続いて近衛魔術師隊所属のフィンケル殿の入場です。　此方は慎重に慎重を重ねた戦い方で惚れ惚れするような戦いを見せてくれました！」

先程まで瞑想していた魔術師も胡坐をかいた状態のまま、先程のログナートと同じ様に飛んでいった。

という事は2人とも風の魔術師ってことか。

「さて次は俺だな？度肝を抜いた登場にしてやりたいが」

「続いては旅の剣士ミコト殿の入場です。　最後の最後で予選とは思えぬ激闘を見せてくれました」

司会はこう言っているが、果たして完膚なきまで叩きのめしたアレが激闘と言えるのだろうか・・・。

色々と考えながらも俺は颯爽と舞台への道を歩き、階段を使わずにジャンプして舞台に上がった。

高さにして３ｍの高さをひとっ飛びした俺に、観客や他の選手から奇異の目が向けられる。

「それでは最後に騎士隊隊長タルカス殿の入場です！　前回はあと一歩で優勝を逃してしまいましたが、今回も頑張って頂きたいものです」

爺さんに次ぐ盛大な歓声をＢＧＭに余程自信があるのか、左胸だけをガードする胸当てを身に着け、槍を構えた隻眼の男が舞台に上がってきた。

「それでは此処に居る８人の戦士による武道大会本戦を此処に開幕いたします！！！」

最後に盛大な歓声と拍手を浴びながら俺達8人は舞台を降り、舞台の壁際に設置してある8箇所の椅子へと腰をおろした。
その中で騎士見習いのバルックだけは落ち着かない様子で立ったり座ったりを繰り返していたが、爺さんから檄が飛ばされていた。

「しっかりせんか！オヌシが此処まで来られたのは間違いなく実力があっての事じゃ！！　胸を張って、シャキっとしろシャキっと！！」

「は、はい！！」

いよいよ始まる世紀の一戦に、誰もが固唾を呑んで開始の合図を待っていた・・・。

第６９話　本戦に進む８人の猛者（後書き）

ミコトを除く7人の設定を如何するか最後まで悩みましたが、なんとか形にすることが出来ました。

次話は順調に行けば3日、遅くても5日以内には更新しようと思っております。

第７０話　本戦開始

俺達、決勝トーナメントに出場する８人を観客に紹介した直後、第１試合が始まろうとしていた。

「これより、第１試合を始めたいと思います。第１試合、レイモンド選手、バルック選手、舞台へと上がってください！」

爺さん（レイモンド）は場馴れしているのか威風堂々とした足取りで舞台中央へと進み、騎士見習いのバルックも若干緊張しながらもレイモンドの前に胸を張って立っていた。

「それでは試合を始めます。ルールは予選と同じ場外に落ちるか、戦意喪失した時点で負けになります。　更には武器を壊されたりしても負け、相手を殺めた場合は失格になりますので注意してください」

司会が舞台を降りると同時に、先手必勝とばかりにバルックが勢い良くレイモンドに向かって走って行った。

「相手が場馴れしていない素人の戦士ならまだしも、レイモンド殿相手では分が悪すぎるな・・・。」

「同感だ、ただ気になるのはレイモンド様は攻撃を避ける素振りさえ見せていない事だろうな。　これはもしかすると・・・」

「ああ、間違いなくレイモンド様の悪い癖が出るだろうな」

対戦が始まると同時にフィンケルとタルカスは逸早く勝負の行方を予測していた。

その間にも司会の男性は観客に分かるように大声で中継をしていた。

「お～っとバルック選手、試合開始と同時にレイモンド選手へと向かっていったーーー！！」

しかし次の一瞬で流れが変わることとなった。

レイモンドは目を瞑った状態で半歩、横に移動し突進して行ったバルックは赤いマントに飛び込んでいく闘牛の如く、場外へと一直線に向かっていった。

「ふっ此れで1回戦は終了だな・・・。」

誰もがバルックの場外負けを予測していたが、此処で意味不明な出来事が起きた。

なんと、バルックが場外へと足を踏み出した瞬間にレイモンドが手を伸ばしてバルックを受け止め、舞台中央に向かって投げ飛ばしたのだった。

「踏み込みが甘い！　もう一度チャンスを与える、本気で掛かって来い！！」

「やれやれ、やっぱり始まったか・・・。」

レイモンドの何が何やら分からない行為を見て、俺の対戦相手であるタルカスが溜息をついていた。

「どういうことですか？」

「レイモンド様は自分が気に入った相手が居ると、其れが何処であろうと訓練を付けたがるんだよ。　それが例え武道大会でもな」

「そういうことですか・・・。　2回戦の選手であるガルザードは半分、キレた表情をしていますね」

「ガルザードにしてみれば早く暴れたくてウズウズしてる時にあの

試合だからな、そりゃ怒りたくもなるだろうな」

観客の歓声もいつしかレイモンドを称えるものではなく、バルックを応援するような物に変わっていた。

「ハァハァ、こ、今度こそ・・・。」

バルックは既に十数度目かのチャンスを与えられ、幾度となく突進を繰り返し息が上がっていた。

「ほれほれ、如何した？もう疲れたのか？　若いのに体力がないのう・・・。」

「い、行きます！！　ヤアァァァァーーー！」

バルックが体力を振り絞った最後の一撃は運が良かったのか、それともレイモンドがワザと当てさせたのか、横腹に剣先が掠りながら本人（バルック）はうつ伏せに倒れ意識を失った。

「それまで！バルック選手、頑張りながらも1歩及ばず意識不明によりレイモンド選手の勝利です！！」

誰が見ても1歩どころか万歩ですら届かない状況でありながらバルックを称え、第1試合終了となった。

バルックは目立った外傷はないものの、医療魔術師の手によって体力回復の魔法を掛けられていた。

「それでは舞台を整え終わったので、第2試合を始めたいと思います。

第2試合は黒騎士選手とガルザード選手の試合です、両者舞台へと上がって下さい」

司会が声を発した瞬間に黒騎士は静かに立ち上がり、舞台を降りる途中だったレイモンドにすれ違い様に軽い会釈をし、ガルザードは『待ってました!!』と言わんばかりに左手の掌に右手を打ちつけながら舞台の中央へと上がっていった。

「両者、準備は宜しいですか?それでは武道大会2回戦、開始してください!!」

司会が舞台から降りる前にガルザードが大鉄鎚(おおかなづち)を高々と掲げながら、黒騎士に向かって突進していった。

「先手必勝!　油断大敵ィーーーーー!!」

黒騎士は猪突猛進のガルザードの方を見ないまま剣を腰の鞘から引き抜き、振り下ろされた鉄鎚をかわすと同時に後方へと受け流し、そのままの勢いでガルザードの二の腕を切りつけた。

「そんな小手先だけの攻撃など俺様の敵ではないわーーーー!!」

ガルザードは二度三度と鉄鎚で襲い掛かるが、その都度黒騎士の剣によって受け流され何度も同じ箇所を斬られて行く・・・。

「ミコトとやら、気づいているか?」

「ええ、黒騎士の剣は全て同じ箇所を集中して斬りつけていますね。この分なら少なくても、残り2回程度でガルザードの腕が上がらなくなるでしょう」

「ほう、其処まで見ていたか。　此れなら君との勝負に期待が持てそうだな」

「おっ?どうやら勝負が決まりそうですよ?」

俺がそう言った直後、ガルザードの腕から勢い良く血が噴出し持っていた鉄鎚を足元へと落とした。
其れを見計らってか今まで防御に徹していた黒騎士がガルザードの前に移動し、喉元に剣を突きつけた。

「ま、参った!!」

「それまで!　黒騎士の圧倒的な強さにより、第2回戦は黒騎士が制しました!!」

司会が試合終了を宣言して直ぐに黒騎士が舞台を降り、元の席へと何食わぬ顔で座った。
まぁフルフェイスメットなので顔は見えないのだが・・・。
対戦相手だったガルザードは場外にて回復魔法を掛けてもらいながら、舞台上では清掃係が舞台にこびり付いているガルザードの腕から噴出した血を綺麗にふき取っていった。

「舞台の準備が整ったようですね。　それでは第3回戦を始めたいと思います!ログナート選手とフィンケル選手は舞台へと上がって下さい。」

2人の魔術師は選手紹介時と同じ様に宙に浮いた状態で舞台へと上がっていった。

「第3回戦は風の魔術師の対決です。　それでは試合開始!!」

魔術師同士の戦いなので2人とも相手から距離を取り、魔法の詠唱に取り掛かった。

「この試合は如何見る?」

「2人とも空を飛べるので、場外負けはありませんね。　強いて言うならば、魔力が先に尽きたほうの負けという事でしょうか」
「的確な答えといえるが、一つだけ間違っている」
「なんです？」
「確かに場外負けは難しいが風の魔法で力負けしたほうが吹き飛ばされ、魔力が尽きる前に勝負は決するだろうな」

横に座っているタルカスと喋っていると不意に舞台のほうから強風が吹いてきた。
何があったのかと思い、舞台を見てみると2人の魔術師により打ち出された風の魔法が2人のほぼ中央で燻り合っていた。

「これじゃあ、先に根負けしたほうが中央で燻りあっている風の塊をまともに食らいますね」
「いや、フィンケルの勝利だな」
「何故？」
「ログナートの息使いを見てみろ、既に荒くなっているだろう？　其れに対してフィンケルはまだまだ余裕の表情だ。　奴は仮にも近衛魔術師だからな、魔力の量は半端じゃないさ」

タルカスに言われ、舞台の上を見ていると5分、１０分と時間が経つにつれ中央の風の塊は少しずつログナートに近づいていった。
それから更に１０分後、ついに魔力が切れたのかログナートが風の塊をまともに食らい、宙に浮く暇も与えられずに場外へと落ちていった。

「そこまで！　ログナート選手、場外によりフィンケル選手の勝利です」

次はいよいよ、俺とタルカスとの勝負だ・・・。

まだ戦ってもいないが、隣に座っているだけで強さが分かるほどの気を感じていた。

第７０話　本戦開始（後書き）

３試合の内容は特に伝えられるような事は無かったので１話に纏めました。

次の話はいよいよ主人公の出番です。

第７１話　対タルカス戦

武道大会本戦トーナメントの開会式が行なわれてから４時間が経過し、俺以外の選手による第１回戦（準々決勝）の３戦が終了した。
俺の相手である騎士隊隊長を勤めるタルカスは今か今かと勝負の開始時間を待ちわびている。

「これより第１回戦。最終の第４試合を始めたいと思います！」

いよいよ恐らくは苦戦になるであろう勝負が今まさに始まる・・・。

「ミコト選手、タルカス選手、舞台へと上がって下さい！！」

俺は剣の柄に手を置き、鞘から引き抜きながら椅子から立ち上がり舞台の中央へと歩いていく。
タルカスもまた、２ｍ近くもある長槍を自分と水平になるように構えながら舞台へと上がってきた。

「それでは両者、試合開始してください！！」

逸早く槍を構えて突っ込んで来るかと思いきや、その場から1歩たりとも動かずに俺の出方を注意深く目で追っていた。

「来ないんですか？俺はただの剣士ですよ？」
「剣の構え方が俺の知っている物とは全く違っているからな・・・」

見たことがない型であることは間違いなく、剣の構えというよりも刀の構え方をしているので其処からどのような剣戟がくるか予想も出来ないのであろう。

「来ないなら、此方から行かせて貰いますよ？」
「ぬっ！？」
俺は剣を上段に構えたまま袈裟切りの体勢でタルカスに向かって斬りつける。
「俺の見当違いか・・・。素人の剣だな、隙だらけだぞ？」
タルカスは一瞬溜息を洩らしながら、最初の一手を槍で薙ぎ払うと当身を喰らわすつもりか槍の刃とは反対の柄の部分で俺の腹部を狙ってきた。
俺は薙ぎ払われた勢いで剣の切っ先を舞台の石床へと付けてしまっていた。
傍から見れば攻撃に失敗したという風に目に映るだろうが、其れこそが俺の狙いであった。
「かかりましたね？油断大敵ですよ？」
タルカスは俺の最初の攻撃により、俺の言葉どおりの素人だと判断し剣で言う柄での当て身をしてくるつもりなんだろう。
俺は下も向けた剣を燕返しのような要領で下段から上段へと切り返しタルカスの持つ槍を掃いながら、剣で脇腹に打ち付けたのだが・・・。
いつの間にやら持ち直していた槍で見事に防御され俺が離れる隙を狙って攻撃してきた。
もし槍の刃先の部分で攻撃されていたとしたら俺でなければ完全な致命傷だっただろう。
「防御から一瞬のうちに攻撃に転じるとは・・・やりますね」

「俺も仮にも騎士隊長と言われる立場の人間だからな。　それにレイモンド様が見ている前で無様な姿は見せられんよ」

タルカスに言われ椅子に座るレイモンドを見ると厳しい目で此方を凝視していた。
今まで『我、関せず』としていた黒騎士も俺の動きを読むように顔を動かしている。

「それにしても、あの構え方から剣戟が来るとは思いもよらなかったな」
「俺も不意打ちを狙ったのに防御されるとは思っていませんでしたよ」

此処で気になる点が一つだけあった。
本気とは行かないまでもそれなりの力で攻撃している筈である。
それなのに咄嗟に防御したとはいえ無傷で立っていられるわけが無いのだが・・・。
まだ試合途中でありながら色々と考えてしまっているとタルカスが後ろ手に槍を構えて突進してきた。

「こんな時に考え事とは感心しないな。　今度は俺がこの言葉を使う番だな、油断大敵ーーー！」

柄の長い槍から繰り出される高速の突きの数々に俺はかわすので精一杯だったのだが、俺が攻撃したわけでもないのに突然タルカスが脇腹を押さえて蹲ってしまった。

「ウグググググ・・・」

俺は苦悶の表情で蹲っているタルカスの首筋に剣を置き『降参する

か？』と尋ねたが帰ってきた言葉は否定だった。
数分後に額に脂汗を浮かべながら立ち上がってきたタルカスだったが、槍を構えた体勢のまま微動だにすることはなかった。
不思議に思い審判が近づいていった次の瞬間、タルカスが立ったまま気絶している事が分かった。
此れにより俺の勝利が確定し、タルカスは数人の医療魔術師の手によって集中治療されている。
後日分かった事だが一見、俺の攻撃を完璧に防御して見せたタルカスだったが実際には肋骨が数本砕け、その骨の破片の幾つかは内蔵に突き刺さり、あと1歩治療が遅れれば命すら落としかねない状態だった事がわかった。
左のほうから強い視線を受けて振り向くと其処には心配そうでもあり、怒り心頭でもある表情のレイモンドが腕を組み、椅子に座った状態で地面に寝そべって治療を受けているタルカスを見据えていた。
そうこうしている間に数人がかりで治療されていたタルカスが目を覚まし、自分の敗北を審判から聞かされたあとレイモンドに頭を下げ舞台を降りていった。

「大変お待たせいたしました！　これより準決勝第1試合を始めたいと思います！！」

さて、いよいよ注目の準決勝戦が始まる。
此れにより、決勝に進むのはレイモンドになるのか正体不明の黒騎士になるのかが決定する。
恐らくは実力者同士の戦いになるであろう・・・。
これは目が離せないな。

第７１話　対タルカス戦（後書き）

なんか最初に設定した内容と中身が食い違っているような気が・・・

第７２話　２人の達人級（前書き）

お待たせして申し訳ありません。

やっと完成し更新することができました

第７２話　２人の達人級

『キンッ！キンッ！　ギリリリリ・・・・・。ガキンッ！』

対タルカス戦が終了してから約５分後に準決勝第１試合、レイモンド対黒騎士戦が始まったのだが・・・

試合開始直後の十数分は２人とも常に一定の間合いを保ちながら相手の出方を見ているようだったが、ほぼ２人同時に剣を抜きながら舞台中央へと走って行き、剣での打ち合いを始めた。

片やレイモンドはバルック戦で抜く素振りも見せなかった腰の剣を躊躇なく引き抜き、黒騎士もガルザード戦で抜かなかった、もう片方の剣を抜き腕に装備している盾を投げ捨て防御無視での二刀流で戦っている。

傍から見ればレイモンドの剣１本対黒騎士の剣２本の戦いなので黒騎士のほうが有利に見えるが、レイモンドも剣一本で難なく黒騎士の攻撃を全て防いでいた。

剣での打ち合い開始から既に３０分は経過しているのだが、２人の体力には底が存在しないのか最初と同じペースで息を切らせてないどころかレイモンドの顔には若干の笑みがこぼれていた。

最初の１０分間は闘技場に集まった観客達も大歓声で応援していたのだが、同じ光景を３０分も見続ければ流石に飽きて来る。

俺も開始直後は達人級（マスター）同士の戦いという事で目が離せなかったが、今は次の対戦者である魔導騎士のフィンケルと和やかに会話していた。

「一体、何時まで打ち合っているんだ？あの２人は・・・」

「仕方ありませんよ。レイモンド様は私達、近衛隊が隊長以外の全

員で掛かっても倒せない御方なんですから」
「其れを言うなら互角に戦っている黒騎士は近衛隊以上の強さを持っているという事になりますよね？」
「認めたくはありませんが、その通りなんですよね」
此処で試合には関係ないが、気になることがあったので少し聞いてみることにした。
「なぁ、開会式のときに空を飛んでいたが、あれはどうやったんです？」
「突然ですね・・・。あれは風の魔法の応用ですよ」
「風の魔法？俺の知り合いに風属性の魔術師が居るんだが、誰にでも空を飛ぶことは可能なのか？」
俺の知り合いというか俺本人の事なんだが・・・・・・。
「修行次第で使えるようになるとは思いますが、魔力量がある程度は必要になりますよ？」
「そういえばフィンケルの対戦相手だった、ログナートも空を飛んでいたよな」
「あの方の魔力値も一般の魔術師と比べれば多いほうでしたね。私の魔法にあれだけの長い時間、耐えられたのですから」
「実際にはどうやって飛んでたんだ？」
「理屈としては簡単な事ですよ？　身体の周りに風の膜を作って外気との遮断をし、自分の体重を“０”の状態まで持って行き、あとは進みたい方向とは逆の方向に魔力を放てばいいのですから」
「簡単に言うが、出来るまでにどれだけの時間が掛かったんだ？」
「私の場合は１年半でしたね。　すいませんが、ログナート戦で消耗した魔力を回復させたいので精神集中に入らせていただきます。貴方からも並々ならぬ強さを感じましたので全力で戦うためにも

私の魔力を回復させなければ・・・」
「分かりました。試合を楽しみにしてますね」

フィンケルは声を出さずに首を縦に振ると、座禅を組んでいるかのような体勢で目を瞑り、微動だにしなくなった。
その頃、舞台上でのレイモンドと黒騎士戦はというと・・・。

「オヌシ、中々やるのう！　近衛騎士隊長以外で我を此処まで梃子摺らせるとは長生きはするもんじゃ」
「・・・・・・・・」
「だんまりか？　まぁいいじゃろ、体力の続く限り打ち合おうぞ！」
黒騎士はレイモンドに応えたのか、ただの素振りなのかほんの少し首を縦に振っていた。

『キンッ！キンッ！キンッ！ギリリリリリ・・・・』

数秒の間だけ剣戟が止んだと思ったが、直ぐにまた舞台中央での打ち合いが始まっていた。

「爺さん噂に聞いていた通り、中々手ごわそうだな」

さてと、フィンケルの魔力量がどれだけあるのかルゥに聞いてみることにするか・・・。

（ルゥ、頼みがあるんだが構わないか？）
（マスターの考えている事は分かります。それでは計ってみますね）

ルゥが黙り込んでから数秒が経過した後、不意に念話が届いた。

（魔力値計り終えました。フィンケルさんの魔力量はマスター流に

いえばクラス２０ぐらいですね）
（クラス２０か・・・それなりに強いみたいだな）
（そんな事はありませんよ？　マスターの魔力値が多すぎるのでそう思うだけです。　一般的な魔術師の魔力はクラス５～１０が普通なんですよ？）

『ギンッ！ギンッ！ガギン！！』

ルゥと話していると、先程までの剣戟の音とはまるで違う怪しげな音が聞こえ出した。

「ふむ、どうやら決着が着きそうですね」

俺の横で精神集中を行なっていたフィンケルが目を開け、舞台を見ていた。

「如何して決着が着くと？」
「レイモンド様か黒騎士の剣かは分かりませんが、剣の耐久度が損なわれたようですね」

そうフィンケルと話していると・・・。

『ガキンッ！ガキンッ！ビキッ！バキンッ！』

聞きなれない音が聞こえたと思うと、舞台でレイモンドと打ち合っている黒騎士の剣の１本が根元から砕け散り、もう片方の剣も縦に大きな罅（ひび）が刻まれていた。

「それまで！　激戦の末、準決勝第１試合の勝者はレイモンド様になりましたーーー！」

司会の言葉を聞き、黒騎士は片膝を落とし舞台上に項垂れ、レイモンドは勝ち名乗りを上げたあと黒騎士に近づきそっと肩に手を置き声を掛けているようだった。

「それでは続きまして準決勝第2試合、フィンケル選手対ミコト選手の試合を始めたいと思います！」

さて、漸く俺の試合が開始されようとしていた。

第７３話　魔法対決の行方は（前書き）

色々と悩みました・・・

第７３話　魔法対決の行方は

レイモンドｖｓ黒騎士の大激戦の準決勝が終了して5分後、俺とフィンケルとの第2試合が始まろうとしていた。
司会に呼ばれ俺とフィンケルが舞台に上がったのだが、魔力温存のためかフィンケルは開会式とは違い自分の足で舞台へと上がってきた。

「それでは、これより本日最後となる準決勝第2試合を開始いたします！！」

俺は司会の開始の合図とともに先手必勝として剣を抜きながらフィンケルに突進していった。『本日最後』と言う事は決勝戦は明日に持ち越されるのか・・・

「魔術師相手なら剣での当身を食らわせて決勝進出といくか」
「貴方の魔術師に対する考えは正しいとは思いますが、私をあまり舐めないほうがいいですよ？」

フィンケルは俺にそっと呟くと右の掌を俺のほうに向けた。

（マスター、風の魔法がきます！　左右どちらかに避けてください）

ルゥからの咄嗟の念話を聞き、急いで右方向に身体を翻すと風の塊が先程まで立っていた場所を通り過ぎた。

「良い勘をしてますね。　不可視の風を避けられるとは思いませんでした」
「風魔法で迎撃か、やるな」

「貴方は私の魔法で何も出来ずに場外負けになる運命です」

フィンケルの言葉どおり、瞬間的な詠唱をしているのか避ける方向全てに風の塊が飛んできている。

ついさっきまでは一撃を叩き込もうと舞台の中央まで走り寄ったにも拘らず、風をかわしながら移動していたため気が付けば後１ｍ下がれば場外負けというところまで追い込まれていた。

（仕方ない・・・。　魔力、クラス３０解放だ！）

「何を悪あがきしているか分かりませんが、これで試合終了です」

トドメとばかりにフィンケルから風の塊が打ち出されるが、俺の目の前で霧散した。

というより同等の風魔法をぶつけて相殺したのだが・・・。

「なっ！？　何があったんだ？」

「先程の言葉、そっくりそのまま、お返しする」

俺は右手を前に突き出し、ウインドの魔法を唱えると先程打ち出した魔法とは比べ物にならない風の塊がフィンケルに向かって襲い掛かっていった。

「こ、この波動は風の魔法か！？　相殺しなければ・・・・」

フィンケルは俺の魔法をログナート戦と同じ様に相殺しようとするが、自身の魔力よりも俺の魔力のほうが上回っているため、相殺されずに俺の魔法によって場外の方向へと吹き飛ばされてしまった。

「グウゥゥゥ！！？　このままでは場外負けになってしまう。浮かばないと」

「悪いがそうはいかないな。　油断大敵だ」

俺は風の塊を追いかけるようにしてフィンケルの直ぐ傍まで移動し、鞘を被せたままの剣で思いっきり打ちつけた。
と思ったのだが・・・
剣での攻撃は何の抵抗も感じられずに空を切ることとなった。

「いや～～危ない危ない。　まさか貴方が魔法を使うとは思いも寄りませんでしたね」
「なっ！？」

声がした方に目を向けると、何時の間に移動したのか俺の真後ろに立っていた。

「私の動きが見えなかったことに疑問を感じているようですね」
「いつの間に俺の後ろに？」
「なぁに風魔法での加速を使ったまでですよ。　貴方が私と同じ風魔法を使えると分かった以上、油断はできませんね」

フィンケルは風魔法の加速という方法で俺の周囲を移動し複数の風の塊を俺のいる方向に打ち出していく。
その塊を俺も負けじと高速移動でかわして行くため、中々勝負が決まらなかった。

「風ｖｓ風じゃ此方に分が悪いな」
「如何しました？　避けているばかりでは勝ち目はありませんよ？」
「仕方ない・・・」
「此方の体力と魔力を消耗させる作戦ですか？　私を普通の魔術師と一緒になさらない方が良いですよ」

俺は一つの作戦を試すために体力が切れた振りをして舞台の中央で

息切れするという演技をフィンケルに見せた。

「如何やら体力が先に切れたのは貴方のようですね。それでは此れでトドメです」

フィンケルは馬鹿正直に俺の前へと姿を現し、風の塊を放ってきた。

「かかった！」

俺は風の塊をしゃがみこんで避けると同時に舞台に掌をついて、とある魔法を唱えた。

そして目で上手くいったことを確認するとフィンケルとの間合いを詰める。

「まだ其れだけの体力を残していましたか。　しかし今度こそ・・・！？」

フィンケルは俺が間合いを詰めた事により後方に移動して魔法を唱えようとするが何故か移動することが出来ずに尻餅をついてしまうことになる。

俺はその隙を見逃さず、瞬時にフィンケルの前へと移動すると今度こそ剣の柄で当身を食らわせ意識を奪う事に成功した。

「それまで！　フィンケル選手気絶によりミコト選手の勝利が決定しました。

　これにより翌日の決勝戦はレイモンド選手対ミコト選手で争われる事が決定いたしました！」

会場にいる観客達も予想に反した結果に静まりかえっていたが数秒後には盛大な拍手で勝者である俺を称えてくれていた。

そして観客の声を目覚ましにして気を失っていたフィンケルが意識を取り戻していた。

「う、う～ん一体何が・・・。　はっ試合は！？」

「残念だが、お前の意識不明によりミコトの決勝進出が確定した」

「おっ？　気がついたか、身体は大丈夫か？」

フィンケルは最初『心此処にあらず』といった表情で此方を見てきたが、瞬時に覚醒し俺に問い質してきた

「ミコト殿・・・最後に私に対して何をしたのですか？」

「ああ、あれは風魔法を避けると見せかけて舞台ごと足を凍らせて動きを封じたんだよ。　俺が間合いを詰めた事で距離を取るように仕向けたからフィンケルは後方に移動しようとした。　が、舞台と一緒に凍らされた足の所為で飛ぶことも移動することも出来なかったお前は俺の当身を食らって気絶したという訳だ」

此処で黙って聞き役に転じていたタルカスが未だ脇腹を押さえながら話しかけて来た。

「ミコトは剣士ではなかったのか？」

「一言も『自分は剣士だ』と言った憶えはありませんよ？　周囲が俺の姿を見て勘違いしただけです」

「理由は如何であれ、私が負けたことは紛れも無い事実・・・鍛錬のやり直しです」

そして俺達は観客の拍手・声援・野次をＢＧＭに舞台を後にした。

控え室に戻る途中に擦れ違ったレイモンドの意味深な笑みが気になるところだが・・・。

そして司会から『決勝戦は明日の１１時から開始』と告げられ武道大会会場をあとにした。

第７３話　魔法対決の行方は（後書き）

小説の王道と言うべきか武道大会決勝戦はミコトｖｓレイモンドとなりました。

第７４話　決勝戦前日の夜

武道大会会場を出て宿に戻る途中、殆んどの街の住民から拍手や声援で迎えられたが一部の住人からは親の仇を思わせる、恨みが篭った視線で向けられた。

（たぶんタルカスとフィンケルに賭けた奴らだな？　幾ら賭けたかは知らないけど・・・）

俺は恨みの目を気にしないように宿屋へと戻ると、酒場に集まっていた常連達に歓喜の声で迎えられた。

「おぅ兄ちゃん、決勝戦進出だってな！　期待してるぞ！！」

俺が酒場で顔を見回すと、１人だけ顔を青痰で腫らしているオジさんが目に入った。

「その顔は如何したんですか！？　まさか喧嘩？」
「ちょっとな。　言うに已まれぬ事情って奴だ。イテテテテテ」
「そいつは生活資金を全額、兄ちゃんに賭けた事がバレて奥さんにやられたのさ」
「おい！　それは言わないって約束しただろうが！」
「そうだったか？　憶えてねえや。ハッハッハ！！」

酒場に居る常連達は既に酔っ払っているらしく、笑いが途絶える事はなかった。
俺は酒場を通り過ぎ、宿屋のほうに向かうとせっせと働いているレイシアが目に入った。

「あ、ミコトさん！決勝進出おめでとうございます。　腕によりをかけて力のつく晩御飯を作りますので楽しみに待っててくださいね」

レイシアに挨拶を済ませると、ルゥに聞きたいことがあるので急ぎ足で自室へと向かった。

自分の部屋に辿りつくと同時にルゥと念話で会話をし始めた。

（ルゥ、確かめたい事があるんだが構わないか？）

（如何したんですかマスター？　私に答えられる事なら、何でも聞いてください）

（ルゥも俺の中で見ていたと思うが準決勝第１試合の戦いでレイモンドの攻撃で黒騎士の剣が砕かれただろ？　ルゥの場合でも考えられると思うか？）

（一般的な剣では砕く事なんて不可能に近い事ですが、達人級の剣士が相手だと考えられますね）

（そうか・・・。　如何すればいいんだ？俺はこんな形でルゥを失いたくはないぞ）

（ありがとうございます。　マスター、砕かれるのを回避する方法は無い訳ではありません）

（如何いうことだ！？　勿体ぶらずに教えてくれ！）

（分かりました。　少し難易度が高い方法なんですがマスターならたぶん大丈夫でしょう）

ルゥは一旦おいて、その方法を口にした。

（それではマスター、潜在魔力を魔法という形で放出せずに掌に溜めるようにしてください。　魔力に覚醒するために行なった訓練を思い出していただければ宜しいです）

俺は言われたとおり訓練を思い出すようにして傷を治療する感覚で

魔力を掌へと集中した。

（まさか1回で成功させるとは・・・流石ですね。　それでは掌の魔力を維持したまま剣を握り魔力を剣に流し込むようにしてください）

（魔力を剣に流し込む？）

綿菓子を作るようなイメージで剣を割り箸に、魔力を綿に換算して纏めてみると・・・。

（マスター、上手ですね。　これなら剣を砕かれる心配はありません）

（こんなもので構わないのか？）

（はい、マスターの剣に纏わせる魔力量によって、剣の威力も強度も此れまでの何十倍も強化されましたので折れる心配はほぼ１００％ありえなくなりました。　それに慣れてくれれば風属性の魔力や火属性の魔力を纏うことによって魔法剣として扱う事も出来ますから、かなり有利になりますよ）

剣に纏わせていた魔力を解除すると剣を元の鞘へと戻した。

（剣に魔力を纏わせる行為は最上級の難易度があるはずなんですが、簡単にこなしてしまいましたね）

（そんなに難しい事なのか？）

（習得するためには魔力の潜在値が多いことが必要不可欠なのですが、常に魔力を流していなければなりませんので一般の魔術師だと直ぐに魔力切れを起こしてしまいます。　マスターの場合は魔力の底が見えませんから仮に1日中、魔力を纏っていても大丈夫でしょう）

（なんか、俺ってますます人外になって行くような・・・）

（マスターは元々、人ではありませんから大丈夫ですよ）
（貶されている様な、そうでない様な複雑な気分だ）
（それに改めてマスターの魔力を測ってみましたが、１％たりとも魔力が減っていませんから1日中と言わず常時纏っていても大丈夫ですね）

ルゥと先程の事で会話していると、トントンと部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「ミコトさん、起きていますか？　御夕食の準備が整いましたので降りてきてください」
「分かりました。今行きます」

俺はその後、優勝の前祝とも取れる大量の食事で英気を養い、もう一つ試したいことがあり足早に部屋に戻ってきた。
試したいこととは準決勝第二試合が開始される前にフィンケルに聞いた、風の魔力を纏って空中に浮かぶ方法である。
先程の剣に魔力を纏わせることの応用で会得できないかと思っていたのだが宿屋の部屋では狭すぎて練習を行なえないので何時もの様に亜空間内で練習することにした。

「此処なら外界とは遮断されるし周囲に迷惑が掛からないだろう。
それに鍛錬の邪魔をする風などの大気もないから、より早く会得できるような気もするし」

そう言って実際に試してみたのだが、やはり聞くことと実践する事は全然違い何の成果も挙げられないまま、ルゥからの『翌日に支障が出るから』という苦言で修行は取りやめになり楽しみにしていた空中浮遊は延期となってしまった・・・。

そして数時間後、待ちにまった武道大会決勝戦が幕を開ける。

第７４話　決勝戦前日の夜（後書き）

いよいよ次で武道大会編は終了です。

武道大会終了後、数話を挟んで次の異世界へ旅立ちます。

第７５話　武道大会決勝　【前編】

そして瞬く間に夜が明け、とうとう決勝戦当日になった。

「それでは只今より、第３８回イスラントール武道大会決勝戦を行ないます！！」

司会の言葉により、此れまでにない観客席から零れ落ちそうな大歓声が沸きあがった。

「決勝戦を前に此処まで勝ち上がってきた選手を紹介いたします。１人は皆様、ご存知の通り前回の優勝者でもある近衛騎士名誉顧問であらせられるレイモンド選手！」

レイモンドは名前を呼ばれると、控え室から舞台への道を穏やかな顔で観客席に手を振りながら、ゆっくりと歩んでいった。

「続きまして、もう一人の決勝戦進出者は無名にも拘らず、騎士隊長タルカス選手や魔導騎士フィンケル選手を難なく打ち破ってきた若き剣士、ミコト選手ーーー！！」

俺も先程のレイモンドと同じ様に手を振りながら舞台へと向かって歩いていったが、レイモンドほどの歓声は受けられなかった。

「それでは選手が出揃ったところで泣いても笑っても最後の試合となる決勝戦、開始してください！」

司会はそう言うや否や、駆け足で舞台から降りていく。

直ぐに飛び掛ってくると思い最初は防御に徹しようと思っていたの

だが、レイモンドは剣こそ抜いているが掛かってくる気配はまるでしなかった。
防御の構えを解かずにレイモンドを見ていると、不意に何の前触れもなく話しかけて来た。

「オヌシが決勝の相手とは些か運命のような物を感じるの～～」
「何を言っているのですか？」
「いやな、たまたま開会式に寝坊して列に並んでいた時、我の真後ろにいるオヌシから只ならぬ気配がしておったのじゃよ。　我は今年の武道大会こそは強者と戦いたいと願っておったからのう、願いが通じたという訳じゃ」
「いえいえ、まだ分かりませんよ？戦い終わってみて、落胆するかも知れないですよ？」
「なぁに、謙遜する事はない。我が手塩に育てた一番弟子である、タルカスを呆気なく倒したオヌシなら我も久しぶりに本気で戦えるというものじゃ！」

本気でって黒騎士の時の剣捌きも手加減していたというのか？
レイモンドが言い切ったと同時に、屋根の無い屋外の解放された舞台に居るのにも拘らず、黒騎士戦でも感じたことの無い強烈な圧迫感を感じた。

「そういえばオヌシはフィンケル戦で魔法を使っていたようじゃが、我が年寄りだと思って遠慮しなくても良いぞ？　持てる力全てを使って、全力で掛かってくるがいい！」

誰が今の現状を見て、相手が唯の年寄りだと感じることが出来るというんだ！？
言うなれば巨大な山が俺の眼前に聳え立っているかのようだった。
遠慮なく魔法を使ってもいいとは言うが、唱えようとした瞬間に出

来た隙に俺の敗北が決まるだろう。

「如何した？　来ぬのなら此方から行くぞ！」

黒騎士戦の時とは違う、幅広の剣を関節を取られないように内手に構え、俺へと掛かってきた。

『ギィン！ギン！キィン！』

俺も咄嗟に腰の鞘から剣を引き抜き、レイモンドの剣を受け止める。

「クッ！？重・・・？」

爺さんとは思えないほどの、重い剣が受け止めた剣に圧し掛かった。

レイモンドの実力を知るために敢えて最初から魔法剣は使わずに剣だけでの勝負を試みたのだが・・・。

「ほう、我の初撃を簡単に受け止めるとは・・・予想通りのようだな」

レイモンドは軽い笑みを浮かべると、次々と剣戟を打ち出してきた。

『ギィン！キンッ！ガギィン！』

「防戦一方か？我を年寄りじゃと思って、手加減する必要など無いのじゃぞ？」

手加減どころか攻撃する暇が無いほどのラッシュが次から次へと連続して襲ってくる。

俺は一時、言い訳が出来る高さまでジャンプし、そのまま身体を捻らせながら距離を取った。

レイモンドまで１０ｍの距離からフィンケル戦のような中威力の風弾を打ち出し、自分自身は風弾の影に張り付きながら、レイモンド

へと突進していく。

「これがフィンケル戦で見せた風の魔法か」

レイモンドは直ぐ傍まで魔法が迫っているにも拘らず、避ける素振りさえ見せては居なかった。

「ハァッ！！」

まるで俺の手が読まれているかのように、風弾を縦一文字に両断し、その勢いで風の陰から不意打ちしようとしていた俺に剣を振り下ろしてきた。

「作戦としては、まあまあじゃったが・・・その程度では我には絶対に勝てぬぞ！」

予想に反する大したことの無い攻撃による怒りか、途轍もない殺気がレイモンドの身体から発せられた。

『手加減か・・・だからといって全力で攻撃してしまっては剣とか鎧とか関係無く殺してしまうからな』

色々と考えていると剣の柄を伝ってルゥからの念話が頭の中に響き渡った。

（マスター、お言葉ですが対戦相手は達人級の剣の使い手です。力を抜いた剣では逆に失礼になると思います）

（そうは言うが俺にレイモンドを殺せとでも言うのか？）

（いえ、確か大会規定では相手を場外に落としたり、武器を折った場合でも勝敗が決まりますよね？）

（其れはそうだが、相手が簡単に場外に落ちてくれるタマだと思うのか！？）

「勝負の最中に何を考え込んでいるかは知らないが・・・我も舐められたものだな！」

レイモンドは最初の攻撃とは段違いな速度のある錬撃を俺へと繰り出してくる。
俺もスピードで対応し剣戟の全てを受け止めたり、受け流したりしているが、相手の気迫により1歩、また一歩と後方に下がっていった。

（マスター、昨日魔法剣を習得しましたよね！？）
（ああ、練習していたアレか・・・）
（剣に魔力を注ぎ込み、強度と攻撃力を増幅させた剣で相手の剣を圧し折ってください）
（やっぱり、其れしかないのか？）
（はい。それに今のまま攻撃を受け続けていると私自身が逆に破壊される可能性が浮き上がってきます。　そう、黒騎士の剣のように・・・）

俺はルゥが『黒騎士の剣のように破壊される』という言葉で決心がつき、魔力を解放した。

「おっ？目の色が変わったな、何をするつもりだ？」
「爺さん・・・正直俺はあんたの事を殺したくないと思って手加減していた。　此れから俺の最大の攻撃を放つ！　死にたくなければ全力で防御しろ！！」

俺は目の前に居る爺さんに、そう言い放つと剣を構えなおした。

第７５話　武道大会決勝　【前編】（後書き）

スランプに陥っているのか自分の『書きたい』と思っていることが文章化できない・・・

色々と書いているうちに長くなってしまったので前編・後編に分けることにしました。

後編は未だ未完成ですので、もう暫くお待ち願います。

第７６話　武道大会決勝　【後編】（前書き）

お待たせいたしました！

武道大会最終話が完成いたしました。

第７６話　武道大会決勝　【後編】

武道大会決勝戦が開始されてから凡そ1時間あまりが経過したが、互角の攻防が続いており、どちらも相手に勝負の決め手となる決定打を与えられずに居た。
俺も体力は無限だが、目の前に居るレイモンドという爺さんも人間とは思えないほどの強さと並外れた運動神経を見せ付けていた。
このままでは勝負がつかないと判断した俺は爺さんを倒す事ではなく、魔力を解放して剣に纏わせる事で魔法剣とし、爺さんが装備している剣を砕く事に方針を切り替えることにした。
かといって全力で攻撃しては、爺さんを殺してしまう懼れがあるので事前に忠告する事にした。

「爺さん・・・。　正直、俺はあんたの事を殺したくないと思って手加減していたが、このままでは一向に勝負がつかない。　此れから俺の最大の攻撃を放つ！死にたくなければ全力で防御しろ！」
「ほう？すると、今までは手加減していたということか！？　我も舐められたものじゃな！」

レイモンドは俺の『手加減』という言葉に反応したのか、剣を持つ手を震わせながら殺気ともとれる闘気を俺へとぶつけてきた。

「このレイモンド、老いても剣士の端くれ！手加減されるなど、もってのほかじゃ！！」

『やはり相手のプライドを傷つけてしまっていたか』と考えていると。

「だが・・・。」

「ん！？」
「オヌシの本気での攻撃を見たくなった。その一撃に全てを賭けるという訳じゃな？」
「ああ次はいわば捨て身の攻撃、防御など全く考えていない最後の攻撃です。　失敗すれば俺の負けは確実でしょう」
『馬鹿な事を申すな！』と怒鳴られる覚悟をしていたが、返って来たのは盛大な笑い声だった。
「グワッハッハッハ！気に入った。　オヌシの剣、我が全力で受け止めよう！その代わり、その攻撃が我に通じなかった場合は覚悟は出来ておろうな？」
「勿論ですよ。　ただ先程も言ったとおり、全力で防御してくださいよ？」
「分かっておる！　安心して打ち込んで来い」
了承を得たところで、俺はレイモンドから距離を取り舞台の端まで歩いていった。
相手に背中を向けて歩き出した時、襲われる危険性も多少は考えたのだが流石は近衛騎士名誉顧問といったところか、微動だにせずに元の位置で防御の構えを取っていた。
最初はクラス５０の魔力を剣に纏って攻撃しようと考えていたのだが、それでも少ないかもと考えクラス１００の魔力を出す事にした。
次に宿屋の自室で練習しておいた、剣に魔力を纏わせるといった行為を始めると次第に白銀の剣が俺の魔力を吸収し、刀身が金色に輝き始める。
魔力を放出させながら静かになっていた周りを見てみると、観客達は何が始まるのか分からずに固唾をのんで舞台に視線を釘付けにし、舞台の周りに配備されている治療を担当する魔術師は俺の魔力に当

てられたのか、だらしない格好で地面にしゃがみ込んで唸っていた。

「我は剣士じゃから魔法というものは分からぬが、大気が震えておるの～～～」

「長らくお待たせ致しましたが、そろそろ行きますよ?」

魔力によって金色へと変化した剣を上段に構え、体勢を中腰にして構えを取る。

「なるほど隙だらけじゃな」

「攻撃を重視した構えはこうなんです。では行きますよ?全身で防御してくださいね」

レイモンドは俺の言葉を聞くと、緩んだ口元を締め、身体を屈め剣を盾の様に前方へと突き出してしゃがみ込んだ。　どんな攻撃が来るのか予想しているのか、頭は剣の延長上には配置されていない。

俺はその様子を見て安心していた。

理由はというと剣を砕いた後、延長上に頭があると首を刎ねてしまう恐れがあるからだ。

爺さんが身体全体で防御している事を再度確認した俺は精神を落ち着かせると剣を構えたままレイモンドに突進し剣を打ちつけた。

試合が始まってから凡そ1時間もの間、散々打ち合ってきたレイモンドの剣が呆気ないほど軽々と根元から砕け散り、打ち付けたその威力は剣を砕けても収まらず衝撃波がレイモンドの腕を掠め闘技場の壁へと飛び、轟音を立てて壁の一角が砕け散っていた。

あまりの威力にルゥの心配をしたが、傷一つ無い状態で元通り白銀の剣として手元にあった。

審判も一瞬何があったのか分からないような表情で見ていたが、我に返り動き出していた。

「それまで！レイモンド選手の剣が砕かれた事により第３８回イスラントール武道大会優勝者はまさかの大番狂わせ、無名剣士ミコト選手に決定いたしましたーーーー！！」

その直後に舞台を取り囲んでいる観客席から、俺を称える盛大な拍手と歓声が零れ落ちそうなほど寄せられた。
俺は歓声に答えながらレイモンドの方を見てみると、思っていたよりも腕の傷は深いらしく魔術師４人がかりで治療に当たっていた。

「爺さん、大丈夫か？」
「何のこれしき！掠り傷に過ぎぬわ」

レイモンドは笑いながら起き上がろうとするが・・・。

「レイモンド様！動かないで下さい。　治療に専念できません」
「たかが掠り傷ごときで大袈裟じゃのう」
「大袈裟じゃありません！　傷は骨を掠めているんですよ！？最悪、剣が持てなくなる可能性だってあるんですから・・・」

魔術師達は治療魔法の錬度が低いのか、４人がかりでも血を止める事で精一杯のようだった。
俺は魔術師達を見かねて魔術師の１人を押しのけてレイモンドの治療に参加する。

「ちょ、ちょっと！？　治療の邪魔をする気ですか！」
「お前らの治療じゃ手遅れになってしまう。　俺に任せろ」

俺が治療をすると言っても食い下がらない魔術師を無視して掌をレイモンドの腕へとそっと差し伸べる。

「ヒール！」

俺が回復魔法を唱えると、まるで巻き戻しをしているかのように腕の傷が塞がっていき、数秒後には傷があったことさえ分からないほど、綺麗に治療されていた。

「傷は治しました。今までどおりに剣を振るう事が出来る筈です」

その様子に散々文句を言っていた魔術師は目が点になったように立ちすくんでいた。

「ふむ。違和感も感じられぬし、力の入れ具合も問題ない。すまんなワシの方こそ舐めておった、正直オヌシの剣戟で寿命が縮むかと思ったわい」

「それ以上、寿命が縮んだら不味いでしょうに・・・」

「違いない、ワァッハッハッハ！」

その後、重傷者は出したものの試合中1人の死者も出さずに武道大会の閉会式が終了し、俺は5万リル、レイモンドは3万リル貰い会場を後にした。

余談ながら闘技場を出る時にレイモンドやタルカス、フィンケルの近衛騎士や魔法騎士から『ぜひ国に仕官を！』や『近衛騎士隊に入隊を』と散々声を掛けられたが“やらなければならない事がある”の理由で断り、その場を後にした。

第７６話　武道大会決勝　【後編】（後書き）

あと2、3話ほど挟んだあと次の精霊が待つ世界へと旅立ちます。

閑話？　黒騎士（前書き）

やっと黒騎士登場の回から構想を練っていた閑話が完成いたしました。

黒騎士の正体が気になっている読者様も少なからず居ると考え、この話を作成しました。

閑話？　黒騎士

準決勝戦が終了した後、城内のとある控え室にて1人の青年が黒い鎧を脱いでいた。
すると其処へ青い鎧を全身に見に纏った厳つい男が兜を小脇に抱えて話しかけて談話しだした。

「ふぅ～」
「ケイアス様、御奮闘でしたがあと一歩及びませんでしたね」
「ん？ロウエンか、いや師匠と呼ぶべきかな？」
「ロウエンで結構ですよ。　してレイモンド卿との対戦の手応えはいかがでしたか？」
「やっぱり強いね。全然敵わなかったよ」
「俄仕込みの訓練にしては良いところまで行けたんじゃないですか？」
「お世辞は言わなくてもいいよ・・・対戦した僕が一番良く分かっているからね」

青年と全身鎧を身につけた男が会話していると別の軽鎧を着た男が脇腹を押さえながら控え室に入ってきた。

「タルカス、具合悪そうだな・・・大丈夫か？」
「はい。なんとか」
「タルカスにしては呆気ないほど簡単に負けたんだな」
「俺も今年こそは優勝を狙って決勝戦でレイモンド様と戦うつもりだったんですが・・・」
「まぁね、僕達の間でも決勝戦の組み合わせの予想はレイモンド卿ｖｓタルカスだと思っていたからね」
「おや？御自身ｖｓレイモンド卿の決勝戦は考えられなかったので

すか？」
「一朝一夕の訓練で其処までいけるほど武道大会は甘いものじゃないよ」

3人の男達が武道大会の事を各々話し合っていると、パタパタという足音とともに妙齢の女性が息を切らせながら控え室に走り込んできた。

「ハァハァ・・・ケイアス殿下、このような所に居られましたか。国王様がお呼びです玉座の間までお越し下さい」
「もしかしてバレたのかな？」
「何の事を言っているのか存じませんが『急ぎ連れて来い！』と強い口調で私達に命令されておりますので機嫌はあまり宜しくないかと」
「殿下、頑張ってください」
「お気をつけて・・・」
「2人とも他人事だと思ってぇーー！」
「ほらほらケイアス殿下、行きますよ？」

ある意味、黒騎士としてレイモンドと戦ったケイアス皇子よりも力強い妙齢の女性は半ば皇子を引き摺るようにして玉座の間へと連れて行く。
その後、イスラントール城にある部屋の一室には一晩中明かりが点いたままとなっていた。

そして瞬く間に夜が明け武道大会決勝戦当日を迎えた。

「それでは只今より、第３８回イスラントール武道大会決勝戦を行ないます！！」

武道大会司会の発言のもと、最後の対戦である決勝戦が始まろうとしていた。

王族達が座る観客席の一番高い場所には国王が座り、その横には皇子であるケイアスがやつれた様な表情で椅子に沈み込むようにして座っている。
更に皇子と国王を間に挟むようにして青い鎧で全身を覆っている重騎士が2人と正面には杖を持った魔術師が不慮の事態に備え、緊張した表情で立っていた。

「ケイアス、お前は我が亡き後この国を背負って行かねばならないのだぞ？軽はずみな行動は慎め」
「はい。　父上」
「しかし、こう言っては不謹慎だが、お前がレイモンドとあれ程までに渡り合えるほどの実力を持っていようとは・・・国王の立場から言えば許せぬ行為だが、個人としては嬉しくもあり複雑な気分だな」

国王の顔は険しい表情から穏やかな表情へと変化し、何処か嬉しそうな表情を醸し出していた。

「父上、司会による選手紹介も終わりましたし、そろそろ試合が始まるようですよ」

ケイアスがそういうや否や一言二言の会話後、レイモンドとミコトとの剣の打ち合いが始まった。

「ふむ、ケイアスはこの決勝戦如何みる？　片や近衛騎士名誉顧問という肩書きをもったレイモンドと無名の剣士でありながら魔法を使ってフィンケルやタルカスを打ち破って決勝に勝ち上がったミコ

トとかいう剣士。　どちらが勝つと予想する？」
「レイモンド卿は御高齢でありながら近衛騎士隊長以外では誰一人として敵う者が居ない兵（つわもの）ですが、相手のミコトとかいう剣士も只者ではないでしょう。　フィンケルやタルカスは運だけで勝てるほどあまくありません」

そんな会話がされている間に決勝の舞台では、ミコトが風魔法の陰に隠れながらレイモンドに切りかかる行為が行なわれていた。

「ほうレイモンドとほぼ互角に打ち合える者が近衛隊長以外に存在していようとはな」
「やはりレイモンド卿は僕の時に本気を出されていなかったようですね・・・」
「ん？どうやら試合に変化が訪れたようだな。　大気が目に見えて震えておるぞ」
「舞台の周りにいる魔術師達は何をしているのでしょうか？　皆一様に蹲っていますね」

レイモンドと会話があった次の瞬間にはミコトが持つ白銀の剣が魔力を伴って黄金色に光り輝きだした。
その波動に連動するようにして国王の前で不慮の事態に備えていた魔術師も舞台の周囲に居る魔術師と同様に身体を震わせて蹲ってしまっていた。
観客席で試合を見ていた一般の魔術師も同様で、中には気絶している者さえいるようだった。

「皆、如何したのだ？　何があった！？」
「も、申し上げます。　あのミコトという剣士から有り得ないほどの魔力が放出されております。　あれだけの魔力で魔法を放たれた場合、私ども結界魔術師が１００人がかりでも防ぐ事は出来ないで

しょう」

「並みの者ではないと思っていたが、それほどのものとは・・・」

そして一気に決着がつく事となった。レイモンドが持つ剣は原型を止めないほどに粉砕され、ものの数秒後にはミコトとレイモンドを直線で結ぶ延長線上にある闘技場の外周壁すらも轟音を立てて崩れ去っていた。

壁を破壊した轟音と同時に魔術師を苦しめていた魔力は切れ、次の瞬間には魔術師ほぼ全員が緊張の糸が途切れたかのように地面に突っ伏していた。

「それまで！レイモンド選手の剣が砕かれた事により第３８回イスラントール武道大会優勝者はまさかの大番狂わせ、無名剣士ミコト選手に決定いたしましたーーーー！！」

「父上、司会が言うように大番狂わせが発生したようです」

「まさかレイモンドが負けるとはな・・・」

その頃ミコトは自分の攻撃によって傷を負ってしまったレイモンドを治療し舞台を降りてしまっていた。

「あのような実力を持つ者を見過ごす手はないな。タルカス！ロウエン！あのミコトとやらを騎士団に入隊させよ」

「宜しいのですか？」

「何としてもミコトを我が国の騎士にするのだ！罷り間違っても他国に・・・特にサウスラーズに取られるような事態は回避すること。

更にもし仮にタルカスの呼びかけにより騎士入隊が決まった場合はタルカスの手柄とし、タルカスの隊に所属させる物とする」

「「了解いたしました！！」」

こうして本人の知らないところでミコト争奪戦とも言える勧誘劇が

開始され、騎士隊隊長であるタルカス、近衛騎士隊隊長ロウエン、魔道騎士隊フィンケル達を始めとする魔術師や騎士達が我先にと動き出したのであった。

閑話？　黒騎士（後書き）

２度の不運な出来事により執筆中の文章が消えるというアクシデントがありましたが、負けずに完成いたしました。

１度目は保存せずにトップ頁に戻った事で全てが消え・・・・
２度目はタイトルを入力せずに“編集〔確認〕”を押して全て消してしまいました。

皆さんもこのような馬鹿みたいなポカミスをしないよう注意してください。

第７７話　界渡りの準備（前書き）

２０１０年度最後の投稿となります。

来年も『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします

ユニークアクセス５０万人到達！

第７７話　界渡りの準備

武道大会の優勝賞金５万リルを受け取った俺は宿屋へ帰らずに、その足でとある場所へと向かっていた。
その途中、優勝を称える街の住民の声とともに俺以外に賭けていたと見られる複数の住民達から殺気の篭った目で睨みつけられていた。
色々な視線を感じながら行き着いた先は、街の入口近くにある冒険者ギルドであった。
此処に来た理由は火山への通行許可が出ていないか調べるためだったが、通りに面した壁に吊り下げられている掲示板には既に終了している武道大会参加のお知らせや不審者に注意との張り紙だけだった。

「まだ通行許可は出ていないのかな？」

それほど急いでいるわけでもないが、詳細を聞こうとギルドに足を踏み入れた途端、集まっていた複数の剣士や魔術師といった屈強な冒険者たちからの視線を浴びた。

「あの男がレイモンド殿を打ち破ったという謎の剣士か・・・」
「とてもそんな風には見えないわね」
「どんな風に見えようと、レイモンド殿の足元にも及ばない我らの実力ではとても」

ひそひそと俺に視線を向けてきた冒険者たちからの小声が聞こえてきた。
俺は話しの内容が気になるもののギルドの案内窓口に行き、話を聞いてみることにした。

「いらっしゃいませ。御依頼ですか？それとも仕事探しでしょうか？」

ギルドに似つかわしくない、丁寧な言葉で受付と思われる女性が応答してくれた。

「いや、仕事じゃないんだ。少し聞きたいことがあるんだが、構わないだろうか？」

「私に答えられる事なら・・・・。どのような事でしょうか？」

「国境である火山への立ち入りの許可なんだが、何か詳しいことを聞いていないか？」

「はい。残念ですが、未だに騎士隊からの応答がありませんので通行は禁止になっております。　冒険者の方々には大変な苦労をおかけしていますが、何卒ご了承をお願いいたします」

「そうか、分かった。　忙しいところを悪かった」

俺は踵をかえして外に出ようとしたところでギルドの入口で騎士とぶつかってしまった。

「おっと、申し訳ない。急いでいたものでな」

「いえ、此方こそ」

騎士は俺に一礼すると、先程まで話を聞いていた窓口へと足を進めていた。

「伝令！国境の通行は解除されたがサウスラーズへの許可無き者の立ち入りは禁止する。スコルピオンへは通常通りだ」

騎士は其れだけを伝えると、足早に来た道を戻っていった。

という事は国境である火山までは入れるがサウスラーズには立ち入

る事が出来ないという訳か。

「やっと解除されたか、早速向かうとするかな。だが、その前に・・・」

火山へと向かう前に旅の支度と宿屋へ挨拶をしに行く事にした。
数分後、宿屋へ足を踏み入れると真っ先にレイシアが話しかけて来た。

「ミコトさん！優勝おめでとうございます！！」
「おぅ兄ちゃん、あんたの御蔭で首が繋がったぜ！」
「良かったぁ～～～、此れで母ちゃんに殺されなくて済んだ・・・。」

最後に恐ろしい物言いをしてきた男がいたが、気にしないことにした。

「ミコトさんはこれから如何するのですか？」
「火山の通行許可も出た事だし、旅を再開する事にするよ。世話になったね」
「行ってしまうんですか・・・」
「え！？」
「い、いえ何でもありません。直ぐに出発するんですか？良ければ優勝のお祝いをしたいのですが」
「そうだな、色々と準備をしたいことがあるから出発は明朝にしようかな」

賞金で前回と同じ様に食料や向こうの世界で高く売れそうな物を買いたいからな・・・。

「そうですか！それなら宿代は結構ですので、泊まっていってくださいね」
「良いのか？なんだか悪い気がするな」
「そんな事はないですよ。ただ、お祝いの準備に時間が掛かるのでお待ち頂く事になりますが」
「じゃあ、それまで街を歩いてくるよ。旅の支度もあるしな」
「分かりました！準備して待ってますね」

その後、魔道具の店や食料品店を巡り優勝賞金の９割強を使って店の品物を買い漁った。
買ったものは人目の無いところで異空間に全てしまっておいた。
街中にある食料品店は殆んど売る物がなくなったとかで店じまいを始めている。

「それじゃあ、そろそろ日も暮れてきたし宿屋に戻るとするかな・・・。っと、あれは何だ？」

ある程度買い込んで宿屋へと向かおうとした時、薄暗い路地裏で密かに商いをしている店を見つけた。

「こんなところにも店があったのか。それにしても、何を売ってる店か分からないな」

俺は無性に気になり、謎の店へと足を運んだ。

「これは何を売ってるんだ？何やら訳のわからない小さなものが・・・。」

店頭に並んでいる『良く分からないもの』を見ていると、店の奥からオールバックのような髪型の厳つい女性が姿を現した。

「おっ？いらっしゃい！見たことの無い客だね。」
「あの、此処は何を売っている店なんですか？看板もないし、店先にもよく分からないものがあるし」
「誰かに紹介されてきたんじゃないのかい？」
「いえ、たまたま歩いてたらこの店を見つけたので立ち入っただけなんですが・・・。」
「へぇ～自力で見つけるとは大したものだ！此処は薬草、果物、野菜の種を専門に扱っている種専門の店さ」
「種？」
「そうさ、此処らへんのような涸れた大地では育てにくいけどね」

種を売る店か、そういえばどんな植物でも種が付き物なのに如何してその事を考えなかったんだろう。

「お兄さん、折角だから買って行かないかい？果物の種なら安いもので１０粒で５リルっていう位だからさ」
「どんな品物があるんですか？」
「ん？えっとね、今は薬草の種が５粒で１リルと毒消し草の種が５粒で２リル、果物の種は種類が多いんだけど一番安いもので１０粒５リルから、一番高いもので１０粒２０リルで売ってるよ？」
「薬草は要らないから果物の種が欲しいな」

俺は散々店先で悩んだ結果、手持ちの金を全て使い切って合計で約４００弱の種を買い込む事にした。
４００粒といえば多く聞えるが実際には掌に収まる量でしかない。

「ありがとう！良かったらまた来て頂戴。いつも此処で商売してるからね！！」

恐らく2度と来る事は無いと思うが、軽く会釈をして軽くなった財布を手に宿屋へと歩いていった。

その後、レイシアが腕によりをかけて作った豪勢な優勝祝いの食事をして、この世界での最終日を迎える事になった。

第７７話　界渡りの準備（後書き）

次の更新は１／３を予定しています。

それでは皆様、良いお年を・・・

第７８話　次なる異世界へ（前書き）

明けましておめでとう御座います。　２０１１年もよろしくお願いいたします！

前回、７７話を更新した日にアクセスＰＶ４００万到達いたしました。
更に総合評価も８０００に達しました。
読んでくれている読者の皆様方に深く感謝いたします

第７８話　次なる異世界へ

明朝、此れまで世話になった事をレイシアと殆んど会話した事の無い、宿屋の主人であるミディルに深々と感謝をし街の外へと歩みだした。

（此処の世界の人達もいい人ばかりだったな。次の世界も良い所ならいいんだが）

（マスター、その前に火の精霊様に会わないと）

（そうなんだよな・・・長く待たせたことを怒ってなければいいんだけど）

（ミラ様も仰られてたではありませんか、私たち精霊はマスターと同じく不老不死の存在ですので時間という概念があまり無いという事を）

（それでもだよ、どういう理由があるにせよ待たせるのは好きじゃないんだ）

前回のように方位石は持っていないが、感覚で来た道を覚えているため難なく足を進める事が出来た。

街の門を出て約3時間後、身体能力を最大限駆使し襲い掛かってきた魔物を討伐しながら無事に国境である火山へ辿りついた。

つい約2週間前に立ち寄った時に道を塞いでいた騎士の姿は何処にも無く、普通に足を踏み入れる事が可能になっている。

（さて、火の精霊は何処にいるんだろうな）

俺の独り言のような問いかけに答えるように光の玉が輝き始めた。

（主様、火の精霊は火口にて待っていると言っていました。　其方

へお願いいたします）
（ん、分かった）

ミラにそう答えながら暫く山道を進むと、三叉路が見えてきた。
分かれ道になっているが道案内などの立て札は何処にも無く、ただ道が分かれているだけだった。
どの方向へ進めば良いか分からなかったが、勘を頼りに左の道を歩いていくと前方に『スコルピオン国』と書かれた看板が目に入り、目を凝らして更に遙か前方に目を向けると見たことの無い鎧に身を包んだ何処かの騎士であろう姿の男達が此方に背を向けて立っていた。

「どうやら此方の道では無い様だな」

来た道を引き返し三叉路へと戻るとイスラントールから見て右の道へと足を進める事にする。
先程の道と同じ様に暫く歩いていくと、またしても道が2方向に分岐していた。
ただ先程とは違い木で作られた立て札が分岐点のほぼ中央の地点に立てかけられ、こう書いてあった。

↑火口（危険なため足元に細心の注意が必要）　サウスラーズ国
国境↓

俺はサウスラーズがどんな国なのか気になりながら、火口への道を歩みだした。
山道から外れて今にも崩れそうな山の斜面を、足元に細心の注意をはらいながら歩き続ける事、凡そ1時間。
ようやく山の頂上ともいえる噴火口へと辿りついた。

（さて、到着したは良いが火の精霊は何処に居るんだ？ミラ、知らないか？）

腕輪に嵌っている光の宝玉に意識を集中させて光の精霊である、ミラを呼び出す。

（主様、火口に到着なされたのですね。今、呼んでみますので暫くお待ち下さい）

ミラからの応答後、光の宝玉が一際激しく輝いたと思うと、それに呼応するかのように火口の底から赤い輝きを放つ何かが明滅しながら俺の目の高さまで上がってきた。

（私を呼んだのは誰？）

上がってきたのは赤く光る薄っすらと人型を模した影だった。

精霊でも寝坊するのか、片手で顔の目の部分（頭のような輪郭の）を擦りながら話しかけて来た。

（火の精霊！主様の前ですよ！？）

（ん～～？　主様？　・・・・・・・・・！　主様ですってーーーー！？）

人の形をした靄のような赤い影は咄嗟に俺の方を向いて何度も頭（？）を下げていた。

（なぁミラ、此れが火の精霊か？）

（誠に残念な事に・・・）

（主様！　みっともない所をお見せして申し訳ありませんでした！！）

（それはもう良いから。何があったんだい？）
（実は数日前に火山の麓で2国でのいざこざが起きていて見るに耐えない物だったんです。　それで私達精霊は静かな場所を好む性質があるので、マグマの中で外部の騒音が聞こえないようにして眠っておりました）
（それじゃあ、熟睡している時にミラから呼ばれて眠気眼で返事をしたわけか）
（面目次第もございません）

火の精霊は何度も何度も頭を下げていた。

（気にしてないから、悪いが契約の証になる宝玉をもらえるか？）

一応は頼みごとをするわけだから精霊に頭をさげると、火の精霊は慌てだした。
（悪いなんてとんでもない！　仮にも貴方様は神様なのですから、私達精霊に頭を下げるなんて事はしないで下さい）
（そうなのか？　俺はまだ神には成ってないが？）

こんなやり取りがゆうに３０分は続き、双方が疲れきっていた。

（それでは主様、御手数ですが精霊の腕輪を私の方に向けてください）
（こうか？）

精霊に言われるままに腕輪を装備している左手首を精霊の居るほうへと差し伸べた。
その瞬間に赤い人型の靄の中から赤い宝玉が飛び出し、腕輪へと移動した。

（これでやっと2つ目か。先は長いな）
（ところで主様？　御手数でなければ、お願いしたい事があるのですが・・・）
（ん？なんだい？）
（光の精霊に聞きました。　というか思いっきり自慢されたのですが、名を与えて貰えませんか？）
（そういえば、ミラもそんな事を言っていたな。　火の精霊か・・・）

火に関係する言葉というとファイア、フレイム、マグマ、メラ、イフリート・・・って段々、訳の分からない方向に行ってしまっているな。
赤い靄だけで性別は分からないけど、口調から言って女性だよな。

（マスター？　精霊は基本的に人間的に言うと女性しか居ませんよ？）
（うわっ！？吃驚した。　行き成りだな）
（そうは言いますが、頭の中で考えていた事は私を含めてミラ様や火の精霊様にも丸聞こえでしたよ？）

ルゥに言われ、火の精霊の方を見るとコクコクと頷いていた。

（それじゃあ、火の精霊という事で安直で悪いが、フレイというのはどうだ？）
（私の名はフレイ・・・・ですか？）

火の精霊であろう靄は腕組みをして考えている。

（気に入らないなら、別の名を考えるけど？）
（いえ、大丈夫です！私はフレイですね。　主様、此れからもお願

いいたしますね）
（ところで前々から気になってたんだが、俺だけ主様というのも変だからな名前で呼んでくれないか？）
俺が発言すると今まで黙っていたミラも名前を付けて貰って喜んでいたフレイも表情が凍りついた。
（（主様、そんな恐れ多い事は出来ません！　神様を名前で呼ぶなど、以ての外です））
2人揃って怒鳴られてしまった・・・。
（そんな大袈裟な事か？　俺は普通に呼ばれたいだけなんだが）
（（（大問題です！！！））））
最終的にルゥまでが精霊たちに加わり、俺の『名前で呼んで欲しい』という願いは音も無く砕け散った。
（それで主様、今すぐに次の世界へと渡りますか？）
ルゥ、ミラ、フレイの3精霊の話し合い（？）終了後、ミラが問いかけてきた。
（特に此処に居る理由は無いんだが、少し気になっていることが）
（如何かなさいましたか？）
（ついこの前まで此処で争っていたサウスラーズとはどのような場所なのかと思ってな）
（それなら私が説明いたします）
フレイは胸（？）を張り、サウスラーズについて語りだした。

（サウスラーズは主様がつい最近までいらしたイスラントールの約2倍の国土を持っていますが、その土地の約7割が砂漠と化していて人の住める土地ではありません。　そのためサウスラーズの国王は比較的豊かな土地であるイスラントールやスコルピオンに幾度となく攻め込んでいるという訳です。　撤退途中の兵士の会話を聞く限りでは国に大変な事態が起きたらしく、味方の兵士に怒声を浴びせながら大急ぎで山を降りていったようでした）

（そうか今行くと別の騒動に巻き込まれそうだしな。　それじゃあミラ、次の世界に送ってくれ）

（分かりました）

ミラが一際激しく輝いたかと思うと、俺がこの世界にいたという記憶とともに、俺の姿がこの世界から掻き消えた。

第７８話　次なる異世界へ（後書き）

やっと2番目の世界が終了しました。

最初は1個の世界あたり、１４～１５話のペースで仕上げていく予定でしたが色々と書き記したい事が増えていき、何時の間にやら３０話近くも書いてしまいました。

今現在の状況では完結までにどれ程の話数と時間が掛かるか予測すら出来ませんが、此れからも『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします。

第７９話　森の中の集落（前書き）

まだまだ不安な点が数多く残っていますが、取り敢えず完成しましたので更新いたします

第３の異世界開始です！

第７９話　森の中の集落

ミラに界渡りを実行してもらった直後、前の世界マルベリアからイスラントールの地に辿りついた時のように不思議な空間を通り、新たな世界に到着したのだが・・・第１歩目の感想は足が地面に着いていない感覚と凄まじい風が足元から感じられた。

（主様、新たな世界に到着いたしました）

念話で話しかけられ目を開けると、目の前には青い空と遙か下方には壮大な森が広がっていた。

（なぁミラ、前にもこんな事が無かったか？）

（申し訳ありません）

自分が今いる状況はといえば、遙か上空から地面へとパラシュートも着けずに自然落下している状態だ。

（マスター、宿屋で練習していた風の魔法で飛んでみたら如何ですか？）

（おお、その手があったな！　じゃあ早速・・・）

イスラントール武道大会の開会式でログナートやフィンケルが飛んでいたように風の魔法を使って飛ぼうとするが所詮、俄仕込(にわか)みで飛ぶというよりも落下速度を押さえる事で精一杯だった。

「結局、落ちるのは変わらないんじゃないかぁーーーーー！！」

その数分後、数本の樹木を巻き添えにしながら森の中へと無事（？）

に着地した。
前の世界でのデジャブを思わせるようなクレーターを地面に作って・・・。

（毎度毎度、つくづく俺が不死身でよかったと痛感する瞬間だな）
（あの高さから落ちれば普通の人間は間違いなく、全身複雑骨折＆内臓破裂で見るも無残な惨死体が残るだけですしね）
（ルゥも言うようになったな）
（すいません。　調子にのってしまいました）
（いや、気にしてないから大丈夫だよ。　こうなったのも元はと言えばミラの所為だし）

俺は口元に笑みを浮かべながら冗談半分に言うと、光の宝玉が遠慮気味に鈍い光を放っていた。

（さ～て、まずはこの森から出ないとな。　この世界の精霊は何処に居るんだ？）
（え、え～と、この世界は風の精霊の管轄となっています。　場所はこの森の中央に聳え立つ世界樹にいる筈なんですが・・・・）

着地に関しては色々と問題があったけど一応は精霊の近くに送ってくれたんだな。
でも、何か言葉が詰まっていたような？　何があったんだ？

（如何したんだ？）
（理由は分からないのですが、風の精霊の波動が何かに遮られているかのように微弱なんです）
（精霊に何か危機が訪れているという事か？）
（考えられない事ではありませんね。　マスター、急ぎましょう）

ルゥに答えると、まるで迷路のように入り組んだ獣道を勘を頼りに、遙か遠くに見える巨木を目印として只管に枝を掻き分けて進んでいく・・・。

森の中を歩き始めてから2時間が経過したが、森が広すぎるのか、はたまた俺が道に迷っているのか分からないが一向に巨木に近づいている気配は感じられなかった。

（一体どうなっているんだ？　魔物にでも化かされたか？）

誰に文句をいう訳でもなく、闇雲に歩いていると開けた場所に出る事が出来た。

（ようやく森を抜けたか・・・）

（いえ、マスターよく見てください！　此処はマスターが着地した場所です）

ルゥに言われて周りを見てみると、言われるとおり俺の着地点のクレーターと薙ぎ倒された木々といった僅か数時間前に見た景色が目の前に広がっていた。

（そんな、確かに目の前の巨木を目印に真っ直ぐ進んでいたはず・・・）

（マスター、もしかすると人を寄せ付けないために魔力の結界が森全体に張り巡らされているかもしれませんね）

（如何にかして結界を解除できないのか？）

（方法としては結界を張った本人に解除してもらうか、結界の魔力を探知しながら進むかしかないですね）

（魔力探知ってマルベリアの魔術師のフィルが使ってたような物か？）

（同じ様な物ですが、少し違います。　結界の場合は高確率で魔力

により道を惑わせるので逆に魔力の感じられない道を進めば、突破する事が可能だと思います）

（それじゃあ魔力探知はルゥに任せる！　俺はルゥの言ったとおりに歩くから道案内は任せたぞ）

（了解しました。　其れと探知がし難くなりますからマスターは魔力を出さないで下さいね）

（分かった）

こうして俺はルゥの道案内の元、森の中を進み始めた。

（この場所は左右に分かれていますが真ん中の茂みに向かって進んでください。　その次は右です）

ルゥに道を教えられながら獣道を只管に歩き続ける事およそ４時間半、ついに生活しているような雰囲気の村にたどり着くことが出来た。

（どうやら無事に結界を抜けられたようだな）

俺は人の気配があまりしない森の中の集落を歩いていると、不意に声を掛けられた。

「貴様、何者だ！　人間がどうやって結界を抜けてきた！？」

猛々しい女性の声がしたと思ったら次の瞬間には首元に剣の切っ先が突きつけられていた。

「答えろ！貴様は何の用があって集落を訪れた？　返答次第では生きてこの森を出られはせぬぞ」

「ジェニス。　待ちなさい！」

今まさに剣で首を斬られようとした瞬間、村の奥から杖を突いた御爺さんが姿を現した。
あれっ？落ち着いて見てみれば、御爺さんも女性も耳が尖がっているような・・・。

「長老様！？此処は危険です。　お下がりください」
「ジェニス、ワシの言った事が聞こえなかったのか？」
「・・・・・・分かりました」

俺の首に剣を突きつけてきたジェニスと呼ばれた女性は『チッ』という舌打ちをしたあと剣を首から離すと腰の鞘に剣を収めて御爺さんへと跪いた。
女性とすれ違う様に御爺さんが俺の目の前に静かな足取りで歩み寄ってくる。

「ジェニスも言っておったが結界を抜けてくる人間が居ようとは、オヌシは一体・・・！？」

俺に近寄ってきた『長老様』と呼ばれる御爺さんは眉を吊り上げ、目を極限まで見開いた状態で口調を改めて問いかけてきた。

「いえ、貴方様は一体何者なんですか？」
「長老様！　そのような怪しげな男に何を・・・」
「黙りなさい！　本来なら私達風情が声を掛けられないほど、高貴な御方の可能性があるのですよ！？」

ジェニスは俺と御爺さんの顔を交互に見ながら『わけが分からない』といった表情を見せている。

「何を言ってるんです？　俺は貴方達が言うただの何の変哲も無い人間ですよ？」

一瞬、神である事がバレたと思ったが、見破られる筈がないので平常心で答えたのだが・・・。

「謙遜なさらなくとも宜しいです。　貴方様が人間というなら、その御身体から溢れ出る人間とは思えないほどの途轍もない魔力と貴方様に付き従うように傍に浮かんでいる、２体の精霊様とその剣に宿っている精霊様のご説明をお願いいたします」

この一言によって俺も確信した。

ルゥやミラ、フレイといった精霊の姿を見ることが出来る人間などいるわけがないと・・・。

第７９話　森の中の集落（後書き）

未だ次話は完成していませんが、これからじっくりと考え更新を遅れないようにしますので宜しくお願いいたします。

第８０話　神聖なる森の民（前書き）

前回の流れと今回の話を如何つなげるか大いに悩み、何とか完成させることが出来ました

第８０話　神聖なる森の民

ミラの界渡りによって第３の世界に辿りついた俺は目の前に広がる大樹海にかけられていた魔力の結界をルゥの助力の元、突破すると樹海の中心ともいえる巨木の麓の村へと行き着くことが出来た。
だが、森を抜けられたと安心したのも束の間、村の住人と思われる１人の女性から剣を突きつけられた。

「貴様、何者だ！！人間がどうやって結界を抜けてきた！？」

有無を言わさずに女性から剣を突きつけられ押し問答を繰り返していると、村の奥から『長老様』と呼ばれる御爺さんが姿を現した。
色々と会話していった中で分かった事は剣を突きつけてきた女性が『ジェニス』という名前だという事と目の前に居る御爺さんが人間ではないという事だった・・・。

「貴方様が人間というのなら、その御身体から溢れ出る人間とは思えないほどの途轍もない魔力と貴方様に付き従うように傍に浮かんでいる、２体の精霊様のご説明をお願いいたします」

俺以外には見る事の出来ない精霊を目視で確認できた事や魔力検知の素振りも見せないで俺の魔力を言い当てた事など・・・。　少なくとも普通の人間では無理だ。

（主様、目の前にいるお年寄りですが人間ではありませんね）
（人間ではない！？　どういうことだ？）
（彼らは人間とは比べ物にならないほどの寿命を持つエルフです）

ミラと話していると、まるで精霊との会話が聞えていたかのごとく

長老が話しに参加してきた。

「其方の精霊様が仰られるとおり、我等は古(いにしえ)より、この地に住みしエルフの民です」

「！！　精霊の声が聞えるのか？」

「長老様は一体誰と会話なさっているのだ？　まさかボケたのか？」

ジェニスと呼ばれる女性が頭に幾つもの『？』を浮かばせながら俺と長老との遣り取りを見つめている。

「この地に生まれ出でて８００余年も生きていますと、木の精霊や花の精霊の声が聞えるのですわ」

（それでは私の声も聞えるのですか？）

ルゥがここぞとばかりに長老に話しかけ始めた。

「勿論聞えておりますぞ。　貴女様は剣の精霊様ですね」

話が通じた事が嬉しかったのか、ルゥは剣を震わせながら喜びの声を上げていた。

「失礼とは存じますが、再度ご確認いたします。
精霊様に『主様』と呼ばれる貴方様は一体、何方(どなた)様ですか？」

俺が諦めて話そうとしたとき、ミラが俺に成り代わり話しだした。

（主様、ここは私(わたくし)にお任せ下さい。　私は精霊王が１人、光の精霊です。　エルフ族の長老よ、私の声が聞えますね？）

「おお、聞えますぞ。精霊王様」

（此方に居られる、この方は我ら精霊が主と認めた御方であり、次

期神様であらせられます）

あ～あ、言っちゃったよ。　こりゃ大騒ぎになるぞ・・・。

「神様ですと！？」

長老が発した『神』という言葉を聞き居心地が悪そうに佇んでいたジェニスは此方を向いて目を見開き固まっていた。
仮にも神と呼ばれる俺に対して剣を突きつけてしまったのだ、その心中は計り知れないだろう。

（此度の我等はこの地を司る風の精霊に逢いにきました。　長老よ風の精霊の波動が弱まってますが、いかが為さいましたか？）

「懼れながら精霊王様に申し上げます。　我等も原因は分からないのですが、日増しに風の精霊様の息吹が感じられにくくなっております。　このままでは以って数日ではないかと」

（そうですか・・・。　主様、御手数ですが御力（おちから）をお貸し願えませんでしょうか？）

「如何するんだ？　俺でよければ幾らでも力を貸すぞ」

（ありがとうございます。それでは世界樹の幹に手を差し伸べ、魔力を注いで貰えませんか？）

「世界樹？」

（村の中心に聳え立つ巨木が精霊の住まいし、世界樹です）

ミラに言われるまま見上げると頂上が見えないほどの高さの枯れかけた樹木が聳え立っていた。

「それでは神様、此方へ・・・」

長老に言われるまま、歩いていくと其処には樹齢何万年とも思える

ほどの木の壁があった。

（主様、その木に手を着いて御自身の魔力を木に注ぎ込んでください）

ミラの遠慮がちに言う声に従って手を木に触れ魔力を放出させる。すると、巨木の中頃から茶色く枯れかけていた幹は若木のような濃緑に変化し徐々に姿を変えていった。

（主様、そのくらいで十分です。あとは時間が解決するでしょう）

木から手を離し深呼吸していると長老が俺に対して跪いていた。

「神様、精霊様、感謝いたします」

「その事でお願いがあります。　ミラが言うには俺は風の精霊が回復するまで、この地に居なければなりません。　御手数ですが村に住まわせてもらっても宜しいでしょうか？」

「お手数など、とんでもありません！　心行くまで御寛ぎ下さい」

「それともう一つ。　俺のことは神様ではなく、客人という扱いで置いておいて貰えませんか？」

「分かりました。　では長老である私と孫娘であるジェニスの３人だけの秘密という事に致します。　ジェニスもそれで良いな？」

長老は未だに口を半開きにして目を見開いた状態のまま固まっているジェニスに話しかけると・・・。

「は、はい。　分かりました長老様。　神様、先程は失礼致しました」

「気にしてないから大丈夫だよ」

「それでは何とお呼びすれば良いのでしょうか？」

「ミコトでいいよ」
「では、ミコト様と」
「堅苦しいなぁ～呼び捨てでいいのに・・・」
「そんな訳には参りません！　神様を呼び捨てにするなど以ての外です」
「分かった。　じゃあ、せめて“様”はやめて“殿”にしてくれないか？」
「それではミコト殿とお呼びすることに致します」
「うん。これからも宜しく」

この会話から約1時間後に森へと狩りに出かけていた他のエルフから侵入者呼ばわりされ、長老とジェニスが冷や汗を掻きながら、俺が客人である事を説明したのは言うまでも無い事だろう・・・。
こうして俺のエルフの集落での奇妙な生活は始まりを告げた。

第８１話　侵入者疑惑再び（前書き）

とりあえず完成・・・

第８１話　侵入者疑惑再び

エルフの民に長老から集落の村人に俺が客人である事を知らされた数刻後、長老に一軒の家へと招待された。

「村に御滞在なさる間は、この家をお使い下さい」

「この家は？」

「此処に住むエルフ或る日突然、猟の最中に行方不明となりまして長い間、空き家となっていましたが急遽大掃除を致しました」

長老に紹介され家の中へと足を踏み入れて最初に思った感想は“綺麗”だった。

「うん。気に入りました」

「この村は人間の村とは違い、お金という概念はなく自給自足の生活となっています。

森で果物を採って暮らしている者も居れば、森に生息する獣を仕留めて暮らすものも居ります」

「つまりは自分の食い扶持は自分で稼げという訳ですか？」

「神様におかれましては大変失礼だとは存じますが、それがこの村でのしきたりですので・・・」

長老に言われながら家の周辺を見回すと、家の裏に５ｍ四方の明らかに人の手で耕した跡のある畑が目に入った。

「この畑は？　何か農作物を作っている・・・いや、作っていたんですか？」

「家の住人が作っていましたが、手入れをしなくなったと同時に枯れ果ててしまいました」

勿体無い。そういえば、前の世界で購入した幾つかの種があったよな・・・植えてみるか。

「これで御説明は以上です。何か御不明な点があれば、何時でもお申し付け下さい」

長老は踵(きびす)をかえして静かな足取りで来た道を戻っていったと思ったら直ぐに引き返して来た。

「如何したんですか？」
「此れを渡すのを忘れていました」

長老から紐が結われている、掌大の赤褐色のメダルを手渡された。

「此れを持っていれば森の結界は無効になります。　くれぐれも失くさないようにお願いいたします」

長老は其れだけを言い切ると何か急ぎの用があるのか、早足で走り去り村の奥へと姿を消した。
長老の後姿を見送り、用意された家へと入り異次元倉庫から数個の果物を取り出し齧りつきながらミラと会話する事にする。
（自給自足か。　まぁ亜空間倉庫に果物が豊富に入っているから、当分の間は食に困らないだろう。　ところでミラ、俺はどれだけの期間この村に滞在すればいいんだ？）

精霊と会話するのにも慣れてきたのか、いつしか宝玉に意識を集中しなくても当たり前のように会話できるようになっていた。

（その事なのですが、風の精霊の現状を人の言い方で説明すると、

あくまで『峠を越えた』と言う状態ですので日々風の精霊の具合を見ながら少なくても半年間は居てもらわなければ困ります）

（でも前にも聞いたが、精霊は俺と同じで不老不死な存在なんだろ？　どうしてこんな事に？）

（その事は私にも分かりません。　精霊の命を脅かす余程の事態が起ころうとしているのか）

（精霊に外敵は存在するのか？　精霊同士で仲が悪いとか）

（多少の仲違いはありますが、命に拘る様な事は今までありませんでした。

　強いて原因を予想するならば他の精霊ではなく、人間による影響が考えられると思われます）

（だけどエルフが森に張り巡らした結界の御陰で人間は入り込めないんだろ？）

（私の考えすぎなら良いのですが、将来的に悪い事が起こりそうな予感がします）

俺がミラと風の精霊について考えていると不意に窓の方から複数の視線を感じた。

『何だろう？』と思いながら窓を見てみるとエルフの子供達と思われる幼げな顔つきの少年少女たちが背伸びをして外から室内を覗き込んでいた。

視線に気づいた俺が窓に目を遣ると一瞬で事態に気づいた子供達は一目散に窓から離れて走り去ってゆく。

「一体、なんなんだ？」

目で見る限りでは皆同様に逃げ去ったが、窓の辺りから人の気配を感じることが出来た。

俺は窓の外に感じられる何者かに気配を読まれないように足音を消して窓のそっと近づくと、勢い良く窓を開けた。

「キャッ！？」
「『キャッ？』なんだ？」
窓の下から声が聞えたため目を向けると、尻餅をついた状態で地面に座り込み、突然の事で顔を強張らせている１人の少女が其処に居た。
「えっと・・・。君は？」
窓から身を乗り出して話しかけても表情が暗くなるだけで話にはならなかった。
少女と同じ目線で話すため、異次元倉庫から取り出した毒の無い果物を手にとって急いで玄関から外に出て少女の居るほうに駆け寄ると、其処には四つん這いで何とか逃げ出そうとする少女の姿が。
「君。どうしたんだい？」
「ひっ！？　ごめんなさい、ごめんなさい。どうか乱暴しないで！」
この少女の反応を見る限り、どうやら俺は怖がられているようだ。
俺は少女にそっと近づき足を折り曲げ、少女の目線と同じにすると、そっと果物が乗った手を差し伸べた。
「君に俺がどういう風に見られているか分からないが、乱暴する気なんて毛頭ないから」
「え！？そうなの？　だってみんなが言うには、人間は野蛮で凶暴な生き物だって・・・」
「それは酷いな。　俺がそんなに怖そうに見えるかい？」
「ううん、みえない。どちらかといえば優しそう」

少女はにっこりと笑みを浮かべると俺の手を取って立ち上がり、服に付着した砂埃を掃った。

「私、ニーナ。お兄ちゃんは？」

「俺の名前はミコトだよ。　よろしくねニーナ」

警戒心が解け、俺が手渡した果物に美味しそうに齧りついているニーナと話していると、複数の子供達とともに武装したジェニスを筆頭にエルフの狩人たちが各々の武器を手に此方へと走り寄ってくる。どうやら先程、窓から此方を覗いていた子供達が唯一逃げ遅れたニーナを救出しようと、村の大人たちを連れてきたようだ。

集団の先頭に居たジェニスは驚いた表情で俺を見て、額に手を遣って項垂れていた。

大人たちも長老から客人として丁重に扱えと言われていた俺の姿を見て困惑の表情を浮かべている。

残るは事情を何にも知らない複数の子供達のみ。

「みんな？　怖い顔して如何したの？」

当事者であるニーナは何も分かっていないようでキョトンとしている。

「何言ってるんだよ！　お前を助けに来たんじゃないか！？」

大人たちも事情が分かったようで、中には苦笑いをして見つめている者もいた。

「ジェニス姉ちゃん、コイツだよ。いつもの様にさっさと成敗してよ」

ジェニスは俺にそっと頭を下げると、拳骨を少年の頭に向かって振り下ろした。

「イッテェェェェェ・・・！　何すんだよ！？」

「お前こそ馬鹿じゃないのか！？　この方は長老様の大切なご友人だぞ？」

「え？そうなの？」

少年は俺とジェニスと交互に見ながら、信号が赤から青に変わるように顔色を変えていった。

その後、ジェニスを残して大人たちは解散し数人の子供達だけが残った。

「「「「「ごめんなさい」」」」」

子供達も俺に謝った直後、ジェニスに泣きついて何か話した後、其々の親に首根っこを？まれ思い思いの方向へと走っていった。

「かｍ・・・いえミコト殿、此度は大変な失礼を致しまして申し訳ございません」

「気にしてないから大丈夫だよ。　子供のすることだしね」

「ジェニスお姉ちゃん。　このお兄ちゃんがどうかしたの？」

丁度、果物を食べ終えたのか口の周りに果汁を付けたニーナが話しかけて来た。

ジェニスはまたもや、疲れたような表情を見せていた。

「ニーナ、お前も居たのか！？」

「うん。友達から『侵入者を見に行くから一緒に来い』って誘われて」

「知り合いなのか？」
「はい、私の実の妹であるニーナです。　重ね重ね失礼を」
「だから気にしなくても良いってば。　さっきの子供達も叱らないであげてね」

その後、かなりの低姿勢になったジェニスはニーナとともに帰っていった。

「お兄ちゃん、またね～～～」
「こら、ニーナ」

俺に手を振りながら歩いていくニーナと、俺に頭を下げながら歩いていくジェニス。
これからの生活が楽しくなりそうだ。

閑話？　ジェニスの視点（前書き）

予定には無かった話なんですが、少し思うところがあり急遽作成いたしました。

閑話？　ジェニスの視点

私は誇り高きエルフの戦士。
我が名は今は亡き、父と母が偉大なる曾祖母であるジェルニアから名前の一部を貰って名付けてくれたジェニスという。
今より数年前、父と母は結界を潜り抜けてきた魔物の襲撃から、父である長老様や、娘である私と妹のニーナを逃がすため囮となり命を落とした。

この神聖なる大樹の元にエルフの村が築かれてから早、数千年・・・。
其の当時はまだ人間達と我等が共存していたと数十年前に亡くなった祖母から聞いていたが、ある一時（いっとき）を境にして関係は崩れエルフは森に、人間は森の外に村を造り住み始めたという。

エルフとは長い時を生き、人間とは比べ物にならない寿命を持つ。
中にはエルフが村を出て人間と恋に落ちるという変わり者のエルフも存在し、人間との間に子を授かり、その子が俗に言うハーフエルフとして人間から迫害を受けているという話だ。
エルフの村は人間以外、来る者拒まずとされている。　其れはハーフエルフとて例外ではない。
ただし村の生まれで無い者は森の結界を通り抜ける事が出来ないため、此方から出向かない限り集落の人口が増える事はない・・・・・はずなのだが、或る日森を抜けて一人の人間が現れた。

その日は集落で獲物の狩りを担当する者達が森に入って、集落にいる者は戦えない女子供と長老様のような御歳を召されている方々だった。

集落の入口の守りを担当するのは、其の都度長老が決めてくださる。
私は一月前にも見張りをしていたというのに何故今日も見張り役なんだ・・・。

一部魔物などの例外もあるが、この地に結界が張られてから何人(なんぴと)たりとも潜り抜けることが出来なかった森を魔物に襲われる事もなく五体満足で集落に辿りつくとは・・・・・・。
最初は魔物が人間に擬態している物と思い、神樹の聖水と呼ばれる魔物が嫌がる匂いを放つ液体を身体に浴びて人間もどき（？）に近づいたのだが何の反応も見せないという事は紛れも無く人間なのだろう。
ただ魔物であろうが人間であろうが結界を抜けてきたのには変わりは無く、気が付くと人間の首に剣を当て言葉を浴びせていた。

「貴様、何者だ！　人間がどうやって結界を抜けてきた！？」

私は殺気の篭った目で剣を握り締めながら人間に問いかけるが、目の前の人間は殺される事を苦とも思わないのか平然とした表情で此方を見ていた。

「答えろ！貴様は何の用があって集落を訪れた？　返答次第では生きてこの森を出られはせぬぞ」

下手な動きをすれば『今度こそ其の首刎ねてやろう』という考えで剣を持つ腕に力を込めていると、不意に後方より長老様が近づいてくる気配を感じた。

（馬鹿な！？　何故このような危険な場所に長老様が来る！？）

次の瞬間、長老様から発せられる言葉に耳を疑った。

「ジェニス。　待ちなさい！」

何故止める？　昔とは違い、人間が集落に入ることは禁じられている筈だ。

「長老様！？此処は危険です。　お下がりください」

剣を握っていない方の腕で長老様を人間から庇うようにして長老様を人間に近づけないようにするが。

「ジェニス、ワシの言った事が聞こえなかったのか？」

「・・・・・分かりました」

長老様からの少し怒気が篭ったような声で言い包められ納得はしていないが剣を収める事にした。

「ジェニスも言っておったが結界を抜けてくる人間が居ようとは、オヌシは一体・・・！？」

ん？如何したんだ長老様は？　何故そんなに目を見開いて居られるのだ？

「いえ、貴方様は一体何者なんですか？」

長老様！？　何故人間などを『様』付けで呼ばれるのですか！？

「長老様！　そのような怪しげな男に何を・・・」

「黙りなさい！　本来なら私達風情が声を掛けられないほど、高貴

な御方の可能性があるのですよ!?」

人間も長老様の言葉に呆気に取られているようで半ば放心した表情を浮かべていた。

「何を言ってるんです？　俺は貴方達が言うただの何の変哲も無い人間ですよ？」

そうそう。　人間の味方をするわけではないが如何して敬語を使う？

「謙遜なさらなくとも宜しいです。　貴方様が人間というなら、その御身体から溢れ出る人間とは思えないほどの途轍もない魔力と貴方様に付き従うように傍に浮かんでいる、2体の精霊様とその剣に宿っている精霊様のご説明をお願いいたします」

そして長老様は意味不明な言葉を発しながら人間の顔から何も無い右上の虚空へと視点をあわせてガタガタと震えている。

その後、長老様と人間と別の何か？との会話の結果、信じられないことだが目の前の人間は神様だという事が分かった。

という事は私は神様に対して剣を振るったのか!？　なんと恐れ多い事を・・・。

長老様の話によると人間・・・いや神様の周りには合計3体もの精霊様が浮かんでいるとの事だった。

聞けば大樹に住まう風の精霊様の様子が可笑しいとの事でこの地に来たのだそうだ。

確かにこのところの大樹の様子は何か変だ。

日に日に衰弱しているかのように葉は枯れ落ち、今にも倒れるんじゃないかと思うような素振りさえ見せている。

会話後、長老様は私と神様を連れ大樹の根元へと誘われた。
よく聞き取れなかったが神様が何らかの言葉を発したあと、両手を大樹の幹にそっと添えて何かしているようだった。
何をしたのか全然分からなかったが、手を添えた瞬間から茶色に染まっていた葉っぱは時間を巻き戻すかのように生き生きとした濃緑へと変わり、心なしか元気になったように感じられる。
そして神様を長老様の客人として集落に暫く住んでもらう事となり呼び方も『神様』から『ミコト殿』に変更され、其の正体は長老様と私と神様との秘密という事にされた。
最初の印象は何処へやら・・・
和んでいると丁度狩りを終えた皆が集落に戻ってきて先程の私のように『何故人間がこの地に!?』やら『汚らわしい者、出て行け!』やらと耳が痛い言葉をミコト殿に投げかけていたが、長老様から『大切な御客人であるミコト殿に失礼があってはならん!』という言葉で混乱は収まる事となった。
そして集落に住まう子供達が狩りに行っていた大人たちを出迎えるようにして家から出てきたが人間を見るなり、子供同士で集まって何か喋っているようだった。
長老様がミコト殿と会話したあと、集落に住んでもらうべく空き家の掃除を数人の女性エルフに命じられた。
子供達も井戸端会議のようなことをしていたが長老様の言葉から何かを思いたったようで一目散に何処かへと走って行った。
あの方向は私の家だな。　ニーナと遊ぶ約束でもしているのかな?
その後、何故子供達の行動に目を光らせなかったのかと後悔したが時既に遅く、またしてもミコト殿に関係する誤解を招くのだった。

『神様・・・一度ならず二度、三度と申し訳ありませんでした!!』

私は心の中で只管謝罪し許しを請うのだった。

神様の・・・・・ミコト殿の笑顔に感じたことのない、何がなんだか分からない胸が熱くなるような気持ちを抱きながら・・・。

閑話？　ジェニスの視点（後書き）

ジェニスの視点で大まかに描きました。

次の話が完成するまでもう暫くかかりそうなので前々回更新時から少しずつ描いていた物語を載せることにしました。

第８２話　精霊たちのお礼（前書き）

待たせてしまった割りに出来はあまり良くありませんが・・・。

お気に入り登録数が３０００件を突破しました！

ありがとうございます。　これからもよろしくお願いします

第８２話　精霊たちのお礼

エルフの子供達との『侵入者騒動』があった翌日、折角家の周りに畑があるのだからという簡単な考えで、前の世界で購入した幾つかの種を植える事にした。
種から木になるのか苺のような感じになるかは分からなかったが。

「あとは畑に撒く水なんだけど、水場までは少し遠いな」

俺の住む家から水場のある長老の家付近までは約２００ｍ、決して遠いわけではないが邪魔臭い。
そこで考えたのが通常の水ではなく、水属性の魔法を使って畑に水を撒くという方法だった。

「これなら態々（ワザワザ）水を汲みに行く必要はないし、水撒きも一瞬で終わるな」

このエルフの村に滞在する期間は最低でも半年間。
其れまでに幾つかの果物を収穫できれば良いなと考えていたのだが、あんな事になろうとは思いも寄らなかった。
その日の夜、不意に何故かミラから話し掛けられた。

（主様、中級精霊である地の精霊と花や木の下級の精霊達がお礼を言いたいと訪ねて来ておりますが、いかが致しましょうか？）
（下級精霊？　お礼を言われるような事は何にもしていないんだけどな）

その後も頭を捻らせながら考えていたのだが、何の覚えも見当たらなかった。

（とりあえず会ってみるよ、通してくれる？）
（分かりました。暫くお待ち下さい）

そう答えるとミラであると思われる光の玉が、ふよふよと外に移動していく。
数秒後、光の玉に連れられるように微弱な波動の土気色の光の玉が俺の前へとやって来た。

（お待たせいたしました。　代表である地の精霊を連れてまいりました）

ミラが言い切ってから、ほんの少しの間が空いて声が聞えてきた。

（お初にお目にかかります、地の精霊にございます。　本来なら貴方様には私など、お目にかかれないのですが無理を承知でお礼を言いたく、私が代表して光の精霊王様にお目通りを願いました）
（お礼って言われても、何かをした覚えはないんだけど？）
（いえ貴方様は今にも枯れそうな大地に多大な魔力を注いでくれました）
（大地に魔力を注いだ！？　そんな覚えは・・・・・）

そう考えていると何か心当たりがあるようでルゥが不意に話しかけて来た。

（マスター私思うのですが、昼間の畑仕事をしていた時に水場まで水を汲みに行くのが面倒だという事で魔法を使って畑に水を撒きましたよね？その事が魔力を注いだという結果になったんじゃないですか？）
（たったあれだけの行為でか！？）

（いえ、其方に居られる剣の精霊殿の仰られるとおりです。　本来、私達精霊はこの地の守護精霊で在らせられる風の精霊様より極微量の魔力を分けてもらって存在できています）

地の精霊と名乗る光の玉は必死な表情（？）で俺に話しかけてくる。

（原因は不明ですが、風の精霊様の衰弱化により私達も命を落としかけておりました。
『もう駄目だ』と思い始めていたときに風の精霊様を助けていただき、更に私達、中級、下級の精霊にも力を分け与えてくださいました。　貴方様はその気が無かったにしろ、私達にとっては命の恩人です。　ありがとうございました、このお礼は必ず・・・）

地の精霊は此れだけを言い切ると、まるでお辞儀をするかのように上下に何度も移動し家の外へと飛んで行ってしまった。
家の周りに集まっていた他の精霊達と思われる緑や赤い色をした光の玉も四方八方へと散っていく。

（まさか何気なく行なった行為が人、いや精霊助けになろうとは思いも寄らなかったな）
（主様は膨大な魔力をお持ちですからね。　魔力で水を撒くといった行為が大地に魔力を与えるという行為に繋がったのですね）
（それにしても、あの精霊は『お礼は必ず』と言っていたが、何をするつもりなんだろうな？）
（森の地を司る中級精霊を始めとする花や木々の精霊達ですから、ある程度の予想は出来ていますが）
（何のことだ？）
（今はまだ楽しみにとって置きましょう。この分なら翌朝には判明すると思いますよ）
（一体何のことなんだか）

只管に考えながらその日は眠りにつくと翌日、人が騒いでいる声で目が醒めた。

「一体、何の騒ぎだ？」
「お邪魔致しますぞ」

朝食として残り少ない果物を齧っていると、長老が訪ねてきた。

「朝食中でしたか、此れは失礼致しました」
「それは良いのですが、外は一体何の騒ぎなんですか？」
「その事なのですが、昨日までは何にも無かったミコト殿の荒れた畑に一夜のうちに見たことの無い実の生る果樹が生えていると大騒ぎになっておりまして」
「果樹って・・・ただ昨日、種を蒔いただけですよ？」
（予想した通りですね）
「如何したルゥ？」

長老も精霊の声が聞えるためか俺と一緒に聞き耳を立てている。

（昨夜、下級の精霊達が魔力を頂いたお礼として訪ねてきましたよね）
「それが何か？」
（地の精霊が帰り際に話した『お礼を必ず』といった行為が果樹の急成長なんでしょう）
「なるほど、そのような訳があったのですな。　お騒がせ致しました、村の民には私から説明を致しますので御心配なさらないで下さい」

長老は、まくし立てる様に話すと早足で家の外へと歩いていった。

家の窓からそっと外に視線を遣ると長老が手振り素振りで集まっていた住人に説明をしていた。
住民達も長老の説明で納得が行ったのか各自、各々の方向へと散っていく。
汗だくになりながら説明をしていた長老も此方に会釈して家のほうへと戻っていった。
ようやく人が居なくなったので状況を確認しようと外に出て畑に近づくと、其処には一昨日まで種だったにも拘らず、高さが３ｍくらいの木が何本も立っていて熟した果実が実っていた。

「あ、お兄ちゃん。おはよう～～」

視線と声を掛けられた方向を見ると、其処にはジェニスとニーナの姉妹が。

「ねえ、お兄ちゃん。この果物って前に貰ったアレだよね」
「ニーナ！言葉遣いが無礼だぞ！？」
「え～～～！？」
「あのな、この御方は・・・」

ジェニスが全てを言い切る前に言葉をさえぎる。

「お兄ちゃんでいいよ」

ニーナが見覚えがあるといった果実を見てみると、確かにニーナにあげた物だった。
俺はニーナに待っているように言い、木に近寄り果実を２つ？ぎ取った。

「はい、どうぞ」

摘んだばかりの果実を1個ずつ姉妹に手渡すと・・・。

「お兄ちゃん、ありがとう。いただきま～す」

「ありがとうございます」

妹のニーナはにこやかな笑みを浮かべ、齧りつきながら家のあるほうへ戻っていき、ジェニスもまた何度も何度もお辞儀を繰り返しながら果実を手に持って戻っていった。

改めて果樹を見てみると、朝食として食べていた果物が全ての木に生っていた。

「突拍子の無い出来事だったけど、此れで食べ物には困らないな」

何気なく畑に水魔法で水を撒いたことがキッカケでかなりの得をしたと感じられた。

余談ではあるが、この果物は収穫しても翌日にはまた実が生っているという不思議な木として住民に知れ渡る事となっていた。その後、果実は一般にも配られる事になったのは言うまでも無い。

第８３話　狩猟に同行

エルフの集落に滞在して数日が経過した朝のこと。
朝食として庭に生えている果樹から直接果物を?ぎ取って齧っていると、数人の男衆がそれぞれ槍や弓矢、斧等を手に長老の家の前へと向かって歩いていた。

数日前の不審者騒ぎのことを思い出し、何かがあったと考え齧っていた果実を丸ごと口の中で噛み砕き、俺も男達と同様に剣を装備して長老の家の前へと急ぐ。
用意も整え男達が集まっているところに走りこむと、皆からの疑惑の視線を浴びた。

「お客人?剣を装備してどうかされましたか?」

騒動があったかと思い、急いで駆けつけたのにリーダー的な男から逆に問われた。
ふと見ると危機感よりも寧ろ『今日この日を待ちわびていました』と言わんばかりの歓声すら上がっていた。

「お客人?」
「あ、ああ皆が各々武器を片手に集まっていたから騒動が起きたのかと思って」
「此れですか?　これは今から森へ狩りに向かおうと、思っていたところなんですよ?」

男が話していると長老宅からジェニスが弓と剣を手に外へと出て、俺の顔を見るなり驚愕の表情を見せる。
「ミコト殿!?いかが為されました?」

「ジェニス、どうやら客人は騒動が起きたと勘違いして加勢に来たらしい」
「俺の勘違いだったわけだな。　それにしても、ここ数日間はそんな素振りは見せなかったのに如何して狩りなんだ？」
頻繁に狩りをしているなら分かるが、数日間は普通に会話したり農作業などで一緒に生活していたので疑問に思い、聞いてみることにした。

「森での狩りは１０日に１度と決められているんです。　一時期は森の動物を絶滅寸前まで追い込んでしまったため、獲物が取れなくなるのを心配し長老様が２００年ほど前に、お決めになられました」
そんな風に話していると長老が姿を現し、狩りに参加するために集まっていた住民達に狩りの安全祈願と森への祈りの言葉を捧げていた。
長老は数十分に渡って言葉を紡いだ後、参加者を見回し俺と目が合った瞬間に目玉が零れ落ちそうなほど目を見開いて固まってしまった。

「み、ミコト殿？如何して此処に？」

同じ内容を3回も説明する気には、なれなかったので長老の直ぐ近くに居るジェニスに説明を任せた。

「なるほど、そのような事が・・・」
「なぁ、もし迷惑でなければ俺も狩りに連れてってくれないか？ここ数日、する事がなくて暇でしょうがないんだ」
「いや、しかし・・・。分かりました、決して無理はなさらないで下さい」

長老は散々考えた末に無理をしないという約定の元、同行を許可してくれた。
狩りの間、俺のガード役としてジェニスがサポートに着く事になった。
寧ろガード役というよりは俺に無理をさせないための監視役と見たほうがいいかもしれないが。

そして狩りが開始され、各々が其々の方向へ2、3人ずつ森へと入っていった。
俺もジェニスの提案で比較的見通しの良い森へと足を踏み込んだ。
色々な事を思っていると横にぴったりと、くっ付く様に歩いているジェニスが話しかけて来た。

「ミコト殿、此れから森に入って狩る獲物はホーンラビットという角の生えた白い獣です」

ラビットっていうことは兎みたいな奴かな?

「ホーンラビットは比較的大人しい獣ですが、色違いの魔物として凶暴なダークラビットという魔物も生息しているため注意してください」
「分かった。ジェニスも無理はするなよ?」
「はい」

獲物が見つからないまま森に入って数十分が経過した頃、森の広場で向かい合わせに座っている2匹の頭に鋭い角の生えた体長が1m近くもある兎のような外見の白い獣の姿を発見した。

「番(つがい)ですね。これは都合が良い」

ジェニスはそう言い切ると背中に装備していた弓を手にし、矢を引き絞った。
限界まで引き絞った弓から放たれた矢は２００ｍは離れている、目標の頭部に向かって一直線に飛んで行き深々と突き刺さった。

「ピギャッ！？」

器用に角を避けて頭部に突き刺さった矢は一撃でホーンラビットの命を奪い、もう一頭のホーンラビットが逃げる前に新たに放たれた矢が見事、眉間を打ち抜いた。
ジェニスは横目で俺を見てクスりと笑い、言葉を口にした。

「神様である貴方様のご加護でしょうか、比較的、楽な狩りでしたね。　では獲物を回収して村に戻りましょうか」
「まだ時間は早いようだけど？」
「長老様の決めた規則により、狩りは１人１頭と決められているんです」
「そういうことか・・・。　俺は足手まといだったな」
「御気になさらないで下さい。貴方様の御蔭で２頭捕ることができたんですから」

俺とジェニスは１頭ずつ背中に担ぎ、集落まで凡そ３００ｍというところでソレは襲って来た。
木の陰から黒い何かが俺とジェニスに向かって突進してきた。

「ジェニス、危ない！」

咄嗟の事で反応が遅れたジェニスを手で弾き飛ばすと、先程までジェニスが立っていた位置を黒い何かが恐ろしいほどのスピードで通

過していった。

「あれは何だ?ジェニス、大丈夫か!?」
「私は大丈夫です。アレはホーンラビットの色違いであるダークラビットです。凄まじい速度で相手を翻弄しながら襲い掛かる、黒い悪魔とも影の暗殺者とも呼ばれています」
「村の直ぐ近くだからな、見逃せば悪影響を及ぼすかもしれん。此処で始末するか」
「ミコト殿、危険です!」
「大丈夫だよ。アレぐらいの速度なら大したことないし」

俺はジェニスに離れているように指示を出すと剣を構えて魔物の突進に備えた。
数秒後、馬鹿の一つ覚えかのように俺へと向かって猛牛の如く突進してくる黒い兎・・・ダークラビット。
突進してきた魔物を闘牛士のように、ひらりとかわすと目にも留まらない速さで一閃した。
『ズバッ!』

「ピギャーーーー!!」

魔物は断末魔を上げながらも急には停止できないようで、そのままの勢いで俺の後方にあった大樹へと突進する。
木に突進した衝撃で俺が一閃した場所から上半身と下半身に分断された。
物陰に隠れて俺の様子を見守っていたジェニスはあまりにも早業で何が起こったのか分かっていないようだった。

「獲物が1頭増えてしまったな」
「いえ、ダークラビットは魔物ですから、規則には縛られません」

「そうなんだ。　魔物は此処に置いて行くのか？」
「魔物の肉は毒があるため、食べられませんが毛皮や角は価値がありますから持って行きましょう」

そうして俺たちはホーンラビットを元通り背中に担ぎ、ダークラビットの血が地面に落ちないように注意しながら集落への道を歩き出した。
その後、ホーンラビットだけでなくダークラビットまで持ち帰った俺たちに周囲からは驚きの声が長老からは心配の声が集落中に響き渡った。

第８４話　世界樹の異変（前書き）

お待たせしました！
ようやく世界樹の衰退に関する物語に入って行きます

第８４話　世界樹の異変

空が夕焼けで赤く染まる頃、魔法であると思われる打ち上げ花火のような閃光で狩りは終了となった。
その合図から数分後、四方八方の森からワラワラと獲物もしくは武器を背負った狩人達が姿を現す。
狩りを終えた者達を見てみると獲物を担いでいるものは笑顔で陽気に笑っており、収穫が無かった者は周りに慰められながら元気がなさそうに歩いてくる・・・・・。
残念ながら狩りは1人一頭という訳には行かなかったが、各々が森で狩って来た獲物や俺が狩ったダークラビット一頭を含む、合計２３頭が所狭しと長老宅の前にある広場へと集められた。

「いや～今回は大量だったな。　此れで暫くは食料にも衣服にも困らないな」
「全くだ。　長老様の言葉じゃないけど、此れも神様の御加護という奴かね～～」

狩りに参加した者達は苦労を労うために用意された数々の料理と恐らくはアルコール類と思われる茶色の飲み物で上機嫌になっていた。
そんな者達を尻目に先程まで料理を運んでいた女性達が獲物のほうへと歩み寄っていく。
此処からは女性陣の仕事のようで、各々が各家から小型のナイフを持ち寄り、獲物を捌いていった。
獲物の両足をロープで縛り、数人で上下逆さまに吊り下げると血抜きをし、器用にホーンラビットの象徴ともいえる頭の角を根元から切り離し、同様に毛皮も切り離していく・・・。

「あれは如何するんだ？」

俺は隣で黙々と料理を食っているジェニスへ問いかけた。

「ホーンラビットの角を摩り下ろし、特定の薬品と混ぜ合わせる事で貴重な滋養強壮の薬になります。　毛皮については綺麗に洗ったあと、人間の住む街へと持って行き、物々交換に扱われます」

「人間の街に行くのか!?　エルフが普通に街の中を歩いてたら拙いだろ?」

「当然、この姿のままではありませんよ?　遙か昔からエルフに伝わる魔道具によって、姿を人間と変わらない容姿へと変身させるんです」

「そんな魔道具が存在するのか・・・」

ジェニスと話していると作業組も終盤へと差し掛かったようで、角も毛皮も切り取られたホーンラビットは綺麗に一定の大きさへと切り分けられていった。

「あの肉の一部は直ぐに焼かれて食べられますが、残りは干し肉として加工され保存食になります」

まるで聞かれることが分かっていたかのようにジェニスが説明をしだした。

そんな中で気づいた事はといえば、俺が一緒に狩って来たダークラビットだった。

ホーンラビットと同じ様に黒い毛皮を剥ぎ取られたまでは分かるが、それ以降、角を切り取ろうともしなければ肉を切り分けようともしていなかった。

「なぁジェニス、あのダークラビットは如何するんだ?　加工していないようだけど」

「ホーンラビットと違いダークラビットは魔物ですので肉はどんなに加工を施しても毒が残りますし、角も薬にはなりませんからホーンラビットの骨とともに森の奥深くに捨てられます」
「毒があるのなら仕方ないよな～～～」

俺なら致死量の毒があろうと食べられるのだが、混乱を招かないためにも黙っておく事にした。
そんなこんなで夜は更けていき、宴会はお開きとなった。

翌朝、目が醒めると恐らくは二日酔いだと思われる、真っ青を通り越して真っ白な顔をした男達が死体の様に広場の至る所に転がっていた。

（マスター、おはようございます。周りを気にしなければ気持ちの良い朝ですね）
（ルゥも何気に言っている事が酷くないか？）
（気のせいじゃないですか？　それにしても気持ちの良い朝なのですが、何処か不穏な空気というか気配が感じられます。）
（敵か！？）
（いえ、此方に対しての殺気は見受けられません）

何処かから狙っているのかとも考えたが、其処には生きた死体が転がっているだけだった。
時折、呻き声がしているところを見ると本当の死体ではないようだが。
そんな死屍累々な現状を尻目に何時ものように朝食として果物を齧っていると、何か問題が発生したのか、長老が息を切らせながらジェニスとともに此方へと飛びこんできた。

「た、大変でございます！　ミコト殿、ミコト殿ーーーーーー！」

「如何したんですか？　そんなに慌てて」
「魔力が、精霊様が、枯れた木が！」
「とりあえず何を言っているか分からないから落ち着きましょうか、ほら深呼吸して」
「「スーハー、スーハー、スーハー・・・ゲホ、ゴホ、ガハ、ゲホ」」
盛大に咽(むせ)こんだ2人は冷静さを取り戻したようで、息を整えていた。
周りにいる死体のような者達も何があったのか気にはなっていたが、聞き耳を立てる元気は無かったようで・・・・・相変わらずに倒れ伏したままだった。
「落ち着きましたか？　そんなに慌てて一体、如何したんですか？」
「そうでした。　此処では皆の目がありますので、世界樹の方へお越し下さい」
俺は長老とジェニスに連れられ風の精霊が住むといわれる巨木、世界樹へくると驚愕に目を見開いた。
「こ、これは如何いうことだ！？　何故、何故また木が枯れかかっているんだ！？」
「その通りで御座います。　１０日ほど前、貴方様に魔力を注いでいただいて持ち直しをしていた世界樹が今まさに枯れようとしているのです」
前回ほどではないにしろ、明らかに魔力の許容量が下がっている。
もう一度、魔力を注ぎ込んでみるが巨木にではなく、何か別の物に吸い取られているような感覚がある。
「何かがおかしい・・・」

「いかがなされました！？」
「俺の魔力が木に吸収されずに、別の何かにおびき寄せられるかのように移動していく」
「何ですと！！？」

俺は他の精霊を使役し異常や不審物が無いか確認させる事にした。

（ミラ、フレイ、すまないが世界樹の周りを飛んで変な物がないか確認してくれ！）
（分かりました主様）
（了解で～す）
（あ、言い忘れた。　変な物があっても決して手を触れないようにな？詳細を伝えてくれればいいから）

２人（？）の精霊はもう一度返事をすると思い思いの方向へと飛んでいった。
それから数分後、ミラとフレイが驚くべき報告を齎（もたら）してきた。

（主様、ご報告いたします。　フレイとともに調べましたところ、世界樹の根元に十数個の魔力を帯びた石を発見いたしました。　どうやら、その石が魔力を吸い取っているようです）

その報告を受け、俺と長老は驚きの表情を見せる。
ジェニスに至っては精霊の声が聞えないため、暇そうに立っている。

（その石のある場所に案内してくれ）
（はい、此方です）

ミラに案内してもらうと世界樹の根元に微弱な青い光で明滅する十数個の石が見受けられた。

「この石が魔力枯渇の原因か？」

何気なく光っている石に手を触れると、急激な勢いで吸い出される魔力を感じ取り瞬時に手を離した。

「な、何だ今のは・・・。」

「此れが精霊様の言う、原因の石ですかな？」

長老が今まさに石を拾おうとしているのを突き飛ばす事で阻止した。

「な、何をなさるのですか！？」

「その石に触れるな！　魔力を吸われるぞ」

「なっ！？」

俺は長老と何も現状を分かっていないジェニスに注意を促すと足元に落ちていた木の枝を使い、世界樹の根元に置かれていた光る石を木に触れないように突き放した。

すると突然、電池が無くなったかのように謎の石の明滅は収まり、ただの石と変わらない物が地面に転がっていた。

その後、改めて世界樹に魔力を注ぎ込むと何の問題もなく木に吸収されていく。

風の精霊の具合が良くなったと判断して森を離れていたら、どうなっていた事か・・・・・。

第８５話　悪意ある侵入者（前書き）

おかげさまで５００万ＰＶアクセス、６０万ユニークアクセス到達しました！
有難うございます。
今後も『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします

第８５話　悪意ある侵入者

世界樹の根元にて魔力を吸収している奇妙な石を発見した俺は折れた木の枝を使用して手を触れないで石を巨木の根元から遠ざけると、その場に居る長老とジェニスに絶対に石に手を触れない事と誰もこの場に近寄らせない事を言いつけると自分の家に石を入れる入れ物を取りに戻った。
数分後、手に笊を持って再び世界樹を訪れ、器用に石を笊へと載せていく。

「長老、こんな石は見たことがありますか？」
「いえ、ありません。　私も見たことの無い、色々な魔道具が存在しますから、その類でしょうな」
「故意に誰かが此処に置いた可能性があるな」
「しかし此処に来るまでには森の結界を抜けなければなりません。結界を通り抜けられる精霊のメダルがあれば話しは別ですが・・・」
「偶然、外部の人間が辿り着くという風には考えられないのですか？」
「それも有り得ません。　貴方様のように精霊様の加護があれば別でしょうが」

どちらにしろ何らかの方法で、森の結界を潜り抜けた部外者がエルフの集落に侵入して石を此処に仕掛けたというのは間違いなく事実だろうな。

「此処にこのような石が置かれている以上、誰かが近いうちに石を回収しに来る可能性がある。　俺は此処で待ち伏せ、侵入者を捕まえてみる。ジェニスや長老には悪いが、エルフの住民や子供達に此

処に近づかないように注意を促してもらいたい」
「それは構いませんが、貴方様に危険があるのでは？」
「いや大丈夫。俺は不死身ですから」
「分かりました。　ではお任せいたします」

ジェニスと長老はそれだけ言うと、早歩きで村へと戻っていった。
俺はというと周辺に人の気配が感じられないことをミラやフレイに確認してもらい、亜空間への扉を開いて中に潜んだ。
亜空間の扉は作った本人である俺以外には視覚することができない為、潜むにはもってこいの場所になっていた。　おまけに俺の畑で実った食料もあるし、一石二鳥という訳だ。

異空間に潜んでから1日、また1日と日数が経過していき、5日目の夜半時にようやく2人のエルフではない人間の姿が見受けられた。
どうやって結界を抜けてきたのかは分からないが、此処に居ること事態が動かぬ証拠だ。

「魔吸石を設置してから10日だ。　そろそろ満タンになってるだろうな」
「それにしても良い狩場を見つけたもんだぜ！こんな所に魔力の塊があるとはな」
「ああ、このメダルを奪った、エルフの男に感謝だな。　今頃は魔獣の腹の中で消化されてるだろうが」
「まったくだ。　ハッハッハ！」

『エルフの男』だと！？どういうことだ？
扉の隙間から男達を見てみると、片方の男の手には長老から手渡された赤褐色のメダルと同じものが握られていた。
なるほど、エルフの民を襲ってメダルを手に入れたという訳か・・・。

「ん？おい、魔吸石を何処に置いた？」
「見て分からないのか？　木の根元に転がってるだろうが」
「見当たらないから言っているんだよ！」
「そ、そんなはずは・・・。本当だ、確かに何処にも無いな」

俺は男達が不可視の扉の傍を通り越したのを確認後、男達の言う魔吸石を手に異空間から外に出た。

「そこのお二人さん、探してるのはこの石か？」
「「！？　誰だ？」貴様、何者だ？」

男達は誰も居ない筈の場所より声を掛けられ、かなり驚いているようだった。

「質問に答えろ！　お前達がこの石の持ち主で間違いないのか？」
「あ、ああ、そうだ。　？・・・お前、よく見るとエルフ族じゃなく俺達と同じ人間だな？」
「何故俺達以外の人間が此処に居るのかは知らないが、さっさと魔吸石を返して貰おうか」

2人の男は腰に装備している剣に片手を添えながら少しずつ俺に近づいてきた。

「『嫌だ』と言ったら？」
「お前を殺して奪うだけだ」
「2対1だ、石を返すなら今のうちだぜ！」

脅しの意味も含めてか、男達は腰の鞘から細剣を引き抜いて構えた。

「石をお前達に返す気もないし、お前等をこの森から生きて帰す気もない」

そう応えると、見るからに眉間の血管が浮き上がり顔を真っ赤にして襲い掛かってきた。

「舐めやがって！おい同時に切りかかるぞ」

「了解した」

「馬鹿な奴だ、俺達2人に殺されるがいいーーーー！！」

1人は馬鹿正直に剣を持って俺に切りかかり、もう1人の男も別方向から切りかかってきた。

俺も瞬時に剣を抜き、2人同時に剣で打ち合っていた。

『ガキンッ！　キンッ！　ガキンッ』

「やるな、だが防戦一方じゃねえか」

「2対1なら仕方あるまい。　次で決めるぞ」

「了解」

剣で打ち合いながらも反則とは思いながら、雷属性の魔法を掌に作っていた。

「これでトドメだーーー！」

わざと隙を作ってやると『これを待っていた！』と言わんばかりに阿吽の呼吸とばかりに、ほぼ同時に別々の方向から剣を振り下ろしてきた。

「お前がな」

『バチバチバチバチ・・・！！』

「ウギャアアアアアア！！！」

男は剣を構えたまま気絶し、もう1人も咄嗟の事で判断が追いつかず、同じ様に魔法で気絶した。

（マスター、お疲れ様です。簡単に捕縛できましたね）

（そうだな。　だが気になることを言っていたな）

（『エルフの男からメダルを奪った』ですか？　どういう事でしょうか？）

（分からないが、詳しくは縛り上げて尋問だな）

俺はルゥと話をしながら、念のために用意しておいた長いロープで2人の男を背中合わせに雁字搦めに縛り、俺の家へと引っ張っていった。

男2人を無理矢理に引き摺っていったところで夜が明けた。

第８６話　侵入者の運命は？（前書き）

侵入者に対する荒っぽい尋問（拷問？）を期待されていた方にとっては期待はずれかも知れませんが・・・

第８６話　侵入者の運命は？

その後、精霊に侵入者2人の見張りを任せた俺は長老宅へとジェニスと長老を迎えに行った。

「おはようございます。　おっと、すみません食事中でしたか」

軽く朝の挨拶をしながら家の中に足を踏み入れると、長老とジェニス、ニーナと食事しているところが目に入った。

「いえ、構いませんよ。　例の一件ですか？」

長老とジェニスは俺の一言で神妙な顔つきに変わり、ニーナに至っては何にも知らされていないのか首をコテンと傾けていた。

「ああ、悪いんだけど、食事が終わったら長老とジェニスは俺の家に来てくれないか？」
「お兄ちゃん、ニーナは～～～」
「ニーナ、お友達と一緒に遊んで来なさい」
「はぁ～い」

数分後、朝食を終えた長老とジェニスは俺と打ち合わせをしながら侵入者の待つ家へと向かっていた。

「俺があいつ等を尋問するから調子を合わせて欲しいんだ」

俺は長老達に此れから侵入者にする芝居の打ち合わせを始めると・・・ジェニスが堪えきれずに笑い出していた。

「しかし、そう簡単に口を割りますか？」
「なぁに、命の危機に陥れば口を割るものさ」
「こんな事を言っては貴方様に失礼になりますが、悪戯を考えている子供のような表情をなさってますよ？」
「そうか？表情に出てしまってるか」

その後、2人を連れて家に戻ったが侵入者は雷撃で気絶させた状態のまま微動だにしていなかった。
一瞬、雷魔法の威力が強すぎて殺してしまったかと考えたが、脈を取ってみると気絶しているだけのようだった。

「こやつ等が世界樹に悪さをしていた侵入者ですか」
「それにしても、どうやって森の結界を抜けてきたのでしょうか？」
「それなんだが『エルフの民を襲ってメダルを手に入れた』という会話をしていたようだが、何か心当たりはありますか？」

長老は腕を組んで考え始め、何かに思い当たったように話し始めた。

「ミコト殿が来られた時に少し話をしましたが、以前この家に住んでいた者が数ヶ月前、森に狩りへと出かけたまま行方知れずになってしまったのです。　その後、終了時間になっても帰ってこなかった事から皆で捜索にあたったのですが、地面に夥しい血痕があった事から魔物に襲われたと判断したのです。　数時間に渡り捜索しましたが何の手がかりも得られずに捜索を断念しましたが」
「たまたま森へと来ていた男達に襲われたとも考えられるな」
「確証は御座いませんが、その可能性はありますね」

色々と会話をしていると雁字搦めに縛られている男達から呻き声のような声が聞こえだしていた。

「う、う～ん・・・。　！？此処は何処だ？」
「相棒、無事か？　何故、身体が動かん！」

2人の男は縛られている事に意識が追いつかず、身体が動かない事に動揺しているようだった。

「ようやく目が醒めたか」
「て、てめえはあの時の！？」
「目覚めた早々で悪いが質問に答えてもらうぞ？　まず、お前達は何者であの魔吸石と呼んでいた石はなんだ？　それから、お前達が襲ったと言っていたエルフの民を如何した？」

俺は立て続けに身動きの取れない男達に質問を投げかけた。

「そんな簡単にペラペラと事情を話すとでも？」
「我等にもプライドがある。　そう簡単には口を割らんぞ」
「貴様、この期に及んで」
「ジェニス待て！この場は俺に任せろ」
「し、しかし・・・」
「ジェニス！」
「・・・分かりました」

男は此れからの事を予想できていないのか、口元を緩ませて笑っている。

「茶番は終わりか？　なら、さっさと縄を解いて俺たちを解放し、魔吸石を返しな！」
「昨夜もお前達に言ったと思うが、俺は石を返す気も無ければお前達を森から帰す気もない」
「ど、どういう意味だ？」

「こういうことだ」

俺が縛られている2人を引き摺って家から出ると、森の中へと足を進め始めた。

「み、ミコト殿!?　今はダークラビットの繁殖期を迎えているため森の中は危険です。　集落の周りには魔物が入れない結界が張ってありますが、一度(ひとたび)森に足を踏み入れれば命の保障は出来ませんぞ」

侵入者らは散々俺に罵声を浴びせていたが、長老の言う言葉で顔色を真っ青に染め上げていた。

「なぁに、こいつ等を森の中に捨ててくるだけだ。　用が済んだら直ぐに戻ってくるさ」

「ま、待て!エルフは人間を殺すのは禁じられているのではなかったのか!?」

「何処で誰に聞いたのかは知らんが、俺がエルフに見えるか?　それに手を下すのは俺ではなく、森に巣食う魔物だ。　お前達2人は仲良く魔物の腹の中という訳だな」

俺が話し終えた途端に図ったかのように魔物の遠吠えが森の中から聞えてきた。

「遺言はそれだけか?なら行くぞ」

「わ、分かった。　何でも話す、だから命だけは助けてくれ!」

「・・・プライドがあるのではなかったのか?」

「下らんプライドよりも命の方が何倍も何十倍も大切だ」

男は目に大量の涙を浮かばせながら何度も何度も「殺さないでくれ!」と懇願し謝罪してきた。

まぁ、手足を縛られて身動きできない状態で魔物に襲われれば、結果は火をみるより明らかだろうが。
俺は森に足を踏み入れる一歩手前で踵をかえし、2人を家の中へと連れ帰った。

実はジェニスとの物言いも、長老の『魔物の繁殖期』というのも全くの出鱈目で、事前に打ち合わせをしていたものだった。
魔物の遠吠えは全くの偶然であったが・・・・・・。
さて尋問を開始しようか！

第87話　尋問開始

魔物が繁殖期により、活性化しているという森へ侵入者を捨てに行くという、長老との芝居（というか脅し？）が終了した後、再び場所を俺の家へと移し、事情聴取を再開する事にした。

「それで？お前達が世界樹に設置した、この石は一体なんなんだ？」

手に持ってしまうと魔力が吸収されるため、カゴの中にいれて男達の目の前へと差し出す。

「それは魔吸石といって、魔力を蓄える代物だ」

「お前達が作ったのか？　魔力を吸い込んで何に使うつもりだったんだ！？」

顔を真っ赤にして、今にも殴りかかろうとしているジェニスを長老が何とか押さえ込み、男への尋問を続けた。

「作ったのは俺たちじゃない、俺達は其れを満タンにする様、依頼を受けただけだ」

「依頼？　何処の誰に！？」

「此処から6時間ほど歩いた場所にあるメグレスの街に住む、ドゥールという男から魔力を限界まで注ぎ込むように命令されたんだ。魔吸石をどう使うかは知らねえが、魔力が満タンになった石と引き換えに、大量の金が貰えるからな。　良い小遣い稼ぎって事だ」

男達にとっては小遣い稼ぎでもエルフの森にとっては精霊の命の危機だったので、男達とは裏腹にジェニスは勿論の事、長老からも目に見えるほどの殺気が滲み出ていた。

「それじゃあ次の質問だが、森の結界をすり抜ける事ができるメダルを何処で手に入れた？」
「メダル？　ああ、赤褐色のアレの事か・・・。アレなら森で道に迷っていた時に偶然通りがかった、出口まで道案内してくれた親切なエルフの兄ちゃんを殴り倒して奪ったんだが？」

『エルフの青年』という単語を聞き、長老は思い当たる節があるのか手を顎に当てて考えているようだ。

「あのエルフのおかげで大分儲けさせて貰ったからな、感謝してるぜ。　名も知らないエルフさんよ」
「き、貴様！　そのエルフの男を如何した！？」

長老が考え事で場を離れてからジェニスを押さえつける者は居なくなり、怒りが今にも爆発しそうなジェニスは剣を抜き、男達に詰め寄った。

「何をしたかと聞いているんだ、答えろ！」
「ジェニス、落ち着け」
「し、しかし・・・」
「二度は言わんぞ」
「分かりました」

ジェニスは渋々ながらも剣を鞘に収め、壁に寄り掛かりながら視線だけで人を殺せそうな目で男達を睨みつけている。

「それで？　質問の続きだが、エルフの青年を如何したと？」
「さあな殴り倒して道具を奪ったあと、その場に置き去りにしたからな今頃は魔物の腹の中で消化されてるんじゃねえか？」

「この道具の事を誰かに話したり、複製したりしたことは？」
「はんっ！　大切な商売道具を誰かに教えたり、見せたりしたとでも？　そんな馬鹿な真似はしねえよ」
「一時期はドゥールに見せようかとも考えたが、奪われると厄介な事になるからな、黙っていた」

あまりにも簡単に事情を話すので途中からミラに探らせていたのだが、嘘をついているような息遣いや動悸は感じられなかったとの念話が届いた。

「俺が質問は以上だ。　長老、何か考えているようでしたが、こいつ等に聞きたい事はありますか？」
「一つだけ宜しいですかな？　メダルを奪ったというエルフの青年じゃが、右目の下に火傷のような跡がありませんでしたかのぅ？」
「火傷？　そんな物あったか？良く憶えてねえな。　お前は何か知ってるか？」
「そういえば、頬に蚯蚓腫れのような跡が薄っすらとあったような・・・其れがどうかしたのか？」
「やはり・・・」
「長老？」
「私の質問は以上です」
「さて此れで尋問は終了なんだが、こいつ等を如何しようか？」
「何でえ、解放してくれるんじゃないのかよ？」

『何で！？』とか『人でなし』だのと五月蠅かったため、軽い雷撃で眠ってもらう事にした。
「解放か・・・それは難しいだろうな、だが殺すのもな」

俺が縛られ気絶している男達を見ながら考えていると、長老が近寄ってきた。

「それではこうしましょう。　結界のメダルを没収した上で縄を解き、森へ放置します。運が良ければ森を抜けられるでしょう」
「そんな長老様、ミコト様！　私にこの者たちの処分を命じてください」
「それは駄目だ。　下手をすると人間対エルフの戦争が勃発してしまう」
「ジェニス！　我等エルフ族には如何なる事情があろうとも、人間に危害を加えること罷(まか)りならんという掟があることを忘れたか！？」
「それじゃあ皆が寝静まった頃に俺が森の外に捨ててくるよ。　ちょっとドゥールという男の事も気になるから序(ついで)に街も見てくるさ」
「それですと貴方様が危険ではありませんか？」
「忘れたんですか？　俺は不死身ですよ」

俺がそう言うと長老は黙って引き下がり、ジェニスは連れて行って貰いそうな目で訴えかけてきた。

「あの～お邪魔でなければ私も連れて行ってもらえませんか？」
「すまないが、ジェニスはこいつ等に顔を見られているからな危険だ。　大人しく森で待っていてくれ」
「・・・分かりました。　申し訳ありません」
「ところで長老、さっき聞いていた火傷の事は如何いうことだ？」
「先程お話した、行方不明になった者の顔に火傷があった為、もしやと思ったのですが」
「予想が的中したという訳か」
「はい。　この者達が持っていたメダルに少なからず見覚えがあったものですから」
「そうだったのか」

途端に暗い話しになってしまい、長老とジェニスは顔を俯かせたま

ま自分の家へと戻っていった。
それから数時間が経過し、皆が寝静まった頃2人を担いで森の外へと足を進めた。
その間に一旦、侵入者たちは目を醒ましたが、再度電撃により気絶させた。

侵入者も捕らえ、結界を無効にするメダルをも取り上げた事で、もう世界樹に危機が迫る事は無いと思うが念のためにフレイを監視につけることにする。

何かあればフレイからミラに連絡が届き、ミラから俺へと報告が来るだろう。

第８８話　予期せぬ同行者

現在俺は森を抜けるまで３０分と掛からない場所に居た。
侵入者２人については軽く目を覚まさせた後、村と森の入口との中間点に縄を解いて放置してきた。
２人の俺とあれだけの打ち合いをした実力があれば魔物に殺られる事はないだろうと判断したからだ。

（マスター、気がついていますか？）
（気づかないでか。あれだけ下手な尾行を？）
（そうですよね）

村を出てからず～っと、俺の後方を歩いてくる誰か（誰かは分かっているが・・・）が俺に悟られないように木の陰に隠れるなどして後をついてくる。
何の予備動作も見せずに瞬間的に後を振り向くと、咄嗟に木の陰へと身を翻したのか長い髪が風で揺れていた。

（全く、バレバレだというのに・・・そうだ！）
（マスター、何かを思いついたようですね。　悪戯を思いついた子供のような顔をしていますよ？）

俺は溜息を一つすると、何事も無かったかのように森の出口へと足早に足を進める。
後方の尾行者の気配を探ると必死に見失わないようにしているようだった。

森の出口まで残り５ｍ、３、２、１・・・！
森を抜けた瞬間に思いっきり、上空へとジャンプする。

追いかけてきたものは突然姿が見えなくなった俺を慌てたような表情でしきりに探している。

「ど、何処に！？」

前後左右キョロキョロと目を走らせている者は流石に上には視線は行かないようだった。

俺は『誰か』の後方に降り立ち、肩を手で掴んで声を掛ける。

「おい！」

「ひゃあぁぁぁぁ！！？」

俺の姿を探すのに夢中になっていたのか、突然背中から声を掛けられて吃驚し、座り込んでしまっていた。

「おいおい、何でこんな所に居るんだ？　なぁ、ジェニス」

思っていた通り、尾けて来ていたのは森で待っているはずのジェニスで俺を振り向き様に泣きそうな顔をしていた。

「森で待っているはずのジェニスが如何して此処にいるんだ？」

「もしかして気づかれてました？」

「当然だ。あんなバレバレの尾行をしておいて。　気配が丸分かりだったぞ？」

「アウゥゥゥゥ・・・・・」

ジェニスは座り込んでいた体勢をもどして立ち上がると俺に話しかけて来た。

「長老様よりミコト様の手助けをしろと言われました」

「手助けね～　で、本心は？」
「ミコト様に付いて行って外界を見てみたいなぁ・・・っと」
「やっぱり。　まぁ来てしまったなら別に構わないが、エルフ独特の髪の色と長い耳は如何する気だ？」

人は自分達とは違う生き物に対して恐れを抱き、場合によっては殺意を抱いて襲い掛かってくる。

「そんな時のために長老様からエルフに伝わる魔道具をお借りしてきました」
「魔道具？」
「はい。見ててくださいね」

ジェニスは徐(おもむろ)にポケットから取り出した玉虫色のブローチのような物に、同じく取り出したナイフで自分の指を傷つけて血を出すと１滴だけブローチに滴らせていた。
次の瞬間、ブローチとともにジェニスの身体は赤い光に包まれ、光が収まると同時に髪の色は赤に変化し耳の形も普通の人間と変わらないようになっていた。

「どうですか？これならエルフだってばれないでしょ？」
「その魔道具は？」
「此れは姿身の装飾具といわれる魔道具で対象の血液を垂らす事で、思い通り姿に数日間だけ、姿を変えることが出来ます」
「なるほど、これなら問題なく街に入る事ができるな」

こうして俺はジェニスとともに森から半日歩けば着くというメグレスの街に行く事になった。
歩き始めてから5時間が経過した頃、幽かながらに蜃気楼のように街が見えてきた。

「あ、あれがメグレスという街ですね。早く行きましょうよ」
「行くのは良いんだが、この音はなんだ？」
数分前から何かがゴォゴォという音を立てながら次第に近づいてくるような感じがしていた。
「そうですねぇ？　何の音なんでしょう？」
2人して音の正体を確かめようと辺りを見回していると、はるか後方より巨大竜巻が差し迫っていた。
「な、なんですかアレーーーー！？」
「このままじゃ巻き込まれる！　走るぞ」
俺は咄嗟にジェニスの手を取ると全力で街へと走った。
「み、ミコト様ーーー速過ぎますーーー！！」
「黙っていろ。舌をかむぞ」
こうして俺はジェニスの悲鳴をＢＧＭに街へと文字通りに飛び込んだ。
「此処までくれば安全かな？」
手を握り締めているジェニスに話しかけるも、返事は戻ってこなかった。
「ジェニス？如何した？」

ジェニスをみると、何時の間にか白目を剥いて気を失っていた。

（マスター、仕方ありませんよ）
（どうしてだ？）
（マスターならいざ知らず、生身の人間であるジェニスがあの速度に耐えられると思いますか？）
（た、たしかに・・・）

街まで残り６時間は掛かる距離を巨大竜巻から逃げるためとはいえ、１時間も掛からずに踏破したのだから、速度はかなりのものになっていただろう。

その後、まだ日は高かったがジェニスを背中に担ぎ、宿屋へと歩いていった。
部屋にジェニスを寝かせたあと、この世界の通貨を持っていない事に気がついた俺は亜空間倉庫から適当に数個の道具を取り出し、街の道具屋で換金した。

この世界の物価は良く分からないが、マルベリアで銀貨１枚で購入した道具が此処で銅貨８０枚で売却できた事から、それほど物価が変わらない事を感じた。
こうして無事に宿代を手に入れた俺はジェニスの意識が戻る事を待ちながら、その日は宿で一泊となった。

第８９話　元凶のもとへ潜入（前書き）

お待たせしました。

どういう展開に持っていこうか散々悩み続け、漸く形にすることが出来ました。

第89話　元凶のもとへ潜入

結果から言えば、ジェニスが目を覚ましたのは日が完全に落ち、空が夕焼けから暗闇になる直前だった。

「はっ！？　此処は何処なんでしょうか。知らない天井です」

某転生者のような台詞とともにベッドから勢い良く起き上がりキョロキョロと辺りを見回している。

「ようやく起きたのか」

「あ、ミコト様、おはようございます」

「おはようって・・・。今は夜だぞ？」

「申し訳ありません。それで此処は何処なのですか？」

「此処は目的地であるメグレスの宿の一室だ。竜巻から逃げるためとはいえ全力で走ってしまったからなジェニスが速度に耐え切れずに気絶してしまったんだ、それで担いで宿屋に運んだというわけだ」

俺が此処に居る理由からジェニスの意識が途切れてしまった内訳を話していくと、まるで信号が赤から青に変わるように顔色が変わっていった。

全てを話し終えると先程までベッドの上で話しを聞いていたジェニスはベッドから飛び降りると床で土下座のような格好で泣きながら平謝りをしだした。

「重ね重ね御迷惑をお掛け致しまして、誠に申し訳ありませんでした！」

「いや俺と違ってジェニスは普通の人間だからな、しょうがないさ。だから顔を上げてくれないか？」

「は、はい・・・」

ジェニスは俺に許しを請うと、涙を袖で拭いながら静かに立ち上がり、俺に一礼して椅子へと移動した。

「これから如何なさるのですか？」

「あの侵入者の2人から聞いた話では魔吸石に関係してるのは、ドゥールという魔道具作成の権威だという事だったから此処は一つ、芝居を打とうかと思ってね」

「芝居・・・ですか？」

「ああ、俺がこの世界に渡る前に購入した魔道具をドゥールに売りに行くか。　もしくは魔吸石の事を拾ったとか言って潜入するかだけど・・・魔吸石を渡すような馬鹿な真似はしないけどな」

そう言って俺はジェニスが眠っている間に異空間倉庫から取り出した体力回復の永続効果のある腕輪と壊れかけの魔道具をテーブルの上へと置いた。

「前者なら交渉が必要なだけで危険なことは何も無いが、もし万が一に後者になってしまった場合はジェニスに何らかの身の危険がある」

「ミコト様、私なら構いませんので、お気になさらないで下さい」

「駄目だよジェニス。　自分の命を軽視しては、俺は敵味方誰にも特に仲間には傷ついて欲しくはないんだ」

「仲間ですか、ありがとうございます」

ジェニスは俺に仲間と言われた事により、先程の悲しみの涙とは違う嬉しさの涙で頬を湿らせていた。

「それでだ。後者だった場合は危険だからな、この腕輪を随時装備

しておいてくれ」

そう言ってテーブルの上に置いてある、腕輪をジェニスに差し出した。

「この腕輪は？　何か魔力を感じますが・・・」

「これは体力回復の永続効果のある魔道具だ。　装備者の怪我の治りを早めてくれる効果がある」

「ありがとうございます」

「此れはあくまで保険だという事を憶えておいてくれ。　俺のことは心配しなくても良いから、絶対に自分から危険な真似はしないように！分かったね？」

「分かりました」

ジェニスとの今後の確認をしていると、部屋の扉をノックする音が聞えてきた。

「お客さん、夕食の準備ができましたよ」

「分かりました！直ぐに行きます」

俺が其れだけを言うとパタパタという足音とともに気配が遠ざかっていった。

「まずは腹ごしらえだな。　ジェニスも今まで寝てたんだから腹が減っているだろ？行くぞ！」

「は、はい！」

その後、俺もジェニスも初めて口にする見た事の無い料理に違和感を憶えながら恐る恐る口にしていた。

結果から言えば良くも悪くも無い普通の肉料理であったが、何の肉

であったかは教えてもらえはしなかった。
そして夜が明け、実行に移す時が訪れようとしていた。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

宿代として銅貨５０枚を支払って宿屋を後にしたが、最後まで高いのか安いのか分からなかった。

「それでは如何しましょうか？」
「まずはドゥールの屋敷が何処にあるかからだな」

おれはとりあえず、近くで食べ物屋を開いている男に道を聞く事にした。

「すいません、ちょっとお尋ねしたい事があるのですが？」
「ん？何か聞きたい事があるなら商品を買ってくれないか？」

屋台の店主は何かを買ってくれなければ質問には応じないという、頑固な性格だったため一番安い果物のジュースを２人分購入する事にした。

「はぁ、分かりました。それじゃあ、この飲み物を２つで」
「まいどあり、銅貨１０枚だ。　それで聞きたい事ってなんだ？」
「えっと、この街に魔道具製作の権威のドゥールって人が住んでると聞いたんだけど、場所が分からなくてね」
「ああ、それなら此処の正面にある、赤い煙突が立っている建物がそうだよ」
「まさか目と鼻の先にあったとは・・・」
「兄ちゃん達、この街の住人じゃないね。　ボラれないように気をつけなよ？」

「分かりました。　ありがとうございます」

屋台の店主に教えられたとおりに屋敷へと足を運ぶと入口の扉には大きく文字が書かれていた。

“用の無い者、ひやかし、お断り！　ただし、珍しい魔道具を持つ者は大歓迎！！”と・・・。

俺は用意しておいた魔道具にそっと手を触れ、扉をノックする。

数秒後、扉が開かれ中から立派な口髭が特徴の中年男性が姿を現した。

「何か御用ですかな？　扉に書いてあります通り、冷やかしはお断りですぞ？」

「冷やかしでは御座いません。　珍しい魔道具を持っていますのでドゥール様にお目通り願えませんか？」

俺が珍しい魔道具と口にすると明らかに目の前の中年男性の目の色が変化した。

「魔道具ですかな？　ふむ、ご迷惑でなければ見せてもらってもよろしいですかな？」

「あ、はい。これです」

俺はポケットに無造作に入れていた腕輪型の魔道具を目の前の男性にそっと手渡した。

「ふむ、確かに見た事の無い魔道具ですな。　分かりました、御主人様に御会いなさって下さい。　申し遅れました、私は此方の屋敷で執事をやらせて頂いておりますセイバスと申します。以後お見知

りおきを・・・」

そう言って中年男性（セイバス）は深く頭を下げた後、俺とジェニスを館の中へと促した。

「それでは此処でお待ちいただけますかな？　直ちに御主人様を御呼び致しますので」

俺とジェニスが通された部屋はというと何に使うのかサッパリな道具で飾られていた。
魔力を感じる事から一つ一つが魔道具である事は確かだったが・・・。

「はい、分かりました」
「それでは」

男はそう言い残すと、音も無く扉を閉め部屋から去っていった。

（マスター、何やらセイバスと名乗られた方から不穏な気配がいたします。　私の気のせいかもしれませんが、油断はなさらないでください）
（あの執事が魔物の化けている姿だと？）
（可能性としては否定できませんが）

ルゥからの気になる言葉を聞いていると、ジェニスが興奮した口調で話しかけて来た。

「ミコト様、第1段階は成功ですね」
「何処に目や耳があるか分からないんだ、そんな事を口にしては駄目だ」

「申し訳ありません」

だがジェニスの言う事も最もだ。此れから無事に事が進めばいいが・・・。

この後、心配していた事が現実に起ころうとしているが、この時はまだ分からなかった。

第９０話　魔道兵器（前書き）

総合評価がついに大台の１００００ｐｔに到達いたしました！
読んでくれている読者の皆様方に深く感謝いたします。
ありがとうございました！

此れからも『異世界を渡りし者』を宜しくお願いいたします。

第９０話　魔道兵器

俺とジェニスが屋敷の応接室へと通されて数分後、２人分の足音が近づいてきた。

「やっと来たみたいだな」

「緊張しますね」

そんな会話をしていると徐(おもむろ)に音も無く扉が開いた。

「お待たせいたしました。　此方が我が御主人様であらせられるドゥール様で御座います」

セイバスに連れられて部屋に入ってきた男をみると成金貴族でありがちな、ブヨブヨな御腹を揺らせながら脂ぎった顔の太目の男だった。

「セイバスゥーー、この者達が客人か？」

「お初にお目にかかります、私はミコトと申します。こっちはジェニスです」

太っちょ男性を見て直ぐに自己紹介をし、隣で笑いを堪えているジェニスの足を抓んで頭を下げさせた。

小声で文句を言っているが聞かなかった事にしておこう。

「あーよいよい。堅苦しい事は抜きにして魔道具を見せてもらってもいいかのぅ？」

ドゥールはドスンっと椅子に腰掛け、今か今かと子供のように待ち

わびているようだった。
「あ、はい、此方がそうです」
「ほう？セイバスの言っておった通り、見た事が無い代物じゃのう」
「恐れ入ります」

ドゥールは目の前に置かれた魔道具を引っ繰り返して見てみたり、ルーペのような物を取り出して舐めるように必死な形相で見ていた。

「此れを何処で手に入れたのじゃ？　見た事の無い文字が彫ってあるようじゃが？」
「此処よりはるか遠方にある商業都市で売られていた魔道具です。効果は装備者の体力回復です」

まぁ遠方といえば遠方だな。　たとえ何日掛かろうと何年掛かろうと辿りつくことは出来ないが・・・。

「体力回復の効果か、すまんが此れを売ってはくれまいか？銀貨５０枚でどうじゃ？」

俺も見せるだけで売る事までは想定してなかったので腕を組んで考えていると、その行為を勘違いしたのか次の瞬間には交渉をしだした。

「そなたが貴重な魔道具を手放したくない気持ちは良く分かるが、此方としても是が非でも手に入れたいのじゃ！頼む、金貨１枚で売ってはくれぬか？」

うまく行けば魔吸石を材料にして作られる魔道武器が見られるかもと思い、交渉する事にした。

「其処まで言うなら分かりました。ただ条件があるのですが宜しいですか？　それによっては銀貨５０枚で売ってもいいですから」
「本当か！？　何でも言ってみるが良い、余程のことでない限り条件を飲むぞ？」
「それでは・・・風の噂で聞いたのですが、此方では魔力を糧として動く魔道兵器があるとお聞きしました。私も魔道具にはとても興味があるのでお見せしては貰えませんか？」
「ほう？耳が早いのぅ、そんなもので良ければ直ぐにも見せてやろうぞ」
「良いんですか？」
「構わん構わん、セイバス！この者達を案内しろ。それと銀貨５０枚も手渡してやれ」
「了解いたしました」

そうしてセイバスの案内のもと、倉庫へとやってきた俺たちはバズーカ砲のような魔道具を見せてもらった。

「此れがドゥール様が長年研究し作り上げた魔道兵器で御座います」
「これはまた・・・独特な形をしていますね。何処から魔力を注ぐのですか？」
「いえ、魔力を注ぎ込むのではなく、現在は此処にはありませんが魔吸石という魔道具から魔力を取り出して其れをセットして打ち出します」
「魔吸石ですか？それも聞いたことはありませんが、どのような物なのです？」
「知らなくて当然です。　魔吸石は一般には販売してはおりませんので・・・仕様も残念ながら極秘扱いとなっております。」
「込み入った事をお聞きして申し訳ありませんでした」
「いえ、此方こそお役に立てなく申し訳ありません」

そうか魔吸石はあいつ等から奪ったアレが全部なんだな？　アレさえなければ魔道兵器は只のガラクタという訳か。

「それでは私の用は済みましたので、此れにて失礼させていただきます」

「何のお構いも出来ず」

「いえ、そんなことは・・・。」

その後、何のトラブルも無く館の外へ出て宿屋へと歩いていった。振り返ると此方に向けて只管にお辞儀をしているセイバスの姿があった。

「ミコト様、うまく行きましたね。どうなる事かと冷や冷やしました」

「まだ分からないぞ？　もしかしたら襲撃があるかもな」

「怖い事、言わないで下さいよ・・・」

ジェニスと歩きながら喋っていると、不意にミラからの念話が届いた。

（主様、聞えますか？）

（ミラか、如何した？　何かあったのか？）

（いえ、フレイからの知らせで風の精霊が意識を取り戻したと報告がありました）

（そうか良かった。なるべく早く戻るから待っていてくれと伝えてくれ）

（分かりました。）

「ミコト様？何かあったのですか？」

「ああ、ミラからの知らせで風の精霊の意識が戻ったんだそうだ」

「本当ですか！？なら直ぐに出発しましょう！」

今にも走って行きそうなジェニスの手を掴み、落ち着かせる。

「まぁ待て、今から出発したら向こうに着くのは真夜中だ。　此処は宿屋で一泊して、明朝に出発する方がいいだろう。真っ暗闇の中で魔物に襲われたくはないだろ？」

ジェニスは俺の『魔物に襲われる』という言葉で実際に想像したのか軽い身震いをしていた。

「・・・分かりました。そうします」

そうして少し早いが数時間前に出発した宿屋へと戻ることになった。

その頃、ドゥールの屋敷では・・・・・・

「セイバス、この魔道具を研究班に渡し、解析をしてくれ！」

「了解いたしました。　それで、あの者達の処分はいかが致しましょうか？」

「ほっとけ。見た感じでは魔力は極僅かしか感じられなかった。放っておいても害は無いだろう」

「分かりました」

「ところで魔吸石を預けた2人はまだ戻って来ぬのか？　幾らなんでも遅すぎるだろう」

「未だ戻ってきた形跡は御座いません。　捜索隊を出しましょうか？」

「そうしてくれ！場合によっては魔吸石だけでも回収して来いよ？アレには予備は無いのだからな」

「はい。それでは失礼致します」

そう言ってセイバスは扉を開いて立ち去っていく・・・。

「ふはははははは!!これであの魔道具が複製できれば大儲けができる!あの者達に感謝だな」

ミコトが一番の儲けの元となる、魔吸石が無くなる原因を作った本人だとは知らないドゥールは、その後延々と高笑いをし続けていた。

そしてセイバスはというと・・・

「ドゥールは『ほっとけ』と言っていたが、何かが気になるな。我が手の者に始末させるか」

セイバスが誰もいない部屋の中で手を叩くと空間に魔方陣のような物が浮かび上がり、次の瞬間には翼が生えた獣が床に鎮座していた。

「来たか・・・標的は黒髪の男だ、処理方法は任せるが確実に息の根を止める事。　以上だ、では行け!」

翼のある獣は一言の言葉も発せずに頭(こうべ)を下げると黒い靄を身体から噴出し、数秒後には身体を掻き消していた。

「ふふふっ此れで我が計画は最終段階へと進む・・・待っておれ!愚かなる人間どもよ」

ミコトが懸念していた、そしてジェニスが恐れていた襲撃が今まさに実行されようとしていた。

第９１話　黒き襲撃者（前書き）

お待たせしました！

少しばかり展開に悩んでしまいました。

第９１話　黒き襲撃者

ドゥールの屋敷にて魔道兵器の実情を知ったミコトとジェニスはというと。
屋敷から宿屋の自室に戻った直後、ジェニスが使用していた姿見の魔道具の効力が切れ、元のエルフの姿へと戻っていた。
そのため魔道具が再使用可能となる翌朝まで人前に出る事が出来ず、病人扱いされる事となった。

「お連れさんの具合は大丈夫かい？」
「ええ、この街までの慣れない長距離移動をした所為で疲れが出てしまったんだと思います」
「それなら体力がつく料理を作らないとね」
「お手数をお掛けします」
「構わないよ。　大事なお客様だからね」

それから数分後、宿の主人特製の薬膳粥を持って自室に戻ると申し訳なさそうな表情のジェニスが椅子に腰掛け佇んでいた。

「ミコト様、申し訳ありませんでした」
「謝ることは無いさ、誰の所為でもないし。　魔道具の効力が切れただけに過ぎないのだから」
「はい」
「あと宿の主人にはジェニスは長距離移動での疲労と言う事にしてあるから、それと此れは主人特製の薬膳粥だよ」
「何から何まで・・・。　私が付いて来なければ、このような事にはならなかったのに」
「俺を手助けするように長老から言われたんだろ？　気にしなくてもいいさ」

「違うんです！」
「え！？　何が違うんだ？」
「この事は長老様は知りません。　私が独断で付いてきただけです」
「やっぱりそうだったか・・・」
「えっ！？　何時から気づいてらしたのですか？」
「最初からだよ。　長老に言われて手伝いに来たのなら、俺を尾行する必要は無いだろうしね」
「重ね重ね、申し訳ありませんでした」
「だから構わないって、ところで魔道具は翌朝には使用できるようになるんだよね」
「はい、それは間違いないかと」
「明朝一番に宿を出て森に向かうから、それまで身体を休めておいてくれ。　もしかしたら竜巻以上の災難が降りかかる恐れがあるから」
「？　分かりました」

ジェニスは其れだけを言うと何時の間にやら食べ終わっていた、薬膳粥の入っていた空の器をテーブルに置きベッドに横になってしまっていた。
数分後には本当に疲れていたのか静かな寝息を立ててジェニスは熟睡していた。

（ところでルゥ、あの話は本当か？）
（屋敷を出た時に感じた不穏な気配の事を言っているのでしたら、間違いありません。）

魔道具の効力を失って耳がエルフ特有の長い耳に戻りかけていたジェニスを逃げるようにして宿へと飛び込む直前に、ルゥから強大な何者かの気配がドゥールの屋敷内からすると報告を受けていたのだ。

（街から外に出た瞬間、俺たちを襲おうとしていた魔物が居たという訳か）
（そう考えるのが妥当だと思いますが、確証はありません）
出来ればジェニスを巻き込みたくは無いので出会わない事を祈りつつ、その日は眠りについた。
翌朝、魔道具で姿を変化させたジェニスとともに宿を出発して森へと向かう事にした。

「昨日も言ったが、竜巻以上に魔物が現れる可能性が大だ。注意して進むぞ！」
「分かりました」

ジェニスに注意を促しながら砂漠を歩き続ける事、数時間・・・。
ようやく森の入口が見え始めた頃、何者かの殺意ある気配が背後から俺たちに襲いかかろうとしていた。

「ジェニス、森へ走れ！急げ！！」
「しかしミコト様は」
「俺のことは構うな！振り向かずに森に逃げ込め」
「は、はい」

ジェニスが森へ逃げ込むのを確認した後、気配のする方へと剣を向けて立ちはだかった。
剣を抜いた理由としてはルゥの言うとおり、何者かの気配を感じたことと相手が俺しか見ていなかった事だ。
それが証拠に森へと逃げ込んだジェニスに対して気配は動いては居なかった。

「何者だ！姿を見せろ」

「黒キ髪ヲ持ツ者・・・殺ス！」

ソレは空中から黒い靄を見に纏いながら姿を現した。
その形といえば黒豹に鷹のような翼が生えた獣だった。

「アノ御方ノ命令ニヨリ、貴様ヲ処分スル！」
「『あの御方』？　何のことだ！」
「問答無用！」

黒き獣は上空から飛来しながら俺目掛けて突進し、鋭利な爪で引き裂くように攻撃したり、口からブレスを吐いたりして俺を苦しめる。

「サンダーボール！」

魔法を放って、空中を移動しながら襲い掛かってくる魔物を攻撃するが、速度が早すぎて捉えきれず不発に終わった。

「駄目だな・・・捉えきれん」
「フフフッ、人間如キノ魔法デ我ヲ倒セルト思ッタカ！」

魔法を放った直後の無防備になったところへ口から火炎ブレスを吐いて俺を苦しめる。

（マスター！　大丈夫ですか？）
（俺は不死身だから特に問題はないが、このままでは埒があかないな。　こうなったら捨て身の行動に移すしかないのかもな）
（私的には、あまり賛成しかねますが・・・）
（だが、この場合は仕方ないだろう）

ルゥを無理矢理納得させた俺は攻撃で致命傷を受けたように見せか

けるため、滑空しながら襲い掛かってくる鉤爪での攻撃をワザと受け、別段傷は負ってはいないが手を攻撃を受けた場所に携え、地面に跪いた。

「ククク、ツイニ力尽キタ様ダナ。　人間ニシテハ頑張ッタヨウダガ、此レデ止メダ！」

黒き獣は口から此れまで以上の大きさの火炎球を打ち出しながら、其れと同時に鉤爪のような鋭利な爪で同時攻撃を繰り出してきた。俺はこのままでは埒が明かないと感じ、自分から打ち出された火炎球に飛び込むようにして剣を構えて飛び掛った。

「ナニ！？」

黒き魔物も逸早く俺の捨て身の行動に気づいたようだが間に合わず、自分自身の速度が仇となってかわすことが出来ずに剣で串刺しとなった。

「タカガ人間如キニ我ガ敗レルトハ・・・イヤ、人間デハナイナ。ヌシヲ人間ト侮ッテイタ、我ノ愚カサガ招イタ事カ・・・」

黒き獣はそれだけを言い残し、始めから存在していなかったかのように獣の身体は塵となって空中に消え失せた。

（いったい何者だったのでしょうか？　倒してしまった今となっては、分かりませんが）

（まぁいいさ、風の精霊が待つ森へ急ぐとするか）

（そうですね）

剣に付着した魔物の血液を振り払って森へと足を進めると、森の中

から心配そうに此方を見ていたジェニスとともにエルフの集落に向けて歩き始めた。

一方その頃、とある場所では。

「ふむ、魔物の数倍は実力があると言われる妖獣を難なく退けるとは期待が持てそうだな」
「◆◆◆◆様、下界ばかり見てないで仕事をしてくださいよ。　山のようになってますよ？」
「お前が次から次へと持ってくるからだろうが！」
「あの御方の事が気になるのは分かりますが、今は此方の仕事を優先的に行なってください！」
「お前も融通が利かぬ奴だな」
「◆◆◆◆様！」
「分かった分かった。　ミコトよ、此処に無事辿り着くのを楽しみに待っているぞ」
「書類の追加、お持ちしました～～～」
「いい加減にしろーーーー！！」

第９２話　消えた魔道技師（前書き）

この話で風の精霊の世界は終了です。

次は、どの精霊の物語を作ろうかな～～～

第９２話　消えた魔道技師

エルフの森の直前にある砂漠で謎の魔物を倒した俺はジェニスとともに村へと歩いていた。
途中、２人の侵入者を解放（置き去り）にした場所が気になり、立ち寄って見たのだが其処には血の痕はおろか、争った形跡がない事から無事に逃げ出せたとの考えに至った。
森に入ってから凡そ１時間後、エルフの集落へと到着すると、まるでこの時間に戻ってくる事が分かっていたかのように長老が集落の入口に佇んでいた。

「お疲れ様でした、ミコト様」
「どうして俺たちが戻ってくる事が分かったんだ？」
「風の精霊様復活により、森に住まう精霊たちが貴方様のご帰還を知らせてくださいました」
「そうか、それなら納得がいくな・・・」

俺と長老が会話をしていると、長老に無断で集落から外界へと出たジェニスが俺の後に隠れるようにして服の裾を握り締め、長老と目をあわさないようにしていた。

「さて・・・。　ジェニス、此方に来なさい」

長老に名指しで呼ばれたジェニスは、俺が振り向いて確認する必要も無いほどブルブルと震えていた。

「ジェニス、頭の良いお前なら私が何を言いたいのか分かっているね？」
「長老様、申し訳ありませんでしたーーーー！！」

ジェニスは所謂、土下座のような体勢で地面に跪き長老に許しを請うていた。

「ミコト様の手伝いをしたいというお前の気持ちも分かるが、かえって足手纏いになるとは思わなかったのかね？」

「まぁまぁ長老、俺は気にしていないから其れぐらいで勘弁してあげてくれないか？　ジェニスもこうして反省しているようだし・・・」

「貴方様がそう言われるのであれば、致し方ありませんな」

ジェニスは俺と長老との会話中も額を地面に擦り付けて謝罪していた。

「此度の長老である、私の許可無く外界へと出た件に関してはミコト様の手伝いと言う事で不問とする」

長老から『不問』という言葉を聞いてジェニスが漸く顔を上げた。

「ただし！　外出の件は不問とするが、姿見の魔道具を持ち出したとして罰を与える」

「何をさせる気ですか？」

「それほど難しい事ではありませんよ。　ジェニスには狩用の弓を５０と矢を５００作成する事を命ず。　ただし期限は無期限とし、弓矢の出来が良質であればあるほど恩赦を与えるものとする」

「了解いたしました。　エルフの民、ジェニスの名において一生懸命、道具作成に取り組む所存です」

ジェニスは此れだけをいうと俺と長老に深々と頭を下げ自分の家へと歩いていった。

「長老・・・」
「貴方様の言いたい事は分かりますが、罰は罰です。　仮に何の罪も問わなければ他のエルフの民に示しがつきません。　それが我が身内も者なら尚更の事でございます」
「そうか」
「それにジェニスはああ見えて道具作りの達人です。　現存する弓矢や鍬、棍棒などといった、簡単な道具に至る、全てがジェニスの手によるものです」
「それじゃあ、それほど難しい事でもないんだな」
「はい。　やはり、身内なので甘さが出てしまいましたな。　そんな事よりミコト様、風の精霊様の下へとお願い致します」

俺は長老に連れられ長老の家の後方に聳え立つ、風の精霊が宿りし巨木、世界樹へと足を運んだ。
其処には数日前まで枯れ木同然であった巨木が、瑞々しい青緑の葉で元気に立っていた。

「これは・・・。　此処まで見違えるほどに復活したのか」
（あ、主様お帰りなさい。　怪しい人達は誰も来なかったよ）
（ご苦労様、フレイ）
（えへへへへへ・・・・）

実体の無いフレイの頭であろう場所をそっと撫でるように指を這わすとフレイは何度も何度も空中で宙返りをしながら上へ上へと昇って行った。
フレイの昇って行った場所を見ているとフレイのような赤い光ではなく、未だ弱々しい明滅の光を放ちながら緑色の光が真っ白の光とともに俺の前へと降りてきた。

（主様、御手数をお掛けいたしまして申し訳ありませんでした。
風の精霊でございます）
（気にしないでいいさ。　悪いのは2人の侵入者さ、精霊が落ち込む事はないさ）
（ありがとうございます）
（早速で悪いんだが、風の宝玉を貰えるか？　体調が回復していないなら無理はしなくても良いんだぞ？）
（其れぐらいなら問題ありません。　お渡しいたしますので精霊の腕輪を前に出してください）

俺は風の精霊の事を気にしながら左手首に嵌っている腕輪を前に差し出すと、淡い緑色の光とともに火の宝玉の隣に緑色の宝玉がピタリと収まっていた。

（これで3個目か、先はまだ長いな）

口に出さずに此れからの事を考えているとミラが話しかけて来た。

（主様、今すぐに旅立たれますか？）
（いや、風の精霊の具合が未だ本調子じゃないみたいだからな。もう暫く村に滞在する事にするよ。　それに、まだ風の精霊に名前をつけてあげてないから）
（お優しいですね、主様）
（当たり前だろ？　大事な俺の仲間なんだから）
（私達精霊が神である貴方様の仲間ですか！？　ありがとうございます。嬉しいです）

この遣り取りのあと1ヶ月ほど村に滞在し、風の精霊もフレイとともに飛びまわれるほどに霊気が回復した。
ちなみに1週間ほど前に風の精霊にシルフという名を与えると、一

際明るい緑色の光を放ちながら喜んでいた。

更にドゥールの魔道具に関することや森に入る直前で襲われた魔物については何一つとして情報は入ってこなかった。

一応、長老や狩りを得意とするエルフの若者にも聞いてみたのだが、身体が跡形もなく消滅する魔物など聞いたこともないという話だった。

風精霊に名前を付けて直ぐにドゥールの事が気になり、1人でメグレスの街に行ったのだが、屋敷のあった場所は更地と化していた。

街の人たちに聞いた話に寄れば、たった一晩のうちに瓦礫の山と化していたという。

しかも不思議な事に屋敷の主人であるドゥールを始めとして執事であるセイバス、複数の使用人の遺体はおろか、血痕さえ見つかっていないと言う事だった。

街の出入り口である衛兵に聞いてみても1日中、交代で見張りをしていたがドゥール達が街から外に出た気配はないとのことだ。

俺はどんな未知の力が働いてこうなったのか見当もつかず、集落へ戻ろうとしたが、魔道具を売却したお金が残っているのを思い出し次の世界に備え、食料品（主に肉類）を購入しエルフの森へと戻った。

そして数週間の日時が経過し、次の異世界への旅立ちの朝を迎えた。

「長老、お世話になりました」

「いえ此方こそ、貴方様がいなければ風の精霊様ごとエルフの集落は滅んでいた事でしょう。大変感謝しております」

「俺がこの世界から旅立てば、貴方達から俺の記憶は消えると思いますが、どうか御元気で」

「は？記憶が消える？何の事を仰っているのですか？」
（主様、エルフの民は精霊の加護を受けし存在。　今までの世界のように私達の記憶がなくなるというようなことはありません）
「なるほど、そういうことでしたか。　謎が解けました」
「そうか長老も精霊の声が聞えるんだったな」
（それに時空神クロノス様にお会いになられれば、何時でも行った事のある世界に戻る事が出来ます。　主様が例えばマルベリアの地に再び降りられれば、エミリアさんやシルヴィアさん達の記憶も復活します）
（だけど俺が旅立ってから何年も経過している世界だろ？　他の皆が歳をとっているのに俺だけ若いままだと可笑しくないか？）
（時空神様はその名の通り時間を司る神様です。　そうなれば、旅立った直後の時間に戻る事も可能です）
「あの～お話中のところ申し訳ありませんが、何のことを話されているので？」
長老は頭にいくつもの？マークを浮かばせながら俺を見ていた。
「ああ、すまない此方の話しだ。　それでは長くなったが、此れで失礼するよ」
「ミコト様もお元気で。　またお会いできる日を楽しみにお待ち申し上げております」
その会話の直後、ミラやフレイ、シルフといった精霊達に囲まれながら、俺の姿は掻き消えるようにこの世界から消えた。

第９２話　消えた魔道技師（後書き）

（３／４）少しだけ訂正しました。

『魔道具をドゥールに売却した時のお金はどうなった？』との感想を頂き、書き忘れていたことに気が付いたため、少しばかり文章を書き加えました。

第９３話　新たな世界で魔王討伐？（前書き）

この話から水の精霊の世界に入ります。
アクセスＰＶが６００万に到達しました！
今後とも『異世界を渡りし者』をよろしくお願いいたします。

第９３話　新たな世界で魔王討伐？

俺が次の世界に降り立つと、其処には俺に両膝をついて手を合わせて祈っている、豪華絢爛な衣装を身に纏った女性の姿があった。

「嗚呼、この日この時をどれだけ待ちわびていた事か・・・・・・。
お待ち申し上げておりました、勇者様」
「はぁっ！？」

なにやらデジャブのような物を感じるが、こうなった訳を話すにはエルフの集落を旅立つ、数分前に戻る必要がある。
いよいよ第４の世界へ足を踏み出そうとしていた時、ミラから次の世界の説明を聞かされた。

（主様、次は水の精霊が司る世界です。準備は完了していますか？）
（それは良いが、また地上数百メートルの場所に出さないでくれよ）
（流石に次で３度目ですから、大丈夫だと思います）
（だからと言って地面の中っていうのも勘弁してくれよ？）

俺が冗談半分に言った言葉でミラの表情（？）は曇った。

（善処します）
（・・・分かった。　信じているからな、ミラ）
（はい。　お任せ下さい）

少し不安が残るが、長老との最後の挨拶も済み、次の世界へ飛ぶときにミラから再び念話が届いた。

（主様、次の世界から正体不明の魔力の波動が放出されています。

と言っても微弱な魔力の波動ですが）
（なに!?　またもや精霊が弱体化しているのか？）
（いえ、水の精霊の魔力を測ってみたのですが、減っていると言う事はなさそうですね）
（そうか。　しかし気になるな・・・ミラ！魔力の波動が放出されている場所は分かるか？）
（はい、強力な魔力なので位置は簡単に特定する事が出来ました。如何しますか？）
（決まっているだろう？　その場所に行くぞ！）

俺はそう言ってミラに転送座標調整を頼むと長老に再度別れを言い、今度こそ旅立った。

そして話しは文頭へと戻る。

「嗚呼、勇者様。　この日をどれだけ待ちわびた事か・・・」

俺を勇者と呼ぶ、目の前の女性は豪華なティアラとドレスに身を包み、俺の手を握って涙を流している。
女性の後方には重厚な鎧を身につけた男達が立っていたが、苦虫を噛み潰したような殺気だった表情で俺を睨みつけている。　俺が立っている場所はと言えば、何処かの地下室に描かれた魔方陣の中央だった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！俺が勇者とは何か誤解してないか？」
「いえ断じて間違いではございません。　古文書の通りの呪文を唱えて、勇者様が現れたのですから」
「古文書？」
「はい、長年研究されてきた古文書の解読によると、こう書いてありました。

“この地に邪悪なる者が蔓延(はびこ)る時、天界より黒髪黒目の勇者が光の門を潜りて現れ出で、邪悪なる者を打ち倒さん”と・・・」

「『邪悪なる者』とは？」

「この地、アルフェクダより遙か、北方に位置する大陸に最凶最悪なる魔王が蔓延っております。　幾人もの討伐隊を送り込んだのですが、誰一人として帰還したものはおらず、現状は不明となっております」

「魔王か・・・」

「そこで勇者様にお願いがございます。　此処に旅の支度金と致しまして１０００GL(ガル)を御用意いたしました。　これで装備を整え、魔王討伐をお願いいたします」

女性が硬貨の入った袋を俺に差し出すのを見て、明らかに男達の表情が変化した。

今までは俺に対して殺気の篭った目を当てていたが、今は硬貨の詰まった袋に全員の視点が集中していた。

「なにか御座いましたか？」

女性は不穏な気配を探知したのか前後左右に視点を這わせていた。

「あ、申し遅れました。　私はアルフェクダ第3皇女、メルディンと申します。　誠に失礼ですが・・・差し支えなければ、勇者様の御名前をお聞きしても宜しいでしょうか？」

「あ、ああ、そうだな。　俺の名前はミコトだ、宜しくなメルディン姫」

「ミコト様ですか。　あ、もうひとつ忘れていました、此れは先々の関を抜ける際に必要な通行証です」

俺はメルディン姫から通行証を受け取ると、姫の屈託のない笑顔と

２人の門番の男達による殺気に見送られながら、魔王討伐の旅に出発した。
旅の支度金として１０００ＧＬという金を受け取ったはいいが、このアルフェクダという城下街には碌な武器や防具、道具類がなく、とても城下町とは思えないほど衰退していた。

（これが一国の城下町の姿なのか？　まるでスラム街じゃないか・・・）
（マスター、城内は煌びやかな装飾品や豪華な絨毯が床一面に敷いてあったというのに、街の様子は天と地ほどの差がありますね）
（そうだな。　城下町といえば、華やかな街の外観や楽しそうな人々の姿を想像するものだが、実際に見たらどうだ！　街道には所々に血の痕がにじみ、建物は瓦礫同然、街の住民はボロボロな衣服を身に纏っている）
（これもメルディン姫が言うように邪悪な魔王が関係しているのでしょうか？）
（もしそうなら、城の中も街と同じくらい汚れていないと説明がつかないだろう？）
（確かに、その通りですね）
（これは魔王以外にも懸念する必要があるようだな。　フレイ、シルフ、悪いが２人は此処に残って何かあったら逐一、ミラに念話で報告してくれないか？）
（わかりました～～～）
（了解いたしました。　旅の御無事を願っております）

俺は風の精霊であるシルフと火の精霊であるフレイを城内と城下町に放ち、情報収集を頼んだ。

（それでは主様、此処は２人に任せて私達は魔王城に急ぐとしましょうか）

（ああ、そうだな。　後から殺気を向けてくる奴等の相手をしてやらないといけないからな）
（あの方達、気配の消し方が下手糞ですね）
（所詮、チンピラ、ゴロツキの集まりさ）

俺は複数の気配に気づかないフリをしながら、街の門へと歩いていく。
門の外は左右を深い森が生い茂り、地平線の彼方まで森に囲まれた一本道が延々と繋がっていた。

（人通りのない鬱蒼とした、森の街道か。　そろそろ、あいつ等が襲ってくる頃だな）
（マスター、後方に２０、左右の森の中に各５人ずつ潜んでいるようです）
（合わせて３０か、楽勝だな。）

俺が態と蹲(つまづ)くような足取りで隙を見せると、前後左右から一斉に飛び掛ってきた。
ルゥの言ったとおり、後方と左右の林の中から思い思いのナイフや棍棒といった武器を手に必死な表情で襲い掛かってきた。

『キィン！　バズッ！　カキィィィン！！』

咄嗟に剣を振りながら前方に避けた事で左右から襲い掛かってきた奴らは避けきれずに自爆し、後方から襲い掛かってきた奴等も反応が遅れたのか、数人はドミノ倒しとなって地に伏せていた。

「やるな。　見事な体捌きだ」
「お前らは一体何者だ？　恨みを抱かれる憶えはないんだがな」
「アンタには無くとも俺達にはあるんだ。　情報どおり、黒髪の剣

士だな、覚悟してもらうぞ！」
「『情報どおり』？　どういう意味だ！？」
「アンタにゃ悪いが、こちとら生活が掛かってるんだ。　大人しく殺されてくれよ！」

巻き添えにならなかった襲撃者たちは剣を振りかぶって襲い掛かってきた。
切り捨てるだけなら容易なことだが、誰に言われて俺に襲いかかってきたのか聞き出すために右手の剣で相手の武器を打ち払い、残った左手で力任せに相手の肘や膝をへし折った。

「グアァァァァァ！！！」
「ギャァァァァァ！！」

俺に関節を砕かれた襲撃者達は手に持っていた剣や槍といった武器類を地面に落とし、無事な方の手で粉砕骨折した場所を押さえていた。
俺は瞬時に剣を抜き、リーダー格の男の喉元に突きつけると軽く脅しをかけた。

「さっきも言ったが、お前等は一体何者だ？　答えろ！！」
「・・・・言えない」
「命が惜しくは無いのか？」

俺は襲撃者に脅すような口調で言いながら、実際に命を奪う気はないが、剣を持つ手に力を入れた。

「俺が口を割れば、街に残された家族は殺される。　俺１人の命で家族が助かるなら、思い残す事は無い」

男は自殺するかのように、喉元に突きつけている剣に倒れていく。
逸早く其れに気づき、剣を収めたが首の皮一枚を切って男は気絶した。
倒れている奴等を見ると自分の剣を腹に刺そうとする者、舌を噛み切ろうとしている者が犇(ひしめ)いていた。
襲撃者とはいえ、目の前で死なれては後味が悪いので全員に当身を食らわし、1人残らず気絶させた。

（こいつらは一体なんなんだ・・・。　自ら死を選ぶとは）
（主様、先を急ぎましょう。　フレイとシルフもかなり入り組んだ場所まで探しているようですし）
（何か2人から連絡はあったのか？）
（主様が召喚された地下室に居た2人の男が、黒尽くめの衣装を身に纏った複数の者に何かを話していたという事しか）
（そうか、こいつ等のことも心配だが、まずは他の都市の現状を知る事が大事だな）

俺に魔王退治を依頼してきた理由、荒んでいる城下町、命がけで俺を狙ってきた男達、その襲撃者の家族など、考える事は山ほど在るが、アルフェクダ以外の街を見るべく旅を急いだ。

第９４話　アルフェクダ王の目論見

有無を言わさず襲い掛かってきた襲撃者を簡単に返り討ちにしたミコトは次の街へと足を進める。

ミコトが襲われる数十分前、アルフェクダ城の玉座の間にて。

「兄上、どうやらメルディンが古文書を解読し勇者を召喚したとの知らせが参りました」
「それは誠か！？　よしメルディンを呼べ！」
「はっ！」

部屋の隅に控えていた騎士が男の指示によって部屋から出て行き数分が経過した頃。

「失礼致します。　メルディン姫をお連れ致しました」
「よし入室を許可する」
「では姫、此方へどうぞ」

地下室で女性の後ろで控えていた、２人の男と同じ鎧を着込んだ男が姫に入室を促す。

「失礼致しますお兄様、いえデュラミア国王陛下」
「うむ。　聞けば勇者を召喚したそうだが、その者は今何処に居る？」
「はい、既に城内には居りません。１０００ＧＬの支度金を手渡し、魔王退治に向かわせました」
「魔王だと！？　一体何の事だ？」
「これは異な事を。アルテミア兄様が幼少時の私（わたくし）にお話してくれた

ではありませんか？」
「アルテミア、誠か？」
「はい兄上。　御伽噺として言い聞かせたつもりでしたが、まさか本気にするとは思いも寄りませんでした」
「『本気にする』とはどういうことですか？」
「どうもこうも、お前に聞かせた話は私の作り話だと言う事だ。確かに魔族は北の最果ての地に居るが、奴等は他のエルフや妖精族と同じく争いごとを好まぬ種族。　人間に害を為す魔王など居るわけが無い」
「で、では私のしたことは？」

メルディンは両手で顔を覆い、膝を落として涙を流していた。

「まぁそう悲観する事も無い。　邪魔な種族を片付けることが出来て一石二鳥という訳だしな。　しかも我々の手を汚さずに事が片付くのだから此れほどめでたい事はない」
「邪魔な種族？」
「そうとも！この地に住まうものは我等人間だけで十分だ。バケモノどもは此処で退場してもらい、我が全大陸を統一し覇者となるのだ。アーハッハッハッハ！！」
「してメルディン、勇者を召喚せし巻物は如何した？　其れがあれば、我が騎士を損失する事はなく高い能力を持つ軍隊を作る事が出来る」
「残念ながら召喚と同時に燃え尽きてしまい、手元にはございません」
「そうか・・・なら仕方が無いな、下がってよいぞ」
「ですが、お兄様！」
「俺は下がれと言ったのだぞ？」
「分かりました。　失礼致します」

メルディンは騎士に連れられ部屋を後にした。

「さて兄上、どう思われますか？」
「理由は分からぬがメルディンが嘘をついていることは確かだな。よしアルテミア、闇ギルドに手配を頼む」
「分かりました。勇者の生死に関しましては、いかが致しましょうか？」
「奴には魔族を倒してもらわなくてはならないからな。殺す事だけは禁ずる、それ以外なら何をしても構わぬと伝えろ！」
「了解しました。それでは失礼します兄上」

アルテミアは部屋の外に気配を消して控えている、黒尽くめの鎧を着込んだ男に闇ギルドへの依頼書を手渡し、その場を後にした。

姿が見えない事を最大限に利用して、玉座の間での会話を聞こうとしていたフレイだったが何故か見えない壁に行く手を塞がれる様に室内へ入れなかった。

（どうして？　人間とは違って身体を持たない、精霊の私が何故入れないの？）

フレイは幾ら頑張っても、見えない壁に阻まれて入る事のできない玉座の間への侵入を諦め、情報収集のため城内を飛び回っていた。

（そういえばシルフは今頃、何処に居るのかな？）

ところ変わって此方はミコトの傍に居るミラ。

（主様、只今シルフより念話が届きました。）
（シルフから？どんな内容だった？）

（念話によりますと、姫は『取り返しの付かない事をしてしまった』と自己嫌悪しているようです）
（自己嫌悪？　如何してそんな事に）
（姫の独り言を聞いていたシルフによると魔王は最初から存在していなかったとの事です。　地の果てにいるのは人々に害を為さない魔族だと）
（それで俺を召喚して魔族を滅ぼしてしまうという罪悪感に押しつぶされているという訳か）
（主様、如何なさいますか？）
（遅かれ早かれ、あの国の襲撃が魔族に及ぶ事は確かだろうからな。忠告だけでもしてやらないとな）
（分かりました）

こうしてミラと話をしている間も、次から次へと襲い掛かってくる襲撃者の打ち倒しながら魔族に命の危機を知らせるため、何時着くか分からない距離を只管に歩み続けた。
アルフェクダを出発後して４日が経過した頃、アルフェクダとは比べ物にならないほど賑やかな街にたどり着くことが出来た。

「ここは元気のある街だな」
「おや？君は冒険者かい？　此処はザンカールの街だよ。」

街の様子を眺めていると門番だと思われる、１人の男性に声を掛けられた。

「この辺りでは見ない顔だね。　何処から来たんだい？」
「此処から遠く離れた地から、アルフェクダを経由して来ました」

俺がアルフェクダという言葉を口にした直後、男性の顔色が変化した。

「あの街を通ってきたのか。　何もされなかったかい？」
「数回、襲われましたが何とか撃退する事に成功して此処まで来る事が出来ました」
「そうか・・・あの街も前の王が生きていた頃は住みやすい地だったんだけどね。　今の王になってからは地獄と言っても過言ではないほどに荒れ果てているからね」
「地獄ですか？」
「おっと、俺がこんな事を言った事は秘密にしておいてくれよ？」

門番の話を聞くだけならば、かなりの酷さのようだ。
レグリスの国もこのような状態だったのだろうか・・・。

第９５話　見かけとは裏腹に・・・（前書き）

ついに目標としていた、１００部数目を更新できました！

第９５話　見かけとは裏腹に・・・

「んっ！？　なんだあれは？」

アルフェクダの城下町と比べると天と地ほども離れた活気のあるザンカールの街を歩いていると道具屋の店先で背中に黒い羽と腰の部分に尻尾が生えた男が店主となにやら会話していた。
一瞬、魔物に襲われているのかと考えたが道行く人達も街の門番も特に慌てている様子は見受けられず、それどころか陽気に挨拶を交わしていた。

「それじゃあ、次回は一ヶ月後くらいにでも、お邪魔致しますね」
「ああ待ってるよ。　あんたの所の品物は質が良いからな、皆も楽しみにしてるんだよ」
「それは何よりのお言葉。　皆も喜ぶでしょう・・・それでは失礼致します」

背中に羽根の生えた、悪魔のような背格好をした男は店から大通りの方向に数歩歩いたところで背中の羽根を広げ、飛び去っていった。

「あれは一体・・・」

俺が何時までも見ていると行き成り急加速し、あっという間に姿が見えなくなった。
色々と気になることも有るので男が会話していた道具屋へと足を運ぶ。

「あの～すいません」
「あっと、いらっしゃいませ。　何をお探しでしょうか？」

「すいません、道具を買いに来たわけではなく、少し聞きたい事があるんですが宜しいでしょうか？」
「は、はい。　私にわかる事ならなんなりと」
「それじゃあ・・・先程店頭で背中に羽根が生えた方とお話されてましたが、あの方は？」

一瞬“悪魔”と言いそうになってしまったが、悪い予感がしたので言い換えることにした。

「ああ、さっきの事ですね。　あの方は羽翼族のキイラさんです。　週に一回は北の大陸から行商に来てるんですよ」
「羽翼族？」
「知りませんか？　此処から歩いて数十日も掛かる北の大陸に住む亜人の方ですよ。　あんなに優しい種族なのに一部の国の人達からは姿が違うと言うだけで悪魔と呼ぶ人も居るらしいですけどね。全く見かけだけで判断するなんて低俗な事ですよ」
「そうなんですか。　北の大陸か、興味あるな」
「お客さん、歩いていくのは流石に無理ですよ？」
「どうしてですか？　数十日歩けば到着するんじゃないんですか？」

道具屋の店員は溜息を一つすると詳しい説明をしだした。

「ハァ～本当に知らないんですね。　確かに先程、数十日歩けばと言いましたが、行けるのは北の大陸の手前までなんです。　其処から先は進む事は出来ません」
「進む事は出来ないって・・・海か何かで？　船があれば行けるんじゃないんですか？」
「いえ、彼らの住んでいる大陸には強力な結界が張り巡らされており、普通の人は中に入る事はおろか、近づく事さえ出来ないと言われているんです」

「結界？」
「古くからの御伽噺では精霊が張った結界と言われてますが、確かめた方はいらっしゃらないので」
精霊の結界か・・・もしかすると俺が探している精霊は其処に居るのかもな。

（マスター、数十日も旅をしなければならないとなると食料も大量に買わないといけませんね）
（そうだよなぁ～出発時に貰った１０００ＧＬで足りれば良いけど・・・って数十日かかるんだよな！？　さっきの羽翼族とやらは数十日も掛かって此処に来るのか！？）
「お客さん？如何したんですか、急に黙っちゃって」
「ねえ店員さん、さっきの羽翼族の人は数十日も掛かって此処まで行商に来るんですか？」
「ああ、その事を考えていたんですか。　彼らには羽根がありますから、私達が数十日も掛かる距離を彼らは何の遮蔽物も無い、空を飛んで１０日くらいで来られるそうですから」

なるほど空を飛ぶという手があったか・・・。
前の世界に到着した時に一瞬だけ浮く事が出来たから、慣れれば空を飛ぶ事が出来るかもしれないな。

（マスター？魔法の練習をするのですか？）
（ああそうだ。　宿に泊まって亜空間倉庫で練習する事にしよう）
（分かりました。　それではまずは宿屋の場所を探す事からですね）
（どうせだから目の前の店員に聞く事にしよう）
（そうですね）

精霊の声は普通の人間には聞き取る事が出来ないため、道具屋の店

員は此方を不思議そうな目で眺めていた。

「お客さん、具合でも悪いんですか？　無理はなさらない方がいいですよ？」

「いや、そういうわけでもないんだけど。　少し旅の疲れがあるだけですから」

「無理は禁物です！　丁度直ぐ其処に宿屋がありますから、倒れる前に行って下さい」

完全に俺を病人扱いしている目の前の店員に一言文句を言ってやりたかったが、凄い剣幕で言い返すことは出来なかった。

「直ぐ其処？」

「此処から見える赤い看板のある建物です。　心配なさらなくても、宿代は高くありませんから」

「分かった。　そうさせてもらうよ、ありがとう」

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ。　出来れば今度来る時は何か買って行って下さいね」

道具屋の店員から後ろ髪を引っ張られそうな言葉を投げかけられながら赤い看板を目指して歩き出した。

歩き出して数分が経過した頃、青い壁に緑色の屋根という何処から見ても目立ちそうな2階建ての建物にベッドの絵が描かれた赤い看板が掲げられていた。

「どうやら此処で間違いないようだが・・・それにしても派手な建物だな」

いつまでも看板を見て溜息をついている訳にも行かないので意を決して建物の中へと入って行った。

外見があんなだから中も凄い事になっているのかと思ったが至ってシンプルな感じだった。

「おっ、いらっしゃい！」
「泊まりたいんですが、部屋は空いてますか？」
「おお、空いてるよ！　1泊2食付で５０ＧＬだが構わないかね？」
「はい。　お願いします」
「それじゃあ、此れが部屋の鍵だ。　部屋は2階の一番奥だから間違えないようにな」
「すいませんが旅の疲労は酷いため、夜まで休ませていただきますね」
「それなら夕食は部屋の中に入れるようにするから、ゆっくり休んでくれ！　身体は大事にな」

俺は軽く宿屋の親仁に頭を下げ、『そういえばこの世界に来てから何も食べていないな』と思いながら、重い足取りで部屋のある2階へと歩いていった。

「全然大丈夫そうじゃねえな・・・。滋養の食事を作ってやるか」

明らかに何かを誤解している宿屋の主人を横目で見ながら、部屋へと行くと部屋の扉の横に窓が備え付けられていた。
『これは一体なんだろう？』と思いながら部屋に入り、窓の裏側を見てみると窓と同じ高さのある台に貼り紙がしてあった。
『この台は外から食事を配給するための物です。　此処には物を置かないで下さい』とあの宿屋の店主からは想像も出来ないほど、綺麗な字で書かれていた。
心の中で迷惑を掛けている事を謝罪した後、修行の前に休憩する事にした。

第９５話　見かけとは裏腹に・・・（後書き）

物語の中で金銭の単位であるＧＬは、１ＧＬ＝約１００円と考えてください。

第９６話　飛行魔法習得（前書き）

皆さんは地震で怪我など負ってませんか？

自分が住んでいる地域では、酷くても震度１～３の揺れで済みましたので怪我も無く大丈夫でした。

第９６話　飛行魔法習得

元々不死身なため疲労感と言うものは何も無かったが一呼吸おいてから異次元空間への扉を開いた。
改めて亜空間内へと入ってみて思った事はと言えば、その広さだろう。
物を取り出しやすいようにと入口近くにおいてある荷物を修行の巻き添えで壊さないようにと１００ｍほど奥へと歩いていったのだが、それでも目の前には地平線が広がるのみだった。

（自分でこの空間を作っといてなんだけど、流石に広すぎるだろう！？）
（マスターの無尽蔵な魔力を使って作られた空間ですからね。　間違いなく、前例の無い広さでしょうね）
（確かにな・・・此れだけ離れれば良いか。　修行を開始するぞ）
（分かりました。確か闘技大会の時に教えてもらった内容によると風の魔法を身体を包むようにして展開させて宙に浮くところからですね）
（そうだな。それじゃあ・・・始めるとするか！）

俺はイスラントールの武道大会にて風の魔術師から教えてもらったことを心の中で反芻しながら魔力を解放し、風の魔法を身体の周辺に展開させた。
身体を浮かせるだけなら、エルフの森近くに落下した時に一瞬ながら成功したので、難なく習得できたが問題は此処からだった。
普通の魔術師とは違い、俺の場合は魔力切れを起こさないため自分で魔法を解かない限り空中に浮き続ける事が出来るが、第二段階である空中移動は何をしようと１ｍｍたりとも動く事はなかった。

（マスター、あの時の言葉を思い出してください。　魔法を後方や側面に放出する事で、その逆の方向に移動する事が可能になるんです）
（いや理屈は分かっているんだが、いざ実行しようとすると上手く行かなくてな）
（私には応援する事しか出来ませんが、マスターなら必ず出来ます）
（どこぞの熱血漫画じゃないんだからさ）
（意味が分かりませんよ、気合で頑張ってください）

ルゥはそう言うが、後方に魔法を飛ばそうとすれば身体の周りを覆っている風の膜が薄くなって落下するし、落下を止めようと風の膜を強化すれば身動きが取れなくなるし・・・一体、如何すればいいんだ？
その後、瞬く間に亜空間内で数時間が経過し徐々に感覚が攫めて来たのか、少しずつではあるが移動する事ができるようになっていた。
　腹が減った事で久々に外へと出ると辺りは既に真っ暗になっていた。

（もうこんな時間か。　ん？あれは？）

部屋の扉を見ると、扉の横にある小窓には緑色をした何かのスープとメモのような物が置かれていた。
メモにはこう書かれていた。
『宿屋特製の薬膳スープです。　少し苦味がありますが、疲労回復には最適なので、お召し上がり下さい』
どうやら俺の体調を気にしてくれた宿屋からの、お心遣いのようだった。

「俺はいろんな人に迷惑を掛けてしまっているな。　此れを喰って修行の再開と行くか」

その後、宿屋の主人に感謝しながらスープを口へと運んだが、少しどころか洒落にならないほどの苦味にのたうちまわる事になってしまった。
現代風に言い換えるならば、１００％のニガウリジュースを飲んでいるかのようだった。
寝る間も惜しんで明け方近くまで修行した事によって、高速移動とまでは行かないものの思い通りの方向へと移動する事が出来るようになっていた。
俺はその結果に満足し、部屋へと戻った。
修行に熱中していた所為か、既に夜が明けていたがベッドで一休みすることにした。
寝ている時に誰かから呼ばれたような気もするが、気にもしないで寝続けたが、気が付くと窓の外は赤く夕暮れの色に包まれていた。

「！？　俺はどれだけ眠っていたんだ？」
（マスター、幾らなんでも寝すぎですよ。　宿のご主人も流石に心配して何度も様子を見に来てましたよ？　私も何回も呼びましたが、カラ返事ばかりで全然起きてくれないんですから）
（そうなのか？）

俺がルゥに色々と寝ている間の事を聞いていると、不意に扉が開かれた。
其処には宿屋の主人と、背の低い背中に羽根のある初老の男性が息を切らせながら立ちすくんでいた。

「お、お客さん、やっとお目覚めになられましたか！？」

俺は何の事か分からずに首を傾げていると、宿の主人が話しかけて来た。

「お客さんは丸一日目を醒まさなかったんですよ！」
「丸一日！？」
「何度声を掛けても応答が無かったので、たまたま街に居られた妖精族のお医者様に来ていただいたという訳です」
宿の主人がこういうと影から蜻蛉のような羽が背中にある亜人が現れた。
「あまりワシのような年寄りを急がせるものではないぞ。あ～～～疲れたワイ」
「お手数をお掛けいたしまして、申し訳ありませんでした」
咄嗟のことでベッドの上に腰掛けたまま、２人にお礼を言った。
「なぁに取り越し苦労じゃったが、無事に何よりじゃ。　見る限りでは顔色も良さそうじゃし問題は無かろうて。　それじゃあワシは此れで失礼するぞ」
「俺のために態々ご足労願いまして、ありがとうございました」
「困った時はお互い様じゃ、ではまたな」
妖精族の初老の男性は片手を上げて挨拶をすると、背中の羽根で窓から飛び立って行った。
「貴方にもご迷惑をお掛けいたしまして申し訳ありませんでした」
「いいってことよ。　先生も言ってたが無事で何よりだ、それじゃあな」
その後、丸１日寝ていた所為か流石に眠気は起きず、完全に日が昇るまで異空間で修行する事になり完全に空中移動を物にする事がで

きた。
翌朝、２日分の宿泊費として８０ＧＬを支払い宿屋を後にした。

「お客さん、本当に大丈夫かい？　無理しない方が良いんじゃないか？」
「いえ、ぐっすりと眠らせていただきましたし、ご主人特製の薬膳スープの御蔭もあって体調は万全ですよ。　本当にありがとうございました！」
「困った時はお互い様ですよ。　また来てくださいね」

宿屋を後にした俺は食材店などで食料を買い込み、北の大陸への旅を再開する事にした。

第９６話　飛行魔法習得（後書き）

東日本大地震で亡くなられた方々に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

第97話　人間と亜人

北の大陸に着くまでの食料を買い込み異空間へと収納した俺はザンカールを出て暫く歩いていた。
理由はと言えば、羽根も翼も無い普通の人間が空を飛んだりしたら間違いなく大騒ぎになるからだ。
そうして歩くこと十数分、ようやくザンカールの街が視界から見えないところまで来る事が出来た。

「大分歩いたし、此処から飛んで「キャアァァァァーーー！！」なんだ？」

今まさに飛ぼうとしていたところで何者かの叫び声が聞えてきた。
何事かと思い、声のするほうへと歩いていくと背中に白い羽根の生えた亜人の女性が手に剣や槍といった武器を持った複数の者達に囲まれていた。
良く見れば肩から血を流していることに気がついた。

「化け物風情が人間と同じ赤い血を流してんじゃねえよ！！」
「そんな・・・」
「ああ！？　喋るんじゃねえ！耳が腐っちまうだろうがよ」

羽根の生えた亜人の女性は何か動作をするたびに蹴られたり殴られたりを繰り返し行なわれていた。

「やめろ！！その人を離せ」

俺は咄嗟に剣を抜き、亜人を囲っている一角に体当たりをして女性の前に割り込んだ。

「なんだお前は?俺たちは化け物を退治しているんだ。邪魔するんじゃねえよ!」
「何が化け物だ。この女性は亜人じゃないか!」
「亜人か・・・笑わせるな!背中にある羽根を見ろ。俺達とは全然違う化け物じゃねえか!!」
「わ、私は化け物なんかじゃない」
「大丈夫だ。　事が済めば治療するから、それまで我慢していてくれよ?」
「はい。　ありがとうございます」
「ごちゃごちゃと何を喋ってやがる。　化け物に味方するなら貴様も敵だ!皆、やっちまえ」

散々亜人の女性を罵っていた男が合図すると、周りを取り囲んでいた男達が一斉に武器を振りかぶりながら襲い掛かってきた。

「しょうがないな・・・出来る事なら、あまり人間は傷つけたくは無かったんだが」

俺は自分の攻撃で命を落とすような致命傷を与える事は避けるため剣を鞘に戻し、拳打で打ちのめしていった。
あるものは剣の柄を握っていたコブシを砕かれ、ある者は肩の関節を砕かれたりと血は出てはいないが戦う事が出来ないまでに打ちのめされていった。

戦い始めてから約２０分が経過した頃には地面に2本の足で立っているのは俺だけとなっていた。

「も、もうやめてくれ!俺たちが悪かった。命だけは助けてくれ」
「信用できないな。別の場所で同じ事を亜人に対して繰り返すのだ

ろう？　此処でトドメを刺しておくか」

芝居がかった冷血な目で男達を睨みつけてやると、腰が抜けているのか悲鳴を上げながら四つん這いや匍匐(ほふく)前進のような体勢で一目散に逃げていった。

「情けない奴等だ。おっと大丈夫か？怪我は然程でもないようだな」
「何方かは存じませんが、危ないところを助けて頂き、ありがとうございました」
「いやいいよ。　あんなのが俺と同じ人間だと思うと無性に腹が立ってくるけど。　今回の事で人間を嫌わないで居て欲しい。　あんな馬鹿野郎どもが全てではないからな」

俺は亜人の女性に優しく声を掛けながら回復魔法で傷を治療していった。

「分かっていますよ、ザンカールの人達にも良くしてもらってますから。　それにしても・・・貴方は人間なのに魔法を使えるのですね。吃驚しました」

人間なのに？如何意味だろうか・・・聞いてみることにしよう。

「この世界の人間は魔法を使えないのかい？」
「この世界？　変な言い回しをしますね、まるで別の世界から来られたみたいに・・・」
「あ、ああ、いや何でもないよ、気にしないで」
「そうですか～？　あ、先程の魔法を使えるかという問いですが、魔法は私達みたいに精霊と契約したものにしか扱う事が出来ません。
　魔力自体が異質なる物と人間達に恐れられていますから、貴方が如何して魔法を使えるのか分かりませんが、なるべく人前で使わな

い方がいいですよ？」
「そうだな。　よし、これで怪我は治った筈だ。ちょっと立ってみてくれる？」

俺がそう言うと、地面に手を突いて蹲っていた女性は土を掃いながら苦も無く立ち上がった。

「うん。大丈夫みたいだね」
「本当にありがとうございました。この御恩はいつか必ず」

亜人の女性は其れだけを言うと羽根を広げ、宙に浮かびあがっていく・・・。
何度も何度も此方を振り返り頭を下げ、遠く北の方へ飛び去っていった。

（マスター、人間は自分とは違う生き物に恐れ敵意をむき出しにします。　ザンカールの人達のように、亜人に対して友好的な方々もいらっしゃいますが）
（そうだな。　会話さえすれば分かり合えると言うのに愚かな事だよな）

それから俺は何処に人の目があるか分からないため、人間が行けると言う所まで歩いていく事にした。
飛んでいく事を前提として事前に購入しておいた食料は僅か１週間で底をつき、森に自生している果物や見るからに毒だと思われる怪しげなキノコや襲い掛かってきた魔物をも口にしながら足をすすめた。
ルゥに気配を探ってもらいながら、持ち前の身体能力を駆使して走り続ける事凡そ２０日間、ようやく北の大陸の目と鼻の先という場所に辿り着く事が出来た。

「目の前にある大陸が亜人達が住むと言われている北の大地か・・・」

俺の目の前には薄紫色の靄（もや）に包まれた、不思議な違和感を醸し出す大陸が広がっていた。

「問題はどうやって内部に入るかだな。　精霊の加護を受けし者しか出入りする事ができない結界とは」

（主様？私達のことをお忘れですか？）

（ミラか。どういうことだ？）

（『どういうことだ？』とは心外ですね。　私は精霊王ですよ？精霊の加護を受けし者なんて主様の存在以上に考えられませんよ）

（それじゃあ、俺にも結界を通り抜けられると言う事か？）

（問題ないでしょう）

俺はミラの言葉を信じ、練習を思い出して風の魔法を全身に覆うと空を飛んで結界に突入した。

結界に入る直前に無意識に息を止め、目を瞑ってしまったが、気が付くと何の抵抗も感じずに結界内に立っていた。

第９８話　亜人達との出会い（前書き）

お待たせいたしました。

第９８話　亜人達との出会い

難なく結界を突破した俺は暫く黄昏（たそがれ）ていた。
光の精霊王である、ミラの事を信じていないわけではなかったが、あまりにも呆気なさに固まっていた。
数分後、なんとか立ち直った俺は辺りを見回した。
亜人以外立ち入る事が出来ない北の大陸なのだから、当然の事ながら地図なんて物は存在しない。
ルゥに魔力の気配を感じ取って貰おうとも考えたが、大陸の至る所から強力な魔力を感じられるとの事で精霊の居る方向までは把握できなかった。
何時までも立ち竦んでいるわけにもいかない為、適当な方向へと足を進める事にした。
辺りに意識を集中しながら歩き続ける事、およそ３０分。
ようやく明らかに人工である建造物が目に入ってきた。

「やっと亜人達の住む集落にたどり着いたか」

なんとか到着する事が出来た安心感からか周囲を警戒する意識が途切れてしまった。

（マスター、気をつけてください！こちらに何者かが近づいてきています）
（何だ！？敵か？）
（それは分かりませんが亜人達にとって、マスターは侵入者でしかありません。　注意してください）

ルゥと会話している間に空には弓を構えた羽翼族、周辺にはミノタウロスやケンタウロスが周りを取り囲んでいた。

まさに絶体絶命かと思ったとき、俺を取り囲んでいた亜人の一角から杖をもった、背中に蜻蛉（とんぼ）のような羽根を持つ初老の男性が俺に近寄ってきた。

「そなたは人間ですかな？」

「長老、危険です。　お下がり下さい」

「そうです。　この者が何者なのか全く分からないのですよ？」

「静まれい！」

長老と呼ばれた初老の男性が一喝すると騒いでいた者が静まり返った。

「皆も知っておろう。　この大陸に展開されている結界は精霊に加護されし者のみが通り抜けられるという事を・・・。　邪悪なる遺志を持つものは結界に触れた時点で消滅し、只の人間であった場合は近づく事さえ出来ぬといわれている結界ぞ？」

長老の発した一言で亜人達は口々に『確かに・・・』と口ずさんでいた。

「それなのに人間が此処にいるのは何故か。

まず第1に考えられる事は結界が破られたという事だが聖なる泉に異変が起こっていない事から、この考えは却下される。

第2に誰かの手引きで結界を潜り抜けたと考える者も居るだろうが、その場合も加護を受けている亜人だけが結界を抜けられ、加護の無い人間は結界に弾かれる事となる。

最後に考えられる事は何らかの精霊の加護を受けし者という訳じゃ分かったか？」

長老の声を聞いた者たちは其々に会話し頷き合うと1人また1人と

来た道を戻っていった。
そして最後まで残ったのは上半身が竜で下半身が人間という剣を持った亜人だった。

「お見苦しいところをお見せいたしまして、申し訳ありませんでした」
「お言葉ですが、正体不明の侵入者である俺に対して何故そんな簡単に信じられるのですか？　もしかすると亜人達を皆殺しにするべく派遣された人間かもしれないのですよ？」
「先程も皆の前で申し上げましたが、邪悪なる遺志を持つものに対しては例外なく結界が反応し消滅させます。　それが何らかの対策を施された人間であっても同様です。したがって貴方が此処にいるという事実自体が貴方の正体を証明していることになるのです」

言おうとしていたこと全てが、まるで心を読まれたかのように発言されてしまった。

「では改めてお聞きします。貴方は何者ですかな？」

言い逃れ出来ない状況へと追い込まれ、素直に白状する事になった。
警戒して集まっている亜人達に聞えないように声を小さくして長老と呼ばれた初老の男性に声を掛ける。

「私の名はミコト。　光の精霊王に導かれ神になるべく、各種精霊で出会うため異世界を旅する者です。　此方の世界には水の精霊が存在すると聞き及び、参上した次第でございます」

俺は其れだけを言い、長老に頭を下げた。
が、剣を持つ竜型亜人は『戯言を！』と言って剣を突きつけてくる。
長老と呼ばれた初老の男性は竜人を手で制すと、俺の前へと近づい

てくる。
暫く経過して下げた頭を元に戻すと長老が方膝をつき俺に対して頭(こうべ)を垂れていた。

「恐れ多くも神とは知らず、失礼を働いたことを此処に謝罪いたします」
「こんな突拍子のないことを信じてもらえるのですか？」

何時までも跪いている長老を立たせ、訳を聴いてみることにした。

「確信できませんでしたが、貴方様の周りからは目には見えませぬが幾つかの精霊様の気配が感じられていました。“神”と仰られた事で私の考えが正しかった事を実感いたしました」
「俺が神であるという事実が明らかになると大騒ぎになることは目に見えているので、俺と長老との秘密にしておいて貰えませんか？」
「分かりました。しかし集落には私を含め４人の長老が居ります。その者達にのみ事実を話すことをお許し下さい」
「その長老達は口は堅いほうですか？」
「仮にも部族を纏めし長たちです。それは大丈夫かと」
「分かりました。それでは俺と４人の長老だけの秘密という事でお願いいたします」
「心得ました。早速ですが、長老会議を開きますので此方へおいで下さいませ」

俺は集落に向かう長老の後を追って長老達の住まう住居へと足を運んだ。
途中、『人間が何故此処にいる！』と言いたげな視線を終始浴びていたのは言うまでもない事だろう。

まぁ、そのたびに長老から言葉にならない厳しい視線が投げ掛けら

れていたのだが・・・・・。

第９９話　光の精霊、仮の実体化（前書き）

書きたい事を全て書いたところ、いつもよりも長くなってしまいました・・・

第９９話　光の精霊、仮の実体化

妖精族の長老に手を引かれ１時間ほど歩いたところでドームのような丸い建物に辿り着く事が出来た。

「此方の建物が我々、長老が集まって会議を執り行う会議場です」

長老の丁寧な物言いを聞きながら建物内に足を踏み入れ、暫く歩くと異様に広い空間に到着した。
其処には巨大な円卓を半分に切ったような形状のテーブルに大小あわせて４個の椅子設けられていた。
４個の椅子のうち２個には既に亜人の姿が見受けられた。
２個の椅子には其々、蝙蝠の黒い羽根を持つ初老の男性と何の種族かは分からないがフードで顔を隠した者が座っていた。

「おお妖精の、如何したんじゃ？　定例会議は明日だった筈じゃが？　それに横に居る人間は？」

先の２人のうち、ザンカールの街で見かけたような背中に黒い羽根を持つ初老の亜人が話しかけて来た。

「確かに定例会議は明日じゃが、急ぎ最長老を呼んではくれないか？　緊急事態が起きたのじゃ！」
「それは隣に居る人間が関係している事かのう？」
「その通りじゃ！　なるべく早く最長老を此処へ」

その後、２時間が経過して３人の竜型亜人が姿を現した。

「おおっ最長老様、お待ちしておりました。　臨時召集であった事、

お詫びいたします」

その内の2人は一際貫禄のある、もう1人に深く頭を下げ、出入り口付近に剣を手に持って警備についた。

最長老と呼ばれている割には、それほど歳を取っていないのが気になったが・・・。

妖精族の長老も俺の正体は皆が揃ってから話すと言ったもんだから、全員が集合するまでの間、裁判所で判決を待っている被告人のような針のムシロ状態となっていた。

「どうやら最長老もいらっしゃった事だし・・・では此れより緊急議会を開始するものとする！」

竜型亜人を除く3人の長老達は一糸乱れずに立ち上がると一斉に最長老に頭を下げ、元通りに着席した。

「さて妖精族の長老よ、我等を緊急招集した理由と隣に居る人間のことを聞かせてもらおう」

まず一番先に口にしたのは蝙蝠のような黒き羽を持つ長老だった。

「驚かずに落ち着いて聞いて欲しい。　此方に居られるこの御方は光の精霊様に導かれし神で在らせられる」

妖精の長老の“神”という発言で一瞬静かになったが、直ぐに罵声のようなものが浴びせかけられた。

「『神』とは恐れ多いにも程がある！　衛兵、この人間を捕らえろ！」

長老の命を受け、議場の出入り口付近で警備していた、最長老とともに入室した竜型亜人が俺の方へと剣に手を添えて近寄ってくる。そして俺に手を伸ばそうとした次の瞬間、此方を終始見ていた最長老が声を発した。

「皆のもの静まれーーー！」

最長老が騒ぎ捲くっている、ほかの長老や警備を担当している竜型亜人達を手で制し、長老以外の者に退出を促した。

「お言葉ですが最長老様、怪しげな者を残して我々が退出するわけには・・・」

最長老は竜型亜人の言葉に目を細めると声を大にして言い放った。

「それは我が弱いと言いたいのか？」

「いえ、とんでもありません。　では失礼致します」

衛兵の竜型亜人は一礼をすると議場を後にした。

「妖精族の長老よ、そなた如何してこの人間が神であると思った？」

「畏れながら申し上げます。此方の神様・・・名前をミコト様と申されますが、本来人間には備われない魔力という力、更には人間であるにも拘らず結界を越えて此処にいるという事実であります」

罵声を浴びせていた長老は『結界』のことには気づかなかったようで、驚愕の表情を見せていた。

「皆も知っての通り普通の人間では結界を潜り抜ける事はおろか、

近づく事さえできません。　その身が人間ではなく、邪悪な存在ならば結界に手が触れた瞬間に塵も残らずに消滅するでしょう」

他の長老や警備の亜人達は「人間でも邪悪なる者でもない？」と口々に呟いている。

「・・・続けろ」

「はい。皆様知っての通り、結界を通り抜けるには我々のような、精霊の加護を受けし存在でないと不可能です。　それなのに何故ミコト様が結界を越えてこの地に居られるのか考えてみてください」

妖精族の長老が此れだけの事を言っても「でも」や「だが」「しかし」「たかが人間が」といった声が長老や亜人達の口から発せられていた。

（主様、これでは中々話が纏まりませんね）

（ミラか・・・何か決め手となる言葉が欲しい所なんだがなぁ。何か良い手はないか？）

（ありますよ？）

（そうだよなぁ・・・ってあるのか！？）

（はい。　ただ主様に少々負担が掛かりますが、宜しいでしょうか？）

（ああ構わない。　それで混乱が収まるなら、お安い御用だ）

（分かりました。　それでは少し魔力をいただきますね）

ミラから『魔力を頂く』という言葉が発せられた途端、エルフの集落で魔吸石を握った時に感じられた『魔力を吸われる』という感覚の強力版が襲い掛かった。

そして膨大な魔力の流れは未だに言い争いを続ける長老達にも感じられた。

「！！　なんだ！？この魔力は？」
「このような強大な魔力、誰から発せられた物だ！？」

先程の言い争いなど、何処吹く風のように長老達は右往左往していた。
そんな中、竜族の長老だけは眼を極限まで見開いた状態で俺の方を見据えている。
俺の横に居る唯一の味方である妖精族の長老も慌てふためいているそのとき、不意にミラの声が議場に響き渡った。
『亜人の長老達よ・・・私の声が聞えますか？』
ミラは声とともに光り輝く人型となって、俺の頭上高くに姿を現した。

「！？この神聖なる響き、あなたは神様であられますかな？」
『私は其処に居られる、ミコト様を守護する精霊の１人、光の精霊王』
「精霊王様！？」
『人間の姿であるミコト様を神と信じられないのも分かりますが紛れもなく、その御方は
我等精霊が守護する神で間違いありません』
「「「はははぁぁぁぁーーーー！！」」」

先程まで言い争っていた、竜型亜人を除く３人の長老は驚愕の事実を前に椅子から転げ落ち、土下座のような格好で俺に頭を下げてきた。
散々俺のことを「たかが人間」と見下ろしていた長老達は掌を返したように謝罪の言葉を述べていた。

「恐れ多くも神様とは知らず、大変失礼な事を申し上げました。ど

うかお許し下さい」
『それでは主様、私は此れにて・・・』

ミラも長老達の表情から満足したのか、まるで何も無かったかのように姿が掻き消えた。
実は眼に見えないだけで俺の傍に漂っているんだけどな。

「失礼致しました。　神様、此方にはどのような御用件でいらしたのですかな？」

未だに固まっている2人の長老＋妖精族の長老に成り代わり、竜族の長老が話しかけて来た。

「神様って言ったら固いイメージがあるからな、ミコトでいいよ」
「それではミコト様とお呼びする事と致します」
「う～ん、まぁいいか。　俺が此処に来た理由なんだけど、正式な神となるために各世界に居る精霊に合わなくてはならないらしくてな。　此処の結界が水の精霊に寄るものだと聞いたもんだから」
「そうですか、しかし神様とはいえど亜人ではない見た目は人間の貴方に、おいそれと聖域への扉を開くわけには参りません！」
「どうしてだ？」
「理由をお聞かせする前に一つお聞きしたい事があります。　ミコト様の存在は皆の者にはお話されるのですかな？」
「それは駄目だな。　要らぬ混乱を招く事になるからな」
「それでは尚更の事、簡単に通す事は出来ません」
「だから、如何して？」
「ミコト様も知っての通り、この大陸には我々亜人以外が近寄れぬように結界が施してあります。　同様に水の精霊様が住まうと言われている聖域にも、より強固な結界が施されております」

最初は何を言いたいのか分からなかったが、段々と気がつき出していた。

「此処まで言えばお分かりになると思いますが、神であると言う事を秘密にするという事はミコト様のことを普通の人間であると亜人達は思うわけです。　只でさえ結界に近寄る事が出来ない人間が此処に居ること自体、不思議なのに結界内に入ろうものなら、人間族の侵略と思われても仕方ありません」

確かに竜族の長老の言うとおりだ・・・。
水の精霊は俺が会いに行くことを望んではいるが、集落の亜人からしてみれば侵略行為以外の何者でもないだろう。

「私の言いたい事をお分かりになられた様ですね」
「俺は如何したら良いんだ？」
「まずは亜人達の警戒を解く事から始めねばなりませんので、ミコト様には暫く集落で暮らして頂きたいと思います。　幾期間過ごされれば、亜人達もミコト様の事を信用するでしょう」

こうして俺は神であるという事実を亜人達に知られないようにして集落で過ごす事となった。

第１００話　集落での生活（前書き）

何時もに増して難産でした。

物語の話数が進むにつれて書きにくくなってきました。

これもスランプという物でしょうか？

第１００話　集落での生活

なんとか光の精霊王であるミラの助力を得て各種族の長老達に自分が神である事を証明したミコトは他の亜人達にも精霊の力がある剣を引き合いに出して亜人の里で生活する事を認められた。
ちなみに長老以外の亜人達にはミコトが神である事は秘密にしてあり、長老達には口を滑らせないようキツく念を押しておいた。

「それではミコト殿、集落を御案内いたします」

そう言って俺を案内してくれるのは蝙蝠のような黒い羽を背中に生やしたアリオトという羽翼族の長老だった。

「私達亜人は極一部を除いて基本的に人間族とは友好関係にあるので危険はありませんが、聖域にだけは無闇に近寄らないで下さい。
一応門番にはミコト殿が神であるという事は伏せて話を通してありますが、彼らは聖域への侵入者を許しませんから御注意下さい」
「分かりました。近寄らなければ良いんですね」
「はい。よろしくお願いいたします」

長老達が集まっていた会議場から歩き続ける事４時間、漸く亜人達の集落に辿りついた。
複数の亜人達が暮らす集落は聖域と呼ばれる泉を取り囲むようにしてドーナツ状に広がっているとのことだった。

長老とともに集落に足を踏み入れた瞬間、人間がこの大陸に居るという物珍しさからか、集落に住む亜人達が一斉に俺の前に姿を現した。
ざっと数えただけでも、その数およそ１００以上・・・。

空を見ればバッサバッサという羽根の音とともに会話している白と黒い羽を持つ者、地面には頭部が牛のような亜人や下半身が馬のような亜人、狼や兎のような耳を生やした獣人など数多くの亜人が集合していた。

「知っている者も居るかもしれんが、人間の身でありながら精霊様の加護を受けて結界を潜り抜けてきた者を里に住まわせる事になった。『人間だから』や『人間のくせに』という偏見を持たずに仲良く暮らして欲しい。以上だ」

「ただいま、長老様に御紹介されました人間のミコトと言います。慣れない地で混乱しておりますが、何卒宜しくお願いいたします」

挨拶をしながら頭を下げ、姿勢を元に戻した時に此方を凝視している白い羽を持つ女性と目が合った。

何処か出逢ったような気もしたが、とりあえず笑顔で場をしめた。

集まっていた亜人達も俺の紹介が終わると、そそくさと集落の奥へと歩いて行ってしまった。

長老も言うだけ言うと集落のリーダーなのだろうか、黒い羽を持つ青年と話をしはじめた。

「ねぇねぇお兄ちゃん、人間ってホント？」

「ん？」

ズボンの裾が何かに引っ張られているような感覚に気づき下方に眼を遣ると、小刻みに羽根を動かしていた子供達が物珍しそうに此方を見つめていた。

「ねぇってば。　どうなの？」

「あ、ああ、そうだよ。　人間を見るのは初めてかい？」

「うん♪　僕まだ飛べないから外に出られないんだ」

羽翼族の子供達は其れだけを言うと、ショボンと俯いてしまった。
俺は子供達の頭をそっと撫でながら声を掛けることにした。

「誰だって最初は似たようなものだよ。　人間だって小さい頃は歩けないのと同じで君達亜人も成長すれば飛べるようになるさ」
「うん、そうだね。　よ～し、頑張るぞ」

子供は元気に返事すると頭の上に何の遮蔽物のない広場で背中の羽根を小刻みに動かして空を飛ぶ練習を再開した。

「羽翼族とはいえ、生まれた時から飛べるわけじゃないんだな」

子供達の頑張っている姿を見ていると不意に背中に気配を感じた。

「幼子達を見て和んでいるところ申し訳ないが、ちょっと良いかな？」

声を掛けられ振り返ってみるとザンカールの道具屋で見かけたキイラさんが立っていた。

「ええ、構いませんよ。　えっとキイラさん・・・でしたっけ？」
「確かに私の名はキイラだが、何処かでお会いした事があったかな？」
「いえ、ザンカールの道具屋にてご主人との会話が聞えただけです」
「そうだったのか。　では改めて、私は集落リーダーのキイラだ。
ミコト殿には暫く、私の家で生活してもらう事となったが構わないかね？」
「それは構いませんが、キイラさんの御家族に迷惑が掛かるのでは？」

「大丈夫だ。　家内と子供が一人居るが、どちらも賛成してくれたからな」
「そうですか。それならお世話になります」
「長老の話しによれば暫く滞在するらしいな」
「はい。　初めての人間だという事でお世話になることになりました。よろしくお願いします」
「そんな畏まらなくても良いぞ。　此処に居る間は皆家族だと思ってくれればいい、他の皆にも堅苦しい挨拶など要らないからな？」
「わかりま・・・分かった」
「ああ、それでいい。　なら家に案内する着いてきてくれ」

羽翼族という空を飛ぶ種族という事で鳥の巣のような住居をしているのかと思っていたが予想に反して木と藁を使って作られた藁葺き屋根の家屋が所狭しと並べられていた。

「何か不穏な空気が流れたような気がしたが・・・気のせいか」
（マスター、気がついてますか？）
（ああ、白い羽の女性が後をずっとついてきてるな）
（彼女、何処かで見たような気がするのですが）
（俺も気になったが、敵対心は持ってないみたいだし放って置こう）

ルゥと会話しながら歩いているとキイラさんが立ち止まって此方を見ていた。

「如何した？　何か心配事でもあるのか？」
「うん？ちょっとね、亜人の中に人間が1人だから少し心配で」
「まぁ言いたい事は分かるが、基本的には人間と亜人は友好関係にあるからな心配は要らないと思うが」
「前にとある国に立ち寄ったときに亜人達の大陸を『魔族の住処』と呼んでいたから気になって」

「一部の国の人間は姿形が違うというだけで私達を毛嫌いしているからな」
「実際に会話をしてみれば分かると思うんだけどな。　こんなに良い人達なのに」
「ミコト・・・ありがとう」

そんなこんなで集落の色々な場所を廻り、数時間後にキイラの家に到着した。
危惧していたような事は何一つとして起こらず、反対に大袈裟すぎるほどの歓待の宴が催された。

まぁ祝いの料理と称して数多くの虫料理がテーブルに並べられた時は吃驚した。
好き嫌い『ある』『なし』の問題ではなかったが、口で言い表せない感触と味とだけ言っておこう。

序に言うと広場で最初に声を掛けてきた子供はキイラの子供だった。
同年代の友達が逸早く飛べるようになったことで心配になったんだそうだ。

第１０１話　不可解なアルフェクダの結界（前書き）

未だスランプを脱する事ができず・・・。

今の亜人の集落の話を何話作るかにも迷っています。
あんまり長くしても読みにくいし短すぎるのも如何かと思うしで・・
・板ばさみの様な状況ですね。

第１０１話　不可解なアルフェクダの結界

集落での1日目が終了して外に出た時、昨日キイラさんから言われた事を思い出した。

『この集落では人間の町で売る御守りで収入を得ています』
『では俺も其れを手伝えば良いのですね？』
『いえ、ミコトさんには最初の数週間は何もせずに集落を歩くだけにしてください。　基本、我々亜人は人間と友好関係にありますが、ごく一部の亜人は人間を毛嫌いしています。　そういう者に下手に近寄っては自分が怪我をしますよ？』
『分かりました』

キイラさんの言葉の通り、人懐っこく近寄ってくるのは物心ついていない子供の亜人のみで大人は歩いている俺を横目でちらちらと見ているだけで声すらも掛けてくることはなかった。
そんな目も気にせずに周りを見回してみると常に何処からともなく視線を感じていた。
視線は色々な場所から歩くたびに感じていたので特に気にしてはいなかったのだが・・・・。

（マスター、５０ｍほど後方から此方をつけてくる存在があります）
（この集落では、みんなそうだろ？）
（いえ、如何やら昨日から感じていた視線と全く同じで気配も同様のようです）
（俺に何か用でもあるのかな？　キイラさんは『歩くだけにしておけ』と言っていたけど声をかけてみようか）

俺が不意に振り向くと俺の後をついてきていた謎の人物は咄嗟に木

の陰に隠れたのだが、はっきりと白い翼が見えていた。

（この場合は“頭隠して尻隠さず”と言うより“頭隠して羽隠さず”かな？）

俺はそっと忍び足で近づくと隠れている人に声を掛けてみることにした。

「失礼だけど、俺に何か用でもあるのかな？」

「ひゃ！？」

此方の様子を伺っていたのは背中に白い羽を持つ天使のような女性だった。

「えっと・・・君は？」

「私はユリメスと言います。よろしくお願いします」

「あ、ああ、よろしく。で？何か俺に用があったのかな？」

「あの・・・私を覚えていませんか？」

暫く考えてみたところ、見知らぬ女性の筈なのに何処かで逢ったような気がしてならなかった。

ちょうど其処へ起きてきたキイラさんが家の中から出てきた。

「おや？ミコトさん？　元気ですね、朝からナンパですか？」

「ち、違いますよ！　俺に用があるようなので声をかけただけです」

「冗談です。　おや？貴女はユリメスですね、こんなところで如何しましたか？」

「あ、キイラさん。　命を助けてくれたミコトさんにお礼をと思いまして」

「命を助けた？」

目の前の女性から命を助けられたと聞いても何のことかサッパリ分からなかった。

「憶えていませんか？　森の中で山賊に襲われて翼を損傷し、飛べなくなっていたところをミコトさんの魔法で助けてもらった・・・」

其処まで言われて漸く思い出す事が出来た。
ザンカールの街から暫く歩いて飛び立とうとしていた時に悲鳴が聞えてきて・・・。

「ああ、あの時の襲われていたのが君か」
「やっと思い出してもらえましたか。　あの時はありがとうございました！」
「ちょっと良いかな？　話が見えないんだけど」

途中から参加したキイラさんだけが何の事なのか分からずに首を傾げていた。

「あれ？キイラさんに報告しませんでしたっけ？　薬草を取りにザンカールの街の傍にある森に入ったのですが、運悪く悪い人達に見つかってしまって翼に怪我を負って飛べなくなってしまったんです」

俺はユリメスと名乗る女性から話を聞きながらあの時のことを思い出していたが、対照的にキイラは顔が気難しそうな表情へと変化していった。

「それで『もう駄目だ』と思ったときにミコトさんが颯爽と現れて悪い人間達を打ちのめした後、回復魔法で傷を治療してくれたんです」

「そうだったのか。　で、何故その事を黙っていたんだ？」

キイラは腕組をしながら黙って聞いていたが、睨みつけるような表情で女性を見つめていた。

「えっと・・・・・集落に帰って来たのが夜だったので『報告は明日で良いか』と思っていたら、そのまま忘れていまして、昨日ミコトさんを見て思い出しちゃって。　すいませんでした！」

女性は羽翼族のリーダーであるキイラに必死に弁解するも時既に遅く、キイラに襟を捕まえられながら何処かへと飛んでいってしまった。

「キイラさ～～～ん、許してくださ～～～～い」

その後、ユリメスを見た者はいない・・・・

という訳ではなく、長老にコッテリと絞られているユリメスの姿が見受けられていたという。

「さて此れから如何しようかな」

そう思いながら集落の中を何気無しに歩いていると不意にミラから念話が届いた。

（主様、残してきた精霊達からアルフェクダの情報が届いていますが・・・。）

（フレイとシルフから？　分かった。話してくれ）

（はい。　今変わります）

暫く待っているとミラとは違う落ち着いた声が聞えてきた。

（主様、お忙しいところ申し訳ありません）
（いや構わないさ、如何したんだ？）
（主様を召喚したアルフェクダの状況です。　まずはメルディン姫のことなんですが、主様に何の罪もない魔族の討伐を依頼した事を後悔して嘆いているようでした。　とりかえしのつかないことをしてしまったと）
（まぁそうだろうな。　亜人達のことを誤解している国だもんな）
（その事を国王に進言して亜人達との戦争を止めさせようとしたみたいなのですが、国家反逆罪として塔に幽閉されてしまいました）
（幽閉って、仮にも一国の皇女だろ？　国王は亜人達をどう思っているんだ？）
（其れなんですが、国王は亜人の事を悪とは思っていないようなのですが、人間以外の種族は大陸には必要ないとして滅ぼす気のようです）
（なんてことを・・・）
（しかし結界がある限り近づく事さえ出来ないため、地団駄を踏んでいるようですが。）
（なら一先ず安心か。すまないが、また何か変化があったら教えてくれ）
（其れなのですが、何故か城内に私達精霊が入れない場所があるようなのです）
（なんだろう？　何かの結界でもあるのかな）
（分かりません。　何分（なにぶん）初めての経験でしたので）
（無理はしないで危険だと思ったら入らないで良いから。　気をつけて情報収集にあたってくれ）
（分かりました。それでは・・・）
（主様、大変な事になっているようですが如何なさいますか？）
（一応此処には何人をも寄せ付けない結界があるんだから、大丈夫だとは思うんだけど）

（そうですね）

色々と気になることはあったが、今は亜人達と仲良くなって水の精霊に逢う事を第一に考える事にした。

第１０２話　『近づくな』と言われると（前書き）

お待たせしました。

最近、腰痛でパソコンの前に座っている時間が限られてくるので、かなりシンドイです。

背もたれに寄り掛かりながら書いていますが、それでもキツイです。

第１０２話　『近づくな』と言われると

集落で生活し始めてから数日が経過した頃、いつもの様に散歩しながら歩いていると何時の間にかキイラに『決して近づくな』と言われていた聖域の前に佇んでいた。
更に聖域へと続く門の前には御伽噺や物語で登場するような龍の姿を持つ者が２人、２本足で立ち他者を圧倒するかのような眼で周囲を見据えていた。

「むっ！？　其処に居る者は誰だ？」

その姿に圧倒されながら立ち竦んでいると、１人の竜人が話しかけて来た。
流石に怪しがられたのか目線は俺を捕らえているが、手は何時でも剣を抜けるようにと腰の鞘へと添えてあった。

「其の方は人間か？　何故このような場所に人間が居る！？」
「まあ待て」

問答無用でヤられるかと思っていると、もう片方の者が此方に飛び掛かろうとしている相方を諫めた。

「兄者、何故止める？　人間がこの集落に居る事自体、不審極まりない事だぞ？」
「長老が言っていたことを忘れたのか？　精霊の加護を受けた人間が集落に住んでいると言っていただろう？」
「だが人間だぞ！？」
「話しにならん、お前は聖域の門番に戻れ。　人間への話は俺がする」

「・・・・・承知」

俺のほうへ突っかかってきた龍の姿をした人間は俺を睨みつけながら聖域の前へと戻っていった。

「さて人間、済まなかったな。　弟はあの通り猪突猛進な性格でな、手を焼いて困っておるのだ」

「あの人間人間って・・・俺の名前はミコトです」

「そうか度々すまないな、だが此処は大陸を取り囲めし結界の要とされる聖なる泉。　何人(なんぴと)たりとも祭りの時以外での聖域への立ち入りは禁じられておる」

「すいません。　集落の中をいつもの様に散歩していたら此処に辿りついてしまいました」

「そうか、先程も言ったが此処は精霊が棲むと言われている聖なる泉・・・もしも此処に異変が生じる事となれば大陸を取り囲む結界は一瞬で消滅し、亜人に悪意を持つ人間や邪な意志を持つ魔物が傾れ込んで来るだろう」

「分かりました。　ところで貴方方は？」

「我等は誇り高き竜人族・・・といっても最長老様と我等兄弟、集落に棲む家族を合わしても１０人しか居らぬがな」

「なるほど竜人族ですか、ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。　それでは此れにて失礼しますね」

「言い忘れたが今日より５３日後、精霊様に感謝する祭典が聖域にて執り行われる。　聖域に興味があるなら、その時にまた来るが良い」

別れ際に竜神族の門番からそう言われ、軽く頭を下げ集落へと戻っていった。

集落に入ると木を背にして此方を見つめているキイラに出くわした。

「ミコトさん、聖域に近づかないで下さいと言いませんでしたっけ？」
「もしかして見てたんですか？」
「何時もの日課である森の見回りをしていたら聖域の門番と口論しているミコトさんの姿が見えたんですよ」
「そうですか・・・でも行くなと言われて好奇心が芽生えるのは人としての性じゃないですか？」
「気持ちは分かりますが、祭典の日を待ってくれませんか？　最悪、命に拘る事なんですよ？」
「分かりました。　もう行きません」
「お願いしますよ。　本当に・・・」

散々キイラさんからの説教を聞いた後、寝床を貸してもらっている家に戻り夕食を済ませた後、眠りについた。
その夜、久しぶりにミラによって夢の中へと呼ばれることとなった。

「ん？　此処は夢の中か？」
「その通りです主様。　御足労をお掛けいたしまして申し訳ありません」
「御足労と言っても俺は寝ただけなんだけどな・・・それで何か用なのか？」
「はい。　水の精霊から、主様にお話があるとの事で」
「水の精霊から？　分かった聞こうか」
「では・・・」

ミラであると思われる光り輝く人型が身を翻すと、その後から全身が薄青色の人型が此方へ歩いてきた。

「態々御呼び立て致しまして、申し訳ありません。　水の精霊の思念体でございます」

青い人型は俺の目の前まで歩いてくると深々と頭を下げていた。

「突然如何したんだ？」

「貴方様には泉の目と鼻の先まで来られたにも拘らず、お目見えできなかった事。この場を深く謝罪いたします」

「それはしょうがないだろ？　亜人達も決まりだと言っていたしさ」

「ありがとうございます。　それでは５３日・・・いえ５２日後を楽しみにお待ち申し上げております」

其れだけを言うと、水の精霊は其処に誰も居なかったかのように姿が掻き消えてしまっていた。

そうして何事も無かったかのように朝を迎え、いつもの様に集落を歩き回る事にした。

聖域の扉が開かれる５２日後を楽しみに待ちながら、亜人達と生活を共にし一分一秒でも早く皆と仲良くなるため頑張って暮らしていこうと改めて決意した。

第１０３話　１ヶ月経過（前書き）

あまり良い出来ではないですが・・・

第１０３話　１ヶ月経過

亜人達の集落で生活し始めてから、あっという間に１ヶ月が経過した。
この頃には人間を嫌っていた亜人からも気軽に話しかけられるようになっていた。

「ようミコト、今日は何処に行くんだ？　暇なら畑仕事を手伝ってくれよ」

こう親しげに話しかけてくるのは、３m近い巨体をもつ牛魔人族（ミノタウロス）のロイマスだ。

「どうした？　ボーっとして」
「いや、最初の印象とは随分と変わったなぁ～と思ってね」
「そういやそうだったな。　ミコトが俺の嫌いな人間族とは何かが違うと分かってからは蟠り（わだかま）が解けたぜ」
「何故人間が嫌いだったんだ？　今更聞くのも何だけど・・・」

俺が理由を聞いた途端、ロイマスの表情が何処となく落ち込んだ。

「俺の古いご先祖様が人間族に討伐されたんだよ」
「それは・・・」
「見かけは凶暴に見えるかもしれないが、決して争いごとが好きだという訳ではないんだぜ。　俺の爺さんの爺さんのそのまた爺さんの爺さん・・・・・平たく言えば先祖が山で狩りをしていたのを凶暴な魔物と勘違いした人間が数人がかりで討伐しやがったんだ」
「すまない。　辛い事を思い出させてしまって」
「いや構わんさ、この話は俺の一族では有名な話だ。　何れ俺以外

の誰かから耳にすることだったんだ。　気にするな」
「畑仕事だったっけ？　俺でよければ手伝うよ」
「そう言ってくれると助かる。　いくら賭けで負けたとはいえ、俺一人で耕すには流石に広すぎてな」

人一倍大きな体格を持つミノタウロスが耕す広い畑って・・・。
俺は選択を誤ったかと思い、足音を立てずに逃げようとしたのだが。

「おっと逃がさねえぜ？　男なら一度言ったことは守ってもらわねえとな」

こうして俺はガハガハと笑うロイマスによって引き摺られ、広大な畑へと連れて行かれた。
幾ら俺が不死身で体力が無限とはいえ、奥行が見えないほど広大な畑の土起こしは流石に疲れる。
そして空が赤く染まる頃に漸く、畑の最終段階である水撒きが終了し帰宅する事となった。
ミノタウロスの体格に合わせたかのような大き目の鍬や如雨露（ジョウロ）などといった道具を片付け、帰路につこうとしたところで下半身が馬、上半身が人間という人馬族（ケンタウロス）のフェロスが林の中から此方を見ていた。

「改めて思ったが、とてもミコトが人間だとは信じられないな。体力だけが自慢のミノタウロスよりもスタミナが続くとは如何いう身体をしているんだ？」

丁度其処へ小屋に全ての道具を仕舞い終えたロイマスが訝しげな表情をして現れた。

「おいおいフェロス、『体力だけ』って酷すぎねえか？　流石に俺でも傷つくぞ」

「本当の事だろう？　逆に言えば数多くの亜人達の中でお前よりも体力のある奴がいるのか？」
「そう言われればその通りなんだが、他に言いようがあるってもんだろうが」
赤い顔をして文句を言っているロイマスを完全に無視してフェロスが話しかけて来た。
「そういえば、少し前にキイラの奴がミコトを探してたぞ。何の用があるかは知らないが、急いで帰ったほうが良いんじゃないのか？」
「そうなんですか！？　分かりました。知らせてくれて有難うございます」
俺は未だにロイマスが一方通行の言い争いをしている2人に手を振って帰宅した。
それから約１０分後、俺が帰宅すると１ヶ月前に此処まで案内してくれた羽翼族の長老であるアリオトがキイラさんと会話しながら俺を待っていた。
「お帰りなさいミコトさん。　長老様から御用があるとの事で探していました」
「すいません、色々と歩き回っていたら遅くなってしまいまして・・・」
「キイラ、すまないが少しミコト殿と話があるのでな、席を外してくれぬか？」
「分かりました」
キイラは深深と長老に頭を下げ、家の中へと入って行った。

「さてミコト様、此処1ヶ月での集落での暮らしはどうですかな？　何か困った事は御ありでしょうか？」
「いえ特にありませんね。　最初は亜人達の中に人間である、俺が入ってどうなる事かと思いましたが、皆さんとても親切ですし、これと言って困っていることはないですね」
「それは何より。　あと1ヶ月ほどで聖なる泉で祭典が執り行われます。　此れを逃せば1年先まで聖域に近寄る事は出来ませんので御注意なさってください」
「分かりました、1ヶ月後ですね？」
「はい。　最長老様が鳴らす、銅鑼（どら）の音を合図として集落に住んでいる全ての種族が聖域に集まり、最長老様が読み上げる訓辞のあと聖域に繋がるゲートが開かれます。　その時に皆が聖域の泉の水を口に含み、此れからの生活に幸あることを願い解散するのです」
「では俺も皆と一緒に聖域に入り、水を口にする振りをして精霊に逢うということで」
「そのとおりです。　くれぐれも祭典が始まるまで不審な行動をせぬようお願い致しますぞ」

長老はそれだけ言うと俺に頭を下げ空高く飛び立っていった。
俺も長老を見送った後、家に入ると其処には夕飯の支度をして待っているキイラさん一家の姿があった。

「長老様との会話は終られたのですか？」
「はい、1ヶ月後に聖域で祭典が執り行われるとの事で祭りでの決まりごとを説明してくださいました」
「そうでしたか。　それはそうと明日、人間族の街であるザンカールに集落で作られた品々を売りに行くのですが、何か生活に足りない物はありませんか？　皆からも畑で使う道具や人間族の食べ物を欲しいという声がありましたから、纏めて買ってこようと思っているのですが」

「ほしい物は特にないのですが、生活の足しにでも受け取ってくれませんか？　少ししかありませんが」

そう言って俺は出発時にアルフェクダの女王から手渡されたお金をキイラに手渡そうとした。　ザンカールの宿屋での宿泊代や食料品の買い込み等で手元にはコインが２枚、２００ＧＬ（ガル）しか残っていなかったが。

「いえ滅相もない。　そんな沢山受け取れませんよ」

「よくよく考えてみれば、此処で暮らしていてキイラさんに何の恩返しもしていませんでしたから、生活費の足しとして受け取ってくれませんか？」

「恩だなんて。　ミコトさんは御客様として此処に居るのですよ？　長老様からもミコトさんが不自由ないようにと託されておりますし」

そして言葉の遣り取りを数回、数十回と繰り返しても埒があかなかった為、就寝時間になったと同時に御開きとなった。

結局、散々受け取りを拒否された２００ＧＬはキイラさんの子供が大事にしている貯金箱の中へとそっと入れておいた。

第１０４話　仲良く食事する筈が・・・（前書き）

少し展開に手を加えました。

人間を見下している亜人の設定ということで

第１０４話　仲良く食事する筈が・・・

亜人達の集落で４５日が経過し聖域での祭典まで残すところ半月という、この頃になるとミコトのことを『たかが人間』と呼ぶ者はたった一人を残しておらず、聖域を守護する竜人族の兄とまで仲良くなっていた。

その『たった一人』の聖域の門番である竜人族の弟だけは受入れてはくれなかったが。

聞けば自分達、竜人族が誰よりも優れていると思い込み、寿命が短い人間を蔑んでいるようだった。

この事には俺と仲良くしている、兄であるリュシオンも心を痛めていた。

或る日の夜、俺と仲違いをしている聖域の門番である竜人族の弟と俺との仲を取り持つため、キイラさんの家で食事会が催される事となった。

当然、俺と顔を合わす事も喋る事も気にいらない弟は食事会に来る事を拒否していたのだが、最長老の命令と言う事で無理矢理参加させられていた。

事を心配した最長老が『命令』という言葉で間に入ってくれたのである。

「兄者も最長老様もどうかしている。　ひ弱な人間など我等と肩を並べる資格すらないというのに」

「お前はまだそのような事を言っておるのか！？　しかも事もあろうに最長老様をも侮辱するとは！」

「いや何回でも言わせてもらう。　たかだか１００年前後しか生きられぬ人間と最低でも１０００年以上もの寿命をもつ我等竜人族が

同じ高さの場所で飯を食うとは・・・」
「そのような事を仰らずに此処は私の顔を立てて、どうか穏便に」
竜人族の弟はキイラさんと実の兄であるリュシオンに言葉を投げかけられながらも、俺に背を向け食事をしていた。
「ミコト、すまぬな。　弟に代わって失礼を詫びよう」
「兄者！　下賤な者に頭を下げるとは・・・竜人族のプライドを捨て去ったのか！？」
「貴様はまだそのような愚かな事を」
間に入って仲を取り持とうとしていたキイラさんが青い顔をして右往左往している中、リュシオンの必死なる説得が続いている。
（マスター、好き勝手言われてますね。　流石の私も腹が立ってきました）
（ルゥ殿の言うとおりです。　主様の事を馬鹿にするなど我等精霊が黙っておけません！）
（２人（？）の気持ちは分かるけど、事を荒げるのも如何かと・・・）
（（（いえ、此処はビシッと実力を示すべきです））））
会話に参加していなかった火の精霊であるフレイと風の精霊であるシルフまでもが竜人族の弟の言葉に我慢ならないといった表情でミラに混じって苦言してきた。
（正直、力で認めさせるという行為は嫌いなんだけど、この際しょうがないか）
（主様、実力の差を思い知らせてあげてください）

ミラの後押しを受け、キイラさんとリュシオンに説教と言う形で話しかけられている弟に声を掛けた。

「如何すれば俺のことを認めてもらえるのですか？　力を示せば良いのですか？」

俺の問いに此処に来て初めて俺と目線を合わせた弟は嘲笑しながら睨みつけてきた。

「ふんっ、ひ弱な人間如きが強靭な肉体を持つ我等と互角であるとでも？面白い。　その考え、真っ向から粉々に打ち砕いてくれるわ！」

「ミコトさん！？　なんてことを・・・今からでも遅くはありません。発言を撤回してください」

「そうだ。　いかに弟が愚か者とはいえ、竜鱗に守られた我等が身体はおいそれと傷つける事はできん。　悪い事は言わん、発言を撤回するのだ」

「くくくっ臆病風に吹かれて逃げ出すのか？　やはり人間はその程度の生き物なのだな」

「いえ撤回はしません。　その伸びきった天狗の鼻を圧し折ってあげましょう」

「ほう？面白い。　場所と日時は貴様に決めさせてやろう。　好きな日を選択するが良い」

「では日時は明日の昼、竜人族の修練所で」

「態々、竜人の里でやり合うと？　皆の前で醜態を晒すと良いわ！」

弟は高笑いしながら乱暴に家の戸を開けると何処かへと歩いていってしまった。

「ミコトさん、何て事をしてしまったのですか！？　もう取り返し

がつきませんよ？」
「その通りだ。　弟の性格からいって公開処刑するつもりだろう、明日は無理にでも棄権するべきだ」
「大丈夫ですよ。　俺もあそこまで言われては腹の虫が治まりませんから。　それじゃあ明日に備えて眠りますね・・・おやすみなさい」

キイラさんとリュシオンが揃って頭を抱える中、俺は自分に宛がわれた部屋に戻り眠りについた。
そして翌朝、決められた時間に竜人族の集落にある修練場に行くと其処には何処から事を聞きつけたのか大勢の亜人達が闘技舞台の周りに集まってきていた。
そんな中、舞台の中央では何の防具も武器も身に付けていない弟が仲間の竜人族に囲まれて何かを喋っている。　取り囲んでいる中にはリュシオンと最長老の姿もあった。

「良く来た人間。　命を捨てる覚悟は出来たのか？」
「ミコト殿、昨日の夜にリュシオンから事を聞き驚きましたぞ。悪い事は言いません、決闘など中止してください！」

弟が話しかけたことから俺の姿を確認した最長老は愚かな決闘を辞めさせるべく、俺の前に立ち塞がった。

「あの者には後日、厳重注意いたしますので此処は一つ」
「いえ良い機会ですし、実力を思い知らせてあげましょう。　ひ弱な人間の力がどのような物か」
「・・・分かりました。　ただ万が一の場合は皆で取り押さえますので、その事はご了承下さい」

最長老は俺にそっと頭を下げると、舞台の上で弟と会話している他

の竜人族に声を掛け、舞台を降りていった。

「最長老様、止めなくても宜しいのですか？」
「構わん。　ただし何時でも取り押さえる準備はしておけ」
「分かりました」

そういう遣り取りから数分後、子供の喧嘩のような試合が始まろうとしていた。

第１０５話　竜人との決闘

今まさに人間を『ひ弱な生き物』と見下す、竜人族とミコトとの試合が始まろうとしていた。
流石に俺に敵意を持つ相手とはいえ、リュシオンの弟である存在を殺したくないので模擬戦用の剣を借りようと思っていたのだが、リュシオン曰く『大丈夫だからその剣で良い』との事だった。

舞台の外野には何時でも身柄を押さえられるようにと最長老を始めとする、他の亜人族が構えていた。
中には対戦相手である、竜人族の実の兄であるリュシオンや力自慢の牛魔族（ミノタウロス）のロイマスや俊敏な人馬族（ケンタウロス）のフェロスも軒を連ねている。

「ほう？ひ弱な人間の分際で良く逃げずに此処に姿を現したものだ。それだけは褒めてやる」
「その人を見下した態度が何処まで続くかな？」
「ほざけっ！　叩き殺してくれるわ」

リュシオンの弟は行き成り、手を鉤爪のようにして俺に襲い掛かってきた。
余程短気なのか馬鹿なのか、確実に自分が有利であると判断し何の防御もせずに飛び掛ってくる。
俺はカウンターで相手の勢いを利用して致命傷にならない場所に剣を振るが、弟の身体の表面にビッシリと隙間なく覆われている鱗によって刺さるどころか傷一つ付けられずに弾かれる結果となってしまった。

「その程度か？　やはり人間はひ弱な存在よ」

弟は弾かれた剣を見て薄ら笑い、鉤爪状の手を振り下ろしてきた。
俺は咄嗟に身を翻し右腕に掠り傷を負ってしまう。
とは言っても不死身の肉体なので瞬時に傷は治療され、痕は残らないが。

「手応えはあったと思ったんだが・・・人間は逃げ足も速いのだな」
「その皮膚が天然の鎧という訳か。　道理で隙だらけなわけだ」
「今頃気づいても遅いわ！我等竜人族こそがこの世で最も強き存在。
最弱たる人間など赤子の手を捻るも同然だ」

リュシオンの弟の愚かなる発言を聞いていると何処からか冷たい視線が弟に浴びせられている事に気がついた。

「何処を見ている？怖気づいたか。　今なら頭を地面に付けて謝罪すれば、許してやらん事もないぞ？」

俺の剣戟を受けて『やはり大した事はない』と思っているのか、此方に攻撃する素振りも俺の攻撃に対する防御をする素振りも見せずに、ただ舞台上で高笑いを続けている。

此れには舞台を取り囲んでいる亜人達もあきれた表情で、白い目線を弟に向けている。
さらには取り押さえようと構えている他の竜人達からも鋭い視線を向けられていた。

自分が最強種と信じる愚か者は後方から発せられる殺気とも思える視線に気づいていないと思われる。
流石に人間が魔法を使うのは不自然極まりないので魔法剣を使って倒すことにした。

（お灸を据えてやらないとな。　クラス２０解放だ）

俺はイスラントール闘技大会で使用した魔法剣を使うべく魔力を解放する。

（生理的にも受け付けない奴だけどリュシオンの弟だからな、なるべく致命傷になる場所は避けないと。　とはいえ何処を狙えば殺さずに倒せるのか・・・腕か脚を狙えば良いのか？）

クラス２０の魔力が俺の腕を伝ってルゥに注がれ、白銀色の刀身が金色へと変化する。

「なんだ？　勝てないと思って小細工でも始めたか？」
「小細工かどうか、自分の身で確かめるんだな」
「ほざけっ！」

俺は風の魔法による加速も使い、懐に飛び込むと魔力によって金色に輝く剣で弟に切りかかった。
リュシオンの弟も光る剣は小細工と思っているのか防御の姿勢も見せずに踏ん反り返る様に立っている。
が、何を思ったのか弟が身体を少し横に動かした事で俺が狙っていた腕から外れ、胸に向かって切りかかる形となってしまった。

「しまった！？」

軌道修正しようとするも時既に遅く、剣は無情にも胸に吸い込まれていった。

『ズバァァァン！！』

今度の魔力を帯びた剣は竜鱗に弾かれる事なく、弟の身体の表面に右肩から左脇腹に掛けて深い傷跡を刻み込んだ。

『ブシャァァァァーーー』

攻撃を馬鹿正直に真正面から受けた弟も事態が飲み込めず、傷跡から鮮血を迸(ほとばし)らせながら舞台に膝をついた。

「な、何故だ！？　何故、この俺が人間如きの攻撃で傷を負わねばならんのだ」

弟は胸の傷を右手で押さえながら、左手を地面について立ち上がろうと足に力を入れるが、ただ震えるだけで立ち上がることは出来なかった。

そんな折、殺気だった視線を込めていた最長老が弟に近寄り、トドメともいえる言葉を投げかけた。

「ひ弱だと見下していた相手から傷を負った気分はどうだ？」

「くそっ！　たかが人間の分際で・・・最長老様、この決闘は無効です。　人間如きが竜人族の身体に傷を付けられる訳がありません。　これは第三者の攻撃によるものです」

「貴様！　この期に及んで、まだそのようなふざけた事を申すか。　この愚か者を拘束せよ！」

「「はっ！！」」

「な、何をする離せ、離さんか！」

リュシオンの弟は胸の傷から血を流しながら両脇を他の竜人族に拘束され舞台から下ろされた。

「全く、身の程を知らぬ愚か者めが・・・ミコト、愚弟であるテュレイスに代わり謝罪する。　すまなかった」

弟の名前はテュレイスっていうのか。
出来れば本人から教えてもらいたかったけど、あの様子だと如何考えても無理だな。

それはそうと結構深めに入ってしまったが、あの傷が原因で死に至るって事はないよな？
そう疑問に思い、リュシオンに聞いてみると。

「俺の方こそ、ついかっとなってしまった。　あの傷は大丈夫だろうか？」
「あの程度の傷なら心配はない。　我等竜人族の自己再生能力は、例え腕を飛ばされようとも時間さえ掛ければ元通りになる」

まるで『蜥蜴の尻尾みたいだな』と言いそうに成ったが流石に失礼になると思い言わずにおいた。

「アイツの処分はどうなるんだ？」
「我らが兄弟、最長老の息子とはいえ重い処分は免れないだろう。
自分が見下していた人間に負けたばかりか、神聖なる決闘に不服を唱えたのだからな」
「ちょっと待て。　最長老の息子！？」
「ああ、言わなかったか？」
「初耳だ・・・」

舞台を取り囲んでいた他の竜人族を含む亜人達からもテュレイスの行動を非難する声が数多く寄せられ、ただ一人として彼の味方する

者は居なかった。

その後のリュシオンの話によるとテュレイスは最長老の命により謹慎処分となったそうだが、見張りについていた竜人族の隙をついて逃亡したとの事だった。

皆、俺への仕返しが来ると思い、家の周りに最長老の命で防御陣が敷かれたのだが襲撃はおろか、テュレイスの姿さえ集落で見ることは出来ずに何時の間にか行方不明という扱いとなった。

そして人間の住む町にまでテュレイスの捜索網は広げられたが、何の手がかりも得られずに聖域での祭りの日を迎えることとなってしまった。

第１０５話　竜人との決闘（後書き）

次話は今回の決闘相手となった竜人、テュレイス視線での物語を書こうと思っています。

なるべく早く仕上げようと思っているので楽しみにお待ち下さい

閑話？　愚かなる守護者　【前編】

俺の名はテュレイス。
誇り高き、古(いにしえ)より続く由緒正しき竜人族の戦士だ。
我が父でもある最長老様より命を受け、兄であるリュシオンとともに約２００年もの間、聖域の守護者として任に就いている。

今日も今日とて何時もの様に何の問題もなく、兄者とともに聖域の守護に就いていたのだが目の前であってはならないことが起きようとしていた。
事もあろうに下賤な存在である人間が我等の方へと歩いてくるではないか・・・。

この地は遙か数万年もの間、人間や邪悪なる遺志を持つ魔物が侵入できぬよう、結界が張られている。
俺が此処に居る限り、結界を生み出す聖なる泉には誰一人として侵入する事は出来ないというのに。
言い忘れたが、俺は魔物よりも何よりも人間族が嫌いだ。
我等のような最低でも１０００年の寿命を持つ選ばれし民とは違い、たった１００年前後しか生きられぬ脆弱な生き物。
そんな中でも気にいらないのは人間相手に愛想を振りまく、羽翼族のキイラの存在だ。
色々と話は逸れたが目の前の人間は事もあろうに我等が守る聖域に悠然と近寄ってきていた。

「貴様は人間か？　何故このような場所に人間が居る！？」
「まあ待て」

俺は結界内の侵入者を排除しようと腰の剣に手を携えながら人間に

近寄るのだが・・・。

「兄者、何故止める？　人間がこの集落に居る事自体、不審極まりない事だぞ？」

「最長老様が仰られていた事を忘れたのか？　特別な精霊の加護を受けた人間が集落に住んでいると言っていただろう？」

「だが、薄汚い人間が此処に居るのだぞ！？」

「話しにならん、お前は聖域の守護に戻れ。　人間への話は俺がする」

「・・・・・承知」

実際は直ぐにでも切り刻みたい思いに駆られていたが、聖域を下賤な人間の血で汚すわけには行かないと思い、兄者に人間を委ねることにした。

そして、その日から俺にとって耐えがたき日常が始まった。

聞くところによると、この人間は俺の住む家の目と鼻の先にあるキイラの家で過ごしているようだ。

当然、家が近いと成れば頻繁にこの人間と顔を合わす事になるのが俺としては我慢ならなかった。

「おはようございます」

「・・・・・」

「おはよう」

あの人間は俺が困っているのを見て嘲笑っているのだろう・・・毎朝毎朝、厭きもせずに気持ちの悪い笑みを浮かべて挨拶をしてくる。

俺は当然無視しているのだが、兄者は初めて見る人間に多大な興味があるようで聖域の守護に就かない休日には決まって人間と和気藹藹（わきあいあい）

々と話をしている。

そんなこんなで人間が来てから約１ヶ月が経過した。
一体どのような卑怯な手を使ったのか、俺以外の亜人全てと仲良くなっていた。
俺と同じ様に人間を嫌う、牛魔族（ミノタウロス）のロイマスまでもが仲良く畑仕事をしている始末だった。

そんな中、事もあろうにキイラの奴が俺と人間を仲良くさせようと食事会を提案してきたのだ。
俺は人間と顔を合わすのも声を聞くのも嫌なので当然のように断り続けていたのだが、何時の間にか最長老様の命令で強制的に参加させられる事になってしまった。
おのれぇ～キイラめ！　偉大なる父である最長老様をダシに使うとは・・・今に見ていろ

「兄者も最長老様もどうかしている。　脆弱で下賤な人間など我等と肩を並べる資格すらないというのに」
「お前はまだそのような事を言っているのか！？　しかも事もあろうに最長老様をも侮辱するとは！」
「いや何回でも言わせてもらう。　たかだか１００年前後しか生きられぬ人間と最低でも１０００年以上もの寿命をもつ、我等竜人族が同じ高さの場所で飯を食うとは許し難い行為だ」
「そのような事を仰らずに此処は私の顔を立てて、どうか穏便に」

キイラよ、お前の顔に一体どれほどの価値があるというのだ？
事がすめば貴様も同罪として罪を償ってもらう。　覚悟しておけ！

「ミコト、すまぬな。　弟に代わって失礼を詫びよう」
「兄者！　下賤な者に頭を下げるとは・・・竜人族のプライドをも

捨て去ったのか!?」
「貴様はまだそのような愚かな事を」
兄者が何と言おうが俺の気持ちは変わらぬ。
そう考えているとキイラと会話をしていた人間が事もあろうに俺を睨みつけてきた。
「如何すれば俺のことを認めてもらえるのですか？　力を示せば良いのですか？」
力を示すだと!?　人間が何を思い上がったことを・・・。
いや待てよ？　此れは好機ではないか。　なにせ合理的に痛めつける事が出来るのだからな。　決闘に託けて殺してしまうのも良いかもしれんな。
そうと決まれば精々此方に歯向かって来るようにしかけるとするか。
「ふんっ、ひ弱な人間如きが強靭な肉体を持つ我等と互角であるとでも？面白い。　その考え、真っ向から粉々に打ち砕いてくれるわ！」
「ミコトさん!?　なんてことを・・・今からでも遅くはありません。発言を撤回してください」
「そうだ。　いかに弟が愚か者とはいえ、竜鱗に守られた我等が身体はおいそれと傷つける事はできん。　悪い事は言わん、発言を撤回するのだ」
兄者にキイラよ、人間に味方するだけでなく、このような楽しげな事を止めるとは・・・心まで人間に染まったのか？
「くくくっ臆病風に吹かれて逃げ出すのか？　やはり人間はその程度の生き物なのだな」

「いえ撤回はしません。　その伸びきった天狗の鼻を圧し折ってあげましょう」
「ほう？面白い。　場所と日時は貴様に決めさせてやろう。　好きな日を選択するが良い」
「では日時は明日の昼、竜人族の修練所で」
「態々、竜人の里でやり合うと？　皆の前で醜態を晒すと良いわ！」

よし！　此方の思う壺だ。
しかも竜人族の闘技場を指定してくるとは、まさに願ったり敵ったりだ。
俺は翌日の決闘を楽しみに上機嫌で笑いながら家へと戻り、子供のように期待に胸を膨らませながら眠りにつく事にした。
翌朝、飛び跳ねたい気持ちを抑えながら闘技場に向かうと舞台の上に最長老様や仲間である竜人族の姿があった。

閑話？　愚かなる守護者　【前編】（後書き）

少し長くなってしまったので、前編・後編に分けることにします。

閑話？　愚かなる守護者　【後編】（前書き）

幽鬼族・・・ファントムは実体のない幽霊みたいな存在と思ってください

閑話？　愚かなる守護者　【後編】

そうか皆、俺を応援しに来てくれたのだな？　皆に代わって、俺が日々の鬱憤を晴らしてやろう。
・・・と思っていたのだが、俺に掛けられた第一声は『馬鹿な真似はやめろ』という言葉だった。
しかも竜人族だけなら兎も角、牛魔族（ミノタウロス）、人馬族（ケンタウロス）、羽翼族や滅多な事では他人に干渉する事がない幽鬼族（ファントム）までもが俺を止めようとしてくる。
皆の説教に苛立ち始めた頃、漸く人間が闘技場に姿を現した。
正直、最長老様といえども手を出したい気持ちになっていた俺は恨みを晴らすかのごとく言い放った。

「良く逃げずに来たな人間。　命を捨てる覚悟は出来たのか？」
「ミコト殿、昨日の夜にリュシオンから事を聞き驚きましたぞ。悪い事は言いません、決闘など中止してください！」

この期に及んでまだ止めようとするのか！？　上から命令する事しか出来ぬ、竜人族の恥さらしめ！
いい怪訝（かげん）諦めて、俺が目の前の人間を八つ裂きにする様を其処で見ているが良い。

その数分後に開始された決闘だが当然の如く、人間の初撃は天然の竜の鱗の前になす術がなく弾かれていた。
カウンターとばかりに俺からも手を出したのだが、寸前でかわされたようだ
俺は考えを変え、攻撃の手を止めると人間が力尽きて無様に命乞いをするのを待つことにした。
命乞いをしなくとも体力が尽きた頃を狙えばトドメを指す事もでき

る。

人間は攻撃が通じないと分かった直後、どのような小細工なのか剣の刀身を光輝かせた。

俺は人間の攻撃にあわせて今度こそカウンターで身体に風穴を穿ち、トドメを刺そうと思い身体を横にずらしたのだが、人間は俺の腕に狙いをつけていたようだ。

俺が身体を横にずらした事により、人間如きの剣では絶対に傷つかない筈の強固な竜の鱗に醜い傷が刻み込まれた。

「ひ弱だと見下していた相手から傷を負った気分はどうだ?」

人間め!どのような事をした。

いや、人間風情が俺を傷つけられるわけがない。

「くそっ!　たかが人間の分際で・・・最長老様、この試合は無効です。　人間如きが竜人族の身体に傷を付けられる訳がありません。　これは第三者の攻撃によるものです」

「貴様!　この期に及んで、まだそのようなふざけた事を申すか。　この愚か者を拘束せよ!」

「「はっ!!」」

「な、何をする離せ、離さんか!」

俺の言葉は受け入れられては貰えずに、最長老様直属の竜人族の戦士によって俺の身柄は拘束された。

「己の実力すら推し量る事の出来ない未熟者よ。　最長老様による、沙汰あるまで牢で謹慎致せ!」

「この俺が未熟者だと!?　聖域の守護を最長老様から任される、

この俺が・・・」
「貴様は何か勘違いをしてないか?」
「何の事だ!」
「聖域を守護する者が強いと誰が決めた? 門は役職についていない者が交代で見張りにつくだけの事。 仮に守護者がおらずとも最長老様の結界を破って聖域内に侵入できる者など、この集落には居らん」

俺は初めて聞かされる事実に頭が真っ白になり、気がつくと拘束していた者の手を振り解き、全力でとある方向へと走っていた。

「くそっ!俺こそが選ばれし戦士なんだ。 聖域の守護者が誰でも良い筈がない」

そして気がつくと俺の身体は何時の間にか宙に投げ出され、次の瞬間には水の中に沈んでいた。

「ガボゴボゴボッ・・・こ、此処は何処だ!?」

急いで水面に浮上し周囲を確かめると、頭上には薄緑色の膜の様な物質に覆われた島があった。
俺は確信した。 あれは俺が今まで暮らしていた亜人の大陸だということを。
同時にそれは羽翼族や幽鬼族(ファントム)とは違い、空を飛べない種族である俺が集落に戻る事が出来ないと確信した瞬間でもあった。

「まぁいい、どちらにしろ未練はない。 あの場所にいた所で俺の居場所は何処にもないのだからな」

そういえば結界の外という事は此処は人間の住む街なんだよな?

良いことを考えた。
胸の傷の仕返しといってはなんだが、人間どもを痛めつけてやる事にしよう。
亜人の集落で暮らしている人間が外の世界に出たときにどんな顔をするのか見ものだな。

先ず最初に誰から殺ろうかと考えながら周囲を見回すと怪訝そうな顔で此方を伺う白い髪に白い眼という、あの人間とは正反対の風貌をした少年が視界に飛び込んできた。

「お前に罪はないが、恨むならミコトとかいう黒い髪をした人間を恨みながら死んでくれ！」

俺は決闘で使ったように手を鉤爪状にすると恐怖心で動けないのか微動だにしない少年の胸へと爪を突き立てた・・・・・筈なのだが、胸を貫くどころか爪の先が僅かに皮膚に触れている状態から抜く事も刺す事も出来ない状態となっていた。

「痛いですね～行き成り何をするんですか？　僕は何か、貴方を怒らせる事をしましたか？」

俺は冷や汗が止まらなかった。　少しでも力を入れれば子供の身体、しかも人間ならば容易く殺せると思っていたからだ。

「き、貴様何者だ？　何故俺の攻撃を受けて平然としていられる」
「何者も何も見てのとおり、何処にでもいる子供ですよ？　変ですね～～～亜人と人間は友好関係にあると聞いてきたので此方から危害を加えない限り、傷つけられる事はないと教えられたのですが・・・」

俺の腕はまるで目に見えない何者かに?まれているかのように、どの方向に力を入れようとも決して動く事はなかった。

「それにしても、目の前にこんな物があると邪魔でしょうがないですね。　退かしてしまいましょうか」

少年は地面に落ちている小枝でも掴むように俺の手を取ると、無造作に捻じ上げた。

「グアアアァァーーー・・・な、何をする!?」
「何って視界の邪魔になるので退かそうとしただけですよ?」

そして次の瞬間、信じられないことに目の前に居る、ひ弱そうな少年に肩の付け根から腕を捻じ切られた。

「ギャアァァァーーーー!!」
「強そうに見えて案外、脆いんですね。　僕の力で簡単に千切れるんですから」

少年は俺の腕を無造作に捻りきると、もう片方の腕も同じ様に捻り上げていく・・・。

「た、助けてくれ。　何でもする、命だけは助けてくれ」
「情けないですね。　強そうに見えるのに僕のような子供に命乞いだなんて恥ずかしくないんですか?　それに無抵抗の僕を殺そうとしたのは貴方なんですよ?」
「▲●■●■様、お戯れはその辺にしてそろそろ戻られませんと」

一体何処から現れたのか少年の背後に頭から足元まで身体全体を黒い布で覆われた、口調からして年配の男が少年に跪いて声を掛けて

いる。
しかし、少年の名前が聞き取れない言語だった事が気になるな。

「もうそんな時間？　もうちょっと遊びたかったんだけどな。　ねぇもうちょっとだけ、あと5分ね？」
「我侭を言われては困ります。　早く戻らないと彼等に気づかれてしまいますよ？」
「それは確かに困るね。　そうだ！　ねぇ、コレ持って帰っても良いかな？」
「此れは・・・竜人ですか？　きちんと世話が出来るというのなら構いませんよ」

こいつらは何を喋っているんだ？
『コレ持って帰る』っていう意味不明な言葉を聞いた気もするが・・・。

「やったーーー！　ねぇ、君は今から僕のペットだよ。　粗相して僕に恥をかかせたらお仕置きだからね。　分かった？」
「ちょっと待て。　どういうことか説明しろ！おいっ」
「じゃ僕は先に帰ってるから、ちゃんと連れて帰ってきてね。　千切れた腕も持って帰ってきてね」
「了解いたしました」

少年はそういうと、最初から存在していなかったかのように姿が掻き消えた。

「全く殿下にも困ったものだ。　おい、丁重に連れて行け！」
「「「はっ！」」」

これまた何処から現れたのか、俺の周りに禍々しい鎧を着込んだ3

人組が現れ、俺を拘束したかと思うと次の瞬間には森の中にいた筈が形容しがたい空の色をした場所に連れて来られていた。

「こ、此処は何処だ！？　俺に何をするつもりだ」

「ふぅ、貴方は此れから殿下の愛玩動物（ペット）として過ごして貰います。言い忘れましたが拒否は出来ませんから、もし逃げ出したりしたら命はない物と思ってください」

「俺がペットだと！？　誇り高き、選ばれし民である竜人のこの俺が・・・」

その後、彼（テュレイス）をその世界で見た者はいないという。

閑話？　愚かなる守護者　【後編】（後書き）

謎の少年の正体については物語の終章で・・・

第１０６話　聖域の祭典

亜人達の集落で生活しだしてからテュレイスとの決闘など色々な事があったが、漸く６０日という日数が経過し年１回の祭りの日を迎えた。
アルフェクダの地へ情報収集のために向かわせていた風の精霊シルフと火の精霊フレイも水の精霊に逢わせる為、数日前に呼び戻してあった。

「それでは第３２９回目の聖域祭を始めようと思います！」

１人の竜人族の若者（実年齢はミコトの数十倍）が祭りの合図を宣言し、竜人族である最長老が巨大な銅鑼（どら）を鳴らすことで祭典が開始された。
祭典とは言っても、聖域の泉で身を清めるといったことから始まり、大陸を守ってくれている精霊に感謝しながら食を楽しむという至ってシンプルな祭りだった。

「ミコトはまだ聖域に入った事は無かったよな？」
「ああ、祭典時以外は立ち入り禁止だと聞いていたからな。　１ヶ月前に近寄って怒られはしたけどな」
「今夜は特別だ。　心行くまで聖域で身体を清めてくるが良い」
「ああ、そうさせてもらうよ。　ところでテュレイスの事なんだけど、その後進展はあった？」
「いや、何処で何をしているのか分からずじまいだ。　まったく心配ばかりかけやがって」

俺は親しくなった聖域の門番リュシオンと軽い挨拶を交わしながら聖域の奥深くへと足を進めた。

聖域の中へ入ってからも仲良くなった色々な亜人と顔を合わせたりをして中々一人になることは出来なかった。

「ミコトさんもいらしたのですね。　心行くまで祭りを楽しんでくださいね」

「うん。　ありがとう」

「では私は長老様のお食事などの御世話もありますので此れで失礼しますね」

そして周りに人の気配がしなくなったのを確かめると光の精霊王であるミラを通じて水の精霊へと呼びかけた。

（水の精霊よ、われらが主であるミコト様の呼びかけに応じ、姿を現しなさい）

ミラが念話にて聖域の泉に問いかけた瞬間、泉の水が粘土のように浮かび上がり、人型となって話しかけて来た。

（偉大なる神よ、お初にお目にかかります。　この地を守護せし水の精霊でございます）

（待たせてしまって済まなかったな）

（とんでも御座いません。　貴方様の事情は致し方ないことですから）

（それで契約の証となる精霊玉が欲しいんだが構わないか？）

（分かりました。　それでは精霊の腕輪を此方へ）

俺は水の精霊の指示通りに左手首に装着されている腕輪を泉に向けて差し出すと、柔らかい水色の光とともに新たに水色の宝玉が腕輪へと装着されていた。

（これにて全精霊のうちの半分が終了いたしました。　お疲れ様で御座います）
（此れで半分？　まてよ？　此処までは光・火・風・水だろ。　残りは氷・土・雷・闇・・・そして時空。　全部で精霊は9体じゃないのか？）
（時空を司るのは私達精霊ではなく、時空神と呼ばれる御方です）
（神か！？）

俺が時空を司るのは精霊ではなく、神だと言うことに驚いているとミラが話しかけて来た。

（時空神様に逢うには私達精霊に出会ったという証である、8個の宝玉を集めねばなりません。　その時がくれば闇の精霊王から連絡がある事と思いますので、今しばらくお待ち願いますようお願い致します）

ミラに時空神のことを説明してもらっていると未だ人型をとっていた水の精霊がミラに話しかけて来た。

（ミラ様、お手数ではありますが御力をお貸し願えないでしょうか？）
（それは構いませんが、如何するつもり？）
（今は私の力のみで亜人達の大陸に結界を張り巡らせておりますが、いつ何時（なんどき）何者かの手によって破られるやもしれません。　そこでミラ様の御力と私の力で新たに強固な結界を張ろうと思います）
（なるほど、保険という訳ですか。　主様、許可を頂けますか？）
（亜人達の為なんだろ？　俺に許可を求める必要はないさ）
（分かりました）

光の精霊ミラは其れだけを言うと光で人型をとり、泉の中央で水の精霊と抱き合うようにして呪文のような物を紡ぎ始めた。

（（♪～～～～～～ーーーーーーーー））

それは呪文というよりも天使の歌声と比喩しても良いほどの神聖なる響きがあった。

暫くして声が止んだ直後、眼を開けていられないほどの強烈な光が2人の精霊から発せられ上空へと昇って行ったかと思えば、次の瞬間には空中で弾け飛んでいた。

（これにて結界の再構成は終了いたしました。　ミラ様の助力に感謝いたします）

（光の珠が上空で霧散したかのように見えたけど？）

（はい。　この泉を中心として既存の結界の上から新たに精霊王の結界が張り巡らされた事になります。　結界は二重になりましたが、亜人達の出入りに関しましては何の問題もありません）

（そうか。　分かった）

（それと、お話は変わりますが主様と決闘されていた竜人族ですが・・・）

（何か知っているのか？）

（如何やら結界の外に出たようですね。　ただ結界から出て直ぐに掻き消えたかのように気配がなくなりましたが）

（なら、直ぐにリュシオンに教えてやらないとな）

そう思い、聖域の門に居るリュシオンのところに行こうとすると・・・

（お待ち下さい。　如何説明するつもりですか？）

（それは精霊に聞いたと・・・あっ！）

（お気づきになられたようですね。　精霊と会話するという事は主様が神様であるという事を話してしまうという意味になりますよ？）
（そうだったな。　危なかった、リュシオン達には悪いが黙っておく事にしよう）

精霊は一頻り説明するとミラは姿を消し、水の精霊も泉へと戻った。
そしてまるで推し量ったかのように聖域の門番である竜人族が俺を呼びに来た。

「こんな所に居たのか、そろそろ祭典は終盤に差し掛かる。　悪いが聖域から退出してくれ」
「ああ分かった。　聞いていた通り、此処は気分が落ち着く場所だな」
「そうだろう？精霊様に守られし聖域だからな。　だからこそ年一回の祭りのみ立ち入りを許可されている場所なんだ」

竜人族の顔見知りとなった門番とともに聖域から退出すると、同時に最長老の手によって聖域を守るための結界が張り巡らされた。

以前、門番に上空から聖域に侵入する事は出来ないのかと聞いてみたが、絶対に無理だと返されていた。
その事を長老達に聞いてみたところ、最長老が渾身の力を込めて聖域全体に結界を張るので余程の力を持つ者以外は立ち入れないと説明を受けた。

「じゃあ俺の場合は？」と聞いてみたところ『貴方様ほどの御力があれば一瞬で破られるでしょう』と４人が４人とも顔を青くしながら受け応えしてくれた。

こうして水の精霊に逢うという目的が達成できたが、祭典が終了し

て直ぐに居なくなっては流石に不審がられるので、あと１０日だけ集落でお世話になることにした。

ちなみに水の精霊の呼び名として『アクア』と名付ける事にした。

第１０７話　亜人の集落をあとにして・・・

水の精霊アクアとの出会いから瞬く間に１０日が経過し、愈々(いよいよ)集落から離れる日が訪れた。

「ミコト、本当に行ってしまうのか？」
「お兄ちゃん」

最初の頃は物心がつくかつかないかという年齢とはいえ、その外見から『絶対に仲良くなれないだろう』と内心思っていた、牛魔族や幽鬼族の子供も見かけとは裏腹にとても人懐っこく、会話しても１時間はおろか数分で仲良くなれていた。

「こらこら、ミコトさんにはミコトさんの事情があるんだ。　あまり引き止めてはいけないよ」
「でも～～～」

亜人達のリーダー的存在であるキイラさんがなんとか俺を行かせまいとしている亜人の子供達を柔らかな口調で制していた。

「分かった。　でもまた此処に来てね、約束だよ！お兄ちゃん」
「ああ約束だ。事が済めば此処に帰って来るさ・・・何日かかるか分からないけどな」
「絶対！約束だよ。信じてるからね」
「ああ」

子供達と約束したものの、世界を渡れば此処に帰ってくることは不可能だし俺が存在したという記憶も子供達の頭の中から消える事になるんだよな。

（マスター、お言葉ですが・・・）
（如何した？何か気になることでも？）
（マスターはお忘れかもしれませんが、この地はエルフの集落の時と同じ精霊に守護されし地です。　精霊の加護がある限り、記憶は無くなったりはしません）
（そういえばそうだったな。　すっかり忘れてたよ）

そして俺は今度こそ亜人達に出発する事を告げ、亜人達に見送られながら結界の淵に歩き出した。
来た時と同じ様に集落から外界の結界近くまで数時間掛けて歩き、もう少しで結界の外に出るという所で竜人族の長老に出会った。

「ミコト様、お疲れ様でございました」
「それほど疲れてはいないさ。　俺は不死身だからね」
「ははははっ！そうでしたね。　されど、お気をつけ下され、人間達の街を偵察に向かわせた者達によりますと、かなりきな臭いことになっている様ですぞ？」
「分かった、気をつけるよ。　新たに張り直した結界があるから、誰も入ってこれないとは思うけど注意だけはしておいた方が良いでしょうね。　『絶対』という言葉は存在しないのですから」
「了解いたしました。　肝に銘じておきましょう」
「それじゃ、また今度逢いましょう」
「はい。貴方様の旅路に幸あらんことを」

長老と話し終えた俺は久しぶりの風の魔法で宙に浮かぶと結界を潜り抜け大陸の外へと足を踏み出した。

（主様、すぐに次の世界へと旅立ちますか？）
（いや、長老の言っていた『きな臭い事』という言葉が気になるか

ら少し街の様子を見てからにするよ）
（分かりました）

俺は結界を通り抜けた足でザンカールの街の手前５００ｍの場所に降り立つと歩いて街に入った。
此処で気になった事は長老が言っていた通り紛争があったのか、ところどころ壊れている建物の壁や地面に付着している夥（おびただ）しい血痕や火属性の魔法で焼かれたのか、地面に人型の焦げ後がついていた。

「此れは一体・・・俺が亜人達の集落に居た２ヶ月の間に何が起こっていたんだ？」

更に何があったのか調べようと以前宿泊していた宿屋や道具屋に向かうと、其処には必死に掃除している宿の主人や道具屋の店主さん達がいた。

「良かった。　建物の壁は亀裂が入ってるみたいだけど皆は無事だったようだ」

俺は一時期であったとはいえ、お世話になっていた宿屋の主人が無事だった事に安心していると此方に気づいた道具屋の主人が話しかけて来た。

「お兄さん、この前は助けて頂き有難うございます。　まだ復興途中で大した物はないですが、ゆっくりして行ってくださいね」

俺は感謝された事に一切の身に覚えが無いのにも拘らず、感謝されて戸惑っていると次から次へと人が俺の元へと集まりだした。

「おぅ兄ちゃん、身体は大丈夫か？　何なら泊まっていくかい？特

製のスープを御馳走するぜ」

宿屋の主人や・・・

「あんた!?　あんな不味いスープ飲ませて命の恩人を殺すつもりかい?」

腕っ節が強そうなオバちゃん・・・

「ねぇねぇお兄ちゃん、あの綺麗な鎧脱いじゃったの?　格好よかったのに、また見せてよ」

元気に走り回っている沢山の子供達など・・・全然身に覚えの無い感謝の言葉を俺に浴びせては街の掃除に戻っていく。

(マスター?　一体何があったのでしょうか?)

(俺に言われても困る。　2ヶ月もの間、ず~っと亜人達と一緒に居たのだからな)

(そうですよね~~~この方達がマスターを他の誰かと間違えているのでしょうか?)

(そうだとしても全員が全員、見間違えるとか有り得るのか?)

俺がルゥと会話しながら腕を胸の前で組みながら首を傾げて考えていると、具合が悪いと勘違いされたのか宿屋の主人に引っ張られるようにして宿の中へと連れ込まれた。

「やっぱり具合が悪いんじゃないですか!無理をしないで泊まって行ってください。　外見はボロですが、内部はアンタの御蔭で無事ですから」

「いや、ちょっと・・・」

「心配なさらなくても命の恩人から金を取ろうだなんて、これっぽっちも思ってませんから」
「いや、そうじゃなくてですね」
「いえいえ、何も仰らなくても結構です。　何日でも休まれてください」
「話を・・・聞いて・・・」
「それでは後ほど、滋養強壮のスープをお持ちしますんで」

俺が何を言おうと聞いては貰えず、部屋に押し込まれるように足を踏み入れると宿の主人は何度も頷き『腕にヨリを掛けて御馳走を！』と意気込んで歩いて行ってしまった。

後には流されるまま、何があったか見当がつかずに立ち竦んでいる俺の姿があった。

（マスター？　取り敢えず休みましょう）
（主様、私も街の人達の声に耳を傾けましたが噂されている人物の特徴は主様に一致しているようです）
（それじゃあ2人は俺が亜人達と一緒に居ながら、この街と住人を何者かの手から救ったと？）
（住人達の話す内容から考えるに間違いないかと）

どういうことなんだ？
俺は何が起きているのか分からずに客室に足を踏み入れた状態のまま立ち竦み、特製の食事とやらを部屋に運んできた主人に発見され、更に大騒ぎとなってしまっていた。

第１０８話　次々と圧し掛かる疑問

宿屋の客室で考え事で立ち竦んでいた俺のことを宿屋の主人が『体調が悪い』と勝手に判断し、たまたま街に立ち寄っていた法術士を無理矢理連れてくるといった話になっていた。
『ただ考え事をしていただけだ』と何回も何回も説明を繰り返しても聞いては貰えずに明朝まで宿のベッドに縛り付けられ、法術士の治療（？）を受けさせられていた。

「本当に大丈夫なんですかい？　無理はなさらない方が良いのでは？」
「大丈夫だって。　ちょっと街の中を歩いてくるだけだしさ」

翌日の昼頃に漸くベッドから解放された俺は街の様子を見るために外出する事にした。

「それじゃ行ってくるよ～～」
「お気をつけて」

過保護というか何というか、俺が不死身だと知らないからしょうがないか。

宿屋の主人に手を振りながら街を見回るために歩いていると、罅の入った建物の壁をセメントのような物で修復している住人や地面にこびり（・・・）付いている血糊を必死に洗い流している者、子供達も友達と遊ばずに親と一緒に家の中の掃除をしている姿と・・・まるで災害のあとのような復旧作業のような絵になっていた。

そして皆、口々に俺の姿を見かけるたびに感謝の言葉を投げかけて

いる。
たぶん俺と外見の良く似た、誰かと間違えていると思うのだが。
それでも人々の表情に顔を向けながら街の奥に歩いていくと、こんな場所には居る筈の無い人物に出会う事になってしまった。

「あぁ勇者様・・・」
「俺は勇者じゃない、ただのミコトだ。　って如何してメルディン姫がこのような場所に？」

此処ザンカールの街ではなくアルフェクダ城に居る筈の、俺を召喚したメルディン姫が街の住民と同じ格好をして皆と同じ様に街の復興に勤しんでいた。

「如何してって勇者・・・いえミコト様が崩落寸前の城から私を助け出して街まで連れてきてくれたのではありませんか。　兄様達は残念でしたが、私が助かったのはミコト様の御蔭です。　本当にありがとうございました」

またしても俺が崩落寸前の城から姫を救ったと身に覚えの無い事を言われ、驚いていた。

（マスターが此れだけの人達から感謝されているところを見ると、マスターに救ってもらったという事実は強ち間違いでもないようですね）
（だけどルゥも知っての通り、この2ヶ月間は亜人達の結界の中から1歩たりとも外へと出てはいないんだぞ？）
（それが一番気になるところですが、マスターに外見がそっくりな人物とは考えられませんね）
（まぁ俺と同じ様に異世界から召喚するといった方法もあるにはあるが、俺と顔がそっくりな人物なんている筈も無いからな。　俺に

は兄弟なんていないし）
（あと考えられる事は、何らかの方法で別の時間からこの世界に遣って来たマスターというぐらいしか）
（別の時間から？　そんな事が可能なのか？）
（分かりませんが、其れぐらいしか考えようがありません）

別の時間帯の俺か・・・と考えていると突然黙り込んでしまった俺を心配したのか、俺の表情を覗き込んでいるメルディン姫の姿が其処にあった。

「ミコト様、如何なされたのですか？　何処か体調がお悪いのですか？」
「なんでもない。　ちょっと考え事をしていただけさ」
「そうなんですか？　そういえば、あの時もよく考え事をしていましたね。　まるで眼に見えない誰かと会話するかのように小刻みに唇を動かしながら」
「唇を動かしてた？」
「はい。　何か事ある毎に先程のような表情で考え込んでいるようでしたね」

メルディン姫をアルフェクダから助けた俺も精霊と会話していたという訳か？

「あ、それからあの時にも言いましたが私の事はメルとお呼び下さい。　アルフェクダが崩壊した今となっては私はもう王族ではありませんので」
「あ、ああ分かった」
「あの時もそう言って結局は呼んでくれなかったじゃないですか！」

メルディン姫が怒ったように頬を膨らませて俺に抗議していると家

のほうから呼ぶ声が聞えてきた。

「メル～～こっちの掃除を手伝っておくれ～～～」

「は～い。わかりました！　すいません、呼ばれたので行ってきますね」

「ああ、またなメル（・・）」

「はい！」

その後、宿屋に戻った俺は今のアルフェクダ城のことが気になり、宿屋の主人に旅を再開することを伝え翌朝出発する事にした。

夜が明けて出発しようと宿屋の扉を開けた瞬間に何処から聞きつけたのか街中の住人達の殆んどが集まり、盛大に見送ってくれたのは驚きだった。　実際に助けたのは俺じゃないのかもしれないのに。

街の住人に見送られながらアルフェクダ側の街の門を潜った俺は暫く普通に歩き、街側から見えない距離まで歩くと上空に飛び上がり空中を移動することにした。

最初、召喚された時は曲がりくねった道なりに謎の集団から襲われながらも４日かけてザンカールに辿りついたが、空を飛んでアルフェクダに行ったときは僅か４時間たらずで到着する事が出来た。

「此処があの（・・）アルフェクダか！？」

空を飛行していた時も、あの巨大なアルフェクダ城が中々見えてこないと思っていたのだが、実際に見てみると数ヶ月前の城の面影は何処にも無く、城のあった場所には、ただ瓦礫の山が高く積み上げられているだけの状態でしかなかった。

荒れ果てていた家屋の方も更に酷い状態で所々に大きな穴が空いており、酷い物では半分溶けた様な状態になっている物まで見受けら

れた。

「これは・・・一体此処で何があったんだ？戦争か？街の住人の反乱か？」

いや戦争ならザンカールの街もあの程度では済まないし、街の住人の反乱にしても強固な城を瓦礫の状態まで破壊することはとてもじゃないが無理だろう。

暫く考え込んでいたが、周りに生存者はいないのか精霊に頼んでみてもらったが生存者はおろか死体も一体も見つけられる事は出来なかった。

その後も瓦礫を魔法で砕きながら『騎士の死体とか鎧の破片か何か見つけられないか』と夕暮れ近くまで辺りを探したが何の成果も見つからずに、その場を後にした。

（ルゥ、どう思う？）

（マスターの言うように戦争でもあったのなら犠牲になった騎士の死体や飛び散った血の痕が見つかる筈なんですが、それらしき物は見つかりませんし。　どういうことなんでしょうか？）

（主様、皆で再度付近を捜索しましたが此れといって手がかりとなるものは全く見当たりませんでした。　申し訳ありません）

（いやミラやルゥが謝る事はない。　俺も探したが、まるで神隠しにでもあったかのように跡形も無く消えているのだからな、探しようが無いさ）

（メルさんやザンカールの街の方達が仰っていたように、主様に瓜二つの方の仕業でしょうか？）

（もしそうだとしても人を消え去る魔法なんて物があるのか？）

（そう言われると確かに）

色々な疑惑をたてながらも何一つとして信憑性が齎されないまま時

間だけが過ぎていった。

（しょうがない。　気になることだらけだが今更ザンカールに戻るわけには行かないし次の世界に旅立つ事にするか）

（宜しいのですか？）

（ああ此処で俺がすべき事は何も無い）

（分かりました。それでは世界を移動します）

その直後、俺の身体が光に包まれたと同時に俺の姿がアルフェクダの地から消え失せた。

まるで最初から其処に存在していなかったかのように・・・。

第１０８話　次々と圧し掛かる疑問（後書き）

数々の疑問がミコトの頭をよぎるも、如何する事も出来ないので次の世界に・・・という流れです。

少し強引でしたが、次からは別の世界編になります。

第１０９話　白き世界（前書き）

少し変わった異世界の設定を・・・・・と考えていたんですが、
大した成果は得られませんでした。

第１０９話　白き世界

（主様、この地は氷の精霊が守護する土地でございます）
（まぁ、これだけ猛吹雪が吹き荒れる土地だからな。ある程度は予想できたよ）

色々な事が気になりながらもアルフェクダの地から次の異世界へと渡った俺が眼を開けると、其処は白い氷の結晶が暴風となって吹き荒れる極寒の大地だった。
街か集落が見えるまで空を飛行して移動しようと当初は考えていたが、風速が強すぎて前方に飛ぶことは出来なかったため１歩１歩、雪が降り積もる大地を踏みながら右左も分からない雪原を歩いていく事にした。

（マスター、前方５００ｍ程の場所に沢山の人の気配があります。恐らく街か村があると思われます）
（分かった。何とかして辿りつかないと凍えてしまうな）

それから約２時間後、数十ｍはあろうかという向かい風に逆らいながら必死に歩いていると目の前に高い壁が聳え立っていた。

（マスター、沢山の人の気配はこの壁の向こうから発せられています）
（ということは・・・これは街を取り囲む壁か）

街の門を探して壁伝いに歩いていると高さ５ｍほどもある黒い扉が幽かに視界に飛び込んできた。
やっとの事で扉を見つけ近寄ったところで頭上から声を掛けられた。

「そこの君！早く街に入りなさい。　大雪崩がくるぞ！！」

大雪崩？　それにしても、よくこんな暴風の中で人の声が聞き取れたな。

「何をしている、早く街に」

「おっとそうだった。　街に入らないと」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・

俺が扉の取っ手に手が触れた瞬間に、視界を覆い隠すほどの雪崩が襲いかかり俺は生き埋めとなった。

「ウワアアアアーーー！」

「くっ！間に合わなかったか。　誰か、衛士隊に連絡して雪崩が収まってから救助をするよう連絡を入れてくれ」

「はっ、了解いたしました！　しかし、お言葉ですが既に手遅れではないかと」

「分かっている。　あれだけ大規模の雪崩に飲み込まれては、もう生きては居ないかもしれないが、せめて冷たい雪の下ではなく土の下で安らかに眠らせてやりたいからな」

「分かりました。　それでは連絡に行ってまいります」

それから9時間後、あれだけ吹き荒れていた吹雪は見る影も無く、一面銀世界の雪原が広がっていた。

「おい門兵、大雪崩の直前まで誰かが外に立っていたというのは本当のことなのか？」

「はい。間違いありません、此方からの呼びかけにも応じていたようでしたから」

「しかし此れだけの規模の大雪崩は未だかつて無い事ですね。　何

か悪い事が起こる前触れでなければ良いのですが」

一方その頃、大雪崩に巻き込まれて雪の中に埋もれているミコトはというと・・・

（・・ター・・ご無・・・か？）

ん？此れはルゥの声か？何があったんだっけ？

（マス・・・・ご無事・・・？）

ルゥからの念話だということは分かっているんだけど、何故だか身体がピクリとも動かないな。

（マスター！）
（ルゥか！？　どうした？　そんなに慌てて）
（やっと気がつきましたか。　心配していたんですよ～～～）
（俺は一体どうしていたんだ？　何故身体が動かないんだ）
（此処は雪の中です。　憶えていませんか？街の中に入ろうとして大雪崩に巻き込まれたんですよ）
（！思い出した・・・。　あれから何時間が経過しているんだ？）
（主様、あれから大体９時間が経過しています。　今はフレイに頼んで御身体の解凍をしていますので、暫くすれば動けるようになると思います）
（解凍って）
（主様～～～解凍終わったよ～～～身体動かしてみて）

“解凍”という言葉を聞いて冷凍食品などの事を思い浮かべているとフレイの元気そうな声が聞えてきた

身体の節々の感覚を確かめてみると、ぎこちない動きではあるが問題なく手の指や足の関節を動かす事が出来た。

（では雪の中から脱出することにしましょうか。　何時までも此処にいては、また氷付けになってしまいますよ？　幸いな事に街の人達が主様を探しに来ておられるようですし）

（街の人達が？）

（主様は見張りの方の目の前で大雪崩に飲み込まれてしまったのですから、あの方たちは主様の死体を捜しているのでしょうね）

（まぁいいか。火の魔法で雪を溶かしながら地上に出るとするか）

俺は雪の中にいるのにも拘らず掌にこぶし大の火炎球を作り出して上へ上へと雪を溶かしながら地上を目指して進んでいると不意にミラから声が掛けられた。

（あと一つだけ地上に出る前に注意しなければならない事がございます）

（注意？何のことだ？）

（この世界には魔法という概念がないため、魔法を使う事ができる者は御伽噺のなかで登場する神様だけだと思われているので決して人の前では魔法を使わないで下さい）

（魔法の無い世界か・・・分かった。　極力、魔法は使わない事にするよ）

（極力ではなく、出来れば絶対に使わないようにして欲しいのですが）

（分かった分かった）

（本当に分かっているのでしょうか？）

ミラに魔法の存在が無い事を聞いた後、ルゥに地上までの距離を聞きながら土竜になった気分で土の中ではなく雪の中を掘り進むよう

にして頭上に手を伸ばし、木のような物（？）にしがみ付き無事地上に出る事が出来た。

手に掴んだ感触は木と思えないくらいの柔らかさで掴んだ瞬間に悲鳴のような声が聞えたような気がしたが、気のせいだという事にした。

「ふぅ～～死ぬかと思った。　やっぱり外の空気は美味いな」

改めて地上に出て自分が木だと思って握っていた物を見ると、其れはスコップを持った人の足首である事が判明した。

「あっ、すいません。　人だと思わなかったもので」

「・・・・・・・・・」

見ると俺がしがみ付いてしまった人は防寒装備で体中を固め、手にしたスコップを足元に突き刺したまま、俺のほうを凝視して固まっていた。

周りを見ると同じ様な装備で身を固めた十数人の手にスコップを持った人達も眼が点になって俺のほうを凝視しているようだった。

そんな中で逸早く我に返った兵士が興奮した口取りで俺に話しかけて来た。

「あ、あんた！あれだけの大雪崩に巻き込まれて無事だったのか！？」

「ああ、少し身体が冷えてるけど特に怪我はなかったな」

まぁ怪我を負ったとしても瞬時に回復するけどね。

魔法が存在しない世界だと説明するのが難しいから注意しないとな。

「目の前で大雪崩に巻き込まれたのを見たときは『もう駄目だ』と思ったんだがな。　神様の御加護があればこそだな」
「目の前でって？」
「君からは見えてなかっただろうけど、物見の塔から君に避難を呼びかけていたのが僕だったんだよ」
「よく、あんな猛吹雪の中で声が聞えましたね」
「ん？ああ、あれは街の扉に秘密があってね」
「秘密？」

俺と兵士との会話を遮るようにしてスコップを持った兵士の中で１人だけ甲冑の形状が違う兵士が話しかけて来た。

「無事であったことは喜ばしい事だが、何時までも濡れた服で外にいれば今度こそ無事では済まないぞ？　積もる話はあとにして宿屋で休まれてはいかがか？　お前も本来の見張りに戻れ」
「兵士長、申し訳ありませんでした。すぐに戻ります」

目の前に立っている兵士長の発言から周りにいた兵士も雑談を交えながら続々と街の中に戻っているようだった。　俺に最初に話しかけた兵士も足早に扉の中へと消えていった。

「お見苦しいところをお見せして申し訳ありません。さてお疲れでしょう、宿屋に御案内いたします」

こうして俺は男性か女性か分からないほどに甲冑で全身を覆った、兵士長と呼ばれる人に引っ張られながら街にある宿屋へと足を進める事となった。

第１０９話　白き世界（後書き）

結局『魔法』が存在しない世界と言う事に落ち着きました。

世界に魔法がなくてもミコト自身は魔法を使う事が出来るので、この事が如何物語に影響するのか乞う御期待を

第１１０話　不審人物？（前書き）

読者の皆様方の御蔭でユニークアクセスが１００万人を突破し、『お気に入り登録』も４０００件に達しました。

まだまだ終わりの見えない『異世界を渡りし者』ですが、これからも応援よろしくお願い致します。

第１１０話　不審人物？

全身を足元と関節部以外を甲冑で覆っている兵士長と呼ばれていた人物の後を追って古びた宿屋へと到着した。
宿屋のカウンターには人の良さそうな顔をしている、朗(ほが)らかな妙齢女性と懐から茶色の板のような物を数枚手にとって妙齢女性に手渡している冒険者の姿があった。

恐らくは冒険者が持っている、茶色の板のような物こそがこの世界の通貨と思われる。

「すまない、部屋を一室借りたいのだが？」

兵士長が丁寧な口取りで女性に問いかける。

「ええ、少しお待ちくださいね。　ええと、はい此方をどうぞ」

女性は慣れた手つきで後方にある、ボックスの中から一つの鍵を取り出し兵士長に手渡した。

「ありがとう。　では行こうか」

鍵を受け取った兵士長は渡された鍵に記されている部屋の番号と思われる刻印を見ながらカウンターの横にある階段を上り、奥へと歩いていく。

「此処で間違いないな。　さぁ入ってくれ」
「はい」

兵士長は鍵に記されている数字と部屋の入口に書かれている数字を見比べ間違っていない事を確認すると俺を伴い、“６”と書かれた扉を開けて部屋の中へと入っていく。
その部屋は宿屋の古びた外見とは思えないほど、綺麗に整頓されていて部屋の片隅には暖炉があり、炎が轟々と燃え盛っていて雪国とは思えないほど暖かかった。

「さて、疲れているところを申し訳ないが此方も仕事なんでね。悪いが身分証の提示をお願いできるかな」
「身分証ですか？　ちょっと待ってください」

もとより身分証はおろか、この世界の通貨すら持っていないので此処は一芝居打つことにした。

魔法学院の時の身分証なら亜空間倉庫に入れてあるのだが、要らぬ混乱を招きかねないので使わない事にする。
使われている文字自体も全然違うのだから、どちらにしろ無理だろうが・・・。

いかにも此処に入っていると思わせるように服の内ポケットに手を突っ込み、身分証を探す素振りを見せる。

「ん！？　何で・・・」
「如何かしたのか？」
「此処に数枚の硬貨と一緒に入れておいた筈なんですが、ポケットに穴が空いているところを見ると何時の間にか落としてしまったようで」
「なんだと！？　それでは自分自身を証明できる物は何一つとして持ち合わせていないということか？」
「すいませんが、そういうことになると思います」

「そうか。　残念だが理由はどうであれ、この街を警備する立場上、身分を証明できない者をこのままにしておくわけにはいかない」

兵士長が言葉を発した途端、まるで視線で射抜くかのような鋭い眼光で俺を睨みつけてきた。

「えっと、どういうことなんでしょうか？」

「君が手配者であるか、そうでないかといった証明が出来ないということだ」

「じゃあ、俺の処遇はどうなるのですか？」

「まぁ、そう結論を急くものではない。　本来なら衛士隊の駐留所に連れて行って手配書と照合し、問題が無ければギルドで身分証明書の再発行を要請するのだが、今日は時間が遅いからな。　後日改めての取調べとなるだろう、念のために言っておくが拒否は出来ないからそのつもりで」

「分かりました。　でも俺は宿に泊まる通貨すら持っていないのですが」

「その点は心配するな。此処に連れてきたのは私だからな、宿代ぐらいは私が持つさ。　そのかわり君の見張りとして兵士を宿屋に配備しておく事になるが構わないか？」

「はい。　当然の事だと思いますので」

「話が早くて助かるよ。　おっと自己紹介がまだだったな、私はシャノルクの街の外郭を警備する衛士隊の隊長でイノフェルという。　よろしく頼む」

「あ、俺の名はミコトです」

「ではすまないがミコト殿、明朝に宿屋の外で待機している兵士にこの事を伝え駐留所まで来てくれ」

「あ、イノフェルさん。　俺のことは呼び捨てで構わないですから」

「分かった。　私の事も呼び捨てで構わない。　“さん”付けで呼ばれるほど偉い立場の人間でもないし、見たところ歳もそれほど離

れていないようだからな」
「分かりました」
「それではな」

イノフェルはそう言い残した後、手を振りながら部屋を後にした。

数分後、窓の外から何やら話し声が聞え、外を見てみるとイノフェルが数人の兵士達に手振り素振りで指示を与えているようだった。見張られている事に若干の緊張感を覚えながらも、致し方ないことだと思い緊張を解くと不意に頭の中に念話が届いた。

（主様、私が周囲の配慮を怠ったばかりに雪崩に巻き込まれる形になってしまった事を謝罪いたします。　申し訳ありませんでした）
（いや構わないよ、俺は不死身なんだからさ。　それにあの場面では雪崩に気づいていたとしても逃げるのには間に合わなかっただろうしね）
（主様の寛大な御心に感謝いたします）
（そんな大袈裟な）
（大袈裟などではありません！　いいですか？貴方様は神様なのですから・・・）

精霊との会話のキャッチボールが十数回ほど続き、結果的に俺が折れる事で話がついた。

（最後に此れだけは注意しておいてください。　最初にも言いましたが、この世界には魔法という概念は存在しません。　主様は世界に囚(とら)われずに何の問題もなく魔法を使用する事が出来ますが、決して人前では使わないで下さい。　今以上の騒ぎになることは目に見えて明らかですので）
（ああ、分かった）

光の精霊ミラとの会話が丁度終わった頃に部屋の扉をノックする音が聞えてきた。
何事があったのかと思い、部屋の扉を開けてみると・・・。

「ある・・・いえ、お客様。　お食事の御用意が整いましたので食堂の方までお越し願います」
「あっ、はい。　分かりました」
「それでは失礼致します」

カウンターにいた妙齢の女性とは違う、凄く丁寧な物言いをした小柄な女性は俺に対して軽く頭を下げた後、足音を立てずに廊下の奥へと消えていった。
こんな街の宿屋で、まるで貴族か何かに対する応対の仕草、部屋の綺麗さなどから高級な宿屋であると思われたので食事の時に軽く聞いてみると。

「うちの宿屋が高級かですって!?　とんでもありませんよ。　うちは親切・丁寧・低額を売りにしている、至って普通の宿屋ですよ」
「そうなんですか。　女性店員の対応が凄く丁寧でしたので勘違いいたしました」
「女性店員ですか？　失礼ですが、誰の事を言っているのでしょうか。　この宿で働いているのは私と料理を担当する男性ともう1人の3人居るだけなのですが」
「それじゃあ、部屋に『食事の用意が整いました』と知らせに来てくれた女性は？」
「いえ？　うちではそのような女性は雇ってはいませんが」
「寝ぼけていたのかな。　それはそうと此方の宿代は幾らなのですか？」
「えっと、6号室のお客様ですよね。　宿代はイノフェル様から既

に頂いておりますが？」
「はい。　それは聞いていますが、この街には数日ほど滞在する事になると思いますので料金を聞いておこうかと思いまして」
「そうですか失礼致しました。　私共の宿では1泊2食付で銅板5枚となっております」

『銅板とは一体何だ？』と内心思ってしまったが此処で聞きなおしては不振がられると思い、黙って相槌を打つ事にした。

「分かりました。　明日は少し外出しますが、部屋はそのままにしておいて貰っても構いませんか？」
「はい、御利用ありがとうございます。　宿代は毎夜徴収する事になります」
「了解しました。　それでは、料理美味しかったです。ご馳走様でした」

そう言い残して俺は部屋へと戻り、ベッドでそのまま横になった。
明日の駐留所での心配事、部屋に呼びにきた女性は果たして何者なのか、これからの事などを考えていると何時の間にか夢の中に誘(いざな)われてしまい、第5の世界最初の日は終わりを告げた。

第１１１話　事情聴取（前書き）

今日で『異世界を渡りし者』投稿開始から丸１年が経過しました。

最初の頃と比べて更新速度は落ちましたが、頑張って最後まで書き続けるので此れからも宜しくお願い致します。

第１１１話　事情聴取

翌日、これまで体験した事の無いほどの肌寒さで目を覚ました。
窓の外を見てみると夜明けには程遠いようで遙か地平線の彼方に薄っすらと光が差し込めている程度だった。

「うう～～～こんなに寒いとは・・・・・・まぁ雪国だから仕方ないといえば仕方ないのだけど」

部屋の片隅にある暖炉を見ると数時間前には轟々と燃え盛っていたにも拘らず火は消え、代わりに炭が半分凍りついている状態だった。
暖炉の中にある薪を一本手に取ると、まるで氷の棒を持った感触が手に伝わってきた。

「流石に薪がこの状態では火はつかないか」

よく見ると暖炉の横の壁には張り紙がしてあり『薪は毎朝部屋に届けますが、大至急必要な方は受付まで』と書かれている。

「確かに今の状態では薪が必要だけど、この時間に行っては流石に迷惑だな」

俺は火のつかない暖炉を何時までも眺めていても仕方ないと思い、ベッドに戻ると猫か何かのように布団の中で丸くなり夜明けを待つことにした。
そしてそれから数時間後・・・

「お客様、朝食が御用意できましたので食堂まで御越し願います」

部屋の扉をノックする音と共に昨晩と同じ声が聞えてきた。
布団の中で蹲っている間に何時の間にか眠ってしまっていたようで、窓からは眩しいほどの光が差し込めていた。

（主様おはようございます。　良くお眠りになられましたか？）
（ああ、おはようミラ。　もしかして夢の中に誘ってくれたのは）
（はい。　差し出がましいとは思いましたが、主様がお困りのようでしたので）
（いや助かったよ、ありがとう）
（いえ、そんな勿体無いお言葉です・・・・・・）

ミラに朝の挨拶とお礼を言った俺はベッドから起き、普段着に着替えると食堂に向かう事にした。

「そういえば、さっき扉から聞えてきた声は昨晩と同じ女性の声だったな」

そうこう考えているうちに食堂に辿りついた。

「あら御客様早起きですね。　直ぐに食事の準備が出来ますのでお掛けになってお待ち下さい」
「あの～～本当に他の従業員は居ないのですか？」
「え？　ええ、この宿は私の家族のみで経営していますので、とても他の従業員を雇う余裕は・・・・・・いかが致しましたか？　何か気になることでも？」
「いや何でもないよ。気にしないでください」
「そうですか～～～？」

女将さんと会話をしていると料理が出来上がったようで、目の前のテーブルに朝食が並べられていく。

夕食時と同じく、殆んど肉類は使われていなかったが美味しく頂く事が出来た。

「ご馳走様でした」

食事を終えて部屋に戻ると紐で縛られた数本の薪と一緒に缶の容器に入れられた油と火のついた蝋燭が置かれ、暖炉の中にあった消し炭は全て取り除かれていた。

「なるほど、此れで暖炉に火を点けろという訳か」

直ぐに暖炉に火をつけようとしたが、直ぐに出かける事を思い出し踏みとどまった。

数分後、俺は火のついた蝋燭と部屋の鍵を受付に渡して外出する旨を伝え、宿屋の出入り口で待機している兵士に声を掛けて駐留所までの道を歩んだ。

到着した先は街のほぼ中央に位置する宿屋より一回り大きい平屋の建物だった。

「それでは此方で待っていてください。　念のために武器は預からせていただきますが宜しいでしょうか？」

「分かりました」

俺は建物に入って直ぐの待合所に通され椅子に座っていた。　此処まで案内してくれた兵士は別の兵士と何か会話をしながら奥の扉へとはいっていく。

兵士が入って行った部屋とは別の扉からは兵士の訓練の声なのか、木の棒同士を打ち合わせている音と盛大な掛け声が聞えてきていた。

駐留所の待合室（と言っても出入り口付近に椅子があるだけなのだが）で待つこと十数分。
宿屋から此処まで連れてきてくれた兵士とは別の者が用意が整った事を俺に伝え、執務室に通された。
少しばかり緊張しながら扉を開けると、向かって正面左側の椅子には壁1枚隔てた外は氷点下という寒い雪国であるにも拘らず、見た目が暑苦しい上半身裸の厳つい顔の男と、右側の椅子には男とは正反対の、朱色の綺麗な髪を纏めている女性の姿があった。　どちらの視線も部屋に足を踏み入れた俺に集中しており緊張感は更に増大していた。

「イノフェル、あの者がオヌシの言っておった雪崩に巻き込まれていたという冒険者か？」

聞き間違いでなければ上半身裸の男は朱色の髪の女性を“イノフェル”と呼んでいる。
確かに宿屋に案内してくれた時は顔をマスクで隠しており、男性か女性か分からなかったが・・・・・。
「そうですガルフォード隊長。良く来てくれたなミコト、紹介しよう。　此方はシャノルク内郭守護隊隊長のガルフォード殿だ」

この男性も守護隊隊長と説明され、頭を下げて挨拶をするとガルフォードと呼ばれた隊長も首を軽く縦に振って応えてくれた。

「では早速だがミコト、身分証明証を作成する際に幾つかの質問をさせてもらうが構わないか？　一応拒否する事も出来るが、その時は場合によっては最悪、街から強制追放処分が下る可能性もあるが」
「・・・・・構いません。　答えられる事なら何でもお答えいたします」

数秒ほど考えたが、本当の事をいう訳にもいかないので嘘も交えて応える事にした。
その折に鋭い視線を感じ、室内を見回すとガルフォード隊長が俺の顔を穴が空くほど睨みつけていた。

「分かった。　それでは最初は・・・・・」
「その前にイノフェル、ちょっと良いか？」

今まさに詰問を開始しようとしていたイノフェルの言葉を遮り、ガルフォードという未だに上半身裸の暑苦しい男が目尻を押さえながら割り込んできた。

「如何なさいました？　ガルフォード隊長」
「こやつの顔と手元にある手配書の似顔絵とを見比べていたのだが、どうやら手配犯ではないようだ」
「それでは犯罪者という疑惑は考慮しなくても宜しいですね」
「ああ」

俺の顔を穴が空くほど睨みつけていたのはそういう訳だったのか。

「さて話を戻すが、先程ガルフォード隊長が仰られたようにミコトが手配犯でない事は証明された。　其れも踏まえて、まずは何処で生まれ育ったか出身地を聞かせてもらおうか？」
「はい。　出身地はこの地から遙か東方に位置する名も無き島国です」
「名も無き島国？　どの様な場所だ？」
「少数民族が暮らす小さな島国だったのですが、今から数年前に火山の噴火の影響で島は海に沈み、たまたま山を散歩していた俺以外の一族は全て・・・・・・」

俺がそう応えた瞬間、ガルフォード隊長の眉がピクッと反応していた。

「そうか。　辛い事を思い出させるような質問をして済まなかった」
「いえ。　気にしてませんから」

どうせ出任せだし。

「そう言ってもらえると助かるが、何の取り得も無いこの街に来た理由は何だ？」
「自分のいた国では成人するまでは国外に出てはいけないと言う決まりがあったので、此れを期に各地を転々とし見聞を広めていました」
「そうか。　では身分証明書はその時に取得したのか？」
「はい何年前になるのかは良く憶えておりませんが」
「それで大雪崩に巻き込まれたときに無くしてしまったという訳か」
「雪が溶ければ出てくるかもしれません」
「残念だが其れは無いな。　この地は1年中、雪が降りしきる極寒の地。　雪が積もる事はあっても完全に溶けてなくなることは無い」

それから2時間に渡って取調べとも取れる質問と世間話を繰り返し、無事に守備隊発行の準身分証明書を発行してもらう事が出来た。
質問の答えを嘘八百で突き通したが、この世界に俺のことを証明する物が何一つとして存在していないからな・・・・・。　気が病むが致し方ない。

「では、この証明書をギルドにある窓口に提出して身分証明書を再発行してもらうといい」
「ありがとうございます。　では失礼します」

俺は2人に頭を下げながら挨拶し執務室をあとにした。

ところ変わって此方はミコトが退出した後の執務室。

「如何でしたかガルフォード隊長、ミコトの様子は？」

「言葉や顔の表情を見ている限りではハキハキとしている感じで嘘をついてるようには見えなかったな」

「それにしても、今は無い故郷の島国ですか」

「その事なのだが、噂程度でなら聞いたことがある」

「本当ですか？」

「実際に見聞きした訳ではないので詳しい事は言えないが、噂によればその島国の一族は俺達には無い特殊な力を持つ者が存在していたと聞く。　それが何であるかは分からぬがな」

「特殊な力・・・・・ですか。　ミコトも持っているのでしょうか？」

「其れは分からんが警戒しておくに越した事はないな」

「そうですね。　では隊の者に・・・・・」

「頼む」

そんな遣り取りがされているとは知らない俺は駐留所から外に出た後、ギルドの場所を探していた。

第１１２話　道に迷いし者？（前書き）

展開に少し迷いが生じたため、少し更新が遅れました。

第１１２話　道に迷いし者？

守護隊駐留所での取調べ（？）が終了し、準身分証明書を手に建物の外に出た俺だったが、３０分が経過して未だにギルドを見つけられず、雪が降りしきる中を彷徨っていた。

（マスター、ギルドの場所見つかりませんね～）

（ああ大抵、それらしい看板か何かが設置してあると思うんだが・・・）

宿屋や武器防具屋、道具屋にはソレを象徴する看板が扉の上部に括り付けられていたが、大通りや裏通りなど何処を探してもギルドを指し示す看板が見受けられなかった。

誰かに話を聞ければ一番なのだが気温が低い所為か、せっせと歩き回って話をする余裕がない守備隊以外、誰一人として街の人は外を歩いてはいなかった。

いや、たまたま住民を見つけても声を掛ける前に建物の中に入ってしまうので結局道を聞く事が出来ない有様だ。

それでも諦めずにギルドの建物を探して歩き回っていると、目の前からつい３０分前に顔を合わせていたイノフェルが困惑顔で此方に声を掛けてきた。

「ミコト？　こんな所で何をしているのだ？」

「ああイノフェルか、ギルドの建物を探しているんだけど見つからなくて」

「ミコト・・・・・言っては何だが、君は方向音痴なのか？　ギルドなら駐留所の真後ろに建っているではないか」

イノフェルに言われ、駐留所の真後ろにある建物に向かうと看板は見当たらないが建物の壁に『1階冒険者ギルド、2階役所』と書かれているのが見受けられた。
「こんなのって・・・・・・あり？」
「分かったか？　ああ、そうそうミコトに渡す物があったんだ」
イノフェルはそう言うと服のポケットに手を突っ込み、表面に鳥が翼を広げた姿が描かれている銀色のコインを5枚手渡してきた。
「財布も身分証明書もなくしたと言っていたからな。　返却期限は2ヶ月後だ」
「これは？」
「兵士が君に渡し忘れたと言っていた、5枚の銀貨だ。　知っているとは思うが役所で身分証を取得するのに銀貨1枚が必要になるし、ギルドで仕事を請け負う時にも前金が必要になる。　まぁ言ってみれば、緊急時に貸し与える駐留所からの借金みたいなものだな」
そうなのか、それじゃあ例えギルドを見つけられていたとしても無駄足に終わるところだったんだな
「担当の者が渡し忘れた事に気づいてギルドに行って見れば、まだ来ていないと言うし・・・・・・まさかとは思ったが、案の定道に迷っていたとはな」
「必ず近いうちにお返ししますから。　今はお借りしておきます」
「そのまま返さずに持ち逃げした者は国内外に手配されてしまうからな、注意することだ。　それではな」
彼女は其れだけを言い残し此方に手を振りながら駐留所に入っていった。
そうか銀貨を返却せずに逃亡すると手配書として張り出される事に

なるという訳か。
俺は渡された銀貨をポケットに入れギルドの入口を潜った。

冒険者ギルドと言うぐらいだから荒れ果てたようなイメージが頭の中にあったのだが、想像に反して内部は掃除が行き届いており、依頼書の張り紙を見ている冒険者もそれらしい雰囲気は見受けられなかった。

早速、身分証明書を取得しようとギルドの空いている窓口に近づくと俺が声を発する前に受付の奥から声を掛けられた。

「いらっしゃいませ。　御依頼でしょうか？　御受託でしょうか？」
「いえ、身分証明証の発行をお願いしたいのですが」
「証明書の発行でしたら、右手にある階段を上がって左の窓口で手続きしてください」
「分かりました。　御丁寧にありがとうございます」
「いえいえ」

俺はギルドの受付を離れ言われたとおりに右手にある階段を上がり左手の窓口に声を掛けた。

「すいませ～～ん」
「あっ、はい！？　少々お待ち下さい」

声が聞えてから数秒後、椅子が倒れる音、コップが割れる音、悲鳴や怒鳴り声といった騒がしい物音が続いた後、窓口に眼鏡をかけた女性が姿を現した。

「お、お待たせいたしました」
「あの～～～何やら盛大な物音が聞えましたが大丈夫ですか？」

「はい、何時もの事ですから・・・・・ありがとうございます。
それで今日はどの様な御用件でしょうか？」
「身分証明証発行の手続きをお願いします」
「分かりました。　発行の費用として銀貨1枚が必要となりますが宜しいですか？　あと手配されている方とそうでない方を判断するために街の守護隊の証明書が必要となりますが、お持ちでしょうか？」

受付の言葉を聞き駐留所でイノフェルに手渡された証明書と銀貨1枚を窓口へと差し出した。

「それでは御確認いたしますね」

そしてそれから数分後。

「ギルド登録歴なし、手配歴なしと・・・・・確認しました。
再度御名前を確認いたしますが、ミコト様で間違い御座いませんね？」
「はい」
「それでは此れが身分証明書となります。　万が一にも失くされますと再度、守護隊の証明書と銀貨1枚が必要となりますのでご注意下さい」

手渡された身分証明書を手にとって見てみると光沢のあるプラスチックのような手触りのカードに名前と街の名が刻まれていた。

「これで手続きは終了となります。お疲れ様でした」

呆気ないほどに身分証の発行は終了し、序にギルドで登録する事にした。

身分証を片手に階段を降り、最初に間違えた窓口へと足を進めた。

「あ、先程の方ですね。　今度は如何しましたか？」
「身分証を発行した序にギルドにも登録しておこうと思いまして」
「そうなんですか。　では身分証の提示をお願いいたします」
「あ、はい」

発行したての身分証をギルド受付の女性に手渡した。

「確認いたしました。　登録の手続きを始めますが、説明は必要ですか？」
「お願いします」
「分かりました。　では・・・・・ギルドランクと致しましてＳ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの７段階があり、最初は皆Ｆからのスタートとなります。　依頼の受諾は安全上２個上までとさせていただきます。　もし仕事の途中で命を落とされる事があっても当ギルドは関知いたしませんので御了承をお願いいたします」

依頼受諾＝自己責任という訳か。

「次に依頼を受諾する際には報酬の１割を手数料としてギルドに支払っていただきます。　依頼が完了すれば、報酬をお支払い致します」
「じゃあ報酬が銅板５枚だと？」
「手数料として銅貨５枚をギルドにお支払い頂く事になりますね」

なるほど銅板とは銅貨１０枚相当ということか。

「さらにランクアップの方法と致しまして、此方の指定する依頼を完了する事によってランクが上がります。　ただし一気にＦランク

からDランクやCランクといった、飛び級のランクアップは原則として出来ませんので、其れだけは御了承下さい。　これにて説明と登録は終了です」

なんとか登録を済ませた俺は早速、掲示板で仕事を探す事にした。

第１１３話　ギルドランク昇格依頼

その世界で生活費の足しになるようにして高価な魔道具の数々を亜空間倉庫に収納していたのだが、今回の世界は魔法というものが存在していない為、別の方法で金を稼がねばならなくなった。
そこで街にあるギルドに登録し、資金を稼ぎつつ精霊のことを遠まわしに調べる生活が始まった。

（さて登録したはいいが、討伐依頼はランクＣ以上必須か。　今の俺のランクじゃ受ける事は出来ないな）

ギルド登録時に受けた説明では自分のランクの２個上の依頼までしか受ける事が出来ないらしい。
今は登録したてなのでギルドランクは最低ランクのＦとなっている。
Ｄランク以下の仕事もあるにはあるが、ほぼ全てが採取依頼や雑用となっており報酬額も其れに見合ったもので多い物でも銅板８枚という有様だった。

（これは一刻も早くランクアップして金を稼がないと。　宿代で最低でも銅板５枚は必要だからな何時まで経っても街の守護隊から借金した銀貨２枚が返せないじゃないか）

ギルドの受付曰く、ギルド指定の依頼を成功させる事が唯一のランクアップの方法だと言う事だった。
考えていても始まらないため踵をかえしギルドの受付に向かう事にした。

「すいません。　ランクアップの依頼を受けたいんですが」
「あっ先程登録された方ですね。　え～と、ＦからＥのランクアッ

プですので此方の中から選んでいただく事になりますが」

そう言って受付の窓口から差し出された依頼書は『ロミル草を5本採取』『バクストの実を5個採取』の2枚だけだった。
ロミル？バクスト？どちらも流石に聞き覚えがない言葉だった。

依頼書には青色のロミル草と赤と黄色が入り混じっているバクストの実が描かれていた。

「あの～どちらも聞いた事の無い物なんですが、どのような物なんですか？」
「そうなんですか？　どちらも寒冷地でしか育たない薬になる植物です。ロミル草の葉は擂り潰す事によって打ち身・捻挫に効く薬として、バクストの実は雪国特有の霜焼けなどの治療薬として用いられます」
「要は薬草の類だと思えば良いんですね？」
「薬草ほどの高価な物ではありませんが意味的にはあってますね」
「其々がどんな場所に生息しているのか教えてもらう事はできますか？」
「はい大丈夫ですよ。　まずロミル草ですが此れは赤い蔓が巻き付いた木の地面に生えていますし、バクストの実は高い木の上にしか実らないと言われています。　だからと言って雪国にとって貴重ともいえる木を伐採しないで下さいね」

外は一面雪景色だったからな木の根元ということは雪を退かさないといけないわけだし、かといってバクストの実は高い木の上か・・・・・のっけから難しい事だな。

「どちらに致しますか？　両方とも報酬は同じ銅板2枚になりますが」

「それじゃあ、バクストの実の方でお願いします」
「分かりました。　それでは依頼受諾の前金と致しまして報酬の1割である銅貨2枚をお支払い頂けますか？」
「すいません。　銅貨は切らしているので銀貨でお願いできますか？」
「構いませんよ。　それでは、おつりとして銅板9枚と銅貨8枚をお返ししますね」

一気に重くなってしまった道具袋兼財布を腰にぶら提げ直した。

「それでは期限は3日間です。ではお気をつけて」

俺は手を振りながら受付を後にし街の門の方に歩いていくと見た事のある兵士が周囲を警戒していた。

「あれ？　あんたは確か大雪崩に巻き込まれて奇跡的に助かった人だよな？」
「はい。　そうですが？」
「元気になって良かったな。　今度は何処に行くんだい？」
「ちょっとギルドの依頼でバクストの実の採取に行こうかと」
「そうなんだ。　今度は雪崩に巻き込まれないように注意しなよ」

と門番の兵は他人事のように笑いながら自分の持ち場へと戻っていく。

改めて街の外に足を踏み出すと一面銀世界に染まっていた。
恐る恐る雪の降り積もった地面に1歩踏み出したが気温の所為か僅かに沈んだだけで柔らかな雪の下は完全に氷と化していた。
街を出発して数分歩いたところで漸く高い木が聳え立つ森にたどり着くことが出来た。
そんな中で一際天高く聳え立つ一本の、少なくても樹齢数百年は経

ってそうな巨大な樹が目の前に現れた。

「此れを登るのは一苦労だな。　枝に足をかけて登ろうにも不安定この上ないからな」

少しばかり悩んでいたが思うところがありミラに聞いてみることにした。

（なぁミラ、聞きたいことがあるんだけど良いか？）
（何で御座いましょうか？）
（此処に来た時に魔法の存在しない世界だと聞いたけど俺は使えるんだよな）
（はい。　主様の場合は世界に関係なく使用することが出来るはずですが・・・・・まさか）
（人の見てないところでなら使用しても構わないよな。　魔力が無いって事は探知する事も出来ないって事だよな？）
（はぁ～～主様には敵（かな）いませんね。　くれぐれも人に見つからないようにしてくださいね）
（それじゃ早速。　ルゥ近くに人がいないか気配を探ってくれないか？）
（暫くお待ち下さい・・・・・・・・大丈夫です。　少なくとも半径１ｋｍ圏内には人の気配はありませんね）
（分かった）

ルゥの協力で誰も周りにいないことを確認した俺は木に張り付くような格好で風の魔法を使用し、木を登っていった。
一気に地上１０ｍ近くの高さまで登ったが一向に頂点は見えなかったが周りには依頼者に書かれていた赤と黄色が入り混じった林檎のような形をした木の実が所狭しと実っていた。

「此れが依頼のバクストの実か。　色と形的には美味しそうだけど食えるかな？」

見た目が林檎に似ていた所為もあって齧りついたがバクストの実を口に入れた瞬間、想像だにしない消毒剤の味が口一杯に広がっていった。

『ブゥーーーーーー！』

「何だコリャ！？とても食えたもんじゃないな」
（マスター、ギルドの人も言っていたとおり仮にも薬なんですから）
（それは分かってはいたんだが、見た目が林檎そのものだったからな）
（まぁこの実が毒だったとしてもマスターは死にませんが、味までは保障しかねますよ）
（身に沁みて良く分かったよ）

俺は亜空間倉庫に保管してある果物で口直しをすると次々とバクストの実を？いでは亜空間倉庫に放り込んでいった。

（こんなに取って如何するんです？）
（なぁに依頼は5個だったけど、街で売れば金になるかと思ってな）
（マスターって変なところで貧乏性なんですね）
（ほっとけ！）

取り合えず亜空間倉庫とは別に、依頼分のバクストの実5個を道具袋にしまい木を降りることにした。
あまり早く街に戻っても不振がられると思い、少し休憩してから戻る事にする。

木の合間でミラとこれからの事を会話しながら休憩していると何時の間にか山の斜面に一頭の真っ白な身体に赤色の目をした狼が此方をじっと見つめていた。
剣に手を置いて何時でも戦えるように身構えたが、白い狼は何もせずに森の奥へと静かに去っていった。

「何だったんだ？　あの狼は魔物じゃないのか？」

暫く狼の歩いていった方向を見ていたが、空が暗くなり始めていたので街に戻る事にした。
街の門で先程の兵士に挨拶をしギルドの中へと入っていく。

「依頼されたバクストの実を持ってきたんだけど確認してもらえるか？」
「もう終わったんですか！？　早いですね」

驚いて興奮している受付を尻目に道具袋の中からバクストの実を５個取り出してカウンターに置いた。

「えっと確かにバクストの実で間違いありませんね。　では此方が報酬の銅板２枚になります。　それとＥランク昇格おめでとうございます」

報酬を受け取った俺はこのままＤランク昇格の依頼を受けようかと思ったが既に日は落ちて暗くなっていたので宿屋に戻り眠る事にした。

第１１４話　魔物＝防寒着？（前書き）

少しグロテスクな描写表現があります。

食事をしながら読むのは、お勧めできないかも・・・・・・。

第１１４話　魔物＝防寒着？

翌朝、俺は宿で朝食を摂るや否やギルドへと向かって歩いていった。
昨日ランクアップのためにと請け負った依頼では宿代には届かない銅板２枚だったのでプラスになるどころか逆にマイナスという結果に陥っていた。

このまま何時まで経っても借金が返せなければ、この街から別の街に行く事も出来ないので最低でもＣランクまでランクアップしようと寝ながら考えていたのだ。
そして今日もランクアップの依頼を受けようとギルドの扉に手をかけるのだが、鍵が掛かっているのか中に入る事は出来なかった。
何時にギルドが開くのか分からないが暫く雪が降りしきる中、軒下に立っているとギルドの中から１人の女性が顔をのぞかせた。

「あら？　其処で何をしていらっしゃるのですか？」
「あ、すいません。　どうやら早く来すぎたみたいなのでギルドが開くまで此処で待っていようかと思いまして」
「そうなんですか。此処はお寒いでしょう？　良ければ中でお待ちになられますか？」
「そうさせてもらえると有難いのですが、御迷惑では？」
「いえ構いませんよ。　逆にギルドの前で凍死体になられる方が迷惑ですね」

笑えない冗談で話を弾ませながらギルド内で暖かいお茶を頂いていると先程、外で会った女性が話しかけて来た。

「もしかして、さっき言っていた『凍死体』の話を冗談だと思っていません？」

「本当にあったことなんですか！？」
「はい。　今から数年位前の話なんですが、まだ街に警備隊の駐留所が無かった頃、旅の女性が宿に泊まれるお金も持ち合わせて居らず、このギルドの軒下で身体を休ませていたようなのですが、翌朝には既に息絶えていたという話なんです。　其れが切っ掛けとなり、警備隊の駐留所を街に作り、対処しだしたそうなんですが」

それじゃあ、俺が宿屋で何回も目撃している女性はまさか幽霊？
だけど、そう考えると幽霊が扉をノックできるわけがないし・・・・・・ううむ。

「あ、そろそろギルドを開く時間ですね。　それでは私は窓口の奥に戻りますね」
「お茶、ご馳走様でした」
「いえいえ、困った時はお互い様ですから」

お茶を飲み干した湯呑みを女性に手渡すと、そそくさと奥へと歩いていった。
数分後、窓口の奥に人の気配を感じた俺はランクアップの依頼を受けようと窓口へと足を運んだ。

「すいません。ランクアップ依頼を受けたいのですが」
「はい。　それでは身分証明書の提示をお願いいたします」

俺は胸ポケットに仕舞い込んでいた昨日此処で発行したばかりのカードを受付に差し出した。

「はい確認いたしました。　今現在のEからDのランクアップ依頼はホロビットの討伐しかありませんが、構いませんか？」
「え～と、ホロビットとは何ですか？」

「体長が３０ｃｍくらいの頭と手足が灰色でそれ以外が真っ白い体毛に覆われた、比較的大人しい魔物ですね。　そのホロビットの体毛が防寒服の材料になりますので、なるべく汚さずに討伐してください」

「ちなみに報酬は？」

「１匹あたり綺麗な状態で銅板６枚、少しでも汚れがついていたり傷がある場合は銅板３枚になっています」

「その場合は依頼前金は幾らになるんでしょうか？」

「最低報酬の１割ですから、銅貨３枚になりますね」

「分かりました。　その依頼受けます」

俺はそう言って懐から銅貨３枚を取り出し受付へと手渡した。

「確認いたしました。　それでは期限はこれより５日となっておりますのでご注意下さい」

受付を済ました俺は期限である５日を目標に出来るだけ多く狩る事にした。

すっかり顔馴染みになってしまった門兵と軽い会話をしながら街の外へと出てみたが、其処は雪が深深と降り積もる一面真っ白な銀世界・・・・・。

「真っ白な風景の中から真っ白な魔物を探せってか？　依頼を甘く見ていたな」

数十分後、木が殆んど生えていない雪原を当てもなく歩いていると、不意に『ギュムッ』といった変な声（？）と何か柔らかい物を踏んづけたような感触が足に伝わってきた。

恐る恐る足を退けてみると、そこにはフワフワした手触りの雪ではない白い物体が氷原にめり込んでいた

「なんだこりゃ？」

手にとって持ち上げてみると白い体毛にチョコンと灰色の毛に覆われた頭と手足がくっついていた。

（もしかして此れが依頼にあったホロビットという魔物か？　如何見ても魔物と言うよりは癒し系の動物のように思えるんだが）

（マスター、この魔物可愛らしいですね～～～）

（和んでいるところ悪いが依頼だからな？）

（分かってはいるのですが、抵抗ありますね）

とりあえず剣で突き刺そうかと思ったが、そうすれば体毛に傷がつくし報酬が落ちる。　かといって可哀想だからと逃がしてしまえば報酬は受け取れないし・・・・・と考えていると何時の間にか目を覚ましたホロビットが可愛らしい外見とは裏腹に大口を開けて飛び掛ってきた。

「うわっ！？」

俺は咄嗟の出来事で手にしていた剣でホロビットの身体を真っ二つに切り裂いてしまった。

「外見が可愛らしいからといっても魔物は魔物か。　しまったな報酬が」

ホロビットの真っ二つに分断された胴体からは生ゴミのような酷い匂いを発する真っ黒な血液が流れ出し、綺麗な白い体毛が徐々に黒く染まっていった。

流石に此処まで黒く染まってしまってはギルドに提出する事が出来

ないと考えた俺は漸く見つけたホロビットの死体をそのままにしてその場を離れようと思ったのだが。

俺に殺された同族の恨みか、この嫌な匂いの所為か数え切れないほどのホロビットが地面の下から姿を現した。　そして俺の姿を見た瞬間に一斉に大口を開けて襲い掛かってくる。
咄嗟に剣を抜いて対応しようとしたが、それでは先程と同じ結果に陥ってしまうと考えていると鎧で覆われていない腕や足に次々とホロビットが噛み付いてきた。

次々と襲い掛かってくる魔物を手で撥ね退けながら身体に噛み付いているのを一体一体手で引き剥がし、頭部を力任せに握りつぶしていった。
握りつぶす事で当然の事ながら血液は噴出するので辺り一体はとんでもない悪臭に覆われていく。
そして数十分後には魔物の血液によって真っ黒に染まった雪原と山のように詰まれた頭の無い魔物が俺の周りに広がっていた。
俺の服も所々が魔物に食われて穴だらけになって、魔物の血の所為で凄い悪臭が漂っている。
（流石にこの格好で街に戻ったりしたら大騒ぎになるだろうな。
それに魔物を入れる袋も必要になるし）

色々と考えていると何時の間にか空は夕暮れを通り越して真っ暗になり、天候も１ｍ先が見えないほどの猛吹雪と化していた。
俺は一時的に避難するため亜空間倉庫を開き、ホロビットの死体を全て空間内に放り込むと俺自身も空間内へと入り扉を閉めた。

『とりあえず外の吹雪が止むまで此処で休憩するとしようか。　着替えも必要だしな』

こうして俺は天候に左右されない亜空間倉庫内で保存しておいた果物を齧りながら一息入れる事にする。

第１１５話　依頼の秘密（前書き）

借金の額を『銀貨２枚』と書き間違えてしまっていたため、『銀貨５枚』に訂正いたしました。

第１１５話　依頼の秘密

猛吹雪によって一寸先も見えないほどの悪天候に見舞われた俺は咄嗟に亜空間倉庫の扉を開き吹雪が止むまで倉庫で身を休める事にした。
改めて倉庫の中を見ると奥が見えないほどの広い空間に前の世界で収穫した果物が保管されている。

以前、精霊に聞いた内容によれば亜空間内に入れたものは時間に左右されず、新鮮な物は新鮮なまま保管されるそうだ。
いっその事、宿屋に泊まらずに亜空間内で生活しようとも考えたが後々面倒な事になる恐れがあったため却下する事にした。
こうして亜空間内で数時間ほど仮眠を取り、そろそろ夜が明けた頃だと思い扉をあけたのだが、夜は空けていたものの相変わらずの猛吹雪で視界は最悪の状況だった。
流石に猛吹雪の中を歩き再度雪崩に巻き込まれるのも馬鹿らしいので亜空間内に戻る事にした。

倉庫内の整理や討伐したホロビットの血抜きなどで時間を潰し更に２日経過した頃、漸く外に出る事が出来た。
ちなみに亜空間倉庫内に充満していた腐った生ゴミのような悪臭は風魔法で外に吹き飛ばし、赤く染まった床は水魔法で洗浄した。
少し痕は残ってしまったが・・・・・。

「これで依頼を受けた日から４日が経過か。　そろそろ戻らないと依頼失敗となってしまうな」

俺は亜空間に保存してあったホロビットを縄で縛り、背中に背負う様にして街へと戻ると慌てたような表情の門番に話し掛けられた。

「あんたか！　吹雪は大丈夫だったか！？」
「ええ、なんとか生い茂った林の中で身を丸めて吹雪が止むのを今か今かと待っていました」
「そうか。　４日も前にあんたが街の外に行くのが見えたから心配していたんだが無事でよかったよ」

その後も門兵と軽い会話を繰り返した後、ギルドに向けて歩き出した。
はたから見れば、堂々と泥棒ルックで街中を歩いていくように。
ギルド内に入ってからも大量の魔物を背負っていた事で他の冒険者から注目をされていたが気にしないことにして窓口に話しかけた。

「依頼のホロビットを討伐してきたんだけど」
「お疲れ様でした！　それでは検分いたしますので依頼対象を提出してもらえますか？」

そう言われ背中に背負っていたホロビットを受付の台に載せたところ受付に驚かれた。

「確かにホロビットに違いありませんが、そのまま持ってくるとは・・・・・通常は皮を剥いで持ってくるものなんですよ？」
「そうなんですか？　すいませんでした」
「いえいえ、少し驚いただけですので。　それでは汚れなどの検分を始めますので暫く待って貰えますか？」

受付の言葉に頷くと窓口の奥から数人の職員が応援として駆けつけ魔物の検分が始められた。
その後、討伐掲示板などを見て暇を潰していると１人の職員が声を掛けてきた。

「ミコトさん、検分が終了いたしましたので受付までお願いいたします」
「分かりました。　直ぐ向かいます」
手に持っていた依頼書を元通り掲示板に戻すと足早に受付へと足を運んだ。

「お待たせして申し訳ありません。　検分した結果、汚れのない物が2体と少し汚れがあるのが17体という結果でした」
受付はあきらかに疲れた表情で話を続けている。

「そのため報酬は合計で銅板63枚となり、銀貨に換算いたしまして銀貨6枚と銅板3枚となります」
「こんなに!?」
「此れが普通ですよ？　本来ランクアップの依頼はEからDの場合、Dランクの難易度が低い依頼が宛がわれるので報酬としては無難な方ですね。　発見し辛いホロビットをあれだけの量を討伐してきたのは驚きでしたが」

この依頼で持ち金が銀貨7枚、銅板9枚、銅貨5枚となった。
序に本来の目標であったCランクに昇格するべく依頼を受ける事にした。

「すいません。　Cへのランクアップ依頼はありますか？」
「続けさまに依頼を受けて、お身体は大丈夫なんですか？　無理は為さらないほうがいいかと」
「いえ、大丈夫です。　体力は人並みよりもありますから」
「分かりました、少し待ってください。　えっと今あるのはグレイ

ウルフの討伐ですね、報酬は1頭につき銀板1枚となり前金として銀貨1枚を頂きますが宜しいですか？」
「分かりました」

そういって前金の銀貨1枚を渡しながら気になった事を聞いてみることにした。

「つい先程掲示板で『グレイウルフの毛皮採取』って依頼を見つけたんだけど同時に受ける事は出来るのですか？」
「いえ原則として複数受諾は禁止されています。　理由としては様々なことがありますが一番の理由として成功確率の低下が挙げられます」
「そうなんですか」
「ただし、今現在請け負っている依頼が終了した時点で掲示板で提示されている依頼品を持っていた場合は前金なしで報酬を得ることが出来ます」

と言う事はグレイウルフを討伐して毛皮を剥いでしまえば金になると言う事だな。

「依頼手続き完了いたしました。　期限は5日間、討伐証明は頭部の角となっております」

俺は依頼書を再度確認するとギルドの隣にある守護隊の駐留所に立ち寄って借金である銀貨5枚を返却し街の外へと足を進めた。
ギルドからの情報によると対象は以前、バクストの実を採取した森に生息している事が分かり気配を殺して木の陰に隠れながら探す事にした。
探し始めてら数時間が経過した頃、不意に森の奥から動物の悲鳴とも取れる呻き声が聞えてきた。

探しているグレイウルフかはたまた、まったく別の魔物か分からなかったので慎重な足取りで悲鳴が聞えた方へ歩いていくと・・・・・・其処には熊に良く似た体長が５ｍ近くもある巨体の獣が僅か体長２ｍくらいの頭に角が生えた数頭の白い狼によって襲われているようだった。
数分後巨体の獣は息絶え、白い狼達の食料と化してしまっている。

（頭に角が生えた狼か、あれがグレイウルフで間違いないのかもな。
しかし名前がグレイなのに体毛の色は白なんだな）

俺は食事に夢中になっているグレイウルフに気づかれないように忍び足で地面に落ちている木の枝などを踏まないようにして近づいていったのだが此処で思いも寄らなかった出来事が起こってしまった。

「ヒャウッ！？」

突然、木の上から落ちてきた、溶けた雪の雫がタイミングが悪い事に首元へと入ってしまい、思わず悲鳴が上がってしまっていた。
当然狼達がその悲鳴を聞き逃すわけはなく、既に骨同然になった獣を食い足りない表情で口元を獣の血で真っ赤に染め上げ、項垂れていた数頭の狼が俺の方に一斉に顔を向けた。
かなりの確率で俺のことも『食料』という認識で見ているのだろう。
何か特別な合図があったわけでもなく、全ての狼が一斉に俺へと襲い掛かってきた。
俺は咄嗟に剣を引き抜き一番最初に大口を開けて襲いかかってきた狼を縦に一刀両断して倒した。

左右に両断された仲間を見て2、３頭は森の奥へと逃げて行ったが、残りは仲間を殺された恨みかそれとも食欲が恐怖心を上回っていたのか、躊躇せずに俺へと襲い掛かってくる。

魔物とはいえ、多少の知能を持っているのかバラバラな方向から俺に向かって来る。
俺も太腿や二の腕などを数箇所、噛まれたが数分後には全ての狼を倒し終えた。

「流石に此れだけの数を相手に無傷とはいえないか・・・・・・まぁ傷は残らないけどな」

一息終えた俺は早速、角を切り取り毛皮を剥ごうと考えたが此処で作業を開始すれば白い雪が降り積もった大地に狼達の血が染み渡り、その血の匂いに引き寄せられた魔物が後を絶たないだろうと考え亜空間倉庫への扉を開き全ての狼の死体を中へと放り込んで俺自身も亜空間へと足を踏み入れると扉を閉めた。

折角、長い時間掛けて念入りに綺麗に掃除したのに・・・・・・・・・。

第１１６話　冒険者だけでなく商人も（前書き）

毎度の事ながら、サブタイトルにも悩まされます・・・・・・・・・・・・・・。

第１１６話　冒険者だけでなく商人も

森の中でグレイウルフの討伐を終えた俺は亜空間内で魔物を捌いていた。
まずは討伐した証明となる角を全て切り取り道具袋の中へと収納する。

（全部で８本か。　単純に考えれば、此れだけで銀板８枚の報酬ということになるな）

次いで何時買った物かはよく憶えていないが、倉庫内に置かれていた小型のナイフで器用に魔物の毛皮を剥いでいった。

（それにしても『グレイウルフの毛皮の採取』って依頼だけど、討伐しないと手に入らないよなぁ～採取依頼と討伐依頼に区別する必要があるのかな？）

ホロビットの時のような毛皮目的の採取ではなかったので所々に赤い染みがあるグレイウルフの毛皮を採取し終えたが慣れない仕事で時間が掛かってしまい、気がつくと空は夕暮れになっていた。

（もうこんな時間か、急いで街に帰るとするか）

森を出て街のある方向へと歩いていったが、雪山の天候は変わり易いとはよく言ったもので気がつけば、辺りは真っ暗な上に猛吹雪に見舞われていた。

「まいったな。　これじゃあ前回と同じじゃないか」
デジャヴを感じるほどに前回のホロビット討伐時と同じ環境に溜息

を洩らしつつ、亜空間内へと避難した。
空間内に保存してある残り僅かの果物と毛皮と角を取り終えたグレイウルフの肉を火魔法で丸焼きにして腹に入れつつ、精霊と会話して朝を待つことにした。

薬となる『バクストの実』も幾つか置いてあったが、前に齧った時にあまりにも不味かったため流石に食べる気にはならなかった。
（朝には天候が回復してくれよ・・・・・・もう食料は残ってないんだからな）
（お言葉ですがマスターは不死の存在です。　餓死するなんて事はありませんよ？）
（それは分かっているんだが、人間の最大欲求の一つでもある食欲は中々止める事ができなくてな。　万が一にも『腹が減って力が出ない』ってなったら危ないだろ？）

何処かのアニメのフレーズじゃないが。

（マスターの場合、そのような事は絶対にありえないと思いますが。
それに致命傷を負っても瞬間的に回復しますし、体力も人間とは違い無尽蔵なのですから）
（そう言うと、まるで俺が人外みたいじゃないか）
（忘れているかもしれませんが主様は神様なのですよ？　人間とは其れこそ天と地ほどの差があります）

こうしてルゥを始めとする精霊たちと会話をしながら朝を迎える事となった。
『朝には晴れて欲しい』という願いが神（俺か？）に通じたのか、この世界で初めて見る太陽が一部厚い雲に遮られながら頭上に輝いていた。
俺は果物を入れてあった袋にグレイウルフから採取した毛皮と討伐

証明である角と序にバクストの実も１０個ほど入れて街へと戻った。

傍から見れば大きなズタ袋を担いだ不審な男に見られるだろう。

日本であれば、良い意味でサンタクロース、悪い意味なら堂々とした泥棒的なものかな？

街の門を潜る時にも、何時もの兵士が苦笑しながら挨拶してきたが何だったんだろう。

街の住民からの奇異の目に晒されながらギルドに足を踏み入れた。

「あら？　ミコトさん、その格好はなんですか？」

「何って依頼書にあった物を採取してきたんだよ。　事前に袋を用意しといて良かったよ」

「しかし、その格好だと盗賊（シーフ）と間違われても文句は言えませんよ？」

丁度掲示板に新規依頼書を貼っている職員と会話していると、なにやら武装しているガルフォードがギルドへと入ってきた。

「失礼する！　街の住民から不審者がギルドに入って行ったとの報告があったのだが」

ガルフォードは俺の姿を見るなり目を大きく見開いて、次の瞬間には大きな笑い声を上げていた。

「ガァーハッハッハッハ！！　街の者が言う“不審者”というのはお前の事だったのか。　道理で門兵が止めなかったわけだ」

ガルフォードは盛大な笑い声を上げながらギルドの外へと出て行った。

「だから言ったじゃありませんか『盗賊と間違われても仕方がない』

って・・・・・」
「身に沁みて理解したよ。次からは注意する」
そして一息入れたあとギルドの窓口に採取してきた物を並べた。
「えっと、討伐依頼にあったグレイウルフの証明になる角が８本と取れたてで新鮮（？）なグレイウルフの毛皮が８枚に序に採取してきたバクストの実が１０個だ。　検品を頼む」
「たった２日で此れだけの物を揃えられるなんて。　直ぐに検品しますので暫くお待ち下さい」
ギルドの受付は手の空いている他の職員に声を掛け、数人がかりで採取してきた物の検品を行なっていた。
そして隅で備え付けの暖かいお茶を飲みながら待つこと十数分後。
「お待たせいたしました。　検品が終了いたしましたので窓口までお越し願えますか？」
「分かった。　今行く」
俺は手に持っていた湯呑を『使用済み』と書かれている篭の中にいれて窓口へと向かって歩いていった。
「それでは結果をお知らせします。　グレイウルフの討伐完遂によりミコトさんはＣランクに昇格しました。　此方が報酬の銀板８枚です。
そしてグレイウルフの毛皮の採取ですが、若干の汚れが目立つため全部で銀板３枚と銀貨４枚という結果になりました。　バクストの実は全部で、銅板４枚で引き取らせていただきますが宜しいですか？」

俺は声に出さずに頷く事で肯定の意思を受付に伝えた。

「ありがとうございます。　それでは合計して銀板１１枚と銀貨４枚と銅板４枚です、お納め下さい」

財布代わりとなる道具袋に報酬を無造作に放り込みながら気になっていた事を聞いてみることにした。

「なぁ、一つ聞きたい事があるんだけど」

「何でしょうか？」

「依頼書にあった『グレイウルフの毛皮採取』のことなんだけど、毛皮なんて討伐しないと手に入らないだろ？　討伐依頼と区別する必要があるのか？」

「依頼を受けに来るのは皆が皆、ミコトさん達のような冒険者の方々ではありません。　中には交易を生業（なりわい）としている商人の方もいらっしゃいます。　彼等は別の街や村で依頼された品々を事前に安く仕入れておき、報酬と仕入れ金を見比べ利益があれば売却してお金を稼ぐという方法をとっています」

「なるほど」

「此処とは違い、暖かい地域では毛皮なんてあまり高い値段ではありませんから」

確かにな、暖かい地域で毛皮を身に着けるなんて貴族や金持ちくらいしか思い浮かばないよな。

聞きたい事を聞くと俺は窓口を離れ、本来の目的であった精霊の情報を収集するべく冒険者の集まる酒場に行こうとしていたところギルドの出入り口近くで声を掛けられた。

「其処に居るお前！　黒髪のお前だよ、コッチを向きやがれ」

声のしたほうに顔を向けると胡散臭そうな大男が斧を背中に担いで

話しかけていた。

「さっきのこと見てたぜ！　それなりに腕っぷしが強いみたいだな、俺と組まねえか？」

「俺１人で充分だ。　悪いな」

俺は軽く後ろ手で手を振りながらギルドの扉に手を掛けたのだが、大男に強引に振り向かされた。

「テメエ！　Ａランクの俺の誘いを断るっていうのか！？」

「アンタが例えＳランクだろうが俺には関係ない。　俺は１人で充分なんだ」

そう応えた瞬間、後方にある出入り口の扉が開いたかと思うと一瞬顔を覗かせた、ギルドの職員と同じ制服を着た女性が踵をかえして走り去っていった。

願わくば守護隊の元へ行って兵士を連れてきてくれると有難いのだが。

「なんだと？　この野郎！　舐めやがって」

大男はそんな事など露ほども気づかずに背中に背負っている斧の柄の部分を握り締めながら脅すように話しかけて来た。

「此れが最後の通告だ！　俺と組むか？　それとも此処で死ぬかだ」

「ふぅ、何度も言わせるな。　俺は・１人・で・充分だ。物覚えの悪い奴だな」

「もう許さん！　この俺様の誘いを無碍にした事を後悔するがいい！！」

大男はギルドの建物の中であるにもかかわらず背負っていた斧を俺に向かって振り下ろしてきた。

第１１７話　決して越えられない壁（前書き）

おまたせして申し訳ありません。

第１１７話　決して越えられない壁

俺に何やら一方的な協力要請をしてきた男を窘めたところ、逆上して襲い掛かってきたが・・・・・・。

「全く、短気も程ほどにしないと足元を掬われるぞ？」

難なく自慢の斧を俺に素手で、しかも親指と人差し指で何かを抓むようにして受け止められた事により驚愕の表情を見せていた。

「なっ！？」

大男は自慢の攻撃を難なく、それも指２本で止められたことに驚愕しながらも斧を手元に戻そうとするが・・・・・・。

「んぎぎぎぎぃぃーーーー！？」

俺はただ普通に斧の先端部分を指先で抓んでいるだけなのだが、大男は苦悶の表情で顔を真っ赤にしながら、何をしても微動だにしない斧を不思議そうに見ていた。

このままでは埒が空かないと思い、大男が身を引いた瞬間に指を離すと、まるでコントを見ているかのように綺麗に後方へ倒れて行き、ギルドの床へ尻餅をつく。

そして倒れた拍子に男の手から離れた斧は狙ったかのように頬を掠めて床に突き刺さった。

周りにいた冒険者達も驚愕の表情を見せていた時、出入り口の扉が勢い良く開きガルフォードを先頭にした１０人ほどの兵士がギルド内に雪崩れ込んできた。

「誰かがギルド内で襲われているという連絡を受け来てみたのだが・・・・・どちらに非があるか一目瞭然だな」

ガルフォードが指示を出すまでも無く、精練された兵士達は数人がかりで腰を抜かして座り込んでいる大男を押さえ込み、あっという間に後ろ手に縛り拘束していた。

「隊長、不審者確保いたしました。　これより庁舎へと護送いたします」
「ああ分かった」
「はっ！　皆様、お騒がせ致しまして申し訳ありませんでした」

大男は怒りの表情から助けを求めるような表情に変わり、有無を言わさずに兵士達に連行されていく。

「さて、ミコトは襲われていた方だとは思うが、何があったか聞きたいので守護隊本部まで来てくれるか？　まぁ大体のことは予想できるのだがな」
「それは構わないのですが・・・・・」
「ん？　何か別の用事でもあるのか？」
「いえ素朴な疑問なんですが、寒くはないのですか？」

流石に室内なら兎も角、冷たい風が吹き荒れる外で上半身裸では心配になってくる。

「幾らなんでも風邪を引きますよ？」
「フハハハハ！　なぁに心配は要らぬ。　風邪など引いた事もないわ」

別の意味で暑苦しいガルフォードに連れられて守護隊本部に足を運ぶ事になってしまった。
そして建物に到着すると同時に慌てた表情のイノフェルに話し掛けられる。

「ガルフォード隊長、いつも言っているように外出する際はせめて上着を羽織って下さい。　隊長は平気でも見ているほうは気が気でなりませんよ」
「イノフェル、お前もか」

ガルフォードはかなり落胆した表情で俺とイノフェルを連れて室内へと入って行った。
その後、何度も何度もイノフェルに口を酸っぱくして注意されていたガルフォードは疲れた表情で肩から上着を掛け袖を通さずに羽織るようにしていた。
そして数分の休憩を挟み、一呼吸おいてから取調べが始まった。

「さて騒ぎになった経緯を聞かせてもらおうか」
「はい。　依頼が終了してギルドの窓口で報酬を受け取り、建物を出ようとしたところであの斧男に『一緒に組まないか？』と声を掛けられました」
「続けてくれ」
「その後何度も申し出を受けましたが、俺は1人でするのが性に合っているので提案を断っていたところ、次第に男の口調が変わっていき終いには『提案を受けなければ殺す』と言われました」
「うむ。　街中での武器使用罪に加え、脅迫罪も視野に入れておこう」
「了解しました」

イノフェルは俺とガルフォードとの会話を聞きながら取調べの調書

を取っているようだった。

「再三の提案を断った直後、男が背負っていた斧を俺に向かって振り下ろしてきました。　そして斧を受け止めた数分後、ガルフォード達がギルド内に入ってきたという訳です」

「なるほどな。　イノフェルどうだ？　他の供述と食い違っている点はあったか？」

そう言ってガルフォードは奥の机で調書を取っているイノフェルに話しかけた。

「いえ、事前に部下に調べさせておいたギルドにいた冒険者の証言と一致しています」

俺が休憩していた数分の間に別の冒険者の証言を取っていたのか。

「さて済まなかったなミコト、疑っていたわけではないのだが乱闘事件の立証には当事者と周囲の証言が必要不可欠となっているのでな。　ご苦労だった」

「いえ、それでは失礼します」

俺はそう言って守護隊本部を出て今度こそ情報収集のため酒場へと向かった。

街の中でまたもや道に迷いながら酒場についた頃には既に日は落ち始めていた。

「おや？　兄さん初めて見る顔だね。　酒かい？　それとも女かい？」

酒場の中は想像していた、荒くれ者達が酒を飲んで大騒ぎしている

ようなイメージには程遠く静かな趣になっておりカウンターの奥には酒場に似つかわしくない女性が立っていた。

「なんだい？　なんか納得がいってない表情だね。　酒場の印象が違っていたからかい？」

「い、いえ、俺が欲しいのは酒でも女でもないのですが」

「そうなのかい？　でもね、酒場に来て酒を飲まないのは納得がいかないね～～何か頼みな、そうすれば話を聞いてあげるよ」

「分かりました。　それじゃあ・・・・・・」

壁に『ヴィル　銅板1枚』と書かれていた他と比べて一際大きな張り紙が気になり、頼む事にした。

「それじゃ『ヴィル』っていうのをお願いします」

「はいよ。　ちょっと待ってな」

女性はそういうと酒場の奥へと消え、数秒後には片手に木で作られたジョッキを持って現れた。

「お待ちどう！　此れがヴィルだよ」

「これはまた」

目の前に差し出された『ヴィル』はといえば濃緑の青臭い匂いとアルコールの強烈な匂いがする見た目的にもかなり抵抗がある代物だった。

「ささ毒なんて入ってないから、グイっといきな」

「・・・・・いただきます」

色は飲み物とは思えないほどに毒々しいが、目の前の何かを期待するような眼を無視できず、思い切って飲む事にしたのだが。

結果、青汁のような見た目とは裏腹にスッキリとした爽やかな酸味が特徴のアルコール度数が高めの飲み物だった。

「それで？　聞きたいことってなんだい」
「其れなんだけど、このあたりに神聖な場所ってないかな？」
「神聖な場所？　どういう場所だい？」
「えっと、例えば神様や仙人の類が住んでいるとされる場所や、何か神話的な物語に登場するような場所が無いかと思ってね」
「う～ん、私は聞いたことが無いね。　ビクトル爺さんなら何か知ってるかもしれないけど」
「ビクトル爺さん？　その人は何処にいるんですか？」
「ああ、この街の裏門から出て山一つ越えた先にあるウィレンドという大きな街に物知り爺さんのことだよ。　少し前まではこの街に住んでいたんだけどね、何かウィレンドに用事があるっていって出かけたまま戻ってこなくてね」
「分かりました。　とりあえず、その街に行って見ます」

そう言って俺は残りのヴィルを飲み干し、銅板1枚をカウンターに置いて酒場を後にした。

「無事にウィレンドに着いて爺さんに逢ったら酒場の綺麗なお姉さんが待ってると伝えておくれよ」

俺は『自称お姉さん』で手を振りながら、出発は明日の朝にしようと宿屋へと向かった。

その頃、守護隊の本部では・・・・・・。

「ガルフォード隊長、目撃証言の一つにミコトが振り下ろされた斧を素手で、しかも指先で難なく受け止めたとの不可解な供述があるのですが」
「何かの見間違いだろう。　常識的に考えてそのような事が有り得ると思うのか？」
「確かに。　しかしミコトは東の国の出身と言っていましたし私達とは違う、何か別の力があるのでは？」
「東の国の民か。　まぁ何にせよ、確かめる術（すべ）はないな」
「はい。　ところで拘束した男の処分は如何しますか？」
「何時も通り、鉱山の強制労働で決まりだな。　力が有り余ってるみたいだし、丁度いいだろう」
「分かりました。　すぐに手配いたします」

第１１８話　物知り爺さんを訪ねて

酒場の自称『お姉さん』のマスターからビクトルという名前の物知り爺さんが街から小高い丘一つ越えた先にあるウィレンドという大きな街に居ると言う情報を得た俺は翌日、ギルドでウィレンド方面に行く依頼は無いか聞いてみることにした。

「聞きたいことがあるんだけど良いかな」
「はい？　どのような事でしょうか？」
「用事があってウィレンドって街に行こうと思ってるんだけど、その方面での依頼ってないかな？」
「確認してみますので暫くお待ち下さい」

そして待つこと数分後・・・・・・。

「お待たせいたしました。確認しましたところ、酒場の主人であるライトさんからウィレンドにある酒場まで酒の樽を届けて欲しいとの依頼がありました」
「酒場のライトさん？　もしかして厳つい女性店主のことですか？」
「そうですが、あの方の前で『厳つい』なんて言っては駄目ですよ？」
「分かりました。それで？　酒場で樽を受け取ってウィレンドまで運べば良いんですね？」
「依頼内容はウィレンドまでの配達で報酬は銀板１枚です。　この依頼で宜しいでしょうか？」
「あ、お願いします」
「それでは依頼受諾の前金として銀貨１枚を頂きますが宜しいですか？」
「分かりました」

俺はそう言って財布代わりに使っている道具袋から銀貨1枚を取り出しながら気になることを聞いてみることにした。

「依頼を完遂した場合の報酬は何処で受け取れば良いんだ？　この街に戻ってこないといけないのか？」

「この受諾書をウィレンドの街にあるギルドに提出してください。街に入って直ぐの建物ですのでわかり易いと思いますよ」

手渡された受諾書には『シャノルクギルド』という判子が押されている。

その判子の横には他に2箇所の判子を押せるスペースが空けられていた。

「それではウィレンドまでの道程は遠いですが、お気をつけて行って来て下さい」

ギルドでの手続きを終了させ、配達する樽を受け取るべく酒場へと足を運んだ。

「すいませ～ん。　ギルドで配達の依頼を受けたんですが」

「ああ待ってたよ。　ああアンタが受けてくれたのかい！　それじゃあコレを頼むよ」

そう言って手渡された物は両手で抱えられるほどの樽だった。

「あ、そうそう依頼書の受諾書を出してくれないか？」

俺は如何するのかと思いながらギルドで受け取った受諾書をライトさんに手渡すと。

「街から街に配達される品物にはギルドの判子と依頼者のサインが必要になるのさ。　っと此れで良い」

返された受諾書をみるとギルドの判子の下にライトさんの名前が荒っぽい字で書き殴られていた。

「昨日の話じゃウィレンドの場所を知らないだろ？　街の裏門から出て小高い丘の街道沿いに歩けば2、3日ほどで辿りつくと思うよ。　命を落としたくなければ、くれぐれも道を外れないようにね」

「分かりました」

樽を受け取った俺はそのまま街の裏門から外に出て、ライトさんに言われたとおり街道を歩いてウィレンドの街を目指す事にした。

街から離れ、山の中腹まで来たところで樽を亜空間倉庫に収納するべく、人目のつかないところに移動するために街道を離れたのだが此処で思いも寄らなかった出来事に遭遇した。

魔物に襲われたのか盗賊にやられたのか、赤い染みが付着してボロボロの衣服を身に纏った一部が白骨化してしまっている遺体が雪原に横たわっていた。

俺は遺体にそっと手を合わせ、その場を後にした。

その後大きな混乱も無く、2日後にはウィレンドの街に到着できた。

俺の身体能力を使えば半日も掛からずに到着する事が出来たのだが、依頼受諾書にはギルドの判子とともに日付と思われる数字が書かれているため、言い訳できる範囲の日数で辿りつかなければならなかった。

シャノルクの街を出た時と同じ様に人目につかない森の中に移動すると配達する樽を取り出し、肩に抱えて街の門を潜りぬけると整然

された街並みが広がる空間があった。

ウィレンドの街に一歩足を踏み入れて最初に思ったことといえば『広い』という事だった。

何時までも呆けては居られずに荷物の受け渡しをするべく、酒場を探す事にする。

そして広い街中を歩くこと数分後、木で作られた看板にジョッキのような絵が描かれている酒場と思われし場所にたどり着くことが出来た。

まだ真昼間だからか酒場の中にはカウンター内で準備をしている巨漢の男しか見当たらなかった。

「ん？　客か？　すまないが酒場は夕方からなんだ。出直してくれないか？」

「いえ客じゃないんです。　シャノルクの酒場から依頼された樽を配達してきたのですが」

「おっ？　そうか、すまねえな」

俺はカウンターにライトさんから手渡された樽と依頼受諾書を酒場のカウンターに載せた。

「これが依頼された物とギルド発行の受諾書です。　ご確認をお願いします」

「え～と、確かにライト姉ちゃんの字だな。　ご苦労だったな」

そう言って巨漢の男は受諾書に押されているギルドの判子の横へ受け取りのサインをして手渡してきた。

「で、次はギルドか」

（マスター、ビクトルという方の情報を聞かなくても良いのですか

？）

（そうだったな、序だから聞いてみる事にするか）

俺は目の前で怪訝そうな顔をしている男にビクトル爺さんのことを聞いてみる事にした。

「すいません。　一つ聞きたいことがあるのですが」

「なんだ？　店の準備があるからな、短時間なら構わないぞ」

「この街にビクトル爺さんという物知りな方が居るとライトさんから聞いたんですが、何処に住んでいるのか知りませんか？」

「ああビクトル爺さんか、そういえば最近見てねえな。　家は酒場の裏手にある建物なんだが最近帰ってきたって噂は聞いてないぜ？　帰ってきたなら真っ先に俺のところに飲みに来るはずだからな」

「そうなんですか、分かりました。　ありがとうございます」

「いやいや、其れぐらいならお安い御用だ」

俺は逸（はや）る気持ちを押さえてギルドで依頼完遂の手続きをすることにした。

（ギルドの受付の女性は街に入って直ぐだからと言ってたけど・・・・・確かにわかり易いな）

ギルドの建物を探すために再度街の門へと戻ると壁一面に『ギルド本部』と書かれた建物が目に入った。

『幾らなんでも此れは目立ちすぎでは？』と思いながらもギルドの扉を開けて中に入ると、少なくてもシャノルクのギルドの倍はあると思われる広さに大勢の冒険者たちが所狭しと犇めき合っていた。

更に建物の２階へと続く階段には重厚な鎧を身に纏った女性が周囲に目を光らせながら、立ちはだかっていた。

色々と気になる点はあるもののギルドの受付に行く事にした。

「いらっしゃいませ。　本日はどのような御用件でしょうか？」
「シャノルクからの配達依頼を完了したので手続きをお願いしたいんですが」
「分かりました。　それでは身分証明証と依頼受諾書の提示をお願いします」

そう言われ道具袋内に入れてある証明証とさっきの酒場でサインしてもらった受諾書を窓口へと提出した

「はい確認いたしました。　それでは報酬の銀板１枚です」

受付から差し出された銀板１枚をさっと道具袋の中に仕舞い込むと、酒場で教えてもらったビクトル爺さんの家へ行く事にした。

第１１９話　爺さんは行方不明

ギルドで配達の報酬である銀板１枚を手に入れた俺は酒場の主人に教えてもらったビクトル爺さんが住んでいるという建物へと辿りついた。
建物の窓から灯りがこぼれているという事はビクトル爺さんの家族かそれとも家を間違えたかの二つに一つだった。
考えていても仕方が無いと思い、意を決して扉をノックする事にした。

コンコンコンッ
扉を軽く叩いてみるも、誰かが出てくる気配はない。

コンコンッ

「ビクトルさん、いらっしゃいませんか？」
「は～い」

漸く返事が返ってきたが、如何聞いても爺さんと思われる声色ではないようだった。
応答があってから数秒後、パタパタという音とともに声が聞えてきた。

「お待たせしま・・・・・『ズベシャッ』・・・いった～い！」
（コケたな）
（コケましたね。それも音からして盛大に）
「グスッ・・・・・どちら様ですか？」

目に涙を浮かべて真っ赤な鼻を左手で押さえながら右手で扉を開け

て出てきたのは前掛けを身に付けた十二、三歳くらいの少女だった。

「えっと、ビクトルって御爺さんに聞きたいことがあってシャノルクから来たんだけど、御在宅かな？」

「おじいちゃんに聞きたい事？　でも、おじいちゃん今いないよ？」

おじいちゃんってことはこの少女はビクトルさんの孫娘ってとこかな。

「おやおや、お客様ですかな？」

「あ、パパ、ママ～～お帰りなさい」

「こらミル！　知らない人がきたら扉を開けちゃ駄目って言ってあったでしょ？」

「ママ、ごめんなさ～い」

「まぁまぁ、それくらいで勘弁してあげなよ。　失礼致しました、玄関で立ち話もなんですので中に入りませんか？　暖かい御飲み物をお出ししますよ」

「ご迷惑では？」

「構いませんよ。　何か訳ありのようですしね」

こうして俺は男性に勧められるまま家の中に導かれることとなった。

「さて申し遅れました。　私はレナードと言います。　早速で申し訳ないのですが、どのようなご用件でしょうか？」

「実は酒場の主人から此方に住んでいるという、ビクトルさんが色々な事にお詳しいと聞き、お話を伺いに来たのですが御在宅ではありませんか？」

俺が“ビクトル”という名を口にした瞬間、目の前のレナードと名乗った男性が一瞬表情を曇らせた。

「父、ビクトルは半年ほど前から行方知れずになっています。　方々《ほうぼう》に手を回して探しているのですが、依然として消息は見つかっておりません」

あれ？　半年前にシャノルクに帰ったんじゃなかったっけ？
そうなると途中で見かけた死体はもしかするとビクトル爺さんなのか。
いや、半年前に行方不明になったのなら雪原に横たわっているわけがないな。

「そうでしたか・・・・・辛い事をお聞きして申し訳ありませんでした」
「いえ、お気になさらないで下さい。　それで父に聞きたい事とは一体なんですか？　私も小さい頃から色々な事を父より聞いておりますので疑問に答えられるかもしれないですよ」
「実は自分は東の国から様々な神聖なる場所を巡る旅をしているのですが、遙か北のこの地方にも神の宿りし場所があると耳にしたものですから、何か知っていることはないかと思いまして」
「神聖な場所ですか？　何か小さい頃に聞いた覚えがありますね。　思い出すので暫くお待ち願えますか？」

レナードさんは腕を組みながら天井を見たり目を瞑ったりと必死に思い出そうとしているようだった。

「主人は一度こうなったら中々戻ってこないので、宜しければ此方をどうぞ」

レナードさんの奥さん（？）がそう言いながら温かい濃緑色の飲み物を差し出してきた。

「ありがとうございます。　いただきます」

湯気が立ち上るソレをゆっくりと口に運ぶと、まるで抹茶と苦いお茶を混ぜて温めたような微妙な味が口の中に広がった。
が、腹の奥から何か熱いものが上がってくる様な感覚さえ覚えた。

「薬草を煎じた薬湯なんですよ。　飲み慣れない方には少し癖のある飲み物ですが、直ぐに温まりますよ」

微妙な味と感覚を味わっていると、突然レナードさんが立ち上がり大声を張り上げた。

「思い出したーーーー！」
「キャッ！？　吃驚した。脅かさないでよ」
「貴方が言っていた神聖なる場所ですが、私が小さい頃に住んでいた街にある大図書館での、とある本の一説によりますと『大地よりも深き道、闇に閉ざされし谷、生ある者が行き着けぬ地』という詩がありました。　どのような意味があるのかは分かりませんが本の表紙には『全ての母』と書かれていたので神聖な物だと思いますが」
「いえ充分です。　ありがとうございました」
「詩の文章から想像すると、かなり危険な場所だと思うので気をつけてください」
「はい。　薬湯御馳走さまでした」
「お兄ちゃん！　またね～」
「ああ、またね」

俺は可愛らしい少女に見送られながら、その場を後にして準備として商店街を回ることにした。

雪国というだけあってか果物類は洒落にならないほど高価の物で買い込んだ食糧の殆んどは肉関係となってしまった。
実際、何の肉かは分からないが・・・・・・。

商店街を出る頃には辺りはすっかり暗闇と化しており、その日は宿屋で休む事にした。
宿屋の場所は街の人に聞いて直ぐに判明し、銅板7枚を払いその日は終了した。

第１２０話　闇に誘う巨大な亀裂

翌朝、ウィレンドの宿屋の室内でレナードさんに教えられた言葉を思い浮かべていた。

（『大地よりも深き道、人が歩けぬ闇に閉ざされし谷、生ある者が辿り着けぬ地』かどんな所だろうな）

（マスター、その大図書館のある街に行って実際に本を見てみるのは如何でしょうか？）

（確かに其の方が早いな。レナードさんに街の場所を聞いてみる事にするか）

俺は何故昨日、街の名前を聞かなかったのかと後悔しながら宿屋を出てレナードさん宅に行く事にした。

朝早くにお邪魔することが『失礼にあたるかも』と思いながら酒場の裏にある昨日の家に辿りついたのだが。

「おや？　昨日の旅の御方ではありませんか、何かありましたか？」

「朝早くに申し訳ありません。　昨日聞きそびれた事をお伺いしようかと思ったのですが何処かにお出かけですか？」

レナードさんは何処かに出かけるのか、手に包みを持って家の前に立っていた。

「ええ此れから仕事なんです。もし良ければ歩きながら話しませんか？　規律が厳しい職場なので遅刻するのは避けたいんです」

「分かりました。ご一緒します」

「それで聞きたい事とは何でしょうか？」

「昨日話されていた大図書館のある街に行って見ようかと思ってい

るのですが、街の場所と街の名を教えてもらえないかと思いまして」
レナードさんは俺が言い切ると同時に表情が険しくなってしまっていた。
「そうでしたか、残念ですが今はもう無理なんです」
「えっ！？　どうしてですか？」
「私が家族とともに父の住むこのウィレンドの街へと越してきたのが今から約5年前なのですが、それまでは大図書館のあるアルケイメルという街に住んでいたのです」
街の名はアルケイメル　その街にある大図書館で調べる事ができれば。
「此処より遙か南方にある大陸に大図書館のある通称『学者の街』とも言われているアルケイメルがあるのですが、今から凡そ5年前から隣国との小競り合いが始まり、其の中間に位置していた街は戦禍に包まれ、焼け落ちてしまいました」
「それでは・・・・・・」
「はい。　街は面影もないほどに崩壊し、大図書館も今では魔物の巣窟となり果てています」
其処まで話したところで一つの建物の前でレナードさんは歩みを止めた。
「すいません。職場に到着したので話は此処までとさせてください」
「此処はギルドですね」
「私の職場はギルドの2階にある役場なんです。　今から朝礼が始まるので此れで失礼します」

レナードさんはそう言って俺に一礼すると急ぎ足で建物内へと入って行った。
精霊の手がかりともいえる『全ての母』という大図書館にある本を調べようにも今は魔物の巣窟か。
俺の足でもどれだけの日数がかかるか
仮にたどり着けたとしても本が無事であると言う確証はないな。

俺は街が魔物の巣窟と化しているという事実を知らされても折角の手がかりを諦めきれずに酒場で情報を得ることにした。

「すまないが酒場は夜からだ・・・・・ってアンタか、今度は何のようだ？　ビクトル爺さんに会えたのか？」
「いやビクトルさんは半年前から行方不明らしい。　ってそんな事よりもアルケイメルという街のことで情報はないか？」
「アルケイメルっていやぁ、学者の街って奴だよな。俺には縁の無い場所だし情報もねえな」
「そうか。　忙しいところすまない」
「気にすんな！　あっそうだライト姉ちゃんに聞いてみてはどうだ？　姉ちゃんならビクトル爺さんに及ばないまでも物知りだし、何か分かるかも知れないぜ」

ライト姉ちゃん？　ああ、シャノルクの酒場の女主人のことか。

「じゃあ行ってみる事にするよ」
「今度は客として酒場に来てくれよ！」
「ああ、すまないな情報ばかりで」

俺は開店準備に忙しい酒場をあとにしてシャノルクを目指し街の門から外に出た。
今度はギルドの仕事とは関係が無いので、早足で小高い丘の街道を

歩いていると前回では気づかなかったが小高い丘の反対側（山の斜面ではない方）には何処まで深さがあるか分からないほどの大きな『大地の亀裂』とも言える崖が口を開いていた。

（レナードさんが言っていた『大地より深き道』『闇に閉ざされし谷』『生ある者が辿り付けぬ地』ってここの事じゃないだろうな？　まさかな・・・・・・）

亀裂の内部がどうなっているのか気になり、真っ暗闇の亀裂内部を覗くように近づいていくと不意に防寒具を身に纏った男に声を掛けられた。

「おい其処のアンタ！　命が惜しかったら此処には近づくな」
「え！？」
「この崖に一度（ひとたび）足を踏み入れれば、命の保障はないぞ！　分かったら金輪際此処には近づくな」

俺は言い訳する間すら与えられずに無理矢理崖から引き離されてしまった。

「いいか？　絶っっっ対に近づくなよ？」

聞けば注意してきた男はシャノルクの街の外郭守護隊に籍を置く兵士で山の斜面から魔物に襲われたり、足を滑らせて転がり落ちてくる冒険者たちを網のような物で捕まえ、可能な限り崖に落ちるのを防いでいるのだという。

あたりを見渡せば山の斜面や崖の近くに注意してきた男と同じ防寒着に身を包んだ兵士が数ｍの間隔を置いて周囲に目を光らせている。崖の内部や色々な事を知りたかったが、一度危ない行為をしてしま

った所為で俺に注意してきた兵士とは違う複数の兵士からも奇異な目で見られてしまっていた。

俺のことを見張っているかのような監視の目はあるが、レナードさんから聞き及んだ3つの詩が当てはまる場所でもあるため、諦める事が出来なかった俺は兵士の目から逃れられる距離まで移動すると飛行魔法で宙に浮き上がり崖の対岸まで移動した。
流石に此処までくれば対岸で見張りをしている兵士の目は届かず、意を決して崖の中へと飛び込んだ。

亀裂に飛び込んでから既に数十分が経過しているが、何時まで経っても地面の感触はなく、このまま地の底まで落ちるのではないかという不信感と辺りは真っ暗で光など無いため、身体に当たる風が無ければ落ちているのか登っているのか分からなくなりそうで少し恐怖感を憶えることとなった。

（深いな。それにしても『大地よりも深き道』『闇に閉ざされし谷』か少し遠回りな言い方だが思っていた通り、高い確率で当てはまる場所だな。　残るは『生ある者が行きつけぬ地』か、此れも既に何百m落下しているのか分からないが、通常の人間なら既に耐え切れずに恐怖心で狂っているだろうな）
（マスター、幽かにですが地面が見えてきたようです。　落下時の衝撃に注意してください）

精霊は『地面は直ぐ其処だ』と言っているが、俺の眼には此れまでと何ら変わりはしない闇の空間が周囲に広がっているだけだった。

第１２１話　謎の女性の正体は？（前書き）

ＰＶアクセス９００万到達しました！
たくさんの方達に見てもらえて大変嬉しいです。
これからも頑張りますので宜しくお願い致します。

第１２１話　謎の女性の正体は？

『物知り爺さん』の異名を持つ、ビクトル爺さんの息子であるレナードさんに聞いた、大図書館に収められているという神書に書かれていた『全ての母』の情報を元にシャノルクとウィレンドの街の中間に位置する深い谷に飛び込んだ俺だったが、延々と落ち続ける漆黒の闇の中、漸く底に行き着こうとしていた。

（マスター、残り１０ｍほどで地面に着地します。　衝撃に備えてください）

（地面っていっても相変わらずの真っ暗闇で何処に何があるかサッパリなんだけど）

（残り５ｍ・・・・・３ｍ・・・・・２ｍ・・・・・）

（ちょ！？　まっ・・・・・うぉっ！？）

ルゥによってカウントダウンされていたものの、即座に反応できなかった俺は飛行魔法で減速する間もなく、そのままの勢いで地面に落下する事となってしまった。

そして次の瞬間、全身の骨が砕け散るほどの衝撃が身体全体を襲い、無事（？）に着地した。

（マスター、大丈夫でしたか！？）

（あ、ああ少し吃驚したけど・・・・・ってちょっと待ってくれるか？　股関節から下の骨が砕けてしまったようだ）

自由落下していたときと視界は同様だが、足に力が入らないのと壁に？まっていないと立っていられないことから足が折れているものだと判断した。

俺は粉砕骨折した足を地面に投げ出すようにして座り、皮膚を突き

破って飛び出してきた骨を指で体内に押し込めながら過ごす事、数分後・・・・・。
完治した足の具合を確かめながら周囲を見るのだが、真っ暗闇なので何処に何があるのやらサッパリだった。

（それにしても真っ暗だな。　いったいどれだけの距離を落ちてきたんだ？）

そう思いながら落ちてきた場所を見上げるが、頭上には一筋の光すら差し込まず漆黒の何処までも続く闇の空間が広がるだけだった。

（まぁ何にしても真っ暗では先に進めないし、灯りを出そうか。
此処なら誰も居ないし魔法を使っても大丈夫だろ）
（此処で生ある者はマスター以外では有り得ないでしょうから問題ないと思いますが）
（何かあるのか？）
（灯りを出した直後に魔物が襲い掛かってくる可能性もあるので注意してください）

とりあえず周囲の気配を確認し、魔物の存在がないことを確かめた俺は掌に照明代わりとなる火炎球を作り出した。
火炎球により周囲が照らされ、漸く周辺が見えてきたが其れは驚くべき光景だった。

谷底は思っていたよりも広い空間だったが、周囲には氷漬けになっている多くの人間達が恐怖で顔が引きつった苦悶の表情で地面に横たわっている。
中には落下途中で壁に身体を打ち付けたのか、肩から先が無くなっていたり、頭だけが地面に転がっていたりと凄惨な光景が広がっていた。

（これは、あの兵士が言っていた犠牲者たちか）
（そのようですね。　皆、何があったのか分からぬうちに命を落としていったのでしょうね）
（生き残りはいないのか？）
（もし落下途中に運良く助かったとしても此処はマイナス何十度の世界です。　マスターなら絶対零度の中でも灼熱のマグマの中でも生きられるでしょうが、生身の人間ではものの数秒で死んでしまいます）
（そうか・・・・・ん？　この娘は！？）
（マスター？　お知り合いですか？）
（髪の色は異なるんだが、シャノルクの宿屋で見た少女にそっくりなんだ。　どういうことだ？）
（そういわれれば確かに似ていますね）

謎の少女の氷漬けの遺体を前に考えていると目の前の空間から何者かの念話が頭の中に響いてきた。

（それは私が少女の姿を借りて、主様の御姿を拝見しに行ったからです）
（！？　誰だ、何処に居る！）

俺が問いかけると何処からともなく冷気を纏った青い靄が俺の目の前で人型を形成した。

（失礼致しました、私はこの地を守護する氷の精霊。　主様、お待ちしておりました）
（氷の精霊！　おふざけが過ぎますよ？）
（いや良い。　ただし死者を冒涜するような行為は以後絶対に許さない！　それだけは憶えておけ）

（申し訳ありませんでした。　処罰は如何様にも）
（反省してるなら良い。　二度としないようにな）
（分かりました。　御恩赦ありがとうございます）
（それはもう良いから精霊玉を貰えるか？）
（はい。　御手数ですが精霊の腕輪を此方に）

俺は未だに頭を下げ続けている氷の精霊と思われる青い靄に対して左手首の精霊の腕輪を向けた。
すると青い靄の一部が青い球状に変化し、腕輪に空いた凹みに綺麗に収まった。
そして氷の精霊に『シャル』という名を授けると青い靄は更に平伏し、音もなく静かに消え去った。

（これでやっと5個目の精霊玉か。　残りは4個か先は長いな）
（いえ主様、残りは雷、土、闇の3個です）
（3個？　ミラ、時の精霊玉はいらないのか？）
（時は精霊ではありません。　今はまだ何も言えませんが、残るは2世界のみです）
（2世界？　精霊は3体なのに世界は2つだけなのか？）
（はい。　私と同じ最上級精霊である、闇の精霊は火、風、水、氷、土、雷の精霊玉が揃った時、姿を現します。　まずは残り2体の精霊を探しましょう）
（そうか。　考えていても始まらないしな）
（主様、直ぐに次の世界へと飛びますか？）
（稼いだ金で食料を買いたいけど、雪国だから碌な物はなかったしな。　まぁいいか、次の世界に行こう）
（分かりました。　では・・・・・）

光の精霊であるミラが一声発した次の瞬間、目の前の空間がまるでノイズでも走ったかのように乱れ、歪みが出現した。

（あ・・・・・・るじ・・・・・・さま!?）

ミラの慌てふためいた声が聞えたのも束の間、俺は歪みに吸い込まれるようにして、この世界から姿を消した。

谷底に着地した時の大きな足跡だけをその場に残して・・・・・・。

第１２１話　謎の女性の正体は？（後書き）

ストレートに次の世界、雷、土といっても面白くないので、ちょっとしたハプニングと称して閑話を３話ほど挟もうかと思っています。

話の内容的には通じているので其れほど違和感は感じないとは思いますが、宜しくお願い致します。

閑話？　精霊無き世界　【前編】

異世界渡りの光が収まると俺は鬱蒼と茂った森の中に佇んでいた。
だが、この場所は普通の森とは違い、何もかもが巨大だった。　まるで俺が縮んだかのように。

シダの様な植物は目測でも５ｍはあり、その太さだけで樹齢数百年という木に相当する物だった。
上を見れば、昼なのか夜なのか良く分からない空で遥か上空には沢山の鳥のようなものが飛んでいる。

（ミラ、此処はどんな世界だ？）

光の大精霊であるミラに、この世界の情報を聞こうと問いかけるが待てども待てども返事は来なかった。

（ミラ？　如何した、何故答えてくれない？）

再び精霊玉に問いかけるようにして念話するも、またしても返事はない。

（ミラ、フレイ、シルフ、アクア、シャル、ルゥ！　誰か返事をしてくれ）
（マスター？　如何したんですか？）

漸く届いた念話に答えたのは剣に宿っている精霊のルゥだけだった。

（何故かは分からないんだが、ルゥ以外の精霊との念話が出来ないんだ）

（確かにマスターの周囲から上級精霊様の気配がしませんね・・・・・ってちょっと待ってください！？　この世界は一体なんなのですか？　周りの草や樹木、花や大地からの精霊の気配が感じられません）

（如何いうことだ？）

（まるで最初から存在していなかったかのように精霊の気配がありません）

此処に来て漸く精霊の腕輪の異変に気がついた。

何れの精霊玉も微弱ながらも光を放っていたはずが力をなくしたように、くすんだ色になってしまっている。

考えれば考えるほど、訳が分からなくなっていたところにルゥから緊急の念話が届いた。

（マスター！　上空から何かが飛来してきます）

（何かってなんだ？）

（分かりませんが、凄まじいスピードと膨大な質量を感じます）

ふと上を見上げると空を飛んでいた鳥が此方に向けて降りてくる。

・・・・・・・・いや鳥などではなく、翼を広げた５ｍはあろうかというドラゴンが轟音と突風を辺り一帯に撒き散らしながら俺の目の前に降り立った。

俺は咄嗟の事で意識が追いつかず、剣を鞘から抜くのも忘れていた。

目の前のドラゴンは見かけとは裏腹にキョトンとした、円らな瞳でキュイキュイという鳴き声を発しながら此方を凝視している。

（何かを伝えたいんだろうけど、ドラゴンの言葉なんて知らないしな～～ミラなら分かるんだろうけど）

そのまま5分ほどが経過した頃、ふいに上空から次々と目の前のドラゴンより一回りも二回りも巨大な厳ついドラゴンが俺を取り囲むようにして着地した。

（幾ら俺が不死身だとはいっても、こう至近距離に何体ものドラゴンが居ると怖いな）

（周りのドラゴンからはマスターに対する殺気は感じられません。寧ろ、一番最初に降り立ったドラゴンを心配するような感じがします）

「一体全体、何がどうなっているのか誰でも良いから説明してくれぇーーー」

半ばヤケクソ気味に森に向かって叫ぶと、何処からともなく念話のような声が聞えてきた。

『小さき者よ。　その問い、我が答えよう』

「誰だ！　何処に居る？」

『何処も何も、我は先程からオヌシの前に居るのだが？』

そう頭の中に謎の声が響いて辺りを見回すと、其処には翼を折り畳んで此方を見つめている、体長が１０ｍ級の土気色をしたドラゴンが・・・・・・ってまさか！？

『さっきからドラゴンドラゴンと何の事じゃ？　我等はドラゴニアという種族じゃぞ』

あれ？　俺って『ドラゴン』って口に出して言ったっけ？

『じゃから、ドラゴニアじゃと言うに！』

如何考えても心の中を呼んでるとしか。　もしかして・・・・・・

（えっと、ドラゴニアでしたっけ？）

もしやと思い、口に出さずに念話で問いかけてみると。

『その通りじゃ。　やっと憶えたか』

（えっと貴方は？）

『我の名はラグノシス、皆からは名前ではなく長老と言われておるがの。　して小さき者よ、オヌシに名があれば聞かせてくれぬか？』

（失礼しました。　俺の名はミコトと言います）

『先程、会話しておったのは誰じゃ？　確か“ルウ”とか呼んでおったが』

なるほど念話で精霊と会話するのだからルゥの声も聞えていて当然か。

（ルゥは俺の剣に宿っている精霊です）

『なぬ！？　精霊じゃと？』

俺が口にした“精霊”という言葉を聞いて目の前のラグノシスと名乗ったドラゴン。

いやドラゴニアは驚愕の表情を見せ、周囲を取り囲んでいたドラゴニア達からも息を呑んだ声が聞えてくる。

『確かミコトとか言ったな。　お前は何者だ？　何故滅んだ筈の精霊を連れている！』

未だ慌てふためいているドラゴニアの長老を押しのけるようにして赤褐色のドラゴニアが此方を睨みつけてくる。

『如何した？　何故黙っている。　長老と会話していたのだから言葉が分からぬ訳ではあるまい？』
『よさぬか！』
『しかし長老。　不審なる者をそのままにしておく訳には参りません』
『ふむ。　ミコトよ、オヌシは我等に害を為す者か？』
（いえ、此方には其方と争う理由はありません）
『だそうだ。　小さき客人を村に招待する』
『長老！？　気は確かですか？』
『わしの勘が当たる事は皆も知っておろう。　大丈夫じゃ』
『・・・・・前に長老の勘を信じた結果、肉食植物に食べられそうになりましたが？』
『男が細かい事をグチグチいうでない』
『私は女です！』
『そんな細かい事はどうでも良い。　客人をもてなす用意をいたせ』
『ちょっ！？　どうでもいいって何ですか！』

こうして俺は自分が置かれた立場を理解する暇もなく、強引に連れ去られるような形でドラゴニアの村に招待される事になってしまった。
いや、気分的には餌として巣に持ち帰られる獲物のような感じだろうか。

閑話？　精霊無き世界　【中編】

鋭い爪に鷲掴みにされて数分が経過した頃、竜が住んでいるようには思えない、木や藁で組まれた規模の大きな家々が巨大な木々に囲まれてポツポツと点在していた風景が眼に入ってきた。
家とは言っても俺の知るような大きさではなく平屋建てにも拘らず、高さはゆうに２０～３０ｍ以上はあり、横幅も５００ｍくらい。
奥行に至っては向こうの壁が霞んで見える程と言う想像を絶する広さだった。

そのような事を爪に掴まれながら考えていると、長老は不意に俺を静かに地面へと下ろしたかと思うと突然上空に舞い上がり、眼が眩むほどの眩い光があたり一面を照らした。
長老と共に飛んで来ていた他の竜たちも次から次へと眩い光を放っていく。

そして光が止むと其処には身長５ｍくらいの身体の表面に鱗が生えた巨人が背伸びをしたり屈伸運動をしたりして仲間と喋っていた。

「小さき者よ、何をボケッとしている？」

あまりの出来事に空いた口が塞がらないとはこの事であろう。
目の前の現象に釘付けとなっていると、身体の表面が鱗のような物で覆われた大柄な女性が話しかけて来た。
とは言っても他の周りで談笑している巨人と比べて小さい方なのだが。

「えっと・・・・・・・・・此れはどういうことなんでしょうか？」

混乱している俺の問いに答えてくれたのは目の前の女性ではなく長老がいた付近に出現した、立派な口髭を地面に垂らした腰を曲げたお爺さんだった。

「どういうことも何も、竜型から人型に姿を変えただけじゃぞ？竜型のままじゃと、手は使えぬから不自由極まりないからのぉ。生活する際は人型になるのじゃよ」

しかも今になって漸く気づいたが、会話も念話ではなく普通に口で行なっていた。

「さて、皆のもの。　今日は宴じゃ！　この地に精霊様がおいで下さった事を祝し宴を開こうぞ！」

「「「おおおぉぉぉーーーー！！」」」

（精霊様と言われても私は中級精霊でしかないのですが・・・・・・マスターの御蔭でギリギリ、中級扱いでしかありませんし）

（こりゃ、何故か此処にはいない、精霊王であるミラが来たら如何いう結果になるんだろうな？）

巨大な男達は長老が発した『宴』という言葉を聞きつけ、万歳のように腕を伸ばし叫んでいる。

一方先程の俺の前に現れた女性は手を額に当てながら『ヤレヤレ・・・・』といった表情で俯いていた。

そんなこんなで日は暮れて辺りが暗闇に包まれると集落の彼方此方からキャンプファイヤのような火柱があがり、蜥蜴に似た巨人達は巨大なコップを手に騒いでいる。

「ミコト何をボサッとしておるのじゃ？　今宵の主役はオヌシなのじゃぞ。　辛気臭い顔をしとらんで祭りに参加せんか！」

俺に声を掛けてきた長老は宴会開始早々に出来上がっているのか、真っ赤な顔をして地面に座って身体よりも一回り以上の巨大な果物を齧っている俺を掴むとそのまま皆が集まって騒いでいる場所へ連れて行く。

皆よりも身長が低い俺が長老によって無理矢理に宴の席へ足を踏み入れると、最初は俺を見て怪訝そうな顔をしていた竜人達も笑いながら酒を勧めてくる。

あとから聞いた話では飲んでいたのは俺が想像していたような酒ではなく、発酵した木の樹液が何故かウオッカ並の度数になった物らしい。
そんな宴が一晩中続き、空が夜明けで明るくなる頃には最初の溜息をついていた女性を除いた、ほぼ全員が地面で大の字になって倒れ眠っていた。

「ほんとにもぅ！　何時も何らかの理由をつけては宴になるんだから少しは自重してほしいものだわ」

唯一倒れていない女性は酒を飲まなかったのか、腰に手を当てながら散らかった広場を片付けていく。

「あの・・・・・何か手伝いましょうか？」

最初は俺のことを不審がっていた女性も一晩一緒に過ごした結果、いつの間にやら打ち解けていた。
念のために言っておくが、疚しい事はこれっぽっちもしていないので誤解無きよう。

「う〜〜〜ん、手伝ってほしいのは山々なんだけど、小人であるミ

コトにコレを持つ事が出来る？」

そう言って女性が差したのは俺の身体よりも2回りは巨大な木で出来たコップだった。

試しに持ってみると俺の力が異常なのか、軽々と持ち運べてしまった。

「へぇ～見かけによらず、力があるみたいね。　じゃ広場に散らばっているコップを回収して洗い場まで運んでくれる？　洗い場って言っても、この近くを流れている川のことなんだけどね」

女性は巨大な体躯にも拘らず、舌をだしておどけている。

その後は女性と共に広場の整理をし、全て終わる事には太陽が一番上に来ていた。

その頃には地面で倒れ付していた他の巨人達も次々と起き上がり家に帰っていた。

後に残るのは未だに鼾をかいて眠っている長老と、巨木を背にして疲れ果てて座っている女性（手伝っていた時に名前はエリィだと教えてくれた）に、アレだけ動いてもまだまだ余裕でピンピンしている俺の姿だけだった。

「長老、いい加減に起きて下さいよ。　もう昼過ぎですよ？」

女性（エリィ）が幾ら言っても長老は起き様とせず、大口を開けて鼾をかいている。

時々腹を手で掻いているが、おそらく無意識だろう。

「はぁ、やむを得ませんね。　あとで恨まないで下さいよ」

エリィは近くの木に実っている、毒々しいほどに真っ赤な木の実を掴むと大口を開けた長老の口の上で握り潰す様にして果汁を絞っていく。
匂いから言えば酸っぱいレモンのような感じなのだが、色を見ると血液を思わせるような濃赤だった。
「さて、3、2、1・・・・・・」

っと、木の実を絞りきったエリィが何故か秒読みを開始すると『0』と言った瞬間に長老は年齢を感じさせないような動きで飛び上がり、口を押さえながら一目散に川へと走って行った。

「ンンンーーーーーーー!!!」

それから数分後。

「ふぇふぃい!!　ふぉふふぃふぁふぁひふぉふぉふぉふひは!?」
【略：エリィ!!　オヌシはわしを殺す気か!?】

タラコ唇のように腫れあがった口元を押さえながら長老が意味不明の言葉を喋ってくる。

「何をしても起きない長老が悪いのです。　他の皆は既に起きて家に戻りましたよ?」

なんでそれで言葉が通じるんだ?

「ふぉのふぇーーー!」
【略：おのれーーー!】

それから凡そ1時間もの間、広場で意味不明の言葉でエリィに只管

文句を言い続ける長老の姿が見受けられたという。

後にエリィに『あの木の実は何だったの？』と聞くと俺の世界で言う、ハバネロクラスの唐辛子で普段は絞った汁を数十倍に薄めて料理の味付けとして使う物らしい。

ちなみに絞った汁をそのままで食べると口の感覚が麻痺し、暫くは何を食べても味はしないんだという。

閑話？　精霊無き世界　【後編】

前回のとんでもない木の実を目覚ましとして食わされた長老は夕方まで、のた打ち回った挙句、腹がパンパンに膨らむほど水を飲んで事なきを得ていた。

「う～～～酷い目にあったわい」
「大丈夫ですか？　見た感じでは、とても辛そうに思えるのですが？」
「ミコト、何時もの事だから気にしなくても良いわ」
「エリィ・・・・・それが祖父に対する仕打ちか！？」
「えっ！？　エリィって長老の孫なの？」
「言ってなかったかのぉ？　そういえば何時の間にミコトと仲良くなったのじゃ？」
「宴が終ってから、後片付けを手伝って貰っていた時にかな？」
「なるほどのぉ～～して？　遅くなったが、ミコトが此処にいる理由を聞かせてもらっても良いかの？」
「突拍子のない話だと思いますが、今から話すことは全て嘘偽りのない事実ですので」

そして俺は自分が将来の神だということは誤魔化しながら、ミラを始めとする精霊に出会う旅をしている事、異なる世界を精霊の力によって渡っている事、何らかの事故でこの世界に落ちてしまった事などを長老とエリィに説明した。
俺が全て話し終えると長老もエリィも目を最大限に見開いた状態で俺を見ていた。

「じゃ、じゃあミコトはこの世界の住人じゃないと言うの！？　此処の他にも世界があるだなんて、てっきり御伽噺とばかり」

エリィはこんな話を信じてくれるのか、定まらない視点でうろたえている。

「ふむ、嘘をついているような目には見えなかったのぉ。　先程の話を簡潔に纏めると使役していた精霊様が見つかるまで世界を渡れないということじゃな？」

「そうなりますね。　唯一手元にいる剣の精霊であるルゥの話によれば、この世界には精霊がいないそうですね。　もし宜しければ理由を聞かせてもらえませんか？」

「分かった。　とは言っても直接知っているのは既に亡くなった、わしの曾祖父でな？　伝承として聞いた話によれば、今この時より数千万年もの昔、この地を戦場にして神と悪魔の軍勢が争ったのだそうじゃ」

神と悪魔の戦争・・・・・・・・・。

「戦争は瞬く間に森を焦土にし、川を干上がらせ、空を壊し地表は文字通り地獄絵図と化した。　そんな中、破壊しつくされた自然を修復するため、精霊様たちは惜しみない力を使ってくれていたのだが、何時しか一体、また一体と精霊様たちは姿を消して行き、とうとう世界から精霊様達がいなくなったのじゃ。　この世界の現状を見て見放されたのか、それとも力の使いすぎで消滅してしまったのか、定かではないが精霊様がこのまま戻ってこなければ近い将来、この世界は滅ぶであろう」

エリィは長老の言葉に声を失い、両手で口元を隠すかのようにして固まっていた。
そして気がつけば既に日はどっぷりと落ちており、辺りは暗闇に包まれていた。

「おっと、話に夢中で時間を忘れておりましたな。　直ぐに食事の用意をしますので暫くお待ち頂けますかな？　さぁ、エリィも手伝いなさい」

エリィも初めて聞かされたのか覚束ない足取りで長老と共に家の中へと入って行く。

長老の応対も俺が精霊を使役する存在と分かってからは何処か丁寧な口調に変わっていた。

何かの肉の丸焼きという豪快な夕食が終了し俺のために宛がわれた部屋で寝ていると、今か今かと待ち望んでいた声が頭の中に届いた。

（主様、申し訳ありません。　ご無事で何よりです）

ミラの声を筆頭に火の精霊フレイ、風の精霊シルフ、水の精霊アクア、氷の精霊シャルの声が頭の中に響き渡る。

（ミラか！　一体何があったんだ？）

（詳しい事は未だ不明なのですが、天界の調査によりますと『魔に属する者が此方に対して何らかの妨害工作を行なったのでは？』という見解になっております）

（天界が？）

（主様がこの世界にいると調べてくださったのも天界の方々です。さて遅くなりましたが直ぐにでも世界を渡りますか？）

（いや少し待ってくれ。　ちょっと気になることがあってな）

（宜しければ、お聞きしても？）

ミラに話すことで何らかの解決策が見つかるかも？　と思い、長老に説明された神と悪魔の戦争によって精霊が世界から絶滅したと言

う話を聞かせた結果、ミラから齎された言葉に驚きを隠せなかった。

（主様、それは可笑しいです。　精霊は力の消費によって一時的に弱くなる事はあっても、完全に消滅するという事はあり得ません）

（だけどシルフの場合は？　シルフも魔力を奪われて消滅しかかっていたんだろう？）

風の精霊が魔力を魔吸石によって奪われ消滅しかけていた事を聞いてみると。

（いえ、先程も言いましたように本来はありえないことなのです。　シルフに起こった事に関しましても予想外の事でしたので）

（どういうことだ？）

（魔力は魔力でも人間達の言う魔力と精霊の力になっている魔力は大きく異なります。　例えば、そうですね・・・・・主様、御手数ですが両腕を広げられるだけ広げてもらえませんか？）

俺は一体何の意味があるのか分からないがミラに言われた通り、両腕を限界まで伸ばすと。

（ありがとうございます。　主様を中心に指先で円を描き、その中にある魔力を普通の人間の換算で『１』とすると精霊の換算では『１００』となります）

人間１：精霊１００か・・・・・。

ってちょっと待てよ？　なら魔吸石に吸われた魔力の量ってどういう事に。

（気がついたようですね。　風の精霊の命ともいえる魔力を奪われたとは言っても、人が作りし魔道具で精霊が瀕死に追い込まれるな

ど本当は不可能なんです）

じゃあ、ドゥールが使っていた魔吸石は一体何だったんだ？

今も亜空間倉庫に置かれているが・・・・・・。

（『精霊』と一言で言っても、草や木といった下級精霊は１ｍ×１ｍの範囲内に少なくても１００体はいます。　この世界のように完全に０と言うのは大異変なんです）

（この時点で俺がこの世界に対して、してやれる事は何もないのか？）

（残念ながら、今の主様の御力では如何する事も出来ません。　精霊がいなくなったと言う原因を解明しない事には何をしても元の木阿弥です）

（くそっ！　俺は非力だ・・・・・・）

（主様）

（マスター）

此処にいても如何する事も出来ないとミラに聞かされた俺は、長老とエリィが寝ている部屋に出向き、そっと２人に対して頭（こうべ）を下げると、ミラの力で次の世界へと旅立った。

なんともいえない虚脱感を心に抱きながら・・・・・・。

第１２２話　魔術師の世界

何時もの様に上下左右東西南北という方向の分からない空間を抜けて辿りついた先は高さ数十ｍはあろうかという巨岩の上だった。

（主様、お待たせいたしました。　次なる世界に到着いたしました）
（今、立っている場所は兎も角として此処はどんな世界なんだ？）
（この世界は土の精霊が管理している世界で前に居た世界とは１８０度異なり、魔法が異様なまでに発達した世界です。　中には主様のように空を飛べる人間も居ますよ。　・・・・・稀にですが）

ミラが最後に、ぼそっと言った言葉は風の音が邪魔をして聞き取れなかったが、此処では飛行しても問題は無いということだな。

（そういえば前の世界には碌な食べ物が無かったから硬貨を使わずにそのまま道具袋に入っているな。　この世界でなにか別の使い道があれば良いのだけれど）
（難しいですね～～～世界が変われば、使うお金も変わりますから使えないんじゃ無いでしょうか）
（やっぱりそう思うか。　まぁ捨てる事は勿体無くて出来ないから、そのまま持っていよう）

ミラとの会話を終えた俺は、まず最初に街を見つけなければと思い、巨岩の上から遠くを見るようにして目を細め、３６０度周辺を見回した。

が、どの方向を見ても青く澄み渡った空と無限に広がる荒野が目に入るだけだった。

（街はおろか村さえも見えないんだが・・・・・・ん？　あれは）

ふと見ると荒野を砂煙を上げながら疾走する一つの影が見える。
最初、魔物でも走っているのかと思っていたが、よくみると2本足の小型恐竜のような生き物に跨って、何を急いでいるのか必死に鞭を打っている男が眼に入った。

（何を急いでいるのか分からないが、豪く焦っているような感じがするな）
（マスター、その理由はあれじゃないですか？）
（ん、どれ？）
（あの生き物の後方をよく見て下さい）

ルゥにそう言われ、男の方ばかりを見ていた目を後方に遣ると。
男の乗る小型恐竜の何十倍もの大きさがある、ティラノザウルスに酷似した魔物が涎を垂らしながら追いかけていた。

（なるほど、男はあの魔物の餌という訳か・・・・・・って何を落ち着いているんだ俺は！？　助けないと）

俺は咄嗟に風の膜を全身に覆い、切り立った岩場から飛び降りた。
落下している途中で飛行魔法を使って空中で停止した俺は、追いかけられている男と魔物の中間あたりに間合いが詰まらない様にして移動した。

「あ、あんたは！？」
「此処は俺に任せて逃げろ！」

「ありがたい！　コイツの息も上がってきて、もう駄目だと思っていたんだ」

みてみれば男の乗った小型恐竜はかなり疲れているようで今にも倒れそうな表情を醸し出していた。

「俺が今から魔物の視界を塞ぐような攻撃をする。　その間に何処かの茂みに飛び込んで身を隠せ！」

「分かった」

俺は飛行魔法を解除すると自由落下している状態で掌に直径３０ｃｍほどの火炎球を作り出し、男に目で合図した後、魔物に向かって放り投げた。

火炎球が魔物のいる方向へ飛んでいくのを確認した後、地面に墜落する前に飛行魔法で空中に停止する。

魔物は獲物が増えたとばかりに速度を上げて猪突猛進していた為、予期せぬ攻撃をかわすことはおろか、防御する事さえ出来なかった。

俺の放った魔法は寸分の狂いもなく魔物の右目に直撃し、その衝撃で前のめりになり地面に逆立ちをするような体勢で倒れた。

その間に前を走っていた男は岩陰に身を隠し、俺もまた上空へと飛び上がった。

その十数秒後、右目から緑色の血を流しながら魔物は起き上がってきたが時既に遅く、追いかけていた男は見当たらず、途中乱入してきた男（俺）も居なくなった事で頭（こうべ）を垂れて、右目が見えないためかフラフラと来た道を戻っていった。

暫くして岩陰から追いかけられていた男が周りを警戒しながら出てきたが、其処には魔物の姿も俺の姿もなく男は呆然と立ち竦んでいたのだが、誰にでもなく頭を下げると小型恐竜に乗ってゆっくりと走っていった。

（マスター、あの男に街まで案内してもらった方が良いのでは？）
（そうだった、全く考えてなかったな。　まぁ雰囲気的に少し出づらいし、空から男を追いかけるとするか）
（そうですね。　誰にでもなく、会釈した男の前に行くのは格好悪いですしね）
（そこまでハッキリ言わなくても良いのに）
（マスター？　如何なさったんですか？）
（何でもない行くぞ）
（？　はい）

そして小型恐竜の速度にあわせながら飛行魔法で尾行していると・・・・約2時間後には高い塀で囲まれた六角形をした、其々の角に塔がある変わった作りの大きな街に入って行った。

（魔物に備えて高い塀にしているんだろうけど、屋根がないと飛行している魔物には効果がないと思うんだけどな）

そうして俺も街に入って一休みしようと、街の門から入らずに空から街に入ろうとしたのだが。

「其処に居る者！　直ちに停止しろ」

空中に居るにも拘らず何処からともなく『停まれ』という声が。

よくみると塀の上の足場の辺りに鎧の右胸のあたりに赤い炎のような紋章を付けた女性がこちらに対して呼びかけていた。
その周辺にいる別の色の鎧を着た人たちも何故か目玉が零れ落ちそうなほどに目を限界まで見開いて此方を凝視している。

「聞えなかったのか？　空中に浮かんでいる者、直ちに停止して地

面に降りろ！」
「わ、分かりました」

俺が呼びかけに応じ、地面に向かって降下していくと、俺に呼びかけていた女性も塀の向こうに階段があるのかタッタッタッタッという靴音とともに地面に降り、街の門に姿を現した。

「お前、何者だ？　今は無き飛行魔法を使うとは只者ではないな」
「今は無いって・・・・・・」

ミラ、どういうことだ！？

「答えられないのか？」

こうなったら嘘に嘘を塗り固めて説明するしかないな。

「い、いえ俺は遠くの街から旅をしてきたミコトと言います。　決して怪しい者ではありません」
「皆、そういうのだがな。　飛行魔法については如何説明する？」
「小さい頃から家にある、曽祖父の集めた特殊な本を読んで過ごして来たので知らないうちに身に付き、ある日試しに2階の窓から飛び降りたところ飛べるようになっていました」
「むぅ、そのような貴重な文献が残されているとはな。　その本は今何処に？」

どうしよう・・・・・・此処までは考えてなかった。

「どうした？　何故黙っている？」
「い、いえ数年前に家が盗賊の手に掛かり家族は皆殺しに遭い、俺は2階の窓から空中に飛び出して助かったのですが、家も本も家族

も全て灰になってしまいました」

俺は眼に入った砂を拭うようにして目を擦っていたのだが、其れを泣いていると判断したようで・・・・・。

「すまない！　辛い過去を思い出させてしまい、申し訳がない」

「気にしてませんから」

そして俺は女性に手を引かれながら街の中へと入って行った。

「それにしても、空から街に入ろうとするとは無謀すぎる行動だぞ？」

「どういうことですか？　このような大きい街に来た事は無いので分からないのですが」

「何だ知らなかったのか？　此処はわが国の国王が住まう王都ルイベアス。　他の街に比べ守備は堅固な物とされ、上空には魔法結界が張ってあるため例え上級魔族であろうと空からの出入りは不可能だ」

そうすると知らずに空から入ると大怪我をしていたという訳か。不死身だから自分的には問題ないけど、大騒ぎになることは間違いなかったな。

「おっと自己紹介が遅れたな。　私は炎術士のナジェリアだ」

炎術士？　この街の守備隊か何かだろうか。

「よろしくお願いします」

「ではな。　仕事に戻るとするよ」

こうして最初から混乱に陥ってしまったが無事（？）に街に入る事が出来た。

「そうそう、大騒ぎになるからあまり人前では空を飛ばないほうが良いぞ」

周りの状況を見る限り、もう遅い気がするが・・・・・・。

第１２２話　魔術師の世界（後書き）

普通は魔術師の『師』と書くのですが、敢えて『士』を使いました。
深い意味はありませんが・・・・・。

第１２３話　魔法直撃

若干の混乱はあったものの、無事に街へと辿りついた俺は精霊の情報収集のため街を歩いてみる事にした。

宿に泊まるにも食事をするのにも、まずはお金が必要になるので街に入ってすぐに路地裏へと入り、亜空間の扉を開くと中においてある魔道具を5品ほど道具袋の中へとしまい込んでおいた。

（さてと道具屋は何処かな？　ん？　あれは・・・・・）

ふと道具屋を探しながら空き地のような開けた場所に目を遣ると、親子だろうか子供が大人相手にキャッチボールのような事をしているのが眼に入る。

『この世界にも野球のようなスポーツがあるのか』と思いながら光景を見ていたのだが、何かおかしい。
子供から大人には拳大の大きさの球のような物が投げられているが、大人から子供には投げられていない。

しかも其れ以前に野球のミットなどは手に嵌めておらず、代わりに何か可笑しな手袋を装着していた。

「ほらどんどん来い！　そんなことでは何時まで経っても一人前になれないぞ」
「よ～し、此れならどうだ。　あっ！？」
「なっ！？　馬鹿、何処に放ってるんだ。　其処の人、避けてくれ」

親子の焦っているような会話が為された次の瞬間、子供の手から離

れた赤いボールのような物は一直線に俺に向かって飛んできていた。
その球は俺の目の前まで来て、漸く親子が行なっているのは断じてキャッチボールなどではないということが判明した。

が、落ち着いている場合ではなく目の前まで迫っていた其れを避けようとするが、ここで避けると俺の後ろで無邪気に遊んでいる女の子に直撃してしまうので、受け止めざるを得なかった。
俺は咄嗟に両手を胸の前で広げて受け止める体勢を取るが、其れはまるでフォークボールかのように俺の目の前で急降下し受け止めようと待ち構えていた掌をすり抜け、下腹の辺りに直撃した。

『ボムッ』
「うわっ！？」

俺は別に何とも無かったが、当たった衝撃で地面に大の字になって倒れた。

「嗚呼やっちまったか、あんた大丈夫か？　直ぐに水術士を呼んでくるから待っててくれ」
「お父さん・・・・・・」

子供は父親と俺を交互に心配そうな目で見つめている。

「そんな人、呼ばなくても良いですよ。　俺は大丈夫ですから」

俺は身体に付いた土埃を掃うような仕草をとりながら、何事も無かったかのように立ち上がると親子は目玉が零れ落ちるほどに目を見開いて俺を凝視していた。

「あ、あんた、子供の放った物とはいえ、ファイアーボールを腹に

受けて何とも無いのか？」
「あれぐらいなら自分の魔法で治療できるので問題ないですよ」
「お兄ちゃん、もしかして痩せ我慢してない？　僕はそれなりに魔力が高いんだよ？」
「大丈夫だよ。　ほら」

俺はそう言ってシャツを捲くってみせると、其処には火傷はおろか傷のような物は１ｍｍたりとも残ってはいなかった。

「ほんとうだ。　何の痕もない！　お兄ちゃん凄いね」
「まあね。　柔な鍛え方はしてないからね」
「あんたはそう言うが、それでは俺の気が収まらん。　せめて謝罪として此れだけは受け取ってくれ」

そういって父親が懐（ふところ）から取り出した黒っぽい袋から何かを取り出すと、掌を開いて薄青色のコインのような物を５枚、俺に渡そうとしてきた。

「い、いえ怪我も無かった事ですし、受け取れませんよ」
「いや、あんたがいなければ事は大惨事になり、その問題を起こした我が子の炎術士になるという夢も絶たれ、更には後ろで遊んでいる子達も怪我では済まなかっただろう。　だから此れは受け取ってくれ」

父親は無理矢理、俺の掌にコイン５枚を握らせると子供共々、深々と頭を下げ足早に子供を連れて屋敷の中へと入ってしまった。

「あ、ちょっと」

大声を発するも既に親子の姿は見えず、後方で遊んでいる少女達が

『なにか呼んだ？』と答えるだけだった。

（マスター、其れはあの親子の謝罪の物ですから、受け取らないと親子の立つ瀬がないと思われますが）

（そうだよなぁ～まあ返すにしても既に見当たらないしな。有難く貰っておく事にしよう）

思いがけずにお金（かな？）を手に入れた俺は魔道具を換金すべく道具屋探しを再開した。

その頃、親子が逃げるかのように飛び込んだ屋敷では。

「あなた如何したの？　血相変えて飛び込んできて、まだ魔法の訓練の時間でしょ？」

「それがな・・・・・」

父親が妻と思われる女性に事情を話し出すと、徐々に女性の顔から血の気が引いていった。

「まぁ、受け止め損ねた魔法が旅の方に！？　それは大変じゃない。すぐに水術士を呼ばないと」

「落ち着いて話を最後まで聞け！　確かに魔法は直撃してしまい後方に倒れたんだが、次の瞬間には何事も無かったかのように起き上がってきたんだ。旅人が言うには『自分で回復魔法を掛けたから大丈夫だ』と」

「それで如何したの？」

「本人は大丈夫だと言っていたが、其れでは俺の気が収まらんからな。　たまたま財布に入れてあった5枚の青銅貨を無理矢理手に握らせて逃げるように家に飛び込んできたんだよ」

「まぁ！　ところであの子は何をしているの？」

そして母親のような人物が扉の鍵穴を内から外に覗き込んでいる息子に声をかけようとすると。

「お父さん、あの旅人さん何か考え事してたみたいだけど、やっと歩いてったよ」

「そんな見張るようなお行儀の悪い事は止めなさい！　あなたは将来立派な炎術士の隊長になるのよ？」

「おいおい隊長だなんて、そんな何年も先のことを今から言ってどうする？」

「あなたは黙ってて。　あ、そうそう今月は御小遣いなしだからね」

「そんな～～～～」

屋敷から悲鳴が上がって何事かと街の衛士が駆け込んできたのは、また別の話である。

第１２４話　とある店員の野望

色々と寄り道を繰り返しながら、漸く商店街と思われる場所に辿り着くと其処には何処まで店が続くのかと思わんばかりの商店が所狭しと並んでいた。
中央に人が通る道があり、左右には向かい合わせになるように様々な物を売る露天が並んでいる。

沢山の野菜（の様なもの？）を売っている店や見たことも無い、歪な形の果物、異様な雰囲気を醸し出している魔女といわんばかりの老婆が売る怪しげな薬などなど。
此処を歩くだけでも楽しげな雰囲気なのだが、本命は魔道具の店なので日が暮れる前に探さねばならなかった。
この世界のお金は持ってないので、美味しそうな果物を見つけても見ない振りをして魔道具を扱う商店を探していると店先に水晶や何かの飾りが付いた腕輪や指輪などが置かれている店を発見した。

（おっ？　あれが魔道具の店かな？）
（マスター、通貨のことを如何説明するおつもりですか？）
（今までと同じ様に『何処か遠くの街から旅してきた』で良いんじゃないか？）
（う～ん、何か嫌な予感がするんですが）
（気にしすぎだよ行くぞ）

ルゥが言う『嫌な予感』というのを若干気にしながらも、魔道具店と思われる商店に入って行った。

「いらっしゃいませ！　ありとあらゆる魔具を取り揃えていますよ。何をお探しでしょうか？」

如何みても頼りなさそうな若い店員が店の奥から姿を現した。
「ええと、此処は買い取りはしていますか？」
「勿論行なっていますよ。　ただ査定にお時間が掛かる場合がありますが、宜しいでしょうか？」
「はい大丈夫です。　じゃあ此れをお願いします」
「お預かりいたします。おや？　此れは見たことの無い魔道具ですね。何の効果がある物なんですか？」

違う世界の物を此処で売ることが問題にならないかと思いながら説明する事にした。

「赤い宝石のような物が付いている腕輪は魔力増幅効果の魔道具でこっちの指輪は身代わりの指輪といって装備者の命を一度だけ助けてくれる物です。　あとは・・・・・・」

この魔道具を買った店の主人が話してくれた内容と同じ事を喋っていたのだが、商店の主は何時しか此方を疑っているような目で見だしていた。

「どうかしましたか？」
「いえ、それほど貴重な魔道具を売られるわけは何だろうと思いまして」
「え？　ああ、こっちの国の通貨を持っていないので手持ちの道具を売って金にしようかと思ってね」
「そうでしたか。　これから査定を始めますので、暫しお待ち頂けますか？」
「分かりました」
「それでは」

店主はそう言って魔道具を手に店の奥へと消えていく。
俺は店主の帰りを待ちながら、店先にある見たことの無い魔道具を手に取って眺めている頃、店主が入って行った店の奥では・・・・・。

「『こっちの国』って言っていたな。　という事は別の国からの此方の様子を伺うために送り込まれた男と考えて良いのかも知れんな。
だとすれば、其れを発見した俺は貴重な魔道具の入手と、国からの報奨金とで一石二鳥の儲けという訳だな。　おい誰か！　衛士を呼んできてくれ、なるべく静かに急いでな」

（やっぱり、そういうわけでしたか。　主様の勘は当たっていたようですわね。　こうしてはおられません、報告しなければ）

俺の顔色を疑うような視線をした店主の事が気になり、俺以外には見る事の出来ない不可視の精霊を一体店主に張り付かせていたのだが、ルゥの言う悪い予感が当たっていたのだと確信を得た。

（そうか、やっぱり不審がられていたか）
（主様、どう致しますか？）
（此処は無かった事にして逃げるか）
（いえ、それでは返って怪しまれるのではないでしょうか？　此処は大人しくしておいた方が良いのでは？）
（だけど、捕まってしまうんじゃないか？）
（それでも、この世界の国ではありませんから証拠も何もありませんよ）

精霊達と会話していると店の奥から不自然な笑顔で店主が姿を現した。

「いやぁ～お待たせしました。　査定の結果、青銅貨7枚での買い取りになりますが宜しいでしょうか？」
「たった其れだけですか？　もう少し良くと思っていたんですが・・・・・分かりました。　魔道具を返してください。　別の店で買い取ってもらいますから」

この世界での青銅貨の価値はまだ分からなかったが、店主に張り付かせていた精霊の報告を聞く限りでは、大分（だいぶ）此方を舐めているようだったので真面目な査定はしていないだろうと踏んでいた。

「此方といたしましても、此れが精一杯でして」
「だから此処では無いところで買取をしてもらうので、預けた魔道具を返してくださいと言ってるんじゃないですか！」

店主が言い訳がましく、衛士が到着するまで俺を逃がさないようにしているのは分かっていたが、いい加減五月蠅くなってきたので口調を荒げてしまっていると、大柄な髭面の男性が姿を現した。

「何の騒ぎだ！！」

一瞬、衛士が来たのだと思って逃げ腰になっていたが、店主の表情を見る限りでは如何やら違うようだ。

「て、店長！？　明日まで北の鉱山に採掘出張の筈では？」

店長？　じゃ目の前の男は一体何者だ？

「俺のことは良い！　此れは何の騒ぎだと聞いているんだ。答えろ！」
「い、いえ。　それがその・・・・・」

俺が今の今まで店主だと思っていた男は、突然現れた大柄な髭男に対して涙眼になっている。
店の出入口を髭男が塞ぐように立っていなければ一目散に逃げていても、おかしくないほどに。

「ハッキリしろ！　ところでアンタは？」

此処で漸く俺の存在に気づいた『店主』と呼ばれた男が話しかけて来た。

「今コイツと口論していたようだが、アンタは一体何だ？」
「俺は此処に魔道具を売りに来たんだけど」
「おお客か！　うちの若いモンがすまねえな。何をぼさっとしてやがる！　茶ぐらい出さねえか」
「はい。只今」

男がそういうと、心配そうに店の奥から此方を見ていた別の店員が、返事をしながら店の奥へと消えていった。

「それで何があったんだ？　客に聞くのも情けない話だが、詳しく話しな」
「え、え～と、この魔道具の買取提示額に納得がいかなかったんで別の店で買い取ってもらうから魔道具を返してくれと言ったんですが、何故か返してくれなくて」
「魔道具？　ああ此れか。いったい、あの馬鹿は幾らの値を出したんだ？」
「全部で青銅貨7枚と言っていたかな？」
「この魔道具が青銅貨7枚だと！？　いい加減な仕事してるんじゃねえよ！！」

男はそう言って、たった今まで俺の相手をしていた男を殴りつける
と店主だと思われていた男は地面に倒れ込み、気を失ってしまった。

第１２４話　とある店員の野望（後書き）

この世界のお金の価値に関しては、別の話の中で説明する予定ですので分かり辛いとは思いますが、もう暫くお待ち願います。

第１２５話　魔道具屋店主の魔術

漸く魔道具を取り扱う店を探し当て、幾つかの魔道具を買取してもらおうと店主と交渉をしていた俺だったが、店主の提示した額に納得が行かずに喧嘩腰になっていたところへ髭面の男が現れた。

話の内容や店員の態度を見る限りでは、この髭面男が真の魔道具屋の店主らしい。

では、この男に殴られて気絶している、俺が店主だと思っていた男は一体誰なんだろうか・・・・・・。

「まったく、ちょっと小突いたぐらいで気絶すんじゃねえよ！　おい、誰か水持って来い」

「はい」

別の若い店員が桶に水を入れて持ってくると男は其れを受け取り、倒れている男に浴びせかけた。

「ゲホッ！　ゴホッ！　い、いったい何が・・・・・・」

「目を覚ましたか？　この魔道具を青銅貨７枚とはテメエの目は節穴か！？」

「い、いえ其れには訳が」

「くだらねえ仕事して言い訳か？　俺も随分と舐められた物だな」

と其処へ図ったかの如く、数人の衛士が飛び込んできた。

「此処に不審者がいると聞いてきたのだが？」

「ん？　此処には俺と客人以外いねえが。　何かの間違いじゃねえか？」

「おお、ガンツァルト殿！　戻られていたのですか。　と、そんな事はどうでも良いですね。つい先ほど此処の坊主が飛び込んで来まして『急いで店まで来て欲しい』と切羽詰った口調で申していたので何事かと思い、こうして来てみたのですが・・・・・」

衛士がそういうと地面に蹲っている、びしょ濡れの男が身体を震わせた。

水を掛けられた事による寒さのためか、目論見が失敗した所為かは定かではないが。

「どうやら何かの間違いだったようですね。　ガンツァルト殿が居られれば大抵の厄介事は回避できますからね」

「人を化け物みたいに言いやがって！　こっちは忙しいんだ、ほら帰った帰った」

「分かりました。　たまには顔を見せにいらしてください。隊長達も寂しがっていましたよ」

「けっ、気持ち悪い事を言いやがって。　俺はもう退官したんだ。ほっといてくれ」

衛士はガンツァルトと呼んだ男の返答を予測していたかのように微笑を浮かべると、一緒に来ていた衛士に手で合図を出し、撤収していった。

「衛士隊のことも含めて、あとでゆっくりと話を聞かせてもらおうか！　さてお客人、待たせてすまないな」

「いえ、それよりこの男は店主では無いんですか？」

「コイツが店主？　コイツはただの留守番だよ。俺が帰ってくるまでは買い取りはするなと言っておいたのに！　あの馬鹿は」

「それで本当の買取額は幾らなんです？」

「おっと、そうだったな。　すぐに終わらすから、そこ等辺で待っ

ててくれ」

髭面の男はそう言うと、魔道具を一個一個手に取り何かを調べている。

（マスター、どうやら魔力を検知しているようですね）
（あの男も魔術師なのか？　全然そうは見えないが）
（いえ主様、この世界では魔術師でない者を探す方が難しいですよ。それにこの世界では1人につき、1もしくは2属性が当たり前なので気をつけてくださいね）
（あの男は何の属性だと思う？）
（魔道具の魔力検知を出来る事から、おそらくは土属性だと思われます。　錬金の使い手と考えていいでしょう）
（『錬金』って錬金術の事か？　土の魔法でそんな事も出来るんだな。今度試しにやってみよう）

精霊とそんな事を話していると、如何やら魔道具の査定が終了したようだ。

「待たせてしまって済まなかったな。　しかしコイツはとんでもない魔力含有量だな、たまげたぜ」
「それで？　幾らになりますか？」
「大甘に見積もって金貨１４枚と銀貨８枚といった所だが、うちの馬鹿が迷惑を掛けたみたいだし、金貨１５枚で買い取ろう」

前の店員が言っていたのは青銅貨7枚で、本当の店主が言っているのは金貨１５枚か。
青銅貨とか銀貨、金貨とかはどういう価値があるのか知らないけど、店主の態度を見る限りでは嘘は言ってないようだし、此れで良いかな。

もし此れが俺を騙そうとして口から出任せを言っているのなら、こんな目つきはしないだろうし・・・・・。

「分かりました。　その金額でいいです」
「ようし商談成立だな。　ところで金貨だと使いづらいだろ？　金貨１枚を銀貨１０枚に両替してやろうか？」
「あ、お願いします」
「ああ分かった」

そう言って店主から金色に輝く丸い硬貨を１４枚と、銀色の８角形の硬貨を１０枚の合計２４枚のコインを手渡された。

「序と言っては難ですが、聞きたいことがあるんですが良いですか？」
「なんだい？　何でも聞いてくんな」
「査定の時に使っていた魔力の波長から言って、貴方は土系統の魔術だと思うのですが、先ほどの術のことを教えて貰えませんか？」

俺は精霊に教えてもらった土属性の魔力の事を『錬金』も含めて聞いてみる事にした。

「おお、良く分かったな。俺は一応、土の術士だぜ！　『錬金』の認定証は持っているか？」
「認定証ってなんですか？」
「持って無いなら悪いが、教えてやる事は出来ないな。　規律の一つでな、国に認められた者以外に許可なく他人に教える事は禁止されてるんだ、悪いな」
「それじゃあ、何処に行けば教えてもらえますか？」
「う～ん、今でもやっているか如何か分からねえが、まぁ聞いてみるか。　おい店番は任せたぞ！」

髭面の男は腕を組んで眉間に皺を寄せながら少し考えた後、俺を連れて衛士が戻って行った方向へと歩き出した。

そして男について歩いていくと、何故か城に辿りついた。

「ん？　ガンツァルト殿ではありませんか」
「その堅っ苦しい呼び方は辞めてくんな！　俺は『ガンツ』で通ってるんだ」
「そうは申されましても・・・・・・いや、分かりました。　ガンツ殿、今日はどのような御用でしょうか？　隊長達に御挨拶ですか？」

俺を連れてきた男が衛士に睨みつけると、顔を引きつらせながら応対してくる。

「いや、俺じゃねえんだ。　俺んとこの客が錬金を習いたいって言ってきてな、今でも講習しているかと思って聞きに来たんだよ」
「タイミングが良いですね。　錬金講習は明日から開催する予定で、本当は昨日の日没が応募締め切りだったんですが、ガンツァ・・・・・いえガンツ殿のお知り合いでしたら、特別に、参加枠に入れておきますね」
「悪いな」
「其方の方が参加希望者ですか？　名前を聞いても宜しいでしょうか？」
「ミコトです」
「ミ・コ・トと。　はい受付しました、明日の朝にまた此処に来てください。　講習期間は最高１０日で、参加費用は銀貨５枚になりますが構いませんか？」
「分かりました。　ガンツさんも有難うございました」

「良いって。　うちの若いモンのお詫びといっては失礼だが、気にしないでくれよ」

俺はガンツさんと一緒に戻ろうとしていたのだが、不意に衛士がガンツさんに話しかけて来た。

「それはそうとガンツ殿、土術士隊に戻られないのですか？　隊長も寂しがってますが」

「またその話か。　前にも言ったとおり、俺はもう引退したんだ。今はただの魔道具屋の店主さ」

そういうとガンツさんは寂しげな足取りで商店へと歩いていった。

「あれだけの他に類を見ない実力を兼ね備えているのに、魔道具屋の店主とは・・・・・」

「あの～ガンツさんって術士だったんですか？」

「ん？　まだ居たのか。　すまないが規則だから教えられないよ、悪いな」

「いえ、失礼します」

色々と納得がいかないが、まずは今日の宿を探すため城を離れることにした。

第１２６話　酒場にて（前書き）

漸く、この世界での金銭単位が完成したので早速本文の中で説明する事にしました。

少々説明文みたいな内容になっておりますが、ご了承願います。

第１２６話　酒場にて

ガンツさんの御蔭で『錬金』を習う事が出来るようになった俺は、街の人達に宿屋の場所を聞き、今いる城のちょうど裏手に位置する宿屋に行き着くことができた。

「いらっしゃいませ」

宿屋の扉を開くと、まるで待ち構えていたかのように少女が応対してくれた。

「あの～～御客様？」
「あ、ああゴメン。　１泊幾らなのかな？」
「えっと、少し待っててくださいね」

少女は天井を仰ぐような素振りを見せたあと、宿屋のカウンター内にある扉の中へと急ぎ足で入っていくと、数秒後に少女に連れられて妙齢の女性が姿を現した。

「まぁまぁ御客様ですか。　シャクライ亭へようこそいらっしゃいました」
「ええと１泊幾らなんでしょうか？」
「はい。　１泊あたり青銅貨５枚となっていまして食事は別料金となっていますが宜しいでしょうか？」
「食事は何処ですれば良いんですか？」
「隣で主人が酒場を経営していますので其方でお願いいたします。　それで如何なさいますか？」
「じゃあお願いします」

「分かりました。　ではどれだけの期間を御予定なされていますか？」

妙齢の女性が俺に期間を聞きながら少女に何かの合図を出している。
少女は其れに頷くとカウンター内の戸棚から『2』と書かれた鍵を持ってきた。

「城で講習を予定しているので、少なくても１０日間は滞在すると思いますが構いませんか？」
「其れですと銀貨5枚となりますが、宜しいですか？」

まだ通貨が良く分からないが、手元には金貨もあるので大丈夫だと判断した。

「はい」
「分かりました。　それでは宿代は1日毎に頂きますので、よろしくお願いします」
「はい。鍵をどうぞ」
「ん、有難う」

少女が差し出してきた鍵を受け取ると妙齢女性の案内のもと、階段をあがりドアに大きく『2』と書かれた部屋へと辿りついた。

「此方がお部屋となります」

部屋の扉を開けた女性はハッとなり俺に対して頭を下げている。

「申し遅れました、私はこの宿屋を経営しているロディアと申します。　そしてこっちは娘のシンシアと言います。　ほらご挨拶して」

女性に隠れるようにして立っていた少女が、もじもじしながら俺の前に立ち丁寧に御辞儀しだした。

「私はシンシアと言います。　よろしくお願いします」

そう言って女性と少女は再度大きく御辞儀をして階段を下りていった。

俺は受け取った鍵をポケットに入れ既に鍵を開かれている扉を開き室内に足を踏み入れた。

其処は決して広いとはいえないが、生活に必要な机と2基の椅子、そして堅めのベッド、木の桶が2個置かれているのは洗面所だろうか。　そのうちの1個には並々と水が入っている。

（此処の宿屋が食事なしの素泊まりホテルだと例えるなら宿代は大体4～5000円、青銅貨1枚辺りが1000円相当と考えるのが妥当か。　ロディアさんに10日宿泊する旨を伝えた時、銀貨5枚と言っていた事から銀貨は1万円か）

（魔道具店の方も『金貨では使い辛いだろうから、銀貨10枚と交換するとも仰っていましたし、マスターの言葉をお借りするなら、10まんえん位となりますか）

（そうだな。　纏めると青銅貨が1千円、銀貨が1万円、金貨が10万円って所か。　ってあれ？　まてよ、そう考えると魔道具店で最初の提示額は青銅貨7枚だから日本円にすると僅か7000円って事になるな）

（ガンツさんが来てくれなければ大損をするとこでしたね）

（まったくだ）

この世界での金銭の価値についてルゥと話していると不意に室内に轟音が鳴り響いた。

『グゥ～～～～』
（な、何の音ですか！？）
（すまん、俺の腹の虫だ。　飯でも食いに行くか）
（はぁ。　マスターは本来は食べる必要なんてないのに困ったものですね）
（そうは言うが、人の3大欲求のうち、睡眠欲は我慢出来ても食欲は我慢できなくてな）
（マスターは人では無いでしょうに。ってあれ？　3大欲求って仰っていましたよね、もう一つの欲求はなんですか？）
（・・・・・聞かないでくれ）
（？　分かりました）

顔が赤くなるのをなんとか誤魔化しながら、宿屋から出て隣にあるという酒場へと向かって歩く。
ロディルさんのいうとおり、宿屋の真後ろにひっそりと佇む酒場に足を踏み入れると、酒場という雰囲気に似合わない数人の客が静かに食事を楽しんでいた。

「おっ、らっしゃい。　この街ではあまり見ない顔だね、うちの料理は安くて美味い物ばかりだよ。どれにする？」

そう言われて御品書きを見てみるが『ルンゲ半身焼き』だの『ログドスープ』など聞いたことも無いメニューが書かれていて、何がなんだかサッパリ分からなかった。
言葉の使い方から考えてゲテモノ料理が出てきそうで少し心配になるんだが・・・・・。

「決まったかい？」

如何答えれば良いか迷ったが、隣で俺と同じぐらいの背格好をした

男が食べている肉料理が美味そうに見えたので其れを頼む事にした。

「じゃあ、隣の方が食べているものを４人前でお願いします」

俺がそう言った瞬間、隣のテーブルで必死に肉と格闘している男性も手を止め、むせ返りながら驚愕の表情で此方を見ている。

「ルンゲの半身焼きを４人前!?　大丈夫なのかい？　１人前でも凄い量だよ」

なんだ、此れがルンゲだったのか。
見た目は普通の肉料理ってとこだな。

「ご心配しなくても、お金ならありますから、お願いします」
「そういう問題じゃないんだけど・・・・・・少し時間が掛かるけど良いかい？」
「分かりました」

そして待つこと十数分後。　店員の苦しそうな息づかいとともに山のような料理が運ばれてきた。

「お、お待たせしました！　ご注文のルンゲ半身焼き４人前です」

そう言って店員が２人がかりで持ってきた物はというと、巨大な木の皿に美味そうな匂いと熱々の湯気が立ち込めている、子豚のような動物が２頭盛り付けられている料理だった。

ルンゲの半身焼きが４人前だから、事実上、丸焼きが２頭と言う事になるか。
隣で食べていた男も、離れた席で酒（のような物？）を飲んでいる

女性も手を止め、此方を凝視している。

「やっと来た！　それじゃ頂きます」

そっと手を合わせ、自分の体格よりも一回りほど大きな肉の塊を手掴みで次々と口へと運んでいく。

『バリバリ、ムシャムシャ、ガリガリ、ゴリゴリ、グチャグチャ・・・・・』

瞬く間に肉の塊はただの白い骨と化していき、傍から見れば流れ作業かの如く、料理の山が消えていく。

そして僅か数分後には、皿に山のように積まれていた肉の塊は、綺麗に肉を削ぎとられたかのような骨だけとなり、乱雑に皿に積まれていた。

「ふ～～食った食った。　まだ食べ足りない気もするが、腹八分目にしとくか」

俺がこう言うと、何故か静まり返っていた酒場内は虎の子を突付いたような騒ぎとなった。

「あ、あの量で八分目!?」

「それじゃ腹一杯まで食べると、どれくらいの量になるんだ?」

「いや、それ以前にあれだけの質量が、あの身体の何処に入ったんだ!?」

此方を噂している他の客達は俺に聞えないように小声で話しているようだが、嫌になるほどの高性能な耳を持つ所為で、丸聞えの状態だった。

流石に居心地が悪くなり、足早に勘定をすまし宿屋に帰る事にした。

「すいませ～ん。　御勘定おねがいします」

「は、はい只今。　えっとルンゲの半身焼きが４人前ですので、１人前辺り青銅貨１枚と黄銅貨５枚ですので、しめて青銅貨６枚となります」

黄銅貨？　青銅貨、銀貨、金貨の他にもあるのか。

４人前で青銅貨６枚、大体６０００円と計算して１人前は１５００円だから黄銅貨は１００円ぐらいという事か。

あれだけの量でこの値段なら安いな。　この街に居る間は此処で飯を食うことにしよう。

「じゃあ此れで」

そう言って銀貨を１枚、店主に手渡すと。

「それではお釣りの青銅貨４枚です」

俺が酒場の外に出るまでの間、骨が積み上げられた皿と俺とを交互に見る客があとを絶たなかった。

酒場を出ると何処からとも無く、綺麗な鐘の音が一つ、街中に響き渡っていく。

「この鐘の音はなんだ？　何かの合図なのか？」

余談だが、俺の隣でルンゲの半身焼き１人前を食べていた男は食べ切れなくて店主に怒られているようだった。

第１２６話　酒場にて（後書き）

お気に入り登録件数が４５００件に到達しました！
ありがとうございます。
今まで以上に精一杯頑張りますので、此れからも宜しくお願い致します。

第１２７話　錬金術講習初日

酒場で大満足の夕食を済ました俺は、ミラに聞きたいことがあるので足早に宿屋の部屋へと戻った。

（さてミラ、少し話が違うんじゃないか？）

（申し訳ありません。　現状では言い訳にしかなりませんが、前にこの世界に来た時は沢山の人々が当たり前のように空を飛んでいたんです）

（前に来た時って、何時の事だ？）

（今から約２００年ほど前のことです）

（そうなのか。　ん？　まてよ、前に俺が名前を授けた時に気分が高揚して周り中の精霊に自慢していた時は如何だったんだ？）

（その事は忘れていただけると有難いのですが・・・・・そのときは、この世界に降り立っていないので分からなかったんです）

（どういうことだ？）

（世界は今立っている世界を含む、３つの世界で成り立っています。　一つは此処に主様が居る人間界、そして各種精霊達がいる精霊界、更にその人間界と精霊界の上に神界。　つまり何れ主様が行きつく場所である、神々の世界が存在します。　私達精霊は精霊界を行き来して情報交換をしますので、人間界に降りる必要はないわけです）

（そうだったのか。　すまなかったなミラ）

（いえ、お気になさらずに）

ミラに責めていた事を謝り、翌日から始まる錬金の講習に備え、その日は眠りに付いた。

そして翌朝、部屋で亜空間から取り出した果物で朝食を摂ると、昨日酒場から出たときと同じ様な澄んだ音色の鐘の音が聞えてきたが、

気にしないことにして城の入口へと足を進める。
すると其処には既に沢山の人だかりが出来上がっていた。
俺も皆と同じ様に城門の前で待っていると、重厚そうな扉が開き、城の中から数人の衛士が姿を現した。

「それでは此れより、錬金講習会の受付を開始する！　名を呼ばれた者は番号札を受け取ったあと、案内板に従い城内へと進むように。間違っても不審な行動は取らぬ様にな」

先頭の衛士が言い切った直ぐあとに、別の衛士が次々と名前を読み上げていく。
集まっていた沢山の人々も名前を次々と呼ばれていき、各々（おのおの）が番号札を受け取って城内へと入ってゆく。

「次、番号札５９番ミコト！」

漸く俺が呼ばれたようだ。　俺の周りには既に衛士以外、誰も居ない。

「はい！」
「ふむ、君で最後のようだな。　城門から中に入ると赤い矢印があるから、其れに従って進むように」
「分かりました」

俺は“５９”と書かれた番号札を受け取ると言われたとおりに城門から中に入り、赤い矢印に従って会場を目指した。
そして順路に従って歩くこと数分後、漸く会場に入る事が出来た。

其処は正面に巨大な黒板があり、右胸に何か黄色のマークが入った鎧を着込む衛士が２人立っていた。

「番号札を」

無口な衛士に受付で渡された番号札を見せると、軽く頷いたあと席に着くように促された。

「それでは、これより錬金講習会を開始する。　まず始めに皆も知っているとは思うが『錬金』とは土術士であることと、潜在魔力がある程度なければ発動すらしない」

教壇に手を置いた衛士が話をしだすと俺の横に座っている男性が『ビクッ』と身体を震わせていた。

「そのことを踏まえ、これからテストを行なう。　諸君等の机には土術の魔力を検知する魔道具を埋め込んである。　それでは皆、机に両掌を広げて魔力を解放しろ」

衛士が『解放』という言葉を発した瞬間、其々の机で次々と炎の陽炎に似た輝きが放たれていく。

俺もこうしてはいられないと見よう見まねで机に向かって魔力を解放したところ、５m以上の高さがある天井近くまで濃赤色の光が立ちのぼり、次の瞬間には目の前の机に『合格』の文字が浮き上がった。

「ほう？　今回は有能な者が混ざっているようだな」

衛士は明らかに俺の方を見て、言葉を洩らしながら口元を緩ませると会場内を見回した。

が、もう1人部屋の隅に座っている衛士は明らかに此方の方を凝視

して目を見開いている様だった。

（マスター、どうやらこの机は一定量の土属性の魔力を検知すると文字が浮き上がる仕組みになっているようですね）

（緊張した所為か、思いっきり魔力を放出してしまったからな）

（少しは手加減をしないと問題になるかもしれませんよ？）

ルゥと話をしながら会場を見回してみるが、半分以上が未だ文字が出ていないようだ。

俺の隣の席で身体を震わせた男性は顔を真っ赤にして頑張っているものの、何の光も出てはいなかった。

それから約1時間が経過した頃、教壇に腕を組んで立っていた衛士が終了とばかりに右腕を上に掲げた。

「それまで！」

衛士の言葉で全ての光の柱は無くなり、会場には悔しさのあまり周囲に当り散らす者、机を叩きつける者、試験官に『机に不備があったのではないか！？』と問い詰める者などがいた。

「机に合格の文字が浮き出た物は座れ！　表示が出なかった者は錬金の資格を持たなかったという事だ。速やかに退場せよ」

その言葉で次々と人々は会場を退出していくが、其の中に1人だけ衛士に食って掛かっている青年がいた。

「ふざけるな！納得できるわけがないだろう」

「お前は・・・・・27番。　ああ、あいつの息子か」

「父さんを知ってるなら話が早い、僕を今すぐ合格にしろ！」

「先程も言った筈だが？　お前は潜在魔力が足りなかった、だから

不合格なんだ。　そうそう一応言っておくが、魔道具で魔力を増大させたところで無駄だからな？」

「くそ～～～」

青年は衛士の言った魔道具に心当たりがあるのか顔を真っ赤にして机を足蹴にしながら会場を出て行った。

「全く、アイツが親にして、息子もアレか頭が痛くなるな」

「おい、早く進めないと」

「ああ、分かってるよ。　今回は５９人中、合格者は２人か・・・・・・」

見ると広い会場の中には右端に俺と、左端に息も絶え絶えな女性が蹲っているだけだった。

「それじゃあ、今日は此れまでだ！　君達２人は明日の朝、改めて此処に来るように。　では解散」

俺は衛士の言葉に従って、会場を後にしようと入口付近に足を進めたが、もう１人の合格者である女性は蹲ったまま立ち上がれずに居た。

「あんた大丈夫か？」

「だ、だいじょうぶ、かな？」

「全然大丈夫そうに見えないんだが、よければ家まで送ろうか？」

「ありがと優しいのね。　それとも下心ありなのかな？」

「おいおい・・・・・」

「冗談よ、私はルナ。貴方は？」

「ああ、俺はミコトだ。宜しく」

こうして唯一のクラスメイトであるルナと握手した俺は商店街の裏

にあるというルナの家まで彼女を送って行き、彼女の両親から感謝の言葉を貰ってから宿屋へと向かった。

この時の俺は『錬金』の事を考えるあまり、重大な事を見逃していた城内で講習を受けると言う事は空を飛んでいるところを見られた、『彼女（ナジェリア）』と顔を合わす確率が高いと言う事を・・・・・・。

一方、ミコトがクラスメイトとなるルナを家まで送っていた頃、城では・・・・・・

「お疲れ様です」
「ナジェリア殿か、このような時間に如何したんだ？」
「グレイアス殿が明日から担当する、錬金講座の審査で何か騒ぎがあったと、お聞きした物ですから」
「ああ、あの事か流石に耳が早いな。　実はな今回も参加していたマグドルの息子が『不合格を取り消せ！』と駄々をこねおったものでな」
「またですか。　これで何回目のこと何ですか？」
「これで通算１０回目だな。　碌な魔力修行もせずに魔道具という、小手先だけで受かろうとする根性が気に入らん！　親も親なら子も子だ。　アイツも散々文句を言っていたからな」
「その言葉を聞くのも此れで６回目ですね。　おや？　其れはなんですか？」

ナジェリアはグレイアスの口から出た、溜息交じりの言葉を聞き、苦笑していたがグレイアスが手に持っている何かに正体の分からぬ違和感を感じていた。

「此れか？　今日の一次審査で５９人中、たった２人に絞られた合

格者のリストだ」
「ちょっと拝見しても宜しいですか？」
「あ、ああ構わないぞ。　機密性のあるものでも無いしな」
「それでは失礼して」

ナジェリアは用紙を受け取り、合格者の名前や性別、魔力量などが記されている用紙を舐めるように読み出した。
「へぇ、合格者に女性が含まれていることは珍しいですね。　魔力量はDランクですか、ギリギリといったところですね。　おや？　もう1人の男性は・・・・・珍しい事もあるものだ」
「どうかしたか？　知り合いなのか？」
「そういう訳では無いのですが、城壁で警備していた時に遭遇した冒険者と同じ名前なんですよ」
「もしかすると、同一人物かもしれないね」
「いえ、私が出会った人物は風魔法を使用していましたし、2属性以上の魔法を使える者は限られていますからね。　それにしても魔力量がAランクですか！？　凄い逸材ですね」
「そうだな、見ている俺も吃驚したよ。　一瞬で天井近くまで魔光の輝きが立ち上っていたからな」
「それは凄い！　土術士部隊にまた1人、有能な術士が加わるのですね。　羨ましい限りです」
「そればっかりは本人が決める事だな。　無理強いするわけにもいかないし」
「そうですね。　おっと、もうこのような時間ですか？　お先に失礼致します」
「ああ、お疲れさん」

ナジェリアが踵をかえして立ち去った後も、グレイアスはミコトのことが記された頁を見て眉間に皺を寄せていた。

「ナジェリアに、ああは言ったが、このミコトという男、実際には魔力量は『測定不能』だったんだよな。　取り敢えずの処置として最高位である、『A』を書き込んだが、実際にはSランクだったかもしれんな。　あいつは一体何者なんだ？」

第１２７話　錬金術講習初日（後書き）

別の人間の視点で少し描いて見ました。

第１２８話　初めての錬金

翌朝、目が醒めた俺は亜空間倉庫に保存してある果物で軽く朝食を済ませると、錬金講習を楽しみに、昨日訪れた城へと足を勧めると其処にはクラスメイトになる女性が既に待っていた。

「おはよう。　早いね」
「あ、おはようございます。　昨日はありがとうございました！」
「身体は大丈夫だった？」
「疲れのためか、グッスリと休んだら回復しました♪」

他愛も無い話を延々と繰り返していると時間になったのか、重厚な扉の横にある人一人通れる小さな扉がゆっくりと開かれた。

「ん？　君達は？　城に何か用かい」

扉が開ききると同時に、衛士が欠伸を噛み殺しながら覚束ない足取りで姿を現し、此方に問いかけてきた。

「今日から錬金講習で此処に通う事となったミコトといいます」
「私はルナです。　よろしくお願いします」
「ああ、君達がグレイアス様が仰られていた・・・・・って幾らなんでも早く無いかい？　講習開始時間は鐘が鳴ったあとだよ？」

『鐘』とは何の事を言っているのだろう？　と思っていると、俺の横に居たルナが逸早く答えた。

「すいません。　居ても立っても居られずに早く来てしまいました」

ルナの言葉を笑いながら聞いていた衛士が身だしなみを整えるのと、ほぼ同時に鐘の音が響き渡った。

「此れより開門する！」

衛士の言葉とともに分厚い鉄の扉が鈍い音を放ちながらゆっくりと左右に開いてゆく。

（マスター、どうやら昨夜に聞いた鐘の音と先程聞えた鐘の音は朝の開門と夜の閉門を知らせるための物だったようですね）

（なるほど、時計代わりという訳か）

「ミコトさん？　難しい顔をして、どうかなさったんですか？」

「い、いや、これからの授業について行けるかどうか心配だったんだよ」

言い訳としては少し無理矢理だったかな？　と思っていると・・・・・。

「心配なさらなくても、ミコトさんほどの魔力量があれば余裕ですよ。　寧ろ私の方が心配です」

昨日のことを思い浮かべているのか、先程の元気な表情とは打って変わってルナは落ち込んだ表情を醸し出していた。

「俺が言う台詞じゃないけど、物事を最初から諦めてたら何も出来ないよ。　頑張ればきっと出来るさ」

「その通りだ！」

俺とルナとの会話に割り込むようにして、昨日の会場で腕を組んで立っていた衛士が城門から姿を現した。

「何事を為すにしても最初から諦めていては出来る事も出来なくなる！　最後の一瞬まで諦める事が無ければ、きっと達成できる。自分を信じろ！」

行き成り登場した、茶髪を短めに整えた衛士に俺は目が点となり、ルナは緊張した表情となり、先程まで会話していた眠たそうな衛士は直立不動で敬礼をしていた。

「あの貴方は？」
「え！？　ミコトさん、この方を知らないんですか？」
「あ、ああ、別の街から旅をして来たからね。　そんなに有名な人なのかい？」
「あのですね～～～」

ルナは額に手を当てて溜息をついたあと、怒ったような表情で俺に説明しようとすると。

「はっはっは！　国外の者なら仕方ない。　俺は土術士隊隊長グレイアスだ、そして今日から君達2人に錬金を教える講師でもある。宜しくな」
「は、はい！　よろしくお願いします」

ルナは背筋をピンッと立てて、何回も何回も御辞儀を繰り返している。

（まるで街でアイドルにでも遭遇した一ファンのようだな）
「ミ・コ・ト・さ・ん？　何か失礼な事を考えませんでしたか？」
「・・・・・・気のせいだよ」
「間が気になりますが、まぁいいです」

「クックック、賑やかな奴だな。　こうしていても始まらん、講習会場に案内する。着いてきてくれ」
「は、はい！」
「分かりました」

それからグレイアス案内の元、城内を歩くこと数分後、会議場のような場所に到着した。

「さて、改めて自己紹介と行こうか。　俺の名はグライアス、其方のお嬢さんが先程言っていた通り、土術士隊の隊長を務めている。　そして今日から１０日間錬金の講師を務める。よろしく頼む」
「此方こそよろしくお願いします」

ルナは興奮した表情で目をキラキラさせてグライアスを見つめている。

「それでは此れからの１０日間の事を説明する。　君達には此れから６日間の講習の後、ある試験を合格した者が４日間の鉱山での採掘実習、及び錬金実習を執り行ってもらう。　実習の内容は不正予防のため、今はまだ言えないが」
「質問しても良いですか？」
「えっと、ミコトだったな。　なんだ？」
「その鉱山についてですが、魔物などの心配はどうなるのでしょうか？　また、誰か護衛をつけても良いのでしょうか？」
「いい質問だ。　実習本番を迎える日にも言うつもりだが、鉱山内には魔物の襲撃及び鉱山の崩落などの危険性が伴う」

『魔物』という単語を耳にした瞬間、ルナの顔が緊張もしくは恐怖のため歪む。

「当日には職人ギルドで入坑許可を得ると同時に、必要であれば冒険者ギルドで護衛を雇っても構わない。　ただし、護衛費用については当人の負担とする」
「分かりました」
「質問は以上か？　他になければ第1日目の授業を開始する」
「「はい」」
「まず始めに錬金とは如何いうものか見本を見せておく」

そう言ってグライアスが部屋の片隅に置いてあった木箱から取り出したのは、何の変哲もない岩の塊のような物だった。
所々に黒い何かが点々と沁みのように岩に付着しているが。

「此れは街の近くの鉱山で掘られた鉄鉱石だ。　今はまだこのような状態なので、どれだけの鉱物がこの岩の中に含まれているか分からないが、これに錬金をすることによって」

グレイアスがそう口にした後、両手の掌（てのひら）から土気色の光が岩全体を包み込んだと思った次の瞬間、左手に今にも崩れそうな石の塊が、右手には黒光りする金属の塊が載せられていた。
ルナも俺も初めて目の前で見せられる錬金術に興奮を抑え切れなかった。

「これが『錬金』だ」

グレイアスが左手に持つ岩の塊を教壇の上に置いた途端、崩れるようにサラサラと砂が隙間から零れ落ちてゆく。

「最初から此処まで出来るとは思わないで欲しい。　まぁ、此れを教えていくんだがな」

こうして１０日間の錬金講座の最初の授業が始まった。

第１２９話　漫画のような魔道具（前書き）

総合ＰＶアクセス数が遂に１０００万アクセスに到達しました！

沢山の方々に読んでくださった事を大変嬉しく思います。

これからも『異世界を渡りし者』を宜しくお願い致します。

第１２９話　漫画のような魔道具

錬金術を俺達の目の前で実践して見せた、グレイアスの言葉で教室の・・・・・・いやルナの緊張は解かれた。

「それでは最初は錬金に必要な魔力を掌の上で一定時間、保ち続けるところから始めてみようか」

ルナは魔力の維持が苦手なのか見るからに顔の表情がグレイアスと出会った時から一転した。

「そんな嫌そうな顔をしても、此ればかりは避けて通れないぞ？ほらほら、机の上に掌を上にして土術魔力を籠めてみろ」

俺も攻撃時以外に魔法を使用するのは初めてだったが、言われたとおりに魔力を掌に集めると。

「待て待て待て！　ミコトの魔力は大きすぎるな、せめて１０分の１くらいまで押さえてくれ。そのままでは城全体が錬金されてしまうぞ？」

「ミコトさん凄い」

俺も心なしか緊張していたのか、思っていたよりも魔力を出しすぎてしまったようだ

（マスター？　無意識かと思いますが、クラス４０近くの魔力が漏れ出していましたよ？）

（クラス４０！？　いつの間にそんな事に）

（気の緩みがそのまま、魔力の栓が緩む結果になってしまったんじゃないでしょうか）

気を取り直してクラス5まで魔力を抑え、掌から放出させる事にした。

「うん。　まぁ、其れぐらいの魔力で妥当かな？」

見ると、ルナも額から汗を噴出しながらも掌から魔力を放出している。

「よしよし、そのままで最低でも3分は維持すること。　慣れれば気にならなくなるからな」

そしてそのまま1分、2分と経過して行き、2分40秒といったところでルナの魔力がユラユラと風で火が揺れるかのように不安定になりだした。

「ルナ、残り20秒だ、頑張れ！」

「そ、そうは言っても・・・・・も、もう限界」

「残り10秒だ。　5、4、3、2、1、ゼ」

グライアスが、0のゼの言葉を口にした瞬間、ルナの掌から魔力の波動は消え、ルナ本人は白目を向いて机に突っ伏した状態となった。

俺は余裕でクリアしていたが・・・・・。

「惜しいな、もう少しだったんだが」

「ルナ、大丈夫か？」

「な、なんとか。　もう少しだったんだけどな」

「一応念のために言っておくと、予選でも何人か魔道具を使用していたようだが、道具で魔力を底上げしたとしても潜在魔力には何の効果もないからな？　魔力の放出が出来ない限り、錬金を習得する

事は不可能だと思ってくれ。　それでは今日の授業は此れまで！また明日、来てくれ」

講師のグライアスは、そう言って教室の扉に手を掛けたが、何かを忘れたのかポケットに手を突っ込みながら戻ってきた。

「いかんいかん、忘れていた。　次からは此れを門番に見せると良い」

そう言って木製の札のような物を未だ机に突っ伏しているルナの鼻先に置き、俺にも手渡してきた。

「此れはいわば俺の講習を受けているという証のような物だ。　朝の開門の時に衛士に見せれば、この教室へと案内してくれる。　一応言っておくが怪しい行動はしないようにな？」

『それじゃ！』と今度こそ手を振りながら会場を後にしていくグライアスだった。

「ルナ大丈夫か？　家まで手を貸そうか？」
「いや大丈夫。　また面倒な事になるし遠慮しておくわ」
「面倒な事？」
「うん、昨日家まで送ってもらったでしょ？　あの時に父さんから『一緒に居た男は誰だ！？』とか母さんからも『孫の誕生は何時？』とか五月蠅かったんだから」

まぁ女の子の親からしてみれば、問題かもしれないが大袈裟な。

「幾ら『違う！そんなんじゃない』と言っても聞いてくれないし、やっと誤解を取り除けたのは深夜だったのよ！？　其れなのに2日

続けて送ってもらったら今度こそ本気にしちゃうわ」
「それはまぁ・・・・・御愁傷様です」
「言葉の意味は分からないけど、妙に悔しい気分になるのは何故？」
その後、教室で談話しルナの体力（魔力）が戻ったところで解散となった。
俺はというと宿屋には戻らずに、ガンツさんにお礼を言うために魔道具屋へと向かった。

魔道具屋に足を踏み入れると、丁度お客との交渉中だったようで店の奥からガンツさんの怒声と客であろう女性の声が響きわたってきた。

「アンタもわからねえな。　この魔道具は既に使用されたモンだ！　買い取る事はできねえよ」
「其処を何とかできませんか？　纏まったお金が必要なんです」
「出来ねえモンは出来ないんだよ！」
「・・・・・分かりました。　他の店に行ってみます」
「何処でも同じ結果だと思うぜ？」

そう言って女性は両腕で胸の前に袋を抱き込むようにしてトボトボと歩いていく。
元気なく店から遠ざかっていく女性を溜息をつきながら見ていたガンツさんは店先で女性の後姿を見ている俺の姿に気がついた。

「おぅ、あんときの坊主じゃねえか。今日はどうした？」
「坊主って・・・・・無事に錬金講習を受けれるようになったので、御礼を言いに伺ったのですが、何か取り込み中のようだったので」
「ああ、礼なんて言わないでくれ！　ケツがむず痒くなっちまう」

先程の事が気になったので不躾かと思ったが聞いてみる事にした。

「先程の女性は？」

「『ある魔道具を買い取ってくれ』って言ってきたんだが、坊主が持ってきた普通の魔力増強や属性防御の魔道具ならまだしも、あれは特別でな。　一度使った物は買い取れねえんだよ」

「どういう物なんですか？」

俺がそう聞くとガンツさんは『ちょっと待ってくれ』と言って棚の中に手を突っ込んでいる。

「え～～っと、確かこの辺にあった筈だが・・・・・・っとあったあった。　此れが新品の状態だ」

ガンツさんが手に持っているのは何の変哲もない道具袋とチェスで言う、兵士（ポーン）の駒を少し大きくした、先端の丸い部分が青く輝いている魔道具だった。

「これは『魔袋』と呼ばれる高価な魔道具でな。　理屈は俺にも分からないんだが、この道具を袋から取り出して倉庫などに置いておくと、この道具袋で生き物以外ならどんな物でも出し入れが可能になるという代物だ」

ガンツさんは駒にかけられている、透明な袋を破かないように注意しながら俺に説明してくる。

「便利な物ですね。　どう使うんですか？」

「この道具を袋から取り出し、その場所に置いておくだけで良い。　丸１日が経過すれば先端部が青から赤に色が変わるから、そうす

れば設置完了だ」

そういえば女性が持っていたのは先端部が赤かったような。

「さっき中古は買い取れないと言ったのは、一度でも使用してしまうと自動で道具が認識した場所に送られてしまうからなんだ」

それでか、自分の道具やお金が他人の物になってしまうものな。

「この魔道具は幾らなんですか？」

「買うなら金貨５枚だが、先程も言ったが此れは高価な魔道具な上に言うなれば、使い捨ての物で要らなくなったからといって売ることも出来ないんだが、其れでも買うか？」

金貨５枚・・・・・日本円にして５０万円か。

少し高いけど、人前で亜空間倉庫を使えないときに役立つな。

かなり迷ったが便利な物ということで首を縦に振り、買うことを肯定した。

「商談成立だ！　もう後戻りは出来ねえぜ」

俺は腰の道具袋から金貨を５枚取り出すとガンツさんに手渡し、貴重な魔道具を手に入れた。

「丸１日経過するまでは使えねえから、其れだけは注意しろよ！」

早速、宿屋の部屋で試す為に急いで帰ることにした。

途中、急ぎすぎて足を縺(もつ)れさせながら・・・・・。

第１３０話　同じ名の術士

ガンツさんの店で高価で貴重な魔道具を手に入れた俺は、何処にも寄らずに宿屋へと帰った。
部屋に入ると早速、亜空間倉庫へと繋がる扉を開くと魔道具に被せられている袋をめくりガンツさんに教えられた通りに倉庫の中央部分にあたる場所に設置した。
すると徐々に魔道具の青く光っている場所が下のほうから徐々にゆっくりとしたスピードで赤く染まっていく。

「こうしておけば、２４時間後には使用することが出来るという訳か。楽しみだな」
（マスター、子供のような顔をしてますよ？）
「わかるか？　凄い楽しみなんだよ、早く明日の夜にならないかな～～～」
（『子供のような』ではなく、まるっきり子供ですね）

その後は夢中になり、気が付けば朝を迎えていて、魔道具は略(ほぼ)中間まで赤に染め上がっていた。

「おや？　もう朝か。興奮し過ぎたな」

魔道具に夢中になって一睡もしなかった俺は朝の鐘の音で完全に覚醒し、講習に遅れまいと朝食も食べずに城へと急いだ。

「あっミコトさん、おはようございます」

其処には先に来ていたルナが居り、門が完全に開くのを今か今かと待ちわびていた。

「なんだか眠たそうですね。　何かあったんですか？」
「いや、ちょっとね」
「もしかして早速、錬金を試してみたとか？」
「分かる？」

実際にはそのような事はないが、他に理由が思いつかないため、そういうことにしておいた。

「ルナも錬金をしてみたのか？」
「ううん、私は魔力が足りなかったから、寝る直前まで魔力を放出し続けていたの。　噂では限りなく、０に近くなるまで魔力を消費すれば潜在魔力量が増えると聞いたことがあるから」

ルナとそういう話をしていると昨日と同じ衛士が城門から姿を現し、『開門！』と声を発した。

「それじゃあ、今日も頑張ろうか」
「うん♪」

そして俺達は昨日、グレイアスから手渡された通行証を衛士に見せ、教室へと足を進めた。
教室に到着して数分後、後頭部の髪が跳ね上がっているグレイアスが飛び込んできた。

「おはよう！　２人とも、早いな・・・・・・ってミコト？　俺の方を見て何を笑っているんだ？」
「何って、後頭部に寝癖が付いていますよ？」
「えっ！？」

グレイアスは俺に言われて初めて、後頭部に手を遣り盛大に刎ねている後ろ髪に気づいたようだ。
ルナも声には出していないが両手で口を押さえ、今にも大爆笑するような表情を見せている。

「くそっ！　あいつ等、知ってて黙ってたな？」

その後、乱暴に手櫛で後頭部を整えたグレイアスは、何事も無かったかのように授業を開始した。

今日の講習は土に含まれる様々な成分や、昨日と同じ魔力調整で終了した。
ルナも就寝前の特訓の成果か、ギリギリだったが3分間の魔力放出を維持できたようだ。

「できた！！」
「ルナも魔力放出が出来るようになったみたいだし、明日からは愈々実際に錬金をしてみようか」
「本当ですか！？」
「嘘を言って如何する？　くれぐれも明日、魔力切れを起こさないように休養をとっておくこと！」
「「ありがとうございました！」」

ルナも昨日のように机に突っ伏してしまうことはなく、少しばかり余裕が出てきたようだった。
グレイアスもルナの様子を見て軽く頷いた後、教室を出ようと扉に手を掛けようとした瞬間、誰も触っても居ないのに扉が開けられた。

「土術士隊長グレイアス様、炎術士隊隊長ファルラン様がお呼びです。　至急、円卓の間へお越し下さい」

扉を開けて入ってきたのは何時か城壁の上で、空を飛ぶ俺に話しかけて来たナジェリアだった。
ともなれば俺が今、此処に居るという事実を知られることは非常に不味い。
俺は咄嗟に机の下に隠れるような素振りをしナジェリアに見つからないようにしたのだが

「ん？　如何したんだ。腹でも痛いのか？」
「ミコトさん、大丈夫ですか？」

空気を読まない2人によって俺の目論見は完全に無駄となった。

「ミコト？　ああ、噂にあった高魔力の持ち主ですか。　どんな方なのか興味はありますが、今はファルラン隊長の用件が先です。グレイアス隊長、お急ぎ下さい」
「あ、ああ、分かった」

そしてナジェリアとグレイアス、2人の足音が教室から遠ざかっていく。

「ミコトさん、ナジェリアさんとお知り合いなんですか？」
「ちょっとした理由があってね。　恥ずかしくて顔を合わすわけには行かないんだよ」

実際には恥ずかしいどころではない、重大な理由があるんだが。
ルナは俺の言っている事が完全に信じ込んでいたようで・・・・・・。

「その気持ち、少し分かります。　普段見慣れた相手でも、街中で

バッタリ顔を合わせてしまうと恥ずかしいですものね」

少し誤解があるようだが、この場を凌げたなら何も言う事はないな。

（危なかったですね。　空を飛んでいたことから、ナジェリアさんはマスターが間違いなく風術士だと思っていらっしゃるでしょうから、この錬金講習会にいると不味いですよね）

（ミラに聞いた話では、この世界は多属性の魔法の使い手は少ないそうだからな。　城内で見つかったら言い訳出来ないな）

「ミコトさん、そろそろ帰りませんか？　用も無いのに城に居ると誤解を招くかもしれませんから」

「そうだね。　帰ろうか」

その後、微妙に勘違いしたルナを味方につけて、城内で見つからずに外に出ることが出来た。

「グレイアス様が仰られたとおり、明日から実際に錬金が出来るのですね。　今から明日になるのが楽しみです！」

「ははは っ！　緊張しすぎて寝坊しないようにね。　あと寝癖も」

「分かってます。　ミコトさんこそ、キチンと睡眠をとらないと身体に毒ですよ？」

そして城門でルナと分かれた俺は夕飯を食べるべく酒場へと足を進めた。

その頃、ナジェリアに急に呼ばれたグレイアスはというと。

「全く、ファルラン殿の心配性もに困ったものだ。　数日後の演習の再確認とは」

「そうですね。　我等、炎術士の隊長ながら、何をするにしても神経質で困ってしまいます」
「ナジェリア殿もそう思うか？」
「本人の前では絶対に言えませんがね」
「全くだ。　それはそうと、ナジェリア殿はミコトと顔見知りなのか？」
「どうしてそのような事をお聞きになるのですか？　同名の風術士を知っているだけで、知り合いというほどではありませんが」
「いや、錬金講習で勉強しているミコトが、いつになく慌てているような雰囲気を感じたものだからね」
「思い過ごしだと思いますよ？　複数の属性を持つ魔術師など、おいそれと居ないのですから。　もし仮に存在するとすれば・・・・・」
「ナジェリア殿？　難しい顔をしてどうかしたか？」
「い、いえ何でもありません。失礼します」
ナジェリアは早足で、其の場から逃げるようにして来た道を戻っていった。

「如何したんだ？　何か悪いものでも食べたんだろうか、心配だな」
人のことを言えないグライアスであった。

第１３１話　寝不足での錬金

何時もの様に酒場で大量の肉を平らげたミコトは、膨らんだ御腹を擦りながら部屋へと戻ってきた。

「そろそろ、魔道具が亜空間に落ち着いたかな？」

昨日、ガンツさんの店から購入した空間魔道具を設置してから２４時間以上が経過していた。
喜び勇んで周囲に人の気配が無い事を確認すると亜空間扉を出現させ、扉を開く。

すると亜空間倉庫の略中央に置かれている、チェスの駒のような物体は完全に先端まで赤く染まっている。

「これで、この道具袋を介して道具の出し入れが可能になるわけだな？　では早速」

俺は亜空間倉庫内に置かれている複数の果物や、とても袋の中に入らないであろう長剣を手に取ると、その場で袋を手に取って次々と入れようとしたが何故か魔道具は反応しなかった。

「何故だ？　魔道具が赤く染まってるという事は適応したという事だろ？」
（マスター、もしかすると同じ空間に居るからではないでしょうか？　亜空間倉庫から外に出て試してみては？）
「ルゥの言う事も最もだな。目の前で見られないことは残念だけど」

改めて魔道具を試してみるべく、亜空間から外に出て扉を閉めたあと再度、魔道具を使用すると・・・・・先程まで機能しなかった魔道具に次々と果物を入れることが出来た。
恐る恐る剣を入れてみると、深さが２０ｃｍ程しかない道具袋に１ｍ以上もある長剣が既に柄まで入ってしまっていた。

再度、亜空間倉庫を開き、どのように果物や長剣が置かれているか確認したところ、果物は他の果物類と一緒に、長剣は取り出した場所に寸分違わぬ状態で置かれていた。

「これは中央に置かれている魔道具が道具や武器防具、食料などを判別して置き場所を決めているのか？」

もう一つの事を確かめるべく扉を閉め、魔道具に手を入れて果物を取り出そうと頭で思い浮かべると手に何かを掴んでいる感触が伝わってきた。
もしや？　と思い、手を道具袋から引き抜くと其処には紛れも無く果物が握られていた。

「そ、それじゃあ、次は長剣・・・・・・」

そう考えながら手を道具袋に入れると先程の果物とは違う、ズッシリとした感触が手に伝わってくる。
ゆっくりと手を引き抜くと其処には先程の長剣が。

「本当にガンツさんじゃないけど、どういう原理になっているんだか？」

こうして亜空間倉庫と繋がる、四次元道具袋を手に入れた俺は再び興奮して、今夜も眠れはしなかった。

2日連続で眠らなかった俺は今日も一睡もせずに、錬金講習のため城へと向かう。
今日はルナも待ちに待った、実際に錬金を試す日だ。
普通の人間なら睡眠不足でヤバイ展開なんだろうが、俺の場合は特に問題はない・・・・・と思う。

「ミコトさん、おはようございます。　また徹夜したんですか？」
「ああ、おはようルナ。　錬金が出来ると思ったら興奮して眠れなくてね。フワァァァーーー！」
「大きな欠伸ですねぇ～～ミコトさん、前から言おうと思ってたんですが、まるで子供みたいですよ？」
「大丈夫大丈夫。　今日さえ乗り切れば、思いっきり眠るつもりだから・・・・・ＺＺＺｚｚｚ」
「って此処で寝ないで下さいよ！」

その後、立ったまま寝るという器用な真似をした俺はルナに叩き起こされ、教室へと向かった。

「ようし！　今日は鉱石を使って錬金を実際に行なうぞ。ってミコトはなんだか眠たそうだな、大丈夫か？」

グライアスは初日に錬金して見せた鉱石を木箱に大量に積んで教室の隅に置き、此方を心配そうに見つめている。

「らいりょうぶれす」
「何処をどう贔屓目で見ても、全然大丈夫そうには見えないんだが？」
「なんでも、今日の授業が楽しみで寝れなかったそうですよ」
「子供かっ！？」

ルナとグライアスと両方から子ども扱いされた俺は、最後（？）の力を振り絞り魔力を整えると一瞬で鉱石を錬金して見せた。
筈だったのだが、鉱石を完全に砂鉄のような粉末状にしてしまった。

「まだ寝ぼけ眼（まなこ）のようだな。　シャキっとしろ、シャキっと！」
（マスター、本当に大丈夫ですか？）
（今度こそ・・・・・フワァァァ～～）

俺は欠伸を手で押さえながら、粉末状になってしまった鉱石に手を翳すが。

（待ってください！　魔力が多すぎます。クラス5まで押さえてください）

ルゥの声とグレイアスからの容赦の無い拳骨で完全に覚醒した俺は、砂鉄を錬金することに成功した。

「ふむ合格。　まさか、これほどアッサリと成功させてしまうとはな」
「ミコトさん、凄いです！」
「ルナは本番に弱い方か？　魔力の放出がブレているぞ？」
「すいません、落ち着こうとは思っているんですが」

それから2時間後、授業時間タイムリミット間近になって漸く、ルナも錬金を成功させた。
が、魔力切れを起こしたのか、初日のように机に突っ伏していた。

「ルナもなんとか合格だな。　明日からは本格的に錬金の数をこなして貰うから、そのつもりで居ろよ？　ミコトは睡眠を、ルナは精

神統一でもして魔力の回復をするように！　今日は以上だ、解散」
「ギリギリでしたが、合格しました」
「・・・・・ＺＺＺｚｚｚｚｚ」
「ミコト、寝るなら帰ってからにしろ！」

その後、宿屋に戻った記憶が無いまま、ベッドで眼を醒ました。

第１３２話　錬金術仮免許試験

「知らない・・・・・・いや知ってる天井か」
（マスター、朝です。　起きて下さい）
（ん？　ルゥか。おはよう）
（漸く、お目覚めですか。　早く行かないと遅刻になってしまいますよ？）
（なぁ、ルゥ）
（なんでしょう？）
（俺は昨日、どうやって宿屋に帰ってきたんだ？）
（憶えてないんですか？　ルナさんが肩を貸してくれて、此処まで連れてきてくれたんですよ？）
（！　そうだったのか。迷惑をかけたみたいだな）
（それはそうと、早く行かないと本当に遅刻になりますよ？　既に朝を知らせる鐘は鳴り終わりましたから）

ルゥの言葉を聞いた俺は直ぐに着替えると、道具袋を通じて手元に取り寄せた果物を齧りつつ城へと急いだ。
城へと到着すると、其処には既にルナが笑いながら待っていた。

「ねぼすけ君、目ぇ醒めた？」
「昨日は迷惑をかけて済まなかった。　感謝している」

俺は頭を下げながら、ルナを拝むように両手を合わせて感謝すると。

「ちょっと、やめてよ恥ずかしいな。　私も初日にミコトさんに借りがあるからね、貸し借り無しってことで宜しく！」
「ははは！　そうだな」

俺とルナはその後、此方を見て口元に笑みを浮かべていた衛士に通行証を見せ、教室へと入った。
その数分後にグレイアスは朝の挨拶をしながら、鉱石が木箱一杯に詰め込まれた物を抱きかかえるようにして教壇の上に乗せた。

「おはよう！　ミコトは今日は絶好調のようだな。ルナは魔力を回復したか？」
「「大丈夫です！　問題ありません」」
「おお、元気良いな」

グレイアスは此方を見て満足そうに頷くと俺とルナの机の前に１０個ずつ、鉱石を積みあげた。

「早速だが、昨日言ったとおり錬金の量、重さをこなして貰う。うまく行けば、１日早いが、鉱山での実習訓練に移行してもらう事になる。　出来なかった場合は見送りだ」

俺は魔力が規格外だからなんとかなると思うが、問題はルナだ。
昨日は時間ギリギリで１個だけ練成していた。
制限時間はどれ程か知らないが、成功する確率は低いだろう・・・・・。

「ルナ大丈夫だ。　落ち着いていけ」
「うん。　ありがとう」
「それでは用意は良いな？　制限時間はこれより２時間！　では始め」

グレイアスの開始の合図とともに、俺とルナは目の前に積まれた鉱石を手に取り、錬金を施していく。

昨日の感覚を思い出し、鉱石を両手で挟み込むと土属性の魔力を放出し、ただの石と鉄とに区分していく。
俺のほうは見る間に1個、また1個と成功させていくが、ルナの方はやっと最初の1個が錬金し終わったようだ。
この時点で既に開始してから1時間弱が経過している。

「ふむ、ミコトの方は流石というべきか魔力の使い方が上手だな。対してルナの方は苦戦しているようだが、最初の方に比べて格段と上達しているようだ」

俺は次々と目の前に置かれている鉱石を錬金していった結果、制限時間を1時間残して全ての鉱石を錬金し終えた。

「ミコトは文句なしの合格だな。　まさか1時間も残して全て錬金してしまうとはな」

ルナの方を見てみると脂汗を流しながら、1個1個着実に錬金をしている。

「ルナ頑張れ！」

ルナは疲労のためかウインクで俺の声援に答えると、残り僅かな魔力を搾り出しながら錬金をしていく。
だが、そうしている間にも刻一刻と時間は無くなっていく。

そしてルナが6個目を錬金し終わり、7個目に手を掛けたところでタイムオーバーとなった。

「ふむ、俺が持ってきた鉱石は全部が全部、形、大きさ、量ともに

全く同じ様に俺が錬金術で作りあげた鉱石だ。　ミコトとルナには１０個ずつの鉱石を用意していた。　１０個全てを錬金したミコトは文句なしの合格。　片やルナは６個錬金だが、そのうちの２個は完全に錬金しきれてはいないため、差し引いて４個だな。　初日に比べて、その頑張りは評価してやりたいところだが、これも規則だ悪いな」

ルナは眼が虚ろな状態で辛うじて肘を立てて耐えていたが、グレイアスの『悪いな』という言葉で完全に気力がなくなったようで、力なく机に突っ伏していた。

「・・・・・くやしい！」

「悔しがる気持ちは痛いほど分かるが、此れが普通だ。　我が土術士隊に措いても錬金の資格を持つ者は隊員１００人のうち、数人しかいないほどだからな」

ルナは悔し涙を流しながらも、グレイアスの慰めの言葉で元気を取り戻し、教室を出て行った。

「さて、ミコトは文句なしの合格なんだが、正直驚かされたよ。まさか本当に合格してしまうとはな」

「どういうことなんですか？」

俺はグレイアスが『こんなこと有り得ない』と頭を押さえている仕草を見て疑問に思っていた。

言葉を聞く限りでは、最初から俺もルナも合格させないようにしていたようにしか見えない。

「いやな、錬金を使用するにあたって、魔力の異常消費を体感してもらおうと思っていたんだが」

予想に反して鉱石全部を練成した挙句、未だ余力を残している俺が信じられないと言ったところか。

「ま、まぁ、難題を叩きつけたとはいえ、合格には違いないからな。明日からの本試験を説明しようか」

そう言ってグレイアスは俺を伴って城から出ると、街の入口近くにある建物へと誘った。

「此処は街の東、北、南に位置する鉱山と錬金術師を管理している職人ギルドだ。　此処で明日から執り行われる本試験の手続きを行なう。　その前にミコトにはクジを引いてもらおうか」

グレイアスは俺の目の前に3本の棒状の物が入れられた、木で出来たコップのような物を置いた

「最終試験は街から東方にあるイストライル鉱山、北方にあるノスフィルド鉱山、南方に位置するサウシュルド鉱山で執り行う。　3箇所とも、街から半日歩けば辿りつく場所にあり、内部構造も酷似している」

最終試験で何をするのか、予想できてきたかも。

「さてミコト、目の前にあるクジを1本引いてもらおう。　そのクジによって行き先は決定される」

俺は優柔不断という性格が災いしてか、中々決められず思い切って目を瞑り、1本のクジを引き抜いた。

「漸く決まったか。　えっと北か、ノスフィルド鉱山に決まりだな。ほら此れが入坑許可証だ。鉱山入口に立っている警護の衛士に見せて、鉱山内に入ると良い」

グレイアスは職人ギルドの窓口から『ノスフィルド鉱山入坑許可証』と書かれたシンプルなデザインの木の板を受け取ると、俺に手渡してきた。

「最終試験の期限は5日後の日没をあらわす鐘が鳴るまでに、何時もの城内の教室に鉱山で錬金した鉄を２０ｋｇ持ってくること。あと鉱山内には魔物が出現する場合もあるからな、不安ならば職人ギルドの隣にある、冒険者ギルドで護衛を雇うのもいいだろう。ただし、不正防止策として土術士を護衛として連れて行くことだけは禁止する」

不正防止か。　土術士に錬金を代わってもらうという輩がいるかもしれないのかな。

「これで本試験の説明は以上だ。　何か質問はあるか？」

「いえ、特にありません」

「其れでは今日は休むと良い。　街の人間を守る立場からして夜半時に街の外への外出は勧める事は出来ないからな」

そう言いながら、グレイアスとともに職人ギルドから外に出ると、既に空は夕焼けの赤い色に染まりかけていた。

俺なら暗闇でも平気だが、要らぬ混乱を招かないためにも、グレイアスの提案どおり宿に戻る事にした。

第１３３話　地底で出会った者

翌朝・・・・・と言っても、時間的に寝坊して昼近くになってしまったが錬金本試験のため、俺は街の北門から外に出て、ノスフィルド鉱山を目指していた。
グレイアスの話では到着までに半日の道程だと言っていたが、俺の足なら2時間もあれば着くだろう。

まぁ実際には、“あんまり早く到着しても怪しまれるだけ”と判断し、少し早足で此処1時間ほど、荒野のド真ん中を歩いているだけなのだが、俺の運が余程悪いのか、はたまた魔物の生息率が高いのか定かではないが、1時間の間に魔物とのエンカウントが5回とは。と、こうして思考している傍から6回目の魔物が大きな岩陰から姿を現した。

「グオオオォォォォォーーーン！！」

その魔物は牛のような胴体に鹿の角を取り付けたような妙にアンバランスな姿をしていた。

（またか・・・・・いい加減にしてほしいものだな。　食料は今のところ、足りているんだけどな）
（マスターだけだと思いますよ？　魔物を食料呼ばわりするのは）
（だが、見かけとは裏腹に魔物の程よく締まった身体は美味いぞ？）
（全世界共通だと思いますが、魔物の血には毒があるため普通の人間では一口目で即死でしょうね）

ルゥと心の中で会話している間にも魔物は此方に向かって威嚇している。

ただ、俺が其れ(魔物)に関心を示さないだけで五月蠅いだけなのだが。

(まぁいいか。　魔物をのさばらせておくだけでも百害あって一利なしだからな、処分しておこうか)

(何故か、魔物の方が可哀想に思えてきました)

俺はルゥの魔物に同情するような声を無視して剣を振り下ろすと、魔物は左右に両断された。

(これで6頭目と。鉱山に到着するまで、何頭の魔物を始末すればいいのかね～～～)

そして其れから約2時間後、無事に鉱山へと到着する事が出来た。

因みに此処に到着するまでに狩った魔物数はというと、延べ２０体にもなる。

俺は溜息をつきながら鉱山内に入ろうとすると、俺の目の前に槍を持った2人の男が姿を現した。

「何者だ？　此処はノスフィルド鉱山、許可無き者は立ち入ることはできない」

「怪しまれたくなければ、此処には近づかない事だ」

「いえ、此処に用があってきました。　入坑許可証は此れです。御確認下さい」

そう言って俺は予め(あらかじ)取り出しておいた、職人ギルドで受け取った入坑許可証を男に渡した。

「ふむ。　職人ギルド発行の許可証に間違いないな。　すまなかったな此処最近、不審者の情報が数多く寄せられていてな、警備が厳しいんだ」

「不審者ですか？」
「ああ、俺達の目を盗んでは鉱山に入って鉱石を盗んでいくんだよ。一昨日も許可した憶えのない男が鉱山の中で魔物に襲われて、見るも無残な状態で死んでいたからな」
門番の片方の男と世間話をしていると、もう1人の男が手に何かを持って姿を現した。
「鉱山の中は入り組んでいる上に真っ暗闇だからな。　此れを持っていけ」
そう言って手渡してきたのはランタンと火種が入った缶状の物、筒状に丸めた紙、それに一つの指輪だった。
「ランタンと火種は分かりますが、他の2つは何ですか？」
「一つは鉱山内の見取り図だ。　と言っても日に日に掘り進められて行くからな、大まかにでしかないが」
「指輪の方は位置確認の魔道具だ。　指輪を身に付けて鉱山に入ると装着者の魔力に反応して地図に現在位置が光点として浮かび上がる仕組みになっている」
「ただ貴重な魔道具だからな。　用が済んだら返してもらうから失くさないでくれよ？」
俺は其れだけを聞くと早速鉱山内へと足を進める。
「あっと、もう一つ。　さっきも言ったが鉱山内には極稀ではあるが、魔物が現れる事がある。地図にも記載されているが、遭遇した場合は無理をせずに避難所に逃げ込めよ」
「分かりましたーーー」

２人の門番に了解の意を込めて手を振ると、今度こそ鉱山の中へと入っていく。
説明にあったとおり、鉱山の中は真っ暗闇で今向いている方向さえ分からなかった。
俺は手渡されたランタンに火を灯すと頭上に掲げ、地図を見ることにする。

すると指に嵌めていた魔道具の指輪がうっすらと光り、その直ぐあとに地図の方に光点が現れた。

（こんな便利な魔道具があるんだな。　原理は分からないが、流石は魔法世界というだけはあるな）
（マスター、魔物の気配探知はお任せ下さい）
（ああ、悪いけど頼む事にするよ）
（了解いたしました。　それと鉱山が崩れる恐れがあるので魔法は使わない方が良いと思います）
（分かった）

俺は持っていた地図を元あったように丸め、ランタン片手に道なりに進んでいく。
鉱山に足を踏み入れてから１時間後、不意にルゥから念話が齎された。

（マスター！　右１００ｍほどの場所に何者かの気配を感じます。注意してください）
（魔物か！？）
（いえ殺気のような感じはしませんが、人とは異なる気配を感じます。　残り５０ｍです。明らかに此方を把握しているようです）

ルゥが言うのは魔物かどうか分からないが、剣を何時でも抜けるよ

うに身構えて右方向に視線を這わす。

「おんやぁ～アンタ何モンだぁ～～」

暗闇から姿を現したのは鶴嘴（つるはし）を持った、身長が１mあるかないかのズングリムックリな男だった。

ただ手にはランタンといった照明器具は何一つとして持ってはいない。

「えっと、どちらさまで？」

「其れを聞いてんのはオラだぁ。格好からして鉱夫には見えねえな、門番の言っていた不審者って奴か」

「い、いえ違いますよ。此処には入坑許可証を見せて入りました」

「本当か？　嘘は言ってないべな～～」

「本当ですって！　此処には錬金術に本試験のために鉱石に含まれている鉄を取りに来ただけですよ」

「錬金術？　アンタ錬金できるのか！？」

「一応それなりには」

「丁度良かった。アンタとは初対面で申し訳ねえが、頼みがあるんだが構わねえか？」

「先程も言ったように、鉱石を錬金して持って帰らないと行けないので簡単な事なら構いませんよ」

「そうか良いか！　ああ、心配しなくても採掘現場まで連れてってやるから心配すんな」

地図で見ても何処にあるか分からなかった、採掘現場に連れてってくれるなら一石二鳥という訳で助かるし、頼みを聞いても良いかな。

「こっちだ付いて来てくれ」

「それは良いんですが、真っ暗闇なのに照明は必要ないんですか？」

「俺っちはドワーフ族だ。　毎日毎日穴倉ン中で仕事してれば照明なんて無くても道は分かるさ」

そう言われ、ドワーフ男の道案内のもと、鉱山の奥深くへと歩いていく事となった。

第１３４話　ドワーフ一族

ノスフィルド鉱山内で遭遇したドワーフ族と名乗る男の道案内のもと、鉱山内を進むこと十数分。
漸く目的にに到着したようで、ドワーフ男が足を止めた。

「此処がこの鉱山で採掘している最深部だ」

男が俺を奥へと誘(いざな)うと、其処には４、５人の鉱夫が壁を鶴嘴(つるはし)で掘り進んでいた。

「お～い、連れてきたぞ～～～」

此処まで道案内してくれた男が、鉱山全体に響き渡るような大声で叫ぶと一心不乱に岩壁を掘り進んでいた鉱夫たちが一斉に此方を振り向いた。

「なんじゃゲオル。　ラグダを起こしに行ったのではなかったのか？」
「そうだったんだがラグダの奴、何処にも居なかったんだよ。　日々文句ばかり抜かしておったから逃げたのではなかろうかの？」
「それは不味いのぉ～、錬金する者がいなくては商売あがったりじゃぞ」
「ああ、俺もその事実に落胆していたんだが、此処に戻る途中で出くわした人間が錬金出来るとかで連れてきたんだよ。　聞けば鉄を持って帰らないといけないらしくてな、それならばと連れてきたわけじゃ」

俺を此処に連れてきた男と岩壁を掘っていた男がなにやら暗闇で話

をしている。
何時までも、こうしては居られないので思い切って聞いてみる事にした。

「あの～～いまいち事情が分からないんですが、俺は此処で何をすれば良いんですか？」
「おっとそうだったそうだった。　紹介すっから、こっち来てくれねえか？」

そう言われてランタン片手に奥へ行くと、其処には案内してきてくれた男と背格好がそれほど変わらない、髭面の男達が3人と手にヤカンを持った女性が1人立ち此方を見ていた。
その中から地面に触れるか触れないかまでに髭を伸ばした御爺さん（？）が話しかけて来た。

「お前さんには逃げた奴の代わりに、採掘した鉱石を錬金して欲しいんじゃ。　このままでは約束された日までに鉱物を納めることが出来なくなってしまうからのぉ」
「あ、ゲンル爺！　俺が言おうとしていた事を」
「錬金ですか？　3日後には鉄を持って戻らないといけないので、其れまでで良いのなら構いませんが」
「なら、お前さんが持って行く鉱石もわし等が掘り出してやろう。　その代わり、錬金は頼むぞ」
「分かりました」

此れで何処に埋まっているか分からなかった鉱石も探し出す事が出来るし、俺は錬金すれば良いだけで、かなり楽ができたな。

「それにしてもオヌシ、人間にしては変わっておるのぉ」

俺が1人で納得していると、先程のゲンル爺と呼ばれた御爺さんが話しかけて来た。

「わし等が今まで出会ってきた人間は我等ドワーフ族を蔑み、冷たい目で見るのが当たり前だというのに、オヌシからはそのような表情は一切見当たらん」

「そうなんですか？　今までにもエルフや翼人など、数多くの亜人達と過ごしてきましたからね。　慣れてしまっただけですよ。　貴方達を否定するという事は彼等も否定する事に繋がりますからね」

「そうか！　そう言ってくれると、嬉しくて涙が出てしまいそうじゃの」

「ゲンル爺、サボるの良くない、仕事する！」

「分かっておるワイ！　そう急かすでない」

そう言ってゲンル爺と呼ばれた老人は服の袖で目を擦りながら鶴嘴を手に取り岩壁を掘っていく。

見てみると採掘しているのは俺を此処に連れてきてくれた男とゲンル爺、それに名も知らないドワーフ。

そして1人のドワーフの男がせっせと掘られた鉱石を木の箱に詰めていく。

「あなた、人間族だけど良い人そう。　喉渇いたら言って？　お水渡すから」

一連の採掘作業を見ていると、俺を見て挙動不審になっているヤカンを手に持ったドワーフ族の女性が不意に話しかけて来た。

「ありがとう。　今は大丈夫だから、その内お願いするよ」

「・・・・・・うん」

「お～い、こっちに水くれ！」

そうしている間に採掘をしている、名も知らないドワーフの鉱夫から水の催促が来る。
呼ばれたドワーフの女性は怪我でもしているのか、右足を引き摺るようにして男の傍まで歩き、水を渡した後も同じ様に右足を引き摺って戻ってくる。

「足、どうしたんだい？　怪我でもしているのか？」

俺がそう聞くと、女性は衣服の裾を膝まで捲くって数ｃｍほどの傷を見せてくれた。

「ほんの少し前、鉱山で魔物に襲われた。　少し痛いけど、問題ない大丈夫」
「とても大丈夫そうに見えないよ。　血が滲んでるじゃないか」
「大丈夫、ドワーフは人間より皮膚が丈夫。　こんな傷、怪我のうちに入らない」

そう言って歩き出そうとする、女性の一瞬の隙を付いて弱めの回復魔法を傷に施す。
時間がかけられなかったので、ほんの少ししか治療できなかったが、少しはましだろう。

「今、何したの？　とても暖かい感じがした」
「早く傷が治るように、御呪(おまじな)いを掛けただけだよ」
「ありがとう」

女性はランタンの熱に照らされたのか頬を真っ赤にして俯いてしまった。

（マスターも罪な人ですね）
（何を言っているんだ？　俺が何かしたか？）
（はぁ～～～）

溜息をつくルゥと頬を染めるドワーフの女性が良く分からなかったが、そのまま作業を作業を見守る事にする。　すると漸く錬金のお呼びがかかる事となった。

「お～い人間、こっち来て錬金してくれ！」
「はい。今行きます」

そのあとはドワーフ達に人外のような魔力量を不審がられないように、調節して錬金していったり、採掘の手伝いをしたりして時間は過ぎていった。

そんなこんなで鉱山に入ってから既に丸1日が経過し、ドワーフの仕事のノルマは達成し、更に俺がグレイアスの待つ、城に持っていく鉄も揃った。

「いや～アンタの御蔭で、何時もより作業が捗った。　ありがとよ」
「いえ、俺も楽に鉄を得ることが出来て、嬉しいですよ」

そのあとも世間話を繰りかえし、来た時と同じ様にゲオルと呼ばれたドワーフ族に鉱山の入口まで案内してもらった。

「それじゃあ、有難うございました」
「良いって良いって。こっちも仕事を手伝ってもらったんだし、此方こそありがとよ」

軽く挨拶をしたあと暗闇の中で別れ、丸1日ぶりに外へと出た。

外に出たと同時に此方を心配そうに見つめている、来た時と同じ2人の門番に声をかけられた。

「あ、あんた大丈夫だったか！？　丸1日も出てこなかったから魔物にでも襲われたんじゃないかと心配していたんだが」
「大丈夫ですよ。　ご心配お掛けいたしました」
「無事なら、それで良い」

採掘現場での丸1日の間に、俺以外の人間から悪い印象しか受けてないと言う話をドワーフから聞いていたので、敢えて口に出さずに鉱山内で魔物に出くわして隠れていたという話にしておいた。

「それでは街に戻ります。　あっと忘れてた。ランタンと鉱山の地図と魔道具です」
「うむ確かに。　目的の物を手に入れたからといって気を抜くなよ？　鉱山と違って見通しは利くが、平原の魔物の危険性は比べ物にならないのだからな」
「分かりました。　有難うございました」

俺は門番に軽く感謝の言葉を述べると来た時と同じ様に街までの道を戻っていった。

余談ながら、来る時と同じ様に数多くの魔物に襲われたのは言うまでもない。

第１３５話　帰り道での戦い（前書き）

久々となる、ミコト無双です。

第135話　帰り道での戦い

ノスフィルド鉱山と街のほぼ中間に差し掛かった頃、俺のすぐ脇を身体に触れるか触れないかの場所を1台の馬車が、ものすごいスピードで通り過ぎていった。

（危ない操車をする奴だな。　掠っていたら、唯では済まなかったぞ？）

そう思っていた次の瞬間には馬車は轟音を立てて横倒しになり、馬車は見るも無残な木片と化していた。
俺は目の前で起こった惨事により、操車を行なっていた人物のことが気になり、横倒しになった馬車に近寄ると・・・・・其処には既に冷たくなっている、背中に何本もの矢が突き刺さった血まみれの男が横たわっていた。

馬車を引っ張っていた2本足の蜥蜴のような生き物は、横倒しになったショックで馬車に結ばれていた手綱が解け、荒野を一目散に走り去っていった。

（如何やら、大分前に既に亡くなられていたようですね。　馬車に付いている血糊も完全に乾ききっていましたし）
（すると、馬車は制御不能になった状態で走り続けていたのか）

俺は死体となった者にそっと手を合わせて立ち去ろうとすると、馬車が走ってきた方向から先程逃げた蜥蜴のような生き物に跨る、黒い鎧を着た男達が現れた。
男達は此方に顔を向けながら、手振り素振りをして仲間内で会話しているようだった。

「ふむ、既に事切れているか。　どうやら、我々が手を下す必要は無いようだな」
「師団長、傍(かたわ)らに誰か居るようですが、如何なさいますか？」
「決まっているだろう？　我々の姿を見られたのだ。　可哀想だが、口封じを施さなければな」
「それならば是非、私めにご命令下さい。　この頃、暴れられずに鬱憤が溜まっているもので」
「良いだろう、この場は任すぞ。　まぁ、お前なら大丈夫だとは思うが、遊びすぎて逆に返り討ちに遭わぬようにな」
「はい！」

そう言いながら師団長と呼ばれた人物は回れ右をして、身体を来た方向へと向けた。

「おっと忘れるところだった。　少しだけなら遊んでも構わないが、息の根を止めた後は文書を手に入れることを忘れないようにな」
「はっ！　分かっております。道中、お気をつけて」

男達は互いに胸の前で敬礼のような仕草を見せ、数秒後には片方の男は来た道を走り去っていった。

「漸く行ったか。ふんっ！　大した実力も無いくせに隊長面しやがって、胸糞悪い・・・・・何が『遊びすぎてやられるな』だ！」

男は師団長と呼んでいた人物が視界から見えなくなると同時に被っていた猫を脱ぎ、まるで人が変わったかのような悪態をつき始めていた。
そして、ゆっくりと玩具を手にした子供のような笑顔で俺の前へと移動してくる。

「さて、テメエも運がねえな。　荒野のド真ん中で俺に出会った事を後悔しながら死んでくれや」
「アンタ何者だ？　ルイベアスの街の衛士ではないのか？」
俺が『ルイベアス』と言う言葉を口にした直後、眉間に深い皺を寄せて睨みつけてきた。
「お前こそ一体何者だ？　殺されそうになってんのに意外と落ち着いてやがるな」
黒い鎧の男は『何時でも俺を殺せる』とばかりに無防備で俺の目の前まで歩いてくる。
「それに、事もあろうに俺が平和ボケした国の衛士だと！？　冗談にしても笑えねえ話だぜ」
男は厭らしい笑みを口元に浮かべながら、舌なめずりをして俺の周りを歩いている。
そして馬車の下敷きとなって息絶えている血塗れの男の傍へ行くと、何やらゴソゴソと懐に手を入れて何かを探しているようだった。
「おかしいな。　無いわけは無いんだが・・・・・・おい、貴様。　コイツから何か受け取らなかったか？」
そう言いながら死体をまるで道に転がっている石のように蹴り飛ばしながら、悪態をついていた。
「何をしているんだ！　やめろ」

俺は死体を弄ぶ、男の悪態に我慢できずに一気に距離を縮めて殴りかかる。

「グッ！？　行き成り何をしやがる！」

死体を散々蹴り飛ばしたり踏みつけたりしていた男は予期せぬ、俺の一撃で後退りをした。

「中々やるじゃねえか。遊んでやろうと思ったが止めだ！　惨ったらしい死をくれてやるぜ」

男は不意に俺から距離をとると、掌を俺のほうへ向けて何やらブツブツと口にしている。
そして次の瞬間、掌から打ち出された火炎球が俺の頬を掠めて後方の地面に着弾し、爆風が砂塵を舞い上がらせていた。

「大した威力だが、当たらなければ意味はないな」

俺が独り言のように、ボソッと言った一言が聞えてしまったようで・・・・・。

「俺を舐めるのも大概にしやがれ！！　次の一撃でテメエは終いだーーー」

男がそう言った次の瞬間、俺の周囲に何十もの、炎の塊が浮かんでいた。

（一つ一つの炎塊は大した威力はありませんが、マスター以外にとっては致命傷になる量ですね）
（あの男が言っていた『惨い死』というのが其れか。　確実に人殺

しを楽しんでいるな）

「行けーーーー！」

厭らしい笑みを浮かべていた男が声を発した次の瞬間、俺の周辺を漂っていた炎の塊が一斉に俺に向けて飛来してきた。

「ハァッハッハァーー死ね死ね死ね死ねぇ。　死体も残さず、消滅してしまえ！」

男はまるで狂ったかのように奇怪な笑い声を上げ、魔法の餌食となっている俺を見ている。

そして肝心の攻撃を受けている俺はというと、全ての炎塊を防御魔法であるファイアーウォールで受けきっていた。

攻撃が始まってから数分後、漸く周囲に浮かんでいた炎塊が無くなった頃には俺が立っていた場所を中心として半径数十mがドーナツ状に抉れていた。

「終わったな、面倒臭えが死体の確認をするとするか。　既に燃えカスしかないだろうがな」

「誰・が・燃えカスだ？　あれしきの攻撃で俺を殺せるとでも思っていたのか？」

「き、貴様・・・・・何故、あれだけの攻撃の中で生きている！？　化け物か？」

「俺が化け物だと！？」

（はっ！？　マスター冷静に）

男の口から『化け物』という言葉が発せられた瞬間、俺の中で何かが切れるような音が聞えた。

ルゥの声も一瞬聞えたような感じはしたが、今は何の声も聞えない。

それからどれだけの時間が経ったのだろうか。
意識が戻ると、荒野の至る所が隕石でも落ちてきたような擂鉢状に抉れており、その内の一つに先程まで俺と相対していた男が両腕の肘から先と右太腿から先が炭化した状態で、驚愕の表情を見せながら、血まみれになって横たわっていた。

「これは一体。　俺は何を如何したんだ!?」
（マスター漸く意識を取り戻したのですね。　心配しました）
（ルゥか、俺に何があったんだ?）
（前回と同じ様に憶えてはいらっしゃらない様ですね。　マスターは人が変わったかのように執拗に逃げ惑う男に対して魔法攻撃を繰り返し・・・・・・）

ルゥから齎された言葉に、俺は取り返しの付かない事をしてしまったと反省する事となった。
俺に暴言を吐いた男も、ほんの少し前までは息があったらしいのだが、出血多量のため死んでしまったと。

そして馬車の操者であった、血塗れの死体に近寄ると、爆撃の余波を受けていたのか靴が脱げ、中から2通の手紙のような物が姿を現した。

一通の手紙には完全に蝋のような物で封がされているようだが、もう片方の手紙は読むことが出来た。
そして其処にはこう書かれていた。『どうか、この手紙をルイベアスの城へ』と・・・・・。

第１３６話　沈黙の帰還

俺がこの場所に居たという理由だけで、有無を言わさずに襲い掛かってきた非道な男を無意識のうちに殺してしまった俺は暫くの間、人を殺してしまった事による罪悪感に頭を痛めていた。

（このような言い方しか出来ませんが、マスターは襲って来た賊に対して正当防衛を施しただけに過ぎません。　仮に男を見逃したとすれば、第二、第三の犠牲者が更に増えていた事でしょう）

（ルゥ・・・・・・）

（ルゥ殿の言うとおりですよ。　貴方様は天界に上がられ、神と成られる身ではありますが、今はただの人間でしかありません。　それに人を殺すのを快楽と捉えている者は遅かれ早かれ、地獄に行く運命です。　貴方様は其れをほんの少し早めただけに過ぎません）

（ミラもか、有難う。　御蔭で少しは気が楽になったよ）

（それでは一刻も早く、この場を離れましょう。　先程別れた師団長と呼ばれていた人物が部下の帰りが遅すぎる事を懸念して戻ってくる可能性があります）

（分かった。　だが、その前に）

俺は馬車の脇に未だ横たわる、血塗れの死体の前へ行くと、無念のうちに事切れた遺体をそっと抱え、亜空間倉庫へと横たえた。

（マスター？　如何なさるおつもりで？）

（『手紙をルイベアスの城へ』と書いてあった事から彼は関係者だと言う事だろ？　最後まで職務を全うしようとした男を魔物の餌食となる荒野にそのまま置いとく訳にはいかない。　偶然この場を通りかかった時に、襲われていた彼を助けようとしたが、間に合わなかったと言う事にして城へ手紙と一緒に届けてやろうと思ってな）

（お優しいのですね）
（人として当然の事をするまでさ。　この男の家族が街に居るならば逢わせてやりたいからな）

無事に遺体を亜空間倉庫内へと収納した俺は、襲撃者の遺体を荒野から少し離れた森林に横たえると、クレーターだらけとなった荒野を土属性魔法の応用で平らに均し、足早に其の場を後にした。

そしてそれから数十分後、街の門を潜って城の入口近くの路地裏へと足を運んだ俺は亜空間倉庫内から血塗れの遺体を取り出した。

「さて、城に到着しましたよ。　貴方が目的地としていたルイベアスの城へ」

既に事切れている遺体から返事があるわけではないのだが、何故かそういわずに居られなかった。
俺は遺体をお姫様抱っこのように胸の前に持ち上げると、欠伸を噛み潰しながら城門の前で警備している衛士の前へと歩いていった。

「むっ！？　確かミコトとか言う、錬金講習に参加していた者だな？　その者は？」
「錬金術本試験の課題のため、ノスフィルド鉱山に行っていたのですが、その帰り道で何者かに襲われている馬車を目撃しまして。俺が駆けつけたときは既に遅く・・・・・・」
「そうか其れでこの男はいったぃ！？」

俺が男の持っていた手紙の事を話そうとしていた次の瞬間、門番の衛士は俺が抱きかかえている男の顔を見て手に持っていた槍を足元に落とし、驚愕の表情を浮かべていた。

「ま、まさか・・・・・な、何故、この御方がこのような御姿に」
「如何したんですか？　お知り合いだったのでしょうか？」
「あ、ああ、この御方はルイベアス第三王位継承者で在らせられる、マファリス王子様だ」

第三王位継承者。　つまりは王族の１人というわけか。　門番も言っていたが、そのような人物が如何して護衛もつけずに荒野で息絶えていたんだ？　もしくは此処に来る途中に襲われて全滅したのか。

「はっ！？　こうしては居られぬ、直ぐに陛下に報告しなければ。　ミコトとやら、済まないが殿下を連れて、俺の後についてきてくれないか？」
「偶然、其の場に居合わせたとはいえ、部外者である俺を城の中へ入れても良いのですか？　錬金講習で通行証は持っていますが、それでも問題があるのでは？」
「まぁ本来は駄目なのだが、お前は殿下の最後を看取った人物だ。　その当時のことも踏まえて、隊長達の前で状況を説明してもらいたい」
「分かりました。　ですが、その前に錬金講習の本試験の報告をグレイアス隊長に報告したいのですが構いませんか？」
「それならば、士術隊の隊長達がミコトの説明を聞くために議会場に集まるだろうから、其の時に報告すると良い」

俺は門番の衛士にそう言われ城内に入ると、そのままでは目立つという事で門番の衛士の提案により、商人などが献上品を持って来る時に使用する、豪華な箱の中に王子である男の遺体をそっと横たえた。

「分かっているとは思うが、この事は他言無用で頼むぞ？　国の王子が御遺体で見つかったとあっては、国の威信に拘るからな」

「了解しています」
「其れならば良い」

そして城内を門番の衛士に連れられて歩く事、十数分・・・・・・
漸く貴賓室と呼ばれる場所に辿り着いた。

「俺は一足先にこの事を王様に報告してくる。　お前は殿下とともに、この部屋で待機していてくれ！」

衛士は『誰が来ても、俺が合図をするまで扉を開けるな！』と言い残して足早に廊下を走っていった。
この場所に到着するまでの間に、扉をノックする合図を教わっていたのだった。
それから数分が経過した頃、ガシャガシャという音と数人の足音が扉の向こうから聞えてきたと思ったら、教えてもらっていた合図とともに扉を開けるように促す声が聞えてきた。

「ミコト！　俺だ。　扉を開けてくれ！」

声と合図を確認した俺は、扉の内鍵を外して扉を開けると、俺をこの部屋に案内した衛士を始めとして錬金講習で講師を務めていたグレイアス、街に入る時に注意されたナジェリアなど、知っている顔を含めた１３人が雪崩れ込むように部屋の中へと入ってきた。

「「ミコト！？」」

俺の顔を見た瞬間に、一番出会いたくなかった人物が２人同時に俺の名前を呼んだ。

「グライアス隊長、お知り合いですか？」

「ナジェリアこそ」
「2人とも！　今はそのような事を喋っている時ではなかろう」
俺の顔を見て混乱している2人を静めたのは、やはり見た事のない、鎧の右胸の部分に水の雫の様なマークが描かれた髪の長い女性だった。
「申し訳ありません、ステイラム隊長」
「すまない」
そんな漫才のような遣り取りをしている2人を掻き分けるようにして、威圧感が漂う背格好をした厳つい男性と穏やかな表情をした女性が俺の前へと姿を現した。
「オヌシが門兵が言っておったミコトとやらか！？　我とて未だ信じられぬのだが、息子に逢わせてはくれまいか！」
「『息子』って。　貴方は？」
俺が疑問を口にすると、グライアスが合いの手を出してくれた。
「この御方はルイベアス国王、レムリアルド陛下だ。　くれぐれも失礼のないようにな」
「は、早く息子に逢わせてくれ！　頼む、この通りじゃ」
陛下と紹介された人物は王族らしからぬ態度で一般庶民である俺に対して深々と頭を下げている。
「わ、分かりましたから頭を上げてください」
俺はその状況に居ても立っても居られずに、部屋の中へと一緒に運

び込まれていた献上箱の中から血塗れの殿下と呼ばれた男の遺体をそっと抱きかかえ、部屋の床へと横たわした。

「おおおぉ・・・・・・間違いない。　息子よ、何と変わり果てた姿に」

その無言で城へと戻ってきた息子の姿に陛下は膝を折り曲げて子供のように泣き喚き続けていた。
部屋の中に集まっていた魔術士隊隊長達も遺体に向けて敬礼のような仕草を見せている。

第137話　尋問されるミコト？

最愛なる息子の死を目の当たりにして、陛下は目を真っ赤に腫らしながら数分もの間、泣き続けていた。
そしてそれから更に数分後には、隊長達数人の手によって秘密裏に献上箱の中に入れられ、遺体安置所へと運ばれた皇太子の遺体とともに陛下と一緒に『息子に逢わせてくれ！』と俺に言い寄ってきた女性が付いていった。
あとでグレイアスから聞いた話では、如何やら亡くなった王子の御后様のようだった。

その後、貴賓室から玉座の間へ場所を変更した俺達は、円卓のようなテーブルに隊長達とともに座って談話していた。

「さてオヌシには、みっとも無い姿を見せてしもうたのぅ」
「いえ、当然の事だと思っていますから」
「聞けば、息子の最後を看取ったのはオヌシだと言う事だが間違いないか？」
「はい。　俺があと一歩早く辿りついていれば、このような事には成らなかったのかもしれません」
「そう自分を責める物ではない。　息子の状態を見る限りでは、そなたが間に合っていたとしても死は免れぬ状況であっただろう。息子を連れてきてくれたことを深く感謝する」

再度、俺に対して頭を下げようとする陛下を俺は手で制した。

「すまぬが息子の・・・・・・マファリスのいた状況を教えてはくれぬか？」
「はい。　あの時は錬金講習の本試験のためにノスフィルド鉱山へ

行き、必要量の鉱物を持って街へと戻ってくる途中で、直ぐ横を恐ろしいほどの速度で王子殿下の操車する馬車が通過しました。　そしてその数秒後には黒い鎧を身に纏った2人の男が馬車の方へと走って行き、その直後馬車は横倒れになり悲鳴が聞えたのです。　俺は何かがあったものだと思い馬車に駆けつけたのですが、其処には血塗れで横たわる王子殿下と、その懐から何かを探しているような黒い鎧を身につけた男が座っていました」

実際、俺が到着していた頃には馬車の中で死んでいたからなぁ・・・・。

まぁ、現代とは違って検死技術なんてないから、死亡推定時刻なんて分からないだろうしな。

俺が此処まで話すと、陛下の顔が怒りで真っ赤になってしまっていた。

反対方向に目を向けるとナジェリアが『風術士であるミコトが練金講習？』と小声で唸っている。

「それから如何したのだ？　続けよ」

「はい、俺が其の場に辿りつくと男のうちの1人は既に其の場から姿を消し、もう1人の何かを探していた男が俺を見て『目撃者は生かしておけぬ』と言いながら、大量の火炎球を俺に向かって打ち出してきました。　俺は咄嗟の判断で火炎球をかわしながら男の懐に潜り込むと至近距離で高威力の魔法を打ち出し、相手の男を殺害しました」

『殺害した』と口にした瞬間、円卓に座っている隊長から睨まれた様な視線を感じた。

「・・・・・その男は如何した？」

「男の仲間が来た時の事を考え、荒野の近くにある森林の中へ死体を隠してきました」

俺が『森に死体を隠した』と口にした瞬間、陛下が何かの合図をして円卓に座っている衛士を数人立ち上がらせた。
立ち上がった衛士たちは陛下に敬礼した後、足早に玉座の間から外に出て行く。

「なるほど、状況はわかった。　それにしても何故、街に息子を連れてこようと思ったのだ？　門番の衛士の報告では、そなたは息子を王子だとは知らなかったらしいではないか」
「襲っていた男を魔法で吹き飛ばした拍子に王子殿下の靴が脱げ、中から2通の手紙が出てきました。　失礼とは思いながら、封のされていない方の手紙を読むと『どうか、この手紙をルイベアスの城へ』と書かれていたので街の関係者だと思い、亡骸を荒野に放置して置くよりは故郷の地で眠らせてあげたいと思い、此処まで運んできた次第です」
「ふむ。　その手紙は何処にある？」

陛下の直ぐ横に座っている、緑色の雷のような形の印が鎧の右胸に描かれている男性から手紙の事を聞かれ、懐から蝋で封をされた1通の手紙と血で染まった便箋を取り出し、円卓の上へと置いた。

その男が手紙に手を伸ばすよりも早く、陛下が手紙を握り締めていた。

「ははは・・・・・間違いなく息子の字だ。　わしに何を伝えたかったのかは知らぬが無理をしおって。　親より先に死ぬとは親不孝者めが」

陛下は手紙を胸の前で握り締めながら皺くちゃな顔に更に皺をよせて涙ぐんでいる。
その後、俺の知っている事を全て話し終えると『絶対に他の者にこの事を洩らすな』と再三の釘を刺され、この場は解散となった。
そして城を出て宿屋に向かう途中、何者かに後ろから声を掛けられた。

「ミコトッ！　ちょっと待ってくれ」

声のする方へと振り向くと、其処には息を切らせたグレイアスとナジェリアの姿があった。
居ても立っても居られなかったのか、グレイアスを差し置いてナジェリアが俺の両肩を掴み声を荒げて質問・・・・・というより尋問してきた。

「何故、風術士のお前が錬金を使えるのだ!?　1人の人間につき1属性しか使えないはずだ。納得のいく説明をしてもらおう!」
「お前、風術士だったのか!?　だが、確かに土術士の魔力を持っていたし、一体如何いうことだ?」

2人とも城と宿屋などの商店街が並ぶ、中間に位置する市民公園とも言える場所で声を張り上げているものだから周囲を歩いている、何の関係も無い市民が痴話喧嘩と勘違いして何事かと集まりだしている。

俺は質問攻めにしてくるグレイアスとナジェリアの手を取ると、逃げるようにして宿屋の自分の寝泊りしている部屋へと飛び込んだ。

「2人とも、狭いとは思うが我慢してくれ!」

「此処は宿屋か？　さて、納得のいく説明をしてもらうぞ？」
「この場所に我等を連れてきたということは聞かれたくない内容なのだな？」

仮にも土術士隊隊長であるグレイアスと炎術士隊副隊長であるナジェリアがこのような異常事態の中、此処に居ても良いのかと思いながら話をする事にした。

ナジェリアには魔法で飛行しているのを見られてたし、グレイアスには錬金講習で実際に鉱石を錬金していたのを見られていたし。
さて、どうやって説明しようかな。
目の前で魔法を見せている以上、『2人の見間違いでした』で纏めるには無理がありすぎるよなぁ～～～

第１３８話　嘘八百の昔話

質問攻めにしてきたグレイアスとナジェリアを連れて、宿屋へと戻ってきた俺は宿屋の女将さんから奇異な目で見られながらも自分の部屋へと2人を連れ込んだ。
運が良かったのか、俺の泊まっている部屋以外、全ての部屋の扉が開け放たれている事から他の客が居ないようだった。

「さて、ミコト説明してもらうぞ？　何故、風術士であるミコトが土術士の錬金魔法を使えるのだ？」
「それは俺も聞きたい。　ミコトがナジェリアの言うように風術士であったならば、錬金魔法が発動する筈はないのだからな」
「2人して声を荒げないでも今説明するから。それと約束してほしいんだけど、これから言う事は他の誰にも喋らない事、それだけは約束して」

グレイアスとナジェリアは俺の必死の表情に何かを思ったのか、口を揃えて返事をした。

「我が土術士隊隊長の血に掛けて他言しない事を誓う！」
「わ、私も火術士隊副隊長の血に掛けて、此処での事を他言しない事を誓う」

2人は誓いの言葉とともに俺に掌を開くよう促し、徐に右親指の先を傷つけ、血を俺の掌の上に垂らした。

「2人とも何を・・・・・・」

俺は何のために2人がそんな事をするのか、分からずに呆然として

しまっていた。
そして次の瞬間、2人は右手を握り締め、右胸の上に置くと口を合わせてこう言った。

「「血の盟約により秘密を洩らした場合、この命をもって償う事を此処に明言する！」」

士術士隊の取り決めか何かだろうか、全く同じ動作で一言のズレも無く言い切った2人は部屋に置かれている椅子へと腰を下ろした。

「あの、2人とも。今のは？」
「あ、ああ士隊による規律だと思ってくれれば良い。　各隊の隊長、副隊長は陛下の近衛隊としての職務でもあるからな。　国の威信に拘る事柄を同盟国に伝えるという仕事もある」
「その場合は決まって先程のような『血の盟約』を口にし、秘密を守るというわけだ」
「そこまでしなくても」

俺は其れは流石にやりすぎでは？　と思ったが、次にナジェリアがいう言葉で納得がいった。

「大袈裟すぎると思っているのだろうが、重要な事を忘れていないか？」
「重要な事？　何かあったっけ？」
「一番最初に街の門で逢ったとき、ミコトが飛行魔術で空を飛んでいたことから風術士であることを確信していたのだが、一人の人間に対して一つの属性魔法は略(ほぼ)絶対だ。　遙か昔、賢者と呼ばれた人物は2属性以上の魔法を操っていたと聞いたことはあるが、今では如何頑張っても生まれついての属性以外は操る事が出来なくなっている」

「そんな常識といえることを覆した存在が目の前にいるのだ。　此れが重要なことでない筈がなかろう」

確かにこの世界に来た時にもミラに言われていたな。

「だからこそ『血の盟約』が必要なのだ！」

「この事が仮に広まりでもしたならば、大騒ぎになることは目に見えて明らかだ。　平和を愛する我が国なら問題は無かろうが、北の軍事国家であるガイラステリアに、この事が知られようものなら」

「ああ、間違いなく戦争のために利用されるな」

「分かった。　2人が其処までいうのなら『血の盟約』とやらを信じて秘密を話す事にするよ」

と言っても此処は宿屋の一室、何処に耳があるか分からないからな。

ミラに見張りをしてもらうか

（ミラ、済まないが周りに聞き耳を立てる者がいないか注意していてくれないか？）

（分かりました。　お任せ下さい、主様）

「それではお話します。　俺が2属性の魔法を扱えると言う事実ですが、俺は何故か幼少時に1属性の魔法すら使えませんでした」

2属性どころか全属性魔法を使えるのだが、これ以上の混乱を避けるため嘘八百で誤魔化す事にした。

「それは可笑しい。　普通は胎児が無意識に魔法を暴発させないようにと母の胎内にいるときに魔力封印を施して、物心つくまで魔法を使えなくするものだが」

「俺もそのことを変だと思い、親に聞いてみたのですが、俺からは魔力そのものが感じられなかったと言う事で封印は必要なかったと

いうことでした」
「聞きたいのだが？　父方の属性と母方の属性を聞かせてくれないか？」
「えっと、父は風の魔法を使っていたところを見たことがあるのですが、母が魔法を使っているのは見たことがありませんでした」
こんな説明で納得してくれるかどうか分からないけど、其れを証明する事は出来ないんだし構わないな。
「それで父親や周囲から『落ちこぼれ、出来損ない！』と言われ続けた俺は悔しさのあまり、曽祖父の残してくれた古文書や資料を手に猛勉強した結果、数十年も前に失われた飛行魔術を習得し、僅かながら土を操る属性に目覚めたんです」
「それで？　両親を見返すことは出来たのか？」
「いえ驚かせようと思い、魔法が上達してから披露しようと思っていたんですが、運悪く山賊に襲われ、両親ともども俺が住んでいた村は壊滅してしまいました。　俺は飛行魔法で空に逃れていて無事だったのですが」
ノスフィルド鉱山の帰り道で殺してしまった男の死体を見れば火属性も使えることがバレてしまうだろうけど、其の頃には此処を離れているから大丈夫だろう。
（マスター、よくも其処まで作り話を言えますね）
（ん？　とある物語の一説を俺なりにアレンジして言葉にしてるだけだよ。　まさか本当のことを言う訳にはいかないだろう？）
（確かにそうですが・・・・・別の意味で尊敬できますね）
ルゥと会話している俺が悲しみを我慢している表情と思ったのか、ナジェリアが頭を下げていた。

「すまん！　一度ならず二度までも古傷を抉ってしまうような事を」
「いえ、気にしてませんから」
「話は変わるが、どうだろう？　士術隊に入隊してみないか？」
「グレイアス様!?　なにを・・・・・・」
「いや、此れだけの才能を持ち合わせている者をただの冒険者にしておくのは勿体無いと思ってな」
「確かにそう言われればそうですが、不謹慎ですよ」
「それで如何だろう？　今なら士術士隊の副隊長の席が空いてるが？」
「すいませんが、今はそのような気分になれないんです。　誘ってくれた事は嬉しいのですが」
「そうか。　無理強いはできないな」
（主様、階下から複数の人間の気配がします。　会話に注意してください）
「それではこの話は此処までにしましょう。　俺も疲れているので」
「ん？　そうか疲れているところ済まなかったな」
「あ、グレイアスさん、錬金本試験の結果は如何しましょうか？」
「それなら明日、何時もの教室に来てくれ！　其処で合否判定をするから」

そう言ってグレイアスとナジェリアは宿屋の部屋を後にした。
その後、２人が城へと向かう道中にて。

「ミコトの話、どう思う？」
「故郷を襲われたと言う話ですか？　此処数年は何処かの村が襲われたという報告は入っていませんね」
「それは『この大陸では』という事だろ？　もしかしたら他の大陸から海を越えて来たのかもな」
「その考えは無理があると思いますよ。　皆、海獣を恐れて船を出

す事は懸念していますし、仮に飛行魔法で飛んでくるにしても魔力が持ちません」

「そうだよなぁ～～～不思議だ」

第１３９話　錬金資格証獲得（前書き）

お気に入り登録数が５０００件を突破しました！
ありがとうございます。

これからも頑張ります！

第１３９話　錬金資格証獲得

グレイアスとナジェリアを昔読んだ小説の一文を利用して言い包めた俺は宿屋の一室でこれからの事を考えていた。

（錬金も覚えたことだし、そろそろ土の精霊探しを再開するとしようか）

（一体、何処にいらっしゃるのでしょうか？　土の精霊様は）

（土って言うぐらいだから、地面の下とか洞窟の中とかじゃないか？　ミラは何か知らないか？）

（私も全ての精霊の事を知っているわけではありませんが、主様の仰られている事も強ち間違いとは言い切れませんね。　精霊の波動が感じられることから近くに居る事は分かりますが、どの方角に居るかまでは、残念ながら）

（そうか。俺が行っていたノスフィルド鉱山、南のサウシュルド鉱山、東のイストライル鉱山か。　どれかに居てくれると良いんだがなぁ）

（そういえばマスターと一緒に試験を受けていた、ルナという女性はどうなったのでしょうね？）

（今頃は何処かの鉱山で錬金してるんじゃないか？　期日は確か明日までだろ？）

精霊との念話を終えた俺は、色々な事があって気分的に疲れていたため、何時もの様に酒場へ行かず、亜空間倉庫に置いてある果物を食べて早めの就寝となった。

そして翌朝、俺は亜空間倉庫から２０ｋｇの錬金した鉄を取り出すと、小脇で抱えて城へと向かった。

城門に到着すると略同時に朝を告げる鐘の音が鳴り響き、槍を携え

た衛士が姿を現した。

「おっ？　早いな。今日も錬金講習か？　頑張れよ」

何時もの様に城門の衛士に通行証を見せると、城内の教室に向けて歩き出した。

数分後、ルナとともに錬金の授業を受けていた教室に辿りつき、更に十数分後には現代では既に使われなくなったレトロな計量器を抱えたグレイアスが足で引き戸を開けるという行儀が悪い格好で入ってきた。

「おはようございます」

「お？　あ、ああ、おはよう」

突然、挨拶をした俺に対してグレイアスは手に持っていた計量器を落としそうになり、慌てて持ち直していた。

「さて、昨日も言ったとおり、錬金本試験の合否を確認するぞ」

「はい」

グレイアスは教壇の上に秤を置き、目盛りが正確に０と重なるように微調整をしている。

俺は予め亜空間倉庫から取り出しておいた、約２０ｋｇもの鉄塊を教壇の前にある机に置いた。

「それでは、まず最初に質量からの計測だ。　２０ｋｇあれば文句なしの合格、１ｇでも足りなければ、その時点で不合格となる」

グレイアスはそう言うと、鉄塊をゆっくりと秤の上に載せはじめた。

塊を全て載せ終わると、秤についている目盛りは１８～２２ｋｇの

間を行ったり来たりしている。
緊張しながら待つこと数秒後、秤の目盛りは２０ｋｇと２１ｋｇの中間で微動だにしなくなった。

「ふむ、第１の審査は合格だな。　それでは続けて第２の審査に移行する」

グレイアスは秤の２０ｋｇ～２１ｋｇの中間で停止している針を固定すると、鉄塊を秤から下ろし、何故か錬金術を施している。

グレイアスの手から放たれた土属性の光が鉄塊を包み込むと、その数秒後には鉄塊の横に土気色の石や細かい砂が散らばっていた。
そしてグレイアスが鉄塊を再度、秤の上に載せると固定されていた針が２目盛りほど２０ｋｇの方に移動した。

「ふむ、鉄塊に含まれていた不純物も範囲内だな。　第２の審査も合格だ」

俺はこの『審査』が何処まで続くのか不安になり、グレイアスを心配そうに見つめていると。

「ミコト、心配しなくても次の審査で終わりだ。　それでは最後の審査として素材の鑑定を行なう」
「鑑定ですか？」
「うむ。　俺としては生徒を信じたいところだが、毎回ズルをする奴等が後を絶たなくてな」
「ズルとは？」
「職人ギルドで入坑許可証を渡す時に言ったと思うが、鉱山の中は時として魔物が蔓延る危険な場所だ。　そのため、敢えて危険な鉱山に入らずに、そこらに落ちている鉄屑を恰(あたか)も鉱山で採掘してきた

かのように練金して、持ってくる奴が毎回数人はいるんだ」

なるほど、鉱山の内部のような暗闇で錬金中に背後から魔物に襲われれば、護衛がいかに熟練の戦士でも危険だということか。
それに護衛代も節約できるから一石二鳥というわけだな。

「それで見分ける方法なんだが、上手い事に街の近くにある3箇所の鉱山で採取できる鉄には少量の微弱な磁気が含まれていてな。
熟練の錬金の使い手でなければ、探知すら出来ないほどの極微量なんだ」

グレイアスはそう説明すると、上着のポケットから約１０ｃｍ四方の物体を取り出した。

「此れは鉱山で取れた鉄を錬金で圧縮した物だ。　此れを今からミコトの持ってきた鉄塊に融合させる」

圧縮？　其れが如何いうことになるんだ??

「意味が分からないといった顔だな。　此れを融合することにより、素人目で見ても鉄塊が磁気を帯びているか、帯びていないかを判断する事が出来る。　もし仮に鉄塊に磁気が無ければ、融合することなく剥がれ落ちる」

そう言いながら、鉄塊の上にポケットから取り出した物体を置くと、掌から土属性の魔力を放出して鉄塊全体を覆いつくした。

その時間は第2審査の時ほど長くは無く、一瞬で終了した。
肝心の結果はと言うと、磁気を帯びた物体は何処にも不自然な所はなく、鉄塊にタンコブでも出来たかのように融合していた。

「よし！　最終審査も合格だ。この結果により、ミコトを錬金術士と認め、錬金証を授与する」

グレイアスは懐から八角形の中央に何か鷲が翼を広げている絵が描かれているバッチのような物を取り出すと、俺が着込んでいる衣服の右胸へと取り付けた。

「おっと、そうだ！合格祝いとして珍しい物を見せてやろう。　その前に磁鉄は剥がさせて貰うよ」

グレイアスは再度、鉄塊を土属性魔力で包み込むと、磁鉄を引き剥がした。

そして徐に鉄塊に手を置くと、先程の審査の時とは比べ物にならない量の魔力で鉄塊を包み込んだ。

顔からは苦しいのか脂汗が滴り落ちて、足元に水溜りが出来上がっていく・・・。

（マスターほどではありませんが、かなり強力な魔力が放出されていますね）
（俺的に言うと、クラス何ぐらいだ？）
（そうですねぇ～～クラス２０と言ったところでしょうか）

普通の人間でクラス２０の魔力を放出しているのか。　流石は隊長格といったところか。

鉄塊がグレイアスの魔力で包み込まれてから数十秒が経過した頃、土気色の光は少しずつ収まり始め、完全に光が消えた頃には鉄塊の

置いてあった場所には1本の剣が置かれていた。

「ハァハァ・・・・・こ、このように一定時間、大量の魔力を送り続けることによって、特定の道具を使わなくても武器を精製することが出来る。　俺もまだまだ精進が足りないな」

次の瞬間にはグレイアスは椅子に倒れ込むようにして座り、肩で息をしていた。

（確かに便利と言えば便利だけど、これだけ疲労困憊しては戦いどころじゃないのでは？）

（マスターのように魔力が無限な場合は別として、一般人にとっては問題ですね）

グレイアスの息遣いが安定してきたところで気になることを聞いてみる事にした。

「ところでルナの方はどうなったんです？　合格したんですか？」

「ハァ、ルナはミコトが合格した二日後にギリギリではあったが合格し、南のサウシュルド鉱山に向かった。　期限は今日の日没までだから、もし戻ってこなければ不合格ということになる」

良かった合格したのか。　あとは無事に帰ってくるだけだな。

「ミコトはこの後、如何するんだ？　俺としては土術士隊に入ってほしいんだが」

「まだ決まっていませんが、もう暫く各地を旅しようかと思っています。　その後は決まってませんが」

と言うより、土の精霊が見つかれば次の異世界に旅立つから俺の記

憶は皆の中から消えるんだけどね。

「そうか残念だ。それで？　直ぐに旅立つのか？」

「いえ、身支度を整えてからですので、最低でも明日出発することになりますね」

俺はその後、残念がっているグレイアスと城門前で別れ、商店街へと足を進めた。

第１４０話　精霊を探しに外へ

ドワーフ族の助けもあって、ノスフィルド鉱山から無事に２０ｋｇの鉄を持ち帰った俺はグレイアスの錬金講習最終審査を受け、無事に錬金術士と認められた。

そして俺は此処までの世話をしてくれた魔道具屋のガンツさんに挨拶をするべく、商店街を目指していた。

商店街の中ほどにある魔道具屋まで残り１００ｍと言うところで恒例ともいえる、聞き覚えのある怒鳴り声が聞えてきた。

「てめえ！　何回言っても分からねぇな。　そんなことじゃ、何時まで経っても半人前のままだぞ」

怒鳴り声の直ぐ後に何かが転倒する『ガラガラガシャーン！』という盛大な物音も聞えてきていた。

「けっ、口ばかりが一人前になりやがって」

「相変わらずですね」

「ん？　おお、兄ちゃんか今日はどうした？」

「いえ、ガンツさんの御蔭で、無事に錬金術士に認められたので一言御礼をと思いまして」

と言いながら、頭をガンツさんに下げる。

「よせやい。　ケツがむず痒くなっちまうぜ」

ガンツさんは此方に背を向けると、頭を掻きながら照れているような仕草を見せている。

「元はといえば期限が過ぎていたにも拘らず、ガンツさんが声を掛けてくれた御蔭で錬金講座に参加する事が出来たのですから」
「いや、切欠を作ったのは確かに俺かもしれんが、合格したのは兄ちゃんの実力だ。　堂々と胸を張って自慢しても良いとおもうぜ。
・・・・・それに比べてウチの若いモンは」

ガンツさんがふと店の奥に目を遣り、俺も視線を追うようにして目を向けると其処には初日に俺の持ってきた魔道具に対して無茶苦茶な買取額を示した店員が戸棚の下敷きとなって生き埋めのような状態になっていた。

（さっきの派手な音の正体はこれか）
「何時まで寝てるつもりだ。　さっさと起きて仕事しねえか！」

アンタが自分が突き飛ばしたんだろうに。
ガンツさんから再度激が飛んだ後、店の奥に居た他の店員が、埋もれている店員を発掘するかのように次々と折り重なるようにして倒れている戸棚を起こしている。

「まったく、柔な野郎だぜ。それで此れから如何するんだ？　土術士にでも入隊するのか？」
「それも誘われましたが、今は行かなければならない場所があるので」
「直ぐに出発なのか？」
「いえ、これから旅の支度として食料などを揃えようと思っています。　貴重な魔道具の御蔭で保管場所にも困りませんからね」
「おぅ、気をつけて行けよ？　またな」
「はい。　ガンツさんもお元気で」

俺は再度、深く頭を下げると食料品を取り扱っている店へと足を進めた。

その後、数箇所もの食料品を取り扱う商店を巡り、所持金の約９割９分９厘分の果物や肉類を購入し、亜空間倉庫に収納した。

前の世界から持ってきた硬貨も錬金術を使用して鋼材へと変化させたのだが・・・・・銀貨と言っているのにも拘らず、銀３割、鉄６割、他の不純物が１割と、とても値がつくような代物ではなかった。

こんな事なら、元の銀貨のままで『何かの工芸品』として売れば値がついたかもしれない・・・・・。

（今のところ食料は此れだけで良いか。足りなければ、魔物でも捕まえて食えばいいし）

（凶暴な魔物もマスターに掛かれば、ただの食料ですか）

（問題ないだろ？　人に害を為す存在を始末して腹も膨れるんだから、一石二鳥ということで）

（はぁ～～魔物に同情してしまいそうです）

（それはそうと腹が減ったな。　出発前に腹ごしらえをするとしようか）

俺はそういうと何時もお世話になっている、宿屋に隣接している酒場へと足を運んだ。

「いらっしゃい！　今日は、なんにしましょ？」

「そうだなぁ・・・・・何時ものルンゲの丸焼きを６人前で」

「わっかりました！　毎度あり」

その３０分後から店員によって次から次へと運ばれてくる料理を、

ベルトコンベアでの流れ作業をしているかのように俺の胃袋へと消えていく。

（何時も思いますが、物理的に言ってマスターの何処にアレだけの量が入って行くんでしょうか？　如何考えても体格の倍以上の質量がありますよね）

（うん。　どういう訳か・・・・・・ムシャムシャ・・・・・・腹が膨れないんだよなぁ・・・・・・ゴリゴリ）

（マスター、行儀が悪いですよ。食べるか喋るかどちらかに統一した方がよろしいかと）

ムシャムシャ、ゴリゴリ、グチャグチャ、モリモリ。

（食べる方を優先しましたか。　もういいです）

その後、厭きれた様な口調のルゥにツッコミを受けながら、２時間ほどで全ての料理を食べ終えた。

「毎度の事ながら、気持ちの良い食べっぷりですね。お会計ですが、青銅貨９枚になります」

俺は普通の道具袋の中に手を入れると青銅貨９枚を取り出して出口付近にいる女性へと手渡した。
これで所持金は全て使い切った事になる。

「えっと丁度ですね。　有難うございました、またのお越しをお待ちしています」

腹を擦りながら酒場を出て行くと後には目が点となって俺が座っていたテーブルに積みあがっている他の客と、その積みあがっている

皿を厨房の奥へ次から次へと運んでいる女性店員の姿があった。

（さて、それじゃあ出発するか！　まずは南のサウシュルド鉱山から行くか）

（行くのは良いのですが、錬金試験のように入坑許可証を貰わないといけませんね）

（そういえばそうだったな。　じゃ職人ギルドからだな）

その後、職人ギルドで南のサウシュルド鉱山の入坑許可証を受け取ると、今度こそ街の外へと歩き出した。

序に東のイストライル鉱山の入坑許可証も欲しかったのだが。

『許可証は1回につき、1箇所の鉱山しか発行できないよ。　イストライル鉱山に行きたければ、サウシュルド鉱山の入坑許可証を返してもらわないとな』との返事が返ってきたのだ。

上手い具合には行かない物だ。

「そういえば、日没まであと僅かだな。ルナは試験に合格したんだろうか？」

夕焼けで赤く染まりかけた空を見上げながら俺は颯爽と街の外へと歩き出した。

一方其の頃、錬金試験中のルナはというと・・・・・・。

「ルナ～～～大丈夫？」
「クシュン！　あ～～～頭いたい。折角鉱山に行ける資格を貰ったのにーーーー」

ルナは自宅のベッドで横になっており、額の部分には母の手によって冷たい水で冷やされたタオルが乗せられている。

「仕方ないわよ。　魔力の使いすぎで、気づかないうちに身体に負担が掛かっていたのね」
「ううううう・・・・・・」
「唸ったって、だ～め！　今回も良い所まで行ったんだし、次回の錬金講習できっと合格するわよ」
「分かってはいるんだけど諦めきれない。でも頭痛くて動けない」
「はいはい、無理しないで眠りなさい。じゃないと治る物も治りませんよ」

ルナは母の手によって静かに眠りについた。
ちなみに体調が完全に回復したのは、錬金講習期限の5日後だったという。
当然ルナは錬金資格を獲得できず、半年後に開催される次の錬金講習に向けて特訓を開始するのだった。

第１４１話　鉱山での惨事（前書き）

少しグロい表現があります。

第１４１話　鉱山での惨事

街の外を鉱山に向けて歩き出してから、体感時間で凡そ1時間が経過した頃、空が完全に赤く染まると同時に街の方角から日没を示す、鐘の音が聞えてきた。

（たしか日没の鐘の音が錬金最終試験のタイムリミットを現しているんだったよな。　ルナは無事に合格したのかな？）

そのような事を思いながら、最終試験の時の街へ帰る時のように魔物の襲撃や、別の何らかのイベントに身を備えながら、右手を腰の剣に携えて荒野を進んで行った。
だが、何か別の強大な力でも働いているのか、一向に魔物の影すら見当たりはしなかった。

（おかしいな。　ノスフィルド鉱山に向かっていた時は嫌になるほど魔物の襲撃に出くわしたのに。何か嫌な予感がしてならないな）
（私も周囲の魔物の気配を読んでいるのですが、何故か何の気配も感じません。　それこそ、魔物以外の野生動物の気配すら）
（一体全体、如何いうことなんだ？）

考えていても始まらないと思い、臨戦態勢を整えながら周囲に気を配り鉱山への道を歩いていく。

そして早歩きで歩き始めて5時間が経過した頃、魔物に一度もエンカウントしないまま、目的の鉱山へと辿りついたのだが、此処でも不審な点が見受けられた。
ノスフィルド鉱山の時は2人の衛士が入口を警備していたにも拘らず、このサウシュルド鉱山には誰一人として衛士はいないのだ。

更に鉱山の奥からは不穏な空気が漂ってきていた。

（マスター、気がついていますか？）

（ああ、血の匂いがする。　序に途轍もない殺気もな）

俺は鉱山の入口手前にある、鉱夫の休憩所を覗いてみたが其処にも誰一人として姿は見えず、鶴嘴のような道具だけが床に散乱していた。

ランタンだけが見当たらない事から鉱石を掘ること以外で誰かが内部に立ち入った事が予想できた。

俺は何処と無い違和感を持ちながら、掌に灯り代わりとなる火炎球を作り出し、鉱山内へと足を進めた。

（気をつけて進んでください。　鉱山内は一筋の光も差し込まない暗闇です。　幾らマスターが不死身とはいえ、背後から襲われては一溜りもありませんから）

（分かっている。　周囲の気配探知を頼むぞ）

（はい。くれぐれも、お気をつけて）

ルゥに協力を要請した俺は真っ暗な鉱山内をどんどんと進んで行った。

ゲームのダンジョン内とは違い、マップのような物もドワーフの道案内も無かったが、鉱山の奥から頻りに漂ってくる濃厚な血の匂いと、途轍もない殺気が道案内となって迷うことなく深部へと足を進めることが出来た。

（なんなんだ此れは？　一体、奥で何が起こっているんだ？）

（マスター、そろそろ広い空間に出るようです。注意してください）

（分かっ『グニャ』・・・・・・なんだ？）

何かゴムの塊を踏みつけたような、気持ちの悪い感覚がした事から、掌の火炎球を持ってしゃがんでみると其処には苦悶の表情を漂わせて、身体に3本の鋭い爪痕が刻まれた男の死体が横たわっていた。

「ウグッ！？」

喉の奥から何か酸っぱい物が込み上げてきそうな感覚を押し止めて、壁に手を突いて堪えた。

（どうやら強大な魔物がこの奥に潜んでいるようですね・・・・・・マスター、大丈夫ですか？）

（あ、ああ、問題ない。大丈夫だ）

惨ったらしい死体を見て気分を害した俺は、咄嗟に死体から眼を背け深呼吸して気分を落ち着かせると剣を抜き放って奥へと足を進める。

『ベチャベチャ・・・・・・グッチャグッチャ・・・・・・』

（何だ、この音は？）

俺は意味不明な音がする方へ最低限の明るさになるようにした殺傷力のない火炎球を飛ばすと、其処には驚きの光景が待ち構えていた。

来る途中に苦悶の表情を浮かべて息絶えていた男の相棒だろうか、まるで食いちぎられたかのように下半身と上半身が別々の場所に転がっている。

ただ気になることに暗がりで色までは分からないが、グレイアスや

ノスフィルド鉱山の門番が着ていたような鎧とは全く違っていた。

（こいつ等が鉱山で噂されていた不審者って奴か？）

さらに、奥の暗闇へと目を遣ると、既に息絶えている人間の下半身に何か巨大な虎のような魔物が噛み付いている。

俺は死体とはいえ亡き者を冒涜する行為が許せずに魔物に攻撃を加えてみたのだが。

「グゥオ？　グルルルルゥゥゥ」

魔物は俺の一撃を受けたにも拘らず、意に反する事なく目の前の食事をしていた。

「何て固い皮膚だ・・・・・剣が弾かれるとは。　こうなったら」

（マスター、此処で魔法を使っては駄目です。魔物共々、生き埋めになってしまいますよ？）

（はっ、そうだったな。では如何しろと？）

（目の前の生き物が魔物である以上、何らかの弱点はあるはずです。色々な場所を攻撃してみましょう）

ルゥに言われ、目に見えないほどのスピードと暗闇である事を利用して魔物の目や巨体を支えている足、脈動している腹など、数箇所を剣で攻撃してみたが有効といえる成果は与えられなかった。

流石の魔物も此処までやられれば、此方の存在に気づかないわけはなく、口の周りを血で真っ赤に染めながら『新しい活きの良い獲物を見つけた』と言わんばかりの表情で襲い掛かってきた。

「グオオオオオォォォ！！」

魔物は自身の鋭い爪を武器に俺へと襲い掛かってくる。
俺も剣で防御しながら、隙を見て魔物に切りかかるも、全く攻撃は通じなかった。
そしてそのまま数十分が経過した頃、偶然にも俺の振った剣が魔物の開けた口の中に突き刺さった。

「グワギョオオオオオーーーーン」

今までどのような攻撃を加えても有効打を得られなかったにも拘らず、今の攻撃は完全に効いていた。

（そうか、コイツの皮膚はどんな攻撃も通さないが、身体の中は別と言う事か）
（マスター、どうするおつもりで？）
（コイツは腹を減らしているんだろ？　もう要らないという程の量を御馳走してやるさ）
（私的にはマスターに危ない事はしてほしくないのですが・・・・・仕方ありませんね。　無理はなさらないで下さい）

俺は持っていた剣を腰の鞘に収め、無防備となって魔物の前に立つ。
魔物は最初、訳が分からないといった表情を見せていたが、次の瞬間には大口を開けて襲い掛かってきた

「かかった！」

俺を食おうとでも思って襲い掛かってきたのか、俺は右腕を大口を開けていた魔物の口の中へと突っ込むと魔力を解放する。

「腹が減っているんだろ？　遠慮しなくても良いんだぜ」

魔物は俺の腕を食いちぎろうと鉤爪のような前足で引っかいたり、顎を上下させたりしているが、俺の腕には１ｍｍほども傷は付かず、次第に疲れが見えていた。

「なんだ？　何かしたか？」

俺は魔物の口の中にある右腕に纏まった魔力を流しファイアーボールと唱えると、魔物は悲鳴を上げる暇も無く腹の中から爆散し息絶えた。

「全く梃子摺らせやがって」
（マスター、お見事です！）
（さて、これで漸く精霊探しができるな。　とは言っても、此処には精霊はいないか）

俺が踵を返して鉱山から外に出ようとすると、ミラから念話が届いた。

（主様、お待ち下さい。　土の精霊の波動が此処のすぐ近くから感じられます）
（この鉱山の中か？　とても精霊のいる気配は感じなかったが）
（いえ鉱山の外から感じます。　一旦外に出てもらえますか？）

俺はミラの案内の元、一旦外に出ると、鉱山をぐるっと一周するかのように山の斜面を登っていく。
そして鉱山の略真上に位置する場所まで来ると、目の前に祠のような物が姿を現した。

（土の精霊、此処に居るのでしょう？　姿を現しなさい）

ミラが不意に祠に向かって呼びかけると、祠の建っている地面の中から土気色に輝く何かが姿を現した。

（うぅ～ん。　光の精霊、いや今はミラだっけ？　今度は一体、何の用なの？）

（土の精霊、しゃきっとしなさい！　主様の目の前ですよ）

（へっ？　主様～）

土気色の光の玉は俺の目線に移動すると、頭の先から足のつま先まで舐めるようにして移動した。

（あれ？　何か懐かしいような気配がするけど、何だったっけ？）

（情けない事ですが、本人は寝ぼけ癖があるんです。そろそろ目が醒めるとおもいますが）

ミラがそう言った、約１０秒後。

（あれ？　今、ミラと主様が居たような気がするな。気のせいかな？）

（気のせいではありませんよ。土の精霊、主様の目の前で何と体たらくな）

（えっ、主様！？　お恥ずかしいところを御見せして申し訳ありませんでした！）

土の精霊は改めて俺の姿を見ると、頭を下げるようにして何度も何度も上下に移動した。

（か、構わないから精霊の宝玉を貰えるかな？）

（そのような物で宜しければ何個でも。　ですからごめんなさい、

ごめんなさい！）
（いや、1個でいいから）

俺は笑いを堪えながら、精霊の腕輪を土の精霊に向けて精霊玉を手に入れた。
その間も土の精霊は謝り続けている。

（主様、土の精霊はこの際置いといて、次の世界に旅立ちますか？）
（そうだな。　ほらほら、何時までも謝り続けてないで行くよ？）
（は、はい。　申し訳ありませんでした）
（だめだこりゃ）

その後、落ち着きを取り戻した土の精霊にノルムという、ノームを捩った名前をつけて次の世界に旅立った。

「そういえば、入坑許可証を返さないままで界渡りしてしまったな。まぁ、次にこの世界に降りるときにでも返しに行けば良いか」

第１４２話　危機一髪

土の精霊ノルムに逢った数分後、俺はミラに連れられて次の世界に姿を現した。

が、何故か姿を現した途端に俺の背には、１人の脅えた表情をした少女が青い胸当てを身に付けた女性に身体を震わせながら抱きかかえられていた。
俺の目の前には数多くの真っ黒な鎧を身につけた3人の男と黒いマントを着込んだ魔術師のような男が戸惑いの表情を見せながら、剣や杖を構えて俺を睨みつけていた。

「怪しい奴め！　いったい何処から現れた！」
「何処からと言われてもな。　此処からとしか言えんな」

そう言って俺は人差し指で足元を示す。

「人を馬鹿にしておるのか。まぁいい、背に隠す者を速やかに此方に引き渡してもらおう」

俺はそう言われ、俺の背に隠れて震えている少女を見るとビクッと身体を震わせて泣いていた。
女性も所々に剣による傷を負っており、放っておけば間違いなく出血多量で命を落とすんじゃないかと思われるほどの大怪我だった。

「貴様等のような、売国、者などに姫を渡すわけには行かぬ。恥をしれ、愚か者どもが」
「ふんっ！　既に虫の息ではないか。貴様が息絶えた後で、ゆっくり事を運ばせてもらおう」

青い鎧の女性と黒い鎧の男達は俺が眼に入らないのか、完全に俺の存在を無視して会話している。

正直、どちらに味方すればいいのか迷っていたが、女性が口にした『売国者』という単語を聞く限り、黒い鎧を着た男達は裏切り者という事だろう。

そうなれば、どちらが正しいかは火を見るより明らかだった。

「ひ、姫様、申し訳ありません・・・・・・」

そう考えていると、遂に限界が訪れたのか血塗れの女性が血を流しすぎて意識を失ったようだ。

「これで俺達に楯突く邪魔者はいなくなったわけだ。あとは姫を手土産に国に取りいるだけだ」

「そういう訳には行かないな」

「ぬっ？　貴様、邪魔立てする気か」

「先程の会話を聞く限りでは、正義は此方の女性にあるようだしな。悪いが敵対させてもらう」

「馬鹿な奴だ。此方には魔術師がおるのだぞ？　命が惜しくなければ、此処で見聞きした事を忘れる事だ」

俺に魔術師の存在をアピールして脅しをかけてくるが、たかが魔術師1人怖くも何とも無く、平然と構えていると次第に男の表情が険しくなっていった。

「あくまで邪魔をするというのだな？」

男がそういった直後、男の後方に待機していた2人の男達が剣を構

え直して俺に飛び掛ってくる。

俺は別々の方向から襲い掛かってくる剣をかわしながら、相手の膝を甲冑ごと圧し折り、戦意を喪失させる。

「ガアァァァーーー！？」

「ウグゥゥゥーーー！」

2人の男の膝は俺が蹴り飛ばした事により、決して通常では曲がらない方向に曲がり、男達は剣を投げ出して膝を抱えながら転げ捲くっている。

「おのれぇ～～不甲斐ない馬鹿どもめ！　俺が時間を稼ぎます。その間に詠唱を」

会話を聞いている限りでは、男よりも魔術師の方が偉いのか、男はそう言って剣を両手で構え、低姿勢で俺へと突進してきた。

「貴様も下らぬ正義感さえ出さなければ、生き延びられたものを・・・・覚悟しろ」

そして男が剣を構えて此方に来ると同時に、男の背後から魔術師の攻撃であると思われる火炎球が幾つも俺に襲い掛かってきた。

俺は魔法攻撃をものともせず、男の剣をかわしながら懐に入ると握り拳を作り、控えめな力で腹を殴った。

全力で殴ると、それこそ腹を突き破ってしまうので手加減をしたのだが、思いもよらない結末を迎えてしまう事となってしまった。

男は手加減した俺の拳を受けて、よろめいた拍子に魔術師の放った

魔法が背中に直撃し、一瞬のうちに全身火達磨となり息絶えた。

「ヒイィィィィィーーー！？」

結果的に仲間の男にトドメを刺してしまった魔術師は言葉にならない悲鳴を上げて走って逃げてしまった。

俺に膝を蹴り折られて蹲っていた男達も匍匐全身のような体勢で足を引き摺りながら逃げていく。

「・・・・・セフィア？　ねぇ、どうしたのじゃ？　セフィア、セフィアーーーー！！」

俺は後味の悪さに呆然としていると、先程の脅えていた少女が目に大粒の涙を浮かべながら、青い鎧を着た女性を必死に揺すっていた。

時折、女性から『ウグッ！』という、短い言葉と荒い息遣いが聞えてくる事から完全に息絶えては居ない事を知った俺は、瞬時に女性に近づき回復魔法を掛けることにした。

「な、何をするつもりじゃ！？　セフィアにこれ以上、手を掛けることは許さぬぞ」

少女は俺が女性に近づいた事で、守られる立場から守る立場へと一転し、俺を女性から遠ざけようとする。

「大丈夫だ。治療しているだけだ、怖がらなくても良い」

「ほ、ほんとうか？　セフィアは助かるのか？」

「あ、ああ、なんとか間に合ったみたいだからな。っと此れで良い。もう暫くすれば、目を醒ますだろう」

そう言いながら女性の顔を覗き見ると死人のように、真っ青だった顔色は体温が戻ってきたのか次第に赤みを帯びてきていた。

「ほ、本当じゃ～～～良かった。セフィア～～～」

少女は自分の服が『セフィア』と呼んだ女性の血で赤く染まろうと構わずに、未だ倒れ伏している女性に抱きついて泣き出している。

こうして新しい世界に到着した直後に戦闘に巻き込まれた俺は身近にある岩に腰掛け、女性が目を醒ますのを待ち続けた。

第１４３話　姫と護衛騎士

治療を施してから数時間が経過した頃、漸く女性に動きがあった。

因みに泣き喚いていた少女は流石に泣きつかれたのか、いつの間にやら女性にしがみ付いたまま寝息を立てている。

「ここは・・・・・・はっ！？　姫様！」

「大丈夫。泣き疲れて眠っているだけだ」

「っ！」

女性は岩に腰掛ける俺の姿を見つけると、上半身を起こそうとするが血を流しすぎた事による貧血で身体が思うように動かずに地面に尻餅をついてしまう。

そのショックで眠っていた少女も目を醒まし、視界に女性が入ると同時に飛びついて嬉し泣きしている。

「姫様。よくぞ御無事で」

「セフィア～～～死んだのかと思ったのじゃーーー」

セフィアと呼ばれた女性は、我が子を慰めるかのように少女の頭をそっと撫でている。

「姫様、私が眠っている間に一体何が起こったのですか？」

「こやつは悪漢を倒し、セフィアの傷を治してくれたのじゃ」

「傷を！？　そういえば・・・・・・」

女性は深い傷を負って未だ血で染まっている、脹脛（ふくらはぎ）や二の腕を恐る

恐る触り、傷が無い事を確認して驚きの表情をみせている。

「魔術師の方でしたか。先の御無礼をお許し下さい」

「我からも礼を言うぞ。よくぞセフィアを助けてくれた、この通りじゃ」

少女は姫と呼ばれていたにも拘らず、偉ぶった態度も見せずに対等であるかのように頭を下げている。

「そんな畏まらなくてもいいですよ。目の前で困っている方を助けるのは当然の事じゃないですか」

「ふむ。オヌシは、そこ等に居る魔術師とは何処か違うようじゃの」

少女は顎に手を当てて何かを考えながら、時折此方の表情を見ていた。

（この世界の魔術師というのは、どんな存在なんだ？）

その横で、つい先程目覚めたばかりのセフィアが立ち上がろうとしている。

「無理は為さらないほうが良いですよ。大量の血液を流したのですから身体に力が入らないでしょう」

「だが、この事を一刻も早く城に伝えねば」

「この者の言う通りじゃ。無理をしてはならぬ。これは命令じゃ」

「・・・・・・分かりました」

少女が『命令』と言う言葉を口にすると、女性は渋々ながら従った。

「何をするにしても、まずは血を増やす事から始めましょう。食料

は沢山、ご用意してありますから、先ずは食事ですね」
「食料とな？　何処にも、そのような物は見受けられぬが？」
俺が口にした『食料』と言う言葉を聞いた少女は御腹が減っているのか、キョロキョロと忙しく顔を動かしている。
「無いではないか。我をからかっているのか？」
「いえ、ちゃんと此処にありますよ」
『騙された』と思っている少女を横目に腰の道具袋から林檎のような形をした少女の顔ほどの大きさの果物を１０個取り出し、汚れていない石の上に置いた。
「どうぞ。足りなければ、もっと出しますから」
目の前で山に積まれている果物を見て、少女と女性は目が点になっている。
「？　心配しなくても毒などは入っていませんから」
「いや、毒云々と言うよりも、何処から此れを出したのじゃ？　如何考えても、この量が収まる袋には見えぬが」
「流石は魔術師殿、我等とはかけ離れた能力をお持ちで」
女性は口ではそう言いながらも、目は虚空を見つめている。
「そんな事はどうでも良いですから食事をしましょう。じゃないと何時まで経っても出発できませんよ？」
「どうでも良くは無いのじゃが・・・・・まぁオヌシの言う事にも一理あるの。遠慮なく頂くとしよう」
「ひ、姫様！？」

怪しげな果物に躊躇もなく、手を伸ばし齧りついた少女を女性は心配そうに見つめる。

「シャクッ　うむ。見たこともない果物じゃが、中々美味いのぉ。ほれセフィアも食わんか」

「は、はい。頂きます」

毒見として従者が先に食べるのが普通じゃないのだろうか・・・・・。

その後、果物を食べながら自己紹介し、少女はコーランディアという国の皇女で名をヴィナリスと言い、セフィアはヴィナリスの護衛騎士だと言う事だった。

保養のために出かけていた、ヴィナリス姫とセフィアを含む、護衛騎士４人でとある街に滞在していたところ、町を警備していた衛兵が突然、刃を向けてきたのだという。

裏切りを知らせるべく、城へと戻る途中に襲い掛かってきた男達により１人また１人と護衛騎士が倒されていき、もう駄目だと思った時に何処からともなく、俺が現れたのだと言う事だった。

そして会話しながらも食べ続けていたヴィナリス姫とセフィアは疲労のためか、もしくは満腹感からか静かな寝息を立てて眠りについた。

「見ず知らずの俺が居るっていうのに、やけに無防備な２人だな。一応信頼されていると見て良いのかねぇ」

俺は２人が凍えないように魔法で火を熾すと精霊と念話で話し出し

た。

（ミラ、もう少し転送場所を考えてくれないか？　結果として人助けになったから良いけど）

（申し訳ありません。まさか、このような事が起きていようとは思いも寄らず）

（まぁいいか。それで聞く暇が無かったけど、此処はどんな世界なんだ？）

（この世界は雷の精霊が管轄する世界です。主様もご覧になったとおり、魔法も存在していますが、魔術師は剣士や戦士と比べて身分が高い位置にいます。殆んどの魔術師は自分達をエリートと思い、上から目線で物を言います）

（それでセフィアもあからさまに怪しい俺に対してでも、あの口調だったのか。でもヴィナリスも一国の姫なんだろ？　幾ら魔術師が偉いとはいえ、流石に腰が低すぎないか？）

（あの姫が特別なんだと思いますよ。幾らなんでも、王族≦魔術師ではありませんから）

（ところで、俺はこのあと如何すれば良いとおもう？）

（主様のお好きなように為さってください。既に答えは出ているのでは？）

（ああ、見捨てては置けないからな。城まで護衛してやりたいし、良いかな？）

（私達、精霊は主様に従います。ところでセフィアさんは起きているようですね）

（そうなのか？　まぁ初めて会う男の前で主を前に無防備に寝られる方が如何かしているけどな）

俺はミラとの念話を辞めて狸寝入りをしているセフィアに小声で話しかけた。

「・・・・・セフィア、起きているんだろう？」

俺が声を掛けた瞬間、声を掛けられるとは思っていなかったのか、身体をビクっと震わせヴィナリスを起こさない様にして上体を起こした。

「何時から気づいていたのですか？」

「最初からだよ。幾らなんでも護衛すべき姫が居る前で、不審者である俺の前で無防備な姿を晒さないと思っていたからね」

と言っても、俺が気がついたのはミラに言われてからなんだけどね。

「流石ですね。ミコト殿は如何して、危険な真似をしてまで私達を助けようと？」

「さっきも言ったけど、魔術師とか剣士とか関係無しに、困っている人を見過ごせないんだよ。特に目の前で死にそうになっている姿を見た時にはね」

「やはり、ミコト殿は他の魔術師とは違いますね」

「安心したなら、もう少し寝たら？　俺は見張りをしておくからさ」

「姫様の手前、正直無様な姿は晒せないのですが、如何やら限界のようです。申し訳ありませんが宜しくお願いします」

「夜明けまで僅かな時間しかないけど、ゆっくり休んでくれ」

セフィアは頷く事で了承すると身体を横たえ、今度こそ寝息を立てて安心した表情で眠りについた。

そして俺は周囲の気配に感覚を研ぎ澄ませつつ、果物を齧りながら朝を迎えた。

第１４４話　とある朝の風景

翌朝、ヴィナリス姫が目を醒ます前に起きたセフィアは傍にある泉の水で顔を洗うと、慣れた手つきでヴィナリスを起こしに行った。

「姫様、朝です。起きてください」

「んみゅ～～セ、フィア？　あと5分・・・・・・」

俺はその様子を見ながら『何処の世界でも朝は同じか』と笑いながら様子を見ていた。

「姫様！　我等は一刻も早く、この現状を城に伝えねばなりません。その為には・・・・・・」

クドクドクドクドとセフィアは未だ目が覚めきっていないヴィナリスに対して、説教とも思える言葉を執拗に投げかけていく。

「分かった！　起きる、起きるから止めてくれ」

「姫様、おはようございます」

とんだ目覚ましで起こされたヴィナリスは、体調の悪そうな顔で夕食時に食べた果物に齧りついている。

「それで『シャクッ』今日は『シャクッ』如何するのじゃ？『シャクッ』」

「お行儀が悪いですよ？　喋るか食べるか統一してください」

「シャクシャクシャクシャク・・・・・・」

「食べる方を優先しましたか。ハァ～～～」

ヴィナリスは疑問よりも食欲の方が勝ったのか、一心不乱に果物を食べ始めた。

（何処かで見たような風景だな。何処だったっけ）

（マスター・・・・・・）

セフィアに至っては、その様子をこめかみに青筋を浮かべながら、何かを言いたげな表情で見つめている。

「は～っ満腹じゃ。して、これから如何する？」

「王都までは通常ならば馬車で４日かかりますが、先日の襲撃で馬車は大破した挙句、馬も逃げてしまったため、歩きで城に戻らねばなりません。途中の街や村で運良く馬車が調達できれば問題はないのですが、逆に反逆者の手によって捕らえられ、御命を危険に晒す事も考えられます」

「そのような恐ろしい事を言うでない」

「可能性を示唆したまでの事です」

セフィアはこう言うが、時折不謹慎にも姫が顔を強張らせているのを見て、顔を背け微笑んでいる。

「それで、ミコト殿はこれから如何なさるのですか？」

「え？　付いてきてくれるのではないのか？　ミコトが居れば心強いのであろう？」

「姫様これは我が国の問題です。いかに貴重な存在の魔術師であるミコト殿とはいえ、巻き込むわけには」

「別にいいぞ。雇われても」

「「ミコト（殿）？」」

考える間もなく返事をした俺の方を、首の骨が折れるかもしれない

ほどの速度で回した2人は驚愕の表情で見ている。

「別に急ぐ旅をしているわけではないからな。たまには寄り道をするのも良いかと思ってな、構わないか？」

（『たまには寄り道を』って何時もの事じゃないですか？）

（ルゥ、何か言ったか？）

念話なので一字一句全て聞えているのだが。

（な、なんでもありません）

ルゥと会話していると何時の間に俺の目の前に来たのか、セフィアが声を震わせながら再度疑問を口にしていた。

「ほ、本当に宜しいんですか！？」

「セフィア、何度も聞くでない。ミコトの気が代わったら如何するつもりじゃ？」

「別に構わないよ。同行をするのが嫌だって言うなら旅にもどる「いえ、御願いします！」・・・・・だけだが」

俺が次の句を口にする前に、セフィアが協力を要請してきた。

ヴィナリスもセフィアが言った言葉を言おうとしていたのか、涙ぐんだ表情でセフィアを睨みつけている。

「ま、まぁ出発しましょうか？　まずは此処から近いアルガロックの街を目指しましょう」

セフィアはヴィナリスに目を合わさない様にして姫の手を取り、歩き出した。

だが、1時間ごとにヴィナリスの『腹が減った』だの『疲れた』だ

のといった我侭で思うように目的地までの距離を縮める事が出来なかった俺達は已む無く、姫を交代で背負う事によって歩き続けていた。
背負って数分後には、口元から涎を垂らしながら寝息を立てて眠ってしまっているが。

「それにしても、ミコト殿は魔術師なのに御一人で旅をしているのですか？　危険なのでは？」

どうもこの世界の魔術師は色々と面倒ごとが多いらしく、殆んどの者は近接攻撃ができないらしい。
まぁ、魔術師＝ひ弱なイメージだから、しょうがないのかもしれないが。

「これでも一応、剣を使えるからね。思ったよりは苦にならないよ」
「魔術師でありながら剣を。やはりミコト殿は変わった御方だ」
「何か問題でも？」
「いえ、先日にも申し上げましたとおり、魔術師の方々は言い方は悪いのですが、自分たちのことを『選ばれし存在』と思い込み、魔術を使えない剣士や民達を見下しているのです。魔術師は遠距離攻撃でこそ有利ですが、近距離まで追い詰められると旗色が悪くなり直ぐに逃げ出します」

人には備わっていない力を誇示して他を見下す存在が魔術師か、腐ってるな。

「そのため、殆んどの魔術師は一部例外もありますが、命令に忠実な部下を伴って旅をしています」
「じゃあ俺のように、遠近両方の攻撃ができる魔術師は少ないのか？」

「少ないと言うよりも、ほぼ『０』に近いほどです。魔術師は魔法に長けていて力は弱く、戦士は力での攻撃に長けていて魔法に弱いというのが一般常識になっていますから」
「俺はその魔術師が、ひ弱に見られる事が嫌で身体を鍛え始めたんだ。周囲から奇異の目で見られながらもね」
「そうでしたか。並々ならぬ努力をされたのですね」
殆んどというか、全部作り話だけどね。
話を弾ませながら、セフィアの背中で今もなお眠り続けているヴィナリスを見て歩いていると、目の前に薄っすらと蜃気楼のような街影が見えてきた。

「ミコト殿、アルガロックの街が見えてきました。急ぎましょう」

第１の目的地であるアルガロックという街を見つけたセフィアは、旅の疲れからか若干の急ぎ足で歩き始めた。

そして街の入口まで残り５００ｍほどと言うところで、目の前に頭の先から足までを黒い鎧を身に纏った者を背に乗せた竜が目の前に立ちふさがった。

「なっ！？　何故ワイバーンナイトがこんな所に」
「待ったかいがあったぜ。寄せられた情報は正しかったようだな」
「何故このような辺鄙な場所にゴルダリアンの精鋭部隊がいる！？」
「任務中に面白そうな情報が齎されてな。半信半疑だったが正解だったぜ！　俺様の臨時収入、及び昇進のために此処で死んでくれや」

竜に乗った者はそう言いながら長槍を脇に抱えるようにして持ち、セフィア目掛けて突進してくる。

セフィアはそれを地面ギリギリに伏せるようにして回避すると、死

に直面したような表情で項垂れていた。

「セフィアしっかりしろ！　此処は俺が食い止める。その間にヴィナリスを連れて街に逃げ込め」

セフィアはギギギッと油が切れた機械のような擬音を立てて此方に顔を向けると、青ざめた表情で、気を失っているヴィナリスを手に焦点の合ってない目で此方を見つめ口をパクパクさせている。

「ふんっ、貴様のような者に何が出来る。命が惜しくば其処で黙ってみていろ！」

「セフィアーーー！」

セフィアは俺の怒気を込めた大声で我を取り戻すと小さく頷き、脇目も振らず街へと向けて走り出した。

「逃がすとおもっているのか？」

それでも追いかけようとする竜の顔スレスレに俺は多数のファイアーボールで攻撃し、動きを止めた。

「き、貴様、魔術師か」

ワイバーンナイトは先程の威勢は何処にやら、震えるような声で俺に言葉を投げかけてきた。

「俺のことは如何でもいい。セフィアの邪魔をするというのならば容赦はせん！」

俺は何時でも攻撃が出来るように、掌に火炎球を幾つも作り出し、

牽制する。

「な、なぁアンタ、俺達の国に雇われないか？　あいつ等に幾ら貰って雇われてるか知らねえが・・・・・・」

俺は相手が言いきる前に掌に形成されているファイアーボールを竜に命中させた。

「グオオオォォォーーン」

「し、静まれ、大人しく俺の言う事を聞け！」

「ギャオオオォォォウウウウ」

「ま、待て何処に行くつもりだ！？　戻れ、戻って戦え」

竜は黒い鎧を着た者の言う事を全く聞こうとせず、悲鳴のような奇声を上げながら何処かへ飛んでいってしまった。

俺はあわよくば敵を倒して、竜を奪ってやろうと思っていたのだが奇声とともに逃げていく竜を見て気が削がれ、セフィアの後を追いかけるようにしてアルガロックの街へと足を進めた。

第１４５話　身の程を知らぬ者達

敵国のワイバーンナイトとかいう、竜に乗った兵士を撃退した俺は、ヴィナリスとセフィアが入って行った、アルガロックの街へと足を踏み入れた。

街を最初に見た感想はと言うと傭兵だろうか、至る所に剣を無造作に肩に担ぎ、泡立つ飲み物を手に、仲間と思われる屈強そうな大男と大声を張り上げて喋っている。

「おい、聞いたか？　噂では青い鎧を着た女が街を歩いていたのを見た奴が居るらしいぞ」
「ホントかよ。また何時ものデマじゃないのか？」
「聞いた話によれば、ガキを連れて街の奥に歩いていったとの事だ。どうする？」
「『如何する？』って・・・・・・何をするつもりだ？　まさかとは思うが、襲うつもりじゃないだろうな？」
「楽して儲けるには良い獲物じゃねえか。やろうぜ！　なぁなぁ」

どうやらセフィアを襲うような会話をしているようだが、仲間の一人は額に手を当てて厭きれている表情だった。

「なぁってば。やらねぇのか？」
「馬鹿野郎！　青い鎧の女といやぁ、コーランディアの護衛騎士か近衛騎士じゃねえか。一介の傭兵でしかない俺達が太刀打ちできる相手だと思っているのか！？　返り討ちに遭うのが関の山だ、諦めろ」
「ちっ、なんだよ、もういい俺一人でやる。あとで分け前を寄越せとか、泣きついて来ても遅いからな」

傭兵の男は仲間に愛想をつかせたように、剣を手に街の奥へと歩いていった。

「相手の力量も測れないほどの愚か者が。それにしても、ゴルダリアンは何を考えているんだ？　５年前まで争い事とは無縁だった、心優しい国王が戦争などと如何いうことだ？」

何気なく聞えてきた会話によると、何でもゴルダリアンの国王が人が変わったかのようにヴィナリスの祖国であるコーランディアを含む３国に、ほぼ同時に宣戦布告をしたと言う事だった。

そのため他の傭兵達も『どの国に雇われれば楽して儲けられるか』と言う事を話している。

（この街に長居していると場合によっては身が危険だな。早いとこセフィア達と合流して出発した方がいいだろうな）

そう思いながら街を歩いていると、とある建物の前で青い鎧を脱いだセフィアが心配そうに顔をキョロキョロさせていた。
俺が建物に近づいて行くと引き攣っていた顔を緩め、此方に手を振っていた。

「ミコト殿、心配していました。大丈夫でしたか？」
「ああ、何も問題はない。強いて言えば、竜を捕まえて手っ取り早く、移動手段にと考えていたんだが、上手く行かないものだな」
「ま、まぁ詳しい話は後にして、宿を取ってありますのでゆっくり休むとしましょうか」
「そうも言ってられないかもしれないぞ？」
「何かあったのですか？」

「此処では目立つからな。部屋に行ってから話すよ」

俺は周囲に目を光らせ、襲撃を口にしていた男が身の回りにいない事を確認すると、セフィアの案内の元、建物の2階へと足を進めた。

宿屋の通路は狭くギリギリすれ違えるかどうかの幅しかなく、2階へ続く階段も1箇所しかなかった。

セフィアが取った部屋は一応は隣同士なのだが、室内に入ると2部屋を繋ぐようにして扉が中央にあり、万が一の場合は互いの部屋に逃げ込める作りになっていた。

「おおミコト、大丈夫じゃったか。御蔭で助かった、礼を言うぞ」

部屋に入るとヴィナリスがベッドの上で寝転がっていた。

セフィアが着ていた青い鎧も部屋の片隅に所狭しと置かれている。

「今日はこの宿で泊まって英気を養い、明日の朝一番で出発という事で」

「残念だが、不測の事態があるかもしれん」

「如何いうことですか？　ミコト殿」

「街の入口付近で立ち聞きした内容によると、一部の傭兵がセフィア達を襲撃する予定を立てているらしい。場合によっては街中で戦闘が起こりうる可能性がある」

「傭兵達がですか！？」

「傭兵と言っても、言葉使いからして賊くずれだと思うが」

「しかし如何して襲われるのが私だと？　姫様が標的になるのは分かるのですが」

セフィアの一言を受けて、ベッドの上で飛び跳ねていたヴィナリス

の顔が心なしか強張っていた。

「最初に『青い鎧を着た女』って言っていたからな。それに『街の奥に歩いていった』とも言っていたから間違いはないだろうな」

「この街を抜ければ、コーランディアの領土まで後少しといった私の甘さですね。申し訳ありません」

「もう少しで安全なのか？」

「はい、あと半日も歩けば国境の街クレイアスに到着します。其処まで行ければ私以外の騎士もいますから、安全面は此処と比較にならないほど、大幅に上がります」

「この街を出るまでが正念場ってことか」

こうして宿屋の部屋で周囲の気配を精霊に探知してもらいながら、気の休まらないまま日の出を迎えた。

（結局、襲撃はなかったな。このまま何も起こらなければ良いのだけれど）

そして打ち合せ通りに日が昇りきっていない朝靄の中をセフィアと2人で周囲の気配に目を光らせながら、街のコーランディア側の門に向けて歩き出した。

襲撃される事なく街の外に出たのも束の間、外に出ると同時に5人の傭兵に取り囲まれていた。

後方からも、俺達を挟み撃ちするかのような形で5人、宿屋を出た辺りから付いて来ている。

「な？　俺の言ったとおりだろ？　此処で待っていれば、必ず向こうからやって来るってな」

「ヒヒヒヒッ悪知恵だけは人一倍だな。まぁ、その御蔭で餌にあり

つけるんだがな」
「お、おで、あのちっさい女がいい・・・・・」
一部の大男はヴィナリスの方を見て涎を垂らしているが、他は一様にセフィアを見ていた。
「お前等ごとき輩が、正規兵に勝てると本気で思っているのか？」
「ほざけっ！　こっちは１０人もいるんだ。たった２人とガキ１人で一体何が出来る」
質より量で勝負という訳か、どちらにしろ勝ち目は無い事ぐらい分かるものだろうに。
そうしている中、一人の男の合図によって一斉に剣やらナイフを抜いて襲い掛かってくる。
「セフィアは極力戦わずに姫を守っていてくれ！　コイツ等は俺が相手をする」
「分かりました。大丈夫だとは思いますが、お気をつけ下さい」
そんなやり取りのあと、セフィアは片手でヴィナリスを脇に抱えながら、余裕で傭兵達から距離をとる。
「相手が悪かったな。一撃で決めさせてもらう」
俺は火炎魔法では相手を焼き殺してしまう恐れがあるため、掌に水球を作り出し傭兵の頭部を覆うようにして放っていく。
「な、なんだ！？　ガボガボガボガボッ、い、息が・・・・・・」
「ゴボゴボゴボゴボ」

一人、また一人と水球によって呼吸困難となり、地面に倒れていく。
それが俺が放った魔法による物だと瞬時に気がついた、少しは頭にキレがある傭兵達は蜘蛛の子を散らすかのように逃げていく。

「ま、魔術師だーーー逃げろ！」
「待てお前ら！　折角のご馳走を前に逃げる気か、戻って来い」

地面に倒れて口から大量の水を吐き出している2人の傭兵。
更に魔術師が相手と見て、一目散に逃げて行った7人の傭兵は、男の呼びかけに一切応じずに振り向きもしないで逃げていく。

「ちっ、腰抜けがどもが！　こうなりゃ俺一人ででも・・・・・・」

俺がそんな隙を見逃す筈もなく、倒れている2人と同様に頭部に水球を放つ。

男は必死に頭部に纏わりつく水を手で剥がそうとするが、地面に身体を投げ出しても、必死に首を縦横斜めに振っても、何をしても無駄で数分後には他の仲間とともに地面に倒れ付した

「終りましたか。流石ですね」
「なぁに、こいつ等が無謀だっただけだ。数を揃えれば何とか成ると思ったのが敗因だな」

結局、傭兵・・・・・というか賊くずれな男達は誰一人として俺と打ち合わないまま、勝負がついた。

最初はセフィアと共に逃げていたヴィナリスも、倒れた傭兵の口か

ら滾々と湧き出る水を面白そうに眺めていたが、流石に厭きたのか国境の町クレイアスに向けて歩き出した。

そしてセフィアの予告どおり、半日ほどでクレイアスに辿りつくのだった。

第１４６話　国境の街クレイアス

セフィアの道案内によりクレイアスという国境の街に辿りついたのだが、其処は巨大な川の中洲であろう場所に聳え立つ、要塞のような強固な壁に囲まれた街だった。

そして川に橋を架けるようにして、これまた巨大な跳ね橋が下ろされていた。

「姫様、ミコト殿、クレイアスに到着しました」

「これは街なのか？　幾ら何でも大袈裟すぎるような気もするが」

「この街は有事の際には前線基地として使われますから、街を取り囲む壁にも特殊な魔法防御を掛けてあるんですよ」

「セフィア～～何時まで喋っているのじゃ？　我はもう疲れた、早く宿に行こうぞ」

「姫様、疲れたって・・・・・・」

セフィアはヴィナリス姫の物言いに正直、頭を抱えていた。

其れもその筈、ヴィナリスは俺とセフィアが戦闘時以外、交代交代で背負って歩いてきたため、其れほど疲れてはいない筈なのである。

「セフィア、早く街に行くのじゃ。長々と此処に居ては、魔物や追っ手に襲われるぞ？」

「はいはい、分かりました、姫様」

「ミコトもじゃ、オヌシは我の護衛なんじゃからのぉ」

「ん、分かったよ」

その後は言うまでもないことだが、街の手前で警護にあたっている

騎士から姫が目の前に現れた事で大騒ぎされた事を始めとして、姫に近づく不審者扱いとされた俺の事を説明するセフィアと、目に見えているのに中々宿屋に入る事が出来ないヴィナリスの痴癪とで一時は大変な事態となっていた。

俺が此処まで姫の護衛を務めた事と、俺が魔術師である事を一頻り説明すると、大袈裟すぎるのではないかと思うほどに感謝の意を口にされ、最高級の宿屋で二番目に良い部屋に無料で泊まれる事となった。

序に言えば、直ぐ隣にある一番良い部屋にはセフィアとヴィナリスが泊まる事となった。

さらに護衛として部屋の前と宿屋の周りには重厚な鎧を身に付けた騎士が交代で守りに就いてくれている。

「ミコト殿、色々と巻き込んでしまい申し訳ありませんでした」

部屋で寛いでいると、鎧を脱いだセフィアが部屋を訪れ、宿のロビーにある食事の店へと誘われた。

「いや気にしてないから、それより姫は如何したの？　部屋に一人きり？」

「姫様は部屋に入るなり、ベッドに横になって寝てしまいました」

あの姫さんは1日何時間寝るつもりなんだろうな。

此処まで来る間にも、俺とセフィアの背中で涎を垂らしながら寝てたしな。

「翌日には今用意させている馬車に乗って、王都まで残り2日の距

離を走ろうと思っています」
「俺は如何すれば良いのかな？　領土に入ったのなら、もう護衛は必要ないかな？」
「いえ、とんでもありません！　ミコト殿には言葉に言い表せないほどの御恩が御座います。是非王都まで一緒に来ていただき、恩賞を受け取って頂けませんと」
「そんなつもりで護衛したわけじゃないんだけどな」
「それに既に城宛に、認めた手紙にはミコト殿の名前もありますので」
「え！？　そんな物を何時の間に」
「此処に到着して直ぐに筆を取り、書き記しました。いけませんでしたか？」

そう涙目のセフィアに言われては、もう如何する事もできない。
数分後、事を済ませたセフィアは部屋へと戻っていった。

俺はまだ日が高かったため、街を歩いてみる事にする。
よくよく考えてみれば、この世界の通貨の事も皆がどんな暮らしをしているのかも知らなかったからだ。

「おや、お出かけですか？　もし宜しければ、護衛をご用意いたしますが？」

俺が宿屋から一歩外へ出ると、宿の警護に当たっていた騎士が話しかけて来た。

当初は不審者扱いされていたが、セフィアから『姫の護衛として雇っている魔術師の方だ』と紹介されてからは掌を返すように態度を変えてきた。

それほど魔術師という存在は恐れられているのだろうか。
予想していた事とはいえ、少し傷つくな。

「ミコト殿？　どうかされましたか？」
「いや良いよ。少し街を歩いてくるだけだしさ」
「分かりました。街の中には一般の冒険者も数多く居ります。何かあれば、直ぐに我等をお呼びしますよう」
「うん。ありがとう」

とても初めて此処にきたときに、敵意を剥き出しにして来た男と同一人物と思えないほどの変わり様だな。

そんなこんなで街を歩いていると、一人の剣士が鞘と抜き身の剣を松葉杖代わりにして血塗れになった片足を引き摺りながら、建物内に入っていく姿が見えた。
俺も『此れはただ事ではない！』と思い、剣士を追いかけて建物内に入ると其処には人だかりが出来ていた。

人だかりの中心にいたのは足を引き摺っていた剣士で、その周りには仲間なのか心配そうに見つめている少女の姿があった。

「ねぇ誰か！　ケインの傷を治してよ。このままじゃ死んじゃうよ」
「おいおい嬢ちゃん、魔術師が俺達を助けてくれると思っているのか？　奴等は俺達がどうなろうが知ったこっちゃねえんだぜ？」

少女は周囲に対して眼に涙を溜めながら必死に呼びかけるが、集まっている中には魔術師はいないのか、誰一人として近づく者は居なかった。

此処は病院じゃないのか。

っとこうしてはいられないな、早く治療しないと手遅れになってしまう。

俺は人垣を掻き分けるようにして少女が縋り付く男に近づくと、血塗れの足に対して回復魔法を唱える。

「えっ！？　魔術師なのに、私達を助けてくれるの？」

魔術師ってのはよっぽど嫌われているのか、それとも恐れられているのか。

少女はペタンと座り、ケインと呼んだ男の顔を見つめている。

「此れで良いだろう。出血は多いが命に別条はないはずだ」

「あの、持ち合わせが此れだけしかないんですが・・・・・・足りなけれ稼いできますから」

少女はいつの間に取り出したのか、掌の上に銀色のコインと茶色のコインを数枚乗せて俺に渡そうとして来た。

「いや要らないよ」

「へっ？　で、でも・・・・・・」

「そんな事よりも血を流しすぎているから、どんどん食べて血を増やさないとまた倒れるよ？」

治療を終えた俺は街の探索の続きをしようと思い、『それじゃ』と手を振って建物内から出ようとしたのだが、不意に誰かに肩を掴まれた。

「おいおい、魔術師が此れほどの事をしておいて、礼も貰わずに行くつもりかい？」

俺の肩を掴んだのは、最低限の布だけで胸と股間部を覆っている男勝りな女性の姿だった。
衣装が際どすぎて真正面から姿を見れなかったため、目線をずらして話しかけた。

「え、えっと・・・・・どちら様でしょうか？」
「へぇ～～俺の顔を知らないとは、アンタ余所者だね？」

眼のやり場に困る際どい衣服（？）を身に纏った女性は自分のことを『俺』と呼び、此方を品定めするような眼でジロジロと見つめてくる。

「イ、イナミスさん、何時から此方に？　それにその格好はなんなんですか！？」

俺に銀色と茶色のコインを差し出してきた少女が、真っ赤な顔で慌てふためきながら女性の姿に驚いている。

「ほらほらアンタたち、何時まで見てるつもりだい？　さっさと仕事に戻りな！　それとケインを何時までほっとく気だい。部屋に連れてってやりな」

イナミスと呼ばれた女性の一言に、周りに集まっていた男達はワラワラと蜘蛛の子を散らすように解散していった。

血塗れで未だ床に寝そべっていたケインという男も、脇と足を2人の男によって抱えられて奥の部屋へと運ばれていった。

「人の事をとやかく言う前にイナミスさんは服を着てください。は

したないですよ」
「ユナリーはいつも五月蠅いね～～分かったよ。着替えてくれれば良いんだろ、着替えてくれれば？」
「う、五月蠅いってなんですかーー！　イナミスさんが非常識すぎるだけでしょう！？」
「はいはい、じゃ着替えてくるから、其処の魔術師殿に説明よろしくなァ」

女性は少女に追い払われるようにして建物の階段をトントンと上がっていく。
着ている物が物だけに、下から屈みこめば見えてはいけない物が見えてしまいそうな。

「全くもう！　同じ女性とは思えませんわ」
「あの～～～」
「えっ！？　あっとスイマセン、お見苦しいところを」
「それは良いんだけど、アノ人は誰？　そして此処は一体何処？」

俺が疑問をぶつけると、先程の強気な態度は何処に行ったのか、オロオロと慌てふためく少女。
魔術師が怖いのか、俺という存在が怖いのか、発する言葉は聞き取れないほど呂律が廻っていなかった。

第１４７話　魔術師の脅威

その後、少女から聞き取れた単語を頭の中で並び替えた結果、俺が病院か何かだと思っていた、この場所はあの際どい衣装を身に付けていたイナミスという女性がリーダーを務める、ギルドチームの宿舎らしい。

「なんとなくだけど、分かってきたよ。　それにしても、どうしてそんなに緊張しているんだい？」

「それは・・・「それはアンタが魔術師だからだよ」・・・！」

と其処へ、先程のイナミスと呼ばれた女性が、ランニングシャツに半ズボンという服装で頭を掻き毟りながら階段を下りてきた。

「貴女は先程のイナミスさん、でしたっけ？」

「ああ、そういえば自己紹介が遅れたね、俺はイナミス。不本意ながらも、このギルドのリーダーを務めている者さ。おっと敬語はつけないでくれよ？　ケツがむず痒くなっちまうからな」

とても女性とは思えない物言いで、少女に睨まれているイナミスさん。

「それで魔術師殿？」

「あ、俺の名前はミコトです。俺も呼び捨てで構わないですよ？」

「そういうわけにはいかないよ。魔術師殿を呼び捨てにしたとあっちゃあ、周りから要らぬ誤解を生むからな。ミコト殿はそこ等に居る、いけ好かない魔術師とは何処か違うようだけどねぇ・・・・・・」

「イナミスさん、幾らなんでも失礼じゃないですか？」

「そんで、さっきから口喧しいコイツは弓使いのユナリーだ。ほら挨拶」
「あ、あのユナリーと言います。先程はお見苦しいところをお見せしてスイマセンでした」
「ん？　宜しく」
「それでさっきの事だけど、魔術師が怪我人を治療して金を要求しないなんて、一体如何いう風の吹き回しだい？」
「そんなに変な事ですか？　目の前に傷ついた人や困っている人が居れば助けるのが普通でしょう？」
「やっぱりミコト殿は普通の魔術師とは違うようだね。魔術師なんてものは、俺達みたいな魔法を使えない者を見下して、人が困っていても手を指し伸ばす事はない。もし極稀にあったとしても報酬として莫大な金をふんだくる、人でなしの集団なんだよ」
「イナミスさん、流石に言いすぎですよ。この方が気を悪くされたら、如何なさるのですか」
「いや気にしてないから」
「という事で謝礼金を受け取ってくれないか？」
「何が『という事』なのか分かりませんが、こんな事なんかでお金を貰うわけにはいきませんよ。俺は当たり前のことをしただけですから」
「その『当たり前の事』が此処では異常なんだよ。良いから貰ってくれ、そうじゃないと此方の気が納まらないんだよ」

イナミスはそう言いながら、半ば無理矢理に俺の手に銀色のコインを5枚握らせた。

「普通の魔術師に怪我の治療を頼んだら、最低でも此れの１０倍はゆうに掛かるんだ。要らないって事だったけど、気持ち程度に貰ってくれ」
「其処まで言われては断れませんね。ありがたく頂戴いたします」

ふと気がつけば、辺りは既に夕暮れを通り越して暗闇になりかけていたため、街の探索を中止し宿に戻る事にした。

宿屋に戻ろうと建物の戸に手を掛けて外に出ようとした時、今まで俺に対して必要最低限口を開こうとしなかった少女が不意に頭を下げてきた。

「あ、あの本当にケインを助けてくれて有難うございました」

少女は其れだけをいうと逃げるようにして階段を上がって二階に上がっていってしまった。

「気を悪くしないでおくれよ？　ユナリーの両親は昔、魔術師に殺されたんだ。それ以来、魔術師を見ると無意識に震えが来るらしいのさ」

「そうだったのですか・・・・・別に気にしてませんから、怒らないであげてください」

「ああ、今日は本当に助かったよ。俺達が力になれることがあれば喜んで手伝うから、何かあれば遠慮なく頼ってくれよ？　じゃあ、またな」

そして俺はギルドを後にして宿屋に戻った。

宿屋の中にある食事処で遅めの夕食を食べて部屋に戻ると、その数分後にセフィアが部屋を訪ねてきた。

「ミコト殿、お帰りでしたか。明日のことで、お話があるのですが今は大丈夫でしょうか？」

「あ、ああ構わないよ。入って」

「では、失礼致します」

恒例ともなった、ヴィナリスが如何しているのか聞くと『寝ています』との一言で終らせてしまった。

本当に1日何時間寝るつもりなんだか・・・・・。
昼間あれだけ寝ていたら、夜は寝れなくなると思うんだけどな。

「それで明日の事ですが、街に常駐する騎士隊に掛け合って馬車を1台と護衛の騎士を2人借りる事が出来ました。これで何の問題もなければ、王都コーランディアまでは3日で到着する事が出来ます」
「3日か。食料とかはどうするんだ？」
「それも干し肉や果物といった、日持ちする物を馬車に積み込む手はずになっています」
「足りなければ、俺が取り出すから心配要らないか」
「此処までで何か質問はありますか？」
「特にないけど王都に到着した後、俺は如何すれば良いのかな？」
「ミコト殿は姫様を救ってくれた恩人ですので、貴賓扱いとして城でおもてなしをする事になると思いますが、何か御不都合な点でもございますか？」
「不都合って程じゃないんだけど、旅の目的のとある場所を探さないといけないから、長居は出来ないかもと思ってね」
「とある場所ですか？　それなら宮廷魔術師様が領土内外の事は何でも知っている、国一番の物知りな方なので、聞いてみては如何でしょうか？」
「そんな偉い人に俺が会っても大丈夫なのか？」
「立場に拘らない気さくな御方なので、問題はないと思いますよ」

セフィアは其れだけを言うと『おやすみなさい』と言い残して部屋に戻っていった。

俺も亜空間倉庫から取り出した果物や魔物の肉で腹を膨らませると、
明日に向けて早めの就寝を取った。

『土の精霊編』までの登場人物と地名設定（前書き）

以前に登場した色々な世界の事や数多くの登場人物の事が分かり辛いということで設定集を書かせていただきました。

あまりに長文にすると、本当に分かり辛いので簡潔にまとめてあります。

【】内の話数は登場した話を表しています。

最新話と同時進行していたので早ければ2日後には更新できると思います

『土の精霊編』までの登場人物と地名設定

【光の精霊編】

☆国・町・村の設定

・ディル村　【第２話　圧倒的な力】

物語の主人公であるミコトが異世界へと渡り、一番最初に訪れた村。

山賊の手に掛かり、村は壊滅。

が、たまたま村を諸事情で離れていた青年により復興の兆しにある。

・マルベリア　【第３話　街に到着】

ディル村にて襲い掛かってきた山賊を撃退した後、保護されて連れてこられた首都。

ギルドや武器屋・道具屋などがあり、ミコトが魔力に目覚めるまでの拠点となる。

・商業都市ガルデア　【第２８話　護衛依頼？　到着】

世界各地から様々な武器防具・道具などの多種多様な物が集まる、巨大な市場のような街。

ギルドの仕事において3人の自称商人とともに訪れる。

・レグリス国

国民を暴力と恐怖によって支配する国。

非道なる王女と王妃の手によって、下らない理由で民が虐殺されている。

当初はミコトを異世界に呼び寄せたのがレグリス国の王女だと思われていた。

☆登場人物の設定

・峰藤（ミネフジ）　尊（ミコト）

本作『異世界を渡りし者』の主人公。
幼い頃に家族で行った旅行での飛行機事故で両親をなくす。
奇跡的に無傷で生還し、この頃より異常すぎる自己治癒能力を授かる事となる。
ある朝に何時もの様に郵便受けにある、新聞を取りに外に出たところで異世界へ飛ばされてしまう。

・剣の精霊　ルゥ【第１３話　白銀の剣】

ギルドの討伐依頼の際に剣を折ってしまったことで、武器屋にて代わりの剣を探している時に出会う。
当初は剣と波長の合わないものを傷つける魔剣として恐れられていたが、精霊を宿す聖剣だと分かった。
ミコトとは念話で会話する事ができ、今では良き相談役と化している。

・光の精霊王　ミラ　【第４０話　真実】

ミコトをとある理由で異世界へと呼び寄せた張本人（？）
修行で魔力を身につけた事により、ミコトの前へと姿を現せる。

・マルベリアの騎士　エミリア　【第２話　圧倒的な力】

ディル村において山賊撃退後に血塗れで座っていた、ミコトに声を掛けて世話をした人物。
かなりのお調子者。

・マルベリアの騎士隊長　ハンクス　【第２話　圧倒的な力】

エミリアの所属する騎士隊の隊長。
天然過ぎる部下（エミリア）にホトホト、手を焼いている。

・マルベリア第三近衛騎士隊　副隊長シルヴィア　【第２４話　護衛依頼？　受諾】
シルバードという偽名を名乗り、商人としてミコトに商業都市ガルデアまでの護衛を依頼した。
出発時は男の格好をしていたが、とある事情により女の格好に戻った。

・マルベリア近衛騎士隊　グレイ　【第２４話　護衛依頼？　受諾】
シルヴィアの部下であり、彼女と同様にドレイクという偽名を使い、商人として同行した。
もっぱら荒事・揉め事担当になっている。

・マルベリア近衛騎士隊　フィル　【第２４話　護衛依頼？　受諾】
グレイと同様にシルヴィアの部下であり、エフィルという偽名を使って商人として同行。
ミコトによって『魔術師』という事実が発覚した上に、シルヴィアの性別がバレる切欠を作った張本人。

【火の精霊編】

☆国・町・村の設定
・イスラントール国
穏やかな気候と恵まれた自然に囲まれる世界の一角を担う国。
首都には闘技場があり、年に一回は武道大会が繰り広げられている。

・スコルピオン国

本文には国の名前だけしか登場せず。

・サウスラーズ国
イスラントール・スコルピオンと比べ、草木が育たない荒れ果てた大地。
　この世界で一番の規模を誇り、恵まれた大地を持つイスラントールやスコルピオンに、度々戦争を仕掛けている軍事国家。

・アメリトス魔法学園　【第４８話　なんで俺が・・・】
イスラントール国内にある、倍率の極めて高い魔術師養成学院。
国の内外を問わず、色々な人間が入学するため混乱が絶える事はない。
王族・貴族・平民を差別しないために、生徒の家名はアルファベットの一文字で示す。
教員の勘違いにより、ミコトも学園生として入園する事になってしまう。

☆登場人物の設定
・マリア＝Ｒ　【第４７話　到着早々、命の危険?】
ミコトが世界を渡って直ぐ助けた、賊に襲われていた少女。
魔法学院での少ないクラスメイトのうちの１人。

・ルシア＝Ｗ　【第５２話　来客と疑惑】
マリアと同じく、クラスメイトの１人。
ミコトの異常すぎる魔力の量に疑問を投げかけてくる一見、物静かな少女・・・・・と思われたが、可也おちゃらけた性格の持ち主。

・サウスラーズの貴族　ライシャス　【第５５話　平穏を乱す者】
自分の親が持つ、国内の肩書きを最大限利用して、やりたい放題の

馬鹿。
が、親の威を借りるだけの馬鹿息子かと思いきや、魔力も其れ相応の物。

・イスラントール騎士隊長　タルカス　【第６９話　本戦に進む８人の猛者】
武道大会準々決勝で戦った騎士。
ミコトの攻撃でも倒れる事は無かったが、最後は立ったまま気絶し意地を見せた。

・イスラントール近衛魔術師　フィンケル　【第６９話　本戦に進む８人の猛者】
武道大会準決勝第２試合で対戦した風使い。
風魔法を攻撃魔法として使用する以外に、『高速移動』と『浮遊魔法』として使える事を教わった人物。
最後はミコトによって足元を凍らされ、身動きが出来なくなった状態で攻撃を受け、気絶した。

・イスラントール近衛騎士隊　名誉顧問レイモンド　【第６５話　武道大会予選】
武道大会決勝で戦った相手。
年齢を感じさせないほどの豪傑で、ミコトと略互角に近い猛勝負を繰り広げた。

・火の精霊　フレイ　【第７８話　次なる異世界へ】
イスラントール・スコルピオン・サウスラーズの三国を国境として隔てる火山の火口部で出会う。
最初は諍いの喧騒さに不貞寝をしていたため、ミコトに出会った当初は寝ぼけていた。

【風の精霊編】

☆国・町・村の設定

・エルフの集落

　集落の略中央付近に聳え立つ風の精霊が宿りし世界樹によって、何人をも寄せ付けぬ結界が張られた迷いの森に囲まれるエルフ達の住む森の集落。

・メグレスの街

世界樹衰退の原因となった特殊な魔道具を、製作している魔道技師が住んでいる街。
魔道具の秘密を知るために、ミコトとエルフの女性が冒険者に扮して訪れた。

☆登場人物の設定

・エルフの長老　【第８０話　神聖なる森の民】

エルフを束ねる存在で唯一精霊の姿が見え、声を聞くことができる、８００余年生きている存在。
ジェニスとニーナの祖父でもある。

・エルフのリーダーを務める女性　ジェニス【第８０話　神聖なる森の民】

最初は人間であるミコトが迷いの森を抜けて集落に辿り着いた事で不信感を露にしたが、長老の口からミコトが神である事を聞かされて、掌を返したかのように大人しくなる。

・ジェニスの妹　ニーナ　【第８１話　侵入者疑惑再び】
　長老の客人として集落の一角に住み始めてから、好奇心満々な他のエルフの子供達と一緒にミコトの正体を突き止めるべく、ミコトの小屋を訪れた少女。
ジェニスから散々起こられたが、本人は分かっていないような顔をしている。

・魔道技師ドゥール　【第９０話　魔道技師】
風の精霊が宿る世界樹を苦しめる原因となっている魔道具、『魔吸石』を操る男。
『魔吸石』に吸収させた魔力を使って戦争で使用する魔道兵器を作成し、商売をしている武器商人。

・ドゥールの執事　セイバス　【第８９話　元凶のもとへ潜入】
ドゥールの屋敷で来客の世話をする謎の人物。
ミコトの存在を驚異的に思い、何処からとも無く呼び出した、謎の魔獣を２人に嗾(けしか)ける。

・風の精霊　シルフ　【第９２話　消えた魔道技師】
世界樹衰退と共に存在が消えかけていた精霊。
ミコトによる膨大な魔力供給と、魔力を吸い取っていた『魔吸石』が撤去された事で元気になった。

【水の精霊編】

☆国・町・村の設定

・アルフェクダの城　【第９３話　新たな世界で魔王討伐？】
遙か北に位置する大陸に住む亜人達を邪悪なる者と称し、存在をも認めていない国。
ミコトを召喚した事により、亜人達を滅ぼそうとしていた。

・アルフェクダの街　【第９３話　新たな世界で魔王討伐？】
民は税率の高さに苦しみ、窃盗や殺人などが日常茶飯事で行なわれている。
税を納め切れなかった民は闇ギルドで犯罪に手を染めざるを得ない。

・ザンカールの町　【第９５話　見かけとは裏腹に・・・】
アルフェクダとは違い、亜人達と共存共栄している町。
亜人を嫌っている者は殆んどいないほど。

・亜人達の集落　【第９７話　人間と亜人】
ザンカールの北に位置する亜人達の住む集落。
　集落の中央にある、水の精霊が住んでいる聖域から発せられている結界により、精霊の加護を受けし者以外は集落の中に入る事はできない。
ミコトは各種精霊の加護を受けているのでスンナリと入る事が出来る。

☆登場人物の設定
・アルフェクダ第３王女　メルディン姫　【第９３話　新たな世界で魔王討伐？】
アルフェクダ城内で古の魔術書（いにしえ）を使用してミコトを召喚した。
事実的にはミコトが出現場所を其処に選んだので、魔術書に力があるかどうかは不明。
アルフェクダの地において、唯一まともな人物でもある。

・アルフェクダ王　デュラミア、アルテミア兄弟　【第９４話　アルフェクダ王の目論見】
メルディン姫の兄弟であり、アルフェクダの王。
召喚されたミコトの力で亜人を滅ぼそうとしている。

・羽翼族長老　アリオト　【第１００話　集落での生活】
集落に住む亜人達のうち、羽翼族を束ねる長老。
背中には蝙蝠（こうもり）のような漆黒の羽根が折りたたまれている。

・亜人全てのリーダー　キイラ【第１００話　集落での生活】
一部の亜人は認めていないが、集落に住む亜人達を取りまとめる役割を長老から与えられている。
ミコトが集落で厄介になる家はキイラの家でもある。

・聖域を護りし竜人族　兄リュシオン【第１０２話　『近づくな』と言われると】
亜人の集落を取り囲む、結界の発生源となっている聖域へと続く扉を守護する番人。
扉に近づこうとするミコトを優しく嗜める。

・聖域を護りし竜人族　弟テュレイス【第１０２話　『近づくな』と言われると】
兄リュシオンと考え方が大きく異なり、竜人族以外の亜人、人間達を蔑んでいる。
亜人のリーダーであるキイラの存在をも認めておらず、何かに掛けては好戦的な性格をしている。
ミコトとの決闘に負けた腹いせに人間の町を襲おうと考え、結界の外に出たところで謎の少年に出会い、完膚なきまでに打ちのめされた後、何処（いずこ）かへと連れ去られてしまう。

・謎の少年【閑話？　愚かなる守護者　【後編】】
　テュレイスの渾身の攻撃を普通の人間とは思えない、皮一枚で受け止め尚且つ埃を掃うかのような動作で竜人族の屈強な腕を捻じ切った謎の少年。
その後、少年を迎えに来た謎の騎士とともにペットと呼んだテュレイスを連れて何処かへ消えてしまう。

・水の精霊　アクア【第１０６話　聖域の祭典】
ミコトが亜人の集落で暮らし始めてから６５日目にして、やっと出会うことが出来た精霊。
『今のままでは不安』という事で光の精霊の力を借り、より強固な結界を集落に張ることとなった。

【氷の精霊編】

☆国・町・村の設定
・雪国の街　シャノルク【第１０９話　白き世界】
一年中、氷と雪に囲まれた永久凍土の街。

・学者の街　アルケイメル【第１２０話　闇に誘う巨大な亀裂】
この世の全ての歴史、知識が詰まった大図書館のある街。
国同士の諍いに巻き込まれ、今では魔物の巣窟に成り果てている。

・ウィレンド【第１１８話　物知り爺さんを訪ねて】
シャノルクの街から小高い丘を越えた場所にある街。

☆登場人物の設定

・シャノルク外郭守護隊　イノフェル【第１１０話　不審人物？】
街の外で魔物や遭難者などの騒動を処理する女性。
雪崩に巻き込まれたミコトを保護し、宿へと案内してくれた。

・シャノルク内郭守護隊　ガルフォード【第１１１話　事情聴取】
イノフェルとともに街の中での荒事や騒動を処理する強面の男。
街の外が氷点下になろうとも上半身裸で過ごす、ある意味とても暑苦しい存在でもある。

・物知り爺さん　ビクトル、レナード
色々な事に詳しいとの事で精霊が居る場所を聞こうと探して見るが、出会うことが出来なかった。
爺さんの家族の元へ探しに出かけるが、依然行方不明のままである。
息子であるレナードに聞き、大図書館に収められていた一説を聞いて精霊が居る場所を突き止める。

・氷の精霊　シャル【第１２１話　謎の女性の正体は？】
シャノルクとウィレンドの略中間に位置する深い谷の奥底にて出会う。
宿屋に度々現れていた謎の女性は氷の精霊が亡くなった女性の姿を借りて逢いに来ていたものだという。

【土の精霊編】

☆国・町・村の設定

・王都ルイベアス　【第１２２話　魔術師の世界】

比較的平和な首都で数多くの魔術師達が暮らしている。
上空からの魔物を警戒し、街の空には結界が張り巡らされている。
炎・水・土・風・雷の術士隊が常に街を護っており、民からは尊敬の眼差しで見られている。

・イストライル鉱山　【錬金術仮免許試験】
ルイベアスから東方向に徒歩で半日の場所にある鉱山。
錬金術本試験の場所として名は挙がるが、実際には描かれる事は無かった。

・サウシュルド鉱山　【第１４１話　鉱山での惨事】
ルイベアスから南方向に徒歩で半日の場所にある鉱山。
イストライル鉱山と同様に、錬金術本試験の場所として登場。
次の世界へと渡る寸前に、ミコトが鉱山内にて不穏な気配を感じ、潜んでいた魔物を討伐する。

・ノスフィルド鉱山　【第１３３話　地底で出会った者】
ルイベアスから北方向に徒歩で半日の場所にある鉱山。
ミコトが錬金術本試験の場所として選んだ場所。
運良く坑内でドワーフに出会った事で、簡単に鉱石を入手する事が出来、錬金術資格を得る事が出来た。

☆登場人物の設定
・炎術士隊　副隊長ナジェリア　【第１２２話　魔術師の世界】
この世界に到着後、空から街に入ろうとしていたミコトに注意を促した人物。
可也の心配性な上官、炎術士隊長のファルランに呆れている一面も。

・土術士隊　隊長グレイアス　【第１２７話　錬金術講習初日】

ミコトが受けた錬金術講習の試験官を務める。

・魔道具屋店主　ガンツ　【第１２４話　とある店員の野望】
下取りに出した高価な魔道具を、偽の店長に安値で引き取られそうになった所を助けた真の店長。
その巨躯からは想像出来ないが、立派に土術魔法の使い手でもある。
一部の騎士からは尊敬の意を込めて『ガンツァルト』とも呼ばれている。

・ルナ　【第１２７話　錬金術講習初日】
錬金術講習でのクラスメイトである少女。
錬金術適正試験や仮免許試験など、ギリギリでなんとか通過している。
本試験は自身の魔力を使い切った事による疲労で体調を崩し、試験を見送る結果となってしまった。

『土の精霊編』までの登場人物と地名設定（後書き）

『雷の精霊編』の設定については世界終了後に描く予定でいます。

第１４８話　とある辺境騎士の癇癪

翌朝、目が醒めた俺達は街の騎士隊が用意してくれていた軽めの食事を済ますと、身の回りの準備をして馬車に乗り込んだ。

馬車には薄い布のような物で仕切りがしてあり、布で隔離された場所にヴィナリス姫、その他の場所に俺と護衛騎士のセフィア、そして御者席の交代要員であろうか、もう一人の騎士が俺の横に険しい顔をして乗り込んでいる。

何でも聞くところに寄れば、護衛騎士のセフィアが国境の街に到着して直ぐに馬車を借りる為に騎士隊の常駐する建物に説明しに行き、俺のことも踏まえて他の護衛騎士が襲われて亡くなった事や、もう駄目だと思われた時に何処からともなく颯爽と助けに現れた俺が不自然きわまりないとのことだった。

その為もあってか、俺の隣の座席に座っている騎士は睨むような目つきで俺を見ている。

そして馬車は岩壁以外、何も遮るものが無い高原を只管進み数時間が経過した頃、昼食の用意をするため馬車を停止させて休んでいた。

俺とセフィアは昼食用にと用意されていた胚芽パンのような黒いパンと少量の干し肉を齧りながら、此れからの事を話していると其処へ馬車で相乗りしている男が近寄ってきた。

「ちっ、何でお前のような何処の輩（やから）とも知れない奴が此処に居るんだ。姫様の護衛は俺達だけで充分だというのによ」

「アンタが何と言っても、俺はヴィナリス姫に護衛として雇われている身だからな。文句があるというのならば、ヴィナリス姫に直接

言うんですね」
「なんだと!?　貴様、自分の立場という物が分かっていないと見える」
騎士はそれだけの言葉の遣り取りで激昂し、今にも腰に身に付けている剣を引き抜こうとしているのを俺と一緒に談話していたセフィアが止めた。
「其処までだ！　やめろ馬鹿者」
セフィアは常日頃から想像もつかない様な低い声で男性騎士を止めたのだが、騎士はこともあろうにセフィアにまで食って掛かっていた。
「ふんっ、護衛騎士なんて言っても何の役に立たないじゃないか。アンタ以外の護衛騎士はゴロツキとも言える集団から姫様も守れずに死んでいったんだろ？　情けない事だ」
この発言には流石のセフィアも黙っていられなかったのか、男性騎士の比較にならないほどのスピードで剣を引き抜き、いつの間にやら散々小馬鹿にしていた騎士の首元に切っ先を当てていた。
セフィアが後一歩でも踏み出せば、其れだけで男性騎士は首を剣で貫かれ死んでしまうんではないかと思うほどに。
「貴様に・・・・・貴様などに、彼等の何が分かるというのだ！」
騎士は今になって自分の言語行動に後悔したのか、歯を身体の震えでガタガタ言わせながら地面に尻餅をついて青白い顔で震えている。

「其処までじゃ。何をしているのじゃ、馬鹿者めが」

騎士の首に添えられた剣の先から赤い液体が薄っすらと見え始めた頃、颯爽と現れたのは御者席で手綱を取っていた騎士を連れたヴィナリス姫の姿だった。

「姫様・・・・・」

「剣を引けセフィア。気持ちは痛いほどよう分かる」

「はい。お見苦しい場をお見せして申し訳ありませんでした」

セフィアはヴィナリス姫に対して片膝を折り、男に突きつけていた剣を収め、元通りに腰の鞘に収めると深い礼を取り項垂れていた。

剣の切っ先を首元に付けられていた騎士はヴィナリス姫が直ぐ目の前に居るのにも拘らず、そのままの姿勢で震えていた。

「ミコト殿、セフィア殿、愚かなる部下の非礼を心より謝罪致します。申し訳ありませんでした」

震えている男の上司と言う騎士は、被っていた兜を小脇に抱えると深く頭を下げていた。

「いえ、私もついかっとなって我を忘れてしまいました」

「俺もそれほど気にしては居ない。俺が不審者であることは、誰が見ても明確だからな」

「ミコトがそう言うと、護衛として雇っている我が馬鹿みたいではないか！　セフィアも笑うでない」

この遣り取りには未だ腰を抜かして立てないでいる騎士も、その上司である騎士も『ポカ～ン』という表情で固まって居る。

「・・・・・っとまぁ冗談は此れまでにしておいて、よもや我の護衛騎士であるセフィア等を小馬鹿にする輩が居るとはのぉ～～～」
「重ね重ね、申し訳なく思います」
「それはもう良い。問題は今後どうするかという物じゃが、何か良い案はないかのぉ」
「この者は護衛任務が終り次第、然るべき罰を受けさせますので」
男の上司はこんなのでも自分の部下なので必死に弁護しようとするが。

「こうしては如何でしょう？　彼は私達護衛騎士を小馬鹿にしていましたので、実際に護衛騎士見習いとして姫様直属の護衛騎士隊に割り当てるというのは。自分が馬鹿にした部隊がどれほどの物なのか体験させるのも良いかと思いますし、先日の件で空きもありますので」
セフィアは先程の仕返しとばかりに、男を自分の部隊に編成する事をヴィナリス姫に提言した。

「ふむ、面白そうじゃな。良し！　今日、この時を持って彼奴を我の護衛騎士見習いとする。異言は認めぬ」

この事には男の上司は部下に哀れみとも思える視線を投げかけ、当の本人は上司に助けられたからか其れとも、散々馬鹿にしていた護衛騎士に組み込まれるのを嫌がっているのか、地面に蹲ったまま涙を流していた。

馬車に乗り込む時に聞いた話によると地面に終始蹲っていた男に対し、上司がこれからの護衛騎士の職務内容について説明していたそ

うだ。

その後は昼食時間としては予想外の時間をくってしまったが何事もなかったかのように馬車は王都に向けて出発していった。

因みに先程と違う点はといえば、俺に食って掛かっていた騎士が生気を抜かれたかのような表情で座席に座ったまま、ブツブツブツブツと虚ろな表情をして独り言を繰り返していたという事だけだった。

第１４９話　王都コーランディア

街から護衛として此処まで付いてきてくれた、辺境騎士との諍いから2日後の夕方頃、漸く王都であるコーランディアが目前に迫っていた。

此処に来る道中で暇つぶしの会話がてら、セフィアに護衛騎士のことを聞くと、未だ暗い表情で虚ろな目をしている辺境騎士と比べて、それなりに立場が上なことが判明した。

セフィアの話を纏めると、王都直属の近衛騎士がヴィナリス姫や国王、王妃の護衛として数十人が護衛騎士として鎮座しており、その下に一般の街や村に派遣される騎士が居るという。

俺は只管元気をなくしている騎士を横目で見て、どういう職種なのかを聞くと。

一般の街に常駐する騎士と比べると、給料は桁が1つ違うほどなのだそうだが、王族の護衛だということで常に命が危険に晒されているということだった。

一般的には王都以外の街で、王族に出される数々の料理の毒見や、時には戦争の時に影武者として軍隊の指揮、そして最も過酷なのは命を狙われた場合は自分の命よりも優先して王族の盾となることらしいのだ。

魔術師はどの騎士隊に所属されるのかと聞くと、魔術師はその存在自体が極希少であり、戦争には参加させられないとの事だった。

セフィアの話によれば、魔術師は国民千人の内、一人居れば良いほうで戦争時における勝敗の決めてとしてもかなり重要だという事だ。

色々な事を考えていると何時の間にか街に到着していたようだった。
窓から外を見てみると、複数の国民が馬車を指差して何事かと話しているようだ。

馬車は国民の喧騒など何処吹く風で、一直線に城への道を進んでいく。
街中を何事もなく通り過ぎ、城の一歩手前というところで馬車は停止した。
何かあったのかと思い、外を見てみると其処には何人(なんぴと)をも寄せ付けぬほどの深く巨大な亀裂が地面に刻み込まれており、亀裂の向こう側にこれまた巨大な城門が聳え立っていた。

「ヴィナリス姫様御帰還である。開門！」

馬車の御者席で馬の手綱を握る騎士が大声を張り上げると、いつの間に馬車の横に居たのか2人の騎士が白い旗を振り、城へと合図を送っていた。

そしてその数秒後には『ゴゴゴゴッ』という重厚な音を立てて巨大な門が左右に開かれていく。

「なんじゃ、ミコトその顔は？　口を空けておると馬鹿みたいに見えるぞ」
「姫様、無理もないですよ。ミコト殿はこの国に来たことがないと仰っていましたから」
「そうか、そうであったの。許せ」
「いえ、正直驚いているのは確かですし。それにしても、この大地の亀裂はいったい」
「それは、先々代の国王様が大地の傷跡と呼ばれる、この亀裂を見て『この地に城を構えれば、敵が攻められぬ天然の城砦が出来る！』

と言ったのが始まりで」

と言う事は誰かの攻撃でこうなったのではなく、自然の崖の上に城を築いたと言う事で間違いないのか。

そうこう考えていると、重厚なる城門は完全に左右に開ききり、城の中から跳ね橋が降りてきて崖に橋が架けられた。
橋が架かると同時に馬車は動き出し、城門に吸い込まれていくかのように巨大な門の中へと入っていった。

「姫様！　無事な御帰還を心より嬉しく思います」
城へと入ったと同時に馬車の前で、口元に謎の中国人と思うような怪しげな髭を生やしたメタボな男が、脂汗を掻きながら頭を下げていた。

「・・・・・宰相のアジェルト殿だ。何時見ても眼を背けたくなるほどの暑苦しい顔だ」

俺が『コイツは？』というような顔をしていると、隣に座っているセフィアが珍しく嫌な顔をしながら小声でボソッと呟いていた。

今の今まで馬の手綱を握り続けていた騎士が姫の手を取り、馬車から下ろさせた。

「おお、宰相ではないか。これは要らぬ心配をかけたの」
「いえいえ、姫様がご無事で何よりです。大変だったでしょう、今日はもうお休みくだされ」

宰相と呼ばれたメタボ男は、ヴィナリス姫を心配していたような口ぶりだったが、姫の姿を確認した一瞬、口元が吊りあがったのを俺

は見逃さなかった。

「そうも言っておれん。事を父上に報告せねばならぬしな」
「左様でございますか。では姫様より、一足先に事を説明して参ります」

宰相の男はドテドテという足音とブヨブヨという擬音が聞えてきそうなほどに腹の脂肪を揺らせながら、足元が覚束ない今にもすっ転びそうな足取りで、額の汗を拭きながら城門から城内へと続く長い階段を駆け上がっていった。

「ほれセフィア、ミコト何をしておる行くぞ」
「はい」
「分かった。ところで護衛騎士の見習いにするとか言ってた、あの男は如何するんだ？」

馬車を降り際に眼を俺が座っていた座席に向けると、未だに縮こまった男が其処に居た。

「そういえば、そうじゃったな。誰か、誰か居らぬか？」

ヴィナリス姫がパンパンッと手を叩くと、セフィアと同じ様な青い胸当てを身に付けた女性と、その後方に同じ様な青い鎧を身に付けた男が2人、通路の奥から姿を現した。

「これは姫様、お帰りなさいませ」
「おお、ルアロスではないか。久しぶりじゃのぉ」
「セフィア副隊長も御苦労様でした。他の護衛騎士達は残念でしたが姫がご無事だった事は喜ばねば」
「あの者達が居らねば、我が此処に帰って来る事は出来なかったじ

ゃろう。亡くなった者達の家族には深い感謝をもって接してくれ」
「はい、お気遣い感謝いたします。して姫様、何か御用でしょうか？」
「そうじゃったそうじゃった。其処の馬車に乗っている者を護衛騎士の見習いとする。此処での規律の事も踏まえて、教育を施してくれぬか？」
「この男を・・・・・で御座いますか？」
ルアロスと呼ばれた女性騎士は、終始無言で馬車の座席に座っている男を見て、怪訝な顔をしている。
「ああ、今回のことで我の大切な騎士を４人も失った。一刻も早く使えるように教育してほしい」
ヴィナリス姫は口元を綻ばせながら、セフィアと目線を合わして笑いを堪えている。
「はっ！　了解いたしました」
ルアロスは後方に待機していた男に手で合図すると、２人の騎士は馬車の座席から男を降ろし、両脇を抱えるようにして通路の奥へと連れて行ってしまった。
「それでは失礼致します」
ルアロスは頭を深く下げると２人の男の後を追うようにして通路の奥へと歩いていった。
「セフィアどうじゃ？　あの男は使い物になると思うか？」
「正直言って無理だと思います。　２日持てば良いほうではないかと」

「ふむ。ミコトは如何見る？」
「『如何？』と言われても、俺は護衛騎士がどんな訓練をするか知らないから、何ともいえないな」
「そうじゃったな、すまぬ」

そう言ってヴィナリス姫は簡単な謝罪をするが、一国の王族が俺みたいな余所者に謝罪をする事自体、異例の事だろう。

「姫様、そろそろ参りませんと日が暮れてしまいます」
「おお、こうしては居られんの。父上に此度の事を説明せねば」

ヴィナリス姫も先程の宰相と同じ様に階段を上がるものと思っていたのだが、何故かルアロスという女性護衛騎士が歩いていった通路に向かって歩いていった。

はて？　長い階段を上がっていくんじゃないのかな？

第１５０話　オーバーテクノロジー？（前書き）

１５０話達成です！
（閑話も含めると１６１部数目）

第１５０話　オーバーテクノロジー？

俺はメタボな宰相が脂汗を掻きながら昇って行った階段を横目で見ながら、セフィアが歩いて行った方向を疑惑の眼差しで見ていた。

「ミコト殿、此方に付いて来て下さい」

「階段を上がるんじゃないのか？　何処に行くんだ？」

「姫様もいらっしゃるので、別の方法で一気に上へと参ります」

『別の方法？』と思いながらセフィアの後をついていくと、其処には遙か上まで吹き抜けになっている煙突のような場所で、床には天井付近に強固な鎖が付けられている鳥篭の様なものが設置されていた。

事もあろうにセフィアと姫は、何の躊躇もなく鳥篭の中へと入って行ってしまう。

「何をボケッと突っ立って居るのじゃ？　はよう乗らぬか」

俺は頭に数多くの疑問符を浮かべながら、言われたとおりに謎の鳥篭の中に足を踏み入れると、先に乗り込んでいたセフィアがスライド式の扉（？）をピシャリと閉めた。

扉が閉められた直後、俺達を乗せた鳥篭は遙か頭上でギシギシという音を立てながらゆっくりと昇って行った。

「此れはエレベーターなのか！？」

如何見ても機械が発達しているとは思えない、この世界で何故エレ

ベーターがあるのか考えれば考えるほど分からなくなっていたのだが、ヴィナリスの言葉で更に驚かされた。

「『えれべった』とはなんじゃ？　これは魔力で動く昇降機じゃぞ」
「昇降機？　それに魔力と言ったか、どんな仕組みになっているんだ？」
「仕組みは我にも良く分からんが、叔父上から聞いた話によれば、今から数十年前に城に来た一人の変わり者が魔法の力で動く『ぎみっく』とかいう未知なる物をこの地に伝え、城の研究者達が試行錯誤を重ねた結果、数年前に無事完成した昇降機がこれじゃ！」

「へぇ～～凄いんだな」
「『へぇ～』って其れだけなのか！？　他に言うべき事はないのか？」
「と言ってもな。俺の居た場所（元の世界）には、当たり前のように存在していた物だからな」

俺が口にした『当たり前の存在』と言う言葉を耳にした2人は、何故か目玉が零れ落ちそうなほど眼を見開いて俺を見つめている。

（マスター、自分の居た世界での常識をこの世界で一緒にしないで下さい。ここにはマスターの思っている『機械』や『電気』は存在しないんですよ？）
（！　そういえばそうだった。あまりにもエレベーターそっくりだったから、ちょっとしたデジャヴを感じてたよ）
（はぁ～言ってしまった物は仕方ありませんが、2人が説明してほしいみたい様な顔でマスターを見てますよ？）
（しくじったな。如何説明すれば良いとおもう？）
（・・・・・・頑張ってください）

ルゥにまで厭きられた俺は時が止まったかのように、声も発せずに俺を見る2人と静かに上へ上へと上がって行く昇降機（エレベーター）の音に居てもたっても居られなくなっていた。

そしてその沈黙を破ったのは誰よりも昇降機の自慢をしていたヴィナリスだった。

「ミコト！　どういうことじゃ？　このような昇降機が当たり前のようにある場所とは何処じゃ？　ミコトは何処の王族じゃ？」

「ミコト殿は本当に何者なんですか？　旅の魔術師と聞いていましたが、本当は何処かの皇子様なんですか？　昇降機が当たり前の存在なら、この城と同等の高い建物があるということですよね！？」

立て続けに色々な質問をするヴィナリスとセフィアに『順番に答えて行くから落ち着いて』と、とりあえずその場しのぎで宥め、2人が肩の力を抜き『さて如何説明するか』と思っていたところで昇降機は停止し、セフィアによって扉が開けられた。

そして昇降機の扉が開くと、其処には全身を隈なく覆う鎧を身に付けた男性か女性か分からない複数の騎士達と、貫禄ある髭を口元から顎の下まで生やした、見るからに王と思われる初老の男性と穏やかな笑顔で何処か泣きそうな表情の年配の女性がヴィナリスを見つめていた。

「おお我が愛しきヴィナリス、無事で何よりです。さぁ、元気な顔を母に見せておくれ」

年配の女性は周囲を取り囲む騎士を掻き分けるようにして、未だ昇降機の中にいるヴィナリスに抱きつくと、周囲の眼も気にせずに嬉し涙を流していた。

「は、母上、皆が見ております。落ち着いてください」
「そうじゃぞヴィラ、オヌシばかりヴィナリスを独り占めするでない！」
「父上もですよ。いい加減離してください、母上！」
ヴィナリスが父上、母上と呼ぶ存在。そしてその周囲を取り囲む尋常ではないほどの重装備な騎士達。
間違いない国王と王妃、そしてその護衛を務めるという近衛騎士たちか。
「セフィアもご苦労でしたね。よくぞヴィナリスを護ってくれました、礼を言います。ありがとう」
年配の女性はヴィナリスに抱きついたまま、俺の横に居るセフィアに笑いかけ礼を述べている。
「勿体無きお言葉。姫様の護衛騎士として、当たり前のことをしたまでです」
「ふふふっ、そうだったわね。あら？　貴方は何方かしら？」
此処に来て漸く、王妃はヴィナリスから手を離し、俺の目の前に立ち全てを見透かすような目で俺を真っ向から見てくる。
「王妃様危険です！　お下がりください」
周りを取り囲んでいた騎士達も王妃を俺という存在から護ろうと昇降機内に足を踏み入れようとするが、扉付近に王妃が居る所為で乗り込めずに居た。

「は、母上、ミコトはアルガロックの地から此処まで我等を護衛してくれた魔術師殿なのじゃ」

ヴィナリスの口から『魔術師』という事を聞かされた近衛騎士隊は口々に『魔術師!?』や『我等では勝ち目は』などといった声が巻き起こっていた。

「ヴィナリス、貴女には聞いてません。貴方達も黙ってなさい！」

王妃は先程までの親馬鹿とも思える行動をした人物とは思えないほどの威厳があった。

「さて、ミコトとか言いましたね。ヴィナリスはこう言ってますが、間違いありませんか？」

俺は此れだけの力を持っているにも拘らず、『蛇に睨まれた蛙』状態になり、王妃の目線から目をそむけることが出来ずにいた。

そのままどれだけの時間が流れたのだろうか。

時間にして数秒といった所だろうが、自分の中では王妃に出会ってから何時間も経っているような気がしていた。

「如何やら本当に助けてくれただけのようですね。ヴィナリスの命の恩人に対して失礼な事をしました。許してください」

王妃は俺から視線を外すと、その立場にも拘らず何処の誰とも知れぬ俺に対して頭を深く下げていた。

「そうか、ヴィアがそういうのなら間違いあるまい。ミコトと言うたな、我からも礼をいう。ありがとう」

流石に王はそう易々（やすやす）と頭を下げなかったが、その表情を見る限りでは俺への疑惑は晴れたものと思って良いだろう。

「いつまでも、愛娘を助けてくれた大切な方をこのような場所に立たせておく訳には参りませんね。部屋を用意させますのでゆっくりお休みになられてくださいね」

そして王妃が昇降機を降り、そのまま王妃に連れられるようにしてヴィナリスも降りて、その護衛騎士であるセフィアも昇降機を後にする。

さて俺も降りようとすると、まるで『モーゼの十戒』でも起きているかのように、周囲を取り囲む近衛騎士が道を開けていた。

近衛騎士の傍を通る時にふと足元を見るとカチャカチャと音がしている。

俺が魔術師だと聞かされたことで、周りから驚きの言葉が数多く出た事から、兜で顔の表情は知る事はできないが、恐らくは恐怖しているんだろう。

「ミコトさん、この部屋を使ってくださいね。後ほど夕食を運ばせますので、御身体を休ませて下さい」

周りの騎士達の事を考えていると前方に王妃が立ち止まり、一つの部屋を右手で指し記していた。

「あ、ありがとうございます」

「では失礼しますね。ほら、貴方達も持ち場に戻りなさい」

「「はっ！」」

近衛騎士達は一糸乱れずに返事をすると、ごく一部の人員を扉の前に残して足早に去って行った。

『実はこの城で一番力があるのは、王妃様ではなかろうか？』と思いながら、部屋で休む事にした。

その後は王妃様の言ったとおり、一人のメイドのような格好をした女性が豪華な夕食を乗せたトレイを手に部屋を訪れ、部屋のテーブルに皺一つないテーブルクロスを敷き、豪華な料理を並べていく。

その後、料理を運んできたシュミアと名乗ったメイドの女性は俺が此処に居る間のお世話をすると言って部屋を後にした。
その数十分後、何処かで俺のことを見ていたかのように丁度、料理を食べ終えた頃に部屋に現れ食器を下げていった。

食事後、昇降機（エレベーター）の事を聞きにヴィナリスが来るかもと思い、待っていたのだが一向に来る気配がなく、そのまま豪華すぎる妙に柔らかなベッドで眠りについたのだった。

第１５１話　一気に大金持ち？

ヴィナリスを王都に送り届けた日の翌日、俺は身体が半分近くベッドに沈み込んだ状態で目が醒めた。

身体を起こそうと腕に力を入れて立ち上がろうとするも、まるで雲か綿菓子の中にでも手を突っ込んでいるかのように、全く手応えがなかった。

その後、ベッドの生地と格闘すること数分、盛大に床に身体を打ち付けて漸くベッドから立ち上がる事が出来たのだが、床に身体を打ちつけた音が響いたのか、部屋の外からパタパタという足音とガチャガチャという何か金属のような物が揺れて、擦りあうような音が聞えてきた。

そして足音と金属が擦れる音が止むと同時に、部屋の扉をノックする音が聞えてきた。

「御客様？　お目覚めになられましたでしょうか？」

扉をノックする声に答える前に軽く寝癖や着衣の乱れなどを整えると、急いで扉の方へと足を進めた。

俺がそっと扉を開くと其処には昨日豪華な食事をトレイで運んできた、シュミアという名のメイドと、その両脇にはメイドの護衛のためか頭部以外を鎧で隙間なく覆っている騎士が直立不動で構えていた。

「おはようございます。よく御休み頂けたでしょうか？」

「ちょっとベッドが豪華すぎたけど、問題なかったよ」

「ところで先程、何か大きな物音が聞えましたが、如何為されたのでしょうか？」

「ああ、その事か。俺は昔から寝相が悪くてね、ベッドに寝ていたはずなのに目が醒めたら床に寝っ転がって居たんだよ。　恐らくは大きな物音って言うのは俺がベッドから落ちた音じゃないかな」

実際のところは底なしベッドから脱出するために飛行魔法を使い、ベッドの横に移動したところで気を抜いて墜落、その結果勢い良く床に背中を打ちつけたというのが正しいのだが。

「まぁ！？　それは大変でしたね。御身体は大丈夫でしたか？」

「身体は人一倍丈夫だから、大したことはないよ」

「そうですか・・・・・っといけない！　直ぐに朝食の準備を致しますので、少々お待ちいただきますか？」

「ん、分かった」

「それでは失礼致します」

シュミアが踵（きびす）を返して部屋を出てから数分後、昨日の様に銀トレイに料理を載せて部屋を訪れた。

「お待たせいたしました」

持って来たのはフランスパンを輪切りにしてバターのような物を塗った物と、見た事もない紫と緑のマーブル模様という異様な色をした野菜のサラダ、そして良い香りを漂わせる熱々のスープだった。

そして料理を並べ終えたシュミアが俺に着席を促したあと、頭を下げて部屋をあとにした。

その後は恐る恐る不気味な野菜を口にしたのだが、それは良い意味

で裏切られる事となる。
不気味な野菜の見た目は兎も角として、味わった事のないスープやパン・野菜の美味しさに舌鼓を打ち、あっというまに平らげてしまっていた。
食べ終わってから数分後、シュミアが食器を下げに部屋を訪れる。

「ご満足いただけたようで何よりです。あと国王様より『改めて御礼を言いたいので玉座の間まで来るように』との託(ことづけ)を預かってきております。玉座の間への案内を呼びますので少しの間、お時間を頂きます」

シュミアは其れだけを言うと、食器を載せたトレイを手に、部屋を後にした。

それから数分後、シュミアが言っていた案内だろうか？　真っ赤な髪を肩まで伸ばした清楚な女性が部屋にやってきた。

「失礼致します。お客様の案内を申し付けられました、ケリュレイと申します」
「あ、ミコトです」
「ではミコト様、玉座の間に案内します。ですが、その前に腰の物をお預け願えますでしょうか？」
「腰の物って剣のことか。ああ構わないよ」
（すまないがルゥ、少しの間我慢してくれるか？）
（分かりました。お気をつけ下さいマスター）

俺は瞬間的にルゥと念話し、剣を目の前のケリュレイという女性に手渡した。
事前に亜空間倉庫内にルゥを仕舞っても良かったのだが、逆に手ぶらだと怪しまれてしまうので敢えて腰に装備しておいた。

「確かにお預かりいたしました。それでは此方へ・・・・・・」

ケリュレイは俺の剣を胸の前で大事そうに抱えると、そのまま俺を連れて玉座の間へと歩いていく。

数秒後、長い廊下を抜けて案内された先には左右に開かれた重厚な扉が威圧感を漂わせて存在していた。

そしてその重厚な扉の両脇に入口を護るようにして重騎士とも思える、全身（頭部を含む）を隈なく覆う鎧を着込んだ、２人の騎士が斧槍（ハルバード）を構えて護っていた。

「此処で少々お待ちください」

女性は俺を扉の前で待たすと、開け放たれた扉の前で深く頭を下げ、言葉を口にした。

「失礼します。ミコト様をお連れ致しました」
「うむ、入室を許可する」
「はい。ではミコト様、此方へ」

俺はケリュレイに促されながら玉座の間へ足を踏み入れると、其処には壁一面に騎士が立ち並び、正面の玉座には国王、その隣には王妃、そして国王の横にヴィナリス皇女が楽しそうに王妃と会話していた。

周囲に立ち並ぶ騎士の目に晒されながら玉座の前に進み、片膝を折って座ろうとしたところで国王から声を掛けられた。

「臣下の礼を取らずとも良い。そなたは我が愛娘であるヴィナリスの命の恩人じゃ、腰を上げよ」
「はい」
「さて、改めて礼を言う。そなたがあの場に居らなければ、ヴィナリスはこの地を踏む事は出来なかったであろう。少量ではあるが、褒美を取らせる」

国王が手を叩いて壁際に並んでいる騎士に合図を送ると一番玉座に近い場所に立っていた騎士が歪に膨らんだ茶色の袋を俺に手渡してきた。

「我が娘に値をつける訳ではないが、ほんの気持ち程度じゃ」
「有難く頂戴いたします」

俺はズッシリと重い袋を手に『ほんの気持ち』どころではない事を思い知った。

「それと、ヴィナリスから聞くところによれば、何かを探して旅をしていると聞くが？」
「はい。伝承にまつわる場所や、神聖なる祠を探して各地を旅しております」
「ふむ、それならば宮廷魔術師のイシュナムに聞くのが手っ取り早いじゃろう。更に城内を自由に歩く事も許可する。ただ機密上、立ち入れない場所には騎士が立っているがの」
「ありがとうございます」
「あなた、今イシュナムは休暇中になっている筈ですよ」
「む？　そうじゃったか？」

その後、謁見を終えた俺は1週間後くらいまで宮廷魔術師のイシュナムさんが戻ってこないと聞かされ、更に街の中にも図書館がある

と聞き、預けていた剣と入城許可証を受け取り、城の外へと出た。

このまま客室で過ごしても良いとは言われたが、流石に其処まで厄介になるわけにはいかず（本音はベッドが豪華すぎて落ち着かないという事）に宿で部屋を取ると言う事にした。

因みに客室係となっていたシュミアは俺が城に来たときの案内係になってくれるんだそうだ。

そしてその日の夜、１泊辺り銀貨１枚の宿屋で国王から『ほんの気持ち』として貰った袋を広げると、其処には黄金色に輝く硬貨が２０枚入っていた。

ミラに聞いた、この世界の実情によると、日本円にして１００円相当の銅貨が１００枚で此処の宿代である銀貨１枚（１万円相当）、更にその銀貨が１００枚で金貨１枚（１００万円相当）なんだそうだ。

ということは・・・・・金貨２０枚は２０００万円!?

何処が気持ち程度なんだーーーー!!

第１５２話　虫に脅える女性

ヴィナリス姫を助けた謝礼として国王から金貨２０枚を受け取った翌日、俺は街の宿屋で目を醒ました。

王国一物知りだという、宮廷魔術師のイシュナムさんが休暇から戻ってくるまで残り６日。　その間に街を回ることにした。

王都に到着した時には馬車で通り過ぎるだけだったので、此れから行くところが楽しみでもあり、国王から聞いていた、街の中にあるという図書館も目当てだったりする。

さて宿屋の敷地内にある井戸から冷たい水を汲み上げて顔を洗うと、その足で朝食を済まし、宿の店員さんに聞いた広場に向かう事にする。

宿屋を出発して歩くこと凡そ５分、其処は大いに盛り上がっていた。広場のほぼ中心部には水を盛大に噴き上げる噴水があり、そのまわりには色鮮やかな野菜や果物、果ては何の肉かは分からないが５０ｃｍはあるであろう、長い串に肉の帯を巻きつけ、刷毛のような物で調味料を塗りつけながら、サーカスで使うような火の環で焼いていく姿があった。

俺はたったいま、朝飯を食ったばかりだと言うのに、美味そうな匂いで其の場を動けずにいた。

とうとう、いても立っても居られずに道具袋の中にある銀貨（宿代の釣り）を手に、肉を焼く屋台に近づこうとしたところで不意に誰かにぶつかった。

「きゃっ！？」

俺はぶつかった女性が地面に倒れ伏す前に瞬時に背中側に回りこむと、そっと身体を抱きかかえ、近くのベンチへと腰を下ろさせた。

その際に手に持っていた銀貨1枚が何処かに転がっていってしまったが・・・・・・。

「えっ！？　どうして？」

女性にしてみれば、自分の目の前でぶつかった男が何時の間にか後方で自分を抱きかかえている事に違和感を感じていることだろう。

「大丈夫ですか？　お怪我はありませんか？」

「いえ・・・・・・大丈夫です。余所見をしていたもので、申し訳ありませんでした」

「いや、俺の方こそ済まなかった」

女性は再度俺に対して深深と頭を下げると、木で出来た杖を支えにしてゆっくりと立ち上がった。

そして右足を引き摺るようにして、危なっかしい足取りで歩き出そうとしている。

「何処か御身体が悪いんですか？」

若い女性が杖を持って歩いているのだから身体が悪いという事は分かっていたが、敢えて聞く事にした。

「え、ええ、数日前に魔物に襲われて膝を壊してしまいまして、此れから街で診療所を営(いとな)われている魔術師様のところへ治療しに行く

ところだったんです」
「それでは先程のお詫びも兼ねて診療所までお送りいたしますよ」
「そんな・・・・・悪いですから」
「こういう言い方は変ですが、ぶつかったのが俺で良かった。もし仮に変な輩だった場合、可也の揉め事になるのが目に見えて明らかですからね。自分としても多少、縁がある貴女がいざこざに巻き込まれるのは後味が悪いですから」

一瞬、自分の魔法で膝の怪我を治してやろうかとも考えたが、自分が魔術師だという事をこの女性が知って恐れられるのも気分が悪いしと思い、せめて診療所までだけでも一緒について行きたいと考え手を差し伸べたのだった。

更に女性は、ほんの一瞬ながら俺が『変な輩』と言う言葉を口にした瞬間、顔をしかめていた。

何か過去に似たような経験があるのだろうか？

「其処まで言われるのでしたら、お願いしても宜しいでしょうか？誠に身勝手かもしれませんが」
「分かりました。診療所はどちらでしょうか？」
「あっ、すいません。この広場を東側に通り抜けて、暫く進んだところにある白い壁の建物がそうです」

女性は右手で杖を持ちながら左手で広場の奥を指差して場所を示している。

「では行きましょうか。えっと・・・・・」
「あっ、私はリミリアと申します」
「俺はミコトといいます。診療所までの短い縁ですがよろしく」

こうして俺は直ぐ横を杖を持ちながらヒョコヒョコ歩くリミリアが、バランスを崩して倒れそうになる度に支えながら広場を抜けて細い路地を歩いていった。

広場から路地に入る時に『図書館・資料館⇒』と書かれた看板が眼に入ったので『リミリアを診療所に送った後で戻ってくればいいか』と思いながら、リミリアと共にゴツゴツした石畳の道を進んでいく。

路地を歩いている途中で、道に寝そべっているガラの悪い男から睨むような視線を感じた為、リミリアに見えないようにして手に小さめのファイアーボールを作り出すと『ひっ!?』という声と共に一目散に逃げていった。

「ミコトさん？　どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ。近寄ってきた悪い虫を追い払っただけだから」

「え!?　いやぁぁぁぁーーー！　私、虫なんて・・・・・虫なんて大っ嫌いなんですぅぅぅ」

リミリアは其れまでの物静かな表情から一転して、悲鳴を上げながら俺の右半身に抱きついてくる。

「い、いや、心配しなくても、もう追い払ったから。もういないから落ち着いて」

悪漢のことを『悪い虫』と比喩したのが不味かったか。

彼女は俺が幾ら宥めようとも一心不乱の大混乱に陥り、周りの眼など物ともせずに悲鳴を上げ続けた。

それから数分後、俺の横には顔を茹蛸のように真っ赤に染め上げ、俯きながら無言で路地を歩くリミリアの姿があった。

「あ、此処が診療所です。有難うございました」
「此処がそうか。少し混乱はあったけど、無事にたどり着けて良かった」

俺の目の前にはリミリアが示したとおり、壁一面が真っ白な平屋建ての建物があった。

「出来ればその事は忘れてくれると有難いのですが・・・・・。
それはそうと此処まで有難うございました」
「帰りは大丈夫かい？」
「はい、診察が終了して帰る頃には、お城で働いている妹が迎えに来てくれる事になっていますから」
「それでも女性2人で、というのは如何なのかな？」
「大丈夫ですよ。妹は強いですから、あんまり言うと嫌がるんですけどね。それに私はこう見えても強いんですよ」

診療所の入口に手を掛けたリミリアから感謝されながら別れると、途中で通り過ぎた図書館に向けて足を進めはじめた。

第１５３話　本の無い図書館

広場でぶつかられた女性、リミリアを診療所まで送り届けた俺は来た道を少し戻り、街の図書館へと足を進めた。

図書館と聞いて楽しみで胸が高鳴っていたのだが、残念ながら予想は大いに外れ、本棚のスペースの割には置いてある本が少なかった。

「いらっしゃいませ」

俺が図書館に入って直ぐに現状を目の当たりにしていると不意に横から女性に声を掛けられた。

「此処が図書館で間違いありませんよね？」
「？　はい。そうですが何か？」
「いえ、思っていたよりも本の数が少ないなと」
「やはり、そう思われますか。はぁ～～～」

本が少ないと言った途端に表情を曇らせて溜息をつく受付に何処か罪悪感を感じていた。

「も、申し訳ありません。悪気は無かったんですが」
「気になさらないで下さい。これでも数ヶ月前までは、本棚に隙間がないほど本で埋め尽くされていたんですよ。それなのに、それなのにぃ・・・・・・」

図書館の受付は目を瞑って涙を浮かべている。

「あの～差し支えなければ、理由をお聞かせ願っても宜しいですか

？」

「い、いえ、人に聞かせるような内容ではありませんから、お気になさらずにお寛ぎ下さい」

その後も俺がなんと言おうが、受付の女性は一歩も譲らなかった。

仕方なく残されていた数冊の本をパラパラと読んでみるが、精霊の居場所を示すヒントすら見いだせないまま、図書館での用事はなくなった。

俺は未だに落ち込む表情をしている受付の女性を尻目に、図書館を出て広場を目指し歩き出した。

その途中、今頃は診療所で治療を受けている筈のリミリアが杖を手にゆっくりと足を引き摺りながら舗装されてない道を歩んでいた。

確か、帰り道は妹さんが迎えに来てくれると言っていたはずだが？

何かがあったのだと思い、俺はリミリアに話しかける事にした。

「リミリアさん？　診療所で何かあったんですか？」

リミリアは俺の問いかけにビクッと身体を震わせながら俺の方へ振り向くと、何故か溜息を吐きながら表情を落としていた。

今日はよく溜息を聞かされる日だな。

「ミコトさんでしたか・・・・・どうして此処に？　図書館での調べごとは宜しいのですか？」

「『どうして此処に』というのは俺の台詞ですよ。診療所で怪我の

治療をしているのではなかったのですか？」
「少し思いがけない事が起こりまして、これから家に帰る途中だったんです」
「妹さんが迎えに来る筈では？」
「はい。妹もまだ仕事をしている時間ですので、迷惑を掛けるわけにもいかず」

俺はその後、リミリアの背にそっと手を添えながら広場へと戻り、近くのベンチに座らせると何があったのか聞くことにした。

当初はリミリアも口を固く閉じていたのだが、俺が心配そうに何度も聞くと漸く口を開いてくれた。

聞かされた内容を纏めると、如何やら傷を治療してくれている魔術師から此れまでのほぼ倍額という法外な治療費を請求され、ほとほと困っているのだそうだ。

「何故誰も国に対して、その事を訴えないのですか！？　そのような事、違法そのものじゃないですか」
「もし訴えて、この国から出て行かれるような事になっては、私のほかに治療を受けている方々が困りますので。魔術師様の存在はとても貴重ですので、もしも居なくなられると、高価な薬草に頼らざるを得なくなりますし」

そういえば国境の町でギルド長の女性も言っていたな。
魔術師は自分達の存在を逆手にとって膨大な金を要求すると。

そんなこんなでリミリアと話をしていると、何処かで見た女性が息を切らせながら診療所のあった方角から走ってくるのが眼に入った。

周りに屯していた人たちも『何事か!?』と女性に注目していたが、あまりの形相に目線を外していた。

「姉さん！　リミリア姉さん!!」

「え？　シュミアなの？」

ん？　シュミア？　確か城の中で俺の案内役を務めてくれる女性がそんな名前だったような。

「そうよ。　何時もより仕事が早く終ったから驚かそうと思って診療所に行って見れば『もう帰った』って聞かされるし、心配したんだからね！」

そう言うや否や、何処かで見たシュミアという女性はリミリアさんに正面から抱きついた。

「ちょっと!?　周りも見てるし、ほらミコトさんだって」

リミリアさんは抱きつかれながら、顔を真っ赤にして抗議をしている。

「へっ？　ミコトさん？」

抱きついていた女性も辺りから注目の的になっていた事に気がつき、今頃恥ずかしくなったのか、顔全体を両手で覆いながら周囲に目を泳がせている。

俺も抱きつかれていたリミリアの横で如何対応して良いのか分からずに直立していると目を泳がせていた女性と確(しっか)り目があった。

「ミコト様!?　どうして姉さんと一緒に居るんですか?」

如何やら何処かで見た女性ではなく、城で案内役を務めていたシュミア本人だったようだ。
しかもこの事にはシュミアだけでなく、リミリアも吃驚していたようで。

「シュミア、ミコトさんと知り合いだったの?」
「姉さんこそ、如何してミコト様と?」

その後は広場の中央付近のベンチで周囲の注目の的に晒されているリミリア、シュミア姉妹と、とばっちりを受けたかのごとく姉妹から指を指されている俺の姿があった。

どうでも良いが2人共、人を指差すなんて行儀がわるいぞ・・・・・。

第１５４話　とある問題発言

城での案内役のシュミアが周囲の目も気にせずに、姉であるリミリアに抱きつくと言う行為をしてから十数秒後、漸く周囲の喧騒で我に返ったのか、顔を茹蛸のように真っ赤にしたシュミアが俺とリミリアを無理矢理何処かへと引っ張っていくと言う形で広場をあとにした。

引っ張られること数分後、相変わらず顔を真っ赤にした姉妹（妹の方は別の意味で息を切らせて真っ赤になっているが・・・・・）に連れられて、一軒の家へと連れてこられた。

「此処なら邪魔が入りませんね。さぁ如何してミコト様が姉さんと一緒に居たのか話して貰いますよ」
「その前にちょっと良い？　此処は何処？」
「此処は私とシュミアが一緒に暮らしている家です」

その問いに答えたのは俺でもシュミアでもなく、足を怪我しているのにも拘らずに無理矢理走らされたリミリアだった。

「ねぇシュミア、ミコト様ってどういう事？」

リミリアは足が痛いのか、それとも別の理由でなのか眉間に血管を浮き立たせながら、何処かヒクヒクと引きつった顔でシュミアを睨みつけている。

「ね、姉さん？　落ち着いて、ね？」
「私はどういうことかって聞いてるのよ？」
「み、ミコト様は国境近くで暴漢に襲われていた姫様を救ってくだ

さった、国にとっても姫様にとっても命の恩人の方です」

おいおい、守秘義務とやらは良いのか？

まぁ、あの殺気じみた目で見られれば話さざるを得ないか。

でも実際のところリミリアは何者なんだ？

「姫様の・・・・・なるほど、そういうことですか」

「あの～～失礼かとは思いますが、リミリアさんは一体何者なんですか？」

「そういえば、名前だけしか教えていませんでしたね。ミコトさん・・・・・いえ、ミコト様が姫様の命の恩人である以上、此方も形式にのっとって名乗らねばなりませんね」

リミリアはそう言いながら、怪我をしている足を庇いながら何処に隠していたのか小型のナイフを目前に差し出し、片膝を折って俺に頭を下げると驚愕の事実を口にした。

「私の名はリミリア。ヴィナリス姫様の護衛騎士隊長を務めている身ではありますが、怪我により前線を退いています。私がいない間に姫様にそのような危険が及んでいようとは」

「姫の護衛騎士ってことはセフィアの？」

「はい、セフィアは我が隊の副隊長です。それにしてもセフィアからの報告にあった、姫様の命の恩人が貴方様だったとは。世間は狭いものですね」

「もしかして診療所に治療に行っているのも、何か別の意味があったりしますか？」

「いえ、其れは単に足の治療のためだけです。今、この国には宮廷魔術師のイシュナム様と治療院を営んでいる魔術師の2人しかいませんから、当然といえば当然なのですが」

「もし宜しければ怪我を見せていただいても宜しいですか？」

「えっ？　それは如何いうことなのでしょうか」
「恐らくは秘密にされているのでしょうが、俺も魔術師なんですよ。回復魔法も使えますので治療できないかと思いまして」
「「ミコト様は魔術師様だったのですか！？」」
この事には隅の方で縮こまっていたシュミアも驚きの表情を示していた。

「剣をお持ちでしたので、てっきり剣士の方だと思っていました」
「剣も使える魔術師という事なんです。遠距離でしか攻撃できないというのは戦場に於いて致命的ですからね」
「そうでしたか」
「ところで『ミコト様』っていうの辞めません？　俺はそれほど敬われるほどの立場の人間ではありませんから、前みたいに普通に名前で呼んで頂ければ」
まだ俺の正体もリミリアさんの正体も知らなかった頃みたいに親しみを込めて普通に呼んでくれたらと思っていたのだが、彼女の顔は明らかに拒否を示していた。

「お願いします」
「・・・・・分かりました。では、ミコトさんと呼ばせていただきます」
本当なら呼び捨てでも良いんだけど、この様子じゃ此れが妥当かな。

「それで先程言っていた怪我の事ですが、治すことが出来るかもしれないので見せてもらえますか？」
「そこまで御手数をかけて頂くわけには参りません」
「気にしないで下さい。それにこのままでは、高い治療費を払わね

ばならなくなりますし、護衛騎士と言う仕事にも支障をきたしてしまいますよ？」

「姉さん・・・・・・」

「すいません。宜しくお願いします」

彼女はそういうと、スッと立ち上がりスカートの裾を持ち上げていき、太腿を露(あらわ)にした。

そして、まるで事前に打ち合わせていたかのように、シュミアが踝(くるぶし)から膝上まで巻かれている包帯を解くと、其処には一直線の傷が痛々しく刻まれていた。

「これは魔物に付けられた傷ではないですね。どうみても剣によって傷つけられた物ですね」

俺が『剣によって』と口に出した瞬間、表情を曇らせた事から本当の事だろうと思ったが、さすがに問い詰めるのは失礼だと思い、敢えて聞くような事はしなかった。

「それで如何でしょうか？　治りますか？」

「此れぐらいなら簡単です。少しの間、そのままで居てください」

俺はそっと心の中で魔力を解放すると、手を傷口に触れるか触れないかというところに差し伸べた。

見る人が見れば『何を羨ましい事を！』と言われるかもしれないが、治療のためであって決してそのような事は思っていないのであしからず。

そうして俺が膝小僧に手を触れながら回復魔法を唱えると、まるで

逆再生でもしているかのように傷跡が小さくなっていき、数秒後には跡形もなくなっていた。

「ふぅ、これで大丈夫だとは思いますが、普通に歩いてみてくれませんか？」

リミリアもシュミアも『もう治ったの！？』という驚きの表情を見せていたが、リミリアが杖も持たずに、尚且つ足も引き摺らずに歩いている姿を見て再度、驚愕していた。

「ありがとうございます！　なんとお礼を言ったら宜しいのか・・・・」

「いえ、お気になさらずに」

と治療を終えて窓から外を見てみると、空は既に星が瞬いていた。

「何時の間にか、こんな時間になっていたのか」

「もし良ければ、お礼も兼ねて夕食を食べていかれませんか？」

「いえ、そんな悪いですし」

「そんな事はありません！　ミコトさんの御蔭様であと何年、あと幾ら掛かるか分からなかった怪我を治療して頂いたのですから、せめて御馳走させてください」

「ねぇミコト様、姉さんが此処まで言うんだから食べていってよ。何なら食後のデザートに私も食べる？」

「ブッ！？　な、なにを言って・・・・・」

「シュミア！　女性が何をはしたない事をいっているのですか！？」

「はしたない事？　お城で昼食の時に他の騎士が笑いながら『食後に私を食べたい』って言っていたから、どういう意味か分からなかったんだけど。　ねぇ、どういう意味？」

知らずに言っていたのか・・・・・それはそれで問題があると思うんだけど。

「ねぇ、ねぇってば！　教えてよ」

問題発言で再度、耳まで真っ赤に染まったリミリアが俺に聞えないようにそっとシュミアの耳元で囁くと、シュミアの顔も次第に赤く紅潮していく。

全部話し終えたのだろう。

シュミアは此方を見ながら『あぅあぅあぅあぅ』と声にならない呟きをした後、一目散に奥の部屋へと走り去ってしまった。

自分の発言が何を意味したのか今頃になって理解したようだな。

リミリアは包丁を手にしながら『再教育しなきゃ』と口ずさんでいるのが非常に気になるのだが。

問題発言の所為か俺が居る間、シュミアが姿を現さなかったのは当然といえるかもしれない。

第155話　セフィアとリミリア

翌朝、目が醒めてから宮廷魔術師のイシュナムさんが街に戻ってくるまで残り5日もあると思いながら朝食を済ませ、『今日は何をして暇を潰そうか』と考えながら、通りを散歩していると、前方から顔中を汗だくにして走っているリミリアが姿を現した。

服装はといえば、昨日見ていた何処かのお嬢様という格好ではなく、身体のラインがハッキリ分かる薄手のシャツに紺色のスパッツのようなパンツ姿で荒い息を吐いている。

俺が呆然としていると、彼女も俺が居る事に気がついたのか肩で息をしながらゆっくりとした足取りで近づいてきた。

「ハァハァ・・・・・ミコトさん、おはようございます」

「リミリアさん、如何したんですか!?　怪我が治ったとはいえ、無理は禁物ですよ」

昨日の治療で膝に醜く刻まれていた傷は跡形もなく治療したのだが、傷の大きさから言っても可也の出血を伴っていただろう。

治療魔法は傷を治せても、失った血液までは増やせないのだから。

「怪我の所為とはいえ、長い間職務を怠ってしまいました。シュミアから聞くところによれば戦争が近いとの事なので一刻も早く前線に復帰しなければならないので体力づくりを」

「だからといって・・・「リミリア隊長!?」・・・・・・ん?」

明らかに無理をしているリミリアを止めようとした時、俺の後ろから何処かで聞いた声が聞えてきた。

「あれっ、セフィア？　どうかしたの？」

俺は振り向いて相手の顔を確認すると紛れもなく、ヴィナリス姫の護衛を務めていたセフィアが私服でリミリアを見据えていた。

その姿はといえば女らしさとは程遠く、例えて言うなら女性が男装をしているかのような。

リミリアとセフィアの間には俺が居るのだが、余程驚いているのか俺のことに気づかないようだった。

「『如何したの？』は此方の台詞です！　リミリア隊長こそ此処で何をしているのですか！？」

「何って、体力づくりのための運動をしているところだけど？」

「怪我をしているのではなかったのですか？　職務に戻りたいと言う気持ちは痛いほど分かりますが、無理をなさっては傷の治りが遅くなりますよ」

「怪我なら、もうすっかり良くなったから心配しなくても大丈夫よ」

「あれほどの怪我が、そう簡単に治るはずがないではありませんか！　さ、家に戻りますよ」

セフィアはリミリアが何を言っても耳を貸さずに腕を掴んで何処かに連れて行こうとする。

「いや、だからね。怪我はミコトさんに治してもらったから大丈夫なんだって」

「えっ？　ミコトさん？」

此処に来て漸く、俺が此処に居る事に気がついたセフィアはリミリ

アの腕を掴んだまま、俺の方を凝視して固まってしまっている。

「もうセフィア、いい加減離しなさい！」

「はっ！？　私は何を・・・・・・ミコト殿、どうして此方に？」

それから数分後、漸く落ち着きを取り戻したセフィアと共に広場のベンチに腰を下ろすと、俺が怪我を治したことを話した。

順番としては噴水を背にして左から俺、リミリア、セフィアの順だ。

「そうでしたか。隊長もそれならそうと、言ってくれれば良いものを」

「散々説明したわよ。興奮すると人の話を聞かないのは、セフィアの悪い癖よ？」

セフィアがリミリアに平謝りをしているのを見ながら、気になったことを聞いてみることにした。

「それで？　セフィアはどうして此処に居るんだ？」

「それがその・・・・・・たまたま非番だったので『隊長は如何しているのかな？』と思って家に行って見たところ、蛻（もぬけ）の空だった事と、街の診療所が開く時間にも達していなかった事から『また何処かで無理をしているんじゃないか』と心配して街の中を虱潰（しらみつぶ）しに探していたんです」

「それで息を切らせている私の姿を見て興奮したと？」

「申し訳ありませんでした。それにしても、ミコト殿と隊長がお知り合いだったとは驚きです」

「知り合いと言うほどの物じゃないんだけど。強いて言うなれば、街でぶつかった縁かな？」

確かに可笑しな縁だけど、セフィアとリミリアが知り合いで、俺が２人の傷を治療した事は偶然なのか？

俺がこの事について考えていると何処からともなく、蜻蛉（とんぼ）のような虫（俺が知っているサイズの一回り大きい）がそっとリミリアの左肩に止まった。

俺の居る反対方向である、右を見てセフィアと話をしているリミリアも肩に何らかの感触を感じたのか自分の肩に目をやった瞬間、時が止まったかのように固まってしまった。

「あっ！　いけない」

セフィアもリミリアの虫嫌いを知っているのか、リミリアが虫を凝視しているのを見て両手で自分の耳を押さえていた。

俺も少し前に路地で『悪い虫』発言した事を思い出し、耳を押さえようとするが時既に遅く。

「キャアァァァーーー！？？　虫ィィィィ、来ないでーーー」

リミリアは俺の至近距離で超音波とも言える叫び声を挙げて恐ろしいほどのスピードで走り去っていってしまった。

「み、耳が・・・・・」

「隊長も虫嫌いは相変わらずですね。戦場でどれだけの死体を目の前にしても平然としているのに虫を見た途端、人が変わったかのようになるんですから。　ミコト殿？　大丈夫ですか？」

セフィアは耳を押さえて蹲っている俺に目線を合わすようにして跪

くと心配そうに声を掛けてきた。

「あぁ、まだ耳がキーンとするよ。それにしても本当に彼女がセフィアの上司なのかい？　とてもそういう風には見えないんだけど」
「それは私が隊長と比べて、女性としての慎ましさに欠けると言いたいのですか？」

セフィアは腰に手を当てて怒ったような表情をして問いかけてくる。

「いや、そういうつもりじゃ」
「冗談ですよ。私も身内から嫌になるほど言われ続けているので、もう慣れましたから」

セフィアは徐に立ち上がって姿勢を正すと、此方に手を差し伸べてきた。
俺はその手を取り立ち上がると、セフィアと目が合い盛大に笑い合った。

「そういえば、馬車の中で俺と護衛騎士を馬鹿にしていた男はどうなった？　元気にしてる？」

俺の発言にセフィアは何の事かと少し考えた後、思い出したかのように口を開いた。

「彼なら何とか、訓練について来てますよ。最初の頃と比べて少しはマトモになってきてますし」
「皆で苛めてるんじゃないの？　護衛騎士を馬鹿にしたような発言があったからさ」
「私も最初は簡単に音を上げるものと思って、あまり期待していなかったんですが、見る見るうちに上達してきて目を見張るものがあ

りましたからね。　潰さないように鍛えて行こうと思っているんです」

その後も色々と世間話を繰り返しているうちに辺りはすっかり暗くなり、良い暇つぶしとなっていた。

そして俺はセフィアと別れた後、屋台で買い食いをしながら宿へと戻った。

余談ながら・・・・・その後のリミリアはといえば、肩にとまった虫が風速で飛んでいった後も、何処で付着したのかシャツについている黒い染みを虫と勘違いして、体力が完全に尽きるまで街の中を爆走していた。

帰りが遅い姉を心配して、街中を探し回っていたシュミアの手によって彼女は回収されたという・・・・・。

第１５６話　姿なき声に導かれ

宮廷魔術師のイシュナムさんが街に戻ってくるまで、あと４日。

今日も今日とて何の目的もないまま、街を歩いていると暗い路地裏から男の叫び声と幽かにだが、泣いている子供の声が聞えてくる。

（なんだ？　何か良くないことでも起きているのか？）

俺は嫌な予感が当たらない事を信じて、気配を消しながら路地裏の方へ歩いていくと、其処には古びた建物の前で、必死に大八車のような物に黒いズタ袋を積んでいる男の姿があるだけで泣いている子供など何処にも存在しては居なかった。

しかし、この建物も何処か変だ・・・・・窓という窓に板張りがしてある。

本来は雨が入ってこないように、もしくは台風に備えて窓に板張りをするのが普通だが、俺がこの街に到着してから大雨や嵐という風な悪天候は起こってはいない。

「ん？　アンタ、俺に何か用でもあるのか？」

俺は建物を見ながら腕を組み考えながら、一心不乱に大八車へと荷物を積んでいる男へと近づいていくと男の方も手を止め、俺を睨みつけるようにして話しかけて来た。

「いや、ここいらで子供の泣き叫ぶような声が聞えてきたんで、何かあったのかと思ってな」

「子供？　見てのとおり、此処には俺が居るだけだぜ」
「そのようだな聞き間違えだったようだ。邪魔したな」

俺が気のせいだと思い、其の場を離れようとすると建物の扉が乱暴そうに開かれ、何処かで見たようなメタボな体型をした一人の男が姿を現した。

「何をサボっているのだ！　早く積み込みを終らせぬか」
「も、申し訳ありやせん」

男はメタボに怒られたのが、俺の所為だと言わんばかりに凄い形相で睨みつけると、ズタ袋を大八車に積む作業を再開した。

「まったく・・・・・。ん？　オヌシの顔、何処かで見覚えがあるような気がするのじゃが、何処じゃったかのぅ？」

メタボな体型をした男は弛み捲くった腹の贅肉をタプンタプンと揺らしながら、俺を爪先から頭のてっぺんまで舐めるような視線で見てくる。

「思い出せんのぉ～～まぁええわい。此処は大通りと違って何も見るものはないぞい？　分かったなら仕事の邪魔じゃ、向こうに行ってはくれぬか」
「は、はぁ・・・・・お邪魔しました」

俺は色々と『何を積んでいるのか』やメタボな体型の男がこんな場所とは不似合いな『高価そうな指輪や腕輪』といった装飾品を身に付けているのに違和感を覚えながら、昼飯を食すべく、裏路地を後にした。

そしてその日の夜、誰かに呼ばれたような気がして宿の外へと出て大通りを歩いていると、何処からか複数の視線が俺に浴びせられている事に気がついた。

俺以外にも大通りには酔っ払いや冒険者などが屯(たむろ)していたので、特に気にもせずに屋台で買い食いしながら広場を一周して宿屋の前へと戻ってくると、先程と同じ様な視線を感じた。

流石にこのような事が続けて起これば、何かがあると判断し周囲に目を遣ると、昼間に足を運んだ裏路地から2、3人の子供達が俺を見ていることに気がついた。

向こうも俺が自分達の方を見ていることに気がついたのか、逃げるようにして路地裏へと消えていった。

（裏路地に住む子供達でしょうか？）

（多分そうだと思うけど、昼間の嫌な予感もあるし、ちょっと行ってみよう）

（マスターなら大丈夫かと思いますが、お気をつけ下さい）

俺はルゥと念話で会話しながら子供達を追って路地裏へと足を踏み入れると其処には2、3人どころではない、10人程度の薄汚れた格好をした子供達が、誰かが捨てたであろう、殆んど果肉の残っていない果物を競い合うようにして食べていた。

良く見れば其処は昼間、メタボな男と大八車にズタ袋を乗せていた男が居た場所だった。

「お兄さん・・・・・・だぁれ？　食べ物ない？」

たくさんの子供達の中で身体が弱いのか、食べ物の競い合いに参加していなかった少女が俺のズボンを引っ張り、食べ物を催促してきた。

「こら、駄目だよ！　殺されちゃうよ」

そんな少女の事に気がついた、周りの少年少女よりも一回り大きな体格をした少年が物騒な言葉を口にしながら、少女を俺から引き剥がす。

「ごめんなさい、ごめんなさい。代わりに僕が罰を受けますから、ミナには手を出さないで下さい」

そう言って少年は目をギュッと瞑り、両手を広げて少女と俺の中間に立ちはだかった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　俺は何もしない。此処で何が起こっているのか説明してくれないか」

俺が少年に声を挙げると、今の今まで果物を取り合いしていた子供達が『ミナ』と呼ばれた少女と目の前の両手を広げて立っている少年を庇うようにして俺の前に立ち塞がった。

「みんな!?　どうして？」

さっきまで少女の盾として立っていた少年も周りの異常さに困惑した表情を浮かべている。

そしてどれだけの時間が経過したのか、口々に一言二言と喋りだした。

「この人、今までの人と何処か違う」
「優しい目をした人」
「僕達を助けてくれるかも」

立ちはだかる子供達から盛大な腹の虫の大合唱が聞えてきたので、亜空間倉庫に繋がっているバッグから幾つもの果物を取り出して子供達の目の前に置くと、我先にと果物を手にとって齧り始めた。

俺のズボンの裾を引っ張ってきた『ミナ』と呼ばれた少女も顔ほどの大きさもある果物と俺を交互にじっと見た後、一気に齧りついていた。

「このような施しを頂いて感謝しています。残念ながら何も返せるものがありませんが」
「いや、気にしないで。困っている君達を放って置けなかっただけだから」
「ありがとうございます」

その後、少年が落ち着いたところで話を聞くと、戦争の影響で親や兄弟、親戚を亡くした子供達が窓に板張りをしている建物（孤児院らしい）で国からの援助で生活しているらしいのだが、その援助金を管理している大人（聞くところによると、メタボの男らしい）が着服しているとの事らしい。

昼間、大八車に乗せていた袋は何かと聞いてみると、驚愕の事実が判明した。
何でも碌に食べ物も水すらも与えられずにいるので、１日に１人は必ずと言っていいほど餓死や病気などで死んでいっているのだそうだ。

大八車に積まれていたズタ袋には亡くなった子供たちが入れられ、2、3日に一度、何処かに運ばれるそうなのだが、何処に行くのかまでは知らされていないらしい。
俺はこの事実に腸(はらわた)が煮えくり返るほどの怒りを感じ、翌日にリミリアにでも相談しようと考えていた。

リーダーの少年（アルという名らしい）に明日また来ると伝え、宿屋に戻る事にする。

第157話　偽りの孤児院

翌朝、子供達のことを相談するべく宿屋を出ると、大雨が降っていた。

大通りには誰一人として歩いてなく、大きな雨粒が地面に落ちる音以外は聞えはしなかった。

俺はそんな街の様子に多少の違和感を覚えながら、その数分後にはリミリアの住む家へと到着していた。

『コンコンコンッ』

「リミリアさん、居ますか？」

「はぁい、どちら様ですか？　ってミコト様！？」

俺を玄関で出迎えてくれたのはピンク色のエプロンを身に付けたシュミアの姿だった。

「ちょっと緊急の用事でリミリアに取り次いで欲しいんだけど」

「わ、分かりました！　此れでお身体を拭いて、少々お待ち下さい」

シュミアは玄関脇においてあったタオルのような物を俺に手渡すと、一礼したあとで階段をパタパタという足音を立てて登っていく。

途中、『ガタッ』という音が聞えてきた事から急ぎすぎていたのか、蹴躓(けつまず)いたか、もしくは階段を踏み外したと思われる。

俺が手渡されたタオルで濡れた身体を拭いていると、落ち着いた足取りでリミリアが2階から降りてきた。

「ミコトさんから緊急の用事があるとシュミアより聞きましたが、如何なる事でしょう？」
「ああ、そのことなんだけど、街の路地裏に孤児院があるという事は知っていますか？」
「え、ええ、戦争孤児たちを集めて養っている場所ですよね。それが何か？」
「昨日の夜に散歩がてら街中を歩いていると、路地裏で汚れた格好をして誰かの捨てた果肉が殆んど残っていない果物を競い合って食べている子供達の姿を見てしまったんです」
俺が此処までを話すと何時の間に其処に居たのか、何の気配も立てずにシュミアが険しい顔をして、リミリアの背に静かに立っていた。
「子供達のあまりの様子に見かねた俺は、自分の持っていた果物を分け与え、落ち着いたところで話を聞いてみたのですが、衣服はおろか食べ物や飲み水すらも与えられずに、1人、また1人と餓死や病気で亡くなっていったそうなんです」
此処で彼女達の方を見ると、普段の温厚そうな顔とは想像もつかないような形相で眉間に皺を寄せ、拳を握り締めているリミリアとシュミアの姿があった。
さらに亡くなった子供達が入っていると思われるズタ袋が2、3日に一度、何処かに運ばれていくと話し終えたところでリミリアは握り締めた拳を壁に叩きつけていた。
リミリアに殴りつけられた壁は螺旋状に皹が入っている。
「孤児院は・・・・・・」
リミリアは壁に拳を当てたまま俯き、小声で喋り始めた。

「孤児院は宰相様が率先して陛下に申し立てをし、設立されたもので国からの支援金を仲介するのも宰相様の仕事です。ミコトさんの話にあった『衣服や食べ物、飲み水すら与えられていない』という事は孤児院への支援金を着服していると言う事になりますね」

リミリアはシュミアが立っている後方に目で合図すると、シュミアが無言で台所へと歩いていく。
その様子を見ていると不意に台所の戸棚を開き、何かゴソゴソしている。
こんな時に朝食でも食べるのかと思っていると幅広な剣を2本、手に持ったシュミアが戻ってきた。

「リミリアさん？」
「これから、その孤児院へと向かいます。元凶である宰相を問い詰めるには証拠が必要となりますから、孤児院に居ると思われる監視役を捕まえます。ミコトさんは宿にお戻り下さい」
「いや、俺も行きます」
「ですが！」
「あの子供達の様子を見てしまった以上、今更見てみぬ振りは出来ません。ところで護衛騎士隊長であるリミリアさんはまだ良いとしても、シュミアは大丈夫なんですか？」

俺が城に居る間、給仕の格好をしていたシュミアは何時の間にか黒っぽい服に着替えて腰に剣を身に付け、胸の前には2本のナイフを挿していた。

「ええ、シュミアは此れでも諜報を担当する者ですからね」

リミリアは人差し指をそっと立てて、口の前に持っていくと可愛い

仕草で『秘密ですよ？』と口にしていた。

「さて用意も整った事ですし、そろそろ行きましょうか」

普段からは考えられないほどの険しい表情をしたリミリアを先頭に外へ出ると、今の今まで大降りだった雨は小降りになり薄っすらと日が差していた。

そして外へと出たリミリアは、何故か孤児院がある場所とは逆の方角へ足を進めようとしていた。

「ちょ、ちょっと待ってください。何処に行くつもりですか？」

「何処って先程も言いましたように、孤児院へですが？」

「此方にも孤児院があるんですか？」

俺の矛盾に対して口を出したのは、俺の後方に居るシュミアだった。

「『此方にも』ですか？　まるで孤児院が複数あるかのような発言ですね」

リミリアは考え込んでいるような表情でふと、口にした言葉は衝撃的だった。

「一般的に公表されているのは、教会に隣接する形で営なわれている孤児院ですが」

と言う事は誰がみても異常の見られない『張子（はりこ）の虎』の他に、俺が見た本当の姿の孤児院が存在すると言う事か。

嘘の孤児院の方で嘘の子供達が、その日だけ芝居をしていたと考える方が妥当だな。

「俺がその現状を目の当たりにしたのは、広場から1歩路地裏に入った暗い場所でしたよ？」
「・・・・・情報が食い違っていますね。シュミアは公開されている孤児院に向かいなさい！　私はミコトさんと一緒に問題の孤児院へと向かいます」
「分かりました」

シュミアは其れだけを言い残すと、まるで其処には存在していなかったかの様に気配が掻き消えていた。

「向こうはシュミアに任せて、私達も急ぎましょうか」
「シュミア1人で大丈夫でしょうか？」
「あの子なら問題ありません。では行きましょう」
「はい」

こうして俺達は苦しんでいる子供達を助けるべく、路地裏の孤児院へと足を進めるのであった。

一方その頃、逸早く表向きの孤児院に屋根裏から侵入したシュミアはというと。

（これって一体どういうこと？　あの子供達は何処にいるの？）

辿りついた教会には子供達の姿はなく、代わりにゴロツキとも思える冒険者2人が酒を飲みながら屯している。

「こんなボロい仕事はねぇよな。決められた日以外は好きにして良いって言うんだからよ」

「全くだ。宰相様様だぜ！　ガァーハッハッハッハ」
（なんてこと!?　ミコト様の言うとおり、孤児院の実態は宰相の芝居と言う事ね）

私は此処に居る筈の神父様が居ない事に気づき、天井裏から他の部屋へと探しに行くと。
物置の部屋にうつ伏せに横たわる神父様の姿を見つけた。

教会で酒盛りをしているゴロツキに気づかれないように、音を立てずにそっと床に着地して神父様を抱き起こすと、胸の中央付近に剣で付けられたと思われる傷跡と既に乾ききっている夥しい血痕、更に死体が殆んど骨と皮に化している事から大分前に殺されていた事が考えられた。

「これは許せないわね。彼等を証人として捕まえないと」

私は来た道を天井裏から戻り、酔っ払っている男達の後方に気配を殺して降り立った。

男達は真後ろに姿を現した私の姿にも気づかずに、上機嫌で酒盛りを続けている。
私は諜報部隊が普段から使用する強力な睡眠薬をそっと酒瓶に忍ばせ、教会のシンボルともいえる女神像の影へと身を潜めた。

それから数分後、空になったコップに酒を注いで其れを飲み干した男達は大きな鼾（いびき）をかいて眠りこけてしまっていた。

私はその隙に物置で発見したロープで2人を縛ると家へと連れ帰った。

（神父様、もう少しお待ち下さい。必ずや無念を晴らしてみせますので）

誰にも気づかれずに男2人を家に連れ帰った私は、教会の霊安室にある棺の中にそっと神父様の亡骸を横たえ、手を合わした。

第１５８話　孤児解放

シュミアが一般的に公表されている、偽の孤児院へと忍びこんだ頃、俺とリミリアは問題の孤児院の約１００ｍ手前にある建物の影へと身を潜めていた。

本当ならば到着した早々に、酷い扱いを受けている孤児達を解放したかったのだが、見張りなのか数人の男達が武器を携え、待ち構えていた。

窓に板を打ち付けている建物の前に２人、奥の街の図書館側に抜ける道に１人、俺とリミリアが隠れている、直ぐ傍に１人と目に見えるだけで少なくとも４人の武装した男達が居る。
４人のうちの誰かを討つ間に残った者が逃げ、報告を受けた黒幕に逃げられでもしたら、もとの木阿弥だし、かといってこのまま此処に居ても時間が経過していくだけで何にもならなかった。

「見張りが４人いるようですが、如何いたしますか？　騎士隊の応援を呼びましょうか？」
「考えたくはありませんが、もしもこの件の黒幕が騎士隊の中にいるとしたら、此方の考えている事が筒抜けになってしまいますから、俺とリミリアさんだけで解決しましょう」
「しかし、幾ら雨の影響で視界が悪いとは言っても此方は２人、相手は最低でも４人ですよ？」

そうなんだよなぁ・・・・・リミリアの言うとおり、人数的には此方は不利でしかない。

魔法で攻撃する事も出来るけど、殺さないように加減するのは難し

いし、避けられた時に周りの建物に被害が及ぶのも避けたい。
建物の影で目を瞑り、顎に手を当てて何か手はないかと考えていると、先程まで小雨だった雨は大降りに変化し、視界が更に悪くなっていた。

そんな時、不意に『バシャ』という水をはねたような音が聞えたので、音の出所である孤児院に目を遣ると、孤児院の前だけ他の道と比べて窪地になっているのか見張りの男達の踝(くるぶし)付近まで水が満たされていた。

「此れは好機だ。リミリアさん、悪いけど図書館側の道に移動してくれるかな？　俺はこっちから奴等に攻撃するから、そうすれば黒幕に連絡しようとして1人は逆方向から逃げようとするから捕まえて欲しいんだ」

俺が作戦指示をリミリアに話すと、困惑したような表情で問いかけてきた。

「それは構いませんが、そうすると残りの3人が一斉に、ミコトさんの居る方に襲い掛かってきますが大丈夫なんですか？」
「俺はリミリアさんの準備が整い次第、手前の男を打ち倒してから魔法を使って男達を身動き出来なくします」
「魔法ですか・・・・・分かりました。ですが、私の準備が整った事をミコトさんに伝えるには如何したら良いのですか？　大きな音を立てれば彼等に気づかれてしまいますし」
「それも大丈夫です。俺は見知った人間の気配なら、眼で見なくても感じられますし」

と言っても本当は精霊に付いて行ってもらうんだけどね。

「分かりました、それでは移動します。御武運を・・・・・・」

リミリアは俺に軽く頭を下げると音もなく走り去って行った。

（アクア、悪いけど彼女に付いて行ってくれるか？　リミリアが此処と反対方向の道に到着次第、俺に念話で教えて欲しいんだ）

（分かりました）

もともと気配のない精霊が移動したとは感じられないが、アクアを信じて5分ほど待っていると。

（主様、たった今、リミリアさんが所定の場にお付きになられました）

（分かった。じゃ、アクアは戻ってきてくれ）

（はい）

（さて、俺も行くとするか。魔力解放っと）

アクアからの念話を受け取った俺は剣の柄の部分に手を置くと、瞬時に手前の男の前に移動し、腹を柄で強めに打ち付けた。

「き、きさま、何も・・・・・・ゴフッ!?」

男は俺の攻撃で身体を前のめりに『く』の字に倒れ、口から泡を吐き出していた。

「少し強めにし過ぎたか？　まぁ死んでないようだし、別にいいか」

孤児院の前で見張りをしていた2人の男は一瞬躊躇したが、直ぐに剣を抜いて襲い掛かってきた。

俺はその様子にも慌てず、目の前の水溜りに手を差込み、氷の魔法を使用した。

この事で一気に足元に溜まっていた水は氷と化し、男二人は剣を持ったまま前のめりに倒れる。

「き、貴様魔術師か！？」

「あ、足が抜けん！」

通りの向こう側にいた男は仲間の現状を見るなり、逃げようと通りの向こうへと走り出すが、待ち構えていたリミリアによって為すすべもなく、取り押さえられた。

俺は足元を凍らされて未だ身動きが取れなくなってもがいている２人の男達と、未だ『く』の字に身体を折って呻いている男とリミリアが捕縛した男、合わせて４人に低威力の雷撃魔法をぶつけて気絶させると、外の見張りをリミリアに頼んで孤児院の中へと足を踏み入れた。

すると其処には１人の目つきの悪い男が天井に付くか付かないか程の長い槍を手に持って座っていた。

「てめぇ、何者だ？　見張りが居た筈だが殺したのか？」

「彼等には少し眠ってもらっているだけだ。お前も同じ様にさせてもらう」

「はんっ！　俺を誰だと思っていやがる。テメエみたいな奴に倒されるほど弱くねえぜ」

「そういうことを口にする奴に限って大したことないんだよな」

「ほざけっ！　全身穴だらけになって後悔しやがれ」

男は縦に持っていた槍を俺のほうに向けると、恐ろしいほどのスピ

ードで突いてくる。

「どうしたぁ～～～手も足も出ねえじゃねえか？　今なら地面に頭を擦りつけて謝るなら許してやるぜぇ」

「許す気なんて無いくせに、よく言う・・・・・・」

「ばれたか。ハッハッハッ、では死ね！」

男は喋りながらも高速で打ち出していた槍を戻し、力を込めて槍を振るってくる。

「攻撃は良いが、此処が室内だと言う事を忘れているんじゃないのか？」

「しまっ・・・・・・！」

男が繰り出した攻撃は、ものの見事に壁へとめり込み、その衝撃で男は槍から手を離した。

俺はその隙を見逃さずに腹を殴ったところ、男は『く』というより『つ』のような体勢で奥の壁へと飛んでいき、壁にめり込んだ。

「此れでも手加減したつもりなんだけどな。思ったよりも強くなかったと言う事か」

俺は壁にめり込んで気絶した男を再度（とどめ？）、雷撃魔法で気絶させると中から窓に打ち付けてある板を外し内部に光を齎した。

「中から凄い音が聞えてきましたが、大丈夫でしたか？」

外から声を掛けてきたリミリアに事情を説明していると其処へシュミアが現れた。

「ミコト様、教会を占拠していた2人を捕らえました。　身柄は騎士舎へと運び入れ、カルーシャ達に見張らせております」
「騎士舎？　カルーシャ？」
「カルーシャは私の直属の部下で信用に足る人物です。騎士舎とは、街の中にある騎士専用の宿舎だと思ってくだされば結構です」
「ん、分かった。此方も後は孤児達を助けるだけだ」
「じゃあ、この人たちも騎士舎に運びましょうか。シュミア、手を貸してくれる？」
「分かりました。荷物運搬用の幌付き台車を舎から借りてきているので、乗せて運びましょう」

俺は男達の処理をリミリアたちに任せ、此処にいるであろう子供達を捜していると、室内の隅で震えている孤児達を見つけることが出来た。

「悪い奴等は懲らしめたから、もう出てきて良いよ」

俺が優しく声を掛けると、昨日少女を庇っていたアルという少年が恐る恐る此方に近づいてきた。

「あなたは・・・・・先日果物を下さった方ですね。僕達が自由になったと言うのは本当ですか！？」
「ああ、皆捕まえたからね。あとは黒幕を暴くだけだね」
「あの～～～僕達はこれから如何すれば良いのですか？」
「此処に置いておくわけには行かないから一旦、騎士舎に連れて行くよ。心配しなくても悪いようにはしないから安心してほしい」
「・・・・・分かりました」

そうして俺と孤児達は男達を運び終えて、空になった台車に乗り込むと騎士舎に向けて出発した。

リミリアとシュミアは子供達の痩せ細った手足と身体に残る生傷に悲痛感を感じていた。

第１５９話　孤児達の治療と（前書き）

おかげさまで総合評価が１８０００ポイントに達しました！

評価を入れてくださった方々、お気に入り登録をしてくださった方々に深く感謝いたします。

此れからも『異世界を渡りし者』を宜しくお願い致します。

第１５９話　孤児達の治療と

孤児院で助けた、戦争孤児である少年少女たちを乗せた荷物運搬用の台車は、街の一角にある騎士舎へと到着した。

最初にリミリアが姿を見せ、次にシュミアが姿を現すと1人の女性が敬礼をしながら走り寄ってくる。

「カルーシャ、この子達がさっき言っていた孤児たちよ。水浴び場に連れて行って、綺麗に洗ってあげて」

「分かりました。さぁ君達、私の後に付いてきてくれるかな？　大丈夫、何も痛いことはしないから」

カルーシャと呼ばれた女性は薄汚れた格好の孤児達を連れて建物の奥へと移動していった。

「あと、メルディは居る？」

シュミアが誰かの名前を呼ぶと、先程まで仲間の騎士と喋っていた女性が此方に歩いてくる。

「お呼びですか？」

「ええ、確か貴女の御実家は洋服店を営んでいたわね。適当に人数分の子供服と下着類を揃えてくれるかしら。代金は後で纏めて請求してくれる？」

「分かりました。直ぐに行ってまいります」

メルディと呼ばれた女性も軽く頭を下げた後、身につけていた軽鎧をはずして、外へと歩いていった。

「捕まえた男達の尋問を奥の部屋で執り行っているのですが、御覧になられますか？」
「尋問って・・・・・もしかして拷問とか？」
「昔はそうでしたが、今は流石にそのような事はしません。精神的な苦痛になるだけで肉体に損傷を与える物ではありませんから」
肉体的苦痛じゃなく精神的苦痛って、どっちもそれほど変わらないんじゃ？
「如何しますか？」
「いや遠慮しておくよ。其れより、子供達を見てこようかな」
「分かりました。向こうにはカルーシャが居りますので、何かあった際には彼女にお申し付け下さい」
俺は近くを歩いている騎士に場所を教えてもらいながら水浴び場に辿りつくと、其処には大量の泡で洗われている孤児達の姿があった。
リミリアが言っていたカルーシャという女性も子供達の元気のよさに疲れ果てているようだった。
「こら～～待ちなさい！　まだ頭を洗ってる途中でしょ。戻ってきなさ～い」
「やだ～～～目に沁みるもん」
身体中を泡まみれにして元気にはしゃいでいる孤児達を、他の騎士達と四苦八苦して捕まえている彼女達を見て不謹慎ながらも笑みが零れてしまう。
「まったくもぅ・・・・・ってあら？　確かミコト殿でしたね。

何か御用でしょうか？」
「子供達を助け出した時、身体中に生傷が目立っていましたからね。治療できればと思いまして」
「治療ですか？　患部を綺麗に洗ってから、薬を塗って行こうと思っているのですが」
「薬よりも魔法で治す方が確実だと思いましてね」
「ミコト殿は魔術師の方なんですか！？　これは大変失礼を」
「いや、止めて下さい。　世間では『魔術師は偉い』と言われていますが、俺から言わせて貰えば別に大したことはないのですから」
「大した事ないって、ミコト殿は変わっておられますね。そこらで威張り腐っている魔術師とは大違いだ」
「ところで治療に当たって、其処の個室を使わせていただいても宜しいでしょうか？」

俺は直ぐ後ろにある2畳ほどのスペースが2つ隣り合わせになっている個室を指差し使っても良いか聞いてみることにした。

「えっと、はい。問題ありません」
「では身体を綺麗に洗った子供達から順に個室へと通してください。其処で治療しますので」

っとカルーシャと会話していると、其処に大量の服を持ったリミリアとメルディが現れた。

「もうそろそろ身体も洗い終えたかと思って来てみたんですが、大変なことになっているようですね」
「リミリア様、申し訳ありません」
「リミリアさん、丁度良かった。これから身体を洗い終えた子供達を個室内で治療するから、治療を終えた子供達から順に服を着せていって欲しいんだけど頼めるかな？」

「治療ですか？　分かりました。メルディ、服を持って付いてきて」
「了解しました」

その数分後、俺が個室の中で用意をして待っていると一人目の少年が頭からすっぽり、ローブのような物を着込んで、リミリアに連れてこられた。

「ミコトさん、お願いします。傷は右太腿と左足首、それに背中に鞭で打たれたような蚯蚓腫れがあります」

連れてこられた少年は、身体をビクッと震わせながら俯いて俺と目をあわそうとしなかった。

「じゃあ、これから治療するから。大丈夫だよ、目を瞑って１０数える間に終ってるから」

俺は少年に優しく問いかけて目を瞑らすと、リミリアから説明された場所に手を置いて治療を始める。
その間、少年はと言うと律儀にも指を折って数を数えている。

「い～ち、に～い、さ～ん・・・・・・・・・・・・・・は～ち、きゅ～う、じゅう！」

で『１０』を数えた瞬間に目を開けた頃には俺の治療は終えていた。

「治療終ったよ。何処も痛くないかな？」
「ほんとだ！　ほんとに治っちゃった。ありがと、お兄ちゃん」

少年の身柄はリミリアからメルディに移され、隣の部屋で用意した服を着せていく。

「では、次は・・・・・・」

その後、『魔法』と聞くだけで逃げたり、泣き喚いたりと騒がしい治療風景が展開され、2時間程が経過した頃には全ての孤児達の治療は完了していた。
そして孤児達は全員、騎士舎の食堂の方で暖かい食事を終えて仮眠室で眠っている。

「ふぅ～此れで全員の治療が終えたな。リミリアさんとメルディ、それにカルーシャもお疲れ様」

今はカルーシャの淹れてくれたお茶を飲んで世間話をしていると、不意にメルディが惚気話を語り始める。

「やっぱり子供の笑顔は良いですねぇ。私も子供が欲しくなっちゃいました」
「おっ？　メルディ問題発言だね。相手は居るの？　お姉さんに教えなさい」
「えっ！？　居ないわよ。そういうカルーシャこそ、彼と何処まで行ったのかしら？」

と会話が弾んでいると其処へシュミアが飛び込んできた。

「リミリア姉さん、男達の口を割らせた結果。黒幕が判明いたしました」
「誰だったの！？」
「予想していた通り、宰相のライブリットです。情報によれば、今現在は城で会議をしているはずなので、捕まえるならば好機です」

リミリアは先程までカルーシャとメルディの会話に和んだ表情を醸し出していたが、黒幕の宰相の名前をシュミアから聞かされた直後、表情を一転して険しい表情になった。

「では、証人を連れて城に行きますよ。ミコトさんは如何なさいますか？」

「如何するって俺も城に行くよ。此処まで来たら最後までやらないと気がすまないしね」

「分かりました。それでは私とシュミア、ミコトさんと証人乗せれるだけの馬車を今すぐに用意しなさい」

「「了解いたしました！」」

リミリアが号令を出すと、カルーシャとメルディはサッと立ち上がり、敬礼したあと走っていった。

「申し訳ありませんが、私達は用意がありますので、先に建物の入口で待っていて貰えませんか？」

「分かりました。入口で待っていれば良いのですね？」

「はい、お願いします。それほど長くは掛からないかと思いますので」

それから十数分後、言われたとおりに建物の入口で待っていると、全身に護衛騎士の青い鎧を身につけたリミリアが馬車を引っ張って姿を現した。

シュミアも俺が城で世話になっていたときのメイド服のような格好ではなく、忍び装束のような服装をして御者席で馬の手綱を引いている。

「お待たせいたしました。城の中には宰相の息が掛かった者達が大

勢いるので、最悪の展開を予想して騎士鎧を装着しました」

普段の温和な表情の彼女からは予想できないが、青い鎧で全身を覆うリミリアを見ると、『本当に護衛騎士だったんだ』と思ってしまう。

「早く行かないと宰相に感付かれてしまうかもしれません。急ぎましょう」

こうして俺とリミリア、シュミアと証人となる目隠しをした男1人を乗せた馬車は、事の黒幕とも言える宰相を裁くため、城への道を馬車でひた走るのだった。

第１６０話　宰相、最後の悪あがき（前書き）

いつもより少し長くなってしまいました。

第１６０話　宰相、最後の悪あがき

小型の馬車に乗り込んだ、俺とシュミア、リミリアと気絶させて簀巻き状に縛り付けてある男を乗せた馬車は何の妨害もなく、街と城の境目にある跳ね橋付近へと到着していた。

俺達のことが既に宰相にバレ、何らかの妨害があると懸念していたのだが、その心配は良い意味で裏切られ、スムーズに事は進んだ。

「其処の馬車とまれ！」

突然、外から掛けられた声に条件反射で剣の柄に手を伸ばした俺を、隣に座るリミリアが制した。

「ミコトさん、落ち着いてください。　城に危険物が持ち込まれないようにするための検分ですから」

リミリアがそう言うと色は違うものの、リミリアが着ている物と寸分違わぬ鎧を身につけた男２人が馬車の中へと入ってきた。

「護衛騎士隊長のリミリア殿でしたか。お怪我はもう大丈夫なんですか？」

「ええ、長い間皆さんに御心配をお掛けしていましたが、近々本来の職務に復帰できそうです」

「それとシュミア殿に、姫様の危機を救っていただいたミコト殿ですね。此方の者は？」

検分の騎士は未だに蓑虫状態で馬車の床に転がされている男を見て妙な表情を浮かべている。

俺とリミリアは如何説明すれば良いのか迷っていると、御者席のシュミアが声を発した。

「この者は私が此度の任務で捕らえた重要参考人です。任務の内容は王妃様直々に言い渡されたものですので、此処で説明することは出来ませんが」

「いえ、失礼いたしました」

検分の騎士は最後に馬車の下を確認すると城の方に合図をし、跳ね橋を下ろしてくれた。

馬車は何事もなかったかのように下ろされた跳ね橋を渡ると、そのまま城内へと入ってゆく。

何時か見たような長い階段の下に馬車は停止し俺達は馬車を降りた。

「さて此処からが正念場ですね。まだ宰相殿に情報が伝わってなければ宜しいのですが」

リミリアは近くに事情を知らない別の騎士が立っている事から、態々『宰相殿』と発言し、不快感を顔に出さずに淡々と話していた。

「それでは行きましょうか」

そう言ってシュミアは証人となる男を軽々と肩に背負い、長い階段を上がろうとするが此処で俺は『何故昇降機を使わないのか？』と聞いてみた。

「昇降機は王族の方々専用の物です。私達護衛騎士といえど、一般の騎士が使用することは禁じられています」

「それに昇降機が一度に運べる人数は3人だけなので、どちらにし

ろ無理なんですけどね」

その後も階段を一段一段、肩に男を背負って昇っているシュミアに代わり、俺が男を背負うと言ったのだが頑なに拒否された。

そしてそれから数分後、自分よりも重い男を肩に背負っていたシュミアは何の息切れもせずに謁見室のある最上階へと上り詰め、会議をしている場所へ向かっていた。

（彼女も見かけとは思えない、並大抵の体力ではないな）
（マスターの体力は反則とも言えるような物ですけどね）
（本来、魔術師が無茶苦茶な体力を持つのは可笑しい事なんだろうな）
（どうやら目的の場所に到着したようですね。中から孤児院の前で出会った者と同じ気配がします）

会議室となっている場所へと到着すると丁度会議が終了したのか、続々と大臣や騎士が部屋から退出していく。

「此処は会議室です。何用でしょうか？」
「『重要な会議をしているので誰も通すな』との命を受けております。お引取りください」

俺達が会議室の入口に近づくと扉の前で槍を持って警護している2人の騎士が話しかけて来た。

「ヴィナリス姫の護衛騎士隊長リミリアです。此度は陛下に緊急の御報告がありますので、入室を許可願います」
「同じく諜報部隊所属のシュミアです」
「了解いたしました。陛下に聞いてまいりますので、暫くお待ち下

さい」
「分かりました」

扉を護っていた騎士はもう1人の騎士に槍を預けると重い扉を開けて会議室へと入って行った。
それから数秒後、騎士は俺達の前へと戻ってきて、こう告げた。

「陛下がお会いになられるそうです。此方にどうぞ」

騎士はリミリアに話しかけると同時に踵(きびす)を返し、先導する形で円卓に座る陛下の元へと誘った。

可也の人数が座る事が出来る円卓に着いていたのは、陛下と王妃様、それに問題となる宰相と見たことのない全身を緩めに覆う、真っ白な衣を身につけた長い髪の女性の姿だった。

円卓から立ち上がって此方に一瞬、目を向けた宰相はリミリアとシュミアに担がれた男を見て驚愕の表情を醸し出している。

「護衛騎士隊長リミリア、何か緊急の用があると騎士から聞いたのじゃが？　みれば我が娘の危機を救ってくれたミコト殿も一緒ではないか」

リミリアは陛下に問われ、一瞬宰相の方を睨みつけると肩に担いでいた男達を下ろし、床に片膝をついて臣下の礼を取ると話し始めた。

「此度はお忙しいところを申し訳ありません。至急、陛下のお耳に入れたいことがあり参上いたしました」

すぐ傍に立っているメタボな体格をしている宰相は暑いのか、それ

とも冷や汗なのか大量の汗を必死にハンカチのような物で拭き取っていた。

「で、では陛下、私はこれで失礼いたします」

「ふむ」

宰相はそっと陛下に頭を下げると、其の場から逃げるように退出しようとするが。

「お待ち下さい宰相殿。此度の緊急の報告は宰相殿にも御関係があることなので、この場に残って頂きます様、お願い致します」

「しかし、私めには陛下から申し付けられた大事な仕事がありますゆえ・・・・・・」

「宜しいではありませんか、ゆっくりなさっていってくださいね」

王妃の全てを見透かす目が宰相に向けられると、まさに『蛇に睨まれた蛙（体格的にも）』というべきか、宰相は足が竦んで動けなくなっていた。

「では、そなたの言う緊急の報告とやらを聞きましょうか」

「はい。宰相殿が御力を注いでおられる、孤児院のことで御報告にあがりました」

「孤児院か・・・・・・今まさに会議で今期の支援金を採算していたところじゃ」

「まずは、この者の証言をお聞き下さい」

リミリアは目で合図すると、傍で同じ様に臣下の礼を取っているシュミアが目隠しをして簀巻き状に縛られている男に当身を食らわし、目を醒まさせていた。

「さぁ、先程口にしたことを再度此処で喋りなさい」
「あ、ああ分かったから、拷問はやめてくれ」

拷問って、俺が知らない間に何をしたんだシュミア・・・・・・。

「お、俺は命令されて教会の神父を殺した。それから昔の伝(つて)を頼り、奴隷商から比較的顔の整った餓鬼どもを借り、命令にあったとおりに臨時の孤児院を作り上げた」

最初の『教会の神父を殺した』と発言してところで王妃の表情が変化し、『臨時の孤児院』のところで国王と白い衣を身につけた女性の表情が厳しいものとなった。

王妃は俺にやったように嘘を見破るような目線で男を睨みつけている。

「続けて！」
「俺はその後も命令されたとおりに、本来の孤児院で餓鬼どもを監視し続けた」
「子供達は碌な食べ物を口にしていなかった様だが？」
「命令では、子供達の生死は問わないものだった。仮に病死や餓死などで死んだ場合でも街の住民に見つからないように運び、街の外で魔物の餌にするように言いつけられたんだ」
「それで？　その命令を下した者は此処にいるか？」

リミリアはそう言うと、男の目に巻きつけてあった布を剥ぎ取った。

「ああ、其処に居る太っている男だ。俺達はそいつに金で雇われていたんだ！」

シュミアは暴れだしそうな男に再度目隠しをすると、首に当身を食らわし気絶させた。

「これが緊急の報告です。街の路地裏で汚れた衣服を身に纏った孤児達をミコト殿が見つけ、調べていくうちに現状が判明したため、私とシュミア、ミコト殿の3人で孤児達を救出いたしました」

「で、出鱈目だ！　何者かが、わしに罪を着せようとしているに違いない！」

「どうじゃヴィア、あの者の話は信用出来るものか？」

陛下は終始無言で、縛られた男を睨んでいた王妃に声を掛ける。

「ええ、あなた。私(わたくし)の魔術であの者の発言を一言一言逃さずに聞いていたところ、口の動きや目の動き、顔の表情から見るに本当のことを言っているようですわ」

「そうか・・・・・では決まりじゃな。衛兵、宰相ライブリットの身柄を拘束せよ！」

国王が会議室内に立っている衛兵に命令するも、何故か一向に動こうとはしなかった。

「何をしている！　ライブリットを拘束せぬか！」

「無駄ですよ。こやつ等はわしの私兵、貴方の命令には従いませんよ」

「なんじゃと！？」

「少し計画が早まりましたが、問題ないでしょう」

宰相は口元を緩ませながら立ち上がると、先程まで冷や汗を流していた人物とは思えないほど堂々と驚くべき事を口にしていた。

「此処で王と王妃を殺害し、その罪をこの者どもに着せてワシがこの国の王となるのだ」
「貴様！」
「おおっと、今なら泣いて謝れば許してやらんこともないぞ？　わし専用の慰み者となって貰うがな」
「この恥さらしが。誰が貴様の思うようになるか！」
「ふん、ならば仕方がない。多少勿体無い気もするが、この場にいる者を殺せ！　１人も生きて逃がすな。早い者勝ちだ、より多く殺した者には報奨金をだしてやろう」

その後、壁際に立っている衛兵と扉の前で槍を持って警備していた騎士も宰相の私兵だったようで、次々に武器を持って襲い掛かってくるのだが、流石は騎士隊長。
まるで蜘蛛の子を散らすように次々と切っていく。

そんな折、存在を忘れていた縛られていた男の胸に槍が深深と突き刺さり、証人の男は息絶えた。

「まず１人！　続けていくぜぇ、次はテメエだ」

証人の男を殺した衛兵はまるで殺しを楽しんでいるかのように下卑た笑みを浮かべると、俺に切りかかってきた。
俺は咄嗟にかわし、すれ違い様に愚かな衛兵の右腕と左足を付け根から切り落とした。

「な、なんだと！？」

衛兵の男はバランスを崩して床に倒れたところで、別の衛兵に首を踏まれて息絶えた。
諍いが始まって数分後、此方は唯の１人も死傷者は出さずに全ての

衛兵を始末し、残るところ宰相の存在だけとなっていた。

「ば、ばかな！　あれだけの兵をもってしても敵わないというのか・・・・・・」

すっかり意気消沈とした宰相は異変に気づいて飛び込んできた騎士の手によって拘束され、牢に入れられた。

その後、宰相の屋敷を捜索した結果、金庫の中に孤児院の運営費用として着服してきた金貨数百枚と敵国ゴルダリアンの王に宛てた書が発見され、宰相は売国奴として街の広場で公開処刑となった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5458l/

異世界を渡りし者

2011年12月13日06時15分発行